

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集

田村遺跡群Ⅱ

高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第6分冊

K・L区の調査

2004.3

高知県教育委員会

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

田村遺跡群Ⅱ

第六分冊

第85集

二〇〇四・三

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県教育委員会

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集

田村遺跡群Ⅱ

高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第6分冊

K・L区の調査

2004.3

高知県教育委員会

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は高知空港再拡張整備事業に伴う高知県南国市田村に所在する田村遺跡群の発掘調査報告書である。本報告書は「田村遺跡群II」の第6分冊である。調査区A区からQ区の中のK・L区の調査成果報告である。
2. 発掘調査及び整理作業は高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局と委託契約を結び、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査・整理作業を実施したものである。発掘調査は平成8年7月から平成13年12月迄行ない、引き続き平成16年3月迄整理作業を行なった。
3. 本書の編集は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが行ない、執筆は前田光雄、小島恵子、坂本憲昭、小野由香、筒井三菜、久家隆芳、松本安紀彦が行ない、本文中に執筆者名を記してある。編集実務は各執筆担当者が行った。
4. 調査体制等については第1分冊に記した。また多くの方々、諸機関からご協力、ご教授を賜った。ここでは逐一、芳名をあげないが感謝したい。
5. 出土遺物等の資料は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが保管している。また遺物の注記名は西暦の下二桁を頭に冠し、遺跡名略記号NTをつけている。調査は1996年から2001年迄実施しているところから、注記名は「96-9NT」、及び「97-1NT」から「01-1NT」となっている。
6. 遺物観察表は膨大な量のため、デジタルデータとして本書に添付したCDに収録した。
7. 本書に添付したCDには、本書のPDF及び遺物観察表を収録している。

本文目次

K区の調査

K1 区の調査

1. K1 区の概要	9
2. K1 区弥生時代の遺構と遺物	10
(1) 竪穴住居跡	10
(2) 掘立柱建物跡	66
(3) 土坑	69
(4) 溝跡	96
(5) ピット	120
3. K1 区中世の遺構と遺物	122
(1) 土坑	122
(2) 溝跡	122
(3) ピット	123
4. K1 区包含層出土遺物	127

K2 区の調査

1. K2 区の概要	133
2. K2 区弥生時代の遺構と遺物	134
(1) 竪穴住居跡	134
(2) 掘立柱建物跡	175
(3) 土坑	181
3. K2 区中世の遺構と遺物	218
4. K4 区の概要	223

K3 区の調査

1. K3 区の概要	229
2. K3 区弥生時代の遺構と遺物	230
(1) 竪穴住居跡	230
(2) 掘立柱建物跡	248
(3) 土坑	262
(4) 溝跡	266
(5) ピット	269

3. K3区古代・中世の遺構と遺物	270
(1)溝跡	270
(2)ピット	270

L区の調査

L1区の調査

1. L1区の概要	283
2. L1区弥生時代の遺構と遺物	285
(1)竪穴住居跡	285
(2)掘立柱建物跡	291
(3)土坑・性格不明遺構	297
(4)溝跡	309
3. L1区中世の遺構と遺物	314
(1)掘立柱建物跡	314

L2区の調査

1. L2区の概要	321
2. L2区弥生時代の遺構と遺物	322
(1)竪穴住居跡	322
(2)掘立柱建物跡	367
(3)土坑	380
(4)溝跡	405
(5)ピット	408
3. L2区中世の遺構と遺物	409
(1)掘立柱建物跡	409

L3区の調査

1. L3区の概要	417
2. L3区弥生時代の遺構と遺物	418
(1)竪穴住居跡	418
(2)掘立柱建物跡	444
(3)土坑	471
(4)溝跡	482

挿図目次

K区

K-1図 K区全体図

K1区

K1-1図 K1区遺構全体配置図

K1-2図 K1ST101(1)

K1-3図 K1ST101(2)

K1-4図 K1ST101(3)

K1-5図 K1ST102(1)

K1-6図 K1ST102(2)

K1-7図 K1ST103

K1-8図 K1ST104

K1-9図 K1ST105 ~ 107(1)

K1-10図 K1ST105 ~ 107(2)

K1-11図 K1ST105(1)

K1-12図 K1ST105(2)

K1-13図 K1ST106

K1-14図 K1ST107

K1-15図 K1ST108(1)

K1-16図 K1ST108(2)

K1-17図 K1ST108(3)

K1-18図 K1ST109・110

K1-19図 K1ST109

K1-20図 K1ST110

K1-21図 K1ST111

K1-22図 K1ST112

K1-23図 K1ST113

K1-24図 K1ST114・115(1)

K1-25図 K1ST114・115(2)

K1-26図 K1ST114・115(3)

K1-27図 K1ST116(1)

K1-28図 K1ST116(2)

K1-29図 K1ST117

K1-30図 K1ST118 ~ 121(1)

K1-31図 K1ST118 ~ 121(2)

K1-32図 K1ST118

K1-33図 K1ST119(1)

K1-34図 K1ST119(2)

K1-35図 K1ST119(3)

K1-36図 K1ST119(4)

K1-37図 K1ST120(1)

K1-38図 K1ST120(2)

K1-39図 K1ST121

K1-40図 K1ST122(1)

K1-41図 K1ST122(2)

K1-42図 K1ST122(3)

K1-43図 K1ST123 ~ 125(1)

K1-44図 K1ST123 ~ 125(2)

K1-45図 K1ST123(1)

K1-46図 K1ST123(2)

K1-47図 K1ST124

K1-48図 K1ST125

K1-49図 K1ST126(1)

K1-50図 K1ST126(2)

K1-51図 K1ST127

K1-52図 K1ST128

K1-53図 K1SB101 ~ 107

K1-54図 K1SK101

K1-55図 K1SK102

K1-56図 K1SK104

K1-57図 K1SK107

K1-58図 K1SK109

K1-59図 K1SK111

K1-60図 K1SK112

K1-61図 K1SK114

K1-62図 K1SK115

K1-63図 K1SK117

K1-64図 K1SK119

K1-65図 K1SK122(1)

K1-66図 K1SK122(2)

K1-67図 K1SK123

K1-68図 K1SK124

K1-69図 K1SK125

K1-70図 K1SK126

K1-71図 K1SK127

K1-72図 K1SK129

K1-73図 K1SK133

K1-74図 K1SK134

K1-75図 K1SK136

K1-76図 K1SK137(1)

K1-77図 K1SK137(2)

K1-78図 K1SK139

K1-79図 K1SK143

K1-80図 K1SK144

K1-81図 K1SK145

K1-82図 K1SK148

K1-83図 K1SK149

K1-84図 K1SK150

K1-85図 K1SK151(1)

K1-86図 K1SK151(2)

K2-55図 K2SD204・206
 K2-56図 K2SD205(1)
 K2-57図 K2SD205(2)
 K2-58図 K2SD205(3)
 K2-59図 K2SD208A
 K2-60図 K2SD208B
 K2-61図 K2区中世遺構配置図
 K2-62図 K2SK222・226・230・246・SE201
 K2-63図 K4区遺構全体配置図

K3区

K3-1図 K3区遺構全体配置図
 K3-2図 K3ST302・303
 K3-3図 K3ST302
 K3-4図 K3ST303
 K3-5図 K3ST304
 K3-6図 K3ST305・306
 K3-7図 K3ST305
 K3-8図 K3ST306
 K3-9図 K3ST307
 K3-10図 K3ST308(1)
 K3-11図 K3ST308(2)
 K3-12図 K3ST309
 K3-13図 K3ST310(1)
 K3-14図 K3ST310(2)
 K3-15図 K3ST311(1)
 K3-16図 K3ST311(2)
 K3-17図 K3ST312
 K3-18図 K3ST313
 K3-19図 K3SB301～306
 K3-20図 K3SB307～312
 K3-21図 K3SB313～318
 K3-22図 K3SB319～324
 K3-23図 K3SB325～327・329～331
 K3-24図 K3SK301(1)
 K3-25図 K3SK301(2)
 K3-26図 K3SK305
 K3-27図 K3SK306
 K3-28図 K3SX301
 K3-29図 K3SD304
 K3-30図 K3SD305
 K3-31図 K3SD306
 K3-32図 K3SD130
 K3-33図 K3P3030
 K3-34図 K3P3060
 K3-35図 K3SD302・303(1)

K3-36図 K3SD302・303(2)
 K3-37図 K3SD302
 K3-38図 K3SD303
 K3-39図 K3P3002
 K3-40図 K3P3007
 K3-41図 K3P3015

L区

L-1図 L区全体図

L1区

L1-1図 L1区遺構全体配置図
 L1-2図 調査区西壁柱状図
 L1-3図 L1ST101・102(1)
 L1-4図 L1ST101・102(2)
 L1-5図 L1ST104・106
 L1-6図 L1ST107
 L1-7図 L1SB101・102
 L1-8図 L1SB103～107
 L1-9図 L1SB108・109
 L1-10図 L1SK101・104・115～117
 L1-11図 L1SK101・104・117
 L1-12図 L1SK109・110・114
 L1-13図 L1SK121・123・127
 L1-14図 L1SK128・133
 L1-15図 L1SK133・SX101
 L1-16図 L1SD105(1)
 L1-17図 L1SD105(2)
 L1-18図 L1SD105(3)
 L1-19図 L1SD105(4)
 L1-20図 L1SB110

L2区

L2-1図 L2区遺構全体配置図
 L2-2図 L2ST201(1)
 L2-3図 L2ST201(2)
 L2-4図 L2ST201(3)
 L2-5図 L2ST202
 L2-6図 L2ST203
 L2-7図 L2ST204
 L2-8図 L2ST205
 L2-9図 L2ST206
 L2-10図 L2ST207
 L2-11図 L2ST208・209(1)
 L2-12図 L2ST208・209(2)
 L2-13図 L2ST210

表目次

K1区

K1-1表	K1区竪穴住居跡一覽
K1-2表	K1区弥生掘立柱建物跡一覽
K1-3表	K1区弥生土坑一覽
K1-4表	K1区弥生溝跡一覽
K1-5表	K1区中世土坑一覽
K1-6表	K1区中世溝跡一覽
K1-7表	K1区弥生土器觀察表(CD)
K1-8表	K1区石器觀察表(CD)
K1-9表	K1区金属器觀察表(CD)
K1-10表	K1区古代・中近世土器觀察表(CD)

K2区

K2-1表	K2区竪穴住居跡一覽
K2-2表	K2区弥生掘立柱建物跡一覽
K2-3表	K2区弥生土坑一覽
K2-4表	K2区中世土坑一覽
K2-5表	K2区中世溝跡一覽
K2-6表	K2区弥生土器觀察表(CD)
K2-7表	K2区石器觀察表(CD)
K2-8表	K2区金属器觀察表(CD)
K2-9表	K2区ガラス玉觀察表(CD)
K2-10表	K2区中世土器觀察表(CD)

K3区

K3-1表	K3区竪穴住居跡一覽
K3-2表	K3区弥生掘立柱建物跡一覽
K3-3表	K3区弥生土坑一覽
K3-4表	K3区弥生溝跡一覽
K3-5表	K3区古代・中世溝跡一覽
K3-6表	K3区弥生土器觀察表(CD)
K3-7表	K3区石器觀察表(CD)
K3-8表	K3区ガラス玉觀察表(CD)
K3-9表	K3区古代・中近世土器觀察表(CD)

L1区

L1-1表	L1区竪穴住居跡一覽
L1-2表	L1区掘立柱建物跡一覽
L1-3表	L1区土坑・性格不明遺構一覽
L1-4表	L1区溝跡一覽
L1-5表	L1区弥生土器觀察表(CD)
L1-6表	L1区石器觀察表(CD)

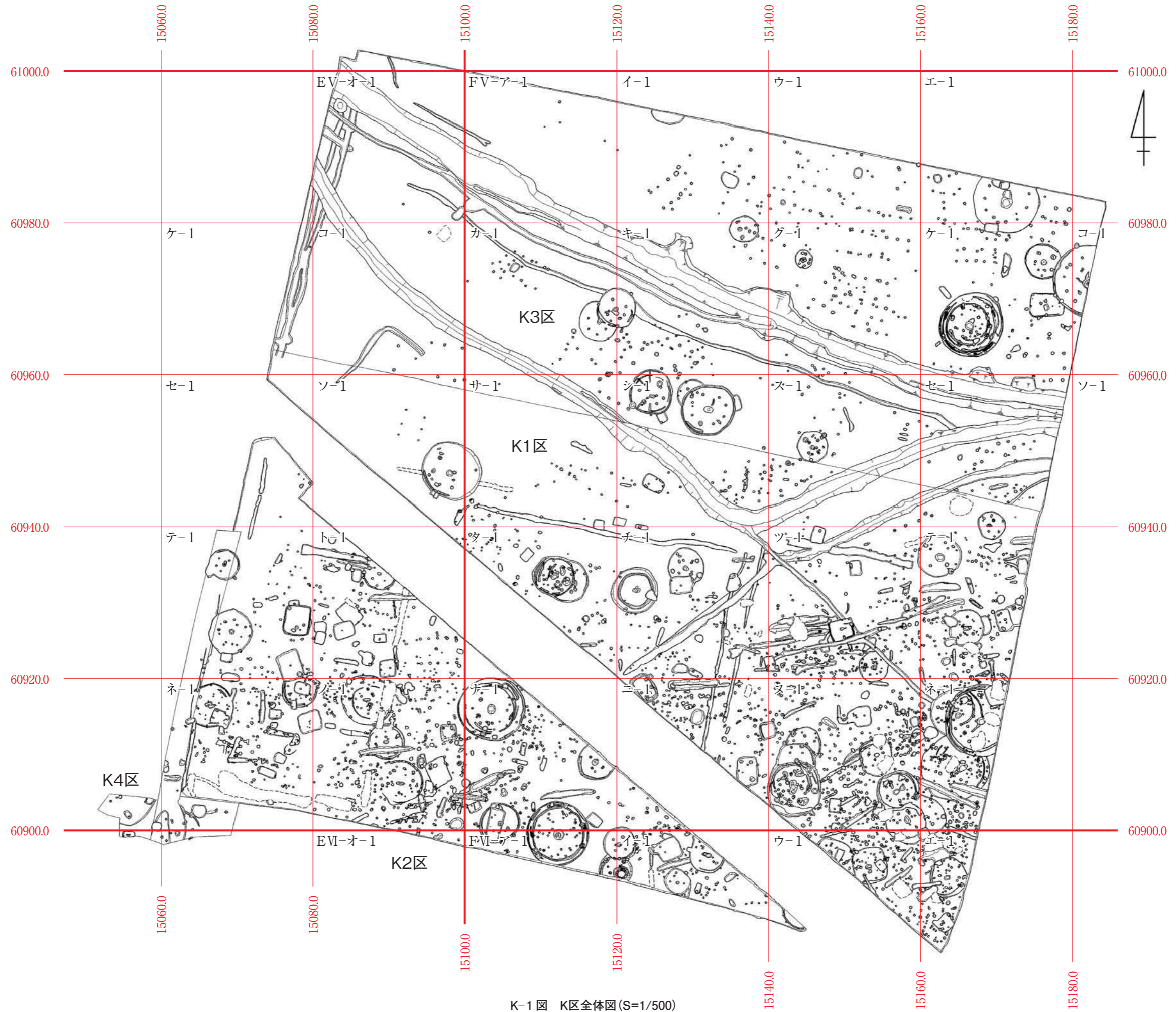
L2区

L2-1表	L2区竪穴住居跡一覽
L2-2表	L2区弥生掘立柱建物跡一覽
L2-3表	L2SB201埋土一覽
L2-4表	L2SB202埋土一覽
L2-5表	L2SB203埋土一覽
L2-6表	L2SB204埋土一覽
L2-7表	L2SB212埋土一覽
L2-8表	L2区土坑一覽
L2-9表	L2区弥生溝跡一覽
L2-10表	L2区中世掘立柱建物跡一覽
L2-11表	L2区弥生土器觀察表(CD)
L2-12表	L2区石器觀察表(CD)
L2-13表	L2区ガラス玉觀察表(CD)

L3区

L3-1表	L3区竪穴住居跡一覽
L3-2表	L3区掘立柱建物跡一覽
L3-3表	L3区土坑一覽
L3-4表	L3区溝跡一覽
L3-5表	L3区弥生土器觀察表(CD)
L3-6表	L3区石器觀察表(CD)
L3-7表	L3区ガラス玉觀察表(CD)
L3-8表	L3区金属器觀察表(CD)

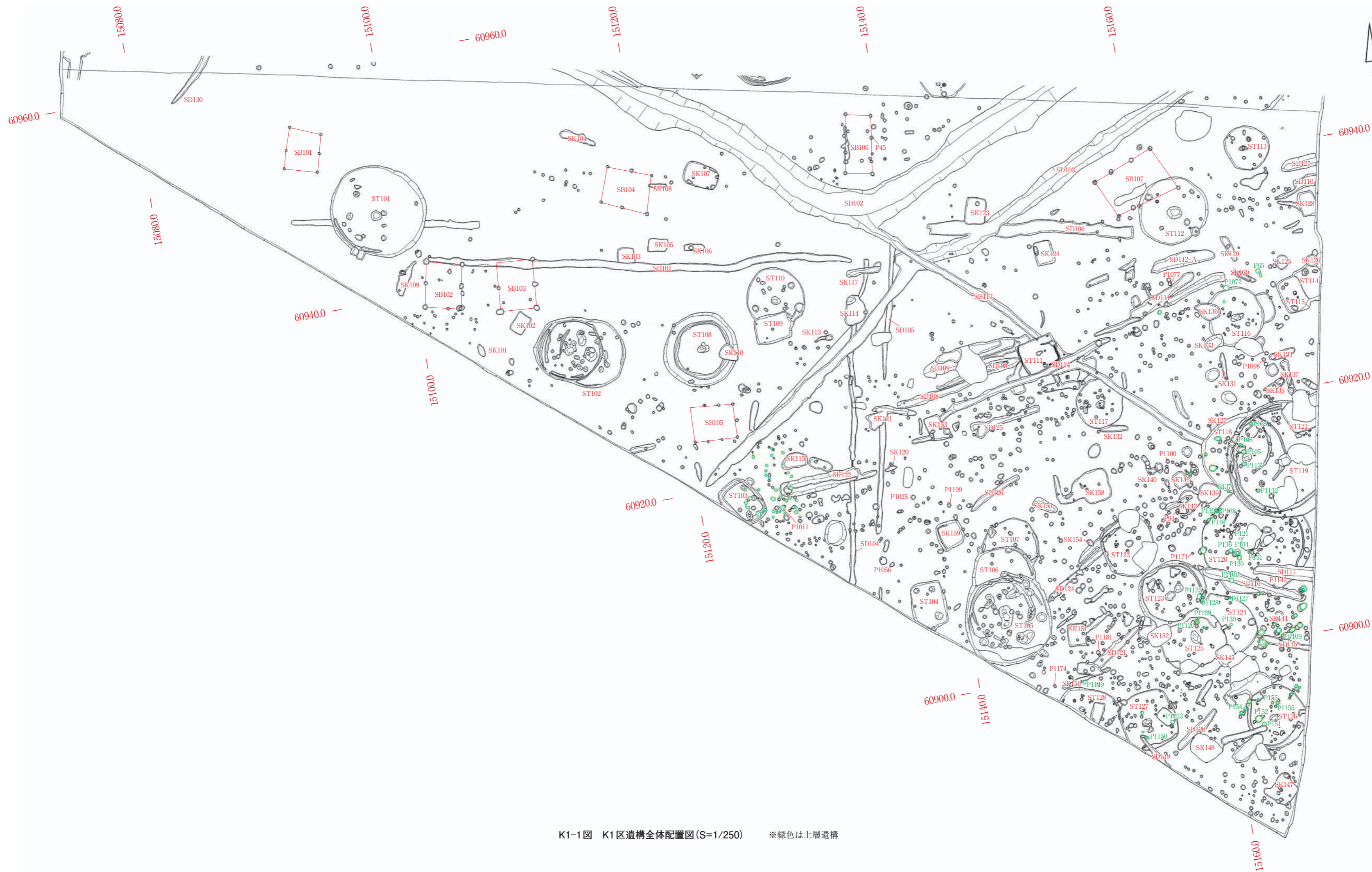
K区の調査



K-1 図 K区全体図(S=1/500)

K1 区の調査





K1-1図 K1区遺構全体配置図(S=1/250)

※緑色は上層遺構

1. K1 区の概要

概要

今次調査の中で西側部分に位置し、弥生時代中・後期の竪穴住居跡 28 軒を検出している。特に調査区東側部分に竪穴住居跡が密集する傾向があり、隣接する K2 区へと住居跡群は展開を見せる。K1SD102 の大溝 4 が調査区北側に位置し、それより南東部に住居跡群が展開するところから、K1SD102 が本調査区の住居跡を画する溝の可能性が強い。しかしながら K1ST101 のように住居跡密集域から離れ大型の住居跡の存在することも注目される。中世については溝 SD101、104 が区画溝の可能性が考えられ、調査区中央部南に石組遺構を検出している。ピットは 10 個程確認しており調査区東側部分に点在する。

調査担当者 前田光雄、田坂京子、小島恵子

執筆担当者 前田光雄、(久家隆芳)

調査期間 平成 8 年 12 月 2 日～平成 9 年 3 月 21 日、平成 9 年 5 月 19 日～8 月 12 日

調査面積 4810㎡

時代 弥生時代中期～後期、中世

検出遺構 本調査区での検出遺構は、竪穴住居跡 28 軒、掘立柱建物跡 7 棟、土坑 59 基、溝 27 条、ピット約 950 個、性格不明遺構 1 基、石組遺構 1 基である。

2. K1 区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

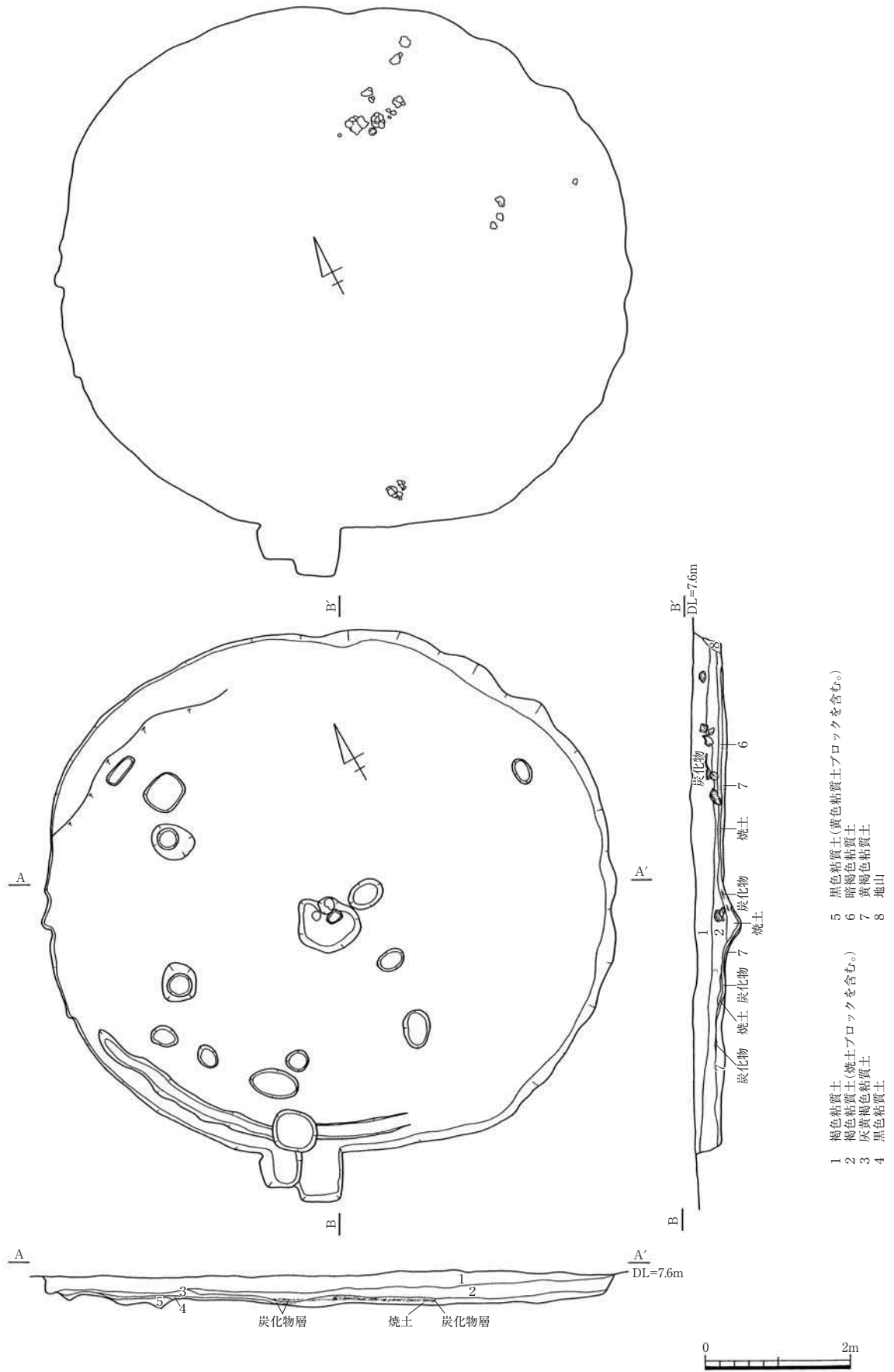
K1 区では竪穴住居跡は 28 軒検出している。調査区東南部に密集しており、多くの切り合い関係が認められている。平面形プランは長方形のものが 7 軒で他のものは円形か楕円形を呈するものである。円形のもので最大のものは ST119 で直径 9.5m を測る。最小のものは ST113 の 3.6m である。大部分が 5m 前後のもので占められている。長方形のものは円形のものに比べ一回り小さく、一辺 4m 弱のものが多い。付帯施設として中央ピット(炉跡)、周溝がほとんどの住居跡で検出されている。

住居跡の切り合い関係は 118 古・120 → 118 新 → 119 → 121、123 → 124 → 125、128 → 127、107 → 106 → 105 である。また 102 については西側部分 → 東側部分、115 → 114 の可能性が考えられる。

切り合い関係、出土遺物からして本調査区の住居跡の変遷は 126 が最古段階で弥生 III-3 期、IV-2 期段階が 111・118 古・120・122・123・127・128 の 7 軒、V-1 ～ 2 期段階が 102・104・108・109・106・107・114・115・117・118 新・119・121・124 の 13 軒、V-3 期段階が 101・103・

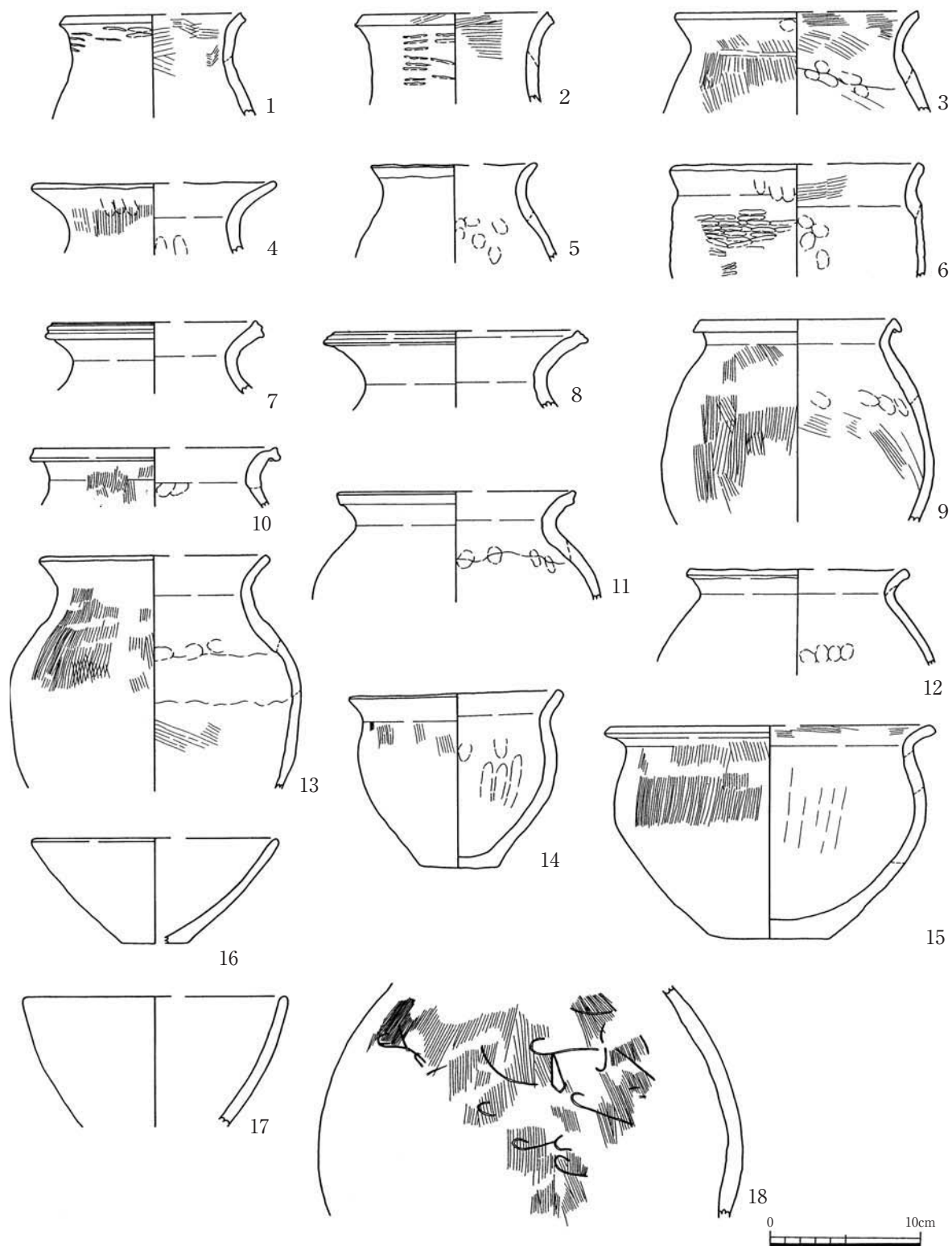
K1-1 表 K1 区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(m ²)	平面形	主軸方向	時期	備考
K1ST101	7.7×7.3	0.30	44.0	円形	—	弥生V-2～3	
K1ST102	5.2×5.5	0.17	22.5	楕円形	N-30°-W	弥生V-1	
K1ST103	3.9×2.8	0.09	10.9	長方形	N-52°-E	弥生V-2～3	
K1ST104	3.8×2.8	0.14	10.6	長方形	N-90°-E	弥生V-1	
K1ST105	7.3×6.8	0.40	38.4	円形	—	弥生V-3	
K1ST106	5.1	0.20	20.0	円形	—	弥生V-1	
K1ST107	4.6	0.07	17.0	円形	—	弥生V-1	
K1ST108	6.0	0.36	28.0	円形	—	弥生V-1～2	
K1ST109	2.9×2.3	0.32	6.7	長方形	N-85°-E	弥生V-1	
K1ST110	4.8	0.20	18.0	円形	—	弥生V-3	
K1ST111	3.2×2.6	0.50	8.5	長方形	N-75°-E	弥生IV-2	
K1ST112	5.6	0.30	25.0	円形	—	弥生V-3	
K1ST113	3.6	0.05	10.2	円形	—	弥生	
K1ST114	2.8×2.0	0.30	5.6	長方形	N-15°-E	弥生V-1	
K1ST115	2.5×1.9	0.30	4.8	長方形	N-20°-E	弥生V-1	
K1ST116	4.9	0.30	19.0	円形	—	弥生V-3	
K1ST117	4.0	0.07	12.6	円形	—	弥生V-1	
K1ST118	6.5	0.35	33.0	円形	—	弥生IV-2～V-1	
K1ST119	9.5	0.30	71.0	円形	—	弥生V-1	
K1ST120	8.9	0.15	62.0	円形	—	弥生IV-2～V-1	
K1ST121	3.0	0.40	—	長方形	N-60°-E	弥生V-2	
K1ST122	5.1×4.3	0.30	17.0	円形	—	弥生IV-2	
K1ST123	5.8	0.32	26.0	円形	—	弥生IV-2	
K1ST124	5.3	0.22	22.0	円形	—	弥生V-2	
K1ST125	5.2	0.16	21.0	円形	—	弥生V-3	
K1ST126	5.0	0.20	20.0	円形	—	弥生III-3	
K1ST127	4.7	0.20	17.0	隅丸方形	—	弥生IV-2	
K1ST128	5.5	0.26	24.0	円形	—	弥生IV-2	



- 1 褐色粘質土 (焼土ブロックを含む。)
- 2 褐色粘質土 (焼土ブロックを含む。)
- 3 灰黄褐色粘質土
- 4 黒色粘質土
- 5 黒色粘質土 (黄色粘質土ブロックを含む。)
- 6 暗褐色粘質土
- 7 黄褐色粘質土
- 8 地山

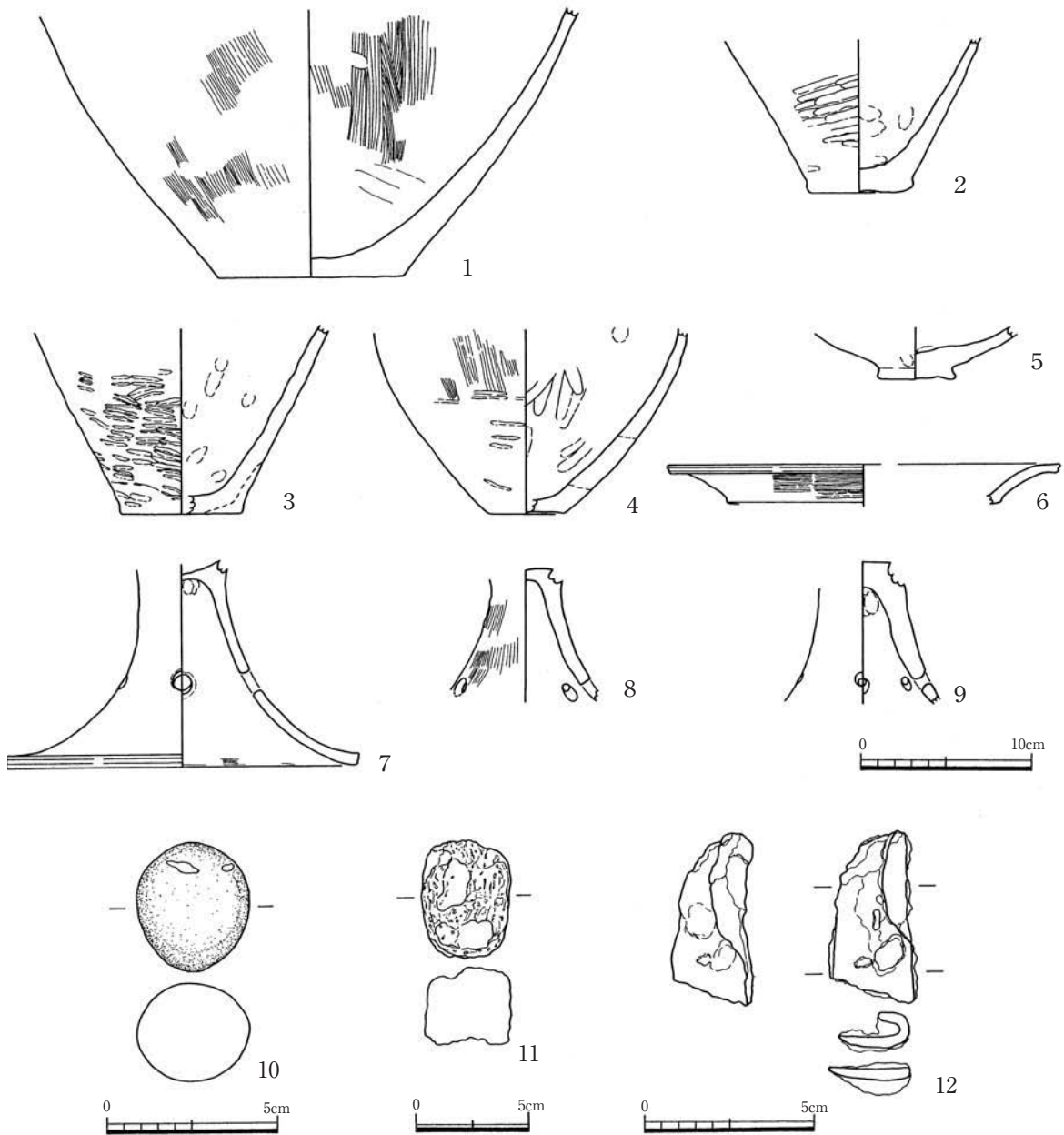
K1-2 図 K1ST101 (1)



K1-3 图 K1ST101(2)

105・110・112・116・125 の 7 軒である。時期不明は 113 の 1 軒である。IV-2 期段階については調査区南東部に集中する傾向があり、切り合い関係、隣接状態から 2 時期に細分が可能であるが、出土遺物からは明確には区別することはできなかった。おそらく短期間内の変遷と考えられる。V-1～2 期段階については特に V-1 期段階が 2 細分される可能性がある。V-3 期については調査区に満遍なく分散する傾向が認められた。

IV-2 期～V-3 期までの細区分は遺構の切り合い関係からして本調査区内では 6 段階が想定できる。しかしながら出土土器からは 6 段階に明確には細分することはできなかった。



K1-4 図 K1ST101(3)

K1ST101(K1-2～4 図)

時期；弥生V-2～3 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；7.7×7.3m **深さ**；0.3m **面積**；44㎡

埋土；褐色粘質土主体。下層に炭化物を多量に含む。

ピット；数 11 **主柱穴数**；— **主柱穴**；—

床面；1面 **貼床**；有り **焼失**；無し

中央ピット；形状 円形 **規模** 85×80cm **深さ** 60cm **埋土** 暗褐色粘質土主体、焼土多量。

壁溝；数 1 **幅** 25cm **深さ** 8cm

出土遺物；弥生土器 54、投弾 1、軽石 1、石錘 1、砥石 1、台石 1、叩石 3、鉄斧 1

所見；調査区西端に位置する大型住居跡である。柱穴は 11 個検出しているものの、東側部分では主柱穴と考えられるものは存在していない。壁溝は南西部に一部分認められるのみで、全周はしない。炉跡は中央部に認められ、ほぼ円形で中から中礫が 3 点出土している。

遺物は甕を主体として、壺は僅少である。高杯は比較的多く出土している。甕はタタキ目のあるものが一定量混じっている。7～12の口縁は外反するもので、7・8は口唇を拡張して退化した凹線文となる。鉢は小型のものと大型のものが認められ、14・15のように口縁が外反するものと、体部が直線的に開く 16・17のものがある。甕類の底部は平底である。5のような小底部を有するものが出土している。高杯は杯部外面に段状となるもので、脚部の裾は大きく開く。全てに円孔を有する。調整はハケのものが僅かで、他はナデ調整のものである。石器としては 11 の軽石、10 の投弾が 1 点出土している。12 は袋状鉄斧である。

K1ST102(K1-5・6 図)

時期；弥生V-1 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-30°-W

1次規模；5.2×5.5m **深さ**；0.17m **面積**；22.5㎡、**2次規模**；5.5×5.5m **深さ**；0.17m **面積**；23.7㎡

埋土；暗褐色粘質土主体。下層には炭化物層。

ピット；数 25 **主柱穴数**；9 **主柱穴**；P1～9

床面；2面 **貼床**；有り **焼失**；有り

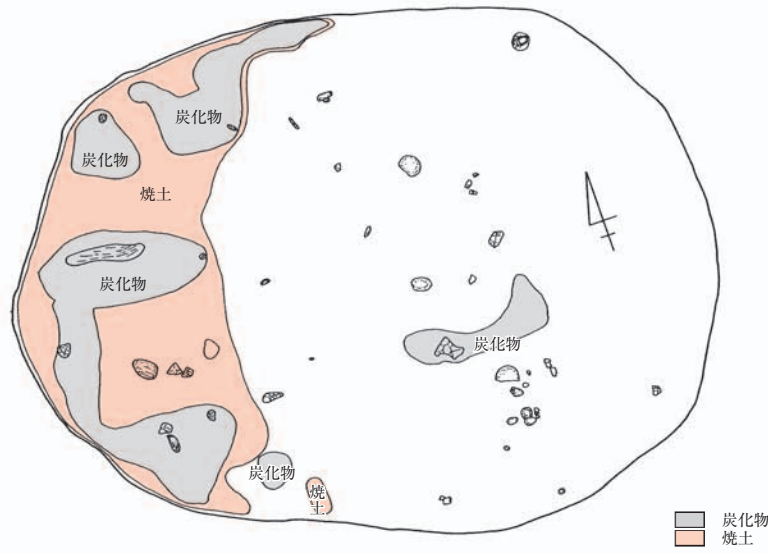
1次中央ピット；形状 楕円形 **規模** 95×75cm **深さ** 33cm **埋土** 暗褐色粘質土主体。焼土、炭化物を多量に含む。 **2次中央ピット**；規模 110×80cm **深さ** 30cm

壁溝；数 3 **壁溝1**；幅 18cm **深さ** 7cm **壁溝2**；幅 16cm **深さ** 7cm **壁溝3**；幅 30cm **深さ** 5cm

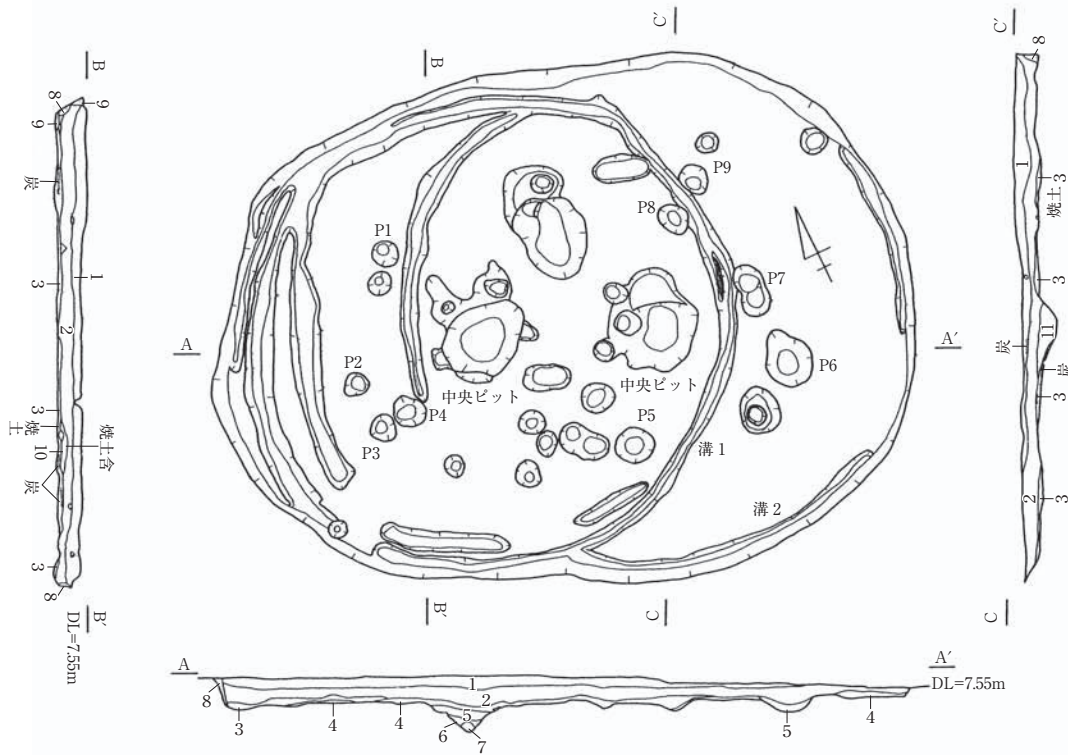
出土遺物；弥生土器 14、口縁 54、底部 27、胴部破片 640、礫 9、石包丁 1、凹石 2、台石 1

所見；調査区東側部分に位置する。2軒の住居跡の切り合い関係か、または拡張の可能性が考えられる。壁溝からすると円形住居跡径 5.5mの2軒の重複または 7.5mに拡張して楕円形プランの拡張が考えられる。炭化物、焼土が西側部分に多く見られるところから、2軒の住居跡の重複関係であれば、西側部分が旧で東側部分が新と考えられる。主柱穴は 9 個検出できているが、どれがそれぞれに対応するかは不明である。

遺物は弥生後期初頭を中心とした甕が主体を占める。凹線文の残る 2・3・6 の甕、また貼付口縁



炭化物
焼土



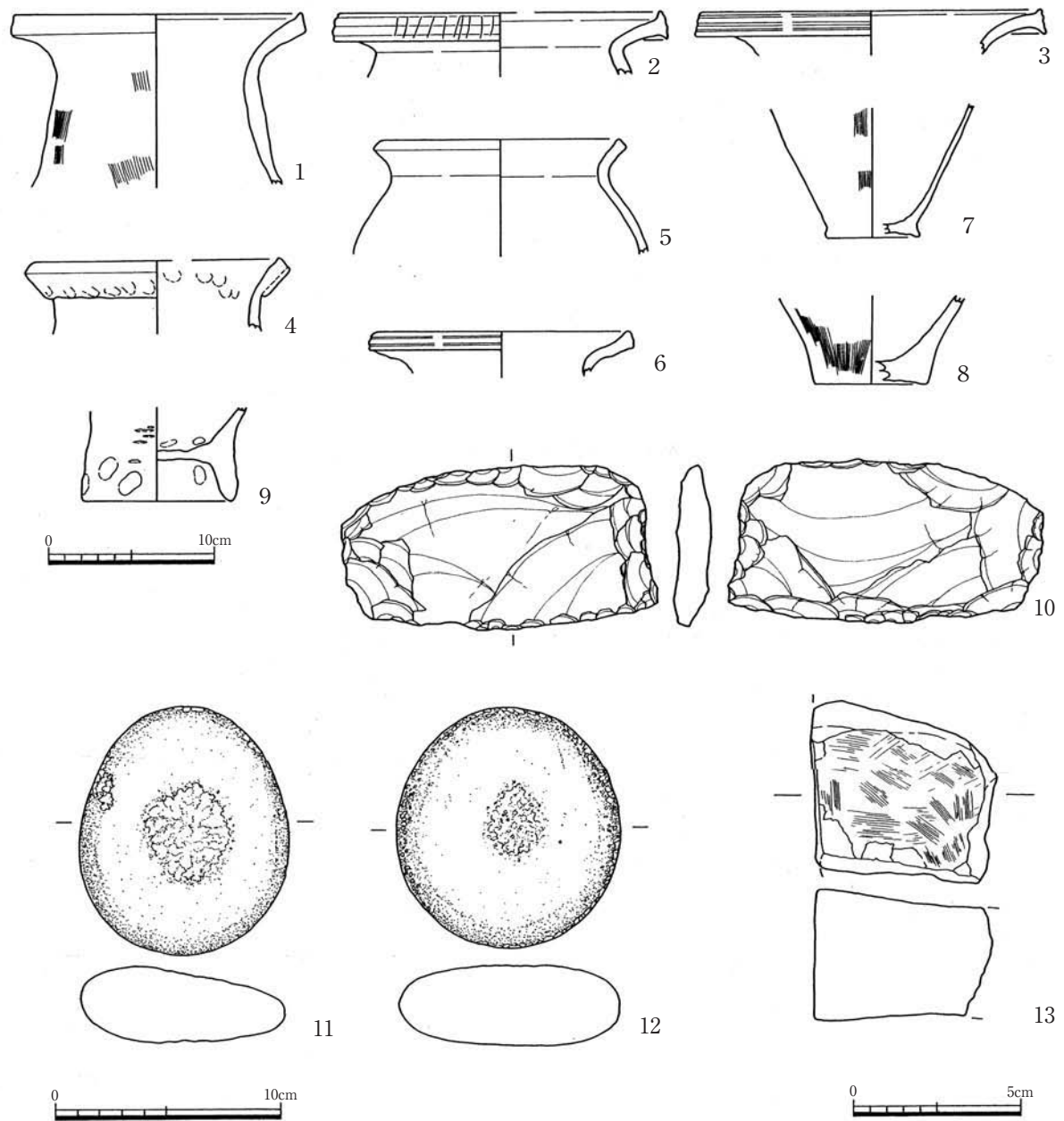
- 1 褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 黄褐色粘質土
- 4 暗褐色粘質土 (黄褐色粘質土ブロックを含む。)
- 5 黒褐色粘質土
- 6 赤褐色粘質土 (焼土を多く含む。)
- 7 暗褐色粘質土 (炭化物を多く含む。)
- 8 地山
- 9 赤褐色 (焼土)
- 10 暗褐色粘質土 (焼土を含む。)
- 11 暗褐色粘質土



K1-5 図 K1ST102(1)

のものが認められる。壺は少なく1のみと考えられる。高杯、鉢は認められない。7～9は底部でやや上げ底のものと9のような足高高台状のものが1点認められており、僅かにタタキ目が認められる。7・9については本住居跡に伴うものかどうかは不明である。

石器は10の打製石包丁、11・12の凹石が出土している。10の石包丁は両側縁には明確な抉りは認められない。凹石はやや扁平な円盤を素材とし、中央部に敲打痕が残り、側縁にも敲打痕が認められる。



K1-6 図 K1ST102(2)

K1ST103(KI-7 図)

時期；弥生V-2～3 形状；長方形 主軸方向；N-52°-E

規模；3.9×2.8m 深さ；0.09m 面積；10.9㎡

埋土；暗褐色土主体。炭化物を含む。

ピット；数6 主柱穴数；2 主柱穴；P1・2

床面；1面 貼床；無し 焼失；無し

中央ピット；—

壁溝；数1 幅50cm 深さ10cm

出土遺物；弥生土器7、口縁48、底部11、胴部破片732、高杯破片3、礫4、石包丁1

所見；調査区中央部南端に位置する。中央部に炉跡と考えられる炭化物が僅かに出土したものの、掘り込みは認められない。主柱穴は南北の壁際の柱穴である可能性もあるが判然としない。

出土土器は高杯で碗状を呈するものが1点出土している。鉢は大型の分類にされるもので、直立気味に口縁は立ち上がる。甕、壺の底部と考えられるものは平底である。

5の石包丁は抉入部を敲打調整により作出し、一側縁は切断する。両刃部は粗い調整により作出する。

K1ST104(KI-8 図)

時期；弥生V-1 形状；長方形 主軸方向；N-90°-E

規模；3.8×2.8m 深さ；0.14m 面積；10.6㎡

埋土；褐色土主体

ピット；数6 主柱穴数；2 主柱穴；P1・2

床面；1面 貼床；無し 焼失；無し

中央ピット；—

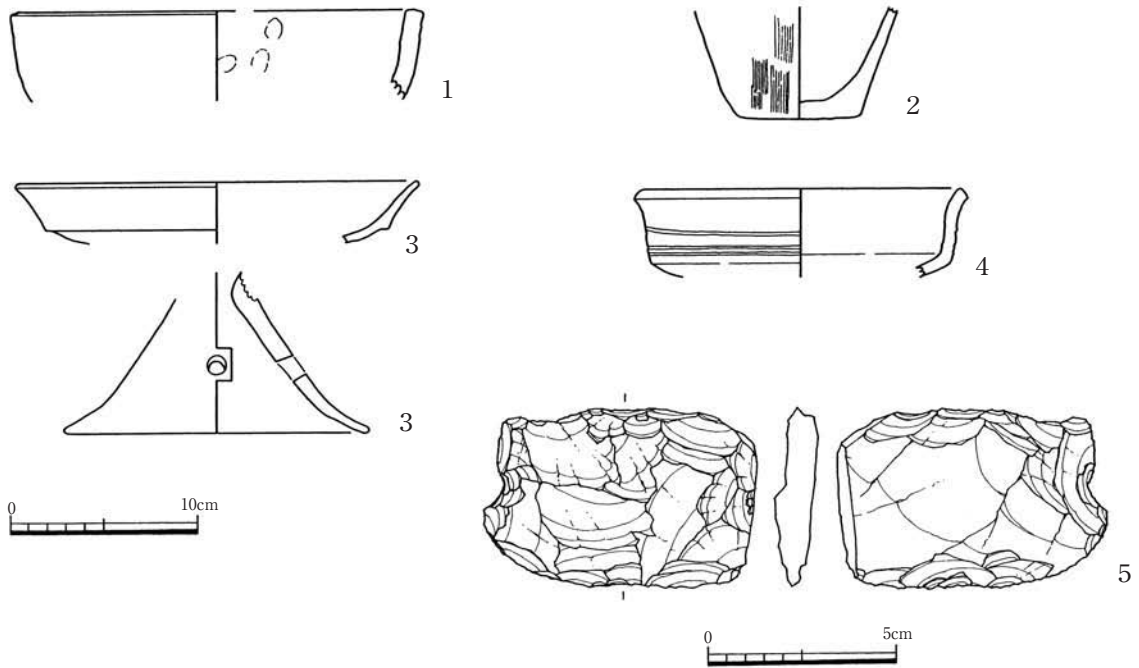
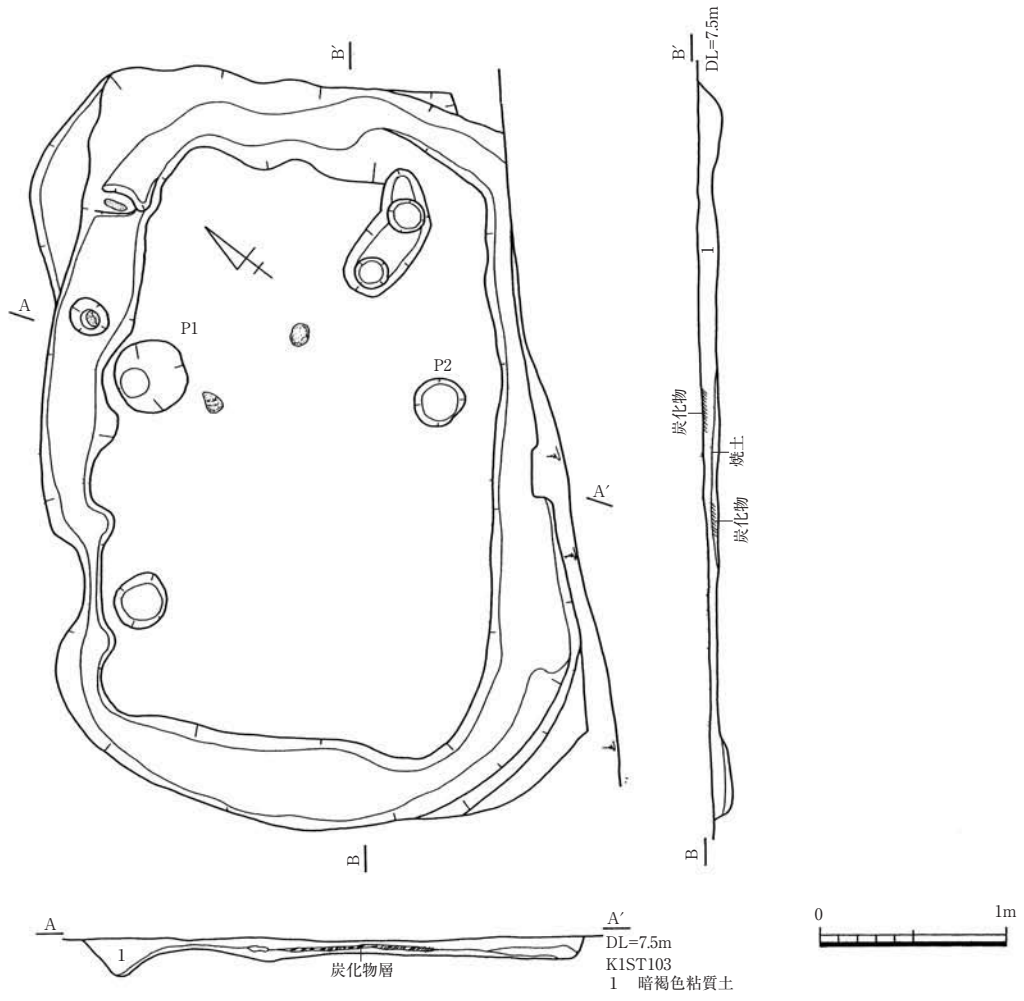
壁溝；—

出土遺物；弥生土器4、口縁18、底部9、胴部破片10、高杯破片7、凹石1

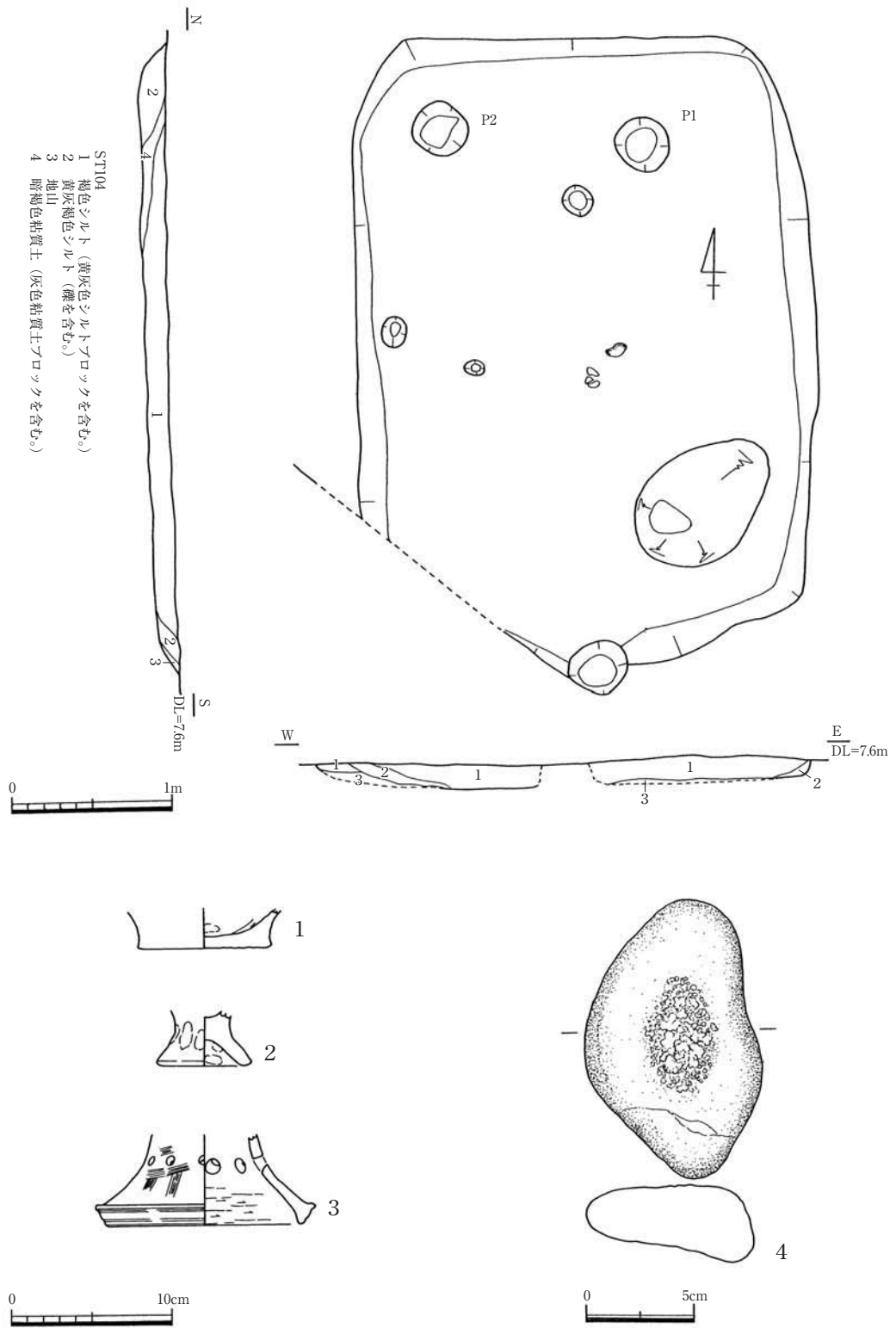
所見；調査区南端のやや東よりの中央部に位置する。小竪穴住居跡で柱穴と考えられるものが北側部分に2基存在するものの、他に柱穴と考えられるものは検出されていない。炉跡も検出されていない。

出土土器は1が甕か壺の底部である。時期的に本住居跡に含まれるかどうかは不明である。2は脚付の鉢、3は脚部裾端部が凹線状となり、脚部には櫛描文と考えられる痕跡が認められる。

石器は4の凹石が1点出土している。表裏面共に浅い敲打痕が認められる。



K1-7 図 K1ST103



K1-8 ☒ K1ST104

K1ST105(K1-9～12 図)

時期：弥生V-3 形状：円形 主軸方向：—

規模：7.3×6.8m 深さ：0.4m 面積：38.4㎡

埋土：暗褐色土を基本として、下層には炭化物を多く含む。

ピット：数 35 主柱穴数：— 主柱穴：—

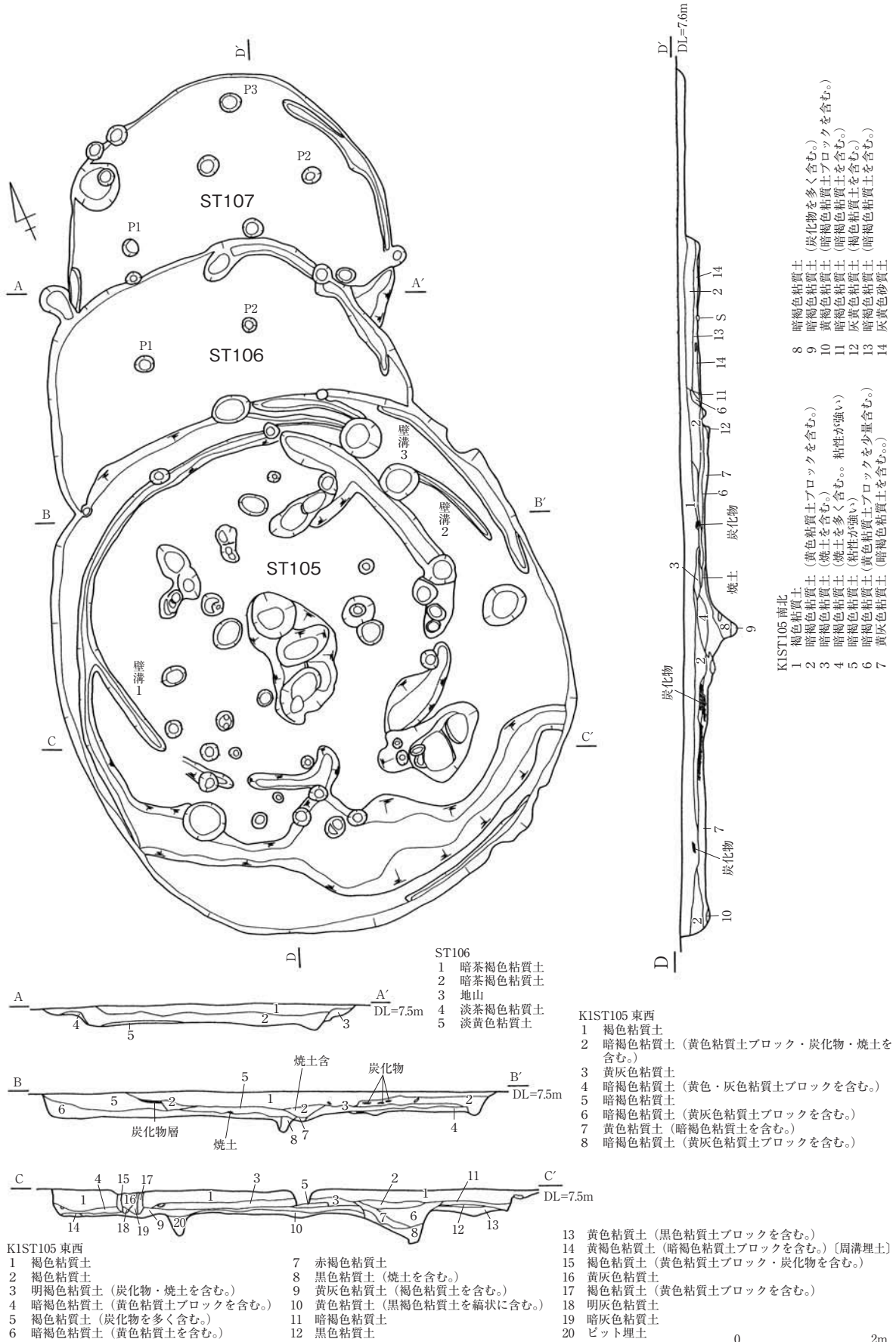
床面：2面 貼床：有り 焼失：有り

中央ピット：形状 楕円形 規模 180×100cm 深さ 30cm 埋土 黄灰色粘質土主体、炭化物、焼土多量に含む。

壁溝：数 4 壁溝 1；幅 15cm 深さ 3cm、壁溝 2；幅 10cm 深さ 1cm、壁溝 3；幅 20cm 深さ 3cm、壁溝 4；幅 50cm 深さ 7cm



K1-9 図 K1ST105 ~ 107(1)

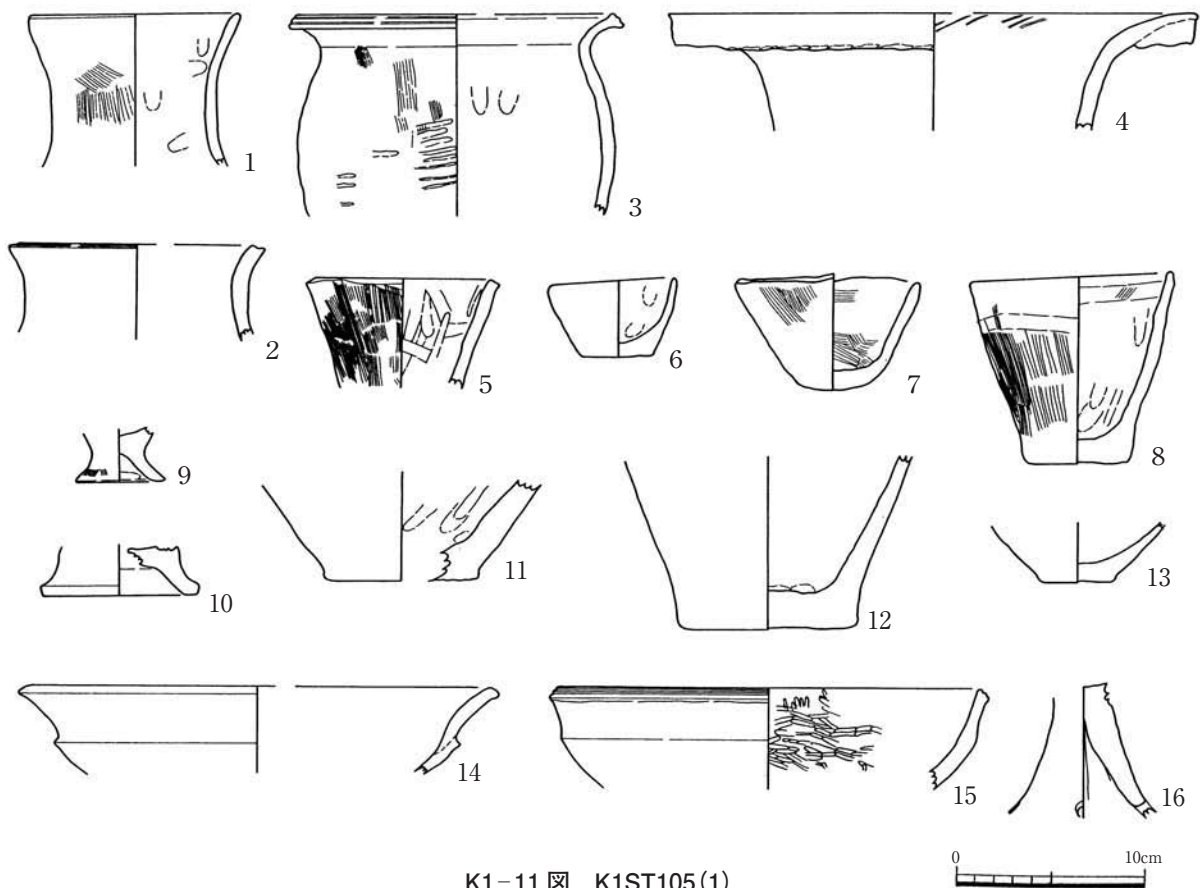


K1-10 図 K1ST105 ~ 107 (2)

出土遺物；弥生土器 43、口縁 348、底部 128、胴部破片 2600、石包丁 3、凹石 3、叩石 1、砥石 1、台石 1

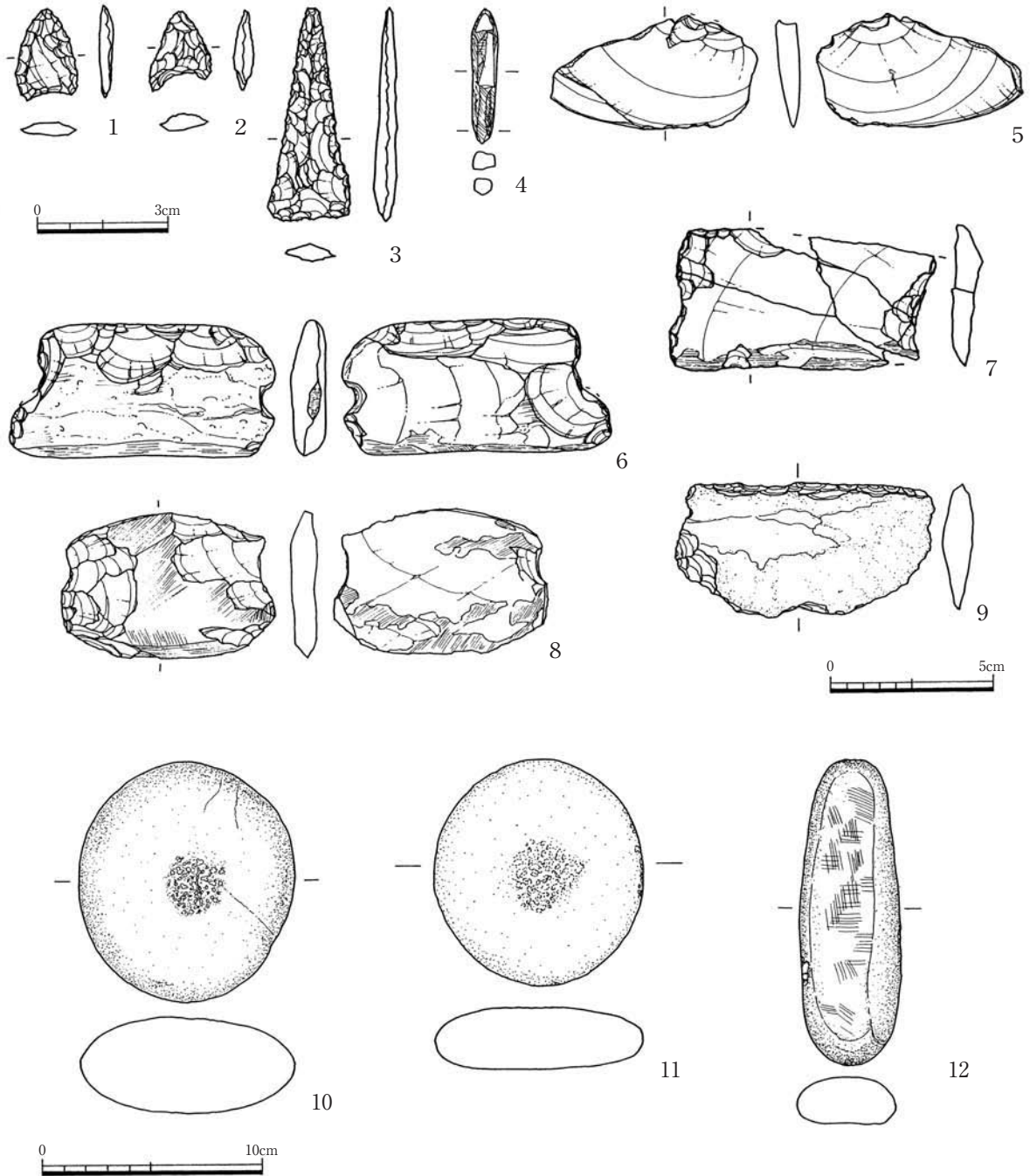
所見；調査区東側部南端に位置する。拡張か、重複と考えられ、中に壁溝 1 が巡る。最終的な形態は楕円形を呈し、南側部分の壁溝は不整形で大きく膨らむ。炉跡は中央部に不整形な楕円形を呈し、底面を三ヶ所有する。柱穴は 30 基程検出しているものの、支柱穴はどの柱穴が対応するかどうかは不明である。他に小柱穴を多く検出している。

出土土器は 1 の直頸壺、また口縁貼付の 4 が出土している。4 については混入の可能性が高い。調整は 1 の外面はハケである。甕 3 は胴部にタタキ目を施したもので、口縁は外反し端部はあまり拡張しないものである。5～10 は鉢で 9・10 は脚の付く小型のものである。他のものについても小型のものが多く、特に 6 はミニチュア土器のように小型である。外面にはハケ調整を施すものが多い。11～13 は壺、甕の底部である。11・12 は甕、13 は壺の可能性がある。ナデ調整で内面は粗い。14～16 は高杯で 14 は外面に段を有し、15 は碗状のもので内面にミガキを施す。



K1-11 図 K1ST105(1)

石器は比較的纏まって出土しており、1～3は石鏃で1・2はサヌカイト製、3は赤色頁岩製で大型のものである。3は中央部まで調整剥離痕を施し稜線となり、断面は菱形となる。4は穿孔具と考えられ、両端部は尖り、横方向の擦痕が認められる。6～9は石包丁で敲打剥離調整により全体を仕上げた後、一刃部を磨きあげるものが多い。10・11は凹石で表裏面中央部に僅かに敲打痕が認められ、また側縁部にも敲打痕が僅かに認められる。12は棒状の叩石で一端部が敲打により平坦となる。



K1-12 図 K1ST105(2)

K1ST106(K1-9・10・13 図)

時期：弥生V-1 形状：円形 主軸方向：—

規模：5.1m 深さ：0.2m 面積：20㎡

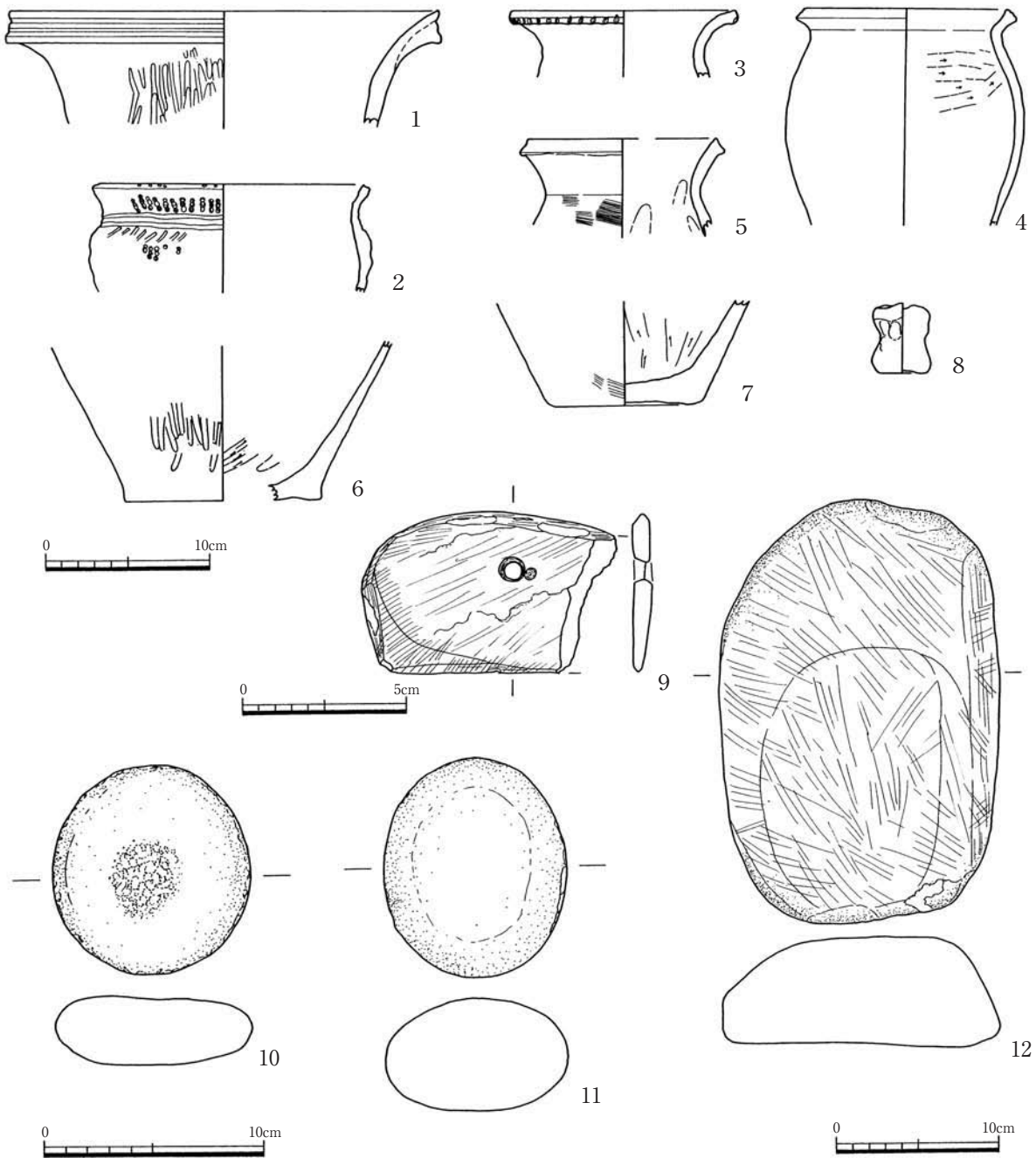
埋土：暗褐色粘質土主体。

ピット：数2 主柱穴数：2以上 主柱穴：P1・2

床面：1面 貼床：無し 焼失：有り

中央ピット：—

壁溝：数1 幅15cm 深さ5cm



K1-13 図 K1ST106

出土遺物；弥生土器 10、口縁 78、底部 27、胴部破片 686、石包丁 1、叩石 3、砥石 1、投弾 2、石斧 1
所見；調査区東側部南端に位置する。南側半分をST105に切られ、北側のST107を切る。炉跡は検出されていない。壁溝は東側に部分的に認められる。支柱穴は2本残存しているが本来は4本と考えられる。

遺物は1が壺で口縁を拡張し、凹線文を巡らせる。2～5は甕と考えられ、2は円形刺突等の装飾を施す。3～5は口唇を拡張しないもので、4の内面下半の調整はヘラ削りである。底部6・7は甕と考えられ、内面はヘラ削り調整である。8は小型の土製品である。分銅形を呈し、用途等は不明である。

石器は9が石包丁で半折する。刃部は直刃で研磨により鋭角に仕上げる。孔は一ヶ所穿っており、脇に僅かに穿孔途中で止めた痕跡が残る。10・11の凹石、叩石が出土している。

K1ST107(K1-9・10・14 図)

時期；弥生V-1 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；4.6m **深さ**；0.07m **面積**；17㎡

埋土；暗褐色粘質土主体

ピット；数6 **支柱穴数**；3 **支柱穴**；P1～3

床面；1面 **貼床**；無し **焼失**；無し

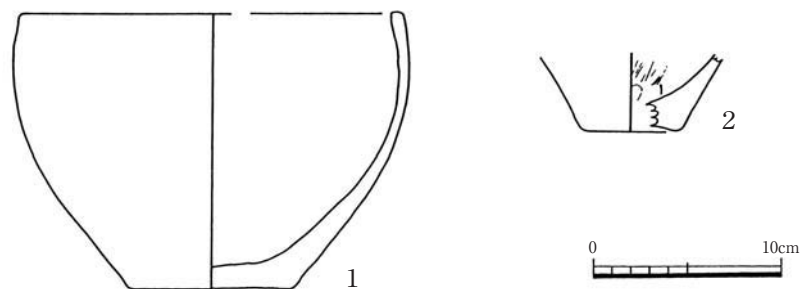
中央ピット；—

壁溝；数1 **幅** 15cm **深さ** 10cm

出土遺物；弥生土器 4、胴部破片 22

所見；調査区東側部南端に位置する。ST106に南側部分は切られる。平面形プランは円形を呈する。柱穴は5本が残存しており、内3本が支柱穴と考えられ、本来は4本または5本柱と考えられる。壁溝は東側部分で検出されており、全周しない。極僅かに西側部分でも認められる。炉跡は検出できなかった。

出土遺物は少なく、1は大型の鉢で体部がやや丸味を持ち、口頸部が内湾する。2は甕の底部と考えられ、内面にはヘラ削りが施される。共に小礫を多量に含む。2の底部については弥生V-1期相当と考えられるが、1の鉢については類例が少なく明確な時期は判然としない。



K1-14 図 K1ST107

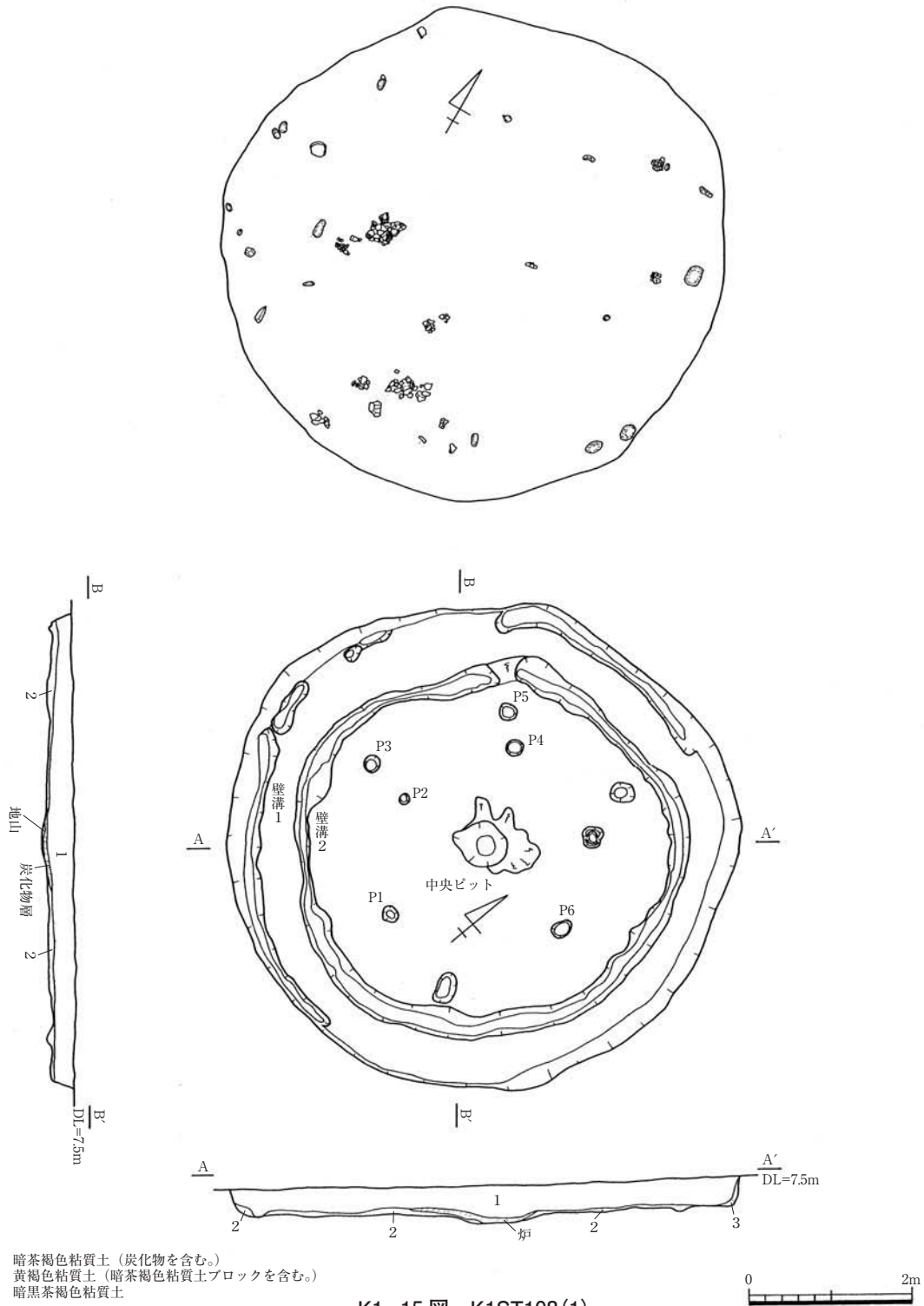
K1ST108(K1-15 ~ 17 図)

時期：弥生V-1 ~ 2 形状：円形 主軸方向：—

規模：径 6.0m 深さ：0.36m 面積：28㎡

埋土：暗褐色粘質土主体

ピット：数 8 支柱穴数：6 支柱穴：P1 ~ 6



- 1 暗茶褐色粘質土 (炭化物を含む。)
- 2 黄褐色粘質土 (暗茶褐色粘質土ブロックを含む。)
- 3 暗黒茶褐色粘質土

K1-15 図 K1ST108(1)

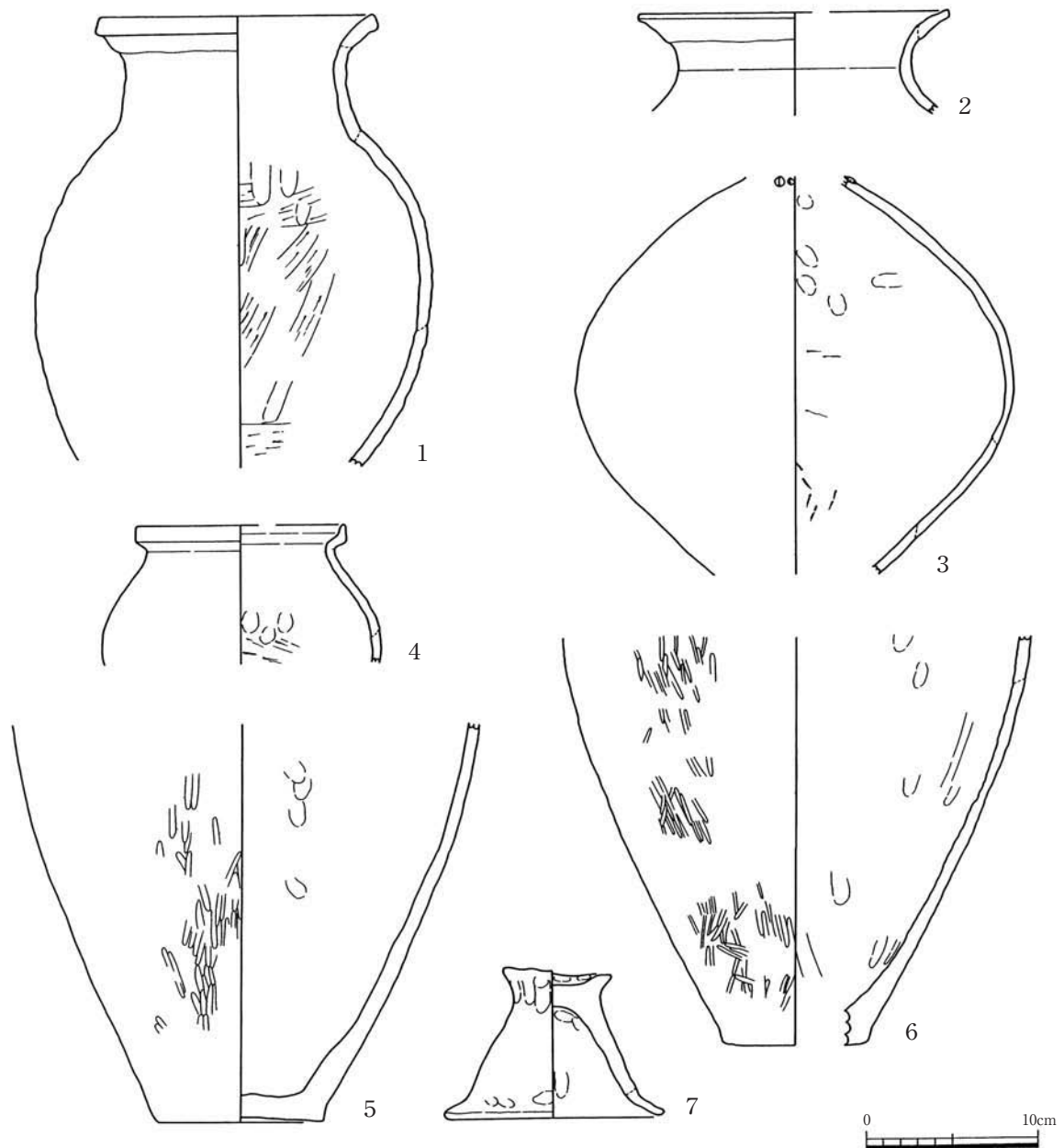
床面：1面 貼床：無し 焼失：無し

中央ピット：形状 円形 規模 55cm 深さ 35cm 埋土 暗茶褐色粘質土、炭化物層

壁溝：数 2 壁溝 1：幅 15cm 深さ 4cm、壁溝 2：幅 25cm 深さ 6cm

出土遺物：弥生土器 12、口縁 41、底部 13、胴部破片 998、石斧 1、凹石 1、叩石 1、投弾 9

所見：調査区東寄りに位置する。ほぼ円形の平面形プランを呈する。壁際にベッド状遺構を有し、中央部床面との比高差は 30cm 程を測る。壁溝は壁際とベッド状遺構際に存在し、壁際の壁溝は全周せず、西側部で途切れる。ベッド状遺構際の壁溝はほぼ全周する。中央部には炉跡を検出しており、やや小形の炉跡である。柱穴は 6 基検出しており、その中で P1～6 が支柱穴と考えられる。P2・3 と P4・5 はそれぞれ近接して検出しており、同時期に存在したかどうかは不明である。南西部コー

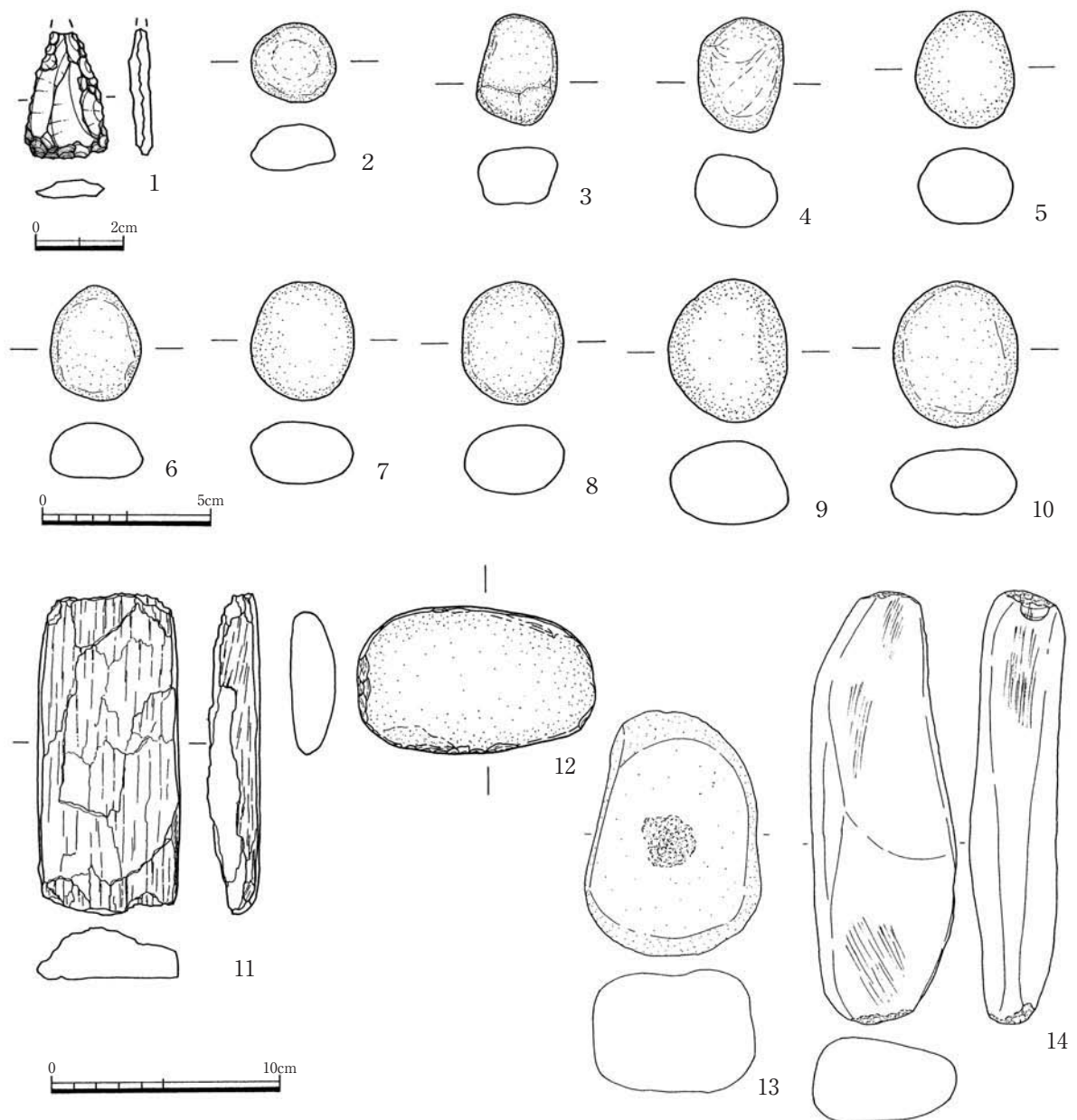


K1-16 図 K1ST108(2)

ナーでは支柱穴となる柱穴は検出できていない。遺物は南西部で投弾が纏まって出土している。

出土土器は壺を中心として、蓋が出土している。1～3は壺と考えられ、1・2は貼付口縁のものである。1の内面下半にヘラ削りが僅かに認められる。3は球胴の壺の胴部と考えられ、肩部に小浮文を貼付する。4は甕で口頸部が短く屈曲する。5・6は壺の底部と考えられ、平底の底部から体部は直線的にやや開き気味に立ち上がる。内面下半にはヘラ削りが僅かに認められ、外面はヘラナデまたはミガキを施す。7は蓋で器高が裾径に比してやや高い。

石器は1がサヌカイト製の石鎌で、扁平な剥片素材で縁辺部のみ調整剥離を施す。2～10は小円礫を素材にした投弾である。加工痕は全く認められない。重さは最小のもので10.1g、最大のもので47.4gである。20g台のものが最も多い。11は石斧と考えられ、表面及び側縁は丁寧な研磨で



K1-17 図 K1ST108(3)

裏面には大きな剥離痕及び両端部は敲打痕が認められる。使用による破損痕、使用痕かまたは未成品で未調整のものかは不明である。12 は一側縁のみ研磨を行ない、表裏面は自然面のままである。両端部は敲打痕を残し、石包丁の未成品の可能性もある。13 は凹石、14 は棒状の礫素材で両端部に敲打痕が認められる叩石である。

K1ST109(K1-18・19 図)

時期；弥生V-1 形状；長方形 主軸方向；N-85°-E

規模；2.9×2.3m 深さ；0.32m 面積；6.7㎡

埋土；黄褐色土

ピット；数3

床面；1面 貼床；無し 焼失；無し

中央ピット；—

壁溝；—

出土遺物；弥生土器 11、口縁 15、底部 8、胴部破片 757、礫 7

所見；調査区中央部に位置し、ST110 と切り合い関係にある。平面形プランは長方形を呈する。柱穴は小ピットが3個あるのみで、主柱穴は不明である。炉跡も検出できていない。

出土遺物は壺を中心として、僅かに甕が出土している。1 は口唇を拡張したもの、2 はしないものである。3 は口縁を大きく拡張し斜格子文を施す。時期的には本住居跡に伴うものではないと考えられる。4 は甕で口縁が強く屈曲するものである。口唇に1条凹線文が巡る。5～7 は甕か壺の底部である。6 は高台状を呈しているものの、剥落している可能性がある。7 については内面にヘラ削りが顕著で本住居跡に伴うものではないと考えられる。3 と同様に弥生中期の可能性が高い。

K1ST110(K1-18・20 図)

時期；弥生V-3 形状；円形 主軸方向；—

1次規模；4.8m 深さ；0.2m 面積；18㎡、2次規模；4.8m 深さ；0.2m 面積；18㎡

埋土；褐色粘質土主体。僅かに焼土、炭化物を含む

ピット；数14 1次主柱穴；P1・3・6・7 2次主柱穴；P2・4・5・7

床面；2面 貼床；無し 焼失；無し

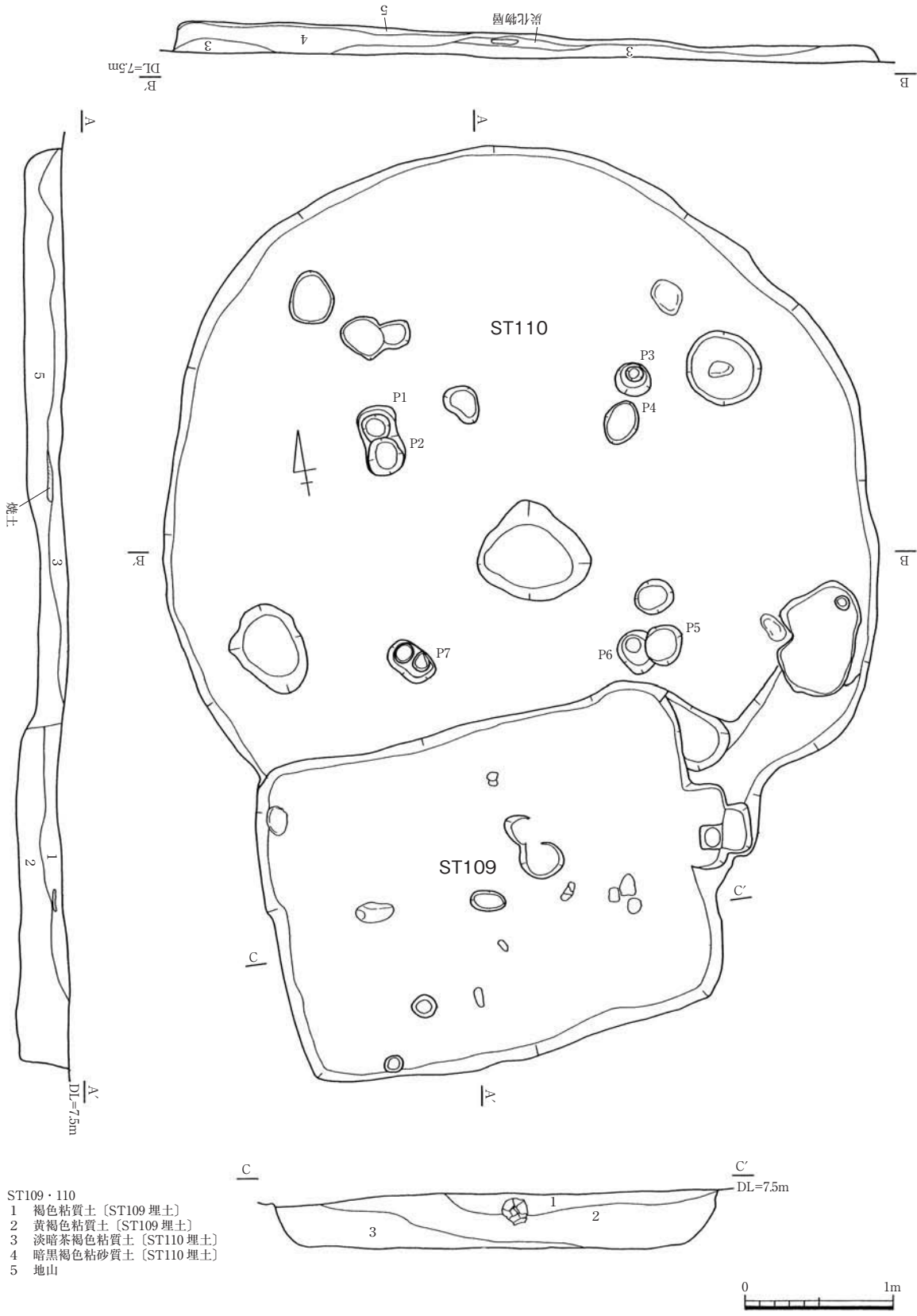
中央ピット；形状 楕円形 規模 75×65cm 深さ 26cm 埋土 暗黒褐色粘砂土、炭化物少量

壁溝；—

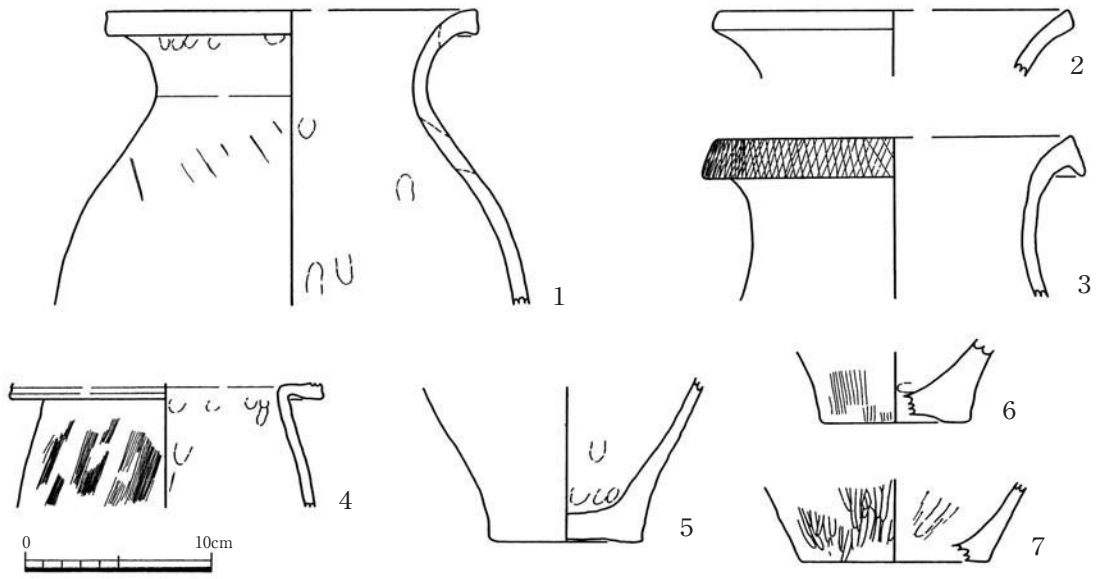
出土遺物；弥生土器 16、口縁 21、底部 11、胴部破片 337、高杯片 5、礫 3

所見；調査区中央部に位置し、ST109 と切り合い関係にある。平面形プランは円形を呈する。柱穴のみの建て替えか。壁溝は確認できなかった。

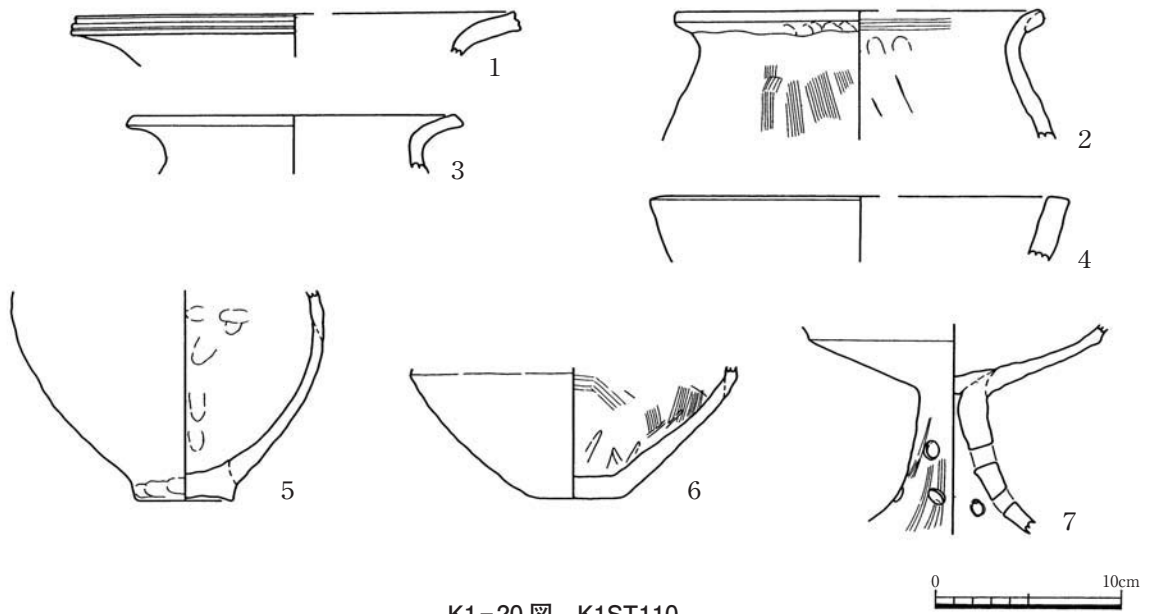
出土遺物は甕を主体とする。1 は大きく開く壺で口唇に凹線文が巡る。2・3 は甕で2は貼付口縁のものである。4 は大型の鉢である。5・6 は壺の底部と考えられる。6 は体部中央で屈曲する。7 は高杯で碗状の杯を有するものである。



K1-18 図 K1ST109 · 110



K1-19 図 K1ST109



K1-20 図 K1ST110

K1ST111(K1-21 図)

時期：弥生IV-2 形状：長方形 主軸方向：N-75°-E

規模：3.2×2.6m 深さ：0.5m 面積：8.5㎡

埋土：暗褐色シルト質を基本とし、上層にはブロックを多く含む。

ピット：数5 支柱穴数：— 支柱穴：—

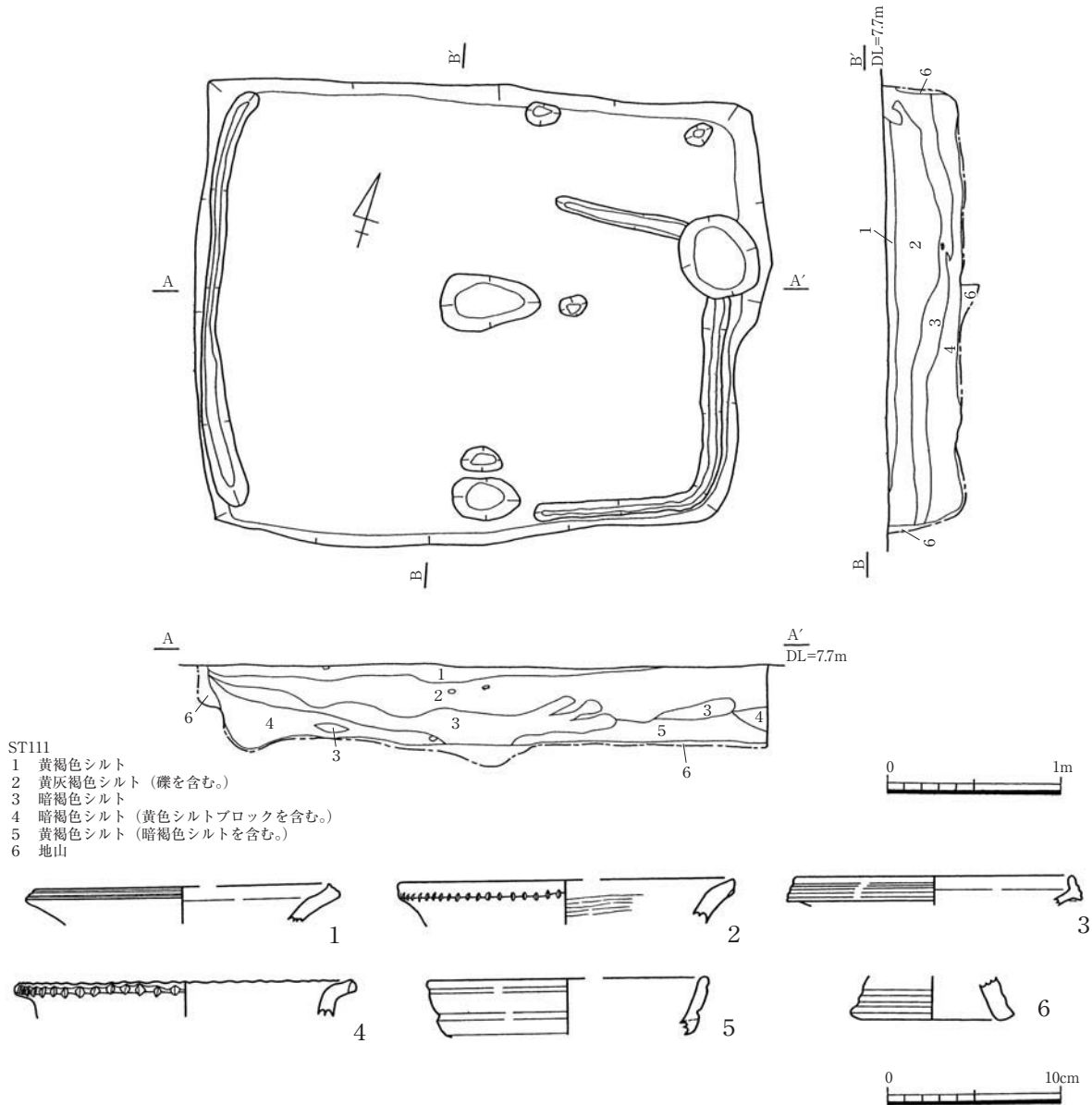
床面：1面 貼床：無し 焼失：無し

中央ピット：形状 楕円形 規模 60×32cm 深さ 14cm 埋土 暗褐色シルト質

壁溝：数2 壁溝1：幅 20cm 深さ 8cm、壁溝2：幅 15cm 深さ 8cm

出土遺物：弥生土器7、口縁13、底部4、胴部破片479

所見：調査区中央部やや東寄りに位置する。SD114と極めて隣接するものの、切り合い関係にはなく、主軸方向はほぼ同一である。SD113を切って構築される。平面形プランは長方形を呈し、深



K1-21 図 K1ST111

さ 50cm 余りを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉跡は楕円形を呈する。柱穴は 5 基検出しているものの、支柱穴と判断できるものは存在しない。壁溝は西側及び東側部に部分的に存在するものの、全周しない。東側壁際には住居内土坑と考えられるものを検出している。

出土遺物は少なく、細片が数点出土したに留まる。1 は口唇に凹線文が巡り、口縁は開くものである。2 は口唇下端にキザミを施したもの、3 は口縁が受け口状に屈曲して口唇を拡張し、凹線文を巡らせる。4 は弥生I様式に含まれるものと考えられ、本住居跡に伴うものではない。5 は高杯で凹線状の沈線が巡る。6 は器台と考えられる。幅広の凹線状の沈線が巡る。

K1ST112(K1-22 図)

時期；弥生V-3 形状；円形 主軸方向；—

規模；5.6m 深さ；0.3m 面積；25m²

埋土；褐色粘質土を主体として、下層には炭化物を含む。

ピット；数 15 支柱穴数；4 支柱穴；P1～4

床面；1面 貼床；無し 焼失；有り

中央ピット；形状 楕円形 規模 125×100cm 深さ 35cm 埋土 焼土、炭化物を多量に含む。

壁溝；—

出土遺物；弥生土器 8、口縁 6、底部 4、胴部破片 118

所見；調査区北東に位置する。平面形プランは円形を呈する。南側をSD106に切られ、南側は攪乱で壊される。中央部では楕円形の炉跡を検出している。支柱穴は 4 本と考えられ、深さ 35cm、径 25cm のもので、P4 は径 50cm 程であるが深さは 15cm と皿状に浅く支柱穴となるかどうかは不明である。中央部床面には炭化物層が広がる。

遺物は少ない。1 は長頸の壺と考えられる。2 も壺の底部と考えられ、上げ底状である。内外面にハケ調整を施す。3 はタタキ目を有する甕である。

K1ST113(K1-23 図)

時期；弥生 形状；円形 主軸方向；—

規模；3.6m 深さ；0.05m 面積；10.2m²

埋土；暗褐色粘質土を主体として、やや層位が乱れている。炭化物の混入は少ない。

ピット；数 12 支柱穴数；2 支柱穴；P1・2

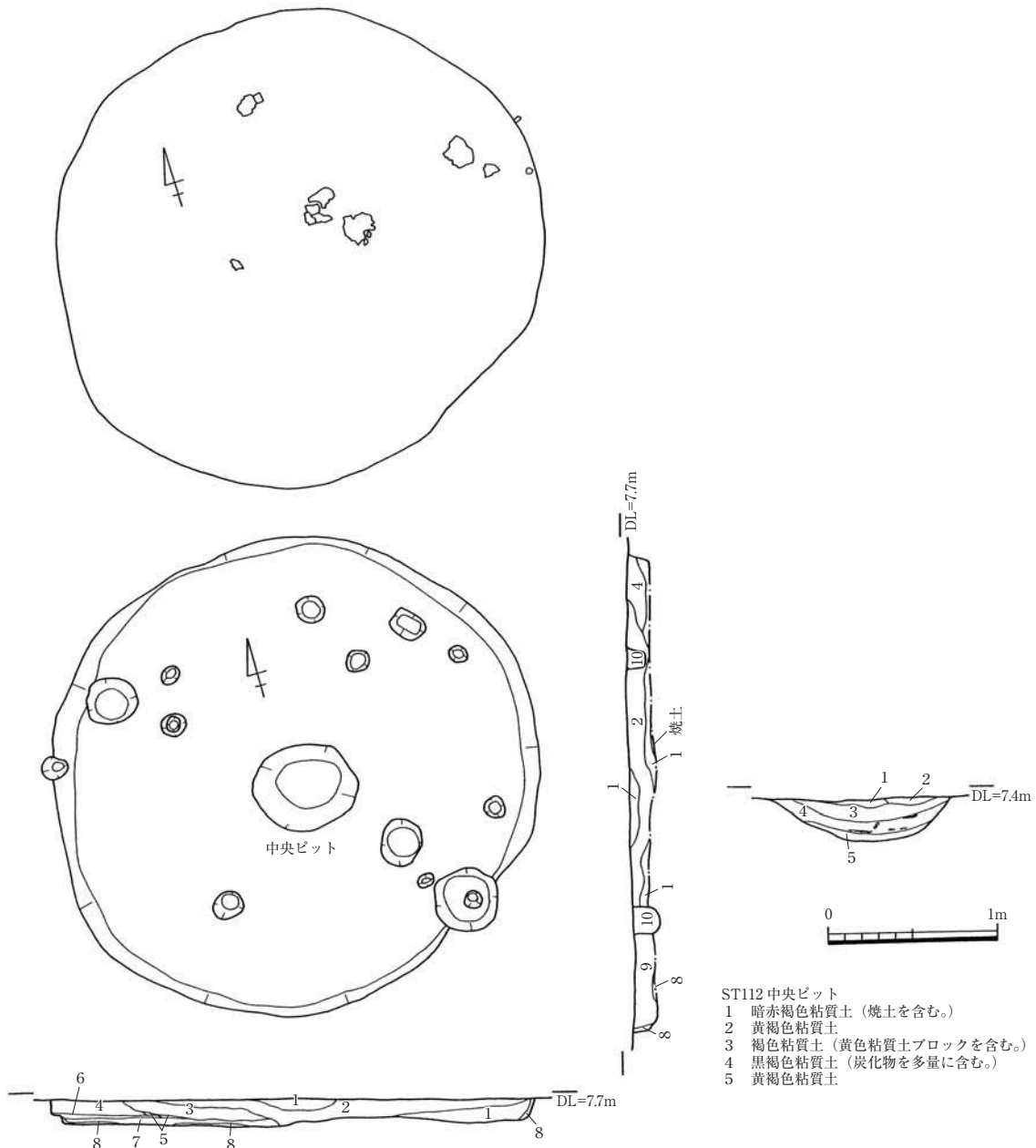
床面；1面 貼床；無し 焼失；無し

中央ピット；形状 楕円形 規模 65×30cm 深さ 26cm 埋土 黒褐色粘質土を基本として、炭化物が混じる。

壁溝；—

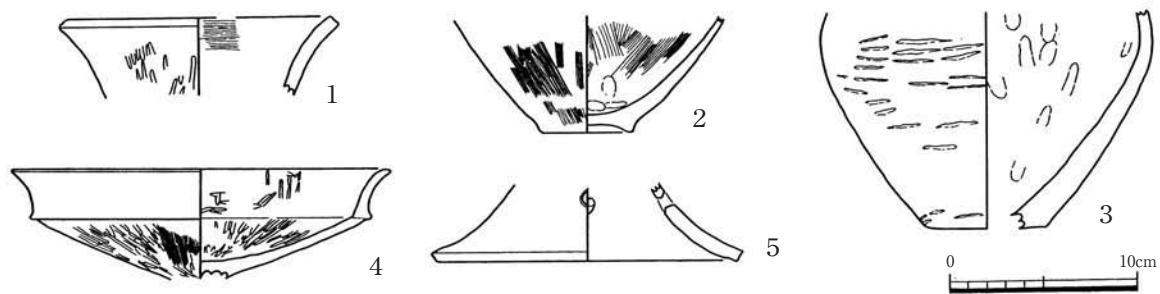
出土遺物；—

所見；調査区北東隅に位置し、平面形プランは円形で径 3.6m の小型の住居跡である。遺存状態は悪く、壁高は 5cm 程しか残存しない。炉跡は楕円形を呈する。柱穴は 12 基検出しているものの、



ST112 中央ピット
 1 暗赤褐色粘質土 (焼土を含む。)
 2 黄褐色粘質土
 3 褐色粘質土 (黄色粘質土ブロックを含む。)
 4 黒褐色粘質土 (炭化物を多量に含む。)
 5 黄褐色粘質土

ST112
 1 暗褐色粘質土
 2 褐色粘質土
 3 暗褐色粘質土 (黄褐色粘質土ブロックを含む。)
 4 褐色粘質土 (黄褐色粘質土ブロックを含む。)
 5 暗灰褐色粘質土
 6 黄褐色粘質土 (黒褐色粘質土ブロックを含む。)
 7 黒褐色粘質土
 8 地山
 9 暗褐色粘質土
 10 攪乱



K1-22 図 K1ST112

主柱穴と考えられるものは、P1・2の2本と考えられる。南東部の床面に炭化物がわずかに纏まって出土している。

遺物は出土していない為、明確な時期は不明である。

K1ST114(K1-24～26 図)

時期：弥生V-1 形状：長方形 主軸方向：N-15°-E

規模：2.8×2.0m 深さ：0.3m 面積：5.6㎡

埋土：暗褐色粘質土主体

ピット：数4 主柱穴数：— 主柱穴：—

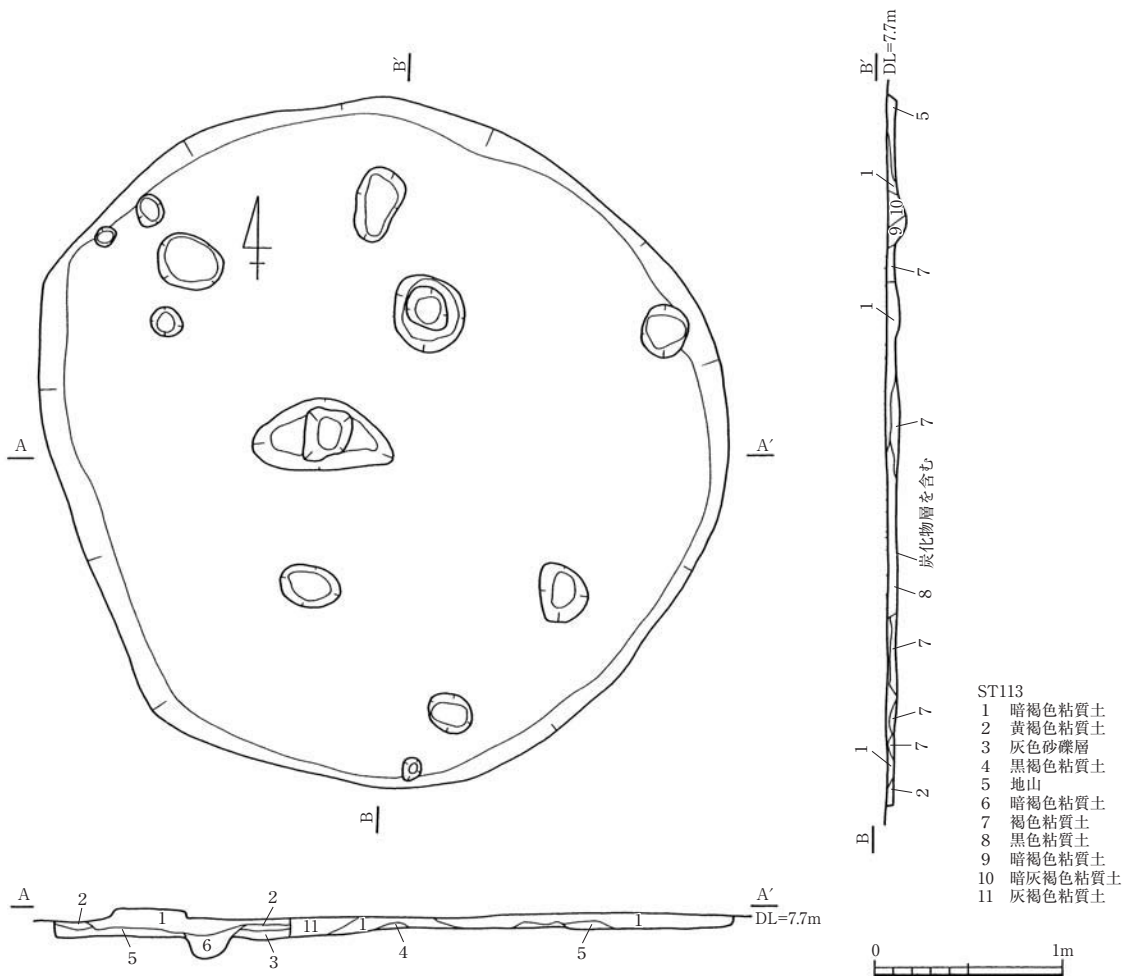
床面：1面 貼床：無し 焼失：無し

中央ピット：形状 円形 規模 30cm 深さ 15cm 埋土 炭化物を含む。

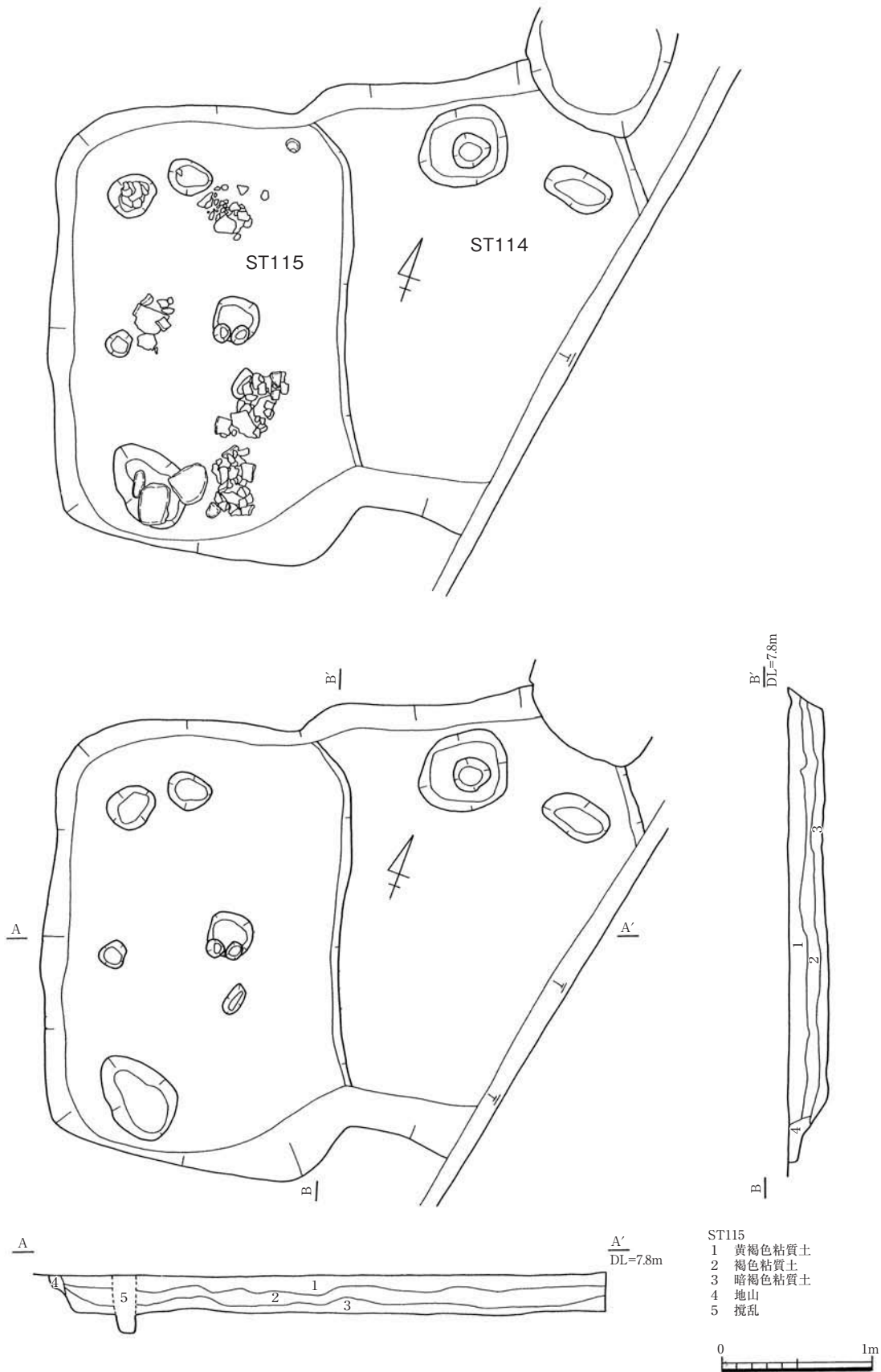
壁溝：—

出土遺物：弥生土器 20、口縁 12、底部 8、胴部破片 317、高杯片 1、叩石 2、砥石 1

所見：調査区の北の東端に位置し、当初一軒の住居跡と考えられたが、調査を進めていく途中で、

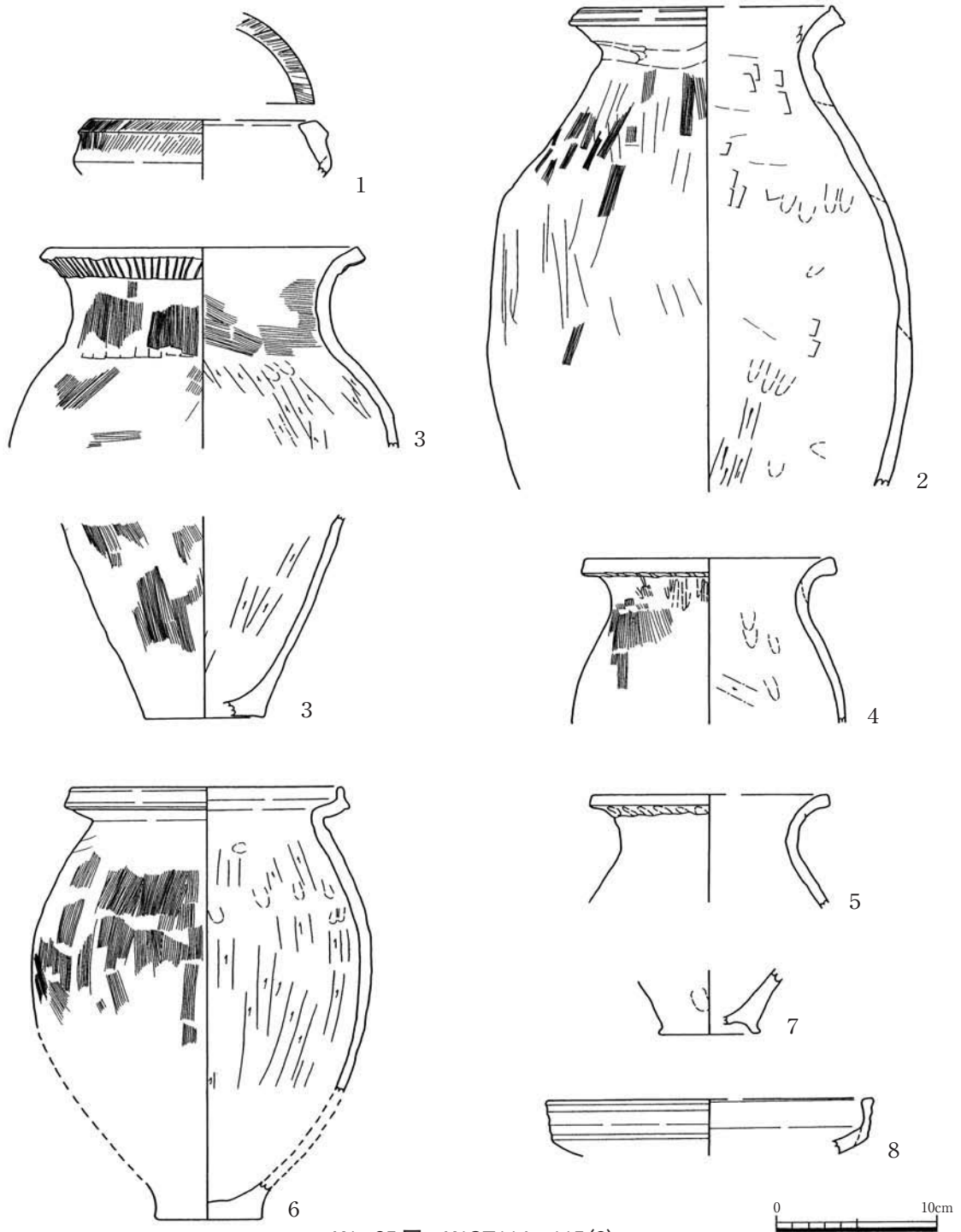


K1-23 図 K1ST113



K1-24 图 K1ST114 · 115(1)

2軒の住居跡の切り合いと判明する。しかしながら、セクションでもST115との切り合い関係は不明であった。床面がST115と10cm程段差を持つ。主軸方向もほぼ同一で極めて近接した時期と考えられる。柱穴は4本検出しているものの、支柱穴は不明である。北西隅に明確な柱穴が認められ、本来の支柱穴の可能性が考えられるが、上面に土器が多く入っており、柱穴としての機能があったかどうかは不明である。炉跡は中央部に炭化物の集中が認められ、浅い掘り込みが認められた。遺



K1-25 図 K1ST114・115(2)

物は比較的纏まりを見せて出土しており、特に南西部に集中する傾向が読み取れ、南西コーナーには大型の台石が2点出土している。

出土遺物は1が壺と考えられる。頸部は短く口縁、口唇に櫛描文を施したものである。2～6は甕で口唇を拡張しないで口頸部が外反するものである。その中で3～5は口縁外面に粘土帯を貼付し、強く押さえるものである。6は頸部が強く屈曲するもので、口唇部は直立し、凹線文を巡らせるものである。7は鉢の底部である。8は高杯の口縁部で口縁は直立気味に立ち上がり外面に凹線文を巡らせる。1・2は叩き石である。

K1ST115(K1-24～26 図)

時期：弥生V-1 形状：長方形 主軸方向：N-20°-E

規模：2.5×1.9m 深さ：0.3m 面積：4.8㎡

埋土：暗褐色粘質土主体。炭化物等を殆ど含まない。

ピット：数1 支柱穴数：— 支柱穴：—

床面：1面 貼床：無し 焼失：無し

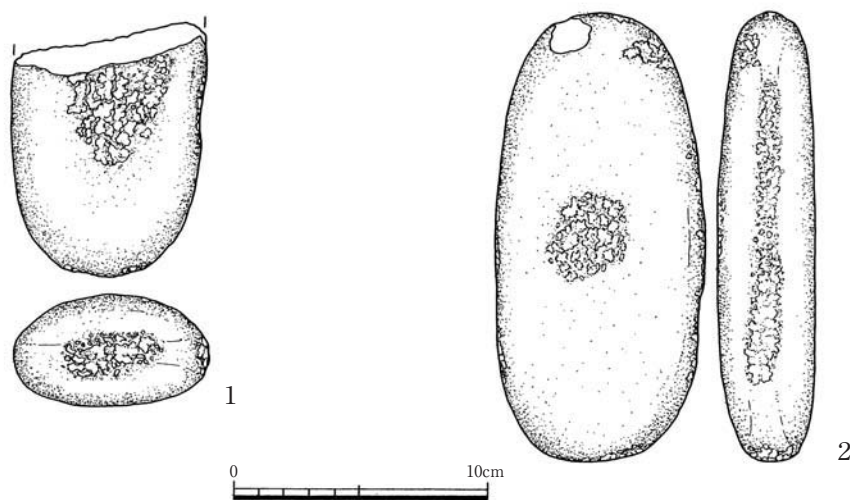
中央ピット：—

壁溝：—

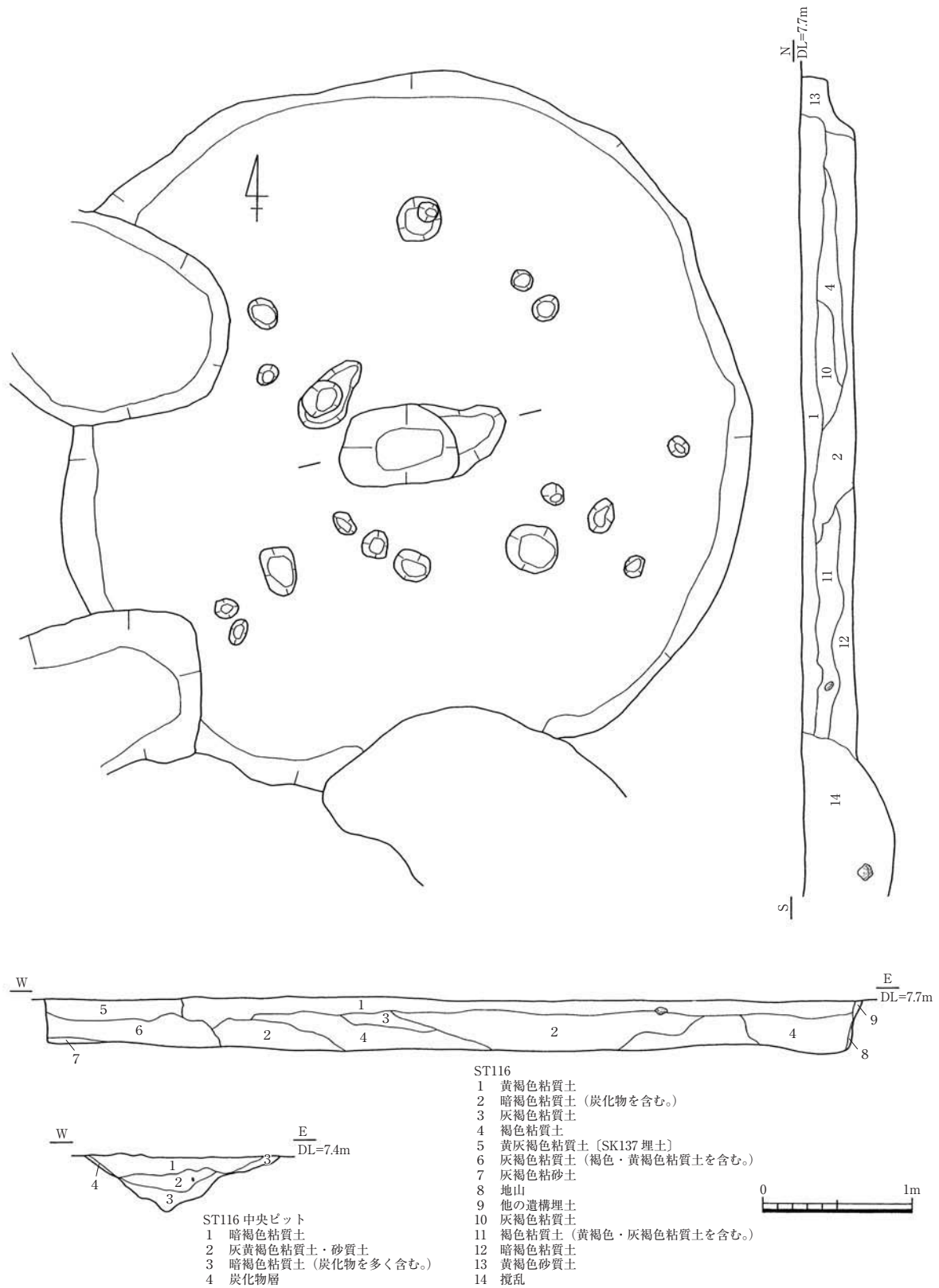
出土遺物：弥生土器2

所見：調査区の北の東端に位置し、当初一軒の住居跡と考えられたが、調査を進めていく途中で、2軒の住居跡の切り合いと判明する。しかしながら、セクションでもST114との切り合い関係は不明であった。床面がST114と10cm程段差を持つ。主軸方向もほぼ同一で極めて近接した時期と考えられる。住居跡の東側部分は僅かに調査区外へと広がる。炉跡、柱穴、周溝等の付帯施設は検出できなかった。

遺物は細片が出土したに留まり、明確な時期は判然としないが、ST114と时期的な隔たりは極めて少なく、弥生後期初頭に含まれるものと考えられる。



K1-26 図 K1ST114・115(3)



K1-27 図 K1ST116(1)

K1ST116(K1-27・28 図)

時期：弥生V-3 形状：円形 主軸方向：—

規模：4.9m 深さ：0.3m 面積：19㎡

埋土：暗褐色粘質土を基本として炭化物を含む。

ピット：数— 主柱穴数：— 主柱穴：—

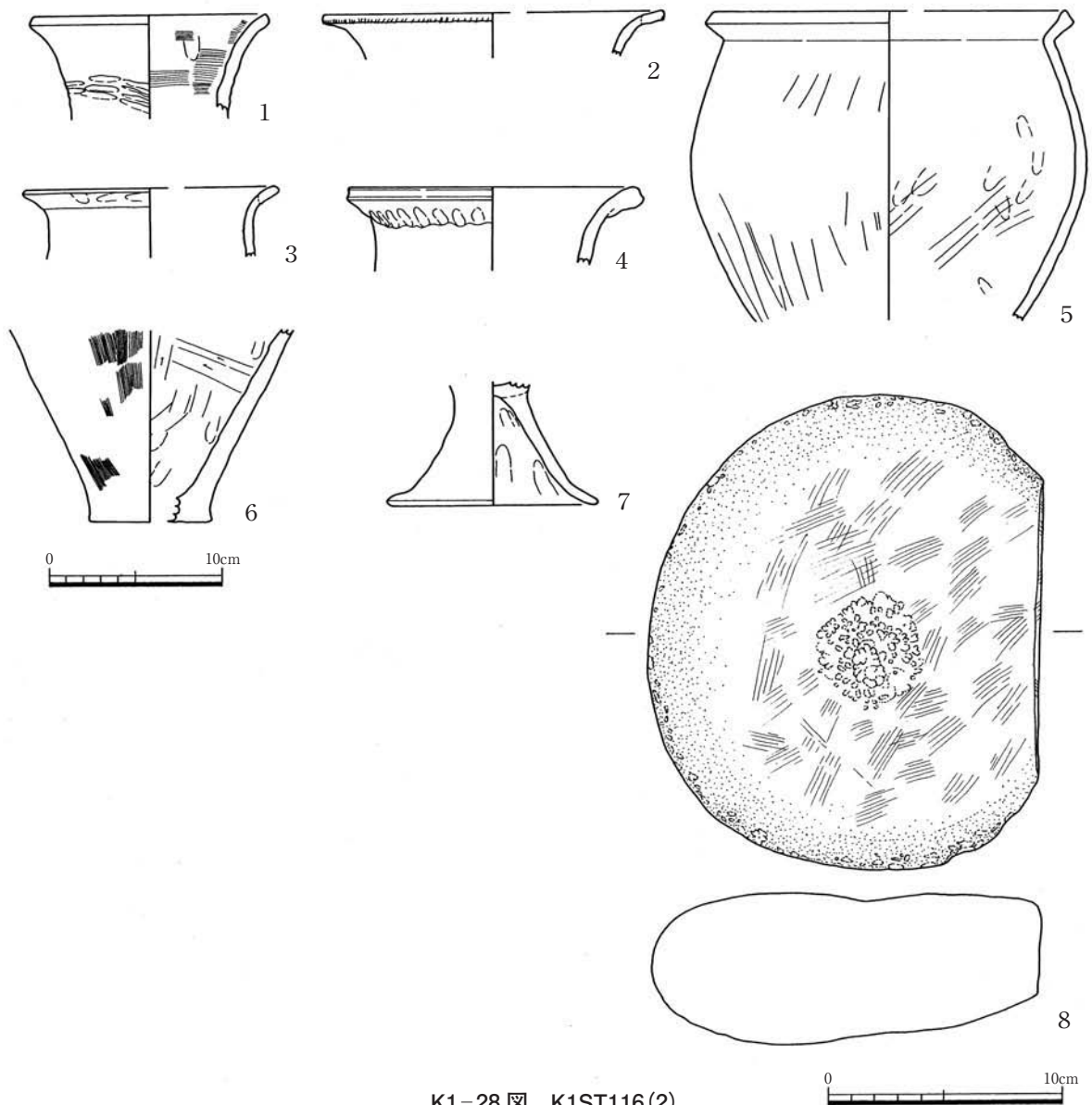
床面：1面 貼床：無し 焼失：有り

中央ピット：形状 楕円形 規模 105×55cm 深さ 40cm 埋土 底面に炭化物層

壁溝：—

出土遺物：弥生土器 14、口縁 22、底部 9、胴部破片 153、台石 1

所見：調査区のやや北側の東に位置する。土坑及び攪乱にも部分的に破壊される。炉跡は中央部で検出しており、底面に炭化物層が堆積する。主柱穴は4本と考えられ、床面から40cm程の深さの



K1-28 図 K1ST116(2)

ものである。住居床面からは部分的に炭化物、焼土跡を検出している。遺物は少なく散在する。

出土土器は1～4が壺と考えられる。1はやや頸部の長いもの、2・4は口縁が開き、僅かに粘土帯を貼付する。2は口唇部下端にキザミを施す。3も粘土帯を貼付し強く押さえる。5は甕で口縁が強く屈曲し、口唇部は弱い凹線状となる。搬入品である。体部外面は強くヘラ削りを施す。7は高杯の脚部で裾端部は丸くおさめる。

石器は8が台石である。炉跡内から出土している。やや扁平で大型の円礫を素材とする。表面中央部に敲打痕、裏面には擦痕が認められ砥石として使われていた可能性がある。一側面は切断したような面となり丁寧な研磨を施す。他の縁辺部は敲打痕が認められるが、調整加工の可能性がある。

K1ST117(K1-29 図)

時期；弥生V-1 形状；円形 主軸方向；—

規模；4.0m 深さ；0.07m 面積；12.6㎡

埋土；暗褐色粘質土を基本とする。

ピット；数 14 主柱穴数；— 主柱穴；—

床面；1面 貼床；無し 焼失；無し

中央ピット；形状 楕円形 規模 60×40cm 深さ 30cm 埋土 暗褐色粘質土

壁溝；—

出土遺物；弥生土器 5、口縁 4、底部 1、胴部破片 48、高杯片 1

所見；調査区の東側部中央に位置し、平面形プランは円形を呈する。上面は削平されており、壁の残存は10cm以下である。SD113を切って構築されており、またSK132には切られる。炉跡を中央部で検出している。柱穴は14基検出しているものの、本住居跡に伴わないものも含まれている可能性がある。遺物は少なく、散在して出土している。

出土遺物は1が口縁の開いた壺、2は僅かに口縁が外反し、共に口唇は拡張しない。

K1ST118(K1-30・32 図)

時期；弥生IV-2～V-1 形状；円形 主軸方向；—

1次規模；6.5m 深さ；0.35m 面積；33㎡

2次規模；4.8m 深さ；0.35m 面積；18㎡

埋土；暗褐色粘質土主体

ピット；数 9 主柱穴数；— 主柱穴；—

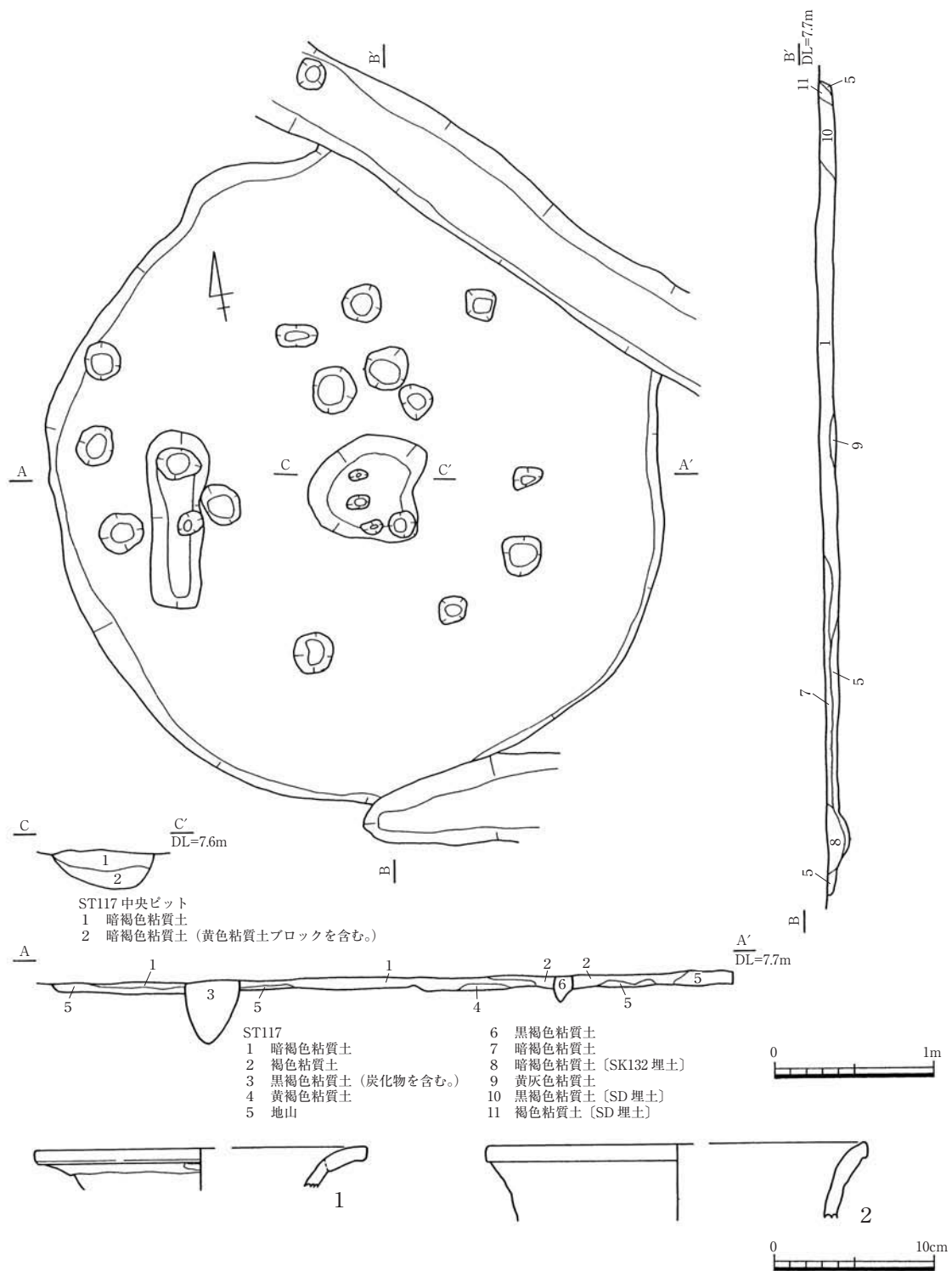
床面；2面 貼床；無し 焼失；有り

中央ピット；形状 楕円形 1次規模 80×50cm 深さ 36cm 2次規模 80×70cm 深さ 46cm

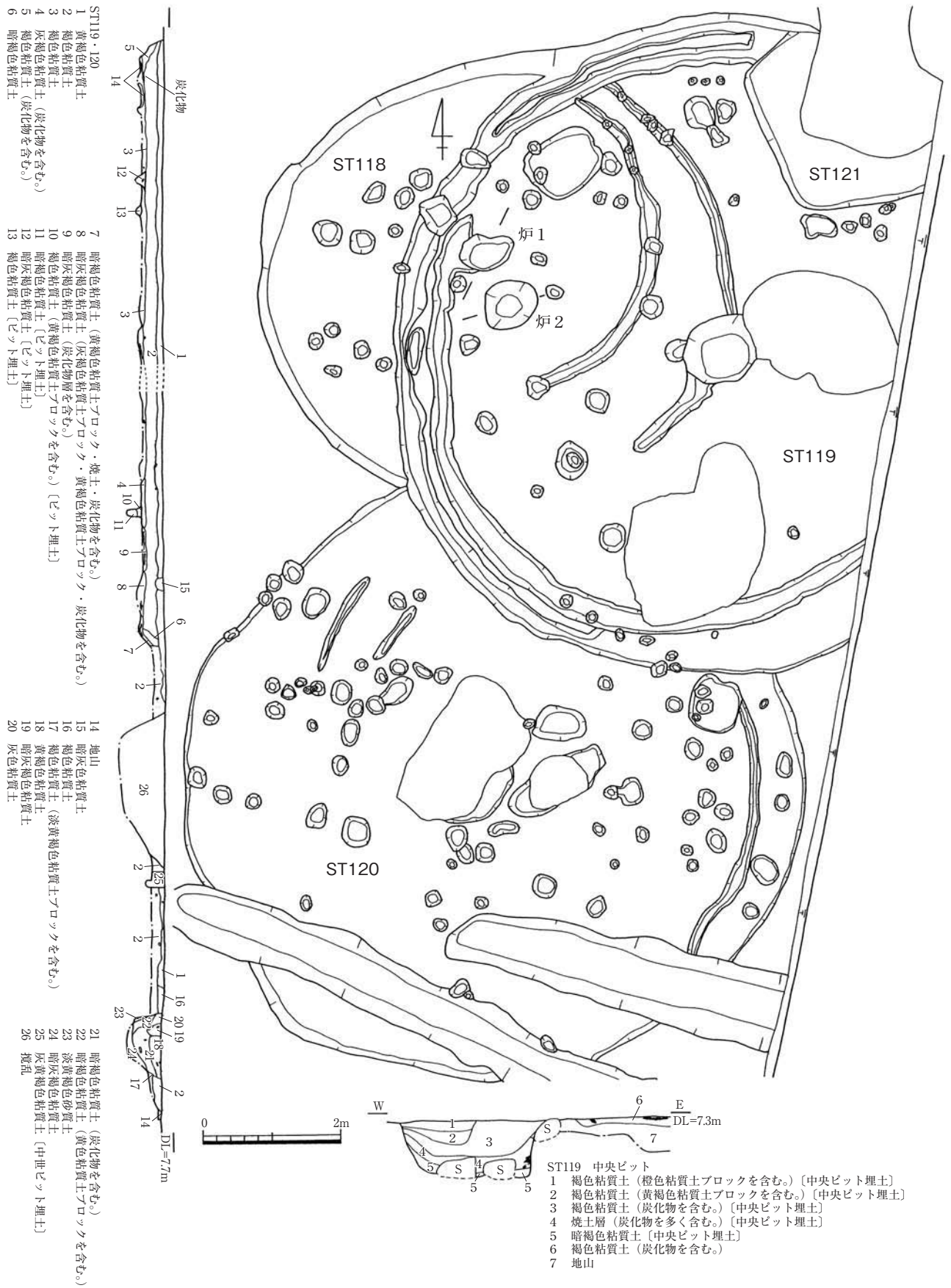
埋土 2基共に上層は褐色粘質土、下層は暗褐色土粘質土で炭化物を多量に含む。炉跡2には大礫等が入る。

壁溝；数 2 壁溝 1；幅 25cm 深さ 6cm 壁溝 2；幅 15cm 深さ 5cm

出土遺物；弥生土器 5、口縁 8、胴部破片 70、高杯片 1、砥石 1、叩石 1



K1-29 図 K1ST117



K1-30 図 K1ST118 ~ 121 (1)

所見；調査区東中央部に位置し、ST119の大形住居跡に切られる。当初ST119の一部分と考えられていたものの、調査を進めていく段階でST119とは別の住居跡であることが判明する。床面まで調査を行った段階で壁溝が2条認められ、拡張か更に2軒の住居跡の切り合い関係の可能性が考えられる。内側の壁溝では径4.8m、外側の壁溝では径6.5mの円形プランを呈する。炉跡も2基検出されており、炉跡1が内側のものに、炉跡2が外側の壁溝に伴うものと考えられる。柱穴は大小合わせて30基程検出しているものの、ST119に伴う可能性のあるもの、また本住居跡に直接伴わない柱穴の存在もあり、主柱穴の特定は困難である。遺物は少なく、炉跡周辺と炉跡2の中で礫数点が出土している。炉跡内出土遺物からすると炉跡1が旧、炉跡2が新になるものと思われる。炉跡1は中期末、炉跡2は後期初頭と考えられる。

出土土器は4の高杯が炉跡1から、1・3は炉跡2からの出土である。2は埋土からの出土で混入の可能性はある。

石器は少なく、5の砥石、6の凹石1点が炉跡2から出土している。5の砥石は表裏面共に幅広で深い溝が縦方向に走り、溝以外の面にも研磨痕が認められる。一側辺を除いて折損する。6の凹石は表面に2ヶ所、裏面に1ヶ所の敲打痕が認められ、側縁、下端部に大きな剥離痕が残り、また細かな敲打痕が認められる。

K1ST119(K1-30・31・33～36 図)

時期；弥生V-1 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；9.5m **深さ**；0.3m **面積**；71㎡

埋土；褐色粘質土を主体とし、下層の暗褐色粘質土には炭化物を多く含む。

ピット；数7 **主柱穴数**；2以上 **主柱穴**；P1・2

床面；1面 **貼床**；無し **焼失**；無し

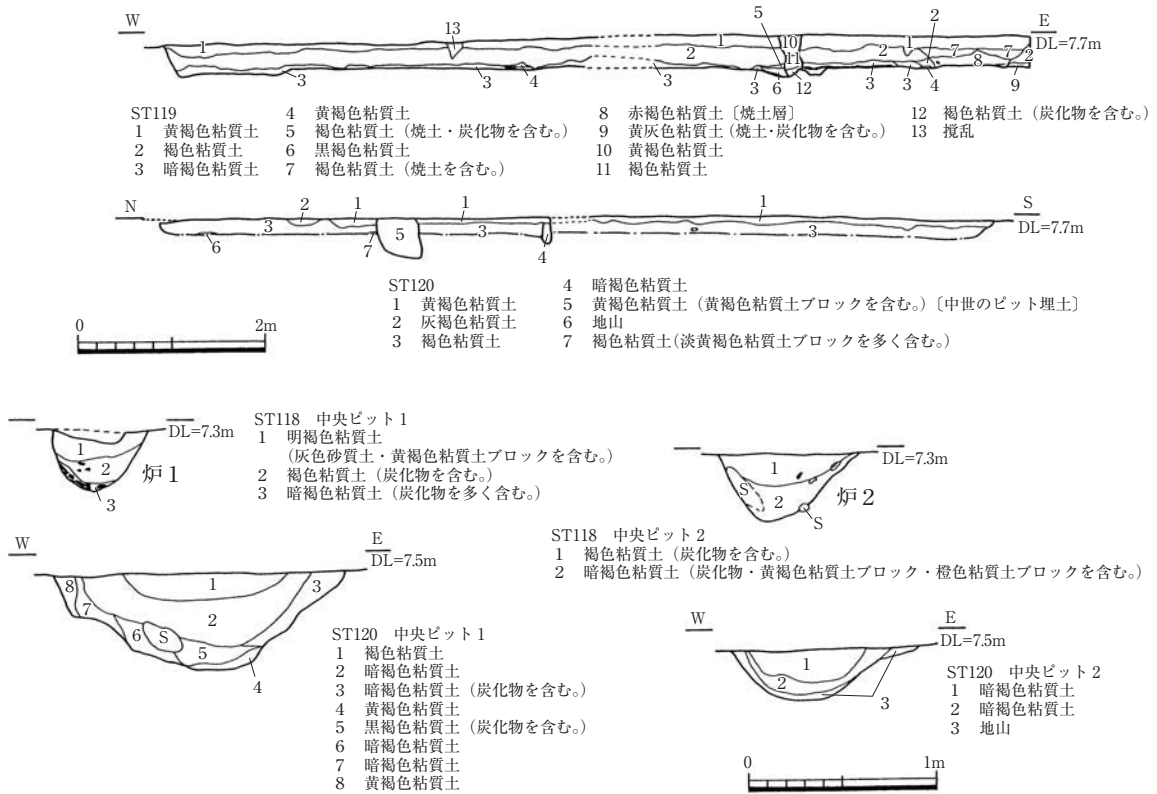
中央ピット；**形状** 円形 **規模** 95cm **深さ** 54 cm **埋土** 褐色粘質土を主体とし、下層には焼土層が認められる。

壁溝；数2 **壁溝1**；幅30cm **深さ** 8cm、**壁溝2**；幅40cm **深さ** 8cm

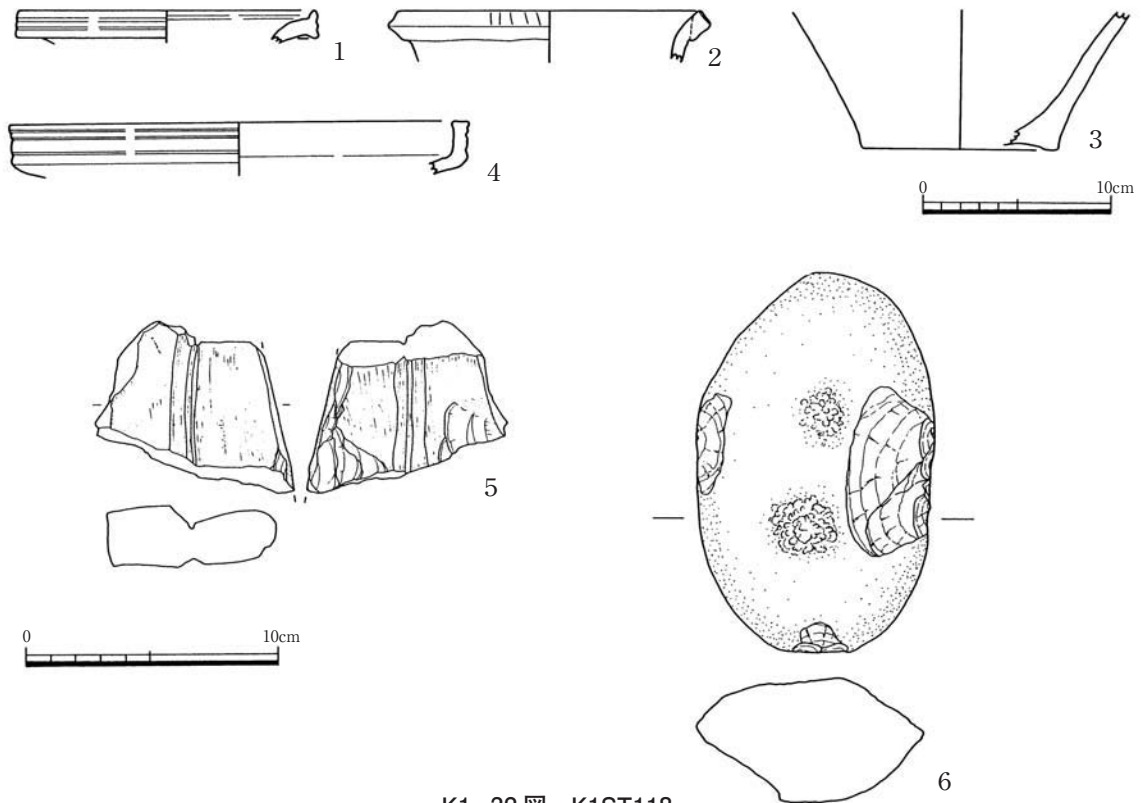
出土遺物；弥生土器35、口縁194、底部59、胴部破片604、高杯片18、石包丁2、叩石2、石錘2、軽石1、サヌカイト剥片4、石斧1、住居内土坑2より投弾4、鉄製品

所見；調査区東端中央部に位置し、部分的に調査区外に広がる。直径9.5mの円形の大型の住居跡である。ST118・120、SD113を切り、ST121に切られる。中央部に径1m弱の大形の炉跡を有する。柱穴は7基程存在しているが、他の住居跡の柱穴の可能性もあり、明確に本住居跡の主柱穴と考えられるものはP1・2のみである。壁溝は壁に沿って同規模のものが2条巡る。遺物は纏まって出土しておらず、石包丁等が散在する様な形で出土している。炉跡からは礫6点が出土している。

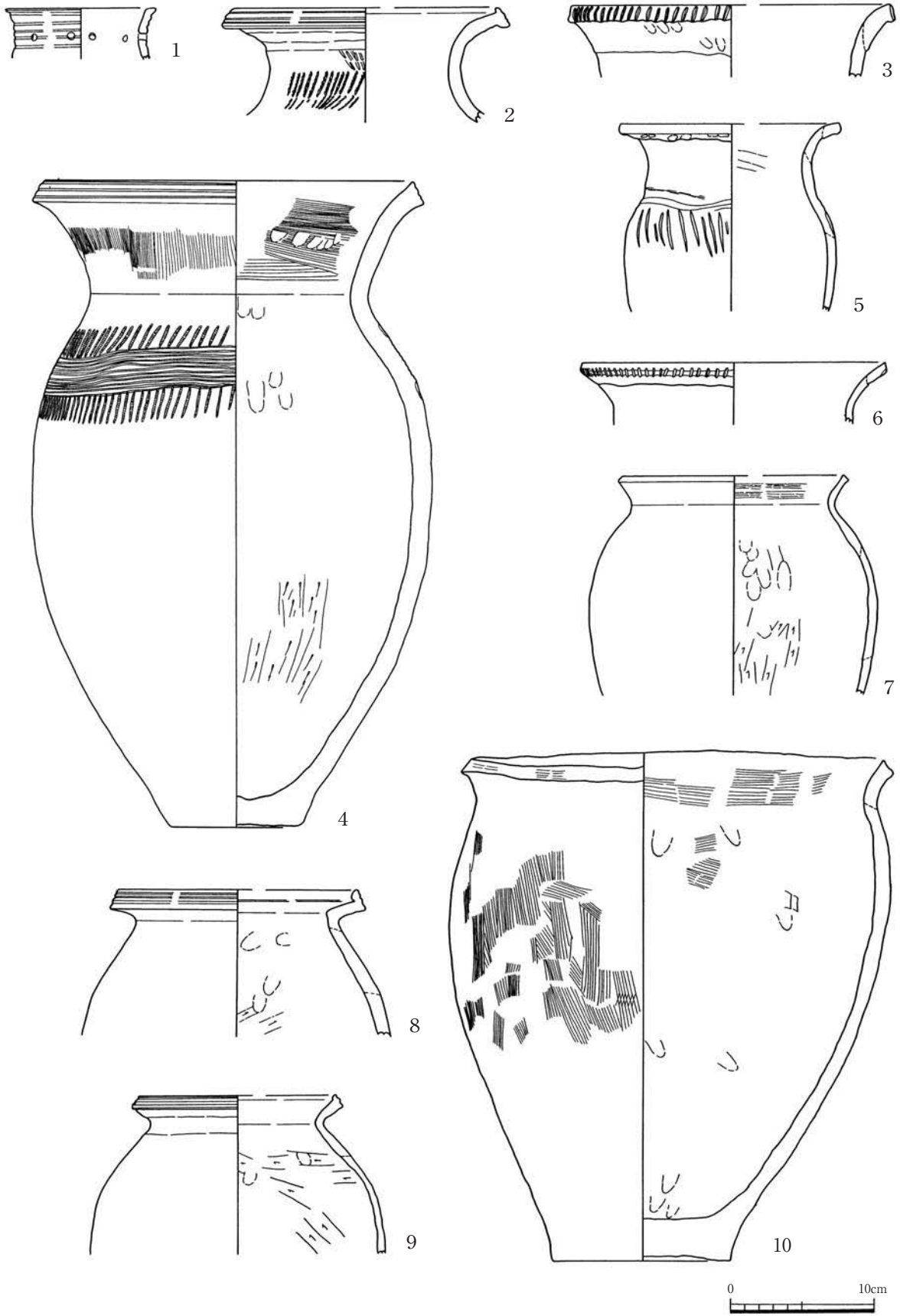
出土土器は33-1～3が壺、33-4～10は甕、34-6・7は高杯である。壺、甕共に口縁部を拡張するものは少なく、凹線文が僅かに残るものが認められる。33-4は器形的には壺であるが、従前から甕とされており、また5についても同様であり、ここでは甕に含めている。4の肩部に認められるキザミはハケ状原体とは違い、縄の原体のように節のような単位が認められるものの、縄文



K1-31 図 K1ST118 ~ 121 (2)



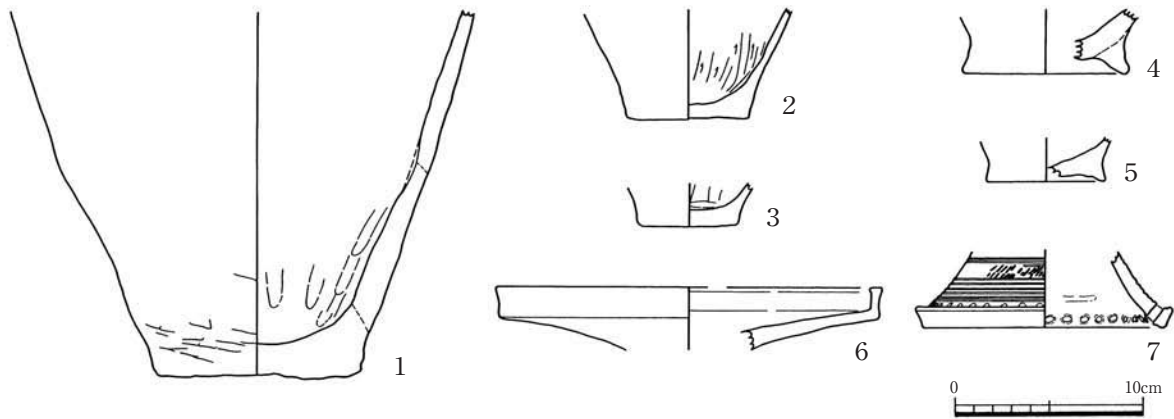
K1-32 図 K1ST118



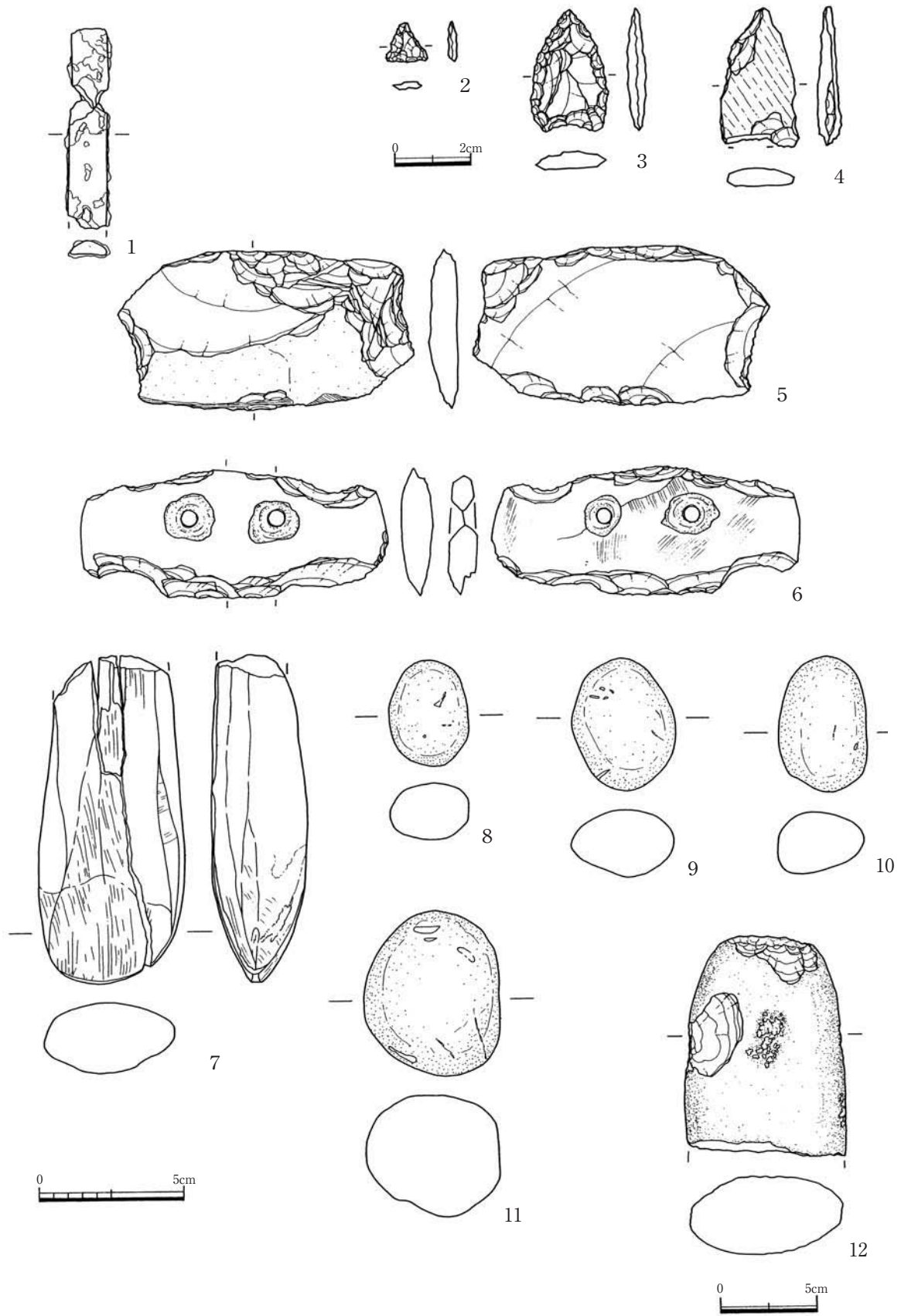
K1-33 ☒ K1ST119(1)

のような撚りは認められず、縄原体と相違するところから貝殻腹縁による連続刺突と考えられる。7の高杯については中期末と考えられ混入の可能性が考えられる。

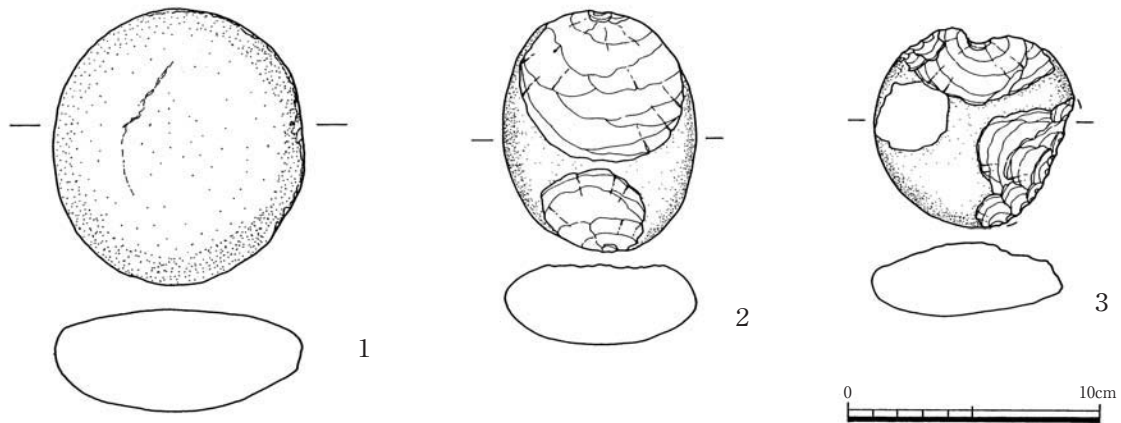
1は鉞である。石器は比較的纏まって出土している。2～4は石鏃で2は小型のもので縄文時代の可能性もある。3は縁辺部だけに細かな調整剥離を施す。4は先端部だけに調整を施したもので、粗い仕上げのものである。5・6は石包丁で、5は打製石包丁で両端部に浅い抉入部を作出し、刃部も敲打調整により作出する。全体の調整は荒く、素材剥離面を大きく残し、また礫皮も残る。6は磨製石包丁の再生品である。刃部を敲打により再生する。7は側面のみ研磨を施さない磨製石斧である。刃部は少し偏りのある両刃で円刃である。刃部は使用により摩滅する。8～11は土坑内より出土した投弾で11はやや大型のものである。12は叩石で先端部を顕著に敲打する。1は側面のみ敲打痕が認められる。2・3は石錘のように両端部及び一部に敲打により浅い抉入部を作出しているが、紐掛けのためか、剥離の際に生じたものか擦り潰れているものの、器種は不明である。



K1-34 図 K1ST119(2)



K1-35 ☒ K1ST119(3)



K1-36 図 K1ST119(4)

K1ST120(K1-30・31・37・38 図)

時期；弥生IV-2～V-1 形状；円形 主軸方向；—

規模；8.9m 深さ；0.15m 面積；62m²

埋土；褐色粘質土主体

ピット；数 60 主柱穴数；6？ 主柱穴；P1～6

床面；1面 貼床；無し 焼失；無し

中央ピット；形状 円形？ 規模 150cm 深さ 50cm 埋土 暗褐色粘質土主体

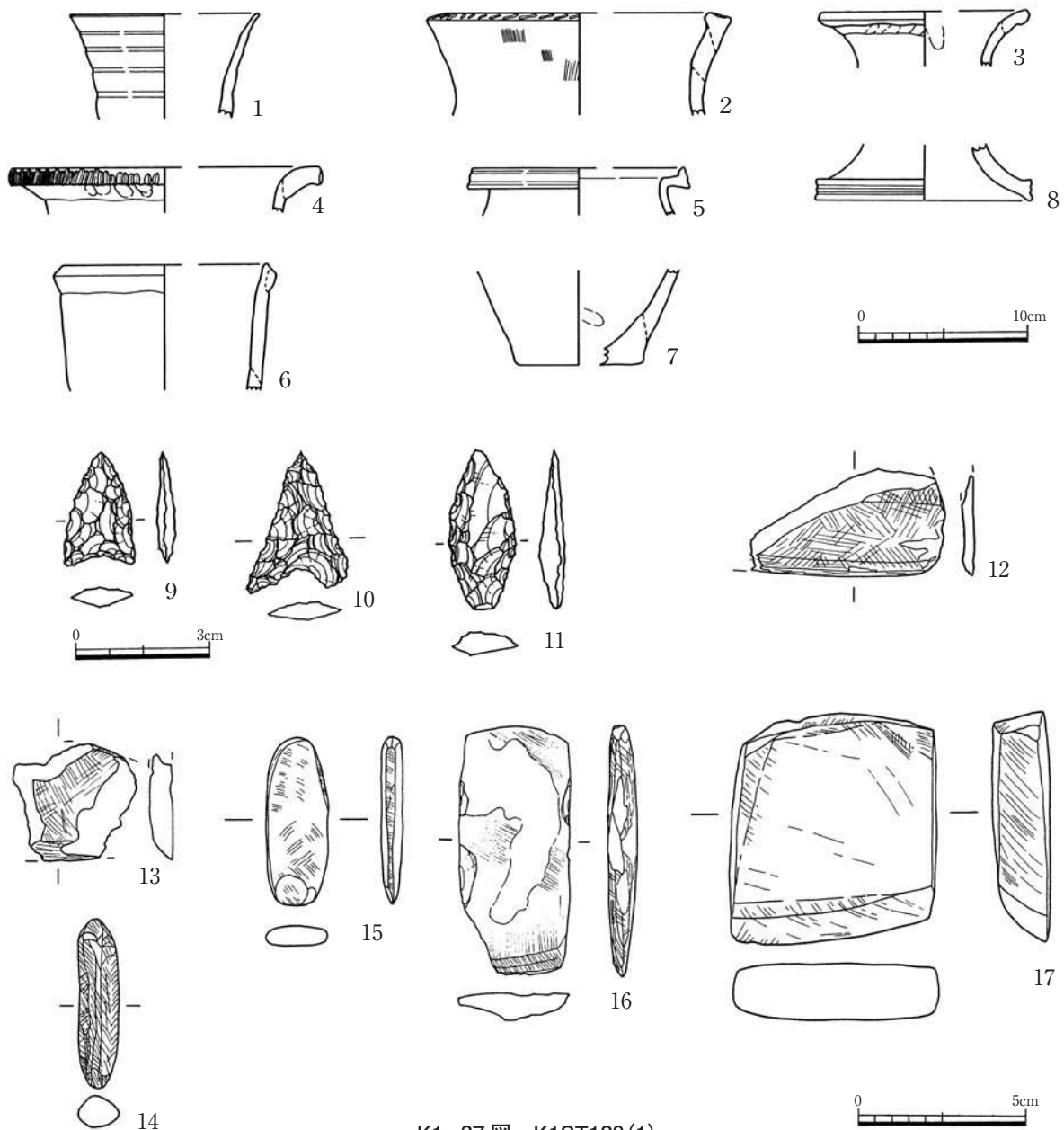
壁溝；数 2 壁溝 1；幅 20cm 深さ 6cm、壁溝 2；幅 15cm 深さ 8cm

出土遺物；弥生土器 16、口縁 48、底部 110、胴部破片 1585、石包丁 2、石斧 5、軽石 2、石鏃 3、穿孔具 1、サヌカイト剥片 1

所見；調査区東端のやや中央部南に位置する。直径約 9m を測る大型住居跡で、北側の ST119 に切られる。また逆に SD116・117 を切る。2 条の SD は本住居跡の床面が検出面となっている。中央部の炉跡は攪乱によって大部分が壊されており、極部分的に残存するのみで、形状等は不明である。柱穴については上層に中世の柱穴が存在しており、またほぼ同時期の柱穴も存在しているところから本住居跡に明確に伴うものを特定できる状況にはない。しかしながら規模、配列からして本住居跡に伴うと考えられる柱穴は P1～8 と考えられる。しかしこれらについても主柱穴になるかどうかは不明である。壁溝については東側部分で明確に検出しているものの、西側部分では部分的に 2 条の壁溝を検出している。遺物は散在する形で出土しており、その中で石斧類が中央部でやや纏まって出土している。

出土土器は 1・2 が壺、3～5 は甕である。1 は直線的に立ち上がる長頸壺、2 は口唇にキザミを施したものである。甕は 3・4 の口縁部に粘土帯を貼付したものと、5 の凹線文のものがある。6 は口唇を肥厚させた直線的に体部が立ち上がるものである。8 は高杯の裾部分で端部は凹線文となる。2・6 は本住居跡に伴わない可能性がある。

石器は 9～11 がサヌカイト製の石鏃である。9・10 は凹基式のものである。12・13 は石包丁の



K1-37 図 K1ST120(1)

欠損品である。共に磨製石包丁である。14は穿孔具で一端部を面取り状に研磨し、尖らず。15～17、38-1・2は磨製石斧でそれぞれの形態が違っており、該期の石斧のセットの可能性はある。3は幅広で扁平な素材に部分的に調整剥離を行っており、打製石斧の可能性はある。4・5は軽石で特に加工痕等は見られない。

K1ST121(K1-30・39 図)

時期：弥生V-2 形状：長方形 主軸方向：N-60°-E

規模：短径 3.0m 深さ：0.4m 面積：—

埋土：褐色粘質土、暗褐色粘質土主体。炭化物を少量含む。

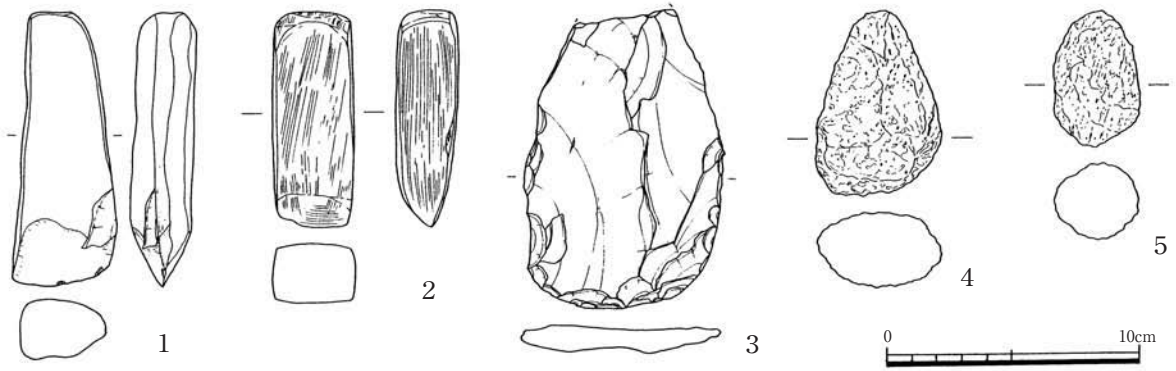
ピット：—

床面：1面 貼床：無し 焼失：無し

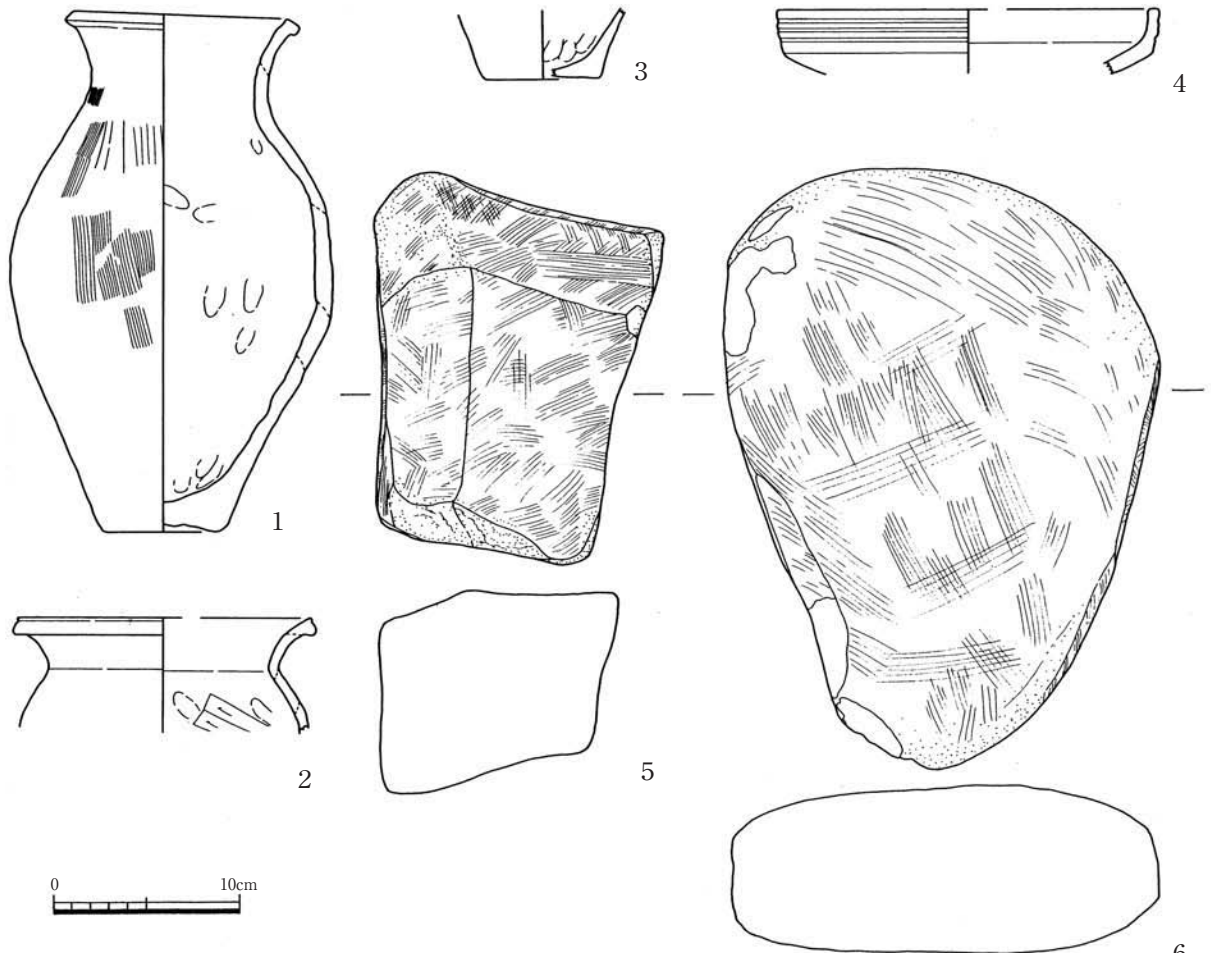
中央ピット：—

壁溝：—

出土遺物：弥生土器 7、口縁 4、底部 1、胴部破片 147、台石 1、砥石 1



K1-38 図 K1ST120(2)



K1-39 図 K1ST121

所見；調査区東端中央部に位置する。大部分は攪乱によって壊されており、部分的に西コーナーの壁を確認した。ST119と切り合い関係にあり、ST119を切る。炉跡、柱穴、壁溝等は確認できていない。遺物は西北隅で纏まって出土している。

出土土器は1の完形品に近い壺は長胴で口唇に僅かに丸味を持つ。胴部に粗いハケ、内面にはヘラ削りを施す。2の甕は口唇を僅かに拡張し、浅い凹線文が1条巡る。4の高杯にも凹線文が認められる。

石器は大型の台石、砥石が出土している。5は表面が石皿状に凹み、他の面も研磨で凹む。6の台石も表裏面共に中央部付近に研磨痕が認められる。

K1ST122(K1-40～42 図)

時期；弥生IV-2 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；5.1×4.3 m **深さ**；0.3 m **面積**；17 m²

埋土；褐色粘質土主体

ピット；数6 **主柱穴数**；4 **主柱穴** P1～4

床面；1面 **貼床**；無し **焼失**；無し

中央ピット；**形状** 円形 **規模** 70cm **深さ** 50cm **埋土** 暗褐色粘質土主体

壁溝；—

出土遺物；弥生土器 23、口縁 43、底部 18、胴部破片 1176、叩石 3、砥石 1、台石 1

所見；調査区東側部分のやや南寄りに位置する。近接してST123が位置する。平面形は楕円形に近い形状を呈する。南東部と北側部は攪乱によって壊されている。炉跡は中央部に位置し、ほぼ円形である。柱穴は6基あまりと、小ピットを幾つか検出しているものの、主柱穴の可能性のあるものはP1～4であるがP2は炉跡に近すぎ、他のものについても配列に規則性を見出し難い。壁溝は検出されていない。

出土土器は1～5は壺で凹線文土器は出土していない。2の口縁部の欠損したもの以外は粘土帯貼付口縁である。頸部が緩やかに外反し、口唇を拡張しないもので占められている。10・11は高杯の脚部で端部が肥厚するものである。

石器は礫器で占められている。1～3は叩石でやや扁平な円礫を素材とし、中央部に浅い敲打痕が残る。また部分的に側面に敲打痕を有するものも存在する。4は砥石で摩滅痕が認められる。

K1ST123(K1-43～46 図)

時期；弥生IV-2 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；5.8m **深さ**；0.32m **面積**；26 m²

埋土；暗褐色粘質土主体

ピット；数20 **主柱穴数**；5 **主柱穴**；P1～5

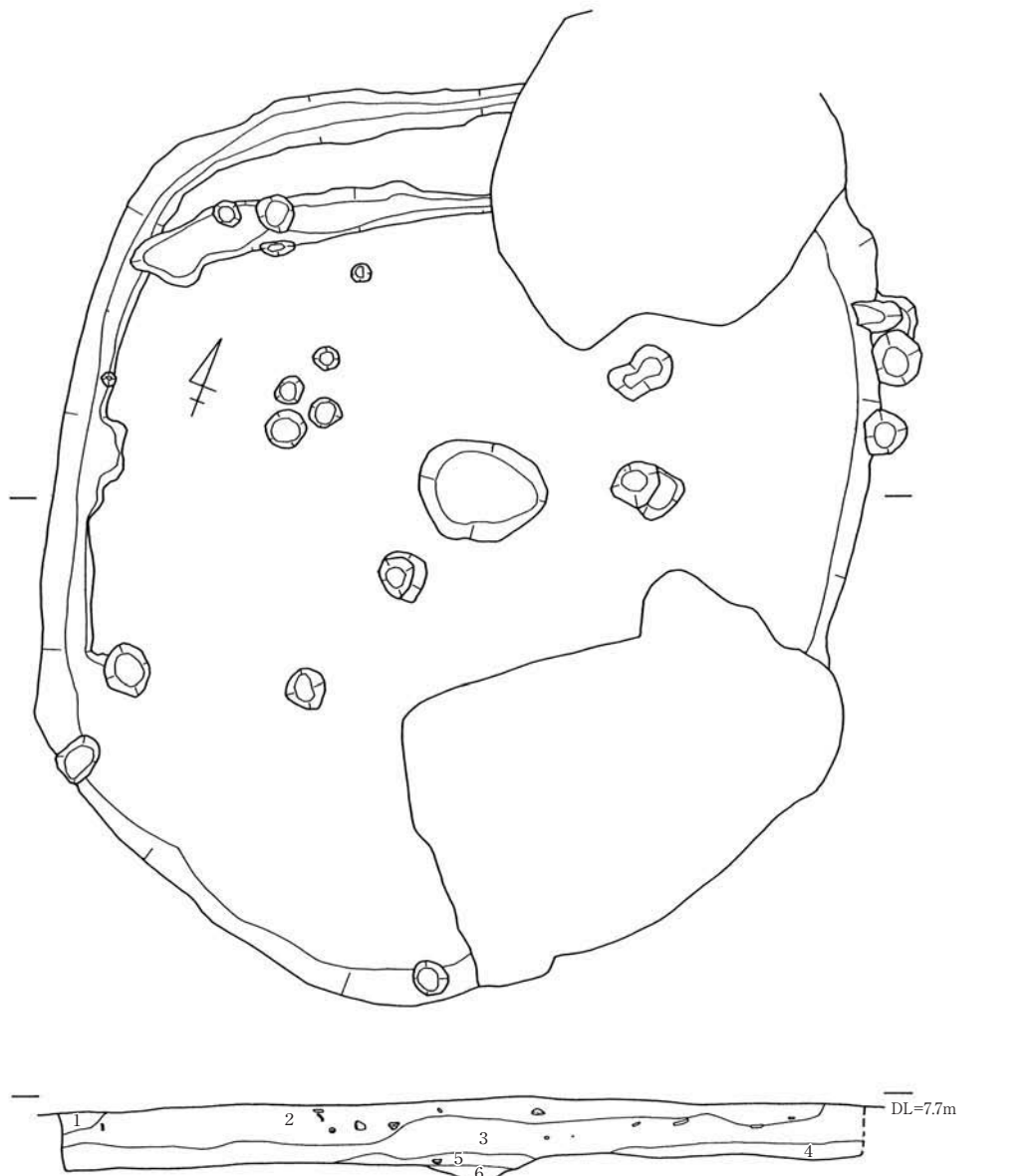
床面；1面 **貼床**；無し **焼失**；無し

中央ピット；**形状** 楕円形 **規模** 90×60cm **深さ** 37cm **埋土** 暗褐色粘質土

壁溝：数1 幅 30cm 深さ 6cm

出土遺物：弥生土器 19、口縁 123、底部 3、胴部破片 2480、高杯片 4、凹石 1、叩石 1、軽石 1、サヌカイト剥片 2、砥石 1

所見：調査区南東部に位置する。ST124・125 と極めて隣接する。平面形は円形を呈し、直径 5.8m を測る。炉跡は中央部に位置し、柱穴は 20 基余り検出しているものの、主柱穴と考えられるものは P1～P5 である。または P3・5 の 2 基である。東壁溝部分の 3 基の柱穴は中世のものと考えられる。壁溝はほぼ全周する。遺物は炉跡周辺で台石が 2 点出土している。土器は散在し余り纏まりは認められない。



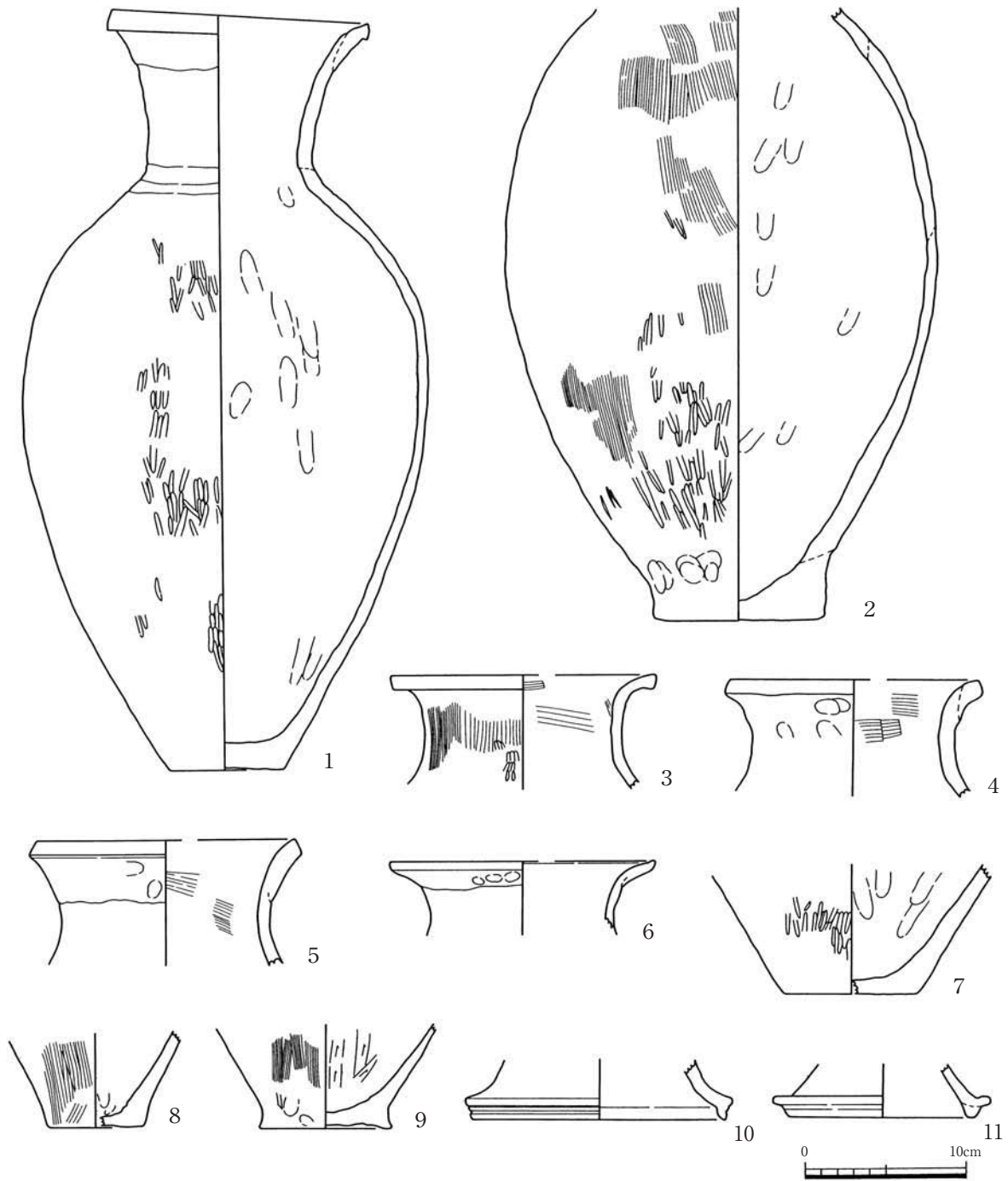
ST122

- 1 黄灰褐色粘質土
- 2 褐色粘質土
- 3 褐色粘質土 (灰黄褐色粘砂土ブロックを含む。)
- 4 暗褐色粘質土 (灰黄褐色粘砂土ブロックを含む。)
- 5 暗褐色粘質土
- 6 暗灰褐色粘質土

K1-40 図 K1ST122(1)



出土土器は1～5は壺である。1～3は口縁部を拡張せず、口唇が面状になるものである。1には口唇下端にキザミ、3には凹線文が巡る。4・5は器肉がやや薄く、4の体部内面にはヘラ削りを強く施す。6は小型の鉢である。7～11は高杯で、9は本住居跡に伴うものではないと考えられる。石器は少なく、1の磨製石斧、2・3の凹石、叩石、4の加工痕のない軽石が出土している。



K1-41 図 K1ST122(2)

K1ST124(K1-43・44・47 図)

時期：弥生V-2 形状：円形 主軸方向：—

規模：5.3m 深さ：0.22m 面積：22 m²

埋土：暗褐色粘質土主体

ピット：数 10 主柱穴数：3 以上 主柱穴：P1～3

床面：1 面 貼床：無し 焼失：有り

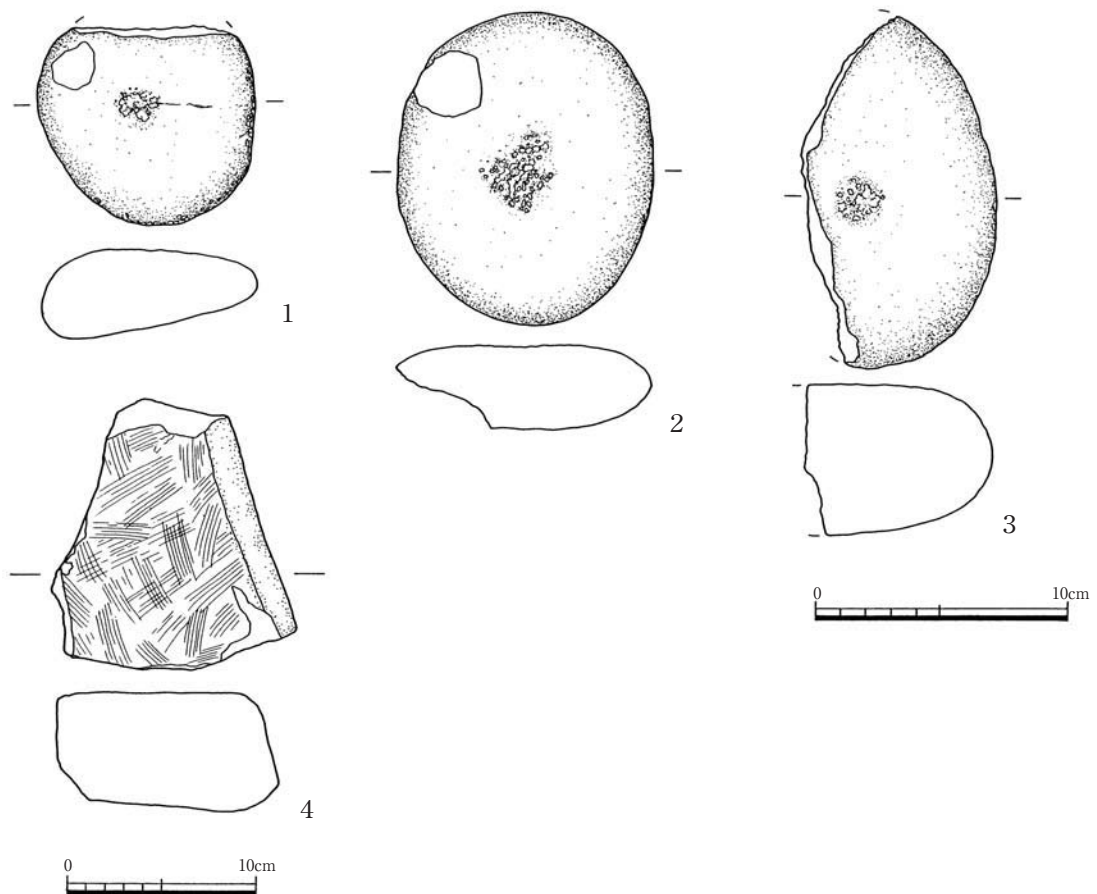
中央ピット：—

壁溝：—

出土遺物：弥生土器 30、口縁 95、底部 21、胴部破片 2311、高杯片 3、石包丁 2

所見：調査区東南部に位置し、ST125 と切り合い関係にあるが、新旧関係は不明である。検出できたのは東側部分のみで、柱穴は検出部分で 10 基程検出しているが ST125 の方にも主柱穴は存在したものと考えられる。検出部分では P1～3 が主柱穴と考えられる。炉跡、壁溝は検出できていない。

出土土器は 1～5 は壺で 4 は本住居跡には伴うものではない。1 は大型の壺で頸部がすぼまり、口唇を拡張しないものである。3 は直口壺である。甕は 6～8 で口縁がやや強く屈曲するもので、



K1-42 図 K1ST122(3)

口唇を拡張しない。9・10は台付鉢である。11～13は高杯で口縁が強く外反する。13は脚部裾で端部は肥厚しない。

石器は磨製石包丁の欠損品が2点出土している。14は全面を研磨し、刃部は片刃で角度をなす。図示しなかったもう一点も同じ形態のもので、小さな欠損品である。

K1ST125(K1-43・44・48 図)

時期；弥生V-3 形状；円形 主軸方向；—

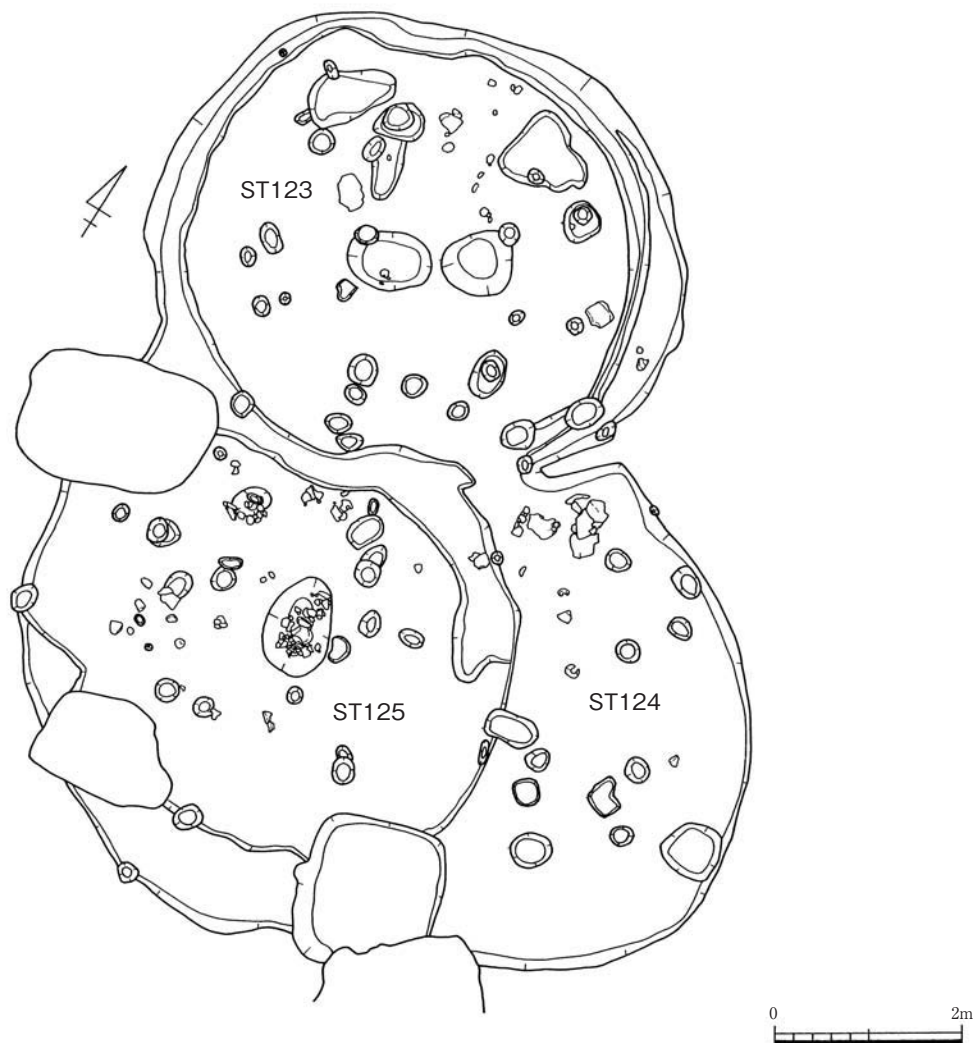
規模；5.2m 深さ；0.16m 面積；21 m²

埋土；暗褐色粘質土主体

ピット；数 16 支柱穴数；— 支柱穴；—

床面；1面 貼床；無し 焼失；無し

中央ピット；形状 楕円形 規模 130×90cm 深さ 36cm

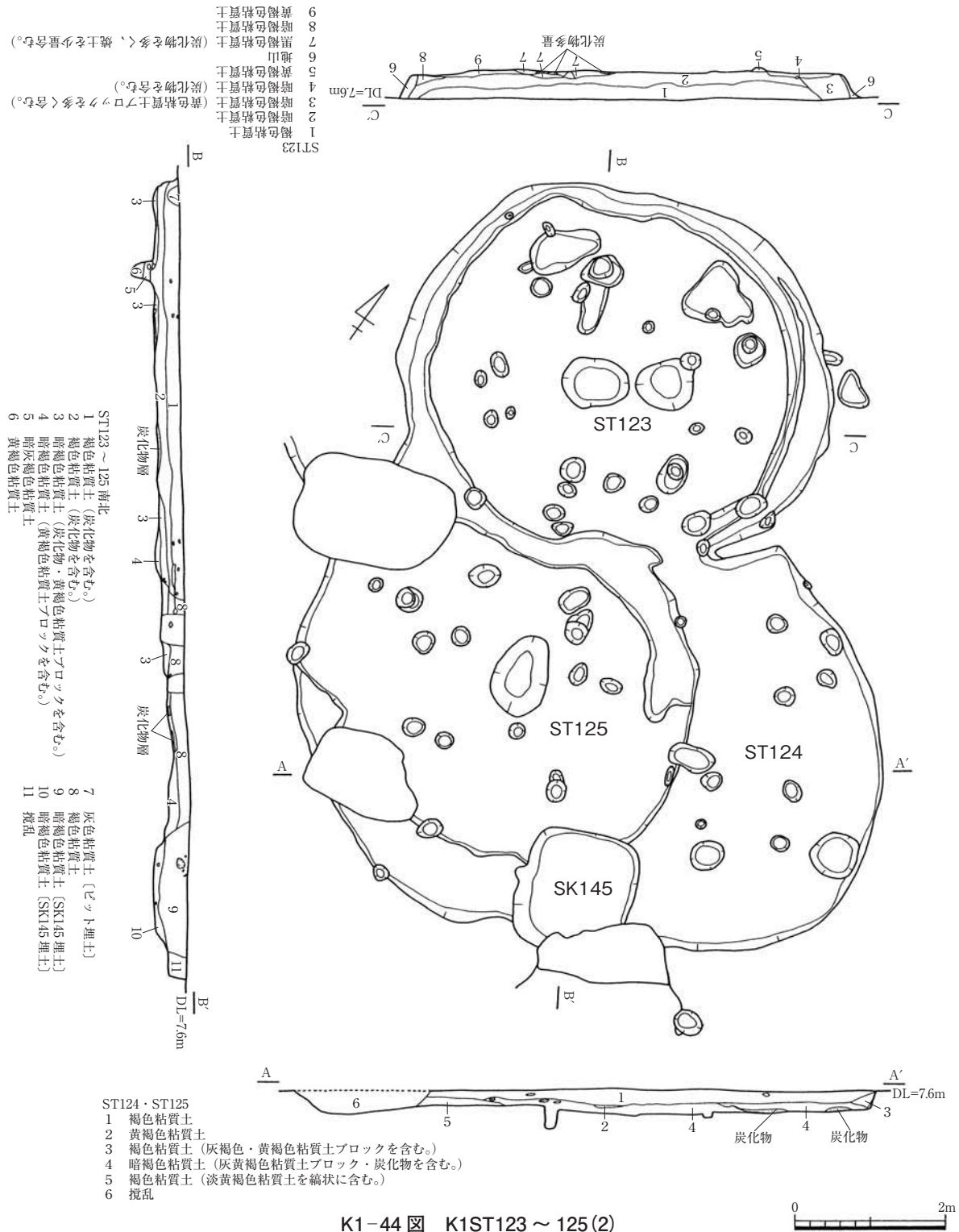


K1-43 図 K1ST123～125(1)

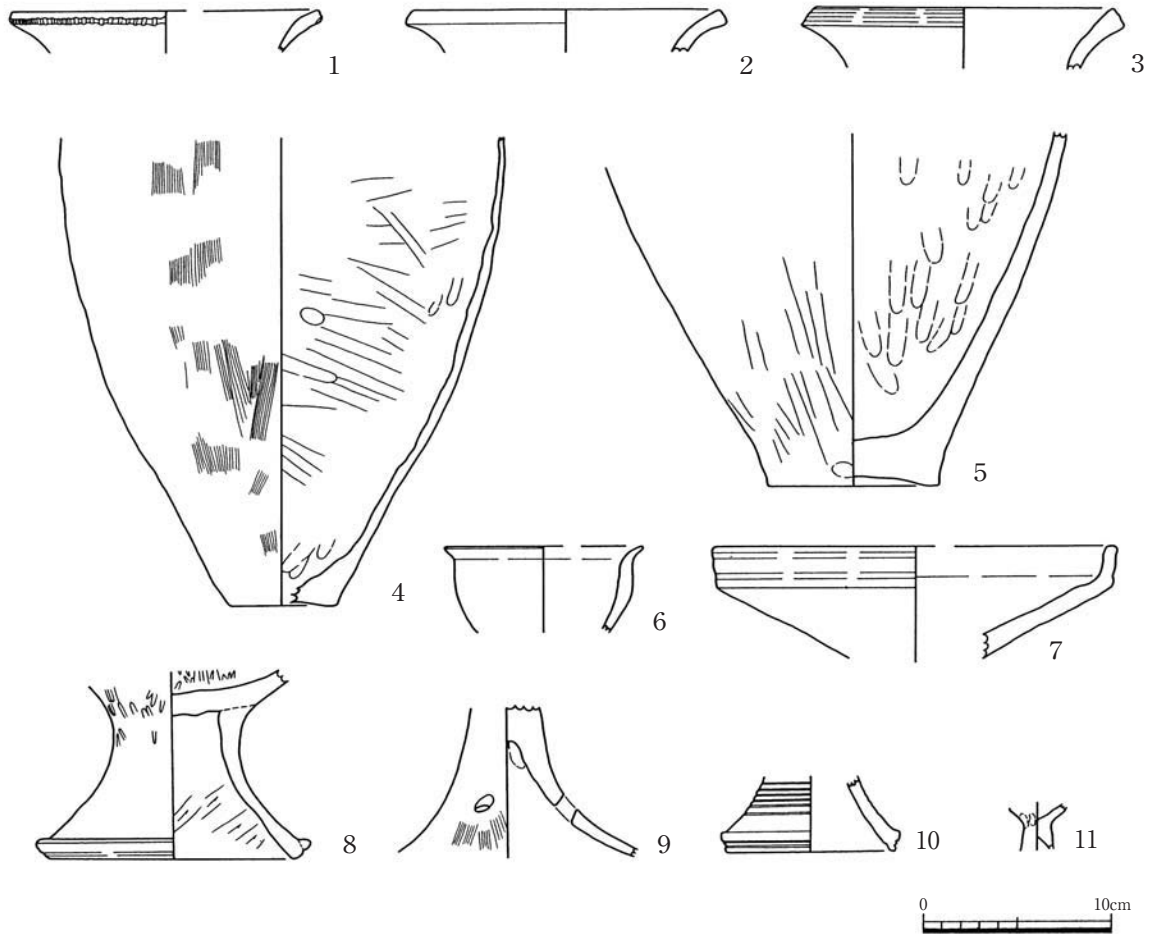
壁溝；数 1 幅 30～100cm 深さ 8cm

出土遺物；弥生土器 22、口縁 20、底部 2、胴部破片 594、高杯片 8、叩石 5

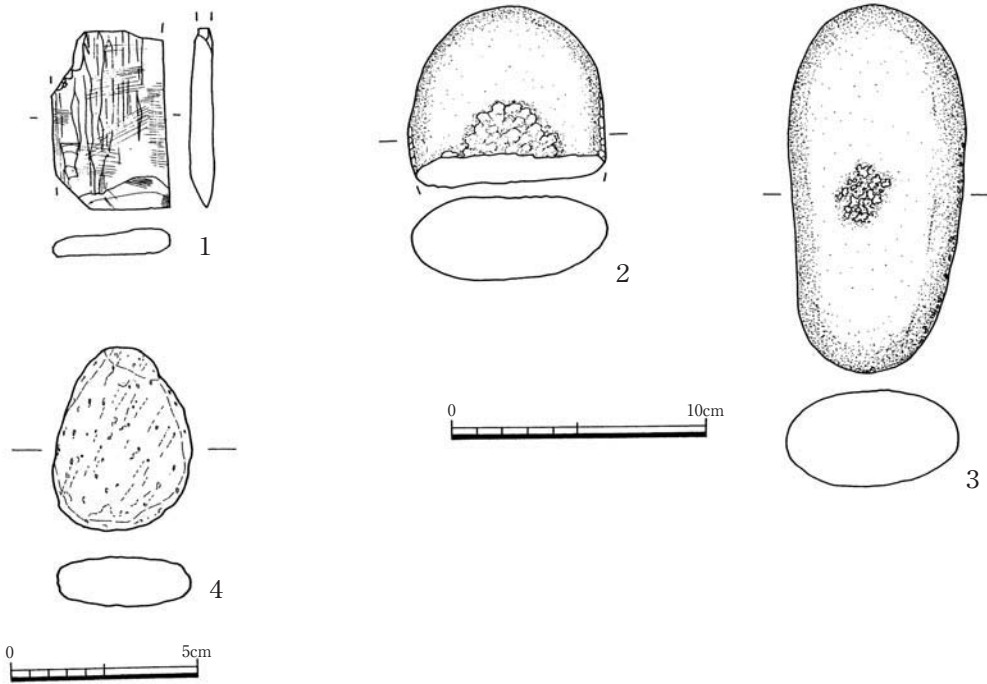
所見；調査区東南部の住居跡密集地にあり、ST123・124 と切り合い関係にある中型の住居跡である。SK145 に切られる。ST123 との関係ははっきりしないが切っている可能性がある。また部分的に攪乱により破壊されている。付帯施設は中央部に炉跡、北側部分に幅広の壁溝が一部巡る。南



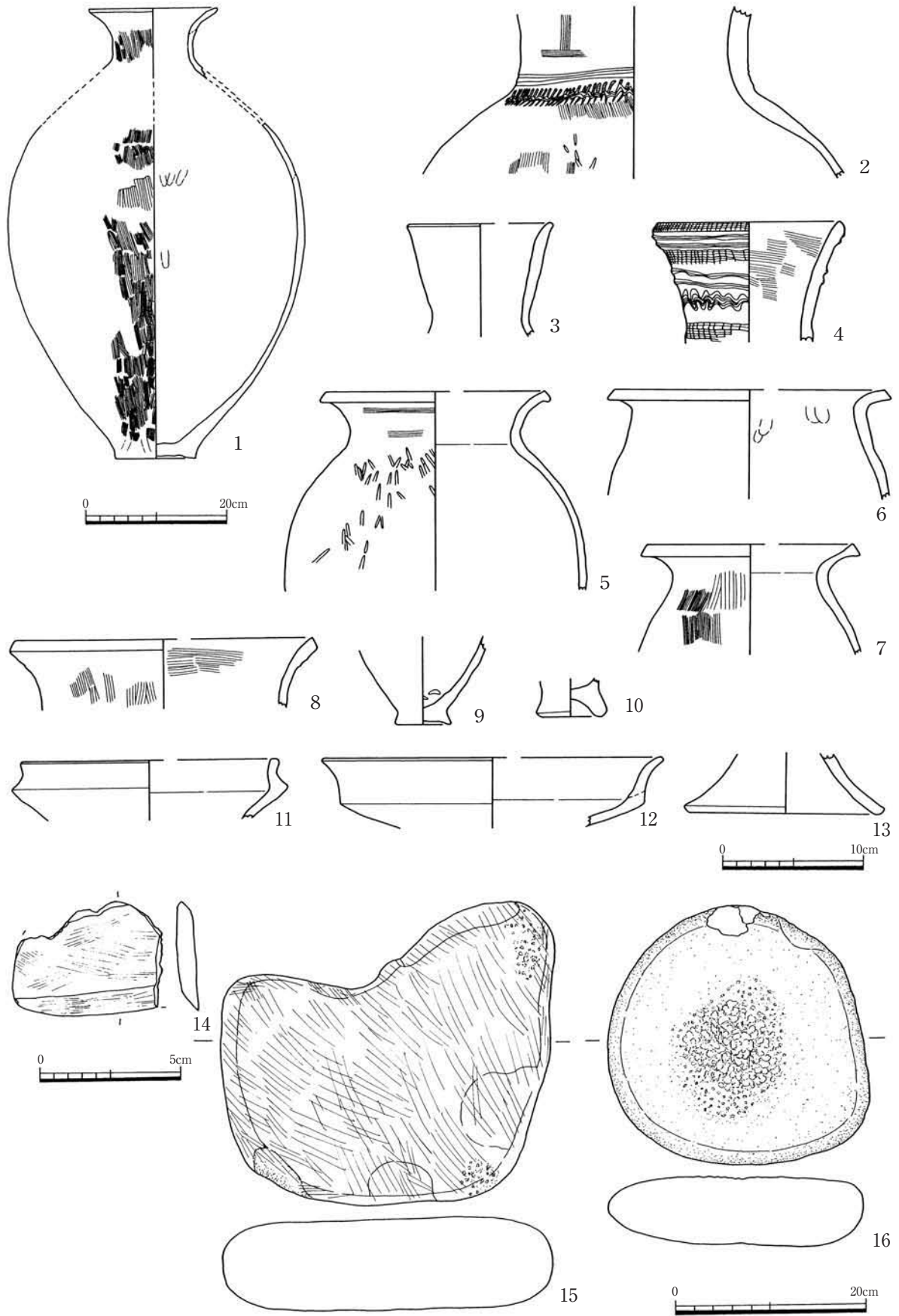
K1-44 図 K1ST123～125(2)



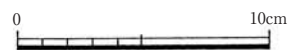
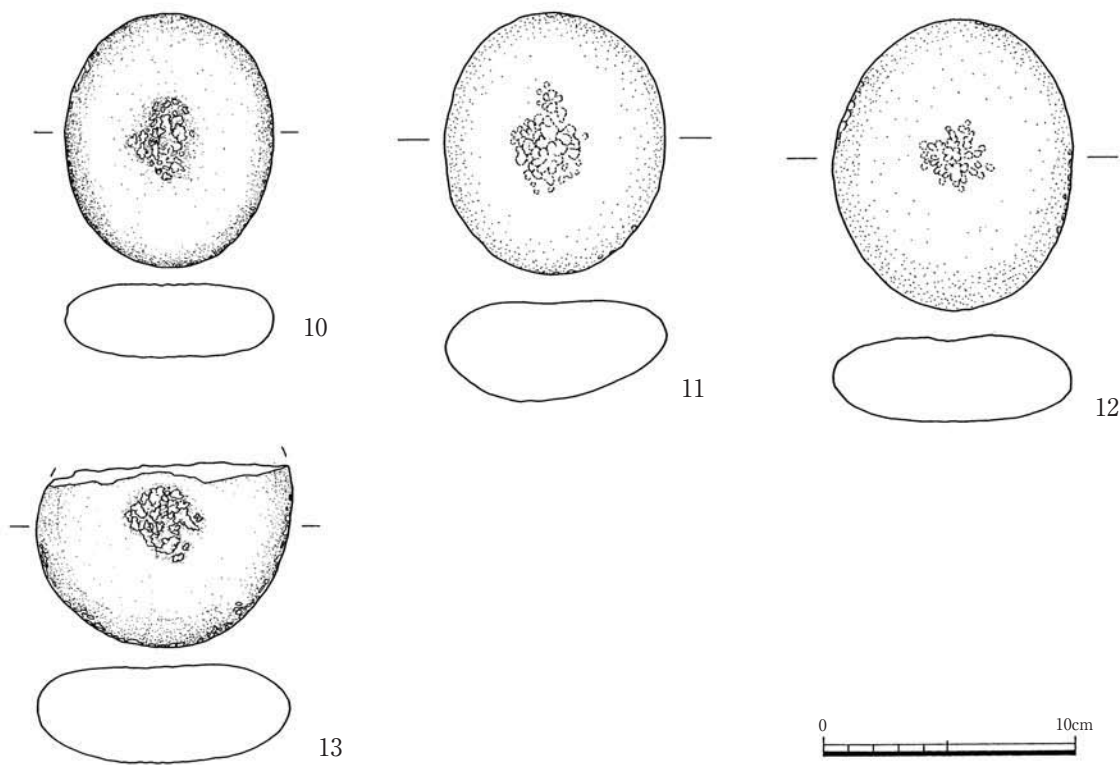
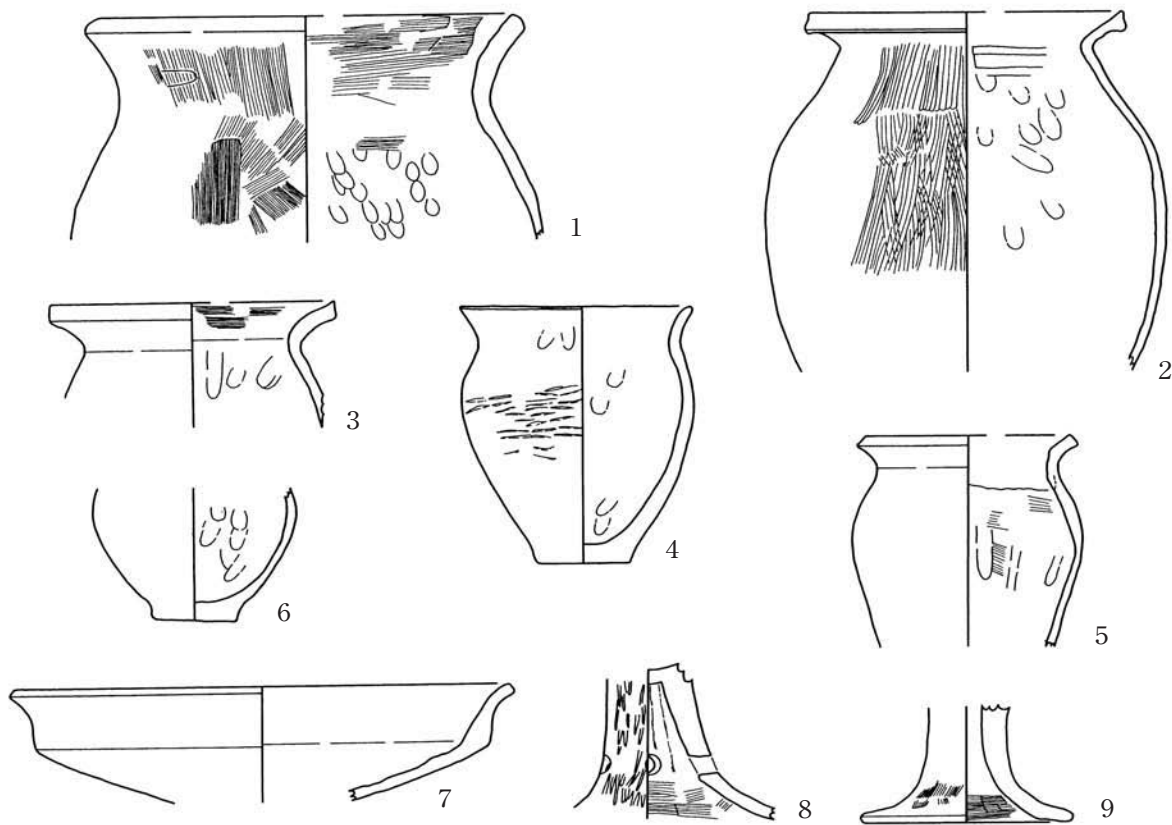
K1-45 ☒ K1ST123(1)



K1-46 ☒ K1ST123(2)



K1-47 図 K1ST124



K1-48 ☒ K1ST125

側部分はベッド状の10cm程の段差が部分的にある。柱穴は16基検出しているが、一部ST124の柱穴も含まれている可能性があり、明確に主柱穴は特定できない。

出土土器は1～5は甕で4・5は小型甕である。1は口縁が殆ど外反しないもの、2・3は口縁が屈曲するものである。小型甕の4の外面にはタタキ目が見られる。6は鉢で壺の可能性もある。7～9は高杯で7の口縁は外反する。

石器は凹石が纏まって出土しており、10～13はやや扁平な円礫で表裏面共に中央部は敲打痕で窪む。中には側面にも敲打痕が認められるものもある。

K1ST126(K1-49・50 図)

時期；弥生III-3 形状；円形 主軸方向；—

規模；5.0m 深さ；0.2m 面積；20 m²

埋土；暗褐色粘質土

ピット；数 11 主柱穴数；4 主柱穴；P1～4

床面；1面 貼床；無し 焼失；無し

中央ピット；形状 楕円形 規模 75×50cm 深さ 23cm 埋土 褐色粘質土主体、底面に炭化物を多量に含む。

壁溝；数 1 幅 40cm 深さ 8cm

出土遺物；弥生土器 8、口縁 13、底部 4、胴部破片 338、石包丁 1、石斧 1、砥石 1、サヌカイト剥片 22

所見；調査区南東部端に位置する中型の住居跡である。SD118、SK149に切られる。中央部に炉跡を有し、ほぼ等間隔で主柱穴と考えられる柱穴4基を検出している。他に小柱穴を数基検出しているものの、建て替え、拡張の痕跡がみられないところから、主柱穴とはならないものと考えられる。壁溝は南側部分を半周ほどする。

出土土器は1～3が甕で、3は本住居跡には伴わないと考えられる。1は器肉の薄いもので口唇部にキザミ、頸部に沈線を施し、肩部には突帯と円形浮文を貼付する。2は口縁に粘土帯を貼付したものである。4は底部で本住居跡に伴うものかどうかは不明である。

石器は5の大形の石鏃、6は石包丁の可能性のある剥片、7は上下に刃部を有する削器である。8は小型の磨製石斧で刃部は片刃、直刃である。全体を研磨し、基部はすぼまる。

K1ST127(K1-51 図)

時期；弥生IV-2 形状；隅丸方形 主軸方向；—

規模；4.7m 深さ；0.2m 面積；17 m²

埋土；暗褐色粘質土主体

ピット；数 15 主柱穴数；— 主柱穴；—

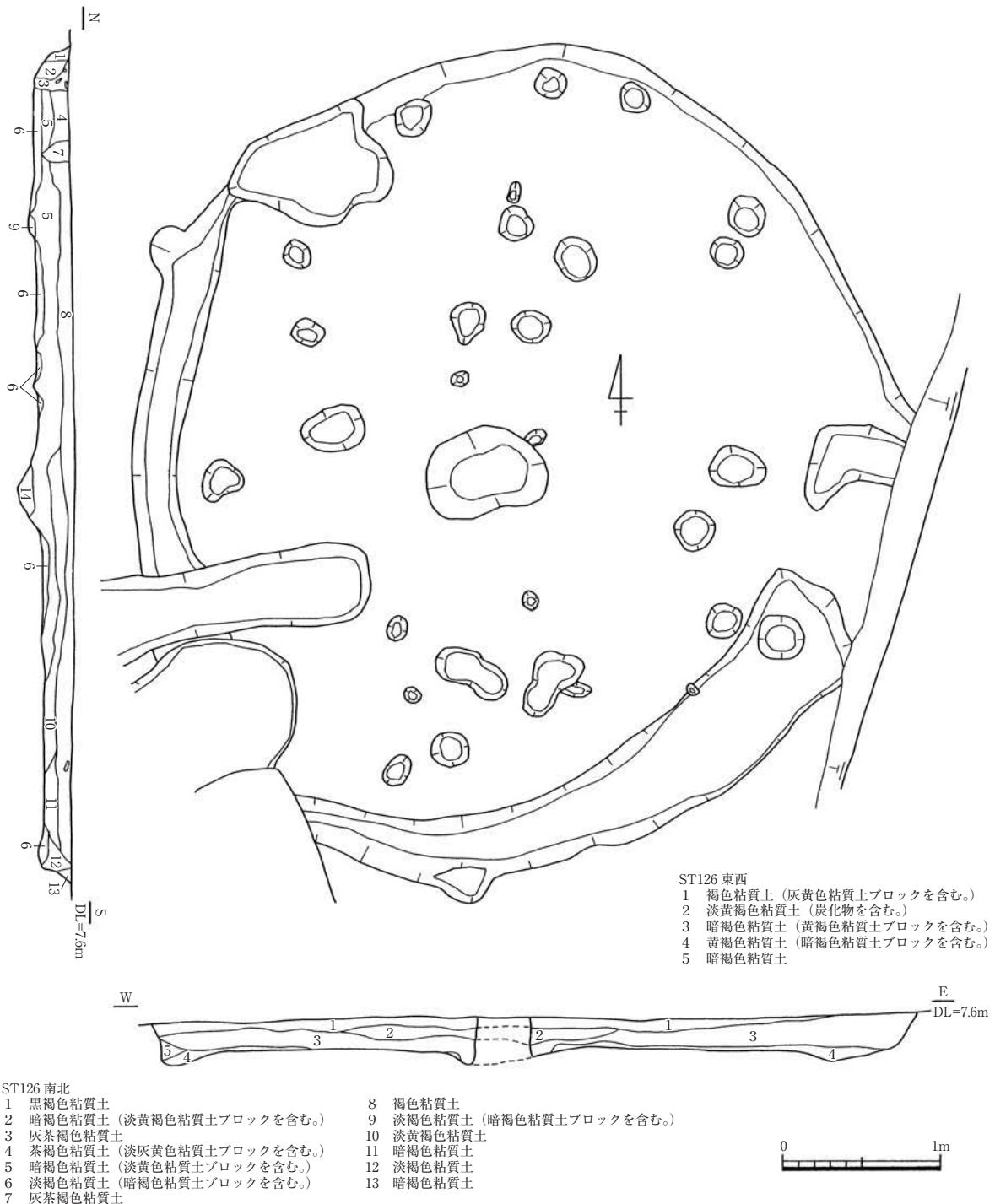
床面；1面 貼床；無し 焼失；無し

中央ピット；形状 楕円形 規模 80×65cm 深さ 27cm 埋土 暗褐色粘質土

壁溝：数1 幅30cm 深さ6cm

出土遺物：弥生土器4、口縁19、底部8、胴部破片166、叩石1、サヌカイト剥片1

所見：調査区東南端に位置する。ST128を切って構築された隅丸方形の住居跡である。中央部には楕円形の炉跡を有する。柱穴は数多く検出しているものの、特に際立った柱穴は存在しておらず、支柱穴の特定は難しい。壁溝は南側部分のみで検出している。



K1-49 図 K1ST126(1)

出土土器は1が大きく口縁が開く壺、3は口縁が直立気味に立ち上がる高杯の口縁である。
 石器は少なく、4は叩石で表面中央部と側面の一部に敲打痕が認められる。

K1ST128(K1-52 図)

時期：弥生IV-2 形状：円形 主軸方向：—

規模：5.5m 深さ：0.26m 面積：24 m²

埋土：暗褐色粘質土主体

ピット：数9 支柱穴数：3以上 支柱穴：P1～3

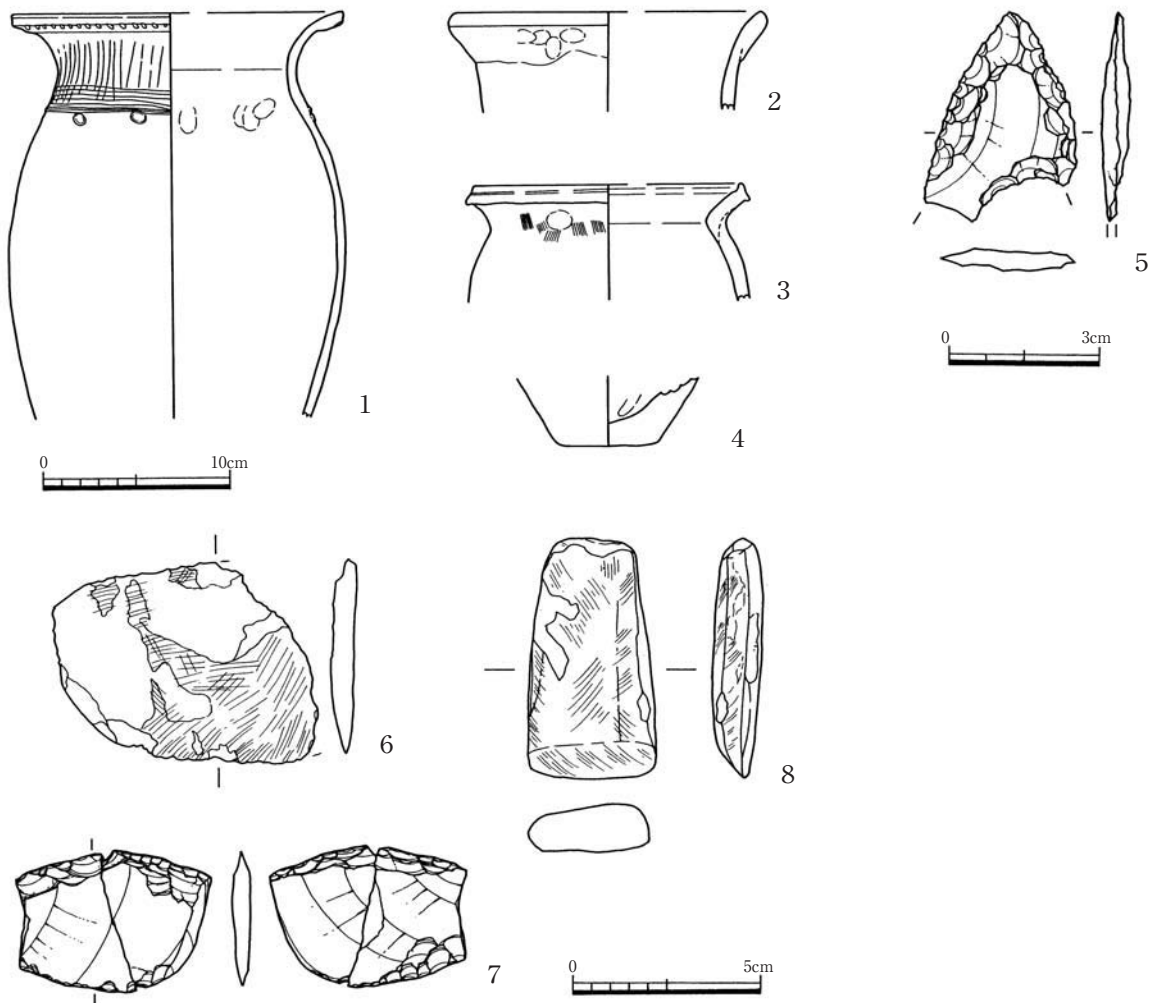
床面：1面 貼床：無し 焼失：無し

中央ピット：形状 楕円形 規模 60cm 深さ 27cm 埋土 黒褐色粘質土主体、炭化物多量

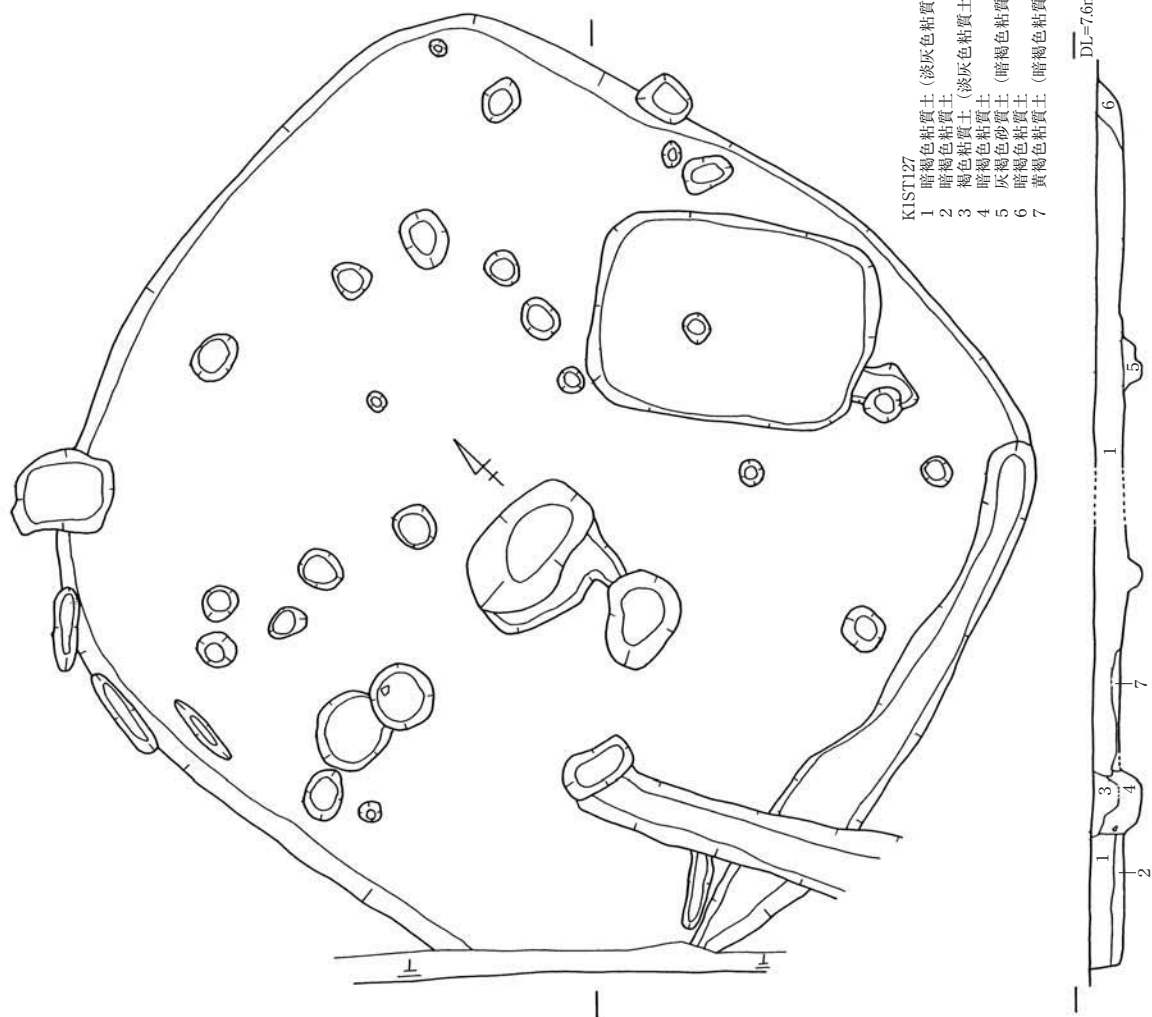
壁溝：数1 幅 10cm 深さ 4cm

出土遺物：弥生土器 6、口縁 13、底部 4、胴部破片 247、石包丁 1

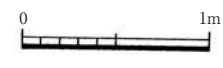
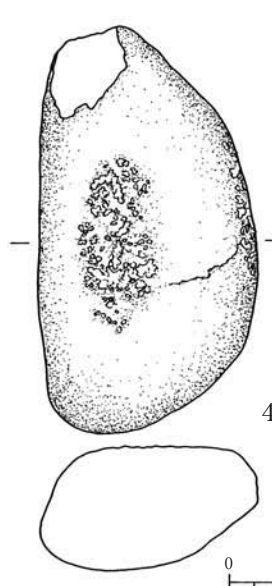
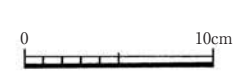
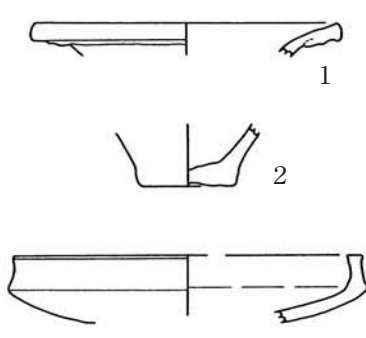
所見：調査区東南端に位置する。ST127 に切られている。北半分しか検出できていない。また中央



K1-50 図 K1ST126(2)



- K1ST127
- 1 暗褐色粘質土 (淡灰色粘質土ブロックを含む。)
 - 2 暗褐色粘質土
 - 3 褐色粘質土 (淡灰色粘質土ブロックを含む。)
 - 4 暗褐色粘質土
 - 5 灰褐色砂質土 (暗褐色粘質土を含む。)
 - 6 暗褐色粘質土
 - 7 黄褐色粘質土 (暗褐色粘質土を含む。)

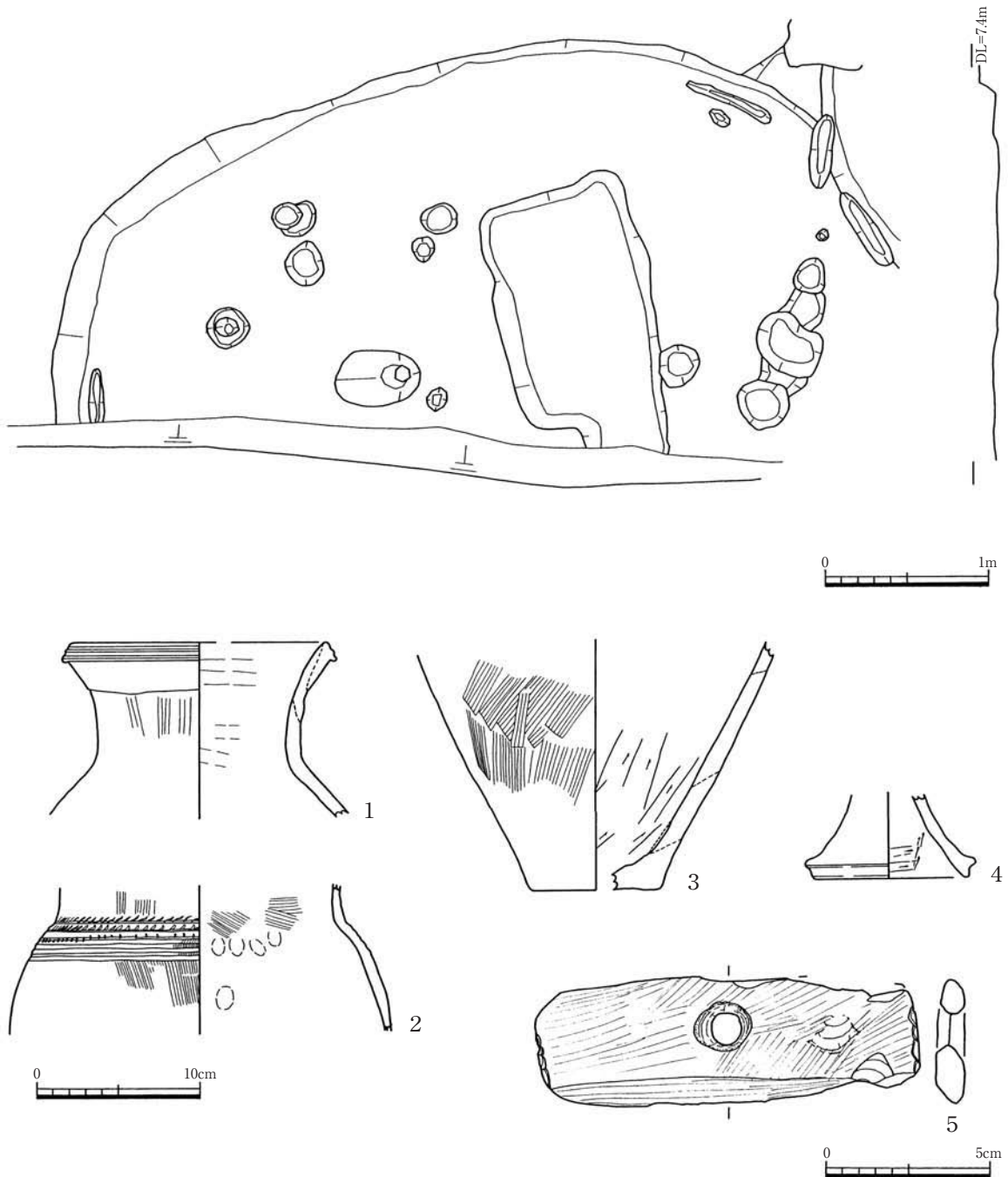


K1-51 ☒ K1ST127

部分は他の長方形の土坑により破壊される。炉跡はやや西寄りで検出されている。柱穴は調査区内で9基確認しており、P1～3が主柱穴と考えられるが、実際はそれ以上の主柱穴が存在したものと考えられる。壁溝は途切れ途切れに検出している。

出土土器は1が口縁に粘土帯を貼付した壺、2は肩部に連続刺突文を施した甕、3は内面にヘラ削りを施した甕の底部と考えられる。4は脚部裾端部が突帯状に肥厚したものである。

石器は5の石包丁のみである。孔は一ヶ所のみで中央のやや上に位置する。研磨は全面に施すものの、裏面には素材面を僅かに残す。刃部はほぼ直線的で、表面から角度を付けて研ぎ出す。



K1-52 図 K1ST128

(2) 掘立柱建物跡

当調査区で復元できた掘立柱建物跡は7棟と少ないが調査区南東部を中心にピット群を検出しており、掘立柱建物跡が多数存在していたと推定される。竪穴住居跡同様に、調査区の南東部に集中する可能性がある。また、当調査区周辺には溝で囲まれた中世段階の屋敷が存在しており、掘立柱建物跡群のなかには中世に属するものも含まれている可能性がある。

K1-2 表 K1 区弥生掘立柱建物跡一覧

遺構名	梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	柱間寸法 梁間×桁行(m)	棟方向	付属施設	時期	備考
K1SB101	1×2	2.8×3.4	2.8×1.5	N-15°-E	—	弥生中・後期	
K1SB102	1×2	2.8×3.6	2.8×1.8	N-11°-E	—	弥生中・後期	
K1SB103	1×2	2.9×4.0	2.9×2.0	N-3°-E	—	弥生中・後期	
K1SB104	1×2	2.9×3.9	2.9×1.7	N-24°-W	—	弥生中・後期	
K1SB105	1×3	2.7×3.5	2.7×1.2	N-6°-E	—	弥生中・後期	
K1SB106	1×3	2.3×4.8	2.3×1.6	N-9°-E	—	弥生中・後期	
K1SB107	1×3	3.4×5.1	3.4×1.7	N-68°-E	—	弥生中・後期	

K1SB101(K1-53 図)

時期：弥生中・後期 棟方向；N-15°-E

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.8m×桁行3.4m 面積；9.5㎡

柱間寸法；梁間2.8m 桁行1.5m

柱穴数；6 柱穴形；小円

性格；— 付属施設；—

所見；調査区西側部に位置し、ST101に隣接する。梁間1間×桁行2間のものである。

K1SB102(K1-53 図)

時期：弥生中・後期 棟方向；N-11°-E

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.8m×桁行3.6m 面積；10.4㎡

柱間寸法；梁間2.8m 桁行1.8m

柱穴数；6 柱穴形；円

性格；— 付属施設；—

所見；調査区西南部に位置し、梁間1間×桁行2間のものである。SD101に切られる。

K1SB103(K1-53 図)

時期：弥生中・後期 棟方向；N-3°-E

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.9m×桁行4.0m 面積；11.6㎡

柱間寸法；梁間2.9m 桁行2m

柱穴数；6 柱穴形；円

性格；— 付属施設；—

所見；調査区西南部に位置し、SB102と隣接する。北西隅の柱穴はSD101に壊される。

K1SB104(K1-53 図)

時期；弥生中・後期 棟方向；N-24°-W

規模；梁間 1 間×桁行 2 間 梁間 2.9m×桁行 3.9m 面積；11.3㎡

柱間寸法；梁間 2.9m 桁行 1.7m

柱穴数；6 柱穴形；円

性格；— 付属施設；—

所見；調査区中央部北よりに位置する。

K1SB105(K1-53 図)

時期；弥生中・後期 棟方向；N-6°-E

規模；梁間 1 間×桁行 3 間 梁間 2.7m×桁行 3.5m 面積；9.4㎡

柱間寸法；梁間 2.7m 桁行 1.2m

柱穴数；8 柱穴形；円

性格；— 付属施設；—

所見；調査区中央部南に位置する。

K1SB106(K1-53 図)

時期；弥生中・後期 棟方向；N-9°-E

規模；梁間 1 間×桁行 3 間 梁間 2.3m×桁行 4.8m 面積；11.0㎡

柱間寸法；梁間 2.3m 桁行 1.6m

柱穴数；8 柱穴形；円

性格；— 付属施設；—

所見；調査区中央部北に位置する。

K1SB107(K1-53 図)

時期；弥生中・後期 棟方向；N-68°-E

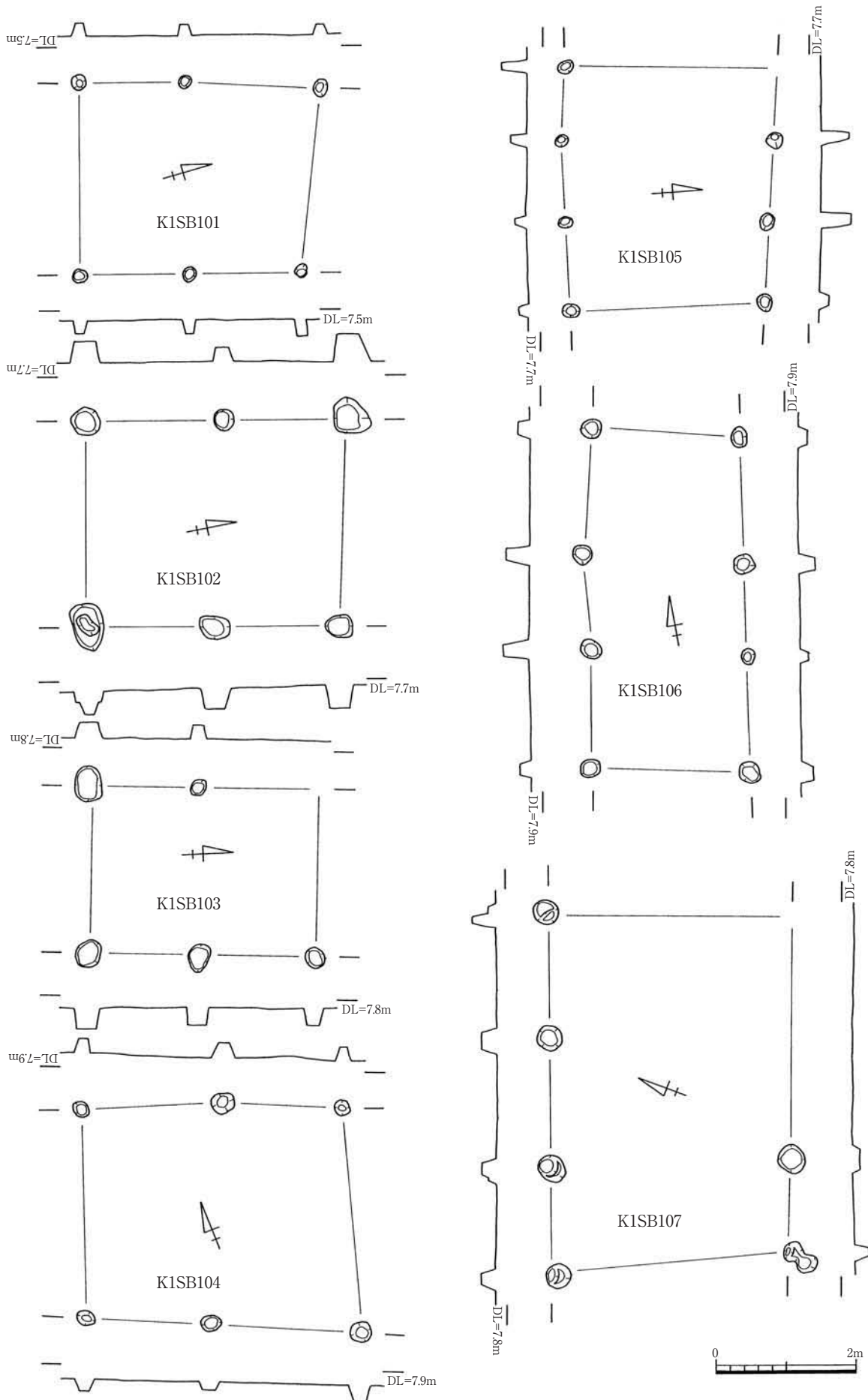
規模；梁間 1 間×桁行 3 間 梁間 3.4m×桁行 5.1m 面積；17.3㎡

柱間寸法；梁間 3.4m 桁行 1.7m

柱穴数；8 柱穴形；円

性格；— 付属施設；—

所見；調査区北東部に位置する。



K1-53 图 K1SB101 ~ 107

(3) 土坑

当調査区で検出した土坑の平面プランは方形、溝状を呈するものが多い。各プランでは同規模を有するものが目立つ。機能に関連するものと推定される。調査区南東部では竪穴住居跡の重複が認められるが、土坑についてはあまり顕著ではない。

K1-3表 K1 区弥生土坑一覧

遺構名	長径×短径×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	付属遺構	時期	備考
K1SK101	1.10 × 0.53 × 0.10	楕円形	—	N-12°-W	—	弥生IV～V	
K1SK102	1.70 × 1.20 × 0.10	長方形	箱形	N-42°-E	—	弥生IV～V	
K1SK103	1.40 × 1.26 ^灶 × 0.26	長方形?	皿状	N-5°-E	—		
K1SK104	3.10 × 0.65 × 0.07	不整形	皿状	N-62°-W	—	弥生IV-2	
K1SK105	1.59 × 1.02 × 0.08	長方形	皿状	N-77°-W	—		
K1SK106	1.70 × 0.58 × 0.05	溝状	皿状	N-82°-W	—		
K1SK107	2.90 × 1.90 × 0.18	長方形	箱形	N-60°-W	—	弥生V-1	
K1SK108	1.50 × 0.35 × 0.09	溝状	皿状	N-81°-W	—		
K1SK109	3.10 × 0.80 × 0.07	長楕円形	—	N-35°-E	—	弥生V-1～3	
K1SK111	1.10 × 0.60 × 0.30	不整形	U字状	N-55°-W	—	弥生V-2～3	
K1SK112	1.60 × 0.40 × 0.20	楕円形	U字状	N-90°-W	—	弥生V-1	
K1SK113	1.56 × 0.27 × 0.17	溝状	—	N-88°-W	—		
K1SK114	2.50 × 1.60 × 0.20	楕円形	—	N-15°-E	—	弥生V-1	
K1SK115	2.20 × 1.20 × 0.58	楕円形	U字形	N-85°-E	—	弥生V-1～2	
K1SK117	2.85 × 0.55 × 0.55	長楕円形	—	N-90°-W	—	弥生V-1	
K1SK119	[0.95] × [0.30] × 0.12	長方形	皿状	N-10°-E	—	弥生IV-2	
K1SK120	1.03 × 0.27 × 0.06	溝状	—	N-82°-E	—		
K1SK122	8.20 × 1.30 × 0.40	長楕円形	U字状	N-88°-E	—	弥生V-1	
K1SK123	2.30 × 1.70 × 0.19	長方形	—	N-18°-E	—	弥生V	
K1SK124	1.90 × 1.50 × 0.36	正方形	箱形	N-10°-W	—	弥生V	
K1SK125	1.15 × 1.15 × 0.41	円形	U字状	—	—	弥生V-1	
K1SK126	1.00 × 1.00 × 0.53	円形	U字状	—	—	弥生V-1	
K1SK127	[1.40] × [0.80] × 0.12	不整形	皿状	N-9°-W	—	弥生V	
K1SK128	2.04 × 1.34 ^灶 × 0.42	方形?	—	N-3°-W	—		
K1SK129	2.70 × 0.55 × 0.30	長楕円形	—	N-17°-W	—	弥生IV-2	
K1SK130	2.07 × 0.49 × 0.19	溝状	—	N-55°-W	—		
K1SK131	2.27 × 0.40 × 0.29	溝状	—	N-0°	—		
K1SK132	2.33 × 0.56 × 0.24	溝状	—	N-85°-W	—		
K1SK133	[1.15] × [1.05] × 0.32	楕円形	皿状?	N-57°-E	—	弥生III-3	
K1SK134	2.25 × 0.60 × 0.30	長楕円形	U字状	N-81°-E	—	弥生V-1	
K1SK135	1.54 × 0.64 × 0.58	不整形	—	N-70°-E	—		
K1SK136	[1.20] × [1.40] × 0.40	楕円形?	—	N-62°-W	—	弥生IV-2	
K1SK137	[2.85] × 0.45 × 0.30	楕円形	—	N-4°-W	—	弥生V-1	
K1SK139	2.00 × 1.70 × 0.12	円形	—	N-77°-E	—	弥生V	
K1SK143	2.40 × 0.45 × 0.35	不整形	皿状	N-73°-E	—	弥生IV～V	
K1SK144	1.60 × 0.90 × 0.05	楕円形	—	N-59°-W	—	弥生IV～V	
K1SK145	[1.60] × 1.45 × 0.43	正方形	—	N-20°-W	—	弥生IV～V	
K1SK148	[2.45] × 1.85 × 0.32	長方形	—	—	—	弥生V	
K1SK149	3.10 × 1.10 × 0.48	楕円形	U字状	N-58°-E	—	弥生III～IV	
K1SK150	4.30 × 0.40 × 0.30	長楕円形	—	—	—	弥生V-1～2	
K1SK151	1.80 × 1.50 × 0.37	長方形	箱形	N-6°-E	—	弥生IV-2	
K1SK152	2.00 × 1.40 × 0.27	長方形	箱形	N-66°-E	—	弥生IV～V	
K1SK153	[2.20] × 1.40 × 0.34	長方形	皿状	N-14°-W	—	弥生V	
K1SK155	2.05 × 0.75 × 0.40	楕円形	U字状	—	—	弥生IV～V	
K1SK158	2.64 × (3.17) × 0.07	不整形	—	N-8°-W	—		
K1SK159	2.20 × 2.15 × 0.44	正方形	箱形	N-5°-W	—	弥生IV～V	
K1SK162	2.20 × 0.70 × 0.10	長楕円形	—	N-85°-W	—	弥生V-1	

K1SK101(K1-54 図)

時期：弥生IV～V期 形状：楕円形 主軸方向：N-12°-W

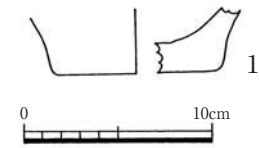
規模：1.10×0.53m 深さ：0.10m 断面形態：—

埋土：暗褐色粘質土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 1

所見：調査区西側南に位置する。出土遺物は弥生土器底部の1のみである。平底で胎土に小礫を多量に含む。時期は弥生IV～V期と考えられる。



K1-54 図 K1SK101

K1SK102(K1-55 図)

時期：弥生IV～V期 形状：長方形 主軸方向：N-42°-E

規模：1.70×1.20m 深さ：0.10m 断面形態：箱形

埋土：褐色粘質土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 1、胴部破片 3

所見：調査区西よりに位置し、北側にSB103が隣接する。僅かに土器が入る。出土遺物は1の底部が出土しており、時期は弥生IV～V期と考えられる。

K1SK104(K1-56 図)

時期：弥生IV-2 形状：不整形 主軸方向：N-62°-W

規模：3.10×0.65m 深さ：0.07m 断面形態：皿状

埋土：—

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 1、口縁 4、胴部破片 33

所見：調査区西より北側に位置する。出土遺物は凹線文を施した高杯(1)が出土している。

K1SK107(K1-57 図)

時期：弥生V-1 形状：長方形 主軸方向：N-60°-W

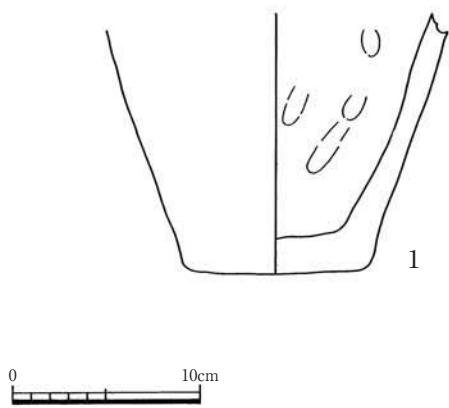
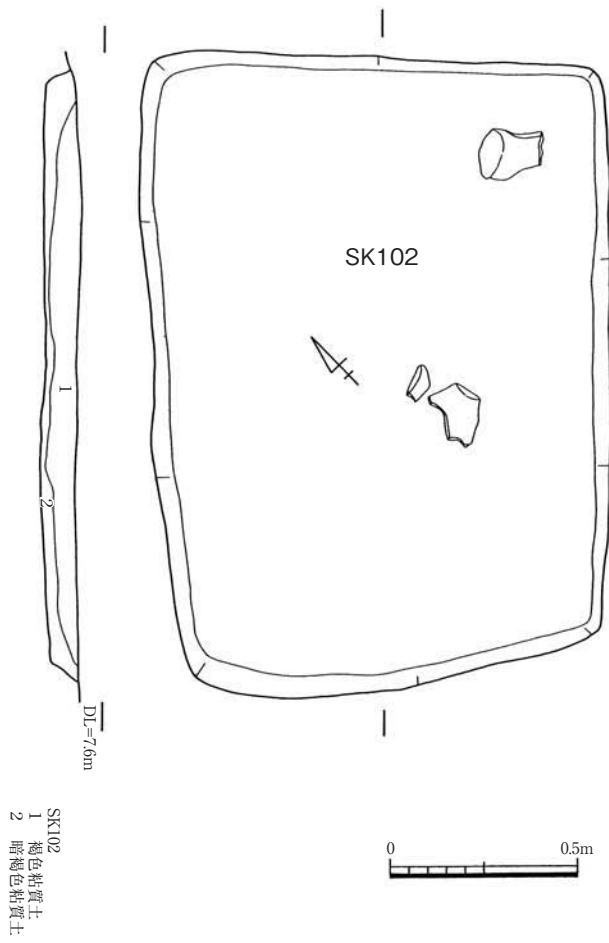
規模：2.90×1.90m 深さ：0.18m 断面形態：箱形

埋土：褐色粘質土

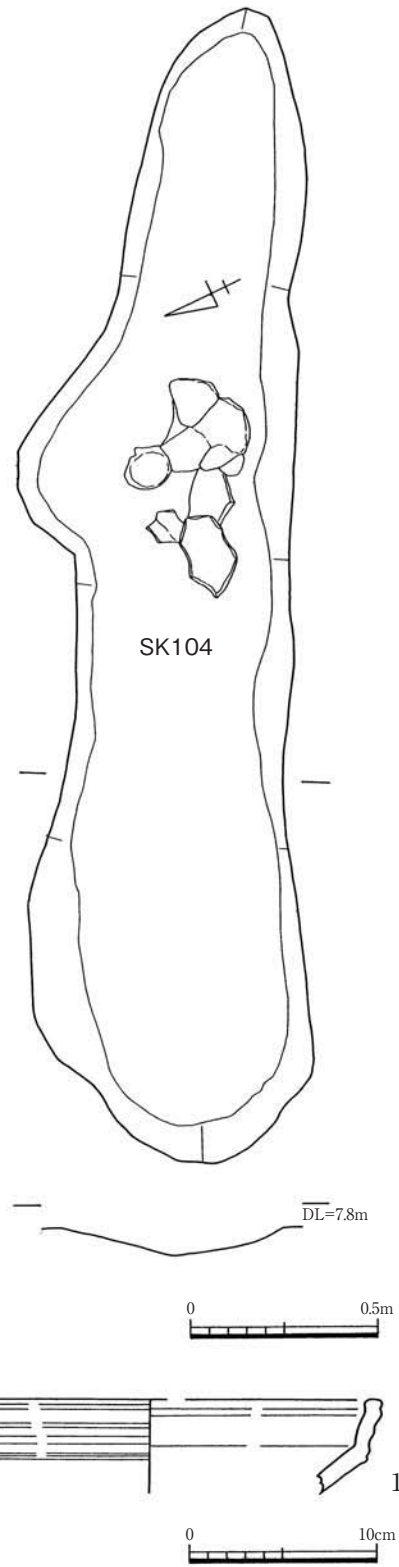
付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 6、口縁 9、底部 1、胴部破片 117

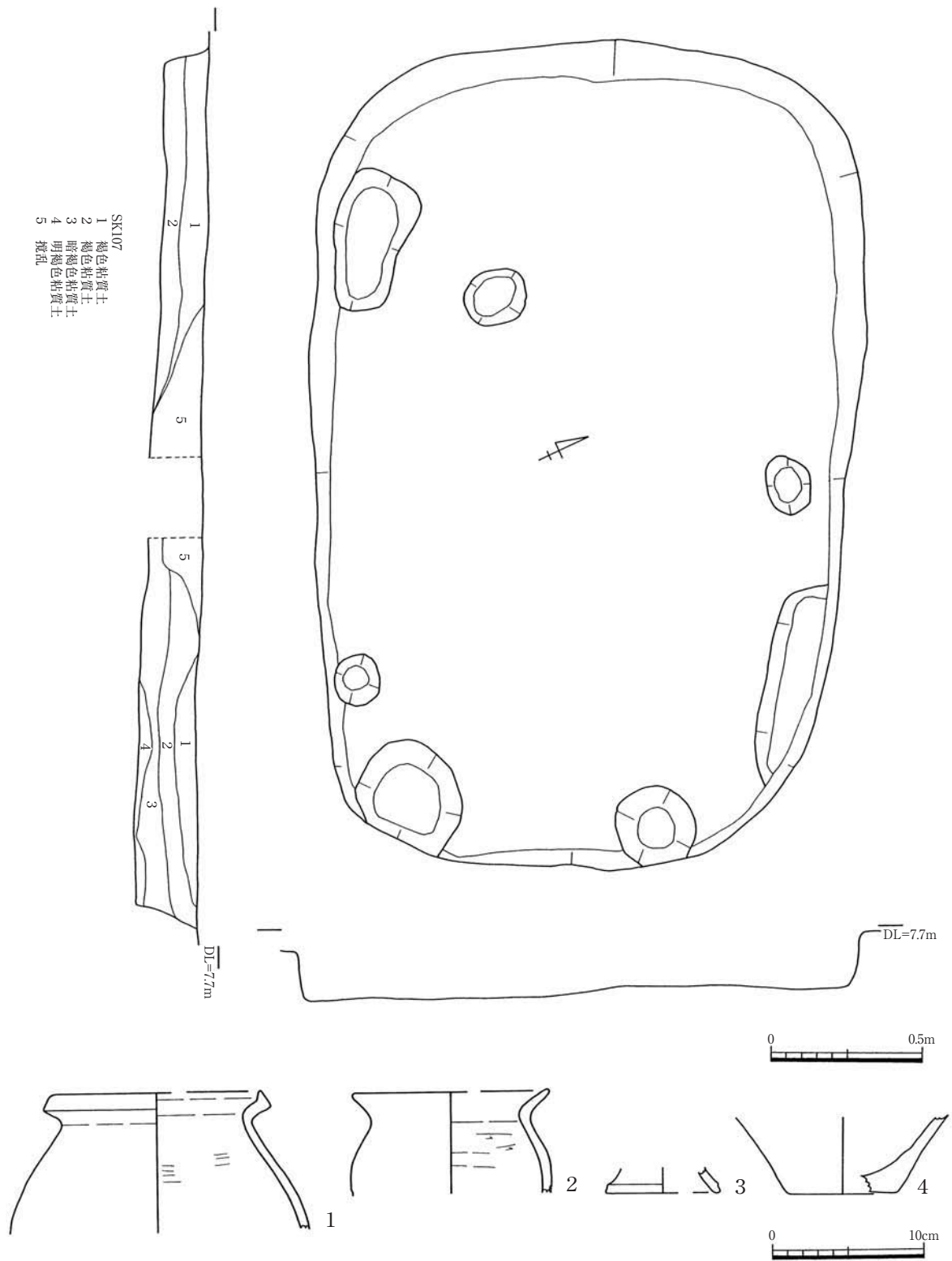
所見：調査区中央部北側に位置する。コーナーにピット状の落ち込みを2ヶ所有する。出土遺物は1・2が甕で1は口縁が屈曲するものである。2は口唇を拡張しないものである。3は高杯の裾で端部は肥厚しない。



K1-55 図 K1SK102



K1-56 図 K1SK104



K1-57 图 K1SK107

K1SK109(K1-58 図)

時期；弥生V-1～3 形状；長楕円形 主軸方向；N-35°-E

規模；3.10×0.80m 深さ；0.07m 断面形態；—

埋土；暗褐色粘質土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器 1、口縁 2、胴部破片 13

所見；調査区西側南に位置する。小溝状の土坑である。西側部を柱穴に切られる。出土遺物は少なく、実測図は 1 のみで壺の口縁部破片である。

K1SK111(K1-59 図)

時期；弥生V-2～3 形状；不整形 主軸方向；N-55°-W

規模；1.10×0.60m 深さ；0.30m 断面形態；U字状

埋土；暗褐色粘質土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器 7、口縁 4、胴部破片 87

所見；調査区やや西寄り南に位置する。底面を二ヶ所有する。土器、礫が少量纏まって出土している。1・2は壺で、1の口縁は開く、3・4は高杯で3の口縁は外反し、口唇は肥厚しない。

K1SK112(K1-60 図)

時期；弥生V-1 形状；楕円形 主軸方向；N-90°-W

規模；1.60×0.40m 深さ；0.20m 断面形態；U字状

埋土；暗褐色土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器 3、口縁 3、胴部破片 123

所見；調査区やや西寄り南端に位置する。土器片が少量散在する。出土遺物は 1 は甕で、口縁が屈曲し、口唇に凹線文を施したもので、2 は甕底部と考えられる。

K1SK114(K1-61 図)

時期；弥生V-1 形状；楕円形 主軸方向；N-15°-E

規模；2.50×1.60m 深さ；0.20m 断面形態；—

埋土；褐色粘質土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器 1、口縁 1、胴部破片 25

所見；調査区中央部に位置する。SD104 に切られる。

K1SK115(K1-62 図)

時期：弥生V-1～2 形状：楕円形 主軸方向：N-85°-E

規模：2.20×1.20m 深さ：0.58m 断面形態：U字状

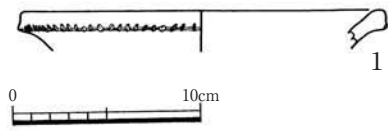
埋土：褐色粘質土

付属遺構：— 機能：—

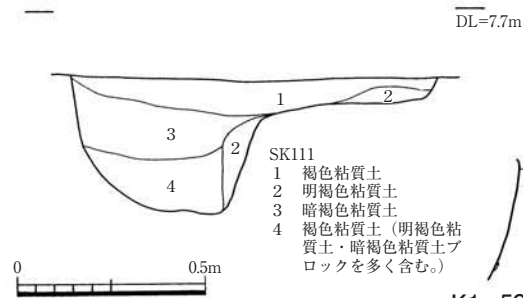
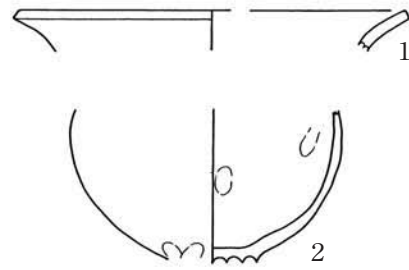
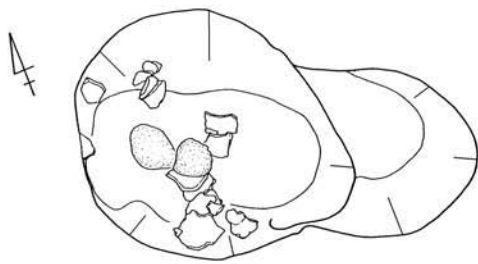
出土遺物：弥生土器7、口縁15、底部3、胴部破片260、サヌカイト製石鏃、不明鉄製品

所見：調査区中央部南寄りに位置する。

出土土器は1の広口壺は口縁内面に円形刺突、ハケ状原体による装飾、また同じく矢羽状の装飾

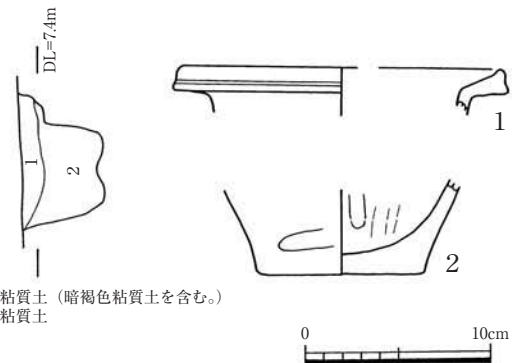
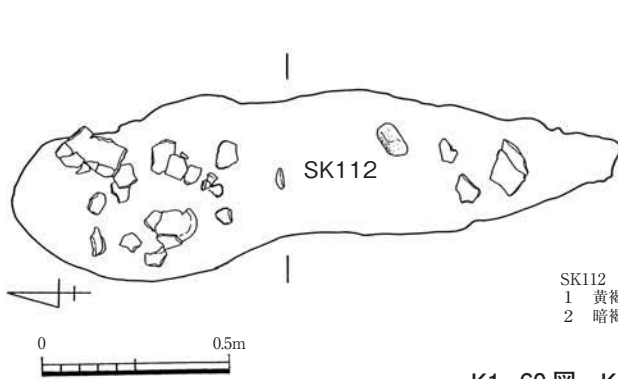
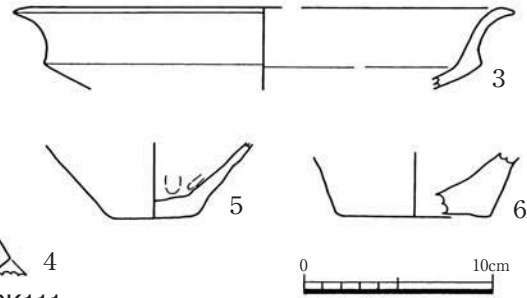


K1-58 図 K1SK109



- SK111
 1 褐色粘質土
 2 明褐色粘質土
 3 暗褐色粘質土
 4 褐色粘質土 (明褐色粘質土・暗褐色粘質土ブロックを多く含む。)

K1-59 図 K1SK111

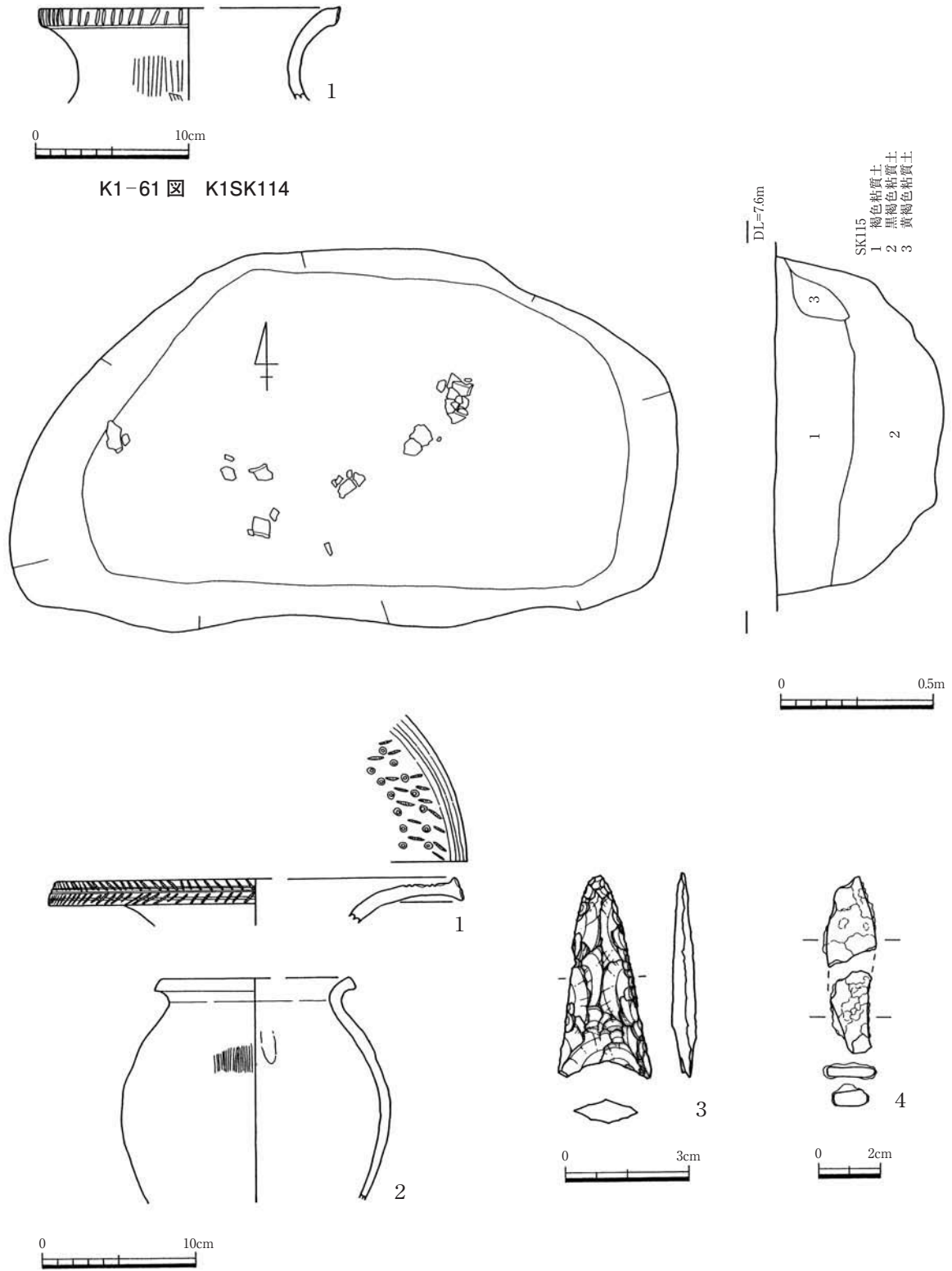


- SK112
 1 黄褐色粘質土 (暗褐色粘質土を含む。)
 2 暗褐色粘質土

K1-60 図 K1SK112

を口唇部に施す。2は甕で口唇を拡張せず、体部に丸味を持つ。

石器は3が大形石鏃で調整加工は中央部まで施す。4は鉄器である。



K1-62 図 K1SK115

K1SK117(K1-63 図)

時期：弥生V-1 形状：長楕円形 主軸方向：N-90°-W

規模：2.85×0.55m 深さ：0.55m 断面形態：—

埋土：—

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 22、口縁 12、底部 1、胴部破片 620、高杯片 1

所見：調査区中央部やや北寄りに位置する。小溝状の土坑である。多量の土器片が纏まって出土している。SD104 に切られる。1～8 は壺である。1 は頸部に凹線文を施した細頸壺、4～7 は口縁に粘土帯を貼付したものである。9・10 は甕である。共に口唇に凹線文を施す。11～13 は鉢である。11 は小壺のようなもので、12・13 は同じような器形で口縁が開く。1・3・10 については弥生IV-2 期にも見られるものであり、本遺構の中ではやや古相を帯びる。

K1SK119(K1-64 図)

時期：弥生IV-2 形状：長方形 主軸方向：N-10°-E

規模：(0.95)×(0.30)m 深さ：0.12m 断面形態：皿状

埋土：暗褐色粘質土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 9

所見：調査区中央部南に位置する。土器片が少量出土している。SD104 に切られる。出土遺物は 1 の凹線文を施した甕で、口縁が強く屈曲する。2 は 1 と同一個体の可能性が高い。底部脇が括れる。

K1SK122(K1-65・66 図)

時期：弥生V-1 形状：長楕円形 主軸方向：N-88°-E

規模：8.20×1.30m 深さ：0.40m 断面形態：U字状

埋土：暗褐色粘質土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 25、口縁 49、胴部破片 1242、高杯片 5、石包丁 1

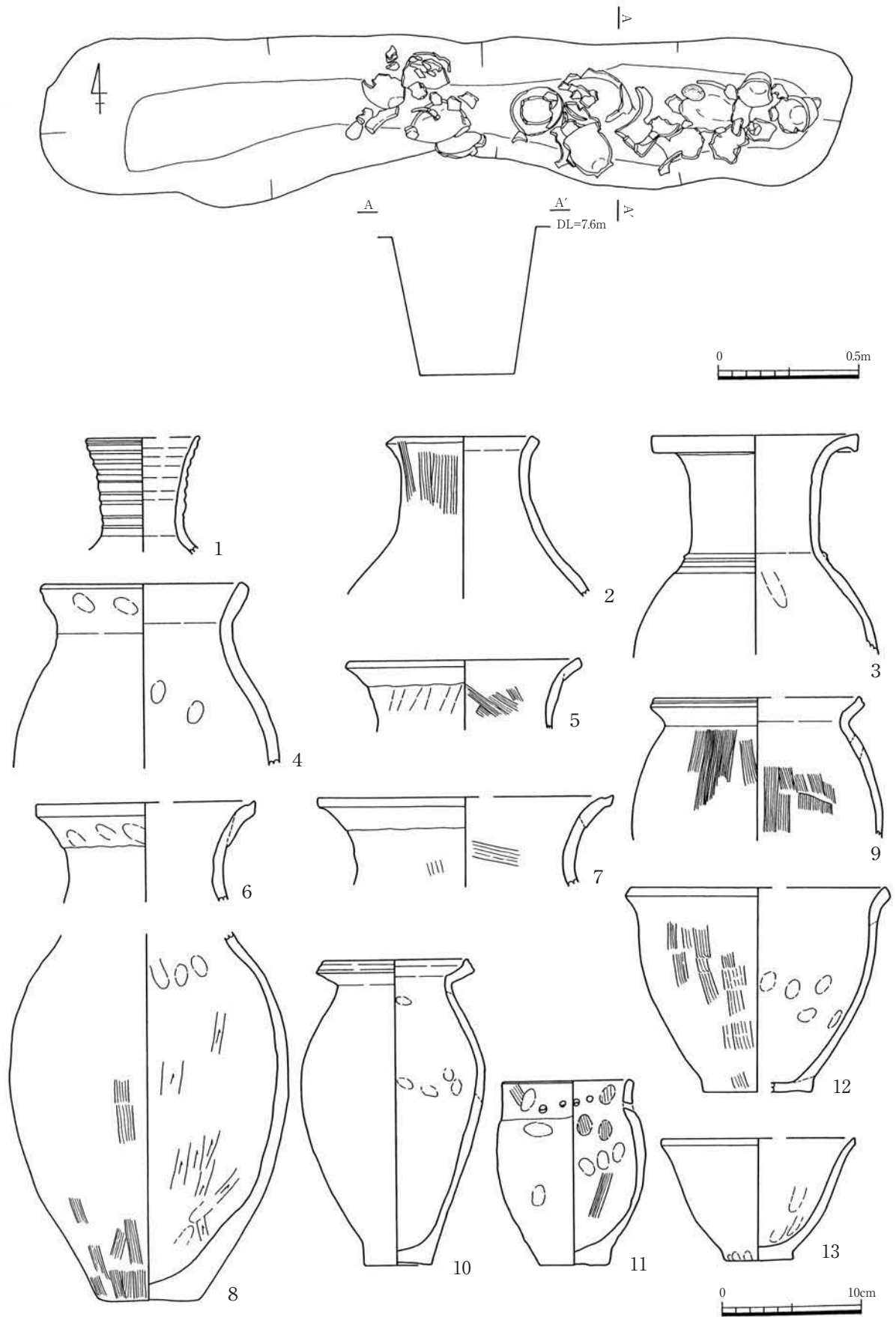
所見：調査区中央部南に位置する。溝状の土坑である。SD104 に切られる。

出土土器は 1・2 が壺で 1 は口縁に粘土帯を貼付したものである。2 は凹線文を施す。3～5 は甕で 3 は凹線文、4 は粘土帯を貼付したもの、6～9 は鉢で 6 は大型鉢で口縁が内傾する。7～9 は台付鉢である。9 は小型のものである。10・11 は高杯で 10 の杯部は丸味を持つ。

石器は 12 が打製石包丁で刃部のみ表裏面から研磨する。両端は打ち欠きによって浅い挟入部を作出する。

K1SK123(K1-67 図)

時期：弥生V 形状：長方形 主軸方向：N-18°-E



K1-63 図 K1SK117

規模：2.30×1.70m 深さ：0.19m 断面形態：—

埋土：褐色粘質土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 1、胴部破片 27

所見：調査区東寄り北に位置する。SD103・106を切る。P48に切られる。実測遺物は1の甕のみである。平底で小礫を多量に含み、内外面共にナデ調整である。時期的には判然としないが、弥生V期の可能性が強い。

K1SK124(K1-68 図)

時期：弥生V 形状：正方形 主軸方向：N-10°-W

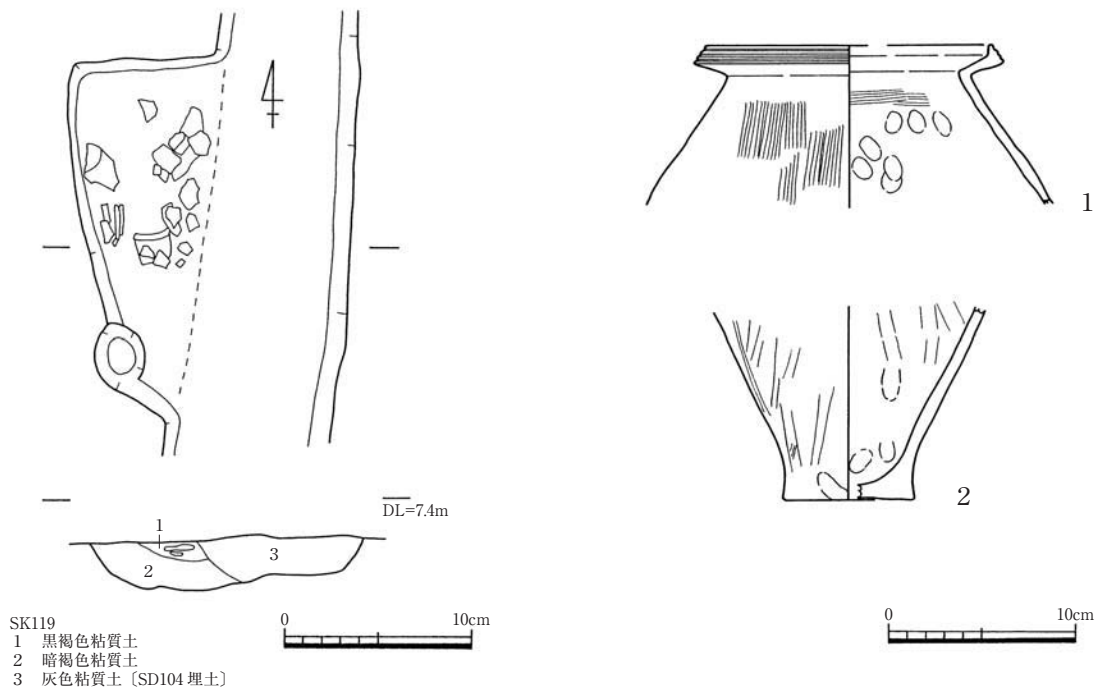
規模：1.90×1.50m 深さ：0.36m 断面形態：箱形

埋土：黄褐色粘質土

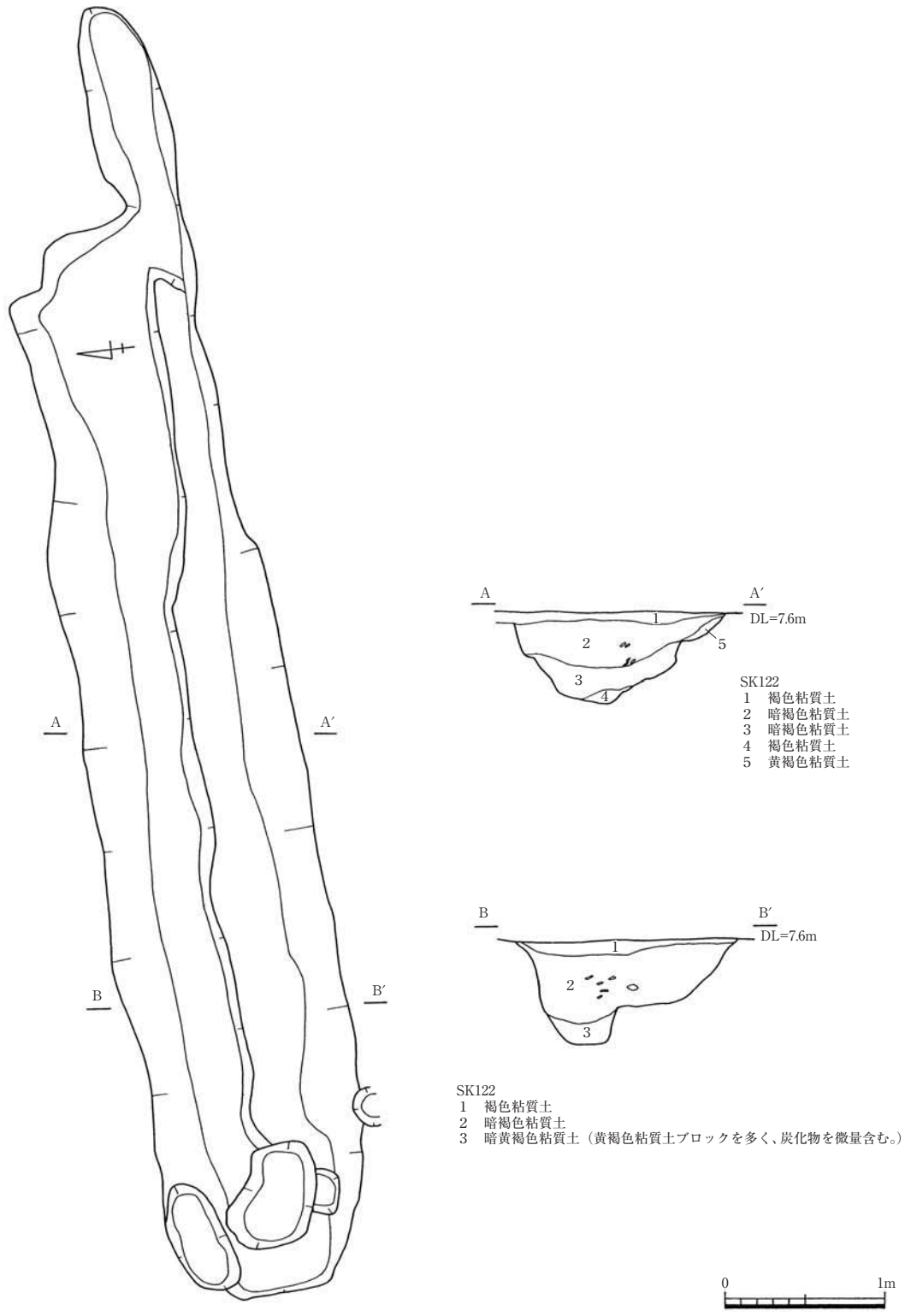
付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 2、口縁 1、底部 1、胴部破片 64

所見：調査区中央部南に位置する。出土遺物は1は甕の底部と考えられる。平底の底部から体部はやや開き気味に立ち上がる。2は小型の鉢で小孔を有する。時期は弥生V期でも前半の可能性が強い。



K1-64 図 K1SK119



K1-65 図 K1SK122(1)

K1SK125(K1-69 図)

時期：弥生V-1 形状：円形 主軸方向：—

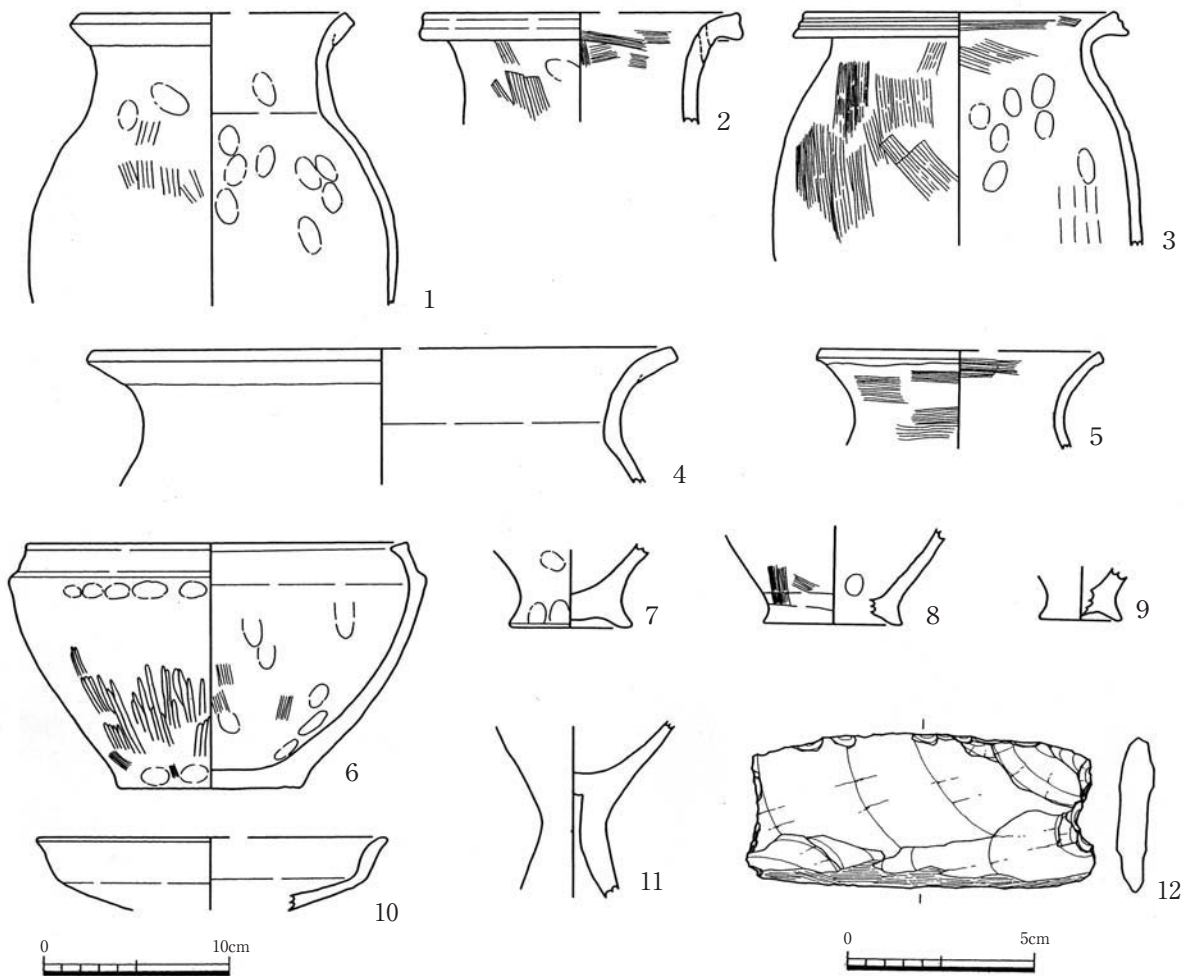
規模：1.15×1.15m 深さ：0.41m 断面形態：U字状

埋土：茶褐色粘質土

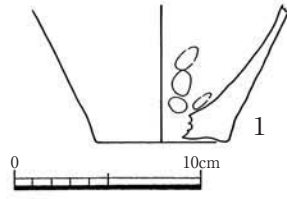
付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 5、口縁 2、底部 3、胴部破片 137

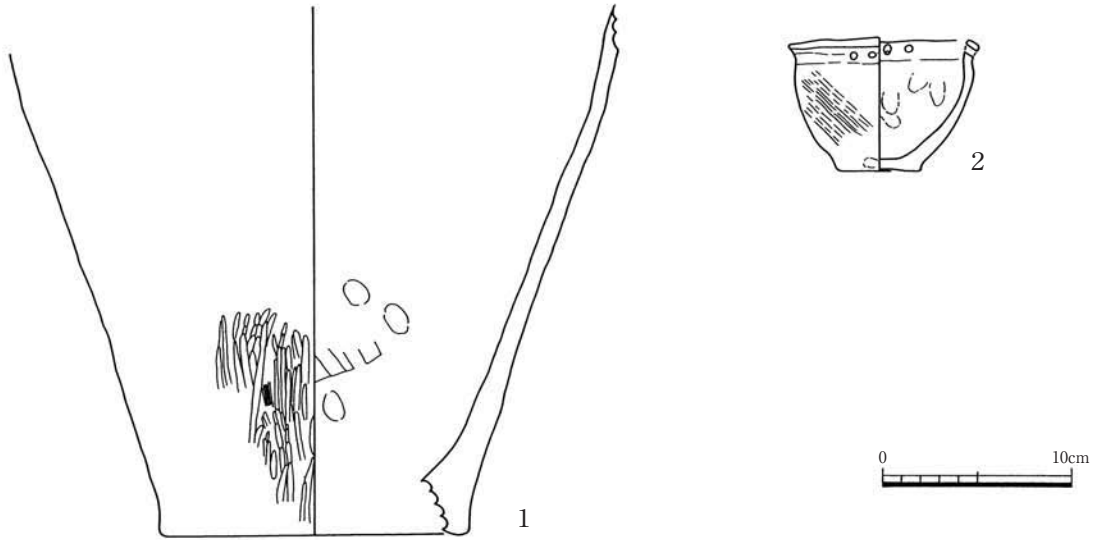
所見：調査区東端北寄りに位置する。ST114・115に隣接する。出土遺物は1・2が壺で1は頸部が大きく外反し、口唇にキザミを施す。2は肩部に円形浮文、頸部から胴部上半に櫛描沈線文を施し、やや器肉が薄く、堅致である。



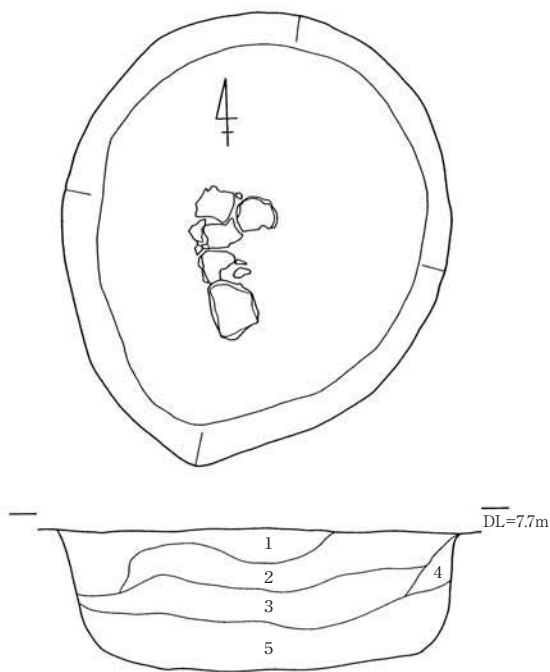
K1-66 図 K1SK122(2)



K1-67 図 K1SK123

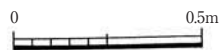


K1-68 図 K1SK124

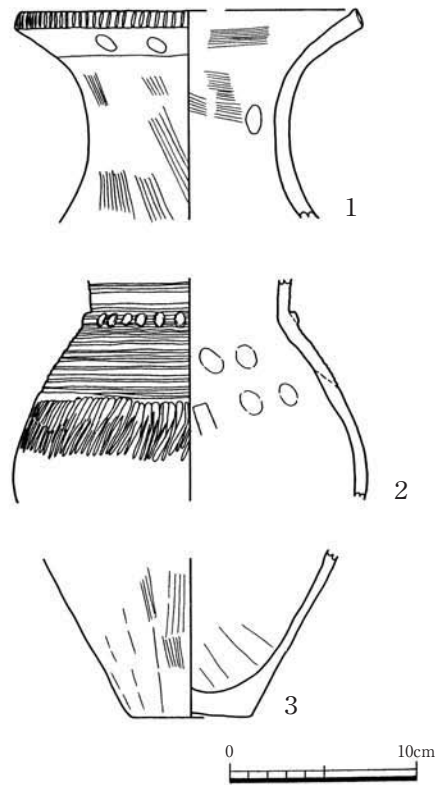


SK125

- 1 淡黄灰褐色粘質土（黄色粘質土ブロックを含む。）
- 2 茶褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 黄褐色粘質土
- 5 灰黄褐色粘質土



K1-69 図 K1SK125



K1SK126(K1-70 図)

時期：弥生V-1 形状：円形 主軸方向：—

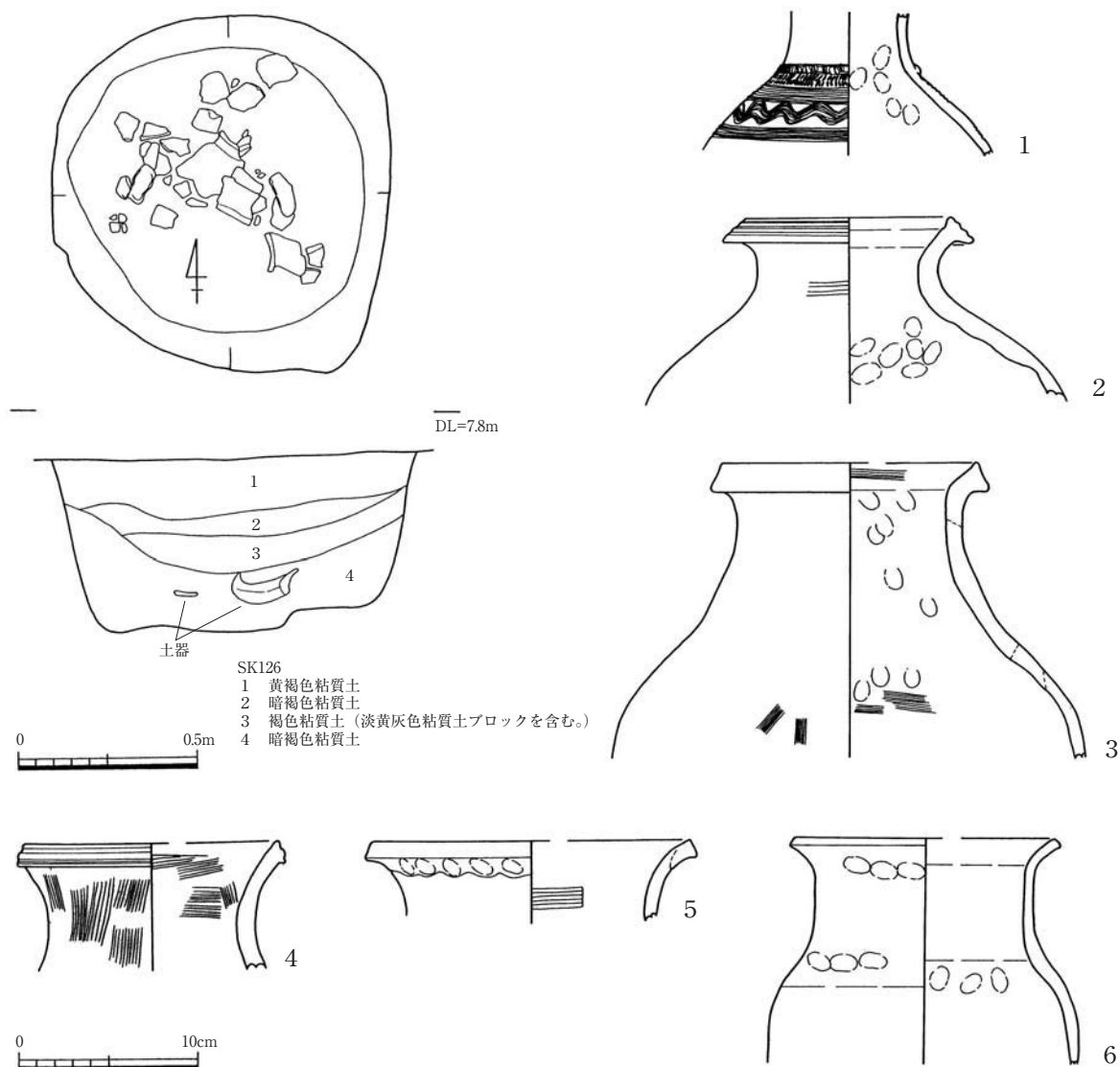
規模：1.00×1.00m 深さ：0.53m 断面形態：U字状

埋土：黄褐色粘質土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器7、口縁6、底部2、胴部破片 231

所見：調査区東端北寄りに位置する。ST114と隣接する。出土遺物は半完形品が6点出土している。1～5は壺で、6は甕である。1は櫛描沈線文、波状文、浮文の装飾を施したもので、器肉もやや薄く堅致である。2・5は口唇に凹線を施す。頸部は屈曲するものではなく、緩やかに外反する。5は口縁に粘土帯を貼付し強く押捺を施す。6は頸部が直立気味に立ち、口唇を拡張しないものである。SK125と遺構の形状も似ており、また隣接しているところから極めて近い時期のものと考えられる。



K1-70 図 K1SK126

K1SK127(K1-71 図)

時期；弥生V 形状；不整形 主軸方向；N-9°-W

規模；(1.40)×(0.80)m 深さ；0.12m 断面形態；皿状

埋土；褐色粘質土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；破片 14

所見；調査区西側中央に位置する。ST118 を切る。出土遺物は 1 の底部片である。調整は落剥の為不明である。ST118 との切り合い関係からして弥生V-3 の可能性がある。

K1SK129(K1-72 図)

時期；弥生IV-2 形状；長楕円形 主軸方向；N-17°-W

規模；2.70×0.55m 深さ；0.30m 断面形態；—

埋土；—

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器 1、口縁 1、底部 1、胴部破片 27

所見；調査区東寄り北に位置する。SD106 に切られる。小溝状の土坑である。出土遺物 1 は装飾を施した壺である。弥生中期末と考えられる。

K1SK133(K1-73 図)

時期；弥生III-3 形状；楕円形 主軸方向；N-57°-E

規模；(1.15)×(1.05)m 深さ；0.32m 断面形態；皿状？

埋土；黄灰色粘質土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器 4、口縁 5、胴部破片 132

所見；調査区東側やや北寄りに位置する。ST116 に切られる。出土遺物は 1・2 の壺、及び底部片である。1 は器肉が薄く、口縁に薄い粘土帯を貼付する。肩部にキザミを施す。2 も貼付口縁で口縁にキザミを連続的に施す。3 は 2 の底部と考えられる。

K1SK134(K1-74 図)

時期；弥生V-1 形状；長楕円形 主軸方向；N-81°-E

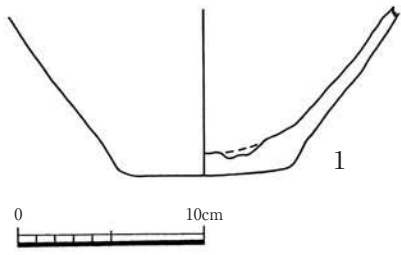
規模；2.25×0.60m 深さ；0.30m 断面形態；U字状

埋土；暗褐色粘質土

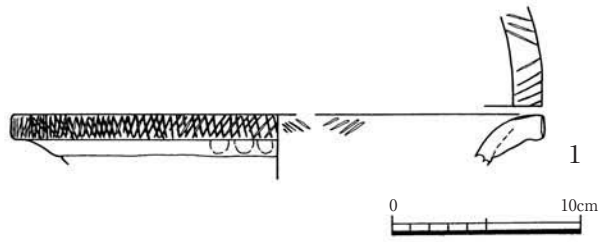
付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器 3、口縁 5、胴部破片 47

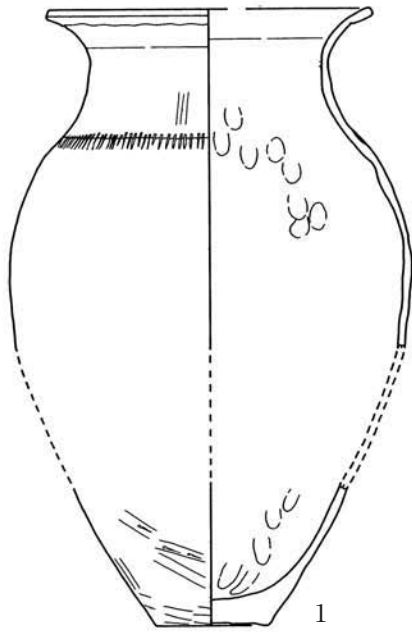
所見；調査区東端に位置する。大型礫、土器片が少量出土している。出土遺物は 1 の貼付口縁の器肉が薄い甕と 2 の底部片が出土している。



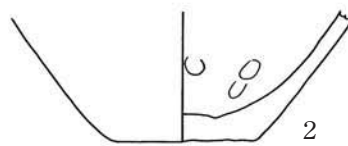
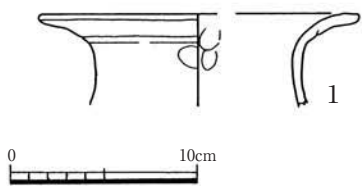
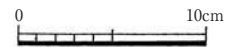
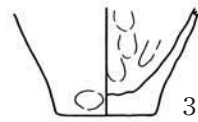
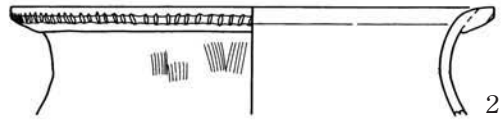
K1-71 图 K1SK127



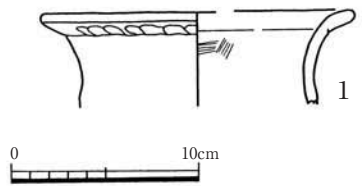
K1-72 图 K1SK129



K1-73 图 K1SK133



K1-74 图 K1SK134



K1-75 图 K1SK136

K1SK136(K1-75 図)

時期；弥生IV-2 形状；楕円形？ 主軸方向；N-62°-W

規模；(1.20)×(1.40)m 深さ；0.40m 断面形態；—

埋土；—

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器 2、口縁 1、底部 1、胴部破片 53

所見；調査区東側やや北寄りに位置する。ST116 に切られる。出土遺物は 1 の貼付口縁の甕、2 の底部脇がやや括れる平底が出土している。

K1SK137(K1-76・77 図)

時期；弥生V-1 形状；楕円形 主軸方向；N-4°-W

規模；(2.85)×0.45m 深さ；0.30m 断面形態；—

埋土；—

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器 9、口縁 5、胴部破片 224、石包丁 1

所見；調査区東端中央に位置する。南端は攪乱により壊される。土器片が纏まって出土している。

出土土器は 1～5 が甕で僅かに凹線文を施したものは 4 で、他のものは口唇を拡張しないものと拡張したものの両方が認められる。6 はミニチュア土器で櫛描沈線文を施した甕である。通常の甕と同様の装飾を施す。

石器は 8 が磨製石包丁の欠損品である。孔は 2 ケ所穿ち、背部は外湾する。

K1SK139(K1-78 図)

時期；弥生V 形状；円形 主軸方向；N-77°-E

規模；2.00×1.70m 深さ；0.12m 断面形態；—

埋土；—

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器 2、胴部破片 32

所見；調査区西側中央に位置する。ST118 に隣接する。出土遺物で実測図を提示できたものは 1・2 の底部のみである。胎土等からして弥生V期の前半と考えられる。

K1SK143(K1-79 図)

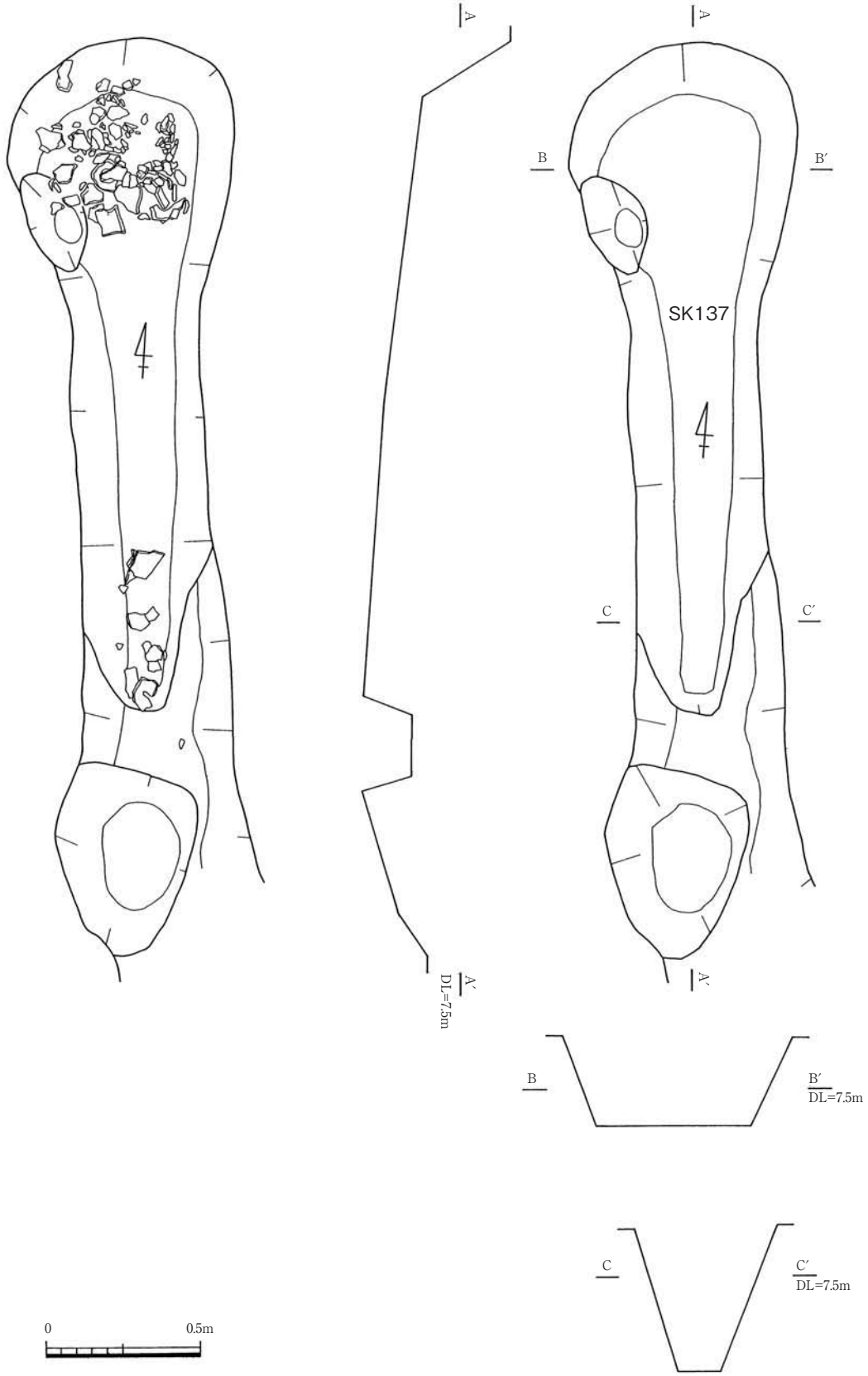
時期；弥生中・後期 形状；不整形 主軸方向；N-73°-E

規模；2.40×0.45m 深さ；0.35m 断面形態；皿状

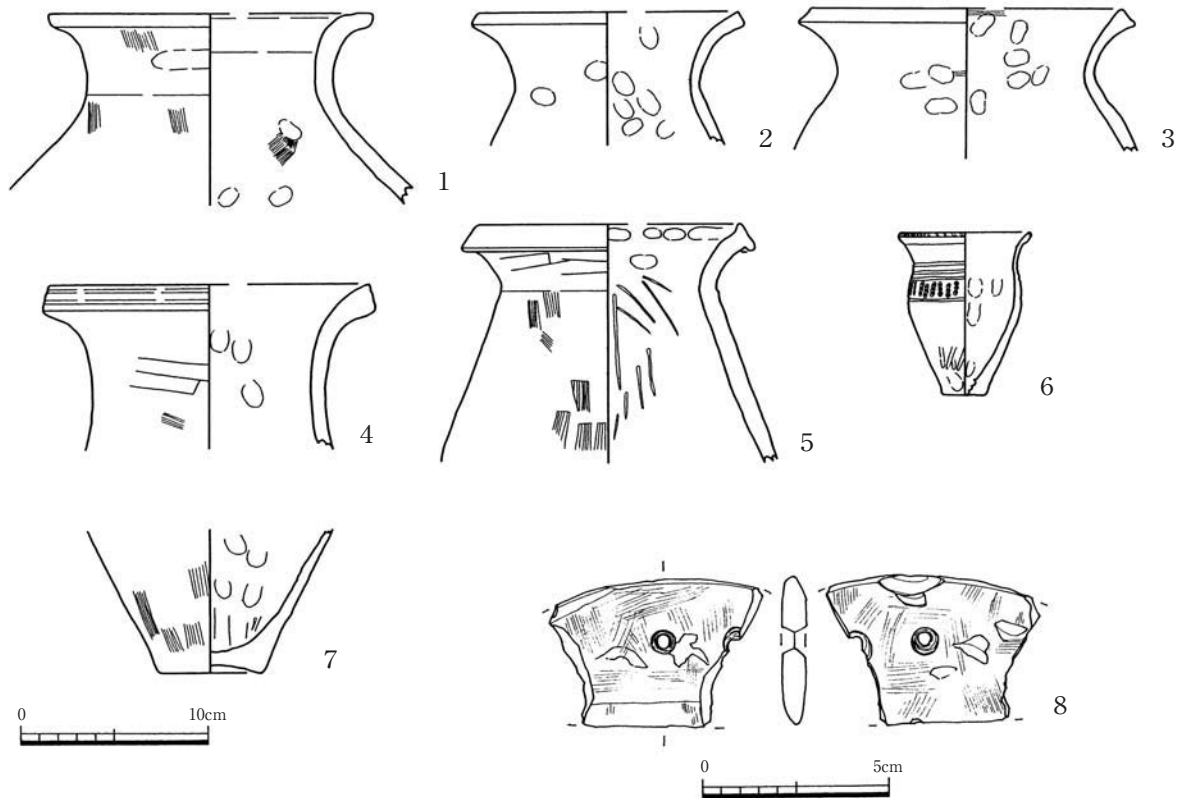
埋土；黄褐色粘質土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器口縁 3、胴部破片 16、石包丁 1、石鏃 1



K1-76 ☒ K1SK137(1)



K1-77 図 K1SK137(2)

所見：調査区西寄りに位置する。出土遺物で土器は図示できなかったものの、石器は1が石鏃の欠損品と考えられる。周辺部のみ僅かに調整を施す。2は磨製石包丁で器面は部分的に落剥するものの研磨を施す。長楕円形の形状で対称的な形態ではない。

K1SK144(K1-80 図)

時期：弥生IV～V 形状：楕円形 主軸方向：N-59°-W

規模：1.60×0.90m 深さ：0.05m 断面形態：—

埋土：—

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器1、口縁4、胴部破片26

所見：調査区東側南に位置する。東端は深さ66cmのピットとなる。出土遺物は1の甕の口縁部で口唇を拡張し凹線文を施す。

K1SK145(K1-81 図)

時期：弥生IV～V 形状：正方形 主軸方向：N-20°-W

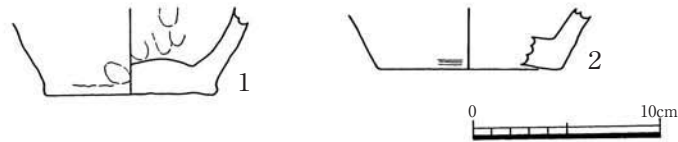
規模：(1.60)×1.45m 深さ：0.43m 断面形態：—

埋土：—

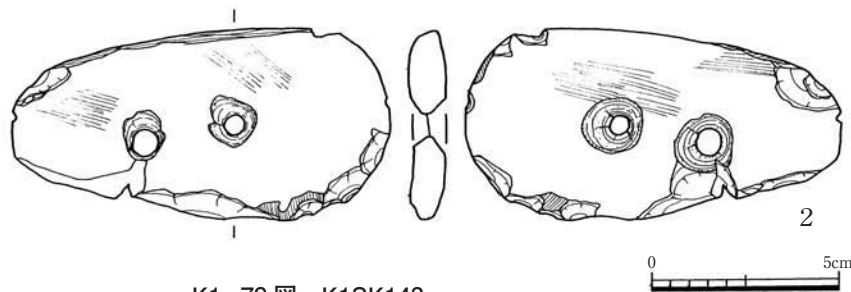
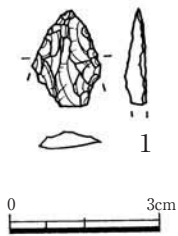
付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 1、口縁 3、胴部破片 21、台石 1

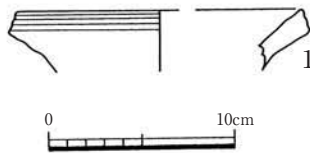
所見：調査区東側南に位置する。ST125 を切る。南側は攪乱によって壊される。土器片が少量出土している。出土遺物は 1 の壺で肩部は張らずなだらかに立ち上がる。時期は明確ではなく弥生IV～V期と考えられる。



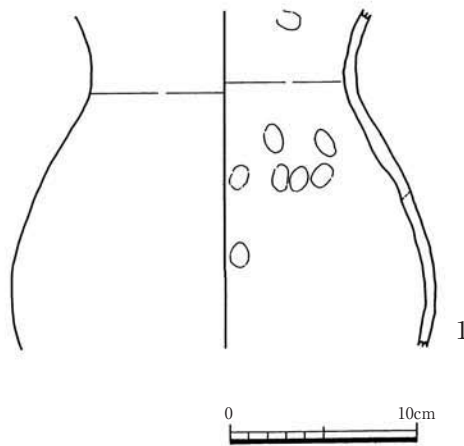
K1-78 図 K1SK139



K1-79 図 K1SK143



K1-80 図 K1SK144



K1-81 図 K1SK145

K1SK148 (K1-82 図)

時期：弥生V 形状：長方形 主軸方向：—

規模：(2.45)×1.85m 深さ：0.32m 断面形態：—

埋土：—

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 3、口縁 3、底部 2、胴部破片 80、叩石 1、砥石 1

所見：調査区東南部に位置する。中央部を攪乱によって壊される。土器片が少量出土している。実測図を提示できるものは極めて少ない。1 は甕か壺の底部である。弥生V期の前半の可能性がある。

石器は 2 が叩石の欠損品で表面及び側面に敲打痕を有する。

K1SK149 (K1-83 図)

時期：弥生III~IV 形状：楕円形 主軸方向：N-58°-E

規模：3.10×1.10m 深さ：0.48m 断面形態：U字状

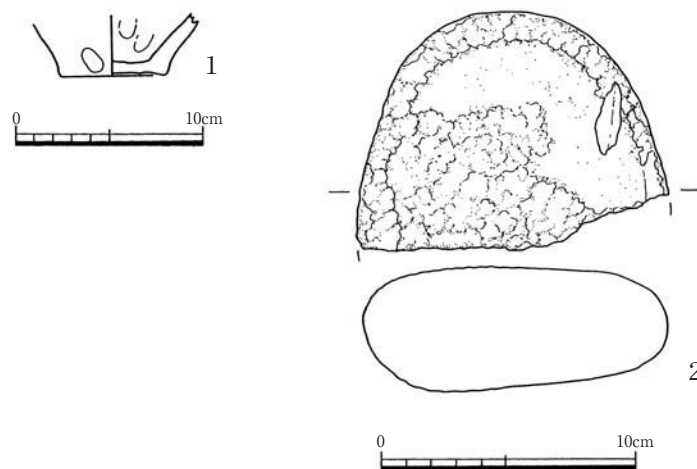
埋土：黄褐色粘質土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 5、口縁 4、底部 3、胴部破片 116、石斧未製品 1

所見：調査区東南部に位置する。東側部を僅かに壊される。土器片が少量出土している。ST126 を切る。出土遺物は 1 の口縁が強く屈曲した甕が出土している。胎土に金雲母らしきものが少量含まれる。搬入品の可能性がある。ST126 は弥生III-3 期の可能性があり、それを切っているところからして、弥生III-3 ~IV-1 期の可能性が考えられる。

石器は 4 の石斧の未製品と考えられるものが 1 点出土している。表裏面共に粗い調整加工を施し、刃部も調整を施すものの礫皮を残し、最終仕上げは施されていない。



K1-82 図 K1SK148

K1SK150(K1-84 図)

時期：弥生V-1～2 形状：長楕円形 主軸方向：—

規模：4.30×0.40m 深さ：0.30m 断面形態：—

埋土：—

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 2、口縁 2、胴部破片 122

所見：調査区東寄り南に位置する。小溝状の土坑である。出土遺物は1の口縁が開く壺が出土している。弥生V-1～2期と考えられる。

K1SK151(K1-85～87 図)

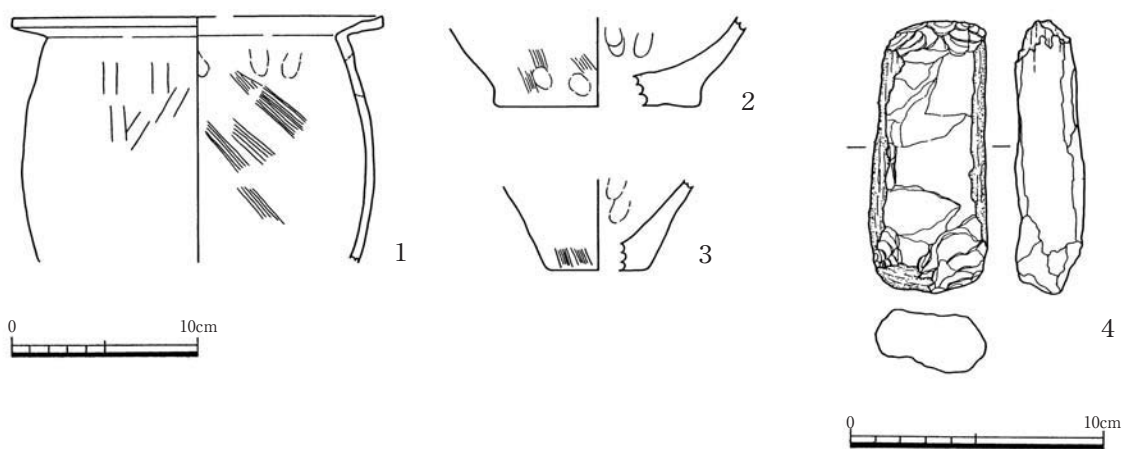
時期：弥生IV-2 形状：長方形 主軸方向：N-6°-E

規模：1.80×1.50m 深さ：0.37m 断面形態：箱形

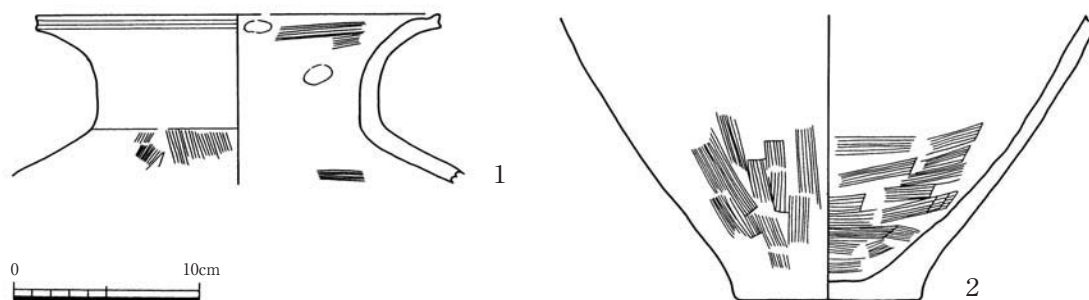
埋土：褐色粘質土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 25、口縁 4、底部 2、胴部破片 580、石斧？ 1

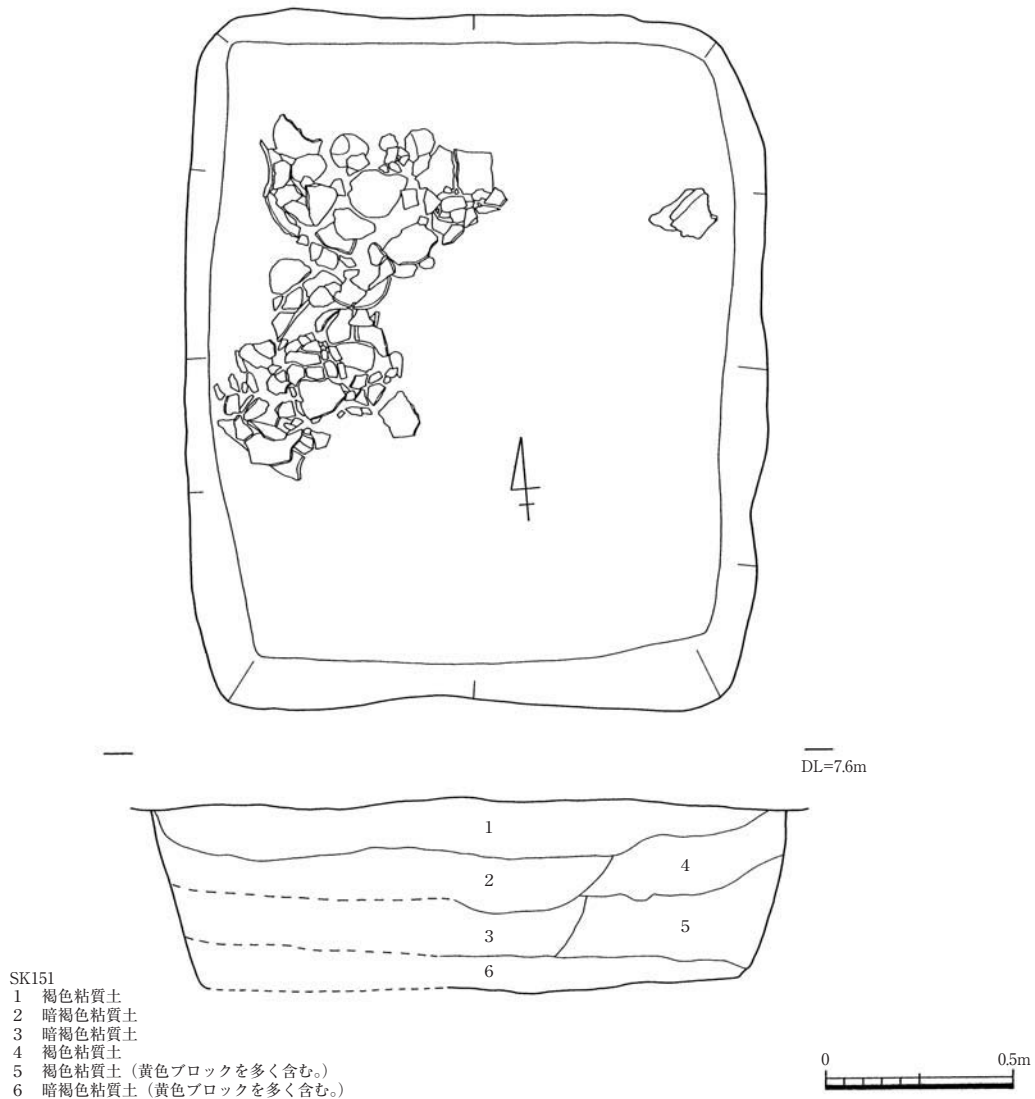


K1-83 図 K1SK149

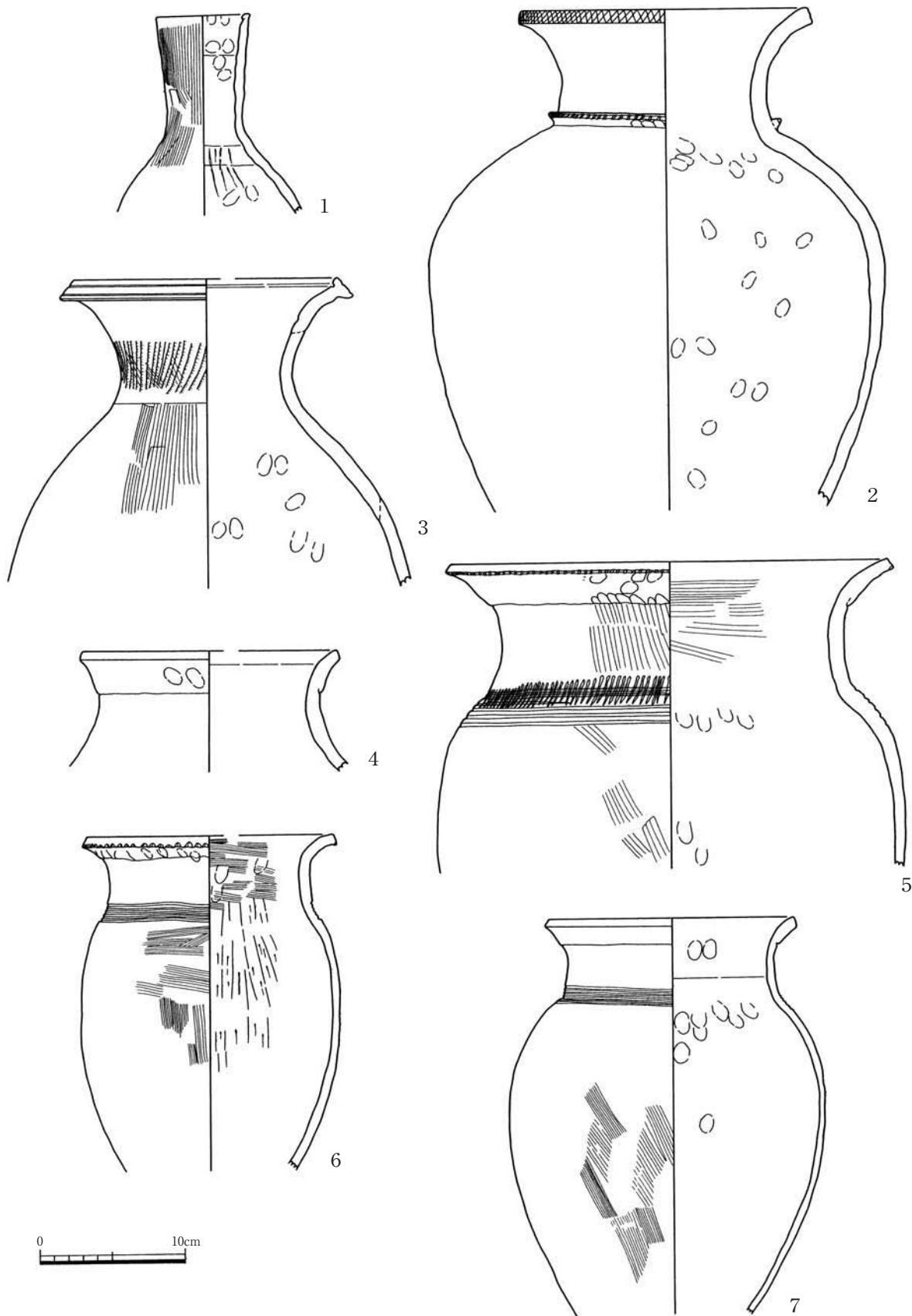


K1-84 図 K1SK150

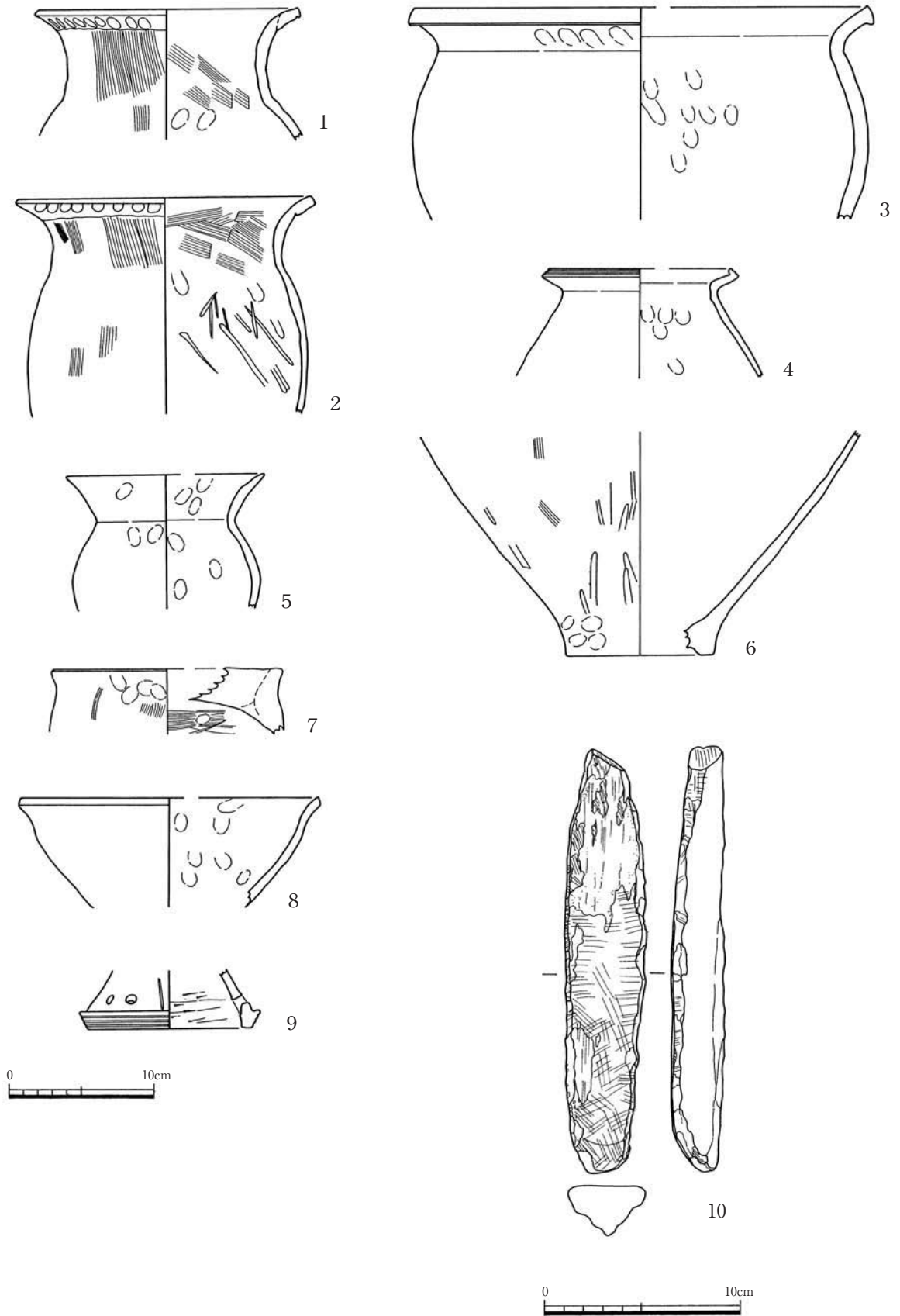
所見；調査区東寄り南に位置する。土器片が多量に纏まって出土している。出土遺物は1が細頸壺、2～4も壺で2は頸部に隆帯を持ち、口唇に斜格子文を持つ、3は凹線文、4は貼付口縁で口唇をやや摘み上げる。86-5～7、87-1～4は甕で86-5～7、87-1・2は口縁に粘土帯を貼付したものである。87-4は凹線文で頸部が強く屈曲する。87-5・8は鉢で87-8は碗状に近い器形である。87-7は回転台形土器で搬入品の可能性が考えられるが不明である。87-9は高杯の円孔を有する裾部で、内面がへら削りである。



K1-85 図 K1SK151(1)



K1-86 ☒ K1SK151(2)



K1-87 図 K1SK151 (3)

K1SK152(K1-88 図)

時期；弥生IV～V **形状**；長方形 **主軸方向**；N-66°-E

規模；2.00×1.40m **深さ**；0.27m **断面形態**；箱形

埋土；灰褐色粘質土

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器 1、口縁 2、胴部破片 21

所見；調査区東寄り南に位置する。ST125に切られる。出土遺物は1の甕で口縁は貼付口縁である。頸部は外反する。時期的には弥生IV-2期～V-1期と考えられる。

K1SK153(K1-89 図)

時期；弥生V **形状**；長方形 **主軸方向**；N-14°-W

規模；(2.20)×1.40m **深さ**；0.34m **断面形態**；皿状

埋土；黄褐色粘質土

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器 2、口縁 3、胴部破片 50

所見；調査区中央部に位置する。SD114を切る。また南東隅には柱穴が存在する。出土遺物は良好なものが少なく、1は壺で口唇が僅かに肥厚する。時期的には判然としないものの、弥生V期の前半と考えられる。

K1SK155(K1-90 図)

時期；弥生IV～V **形状**；楕円形 **主軸方向**；—

規模；2.05×0.75m **深さ**；0.40m **断面形態**；U字状

埋土；暗褐色粘質土

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器 2、口縁 7、底部 3、胴部破片 77

所見；調査区西寄りやや南に位置する。出土遺物は良好なものは少ない。1は貼付口縁の壺で弥生IV-2～V-1期が考えられるが、弥生IV-2により近い可能性が強い。2は底部である。

K1SK159(K1-91 図)

時期；弥生IV～V **形状**；正方形 **主軸方向**；N-5°-W

規模；2.20×2.15m **深さ**；0.44m **断面形態**；箱形

埋土；褐色粘質土

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器 4、口縁 9、胴部破片 122、サヌカイト剥片 1

所見；調査区やや西寄り南に位置する。出土遺物は1・2の壺で良好なものはない。2は貼付口縁で時期的には弥生IV-2～V-1期と考えられる。

K1SK162 (K1-92 図)

時期：弥生V-1 形状：長楕円形 主軸方向：N-85°-W

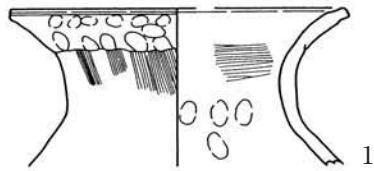
規模：2.20×0.70m 深さ：0.10m 断面形態：—

埋土：—

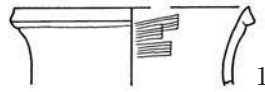
付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 1、口縁 2、胴部破片 6

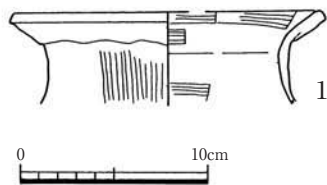
所見：調査区中央部やや北寄りに位置する。出土遺物は少ないものの、1の甕が出土している。口縁が屈曲し、口唇は余り肥厚させず、面になる。



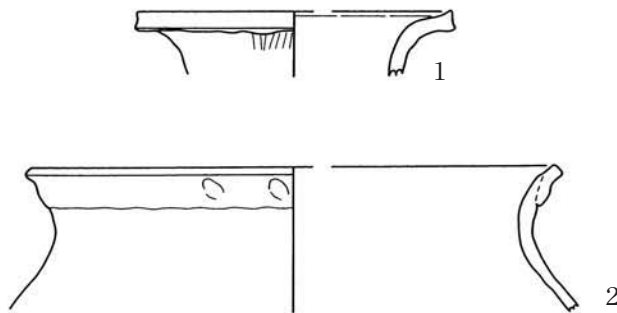
K1-88 図 K1SK152



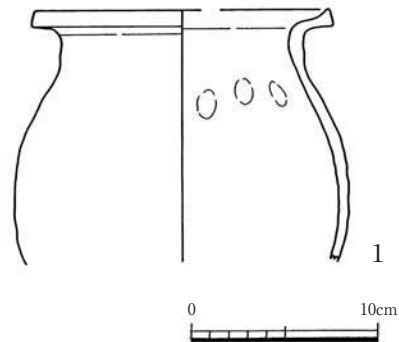
K1-89 図 K1SK153



K1-90 図 K1SK155



K1-91 図 K1SK159



K1-92 図 K1SK162

(4) 溝跡

K1-4 表 K1 区弥生溝跡一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	断面形	主軸方向	接続	時期	備考
K1SD108	— × 0.92 × 0.56	—	N-77°-E	—	弥生V-1	
K1SD109	9.13 × 1.55 × 0.44	U字形	N-81°-E	—	弥生V-1	
K1SD110	3.70以上 × 0.95 × 0.34	—	N-74°-E	—	弥生IV-2	
K1SD111	4.23 × 0.45 × 0.33	皿状?	N-65°-E	—	弥生V-1	
K1SD112	3.50 × 0.54 × 0.61	U字形	N-89°-E	—	弥生IV~V	
K1SD113	— × 0.68 × 0.37	箱形	N-49°-E	K1SD102・103	弥生IV~V	
K1SD114	— × 0.54 × 0.60	U字形	N-81°-E	—	弥生IV-2	
K1SD115	4.0以上 × 0.57 × 0.31	—	N-68°-W	—	—	
K1SD116	8.71 × 0.80 × 0.37	U字形	N-75°-W	—	弥生IV~V	
K1SD117	5.02以上 × 1.10 × 0.43	U字形	N-75°-W	—	弥生IV~V	
K1SD118	3.93 × 0.56 × 0.30	—	N-83°-E	—	弥生V-1	
K1SD119	3.00以上 × 0.42 × 0.24	皿状	N-29°-W	—	弥生IV~V	
K1SD120	4.50 × 0.59 × 0.40	U字形	N-53°-E	—	弥生V-1	
K1SD121	4.61以上 × 0.84 × 0.35	U字形	N-57°-E	—	弥生IV~V	
K1SD123	1.93 × 0.25 × 0.09	—	N-63°-E	—	弥生V-1	
K1SD124	6.09以上 × 0.49 × 0.19	—	N-57°-E	—	弥生IV-2	
K1SD125	5.88 × 0.58 × 0.44	—	N-80°-E	—	弥生IV-2	
K1SD126	4.66 × 0.41 × 0.20	—	N-66°-E	—	弥生IV~V	
K1SD127	2.95以上 × 1.00 × 0.49	—	N-85°-E	—	弥生IV-2	

K1SD108(K1-93・94 図)

時期：弥生V-1 主軸方向：N-77°-E

規模：— × 0.92m 深さ：0.56m 断面形態：—

埋土：暗褐色粘質土

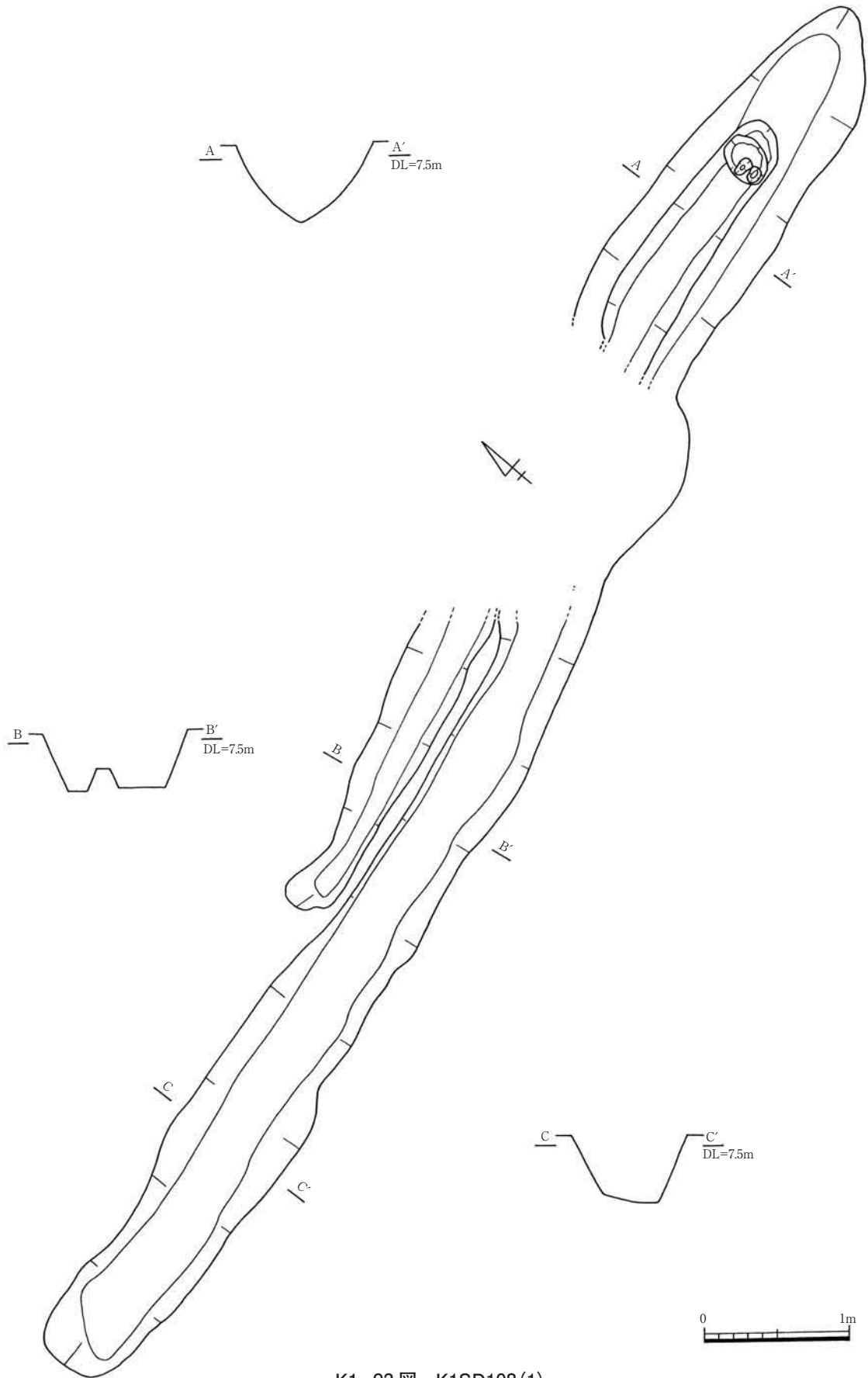
接続：無し

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢)、磨製石包丁

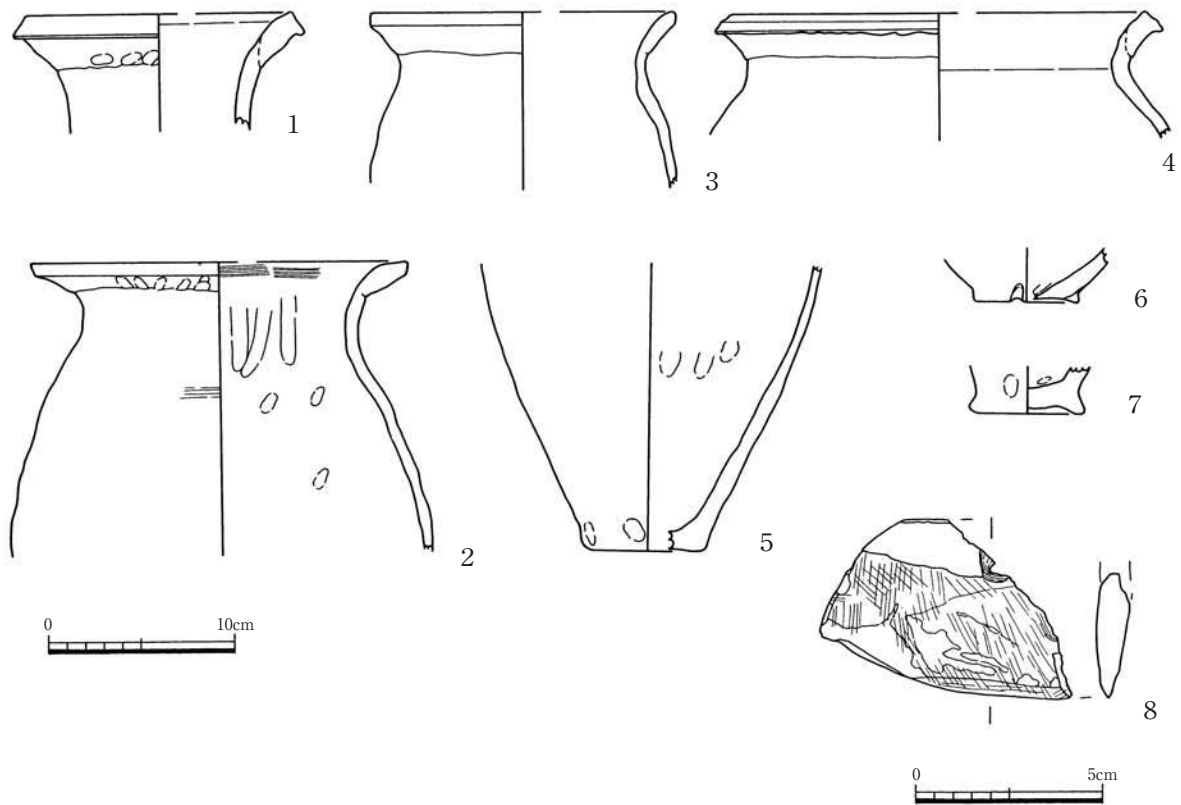
所見：調査区中央部やや東で検出した。長軸方向を同じくする、SD109・114・125が周辺に存在する。

出土遺物は1の壺、2～4の甕で、口縁部に粘土帯を貼付するもので、口唇は余り肥厚させず、凹線文を施さないものである。4の甕についてはSD109と同一個体のものが出土している。6・7は鉢の底部と考えられ高台状となる。6の底部脇には円孔が2ヶ所以上穿たれている。この円孔については用途等が不明である。出土遺物からして弥生V-1期と考えられる。

石器は8の磨製石包丁の欠損品である。刃部は外湾し、表面から研磨し刃部に角度を持つ。



K1-93 図 K1SD108(1)



K1-94 図 K1SD108(2)

K1SD109(K1-95 ~ 97 図)

時期；弥生V-1 主軸方向；N-81°-E

規模；9.13×1.55m 深さ；0.44m 断面形態；U字形

埋土；暗褐色粘質土

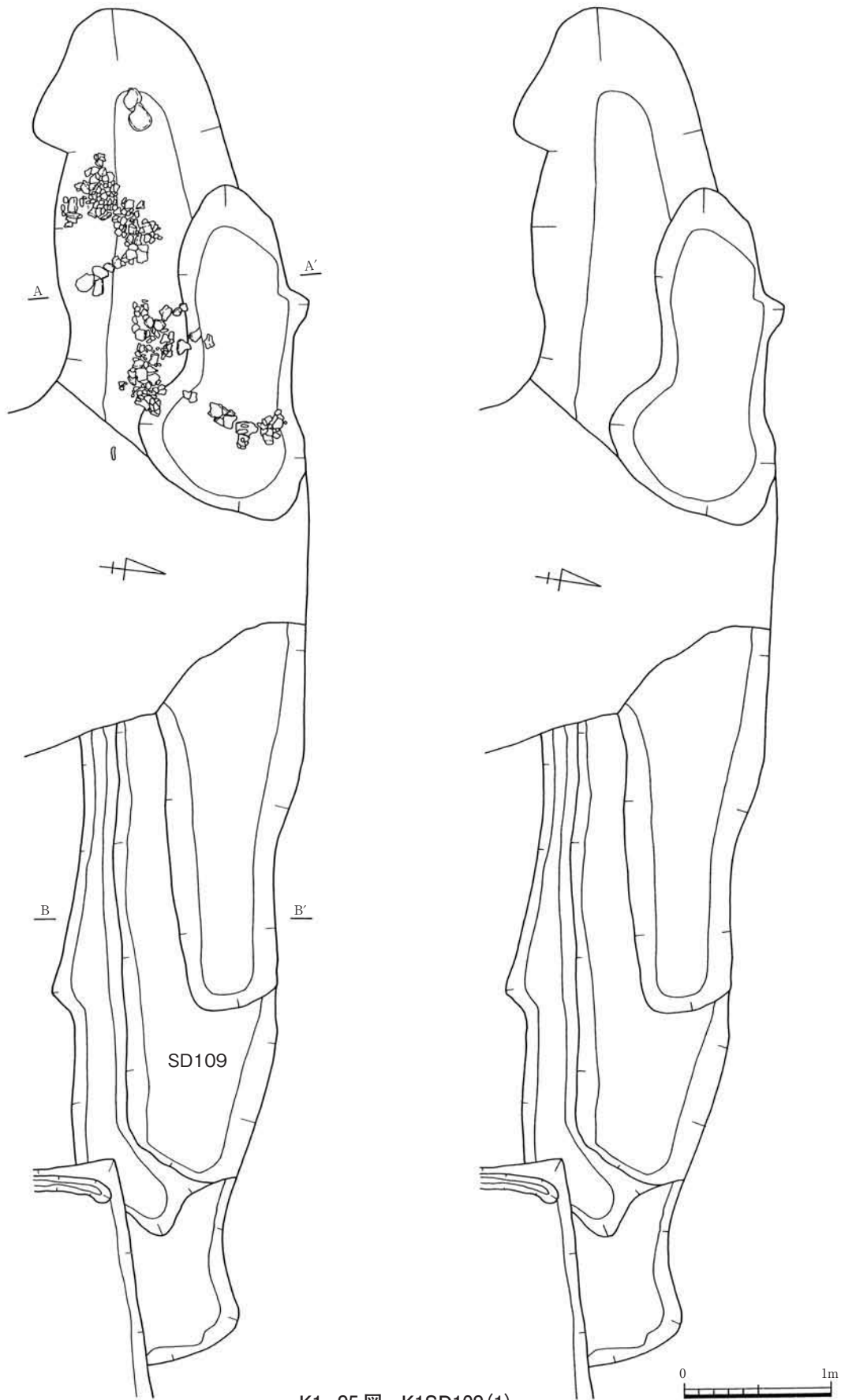
接続；無し

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)、スクレイパー、石斧

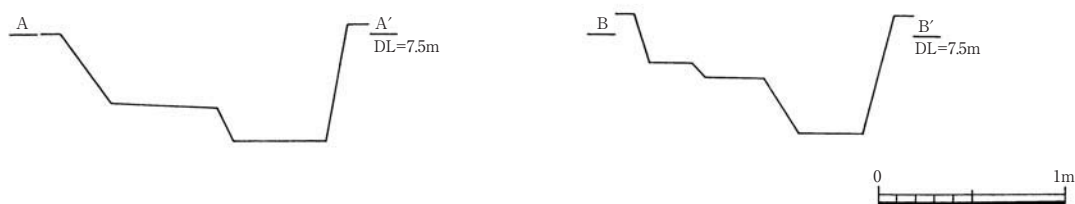
所見；調査区中央部やや東で検出した。長軸方向を同じくする、SD108・114・125が周辺に存在する。

出土遺物は1～4が壺で1・3は貼付口縁、4は小型壺である。共に口唇は肥厚せず、凹線文も施さない。5・6は甕で貼付口縁である。極めて似た甕である。7は肩部に櫛描沈線文を施し、口唇下端にキザミを施す。8は足高高台状の鉢の底部と思われる。SD108の4の甕と同一個体が出土しており、両方の溝状土坑は併存していた可能性が極めて高い。時期は弥生V-1期と考えられる。

石器は9がサヌカイト製のスクレイパー、10・11が石斧である。10はやや扁平な棒状の礫を素材とし、表裏面から研磨し、刃部を作出する。基部近くも面取り状に研磨を施す。11は磨製石斧の欠損品で基部のみ残存する。全体を研磨する。



K1-95 図 K1SD109(1)



K1-96 図 K1SD109(2)

K1SD110(K1-98 図)

時期；弥生IV-2 主軸方向；N-74°-E

規模；3.70 以上×0.95m 深さ；0.34m 断面形態；—

埋土；—

接続；無し

出土遺物；弥生土器(壺、高杯)

所見；調査区北東部で検出した。一部は調査区外へとのびる。

出土遺物は1～3は甕で、肩部が張らず、口縁の屈曲が強く、1・2の口縁には凹線文を施す。3には凹線文は認められない。4は高杯で脚端部は肥厚し、凹線文を施す。杯部との接合の粘土板は剥落する。脚部内面の調整にはヘラ削りを施す。

K1SD111(K1-99 図)

時期；弥生V-1 主軸方向；N-65°-E

規模；4.23×0.45m 深さ；0.33m 断面形態；皿状？

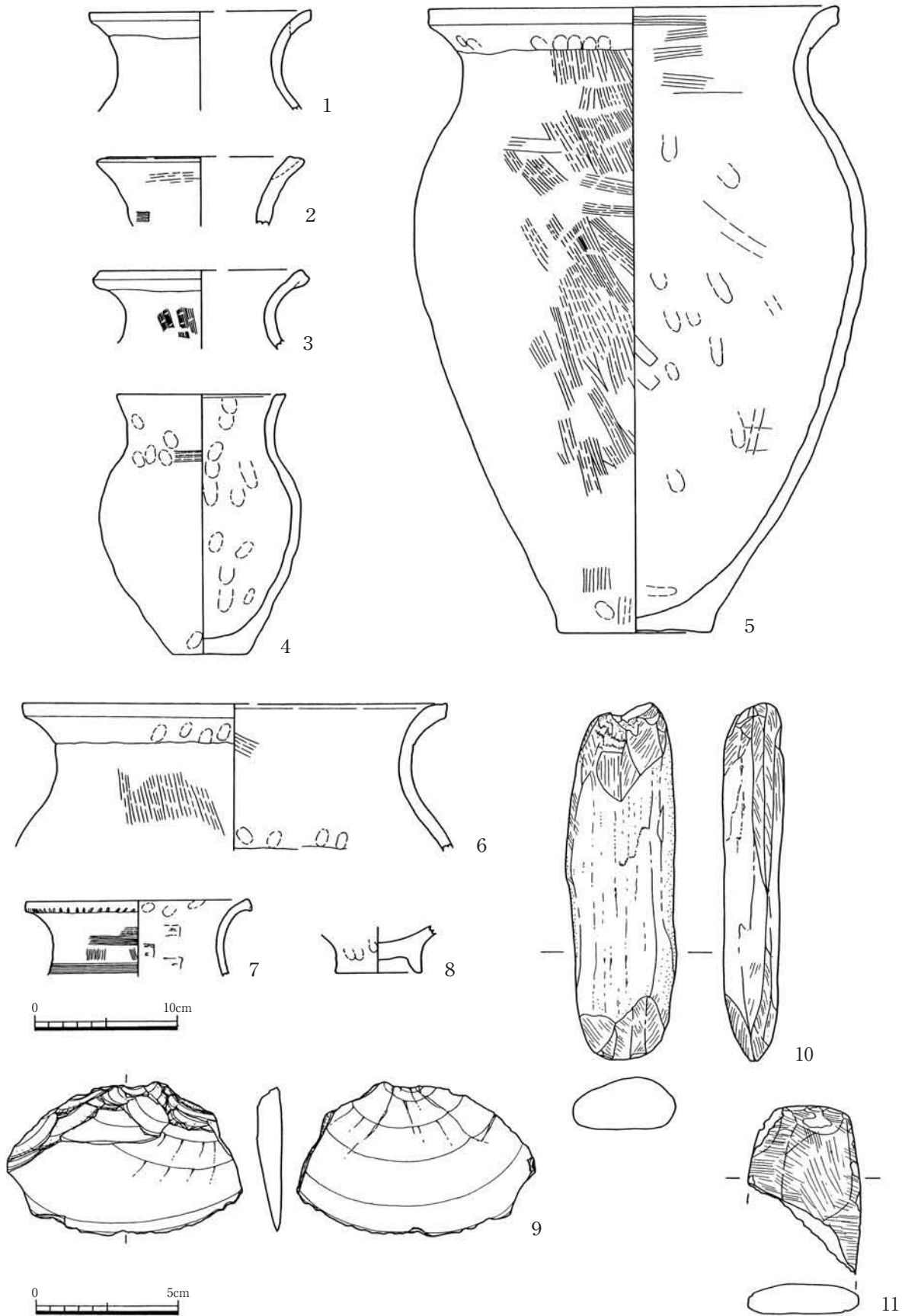
埋土；褐色粘質土

接続；無し

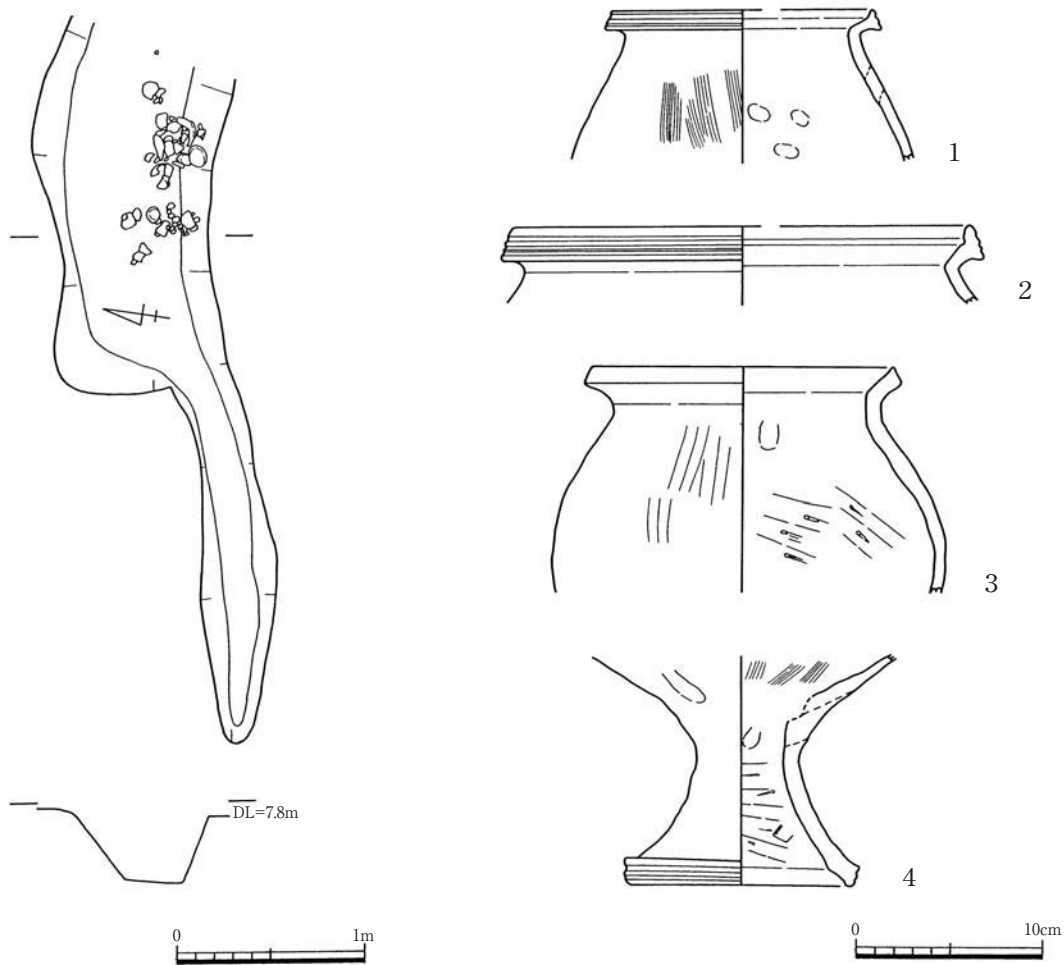
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見；調査区北東部で検出した。

出土遺物は1・2の口唇に凹線文を施した小型の壺、3は肩部に櫛描沈線文を施し口縁は貼付で、口唇下端にキザミを施した甕である。6・7は高杯で6は杯部にシャープさがなく、脚部裾端部も肥厚しないものである。7は口縁が直線的に立ち上がり、凹線文を施したものである。



K1-97 図 K1SD109(3)



K1-98 図 K1SD110

K1SD112(K1-100・101 図)

時期；弥生IV-2～V-1 主軸方向；N-89°-E

規模；3.50×0.54m 深さ；0.61m 断面形態；U字形

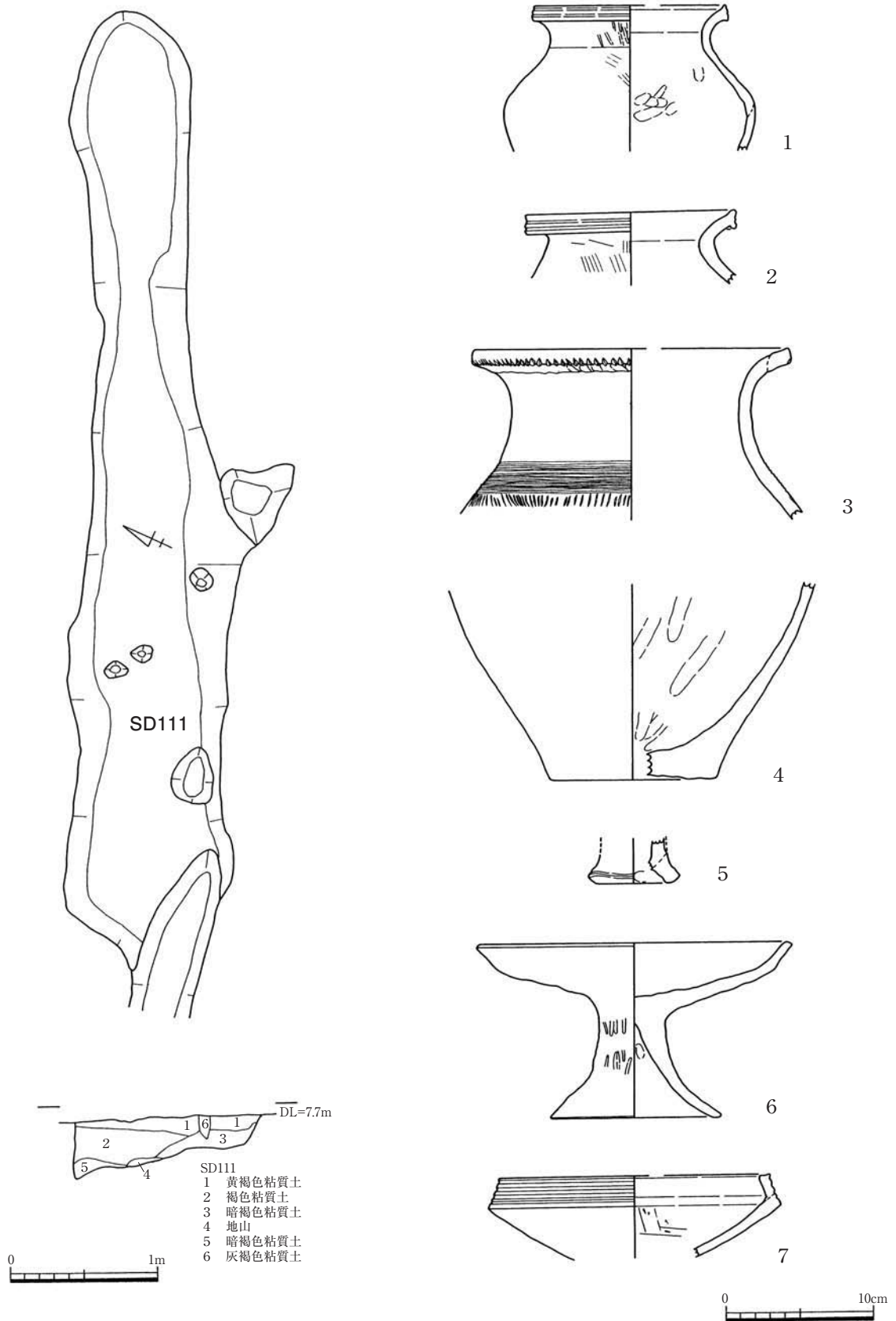
埋土；暗褐色粘質土

接続；無し

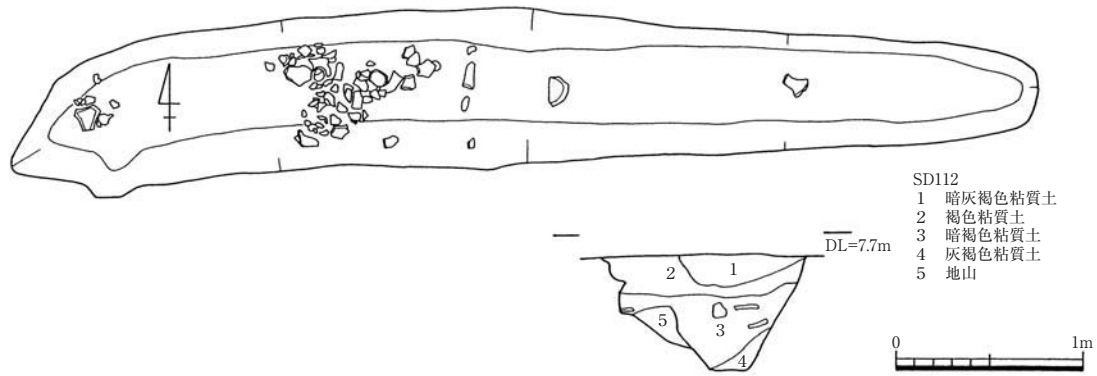
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見；調査区北東部で検出した。遺物は中央やや西よりの位置に集中して出土した。

出土遺物は比較的多く、1の無頸壺、2の凹線文、3・4の口唇下端にキザミを施したものが出土



K1-99 図 K1SD111



K1-100 図 K1SD112(1)

している。甕は5～10で大部分のものが口縁に粘土帯を貼付したものである。9・10は小型甕である。11～13は鉢で12は大型のものでやはり口縁は粘土帯を貼付したものである。13の器種については鉢としたものの判然としない。器形的には蓋に似るものの口縁はやはり粘土帯を貼付しているところから鉢とした。14～16は高杯で14は口縁に凹線文が巡る。15・16の脚部は沈線文の装飾を施し、内面にヘラ削りが認められる。出土遺物からして弥生IV-2期からV-1期と考えられる。

K1SD113(K1-102 図)

時期：弥生IV-2～V-1 主軸方向：N-49°-E

規模：—×0.68m 深さ：0.37m 断面形態：箱形

埋土：褐色粘質土

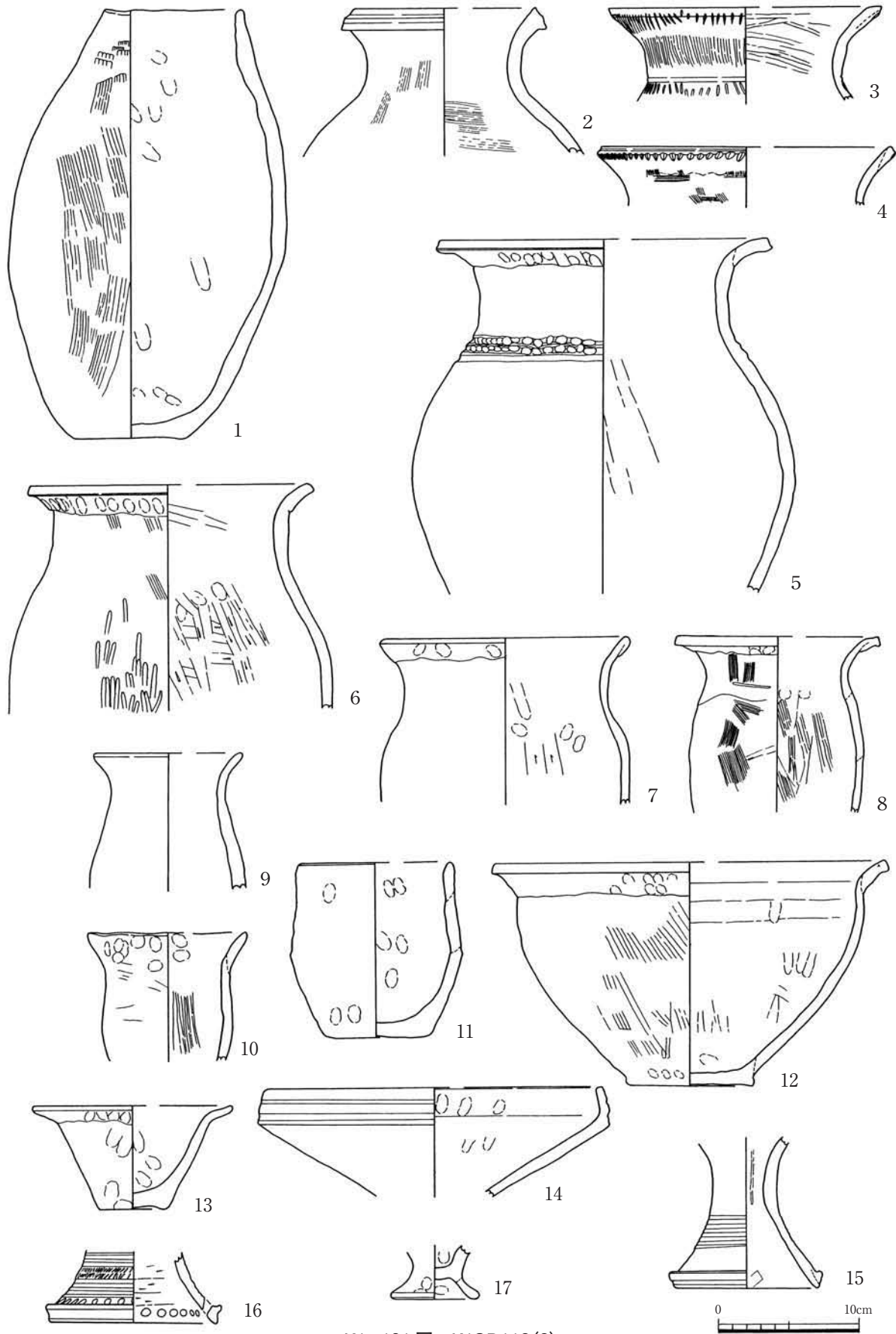
接続：大溝4 SD102・103

出土遺物：弥生土器(壺)、磨製石包丁、剥片

所見：調査区北東部で検出した。大溝4 SD102に接続し、北西方向から南東方向に直線的に走る。弥生IV-2期のST111に切られる。また、SD114、ST117・118と切り合い関係を有する。

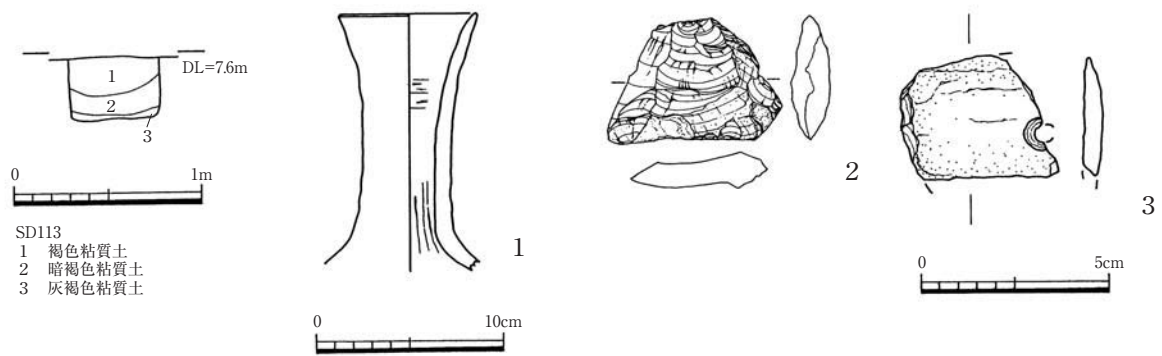
出土土器は極めて少なく、1の長頸壺が実測できたのみである。細い頸部は口縁部で僅かに開くのみである。切り合い関係からして構築時期は弥生IV-2期かそれ以前と考えられるものの、該期の明確な遺物は出土していない。

石器は2がチャート製の剥片、3が石包丁の欠損品である。孔が部分的に残存するのみである。



K1-101 図 K1SD112(2)





K1-102 図 K1SD113

K1SD114(K1-103～106 図)

時期：弥生IV-2 主軸方向：N-81°-E

規模：—×0.54m 深さ：0.60m 断面形態：U字形

埋土：暗褐色粘質土

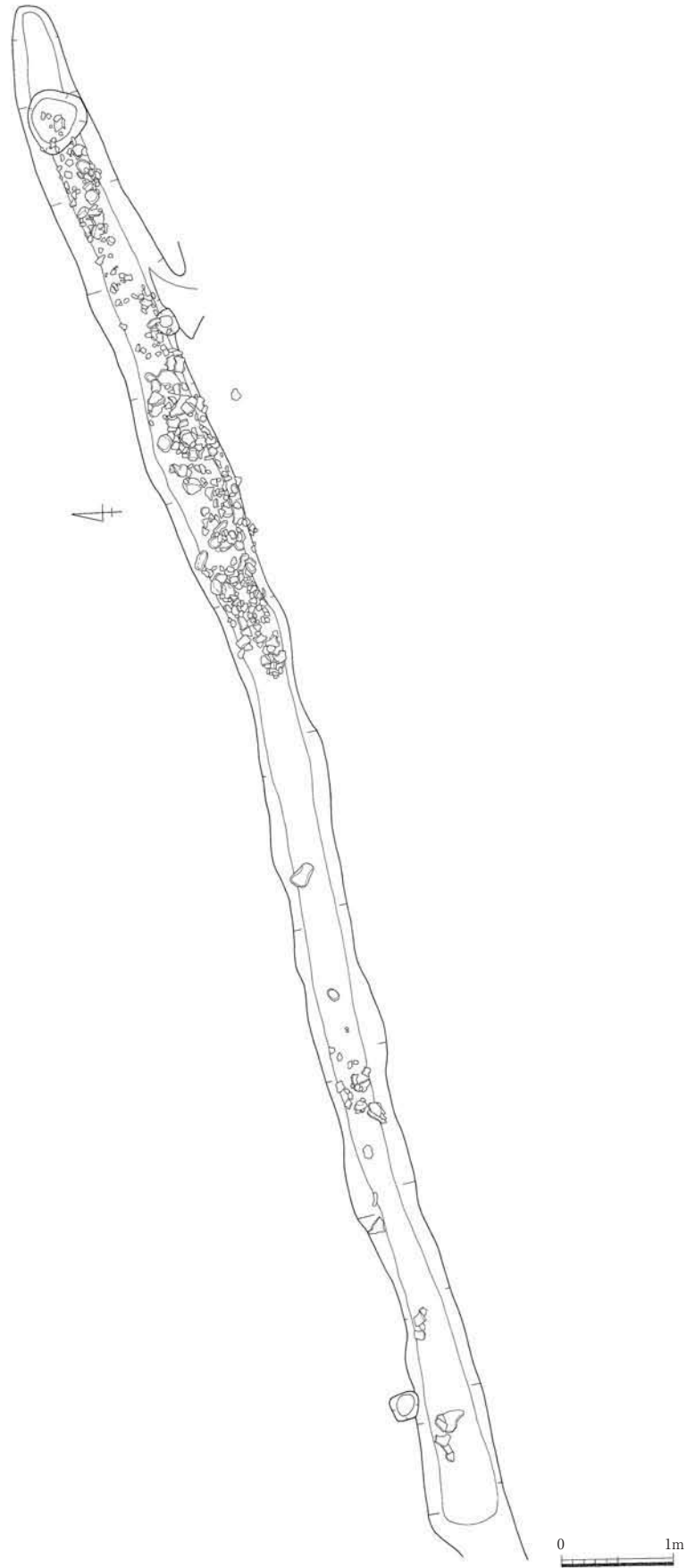
接続：無し

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)、磨製石包丁、打製石包丁、石器未製品

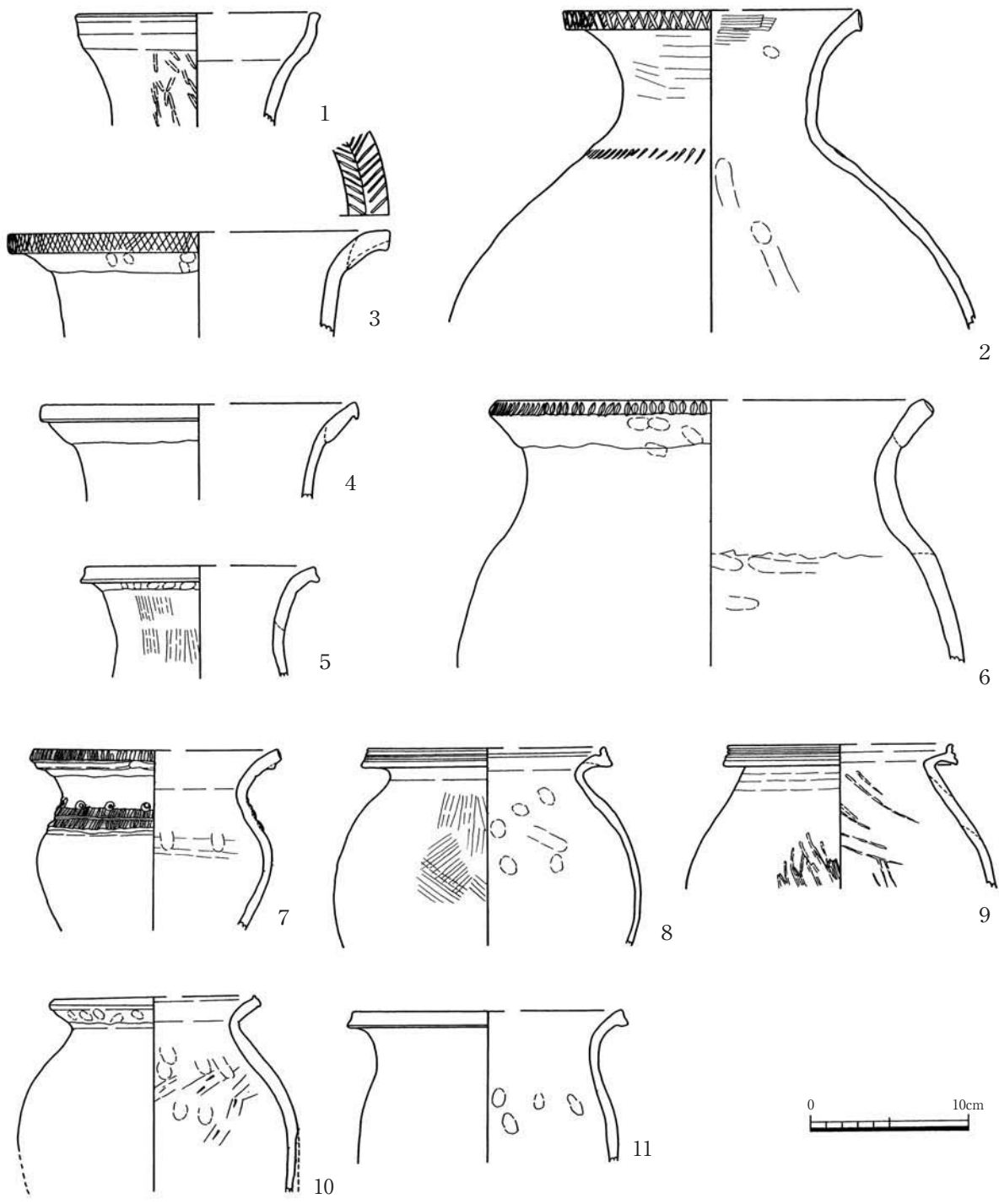
所見：調査区中央部やや東で検出した。長軸方向を同じくする、SD108・109・125が周辺に存在する。

出土土器は比較的多く、1～7は壺で1はやや受け口状の口縁を呈する。2・3は口唇に斜格子文、4～6は貼付口縁である。104-7～11、105-1は甕で、104-7は円形浮文等の装飾を施し、104-8・9は口唇に凹線文を施す。104-10・11は口唇が肥厚しないタイプのもので、凹線文等は施さない。105-1～3は鉢で、それぞれ器形が違っている。105-1は甕に近いもので、105-2は口縁が屈曲し開く、105-3は筒状のものである。105-4～6は高杯で、105-4は斜格子文等の装飾を脚部に施す。105-6は器肉の厚いものでずんぐりとした器形である。

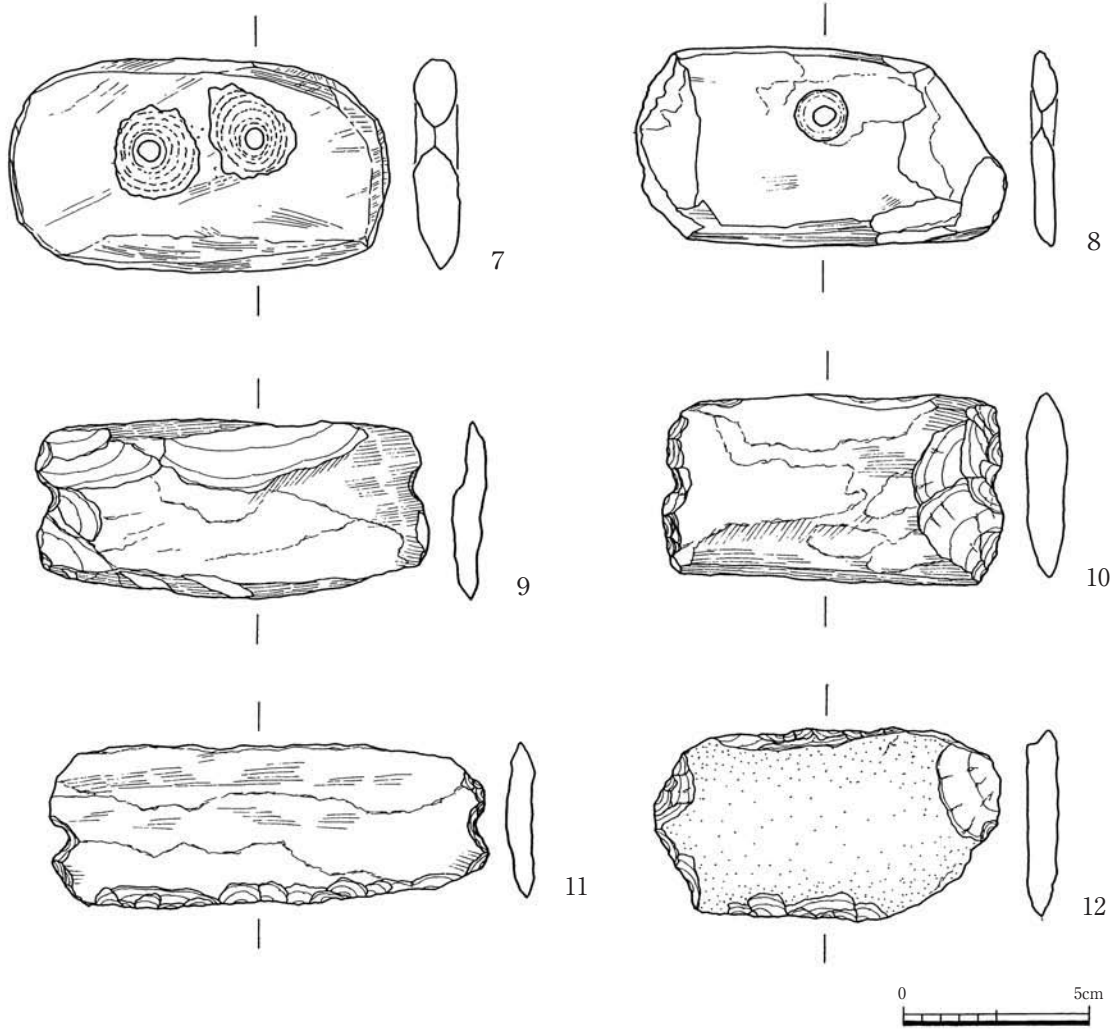
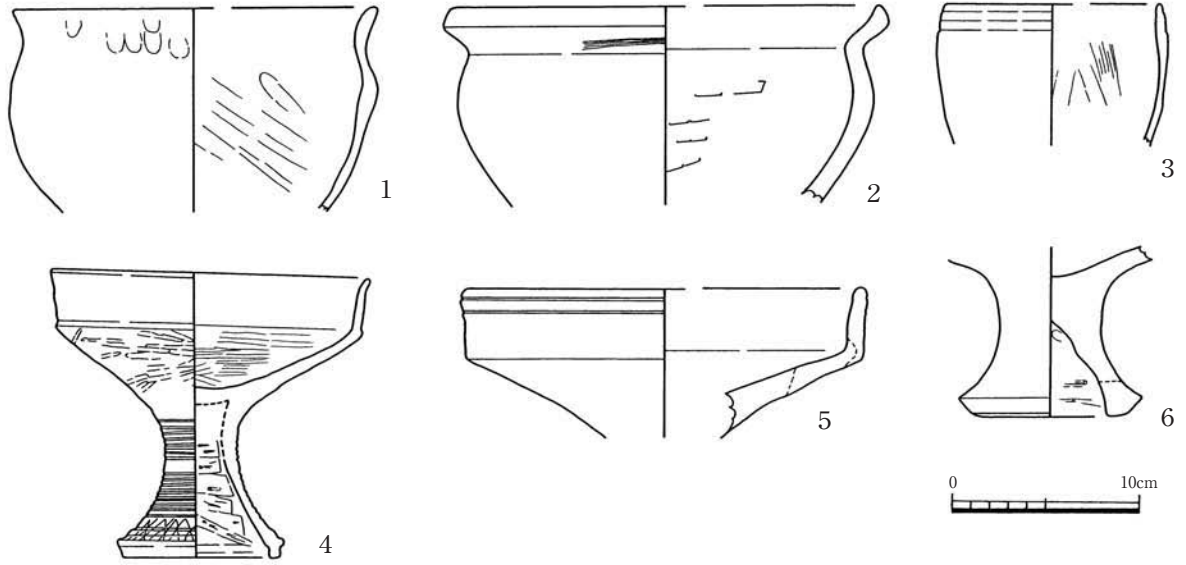
石器は石包丁105-7～12の6点がST111近くの床面からデポ状に纏まって出土している。他にも106-1～4も出土しており、極めて石包丁が多い。形態的には磨製、打製のものがあり、孔が1つのもの、2つのもの等があり多様である。しかしながら、直刃で片刃のものが多く、刃部を片面から特に研ぎ出すもので大半を占める。4については未製品の可能性がある。また6・7の軽石も出土しており、6は摩滅が認められ、丸味を持つ。軽石は遺跡内で出土するものは殆どのものが加工痕、使用の痕跡が認められないもので占められているものの、6のみ何らかに使用された可能性がある。



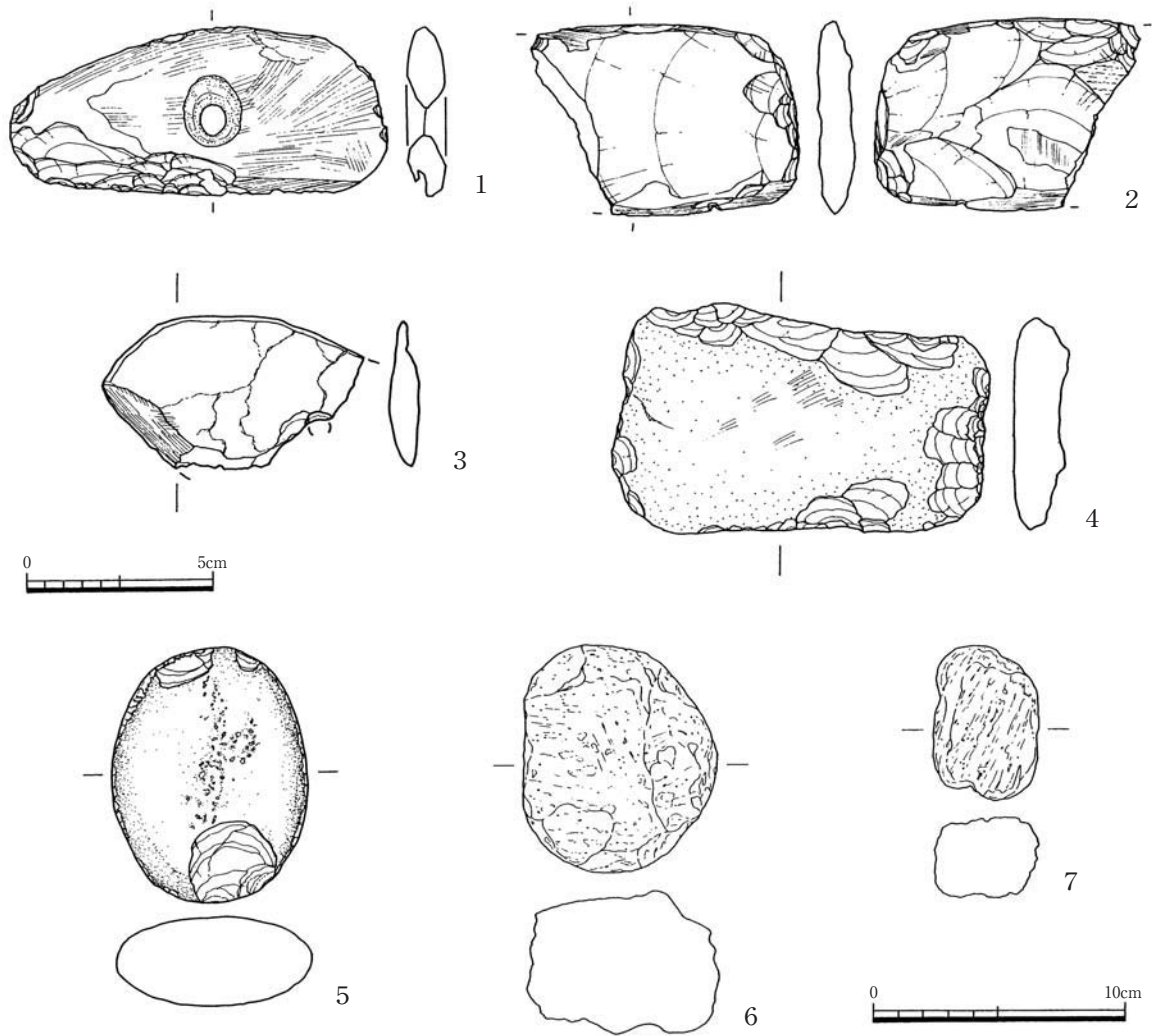
K1-103 図 K1SD114(1)



K1-104 图 K1SD114(2)



K1-105 図 K1SD114(3)



K1-106 図 K1SD114(4)

K1SD116(K1-107・108 図)

時期：弥生IV-2～V-1 主軸方向：N-75°-W

規模：8.71×0.80m 深さ：0.37m 断面形態：U字形

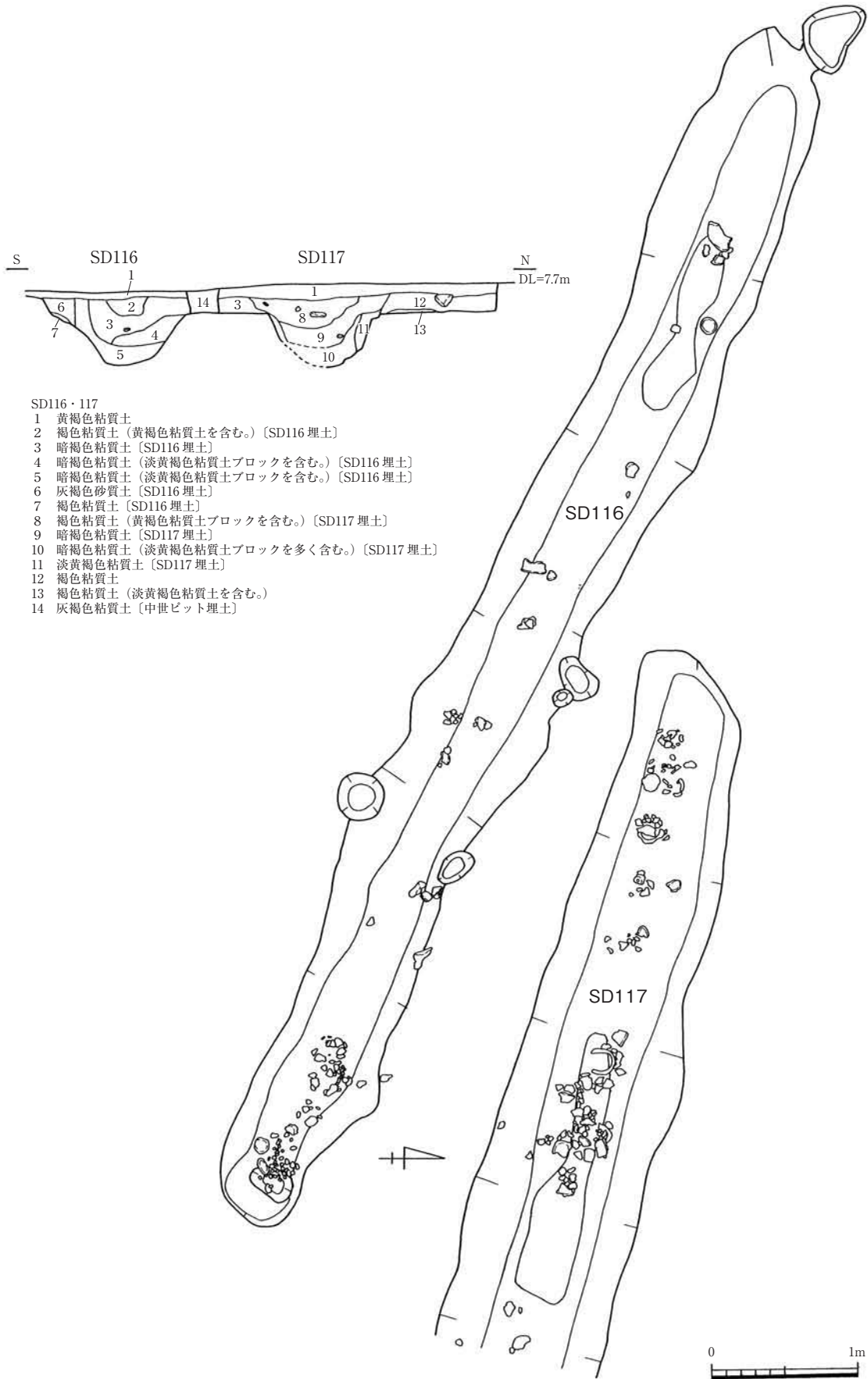
埋土：暗褐色粘質土

接続：無し

出土遺物：弥生土器(甕、壺、鉢)、石斧、投弾

所見：弥生IV-2期?のST120に切られる。

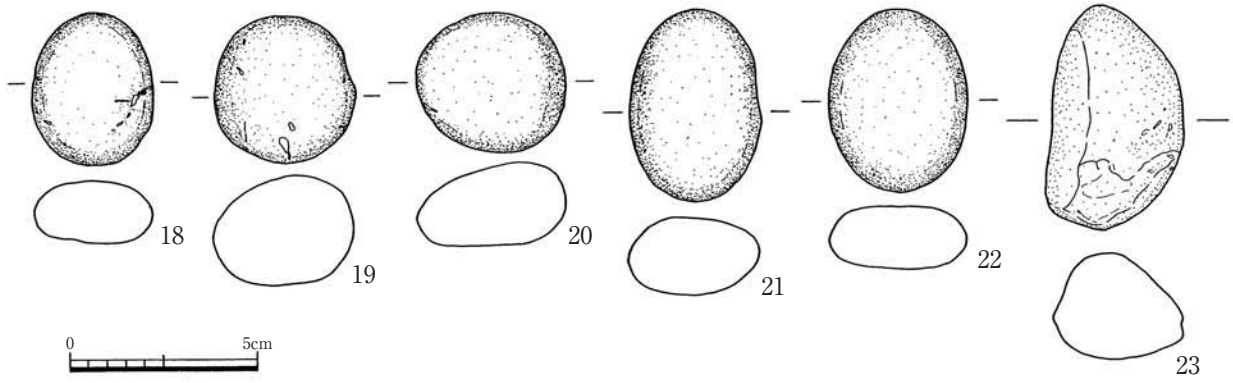
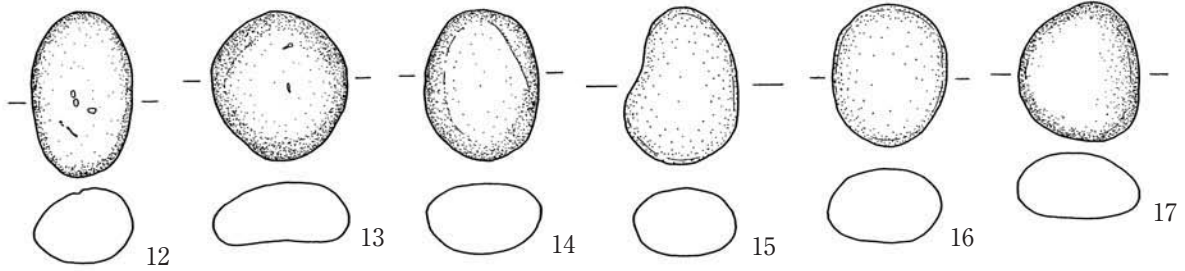
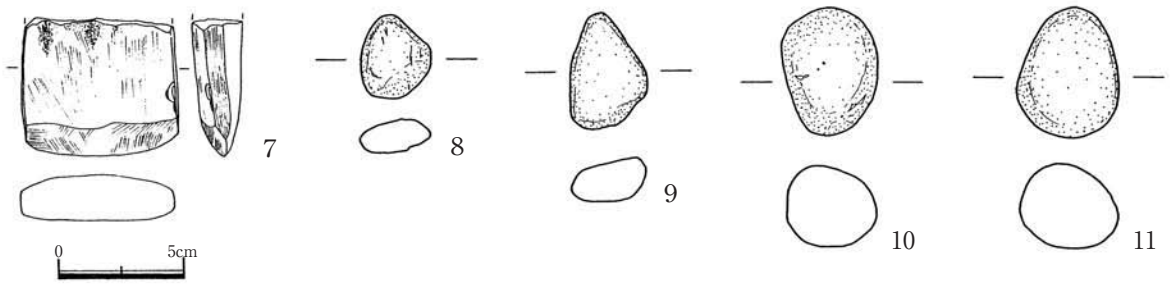
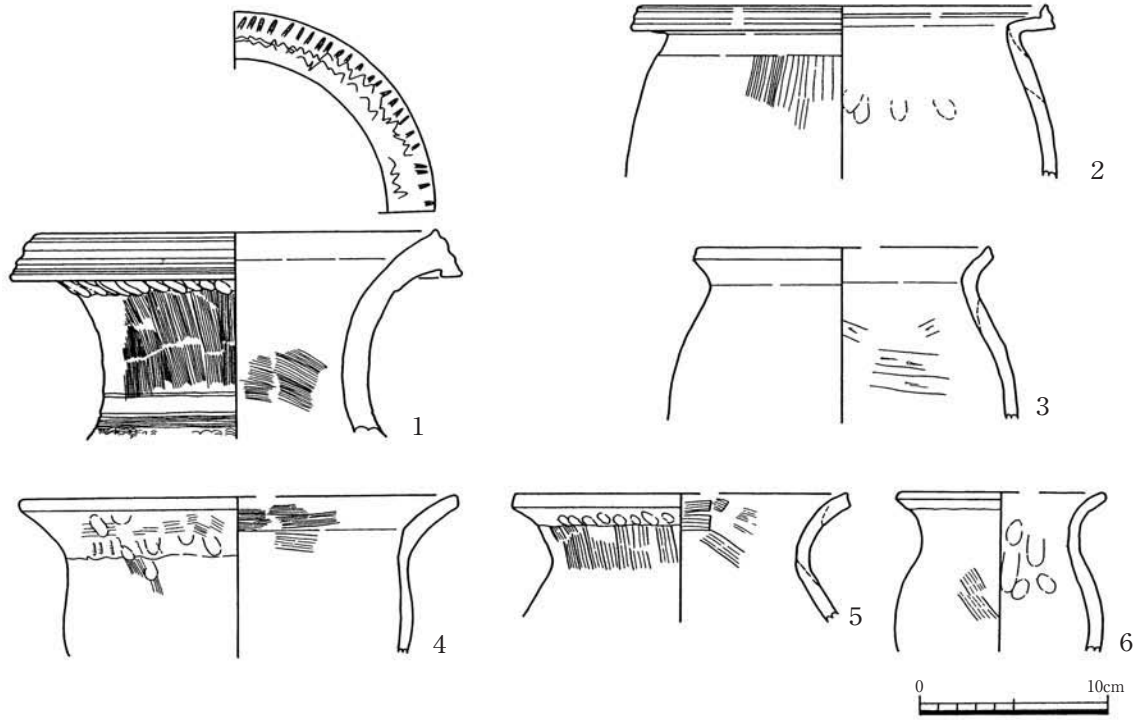
出土土器は1の口縁に凹線文を施し、波状文等の装飾を施した大型の壺、2～6は甕で、2は凹線文、他のものは口縁に貼付を施したもので等であるが、口唇は肥厚しないもので、頸部が緩やかに外反するもので占められている。その中で6は小型の甕である。時期は1・2については弥生IV-2期に相



SD116・117

- 1 黄褐色粘質土
- 2 褐色粘質土 (黄褐色粘質土を含む。) [SD116 埋土]
- 3 暗褐色粘質土 [SD116 埋土]
- 4 暗褐色粘質土 (淡黄褐色粘質土ブロックを含む。) [SD116 埋土]
- 5 暗褐色粘質土 (淡黄褐色粘質土ブロックを含む。) [SD116 埋土]
- 6 灰褐色砂質土 [SD116 埋土]
- 7 褐色粘質土 [SD116 埋土]
- 8 褐色粘質土 (黄褐色粘質土ブロックを含む。) [SD117 埋土]
- 9 暗褐色粘質土 [SD117 埋土]
- 10 暗褐色粘質土 (淡黄褐色粘質土ブロックを多く含む。) [SD117 埋土]
- 11 淡黄褐色粘質土 [SD117 埋土]
- 12 褐色粘質土
- 13 褐色粘質土 (淡黄褐色粘質土を含む。)
- 14 灰褐色粘質土 [中世ビット埋土]

K1-107 図 K1SD116(1)



K1-108 ☒ K1SD116(2)

当すと考えられるが、他のものは弥生IV-2期に含まれるか明確ではない。

石器は7が磨製石斧で刃部が幅広で片刃のものである。8～23の投弾で西端で纏まって出土している。小礫で加工痕等は認められない。

K1SD117(K1-109 図)

時期；弥生IV～V 主軸方向；N-75°-W

規模；5.02 以上×1.10m 深さ；0.43m 断面形態；U字形

埋土；暗褐色粘質土

接続；無し

出土遺物；弥生土器(甕、壺、高杯)、投弾

所見；調査区中央部で検出した。

出土遺物は1～5が壺で、僅かに凹線文が残るものが認められる。貼付口縁も少なく、口唇は肥厚せず、素口縁のものが多い。甕は6・7で6には僅かに凹線文が認められる。8・9は甕の底部と考えられる。10は台付鉢、11は高杯である。時期的には弥生V-1の可能性が強いものの、調査段階では弥生IV-2期?のST120に切られるとの所見を得ているものの、出土遺物からして切り合い関係は不確かとなっている。

石器は12の投弾が1点出土している。

K1SD118(K1-110 図)

時期；弥生V-1 主軸方向；N-83°-E

規模；3.93×0.56m 深さ；0.30m 断面形態；—

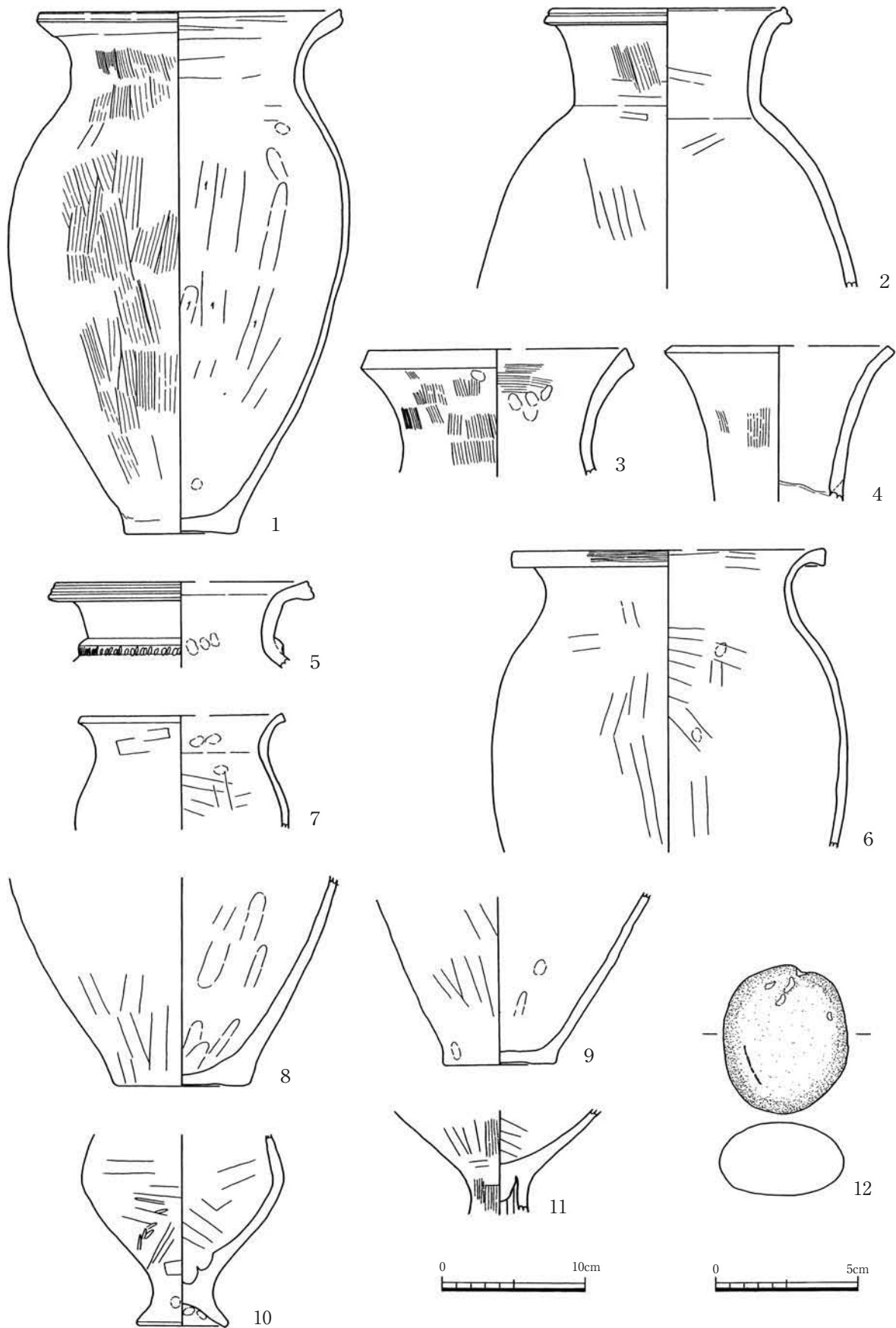
埋土；—

接続；無し

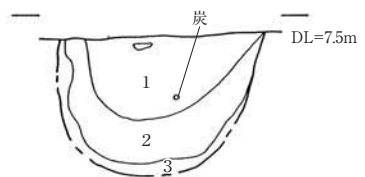
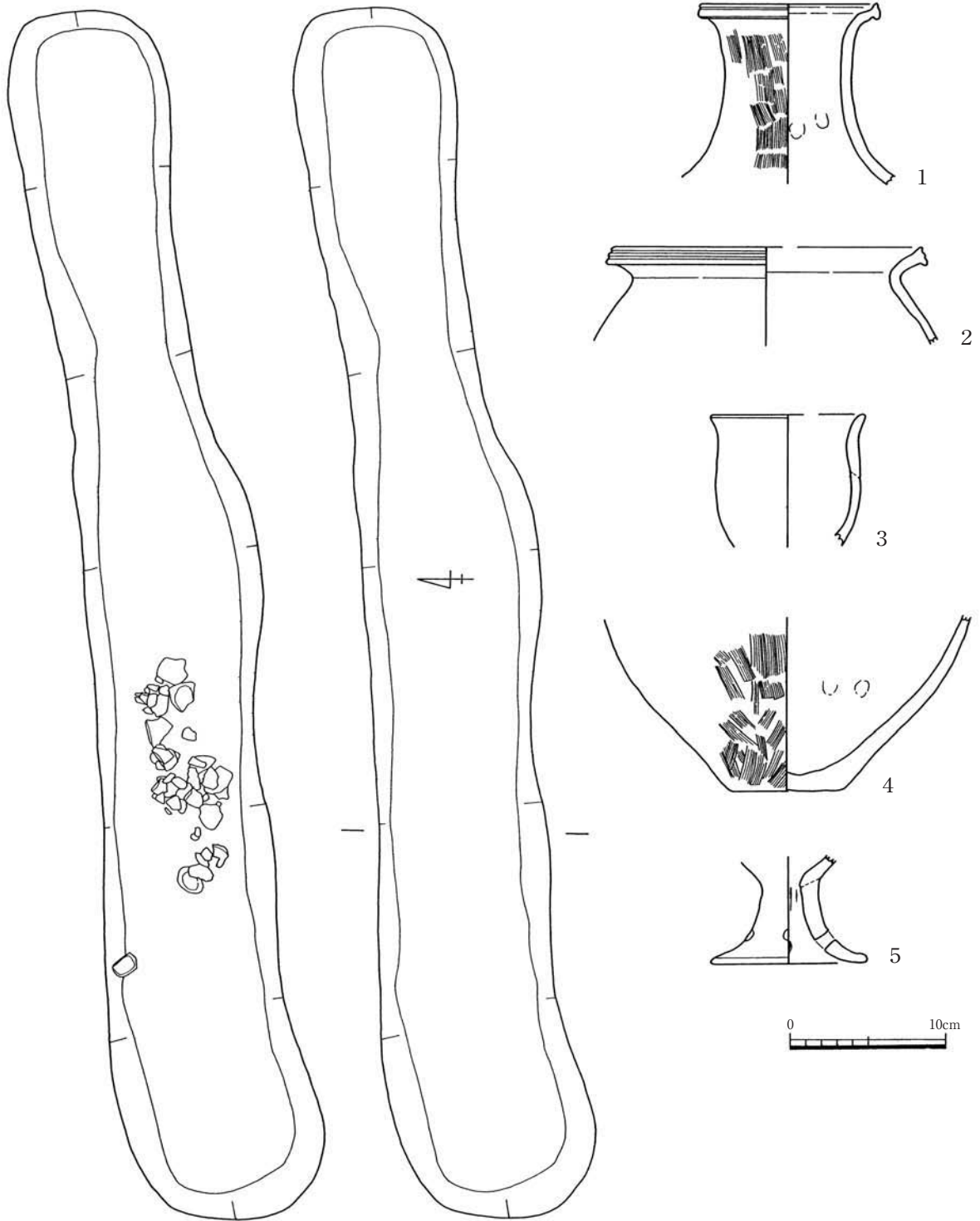
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見；調査区南東部で検出した。

出土遺物は1の長頸壺、2は凹線文の甕、3は小型の鉢、5は裾部が余り開かない高杯の脚部である。時期は弥生IV-2～V-1期が考えられるが、V-1期の方により近いものと考えられる。



K1-109 图 K1SD117



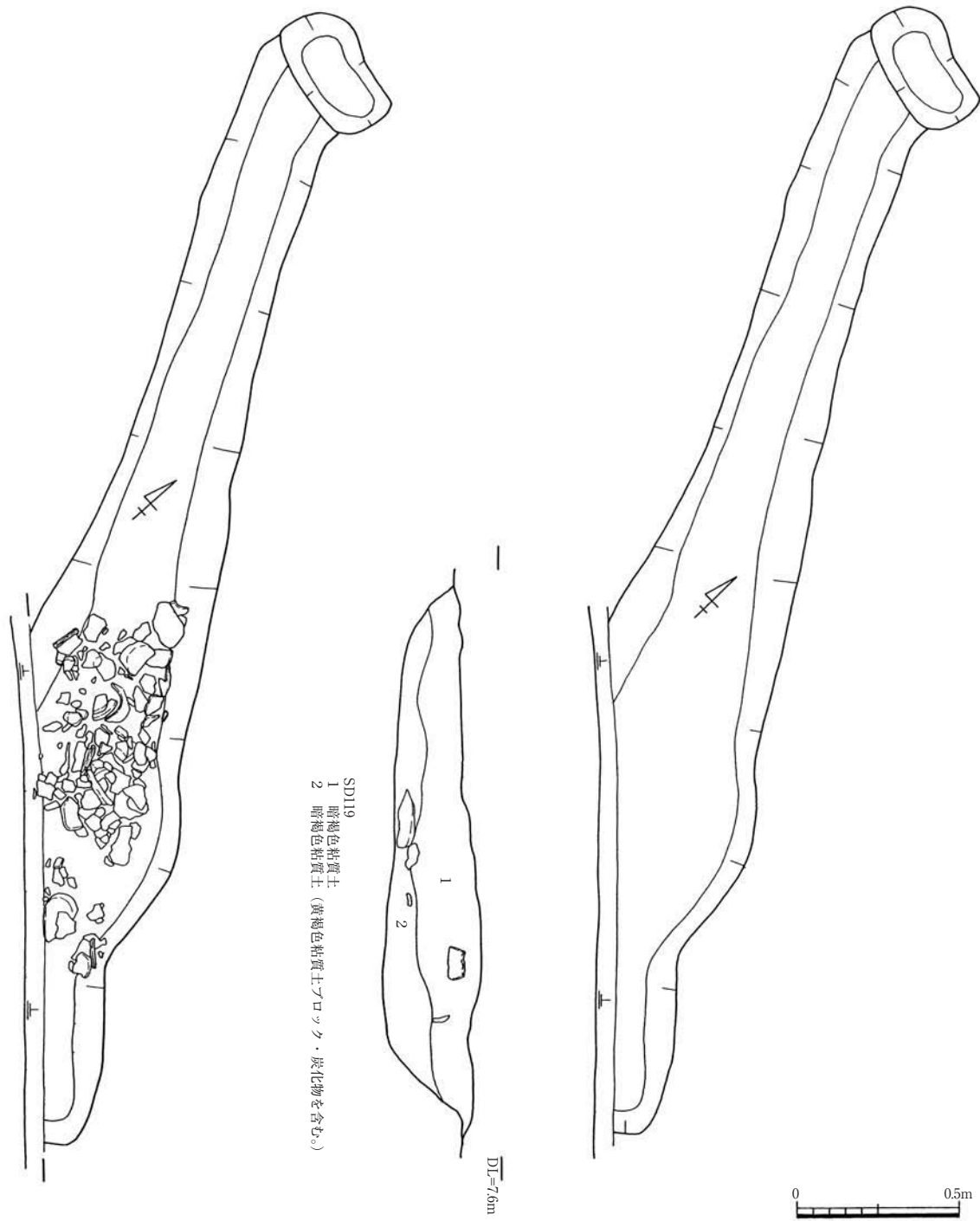
- SD118
 1 暗褐色シルト
 2 暗黒褐色シルト
 3 地山

K1-110 図 K1SD118

K1SD119(K1-111・112 図)

時期：弥生IV-2～V-1 主軸方向：N-29°-W

規模：3.00以上×0.42m 深さ：0.24m 断面形態：皿状



K1-111 図 K1SD119(1)

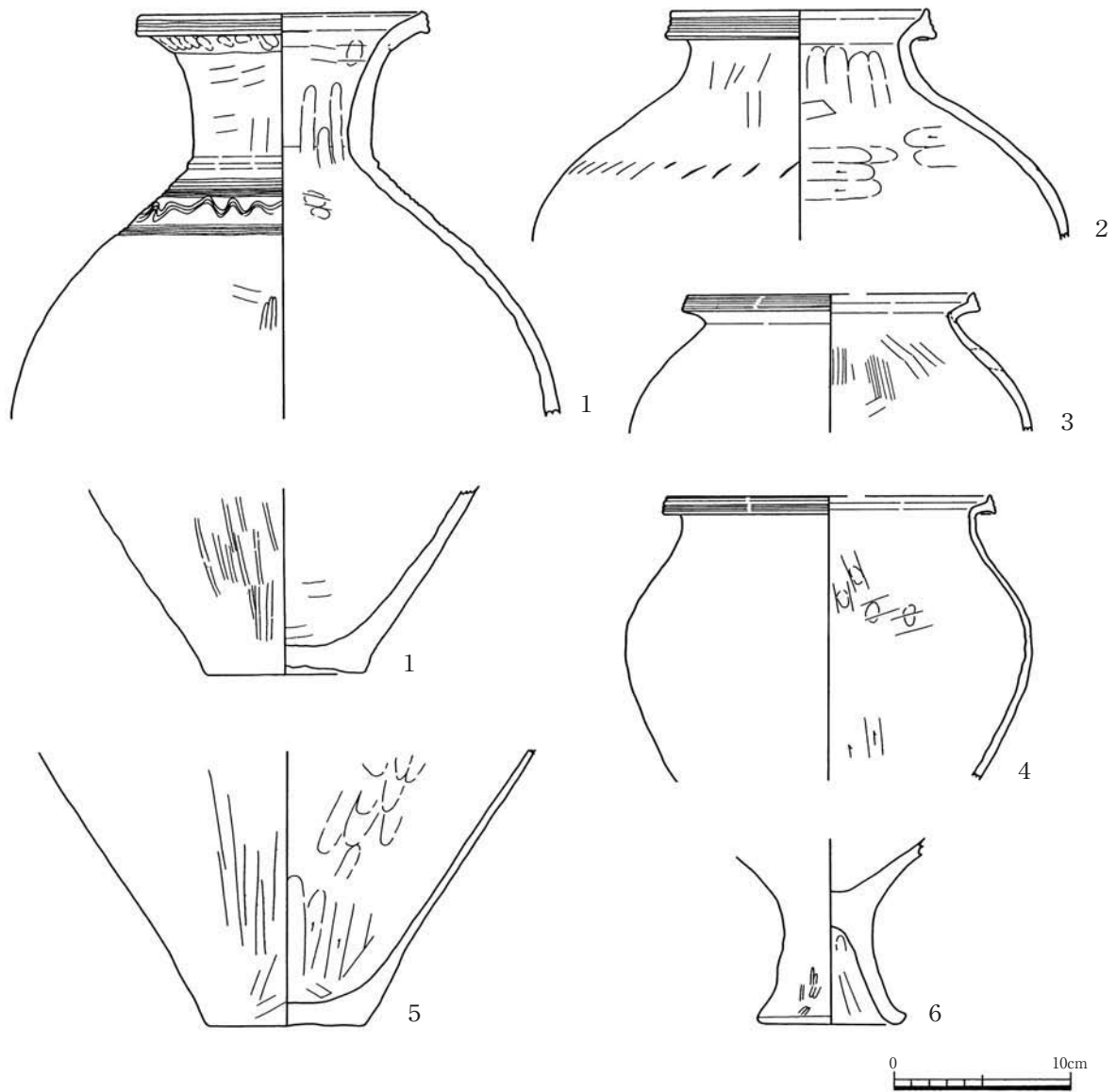
埋土；暗褐色粘質土

接続；無し

出土遺物；弥生土器(壺、甕、高杯)

所見；調査区南東部で検出した。一部は調査区外へとひろがる。

出土遺物は1の装飾を施した壺、2～4の甕は凹線文を主体としたもので占められ、肩部が比較的張るものが多い。また口縁の屈曲も強い。6の高杯の脚部は裾が広がらないもので、器肉が厚い。時期的には弥生IV-2期が主体と考えられる。



K1-112 図 K1SD119(2)

K1SD120(K1-113 図)

時期：弥生V-1 主軸方向：N-53°-E

規模：4.50×0.59m 深さ：0.40m 断面形態：U字形

埋土：暗褐色粘質土

接続：無し

出土遺物：弥生土器(壺)

所見：調査区南東部で検出した。

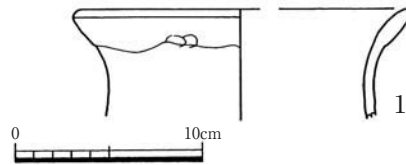
出土遺物は少なく、図示できたのは1の甕のみで、口縁に粘土帯を貼付したものである。時期は弥生V-1期の可能性が高い。

K1SD121(K1-114 図)

時期：弥生IV-2～V-1 主軸方向：N-57°-E

規模：4.61以上×0.84m 深さ：0.35m 断面形態：U字形

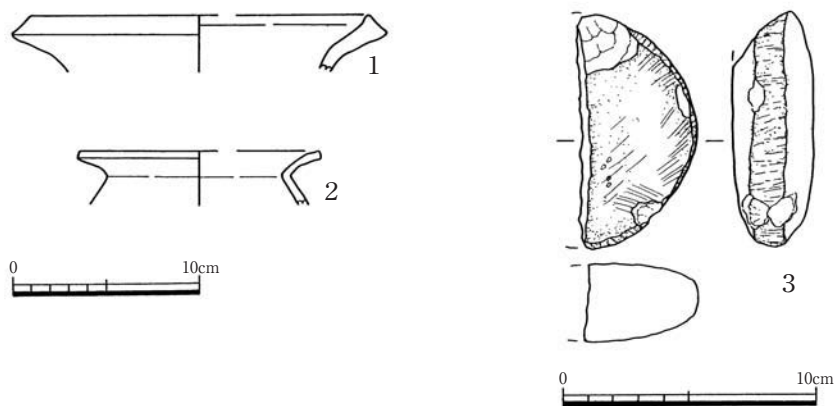
埋土：褐色粘質土



K1-113 図 K1SD120



K1-114 図 K1SD121



K1-115 図 K1SD126

接続；無し

出土遺物；弥生土器(壺)

所見；調査区南東部で検出した。

出土遺物は極めて少なく、1の貼付口縁の壺、2・3の底部のみ図示できた。時期は弥生IV-2～V-1期が考えられるが、IV-2期に近いものであろう。

K1SD126(K1-115 図)

時期；弥生IV-2～V-1 主軸方向；N-66°-E

規模；4.66×0.41m 深さ；0.20m 断面形態；—

埋土；—

接続；無し

出土遺物；弥生土器(壺、甕)、叩石

所見；調査区中央部やや南東よりで検出した。

出土遺物は少なく、1は壺で口唇を拡張する。2は小型の甕で口縁は屈曲する。時期は弥生IV-2～V-1期と考えられるが、判然としない。石器は3の叩石が出土している。側面全周を顕著に敲打する。

K1SD127(K1-116 図)

時期；弥生IV-2 主軸方向；N-85°-E

規模；2.95以上×1.00m 深さ；0.49m 断面形態；—

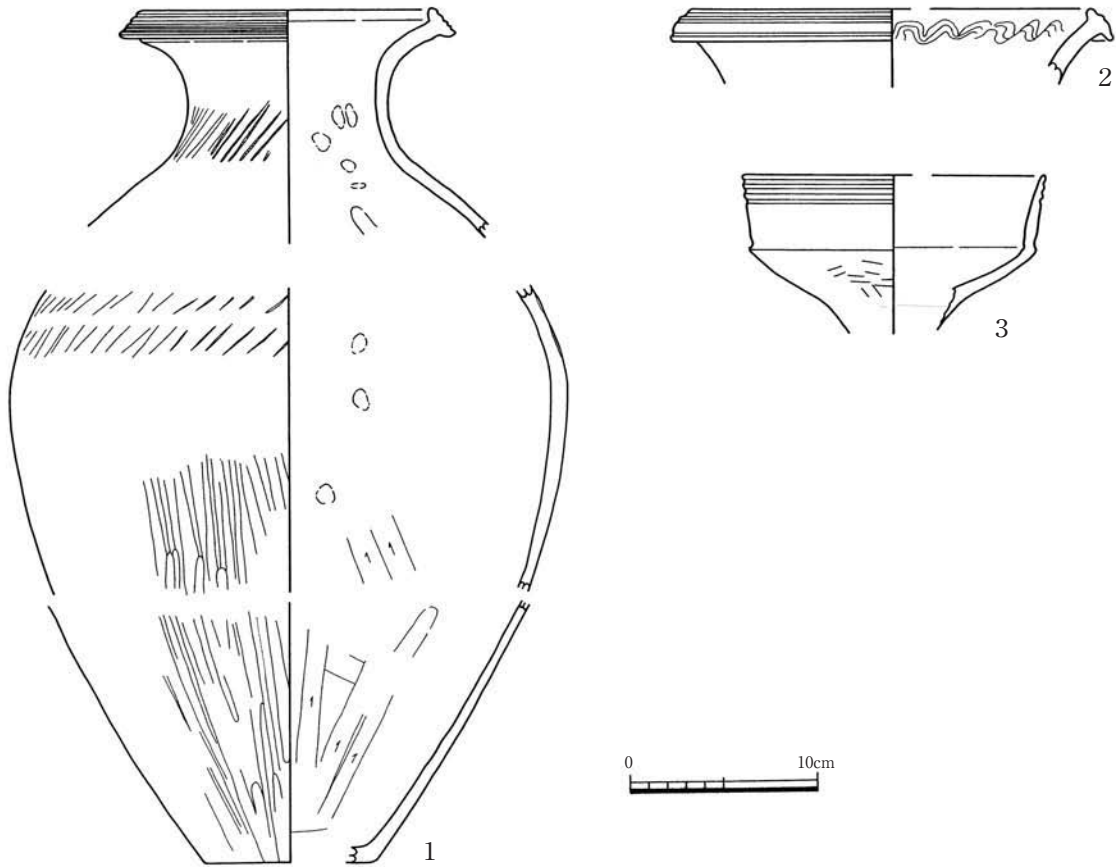
埋土；—

接続；無し

出土遺物；弥生土器(壺、高杯)

所見；調査区北東部で検出した。一部は調査区外へのびる。

出土遺物は1の完形に近い壺が出土している。肩部にハケ状原体によるキザミ、口縁も拡張して、凹線文を施す。2も凹線文の壺で口縁内面には櫛描波状文を施す。3は高杯で杯部は深い。口縁上半には凹線文を施す。時期は弥生IV-2期であらう。



K1-116 図 K1SD127

(5) ピット

K1P1056(K1-117 図)

調査区中央部南端に位置する。

1 は打製石包丁である。

K1P1077(K1-117 図)

調査区北東部に位置する。2・3は壺で4は甕である。4は口縁が強く屈曲するもので、時期は弥生IV-2期と考えられる。

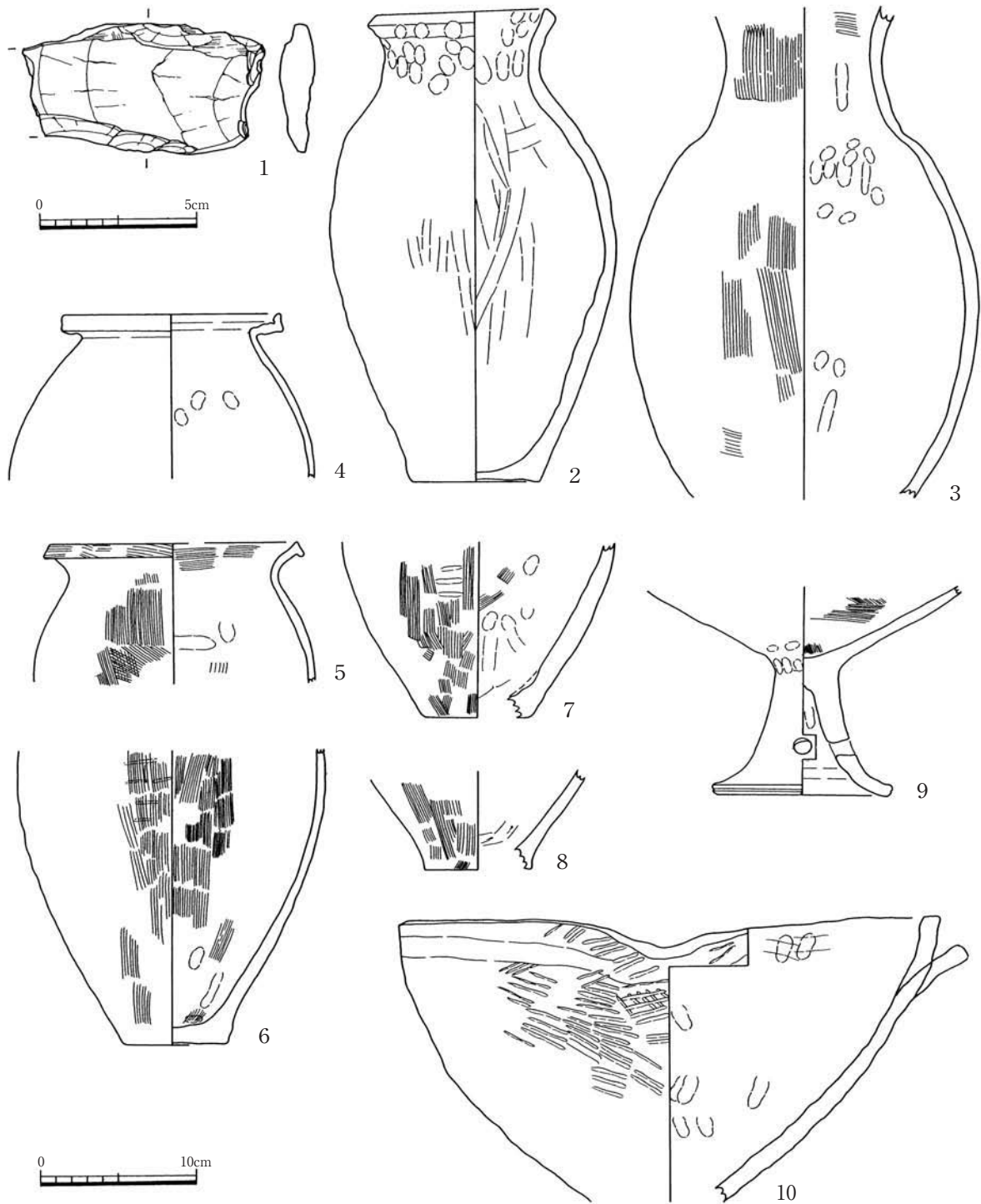
K1P1098(K1-117 図)

調査区北東部に位置する。出土遺物は5の甕、6～8の底部、9の高杯が出土している。5の甕はハケ調整で口縁が外傾する。7の胴部にはタタキ目調整を施す。9の高杯は脚部がやや開き、端部も僅かに肥厚する。脚部下半に円孔一ヶ所を穿つ。杯部は開く。時期は弥生V-3期と考えられる。

K1P1100(K1-117 図)

調査区中央部東端に位置する。

10 は鉢である。体部は内湾気味にひろがりながら、立ち上がる。口唇部は平坦面をなし、一端に口を付ける。外面は右下がり方向の叩きを施した後、下半部はナデ調整を施す。また、口縁部付近には右上がり方向の叩き目が認められる。内面はナデ調整である。胎土は砂粒を多く含む。



K1-117 図 K1 区弥生時代のピット

3. K1 区中世の遺構と遺物

(1) 土坑

K1-5 表 K1 区中世土坑一覧

遺構名	長さ×短径×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	付属遺構	時期	備考
K1SK121	1.80×1.15×0.23	不整形	—	N-64°-E		中世	
K1SK140	1.70×0.40×0.20	不整形	—	N-16°-W		古代	
K1SK142	1.30×1.16×0.30	楕円形	—	N-15°-W		中世	

K1SK140(K1-118 図)

時期：古代 形状：不整形 主軸方向：N-16°-W

規模：1.70×0.40m 深さ：0.20m 断面形態：

埋土：—

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 1、胴部破片 9

所見：調査区西寄り中央に位置する。P100 が隣接する。

1 は土師質土器の椀である。底部には輪高台を貼り付ける。高台断面は方形を呈する。外面にはケズリ調整を施す。

K1SK142(K1-119 図)

時期：中世 形状：楕円形 主軸方向：N-15°-W

規模：1.30×1.16m 深さ：0.30m 断面形態：

埋土：—

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器 2、胴部破片 7

所見：調査区西寄り中央に位置する。

1 は土師質土器の小皿である。体部は外上方にひらき、口縁部は丸くおさめる。底部の切り離しは回転糸切りによる。2 は須恵器の壺と考えられるが、焼成不良により十分焼結せず浅黄橙色を呈する。胎土には砂粒をやや多く含む。また、底部外面には多量の砂が付着しており、離れ砂であると考えられる。

(2) 溝跡

K1-6 表 K1 区中世溝跡一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	断面形	主軸方向	接続	時期	備考
K1SD104	—×0.40×0.11	—	N-11°-E	—	中世	
K1SD105	—×0.40×0.07	—	N-11°-E	—	中世	

K1SD104(K1-120 図)

時期；中世 方向；N-11°-E

規模；—×0.40m 深さ；0.11m 断面形態；—

埋土；灰色粘質土

接続；無し

出土遺物；—

所見；調査区中央部に位置する。南北方向に直線的に走る。

1 は土師質土器の小皿である。器高は低く、体部は大きくひらく。外底面には糸切り痕跡が認められる。

K1SD105(K1-1 図)

時期；中世 方向；N-11°-E

規模；—×0.40m 深さ；0.07m 断面形態；—

埋土；灰色粘質土

接続；無し

出土遺物；弥生土器(壺、高杯)

所見；調査区北東部で検出した。一部は調査区外へとびる。

調査区中央部に位置し、南北方向に直線的に走る。図化できる遺物は出土していない。

(3) ピット

中世に時期比定できるピットは少ないながら調査区の北東部を中心に分布する。

K1P1011(K1-121 図)

調査区中央部南端に位置する。

1 は土師質土器の杯である。体部は外上方にのび、口縁部は丸くおさめる。底部は上げ底気味であり、外面には回転糸切り痕跡が認められる。

K1P1025(K1-121 図)

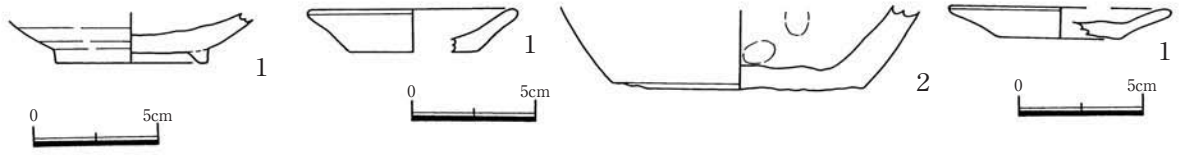
調査区中央部やや南に位置する。

2 は土師質土器の小皿である。体部は短く、直線的にひらく。内外面ともロクロナデ調整により仕上げられる。底部外面には回転糸切り痕跡が認められる。

K1P1045(K1-121 図)

調査区中央部北端に位置する。

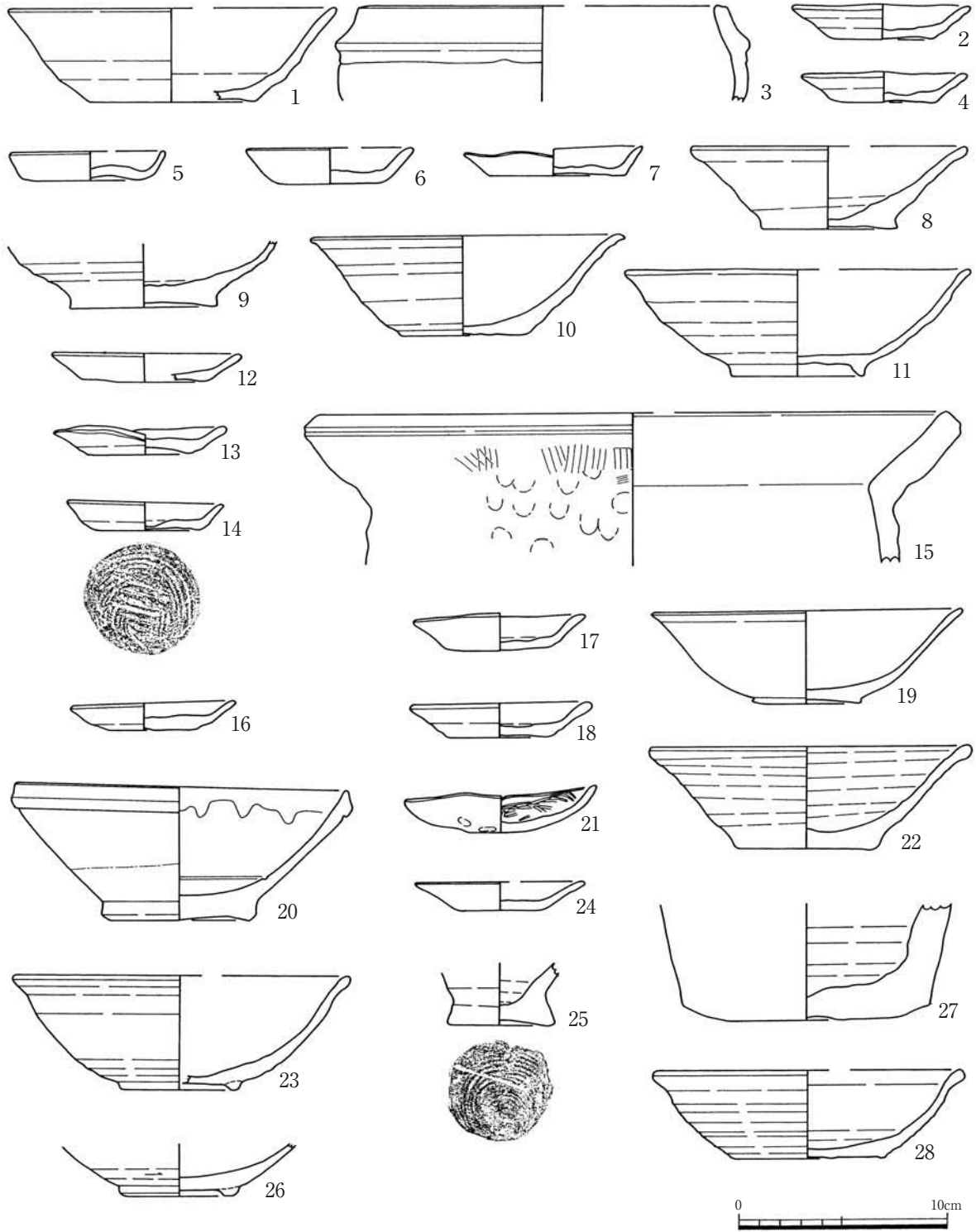
3 は瓦質の鍋である。口縁部は内傾気味に立ち上がり、口唇部は凹状をなす。



K1-118 図 K1SK140

K1-119 図 K1SK142

K1-120 図 K1SD104



K1-121 図 K1 区中世のピット

K1P1093(K1-121 図)

調査区南東部に位置する。

4 は土師質土器の小皿である。器高は低く、体部は大きくひろく。内外面ともロクロナデ調整である。外底面には回転糸切り痕跡が認められる。

K1P1101(K1-121 図)

調査区中央部東端に位置する。

5～7 は土師質土器の小皿である。ともにロクロナデ調整であり、切り離し手法は回転糸切りである。8～10 は土師質土器の杯である。8・9 は底部が突出する。10 の底部は僅かに突出するのみである。11 は土師質土器の椀である。外底面に断面台形の高台を付す。

K1P1110(K1-121 図)

調査区中央部東端に位置する。

12 は土師質土器の杯である。

K1P1125(K1-121 図)

調査区中央部東端に位置する。

13・14 は土師質土器の小皿である。ともにロクロナデ調整であり、外底面には回転糸切り痕跡が認められる。15 は土師器の鍋である。口縁部は緩やかに屈曲する。口唇部は平坦面をなす。口縁部外面にはやや粗いハケ調整を施す。

K1P1126(K1-121 図)

調査区中央部東端に位置する。

16・17 は土師質土器の小皿である。ともにロクロナデ調整であり、切り離し手法は回転糸切りである。

K1P1127(K1-121 図)

調査区南東部に位置する。

K1P1132(K1-121 図)

調査区中央部東端に位置する。

19 は土師質土器の椀である。底部は形骸化した円盤状高台である。

K1P1142(K1-121 図)

調査区中央部東端に位置する。

20 は白磁の碗である。口縁部は玉縁状を呈する。内面及び外面の上半部に灰色がかった乳白色の釉薬を施す。

K1P1142(K1-121 図)

調査区南東部に位置する。

21 は瓦器の小皿である。内面に暗文を密に施す。外面には指頭圧痕が認められる。また、外底面には円形にナデられた痕跡が認められる。

K1P1155(K1-121 図)

調査区南東部に位置する。

22 は土師質土器の杯である。内外面ともロクロナデ調整である。外底面には回転糸切り痕跡が認められる。

K1P1171(K1-121 図)

調査区南東部に位置する。

23 は土師質土器の碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。底部には輪高台が貼り付けられる。

K1P1178(K1-121 図)

調査区南東部に位置する。

24 は土師質土器の小皿である。25 は土師質土器の杯であり、柱状高台を呈する。外底面には回転糸切り痕跡が認められる。

K1P1181(K1-121 図)

調査区南東部に位置する。

26 は土師質土器の碗である。外底面には輪高台を貼り付ける。27 は須恵器の壺である。

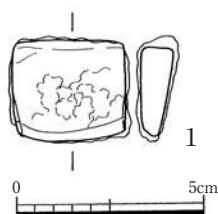
K1P1199(K1-121 図)

調査区中央部やや南に位置する。

28 は土師質土器の杯である。内外面はロクロナデ調整であり、外底面には回転糸切り痕跡が認められる。

4. K1 区包含層出土遺物 (K1-122 図)

1 は鑄造鉄斧の先端部である。中国北部又は朝鮮半島からの舶載品と考えられる。



K1-122 図 K1 区包含層出土遺物

1. K2 区の概要

概要

今次調査の中で西側部分に位置する。F、K、L区を流れる大溝に挟まれた微高地上に弧状に展開する中期から後期の住居跡群の北西端部にあたり、弥生時代中・後期の竪穴住居跡 27 軒を検出した。F、L区と比べ、密度は薄くなり切り合い関係は少ない。竪穴住居跡は円形と方形があり、円形のもの直径 4～8mを測る。方形のものはほとんどが 4m×2mの規模であり、調査区西側に多い。掘立柱建物には溝状土坑が付随するものが多く、棟方向は全てK1、K3、L区の大溝に沿う。また、1 間×1 間の大型掘立柱建物も 1 棟検出されており、L区の大型掘立柱建物群と一連のものと考えられる。

中世の遺構は調査区西端にK3 区からつながる溝を 1 条検出した。また、調査区東部では屋敷の区画溝と考えられるSD209 と、その南側に隣接して井戸を検出している。

調査担当 坂本裕一

執筆担当者 坂本裕一

調査期間 平成 8 年 11 月 22 日～平成 9 年 3 月 21 日

調査面積 1.885㎡

時代 弥生時代中期～後期、古代、中世

検出遺構 本調査区での検出遺構は、弥生時代竪穴住居跡 27 軒、掘立柱建物跡 8 棟、土坑 63 基、溝 5 条、ピット 380 個、性格不明遺構 3 基、中世土坑 15 基、溝 2 条、井戸 1 基である。

2. K2 区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

K2 区では竪穴住居跡は 27 軒検出している。調査区内にまんべんなく分布し、切り合い関係は少ない。平面プランは方形のものが 9 軒で、他のものは円形(楕円形含む)を呈するものである。円形住居の規模は、直径 4m 以下の小型のものが 1 軒、直径 4～6m の中型のものが 12 軒で調査区内では大半を占める。直径 6m 以上の大型住居は 3 軒である。最小のものは ST203 の直径 3.9m、最大のもは ST220 の直径 8.9m を測る。住居床面では、中央ピット(炉跡)、壁溝がほとんどの住居跡で検出されている。中央ピット内には炭化物を多く含むが底や壁は被熱しておらず、炉としての利用には疑問が残る。床面に炭化物が広がるものも多いが床面は中央ピットと同様に被熱していない。大型のものは壁溝を 2～3 重に持ち、張り床が行われ、1～2 回の拡張・建て替えが行われている。方形を呈する竪穴住居跡は円形のものに比べ一回り小さく、一辺 4m 弱のものが多い。長軸方向を掘立柱建物と同じくするものが多く、大きく南北方向と東西方向に二分される。ST227 を例外として、床面には小ピット数個である。貯蔵穴と思われるピットを持つものもあり、方形のものは円

K2-1 表 K2 区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(m ²)	平面形	主軸方向	時期	備考
K2ST201	(3.8)×(1.0)	0.2	(2.8)	円形	不明	弥生III	Loc.49ST11と同遺構
K2ST202	4.7×(3.3)	0.2	(16.6)	円形	N-75°-W	弥生III	Loc.49ST9と同遺構
K2ST203	3.9×3.9	0.4	12.2	円形	N-20°-E	弥生IV-2	K4ST401と同遺構
K2ST204	5.7×5.7	0.2	25.5	円形	N-0°	弥生IV-2	
K2ST205	6.0×6.0	0.2	24.6	円形	N-68°-E	弥生IV-2	
K2ST206	5.0×3.5	0.2	17.6	方形	N-9°-E	弥生V-3	
K2ST207	3.9×3.0	0.3	11.9	方形	N-23°-W	弥生V-2	
K2ST208	4.6×4.6	0.1	16.6	円形	N-0°	弥生III?	
K2ST209	3.0×2.7	0.3	8.0	方形	N-19°-E	弥生V-3	
K2ST210	5.6×5.6	0.26	24.6	円形	N-78°-W	弥生III	Loc.49ST3と同遺構
K2ST211	3.1×2.5	0.1	7.7	方形	N-43°-W	弥生IV～V	
K2ST212	2.8×2.1	0.23	5.8	方形	N-72°-E	弥生V	
K2ST213	7.1×6.6	0.1	36.2	円形	N-90°	弥生III	
K2ST214							欠番
K2ST215	2.3×2.2	0.25	5.1	方形	N-0°	弥生III	
K2ST216	4.8×4.6	0.08	17.3	円形	N-90°-W	弥生IV	
K2ST217	6.0×(6.0)	0.04	28.3	円形	N-80°-W	弥生IV～V	
K2ST218	3.6×2.7	0.2	9.7	方形	N-22°-W	弥生IV～V	
K2ST219	2.0×2.1	0.64	4.2	方形	N-84°-E	弥生?	
K2ST220	8.9×8.3	0.58	58.1	円形	N-0°	弥生V-3	
K2ST221	5.6×4.9	0.32	22.1	円形	N-42°-E	弥生IV	
K2ST222	8.2×8.6	0.25	55.4	円形	N-0°	弥生V-2	
K2ST223	4.8×(3.8)	0.34	(18.1)	円形	N-40°-E	弥生V	Loc.49ST6と同遺構
K2ST224	4.6×4.2	0.38	15.2	円形	N-0°	弥生IV-2	
K2ST225	4.4×(2.8)	0.28	(12.3)	円形?	N-62°-W	弥生V	
K2ST226	3.2×2.9	0.34	9.3	方形	N-66°-E	弥生IV～V	
K2ST227	3.3×3.0	0.34	9.9	方形	N-48°-W	弥生IV-2	

形の住居に伴う倉庫的な性格が考えられる。

他に多量の焼土と炭化材が床面を覆っていた住居が2軒あり、焼失したものと考えられる。

K2ST201(K2-2 図)

時期：弥生III 形状：円形 主軸方向：—

規模：(3.8)×(1.0)m 深さ：0.2m 面積：(2.8)m²

埋土：暗褐色シルト主体

ピット：数1

床面：1面

壁溝：1条 幅10cm 深さ5cm

出土遺物：弥生土器

所見：調査区東端部に位置する。遺構の大半が調査区外であり、住居プラン南端部分のみの検出である。前回調査Loc.49ST11と同一遺構である。

出土遺物は弥生土器胴部細片が10点のみであり、図示し得るものはなかった。胎土の特徴は前回調査Loc.49ST11で抑えられている時期と相違ないものである。

K2ST202(K2-2 図)

時期：弥生III 形状：円形 主軸方向：N-75°-W

規模：4.7×(3.3)m 深さ：0.2m 面積：(16.6)m²

埋土：暗褐色シルト主体

ピット：数10 主柱穴数：3 主柱穴：P2、4、5

床面：1面

中央ピット：形状 楕円形 規模 120×50cm 深さ 30cm 埋土 黒褐色シルト

壁溝：1条 幅35cm 深さ12cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕、高杯)

所見：調査区東部に位置する。SK272・291に切られる。北側の一部が調査区外であるが、前回調査Loc.49ST9と同一遺構である。壁溝は東～南側壁際で検出された。中央ピットの底には焼土と炭化物が堆積し、南側床面に広がる。主柱穴は一部調査区外であるが四角形に配される。柱間距離は1.6～1.7mを測り、柱穴の規模から直径10cm程の柱の使用が伺える。中央ピット長軸方向両端に小ピット(P1・9)が付属する。

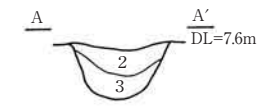
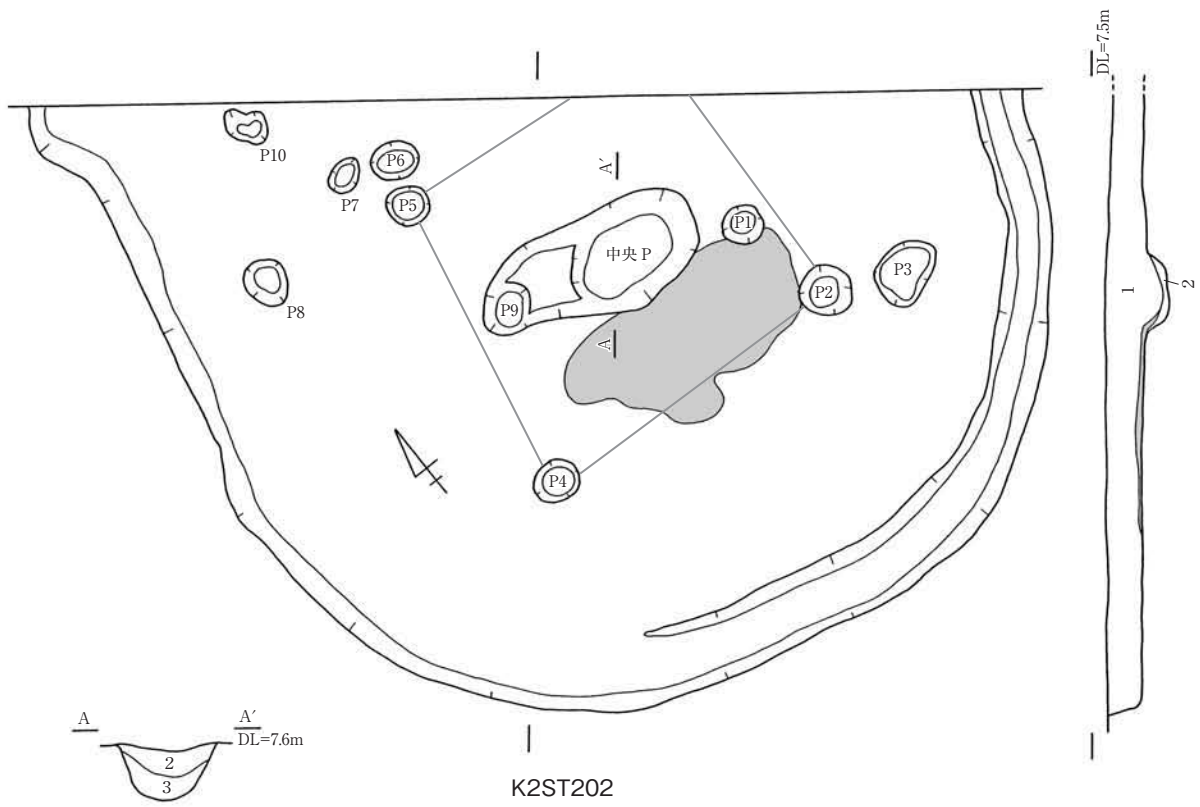
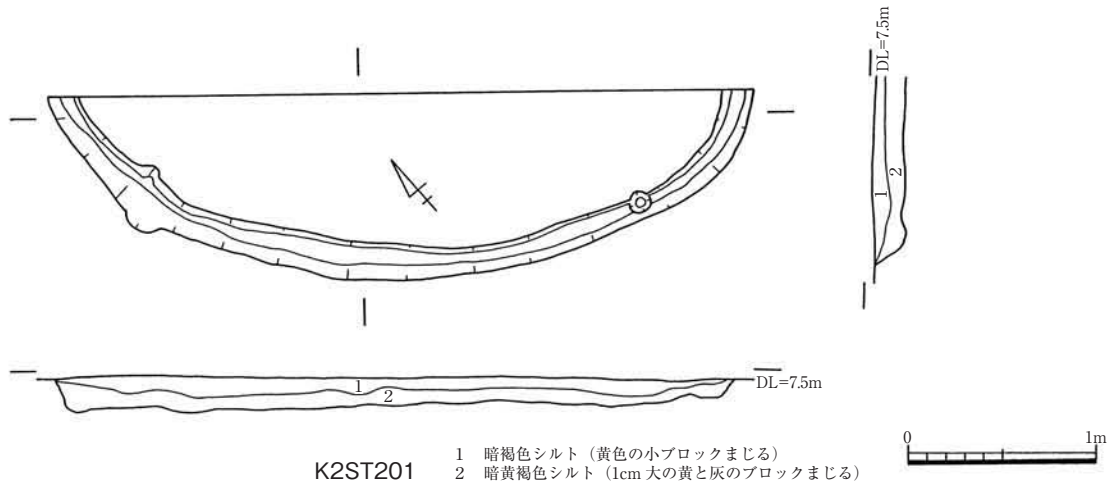
出土遺物は細片が多く、1点のみ図示した。粗雑な櫛描き波状文が施された壺の上胴部片である。

K2ST203(K2-3 図)

時期：弥生IV-2 形状：円形 主軸方向：N-20°-E

規模：直径3.9m 深さ：0.4m 面積：12.2m²

埋土：暗褐色シルト主体



- 1 暗褐色シルト
2 黒褐色粘質シルト
3 黒褐色シルト (焼土、炭化物多く含む)

■ 炭化物



K2-2 図 K2ST201・202

ピット：数 4 主柱穴数：4 主柱穴：P1～4

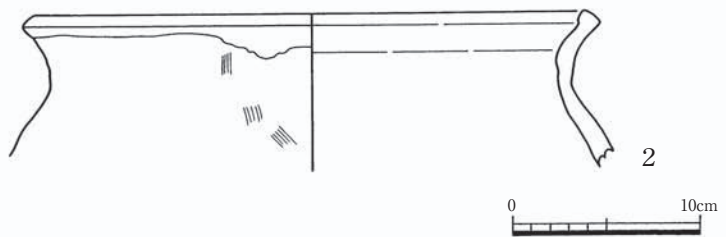
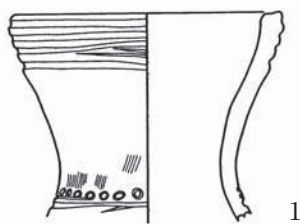
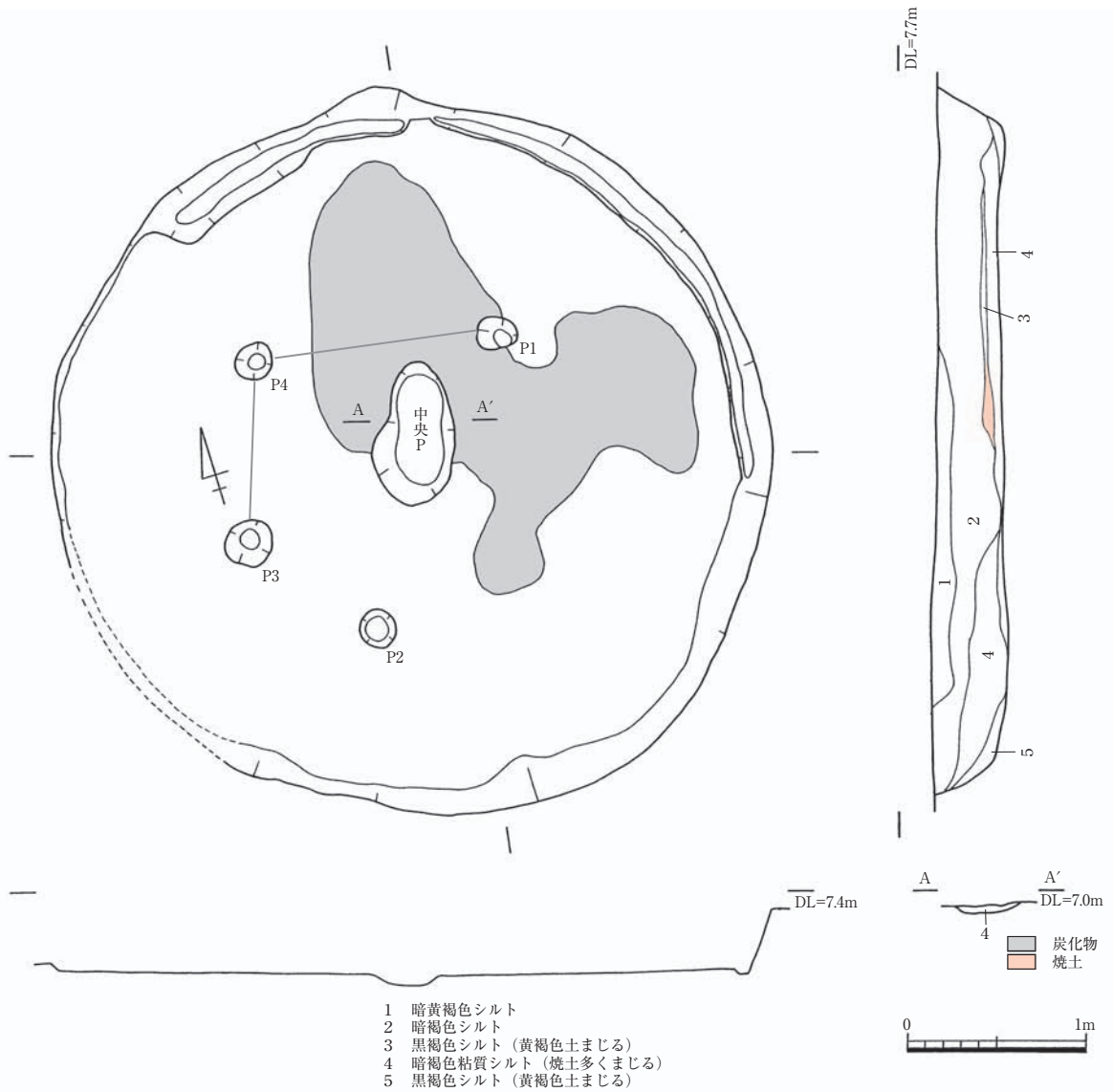
床面：1 面

中央ピット：形状 楕円形 規模 77.5×46.0cm 深さ 8cm 埋土 暗褐色シルト(焼土混じる)

壁溝：1 条 幅 10～20cm 深さ 3cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区西端部、北寄りに位置する小型の住居跡である。西側の一部が調査区外であるが、K4 区でST401 として検出されており、K2ST203 としてまとめて記述する。K4SK406 との切り合い



K2-3 図 K2ST203

関係は残存状態が悪く不明である。床面直上の埋土4には焼土、炭化物が多く混じる。中央ピット北東側の床面には焼土混じりの炭化物が広がるが、中央ピット内と床面はともに被熱による赤色化はしていない。壁溝は東側から北側にかけて検出したが、北側は一部途切れる。主柱穴と思われるピットは4個検出したが、住居東側では未検出であるため周をなさない。

出土遺物は細片が多く、図示し得たのは2点である。1は直口壺の頸部である。緩やかに外側に湾曲して立ち上がり、口縁部で直立する。口縁外面にヘラ状工具による沈線が4条施される。胴部との境にも同様の沈線が施され、その上に竹管による刺突が並ぶ。いずれも粗雑な施文である。2は甕である。口縁部は緩やかに外反し、端部は上方につまみ出して拡張する。胎土は全体的に砂粒が細かく揃っており、きめ細かい。

K2ST204(K2-4 図)

時期：弥生IV-2 形状：円形 主軸方向：N-0°

規模：直径5.7m 深さ：0.2m 面積：25.5㎡

埋土：暗褐色シルト主体

ピット：数15 主柱穴数：6 主柱穴：P1、3、6、8、11、12

床面：1面 貼床：無 焼失：あり

中央ピット：形状 円形 規模 68×60cm 深さ 16cm 埋土 暗褐色シルト

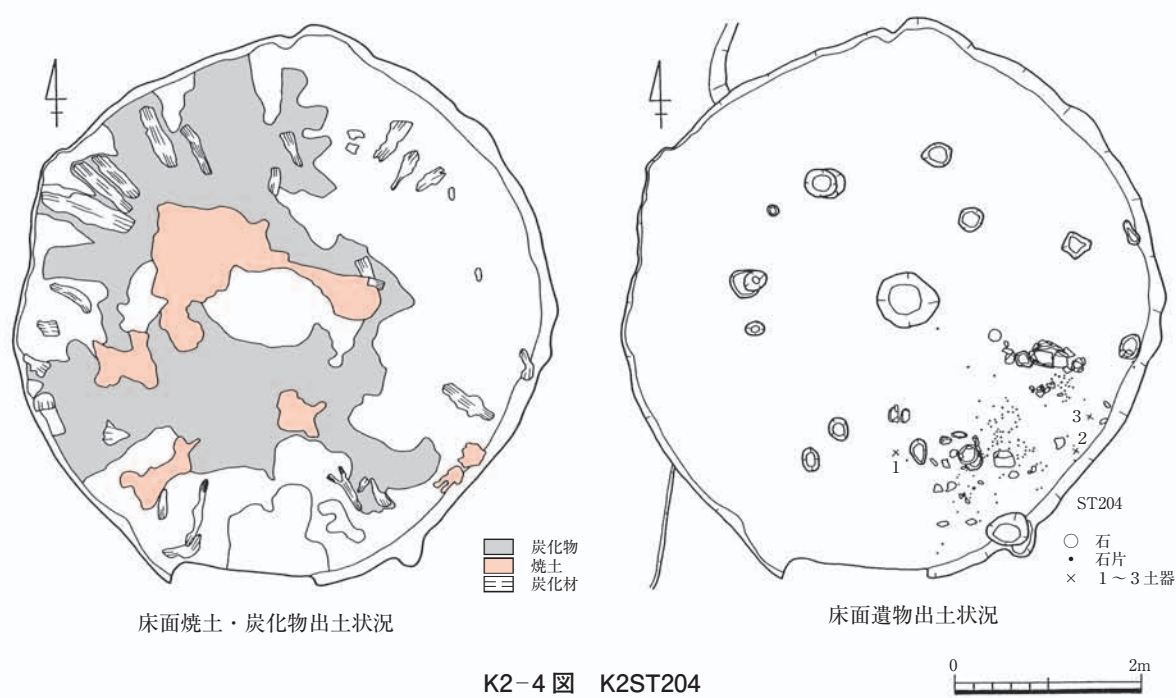
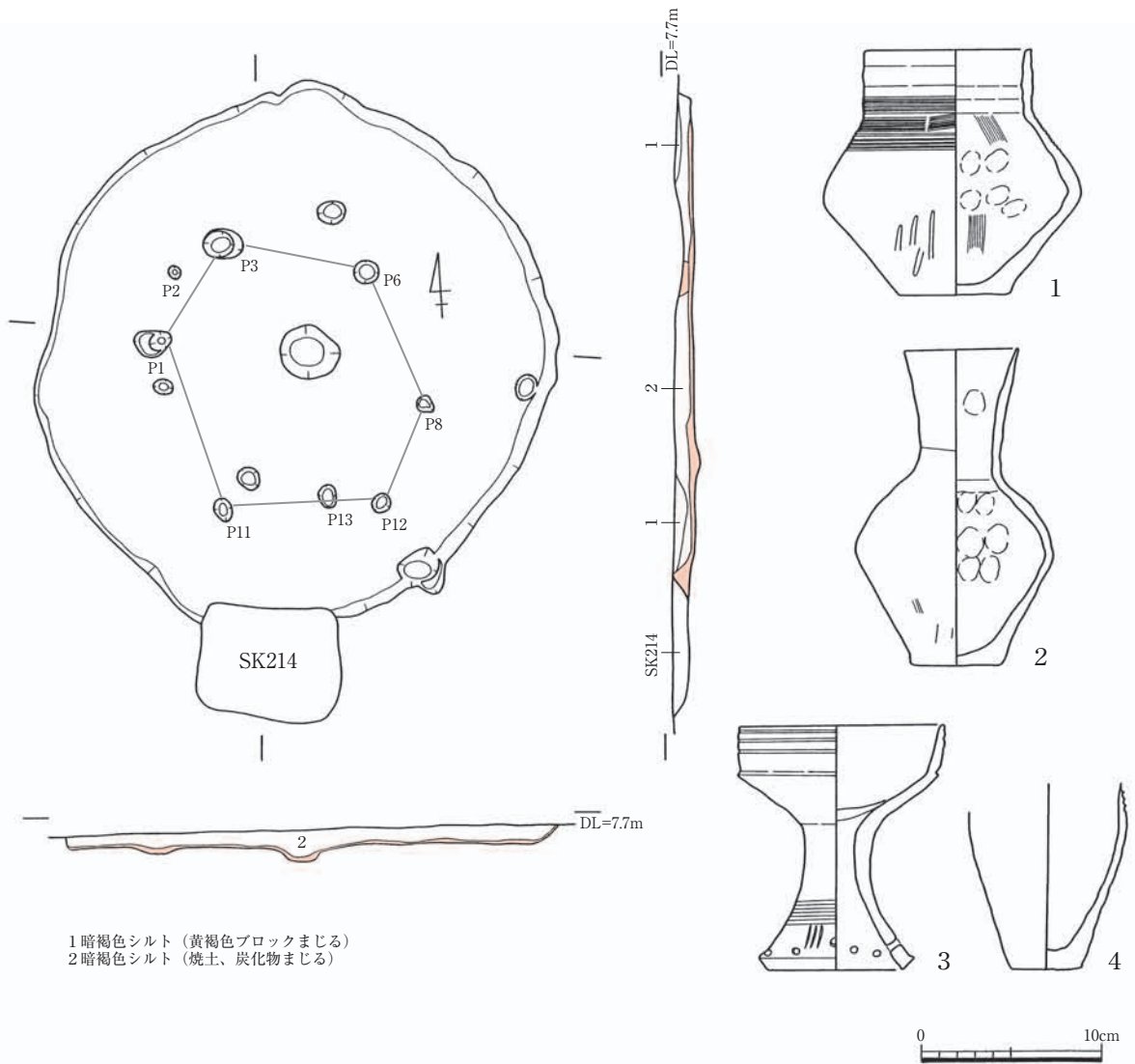
出土遺物：弥生土器(小型壺2、高杯1、小型土器1)

所見：調査区西端部に位置し、SK214に切られる。埋土中に多量の焼土、炭化物を含む。床面は多量の炭化物と焼土が認められ、西寄りに厚く覆う。住居跡中心から放射状に炭化材が検出され、特に壁際に材の形を残すものが多い。焼け落ちた柱や屋根材と思われる。中央ピットは住居中央にあり、ほぼ円形である。住居と同じ焼土、炭化物まじりの土で埋まる。主柱穴は多角形に配され、柱間距離は1.3～2.3mを測る。壁溝は未検出である。床面南東部分には割れた砂岩礫とその破片が散在しているが、剥片のみで製品は出土していない。また、1～3の土器は、この付近で倒れた状態で出土している。

出土遺物はほとんどが胴部細片であるが、口縁部片は、ほとんどが壺のものである。完形近く復元できた4点を図示した。1は胴部が算盤玉型の短頸壺である。頸部と胴部の境の上下に櫛描直線文を施す。下胴部は丁寧にはラミガキされる。胴部内面はハケで調整されるが指頭圧痕が残る。2は小型の直口壺である。頸部は外に開き気味に立ち上がる。胴部は角ばった張りを持つ。3は高杯である。小型の杯部は直立気味に立ち上がり外面は退化した凹線文を施す。底は円盤充填である。脚部は中央下よりに櫛描直線文を施し、裾部に直径3mmの円孔10個を全周に等間隔にあげ、円孔2個おきに3本の縦方向の沈線が配される。4は小型の土器である。口縁部を欠くため器形は不明であるが、甕または鉢と思われる。

K2ST205(K2-5 図)

時期：弥生IV-2 形状：円形 主軸方向：N-68°-E



K2-4 図 K2ST204

規模：直径 6.0m 深さ：0.2m 面積：24.6㎡

埋土：暗褐色シルト主体

ピット：数 22 主柱穴数：13 主柱穴：P1～3、5～8、10、11、13、14、16、18

床面：1面

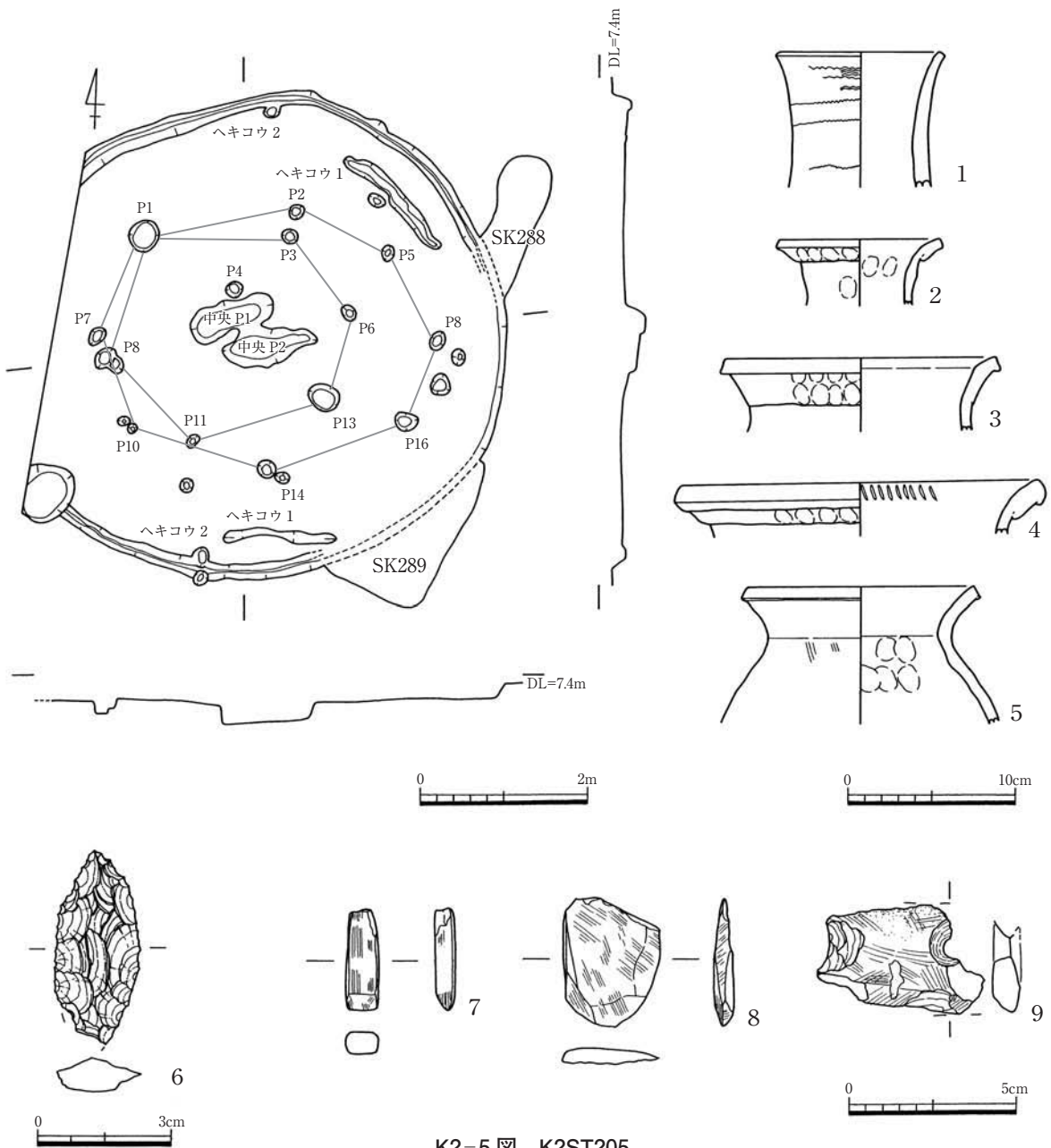
中央ピット 1：形状 楕円形 規模 100×34cm 深さ 15cm 埋土 暗褐色シルト

中央ピット 2：形状 楕円形 規模 114×48cm 深さ 20cm 埋土 暗褐色シルト

壁溝：2条 壁溝 1：幅 16cm 深さ 3cm 壁溝 2：幅 10～18cm 深さ 2cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)、石鏃 1、磨製石斧 2、石包丁 1

所見：調査区西端部、南寄りに位置する。西端の一部が調査区外である。SK288・289 に切られる。切り合いは平面プランでは確認出来なかったため、土層断面と遺物の出土状態によって判断した。



K2-5 図 K2ST205

床面遺構は 22 個のピットの他に中央ピット 2 個と壁溝 2 条が検出された。中央ピットは新たに掘削され、支柱穴と壁溝は西側を一部共有しているため、東側に拡張したものと思われる。1 次住居は P1・3・6・8・11・13 を支柱穴とし、柱間距離は 1.08 ～ 1.76m である。わずかに残る壁溝 1 から推測される規模は直径 5.6m を測る。2 次住居は P1 を 1 次住居と共用し、P2・5・7・10・14・16・18 を支柱穴とする。柱間距離は 1.04 ～ 1.86m である。

出土遺物のうち土器は 5 点を図示した。1 ～ 4 は壺である。1 は摩耗が著しいが頸部全面に波状文が施される。4 は口縁内面にヘラ状工具による斜行沈線を施す。5 は甕である。石器は図示した 4 点が出土した。6 は有茎式の石鎌である。基部を欠損する。石材はサヌカイトである。7 は片刃の小型方柱状石斧である。基部を欠損する。石材は緑色片岩である。8 は磨製石斧の刃部片である。両刃の刃部は摩耗し丸くなる。石材は緑色片岩である。9 は磨製石包丁片である。紐は錐揉みによる。端部に挟りが入る。刃部は欠損し不明である。石材は粘板岩である。

K2ST206 (K2-6 図)

時期；弥生 V-3 形状；方形 主軸方向；N-9°-E

規模；5.0 × 3.5m 深さ；0.2m 面積；17.6m²

埋土；暗褐色シルト主体(焼土、炭化物多く含む)

ピット；数 5

床面；1 面 焼失；あり

壁溝；1 条 幅 10 ～ 20cm 深さ 4cm

出土遺物；弥生土器(壺、甕、脚付壺 1、小型鉢 1)

所見；調査区西部に位置する。埋土中に多量の炭化物と焼土を含む。床面は炭化物の上に多量の焼土が覆った状態で検出された。床面、壁面とも被熱し赤色化している。炭化物は板材と束ねた植物繊維状のものがああり、焼け落ちた屋根材と思われる。多量の焼土はほぼ一面に広がり、中央部分が特に厚い。床面遺構は壁溝 1 条、ピット 5 個を検出するが柱穴と思われるピットは検出されなかった。北西角の P1 は直径 52cm 深さ 53cm を測り、P2・3 も同様の規模である。住居と同じ埋土であり、床面に掘られた貯蔵穴と思われる。また、床面南壁際には直径 20 ～ 25cm、重さ 6 ～ 7.5kg を測る粘土塊が 2 個並んで出土した。

出土遺物は少なく、4 点を図示した。1 は壺、2・3 の甕は内面のヘラケズリが頸部直下まで行われる。4 は小型鉢である。

K2ST207 (K2-7 ～ 9 図)

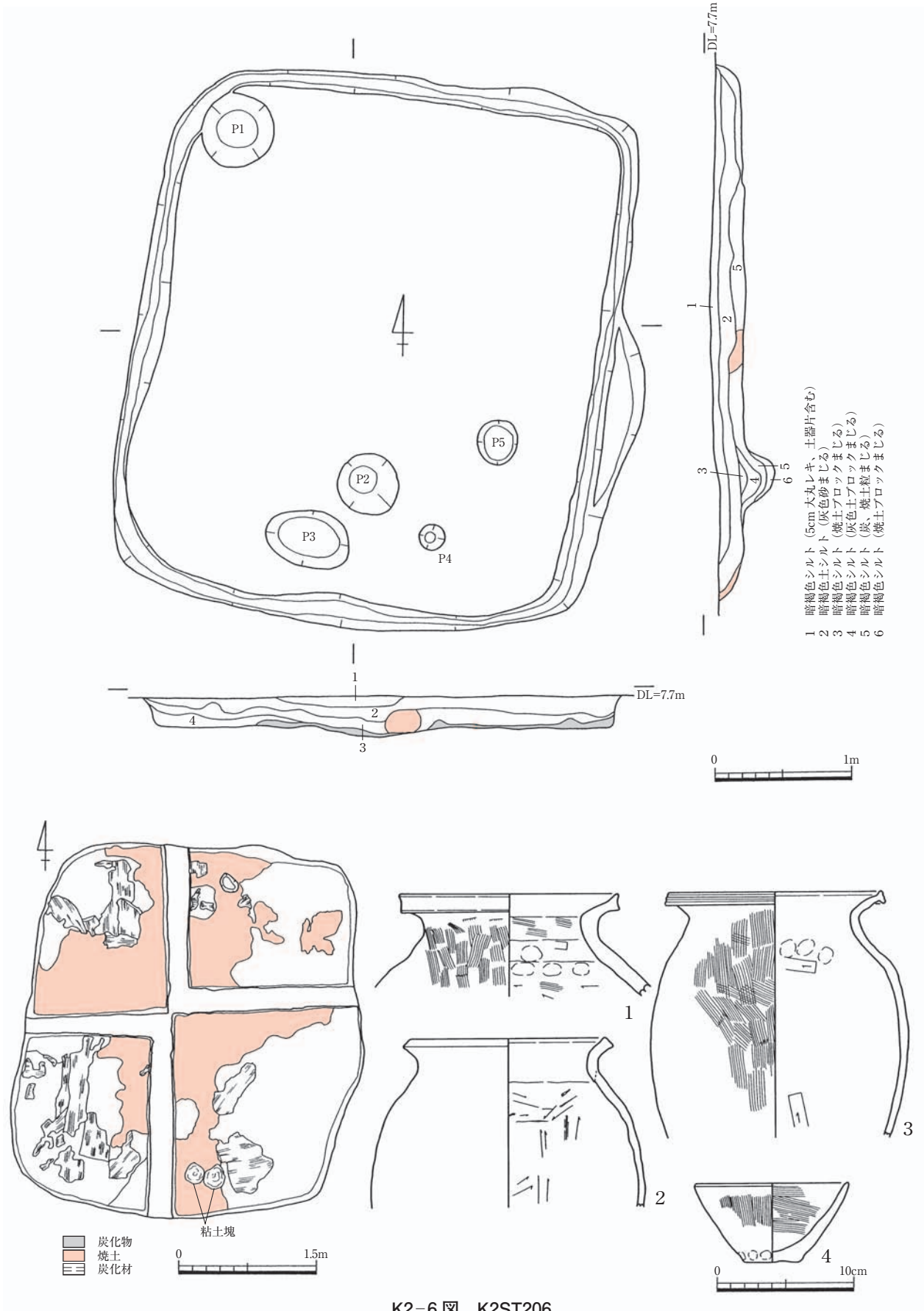
時期；弥生 V-2 形状；方形 主軸方向；N-23°-W

規模；3.9 × 3.0m 深さ；0.3m 面積；11.9m²

埋土；暗褐色シルト主体

ピット；数 3

床面；1 面



出土遺物；弥生土器(壺、甕、小形甕、鉢、高杯)、石包丁 1、磨製石斧 1、砥石 1

所見；調査区西部に位置し、ST208 を切る。埋土中には大量の礫と土器が投げ込まれている。遺物の大半は中央から北東側に集まり、主に埋土 3 の上面で検出されているため、一定埋没後、廃棄場所として北東側から投げ込まれたと思われる。床面中央のP1 は直径 22cm を測る。他に柱穴は検出されなかった。南東角のP2 は直径約 70cm、深さ 53cm を測り、貯蔵穴と考えられる。P3 は住居に伴うものか不明である。

出土遺物のうち土器は完形近く復元できたものを図示した(K2-8・9 図 1～21)。1～8 は壺である。5 は肩の張る特徴的な器形をもつ。下胴部 1/3 は被熱により赤色化し、肩部以下は煤が付着する。6 は唯一の大形壺である。8 は頸部を欠くが脚付壺である。9～16 は甕である。10～12 は凹線文系の甕である。13・14 は小形甕である。14 は頸部に 2 ケ所向い合う位置に直径 5mm 程の孔が穿たれている。15・16 は接合は出来ないが同一個体の可能性がある。長石を多く含む精緻な胎土から、搬入品と思われる。17・18 は高杯である。床面出土の脚付壺(8)は北東角、小形甕(14)は南西角と対角に位置し、倒れた状態で出土した。また、大形壺(6)は中央付近に破片が集中した状態で出土しているため、置かれた状態のままである可能性がある。石器は 4 点出土し、3 点を示した(K2-9 図 19～21)。19 は石包丁、20 は扁平の磨製石斧、21 は砥石である。

K2ST208(K2-7、9 図)

時期；弥生III？ **形状**；円形 **主軸方向**；N-0°

規模；直径 4.6m 深さ；0.1m **面積**；16.6㎡

埋土；暗褐色シルト

ピット；数 17 **主柱穴数**；5 **主柱穴**；P1、2、3、4、12

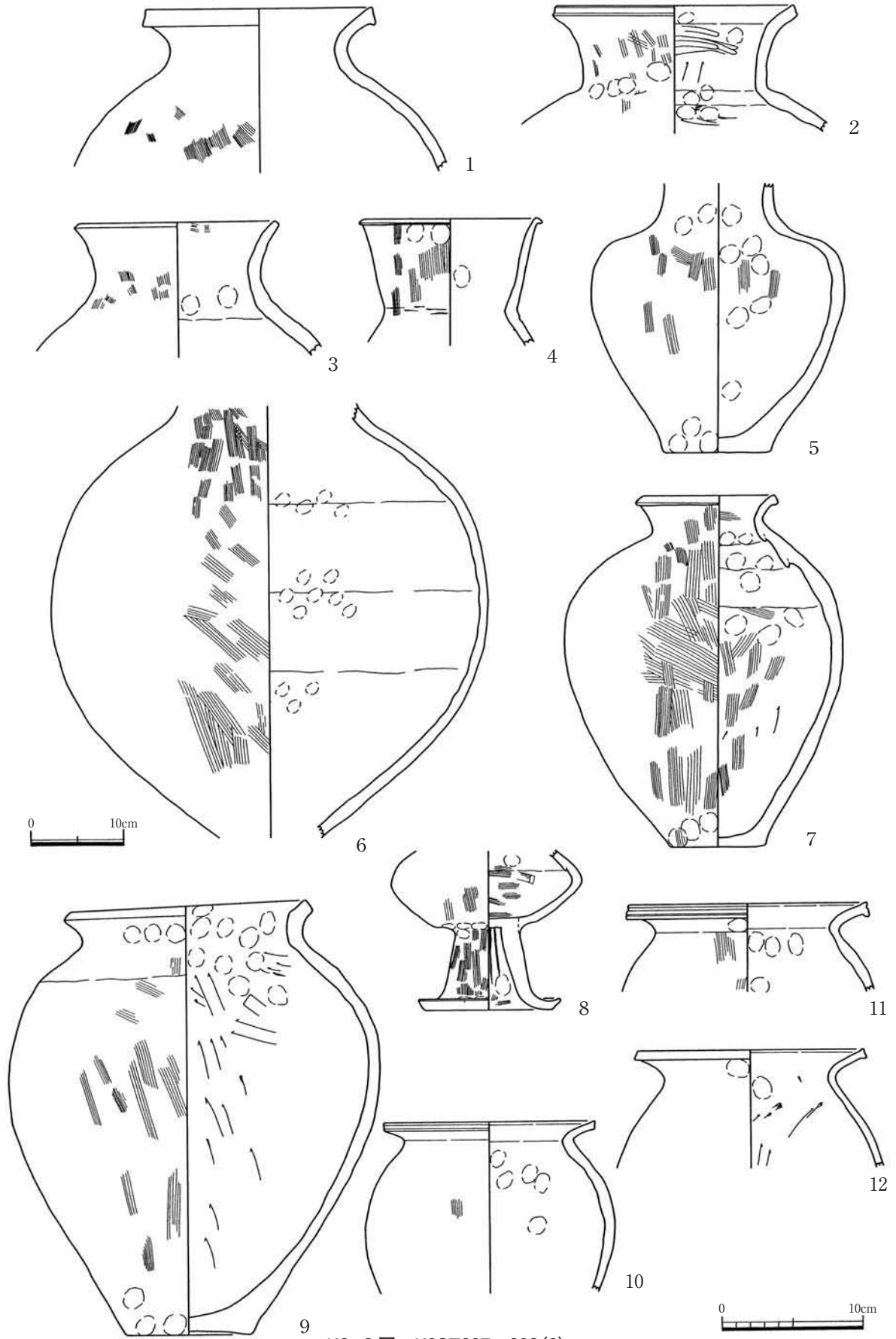
床面；1 面

壁溝；1 条 幅 14～22cm 深さ 3cm

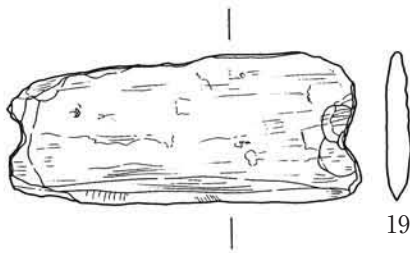
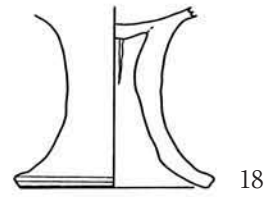
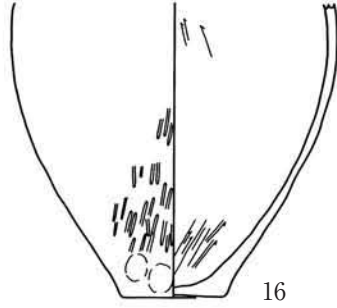
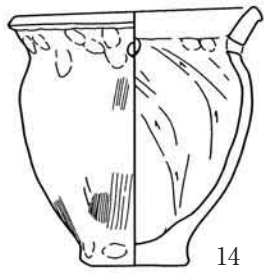
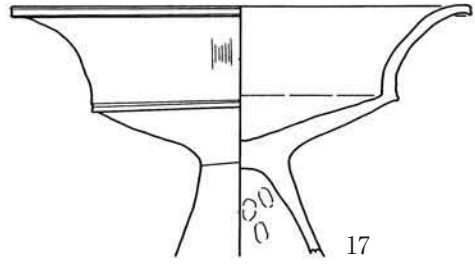
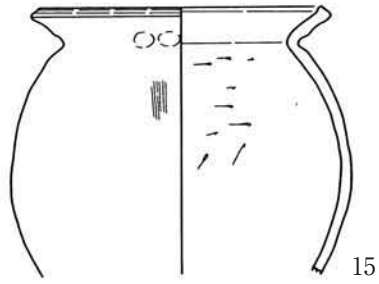
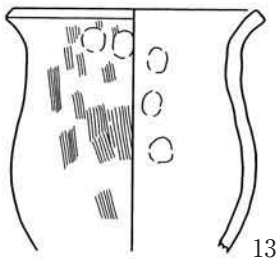
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)石包丁 1、磨製石斧 2

所見；調査区西部に位置し、ST207、SK286・287 に切られる。後世の削平を受け、10cm 程しか埋土が残存しない。中央付近をSK286 に切られるため中央ピットと主柱穴の一部が不明である。主柱穴は多角形に配され、柱間距離は 1.0～1.4m を測る。壁溝は南と西側では住居壁面より 20cm ほど離れて作られている。

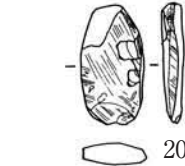
出土遺物のうち土器は細片が多く 3 点を図示した(K2-9 図 22～24)。22 は壺、23 は小型の鉢の底部、24 は高杯である。図示し得ていないが、胴部片には断面三角形の微隆起帯や楕円形浮文、末端扇形文などの装飾を施すものが多い。その他、口縁部片には凹線文を施すものは出土していない。石器は 3 点出土した。25 は磨製石包丁の未成品である。裏面には自然面を残す。26・27 は扁平片刃石斧である。26 は蛇紋岩、27 は緑色岩を素材とする。



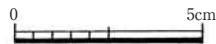
K2-8 図 K2ST207・208(2)



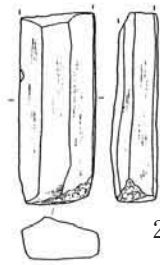
19



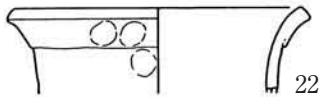
20



K2ST207



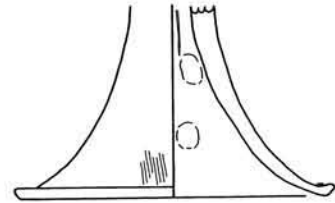
21



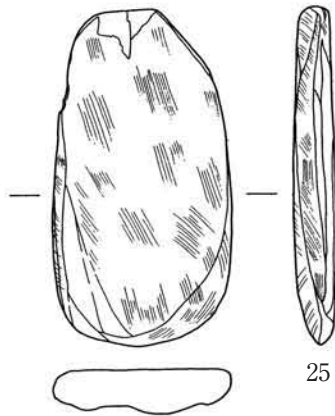
22



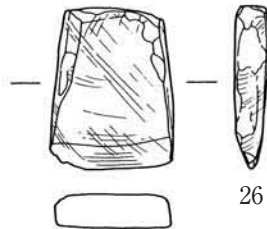
23



24

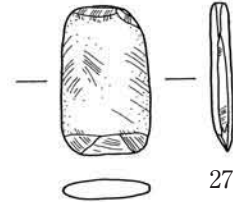


25

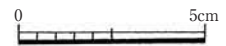


26

K2ST208



27



K2-9 ☒ K2ST207 · 208 (3)

K2ST209(K2-10～12 図)

時期；弥生V-3 形状；方形 主軸方向；N-19°-E

規模；3.0×2.7m 深さ；0.3m 面積；8.0㎡

埋土；暗褐色土シルト主体

ピット；数 2

床面；1 面

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯、小型土器)石包丁 1、ガラス玉 1

所見；調査区西部に位置する。埋土はI～IV層である。II・III層には炭化物と共に多量の大小の河原石が含まれているが、床面に接するものは少ない。ほぼ平坦な床面には炭化物の広がりがあるが、床面は焼けていない。主柱穴と考えられるピットはなく、中央部にピット 2 個を検出した。住居中央部に位置するP1 は直径 8cmを測る。P2 は浅く窪み状のものである。壁溝は検出されなかった。

出土遺物はすべて多量に投げ込まれた河原石と混在し、埋土IVで埋没したあとに一括廃棄されたものと思われる。全体に甕が多く、壺は少ない。1～10 は壺である。8 は砂粒が細かく黒い胎土で仁淀川流域の土器に見られる特徴を持つ。9 は口縁部に凹線と 3 個一組の竹管刺突が施される。10 は頸部を欠くが算盤玉型の胴部を持つ小型の長頸壺である。11～32 は甕である。ほとんどのものが頸部から丸味を持って張る胴部である。30 は南四国型甕のプロポーションを残す。33～36 は鉢、37 は小型土器、38 は高杯である。石器は 39 の磨製石包丁のみである。紐は錐揉みによる。40 のガラス玉は埋土中の出土である。

K2ST210(K2-13 図)

時期；弥生III 形状；円形 主軸方向；N-78°-W

規模；直径 5.6m 深さ；0.26m 面積；24.6㎡

埋土；暗褐色シルト主体

ピット；数 5 主柱穴数；3 主柱穴；P1、3、4

床面；1 面

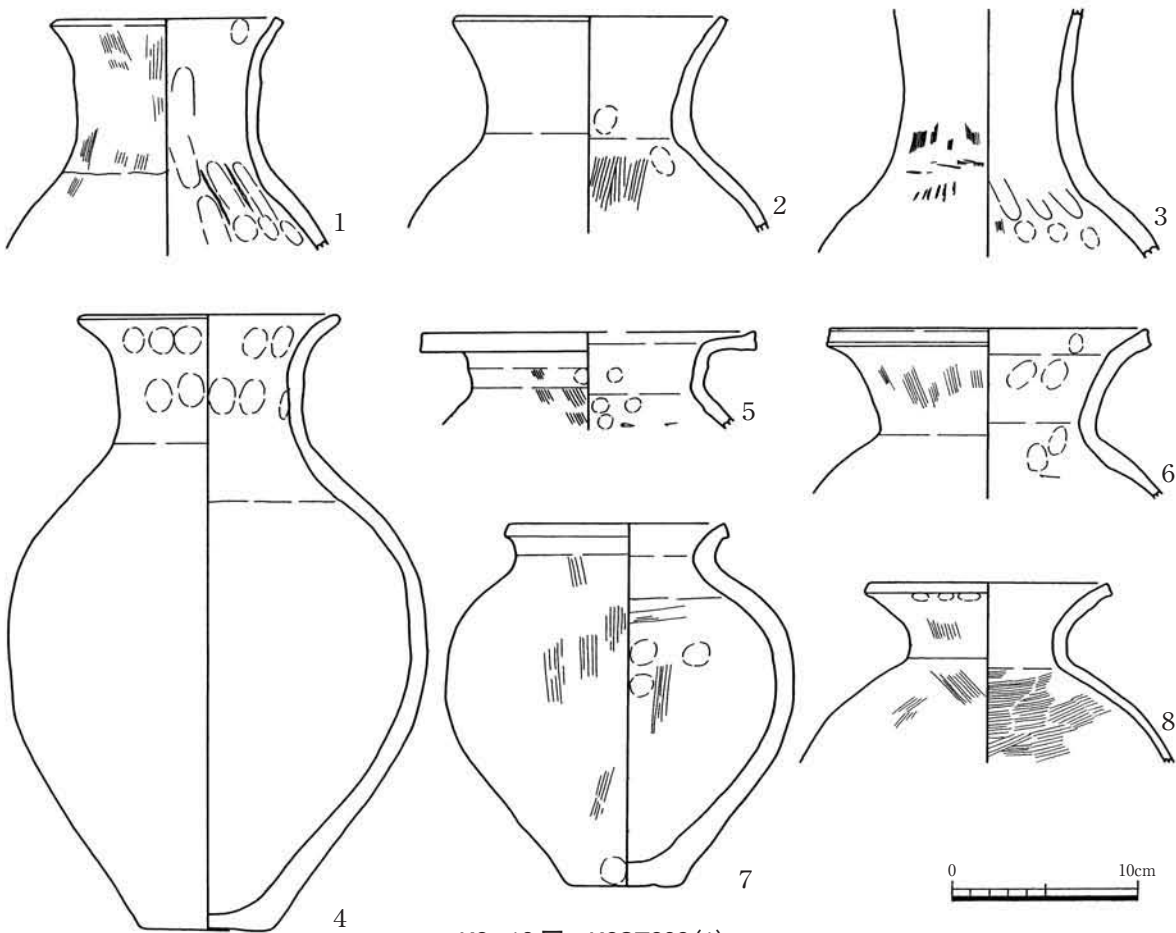
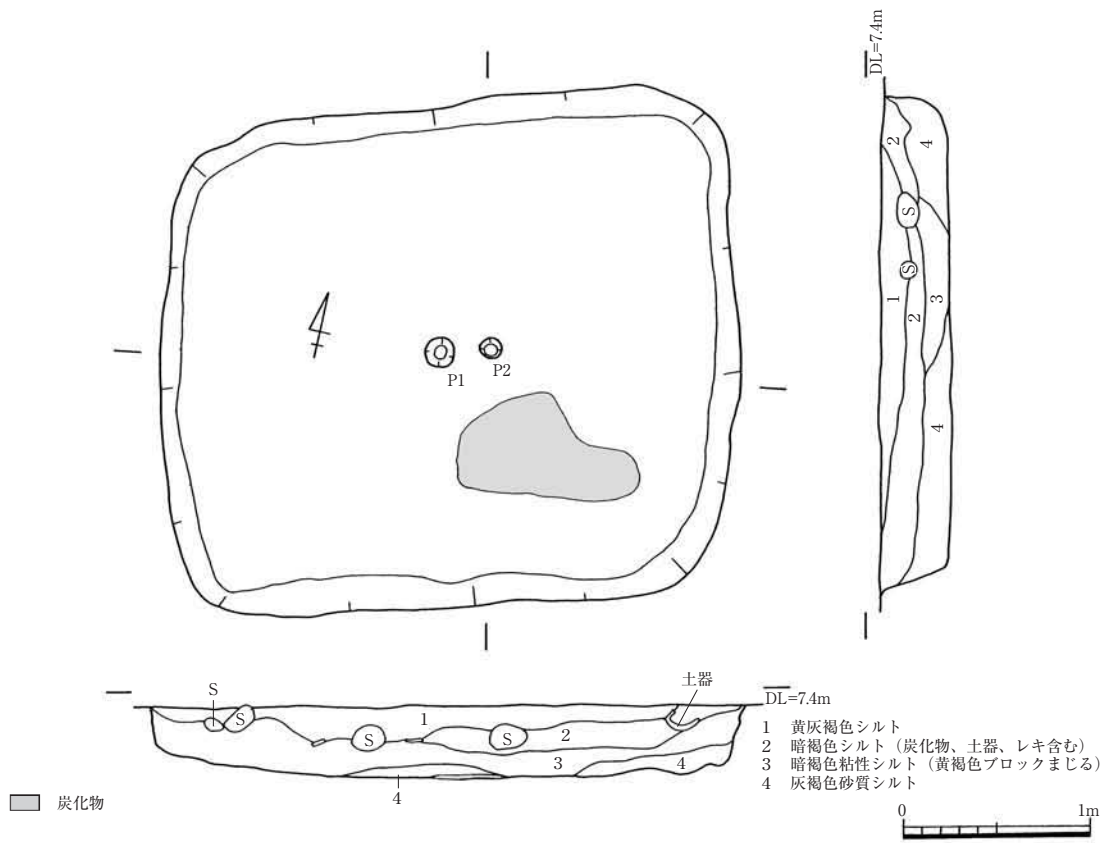
中央ピット；形状 楕円形 規模 52×31cm 深さ 25cm 埋土 暗褐色シルト

壁溝；1 条 幅 22～25cm 深さ 3cm

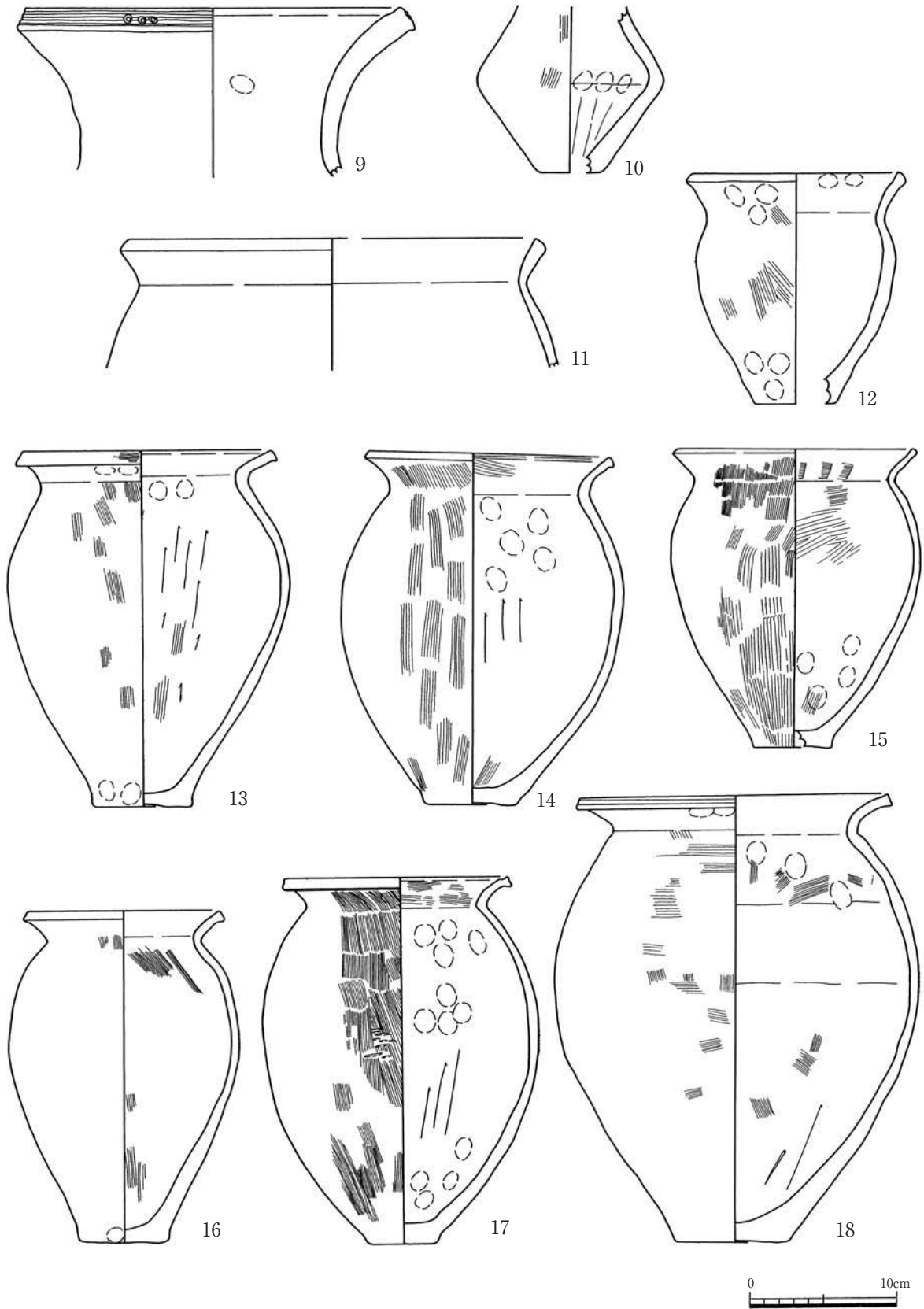
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)石槍 1、磨製石斧 2

所見；調査区西部、北寄りに位置する。北側の一部が調査区外であるが、前回調査のLoc.49ST3 と同一遺構である。SD205 とLoc.49SD2 に切られる。埋土はI～III層である。II層には炭化物と土器片が多く含まれる。出土遺物はほとんどが床面から浮いた状態で出土しており、住居廃絶後に投げ込まれたものと思われる。主柱穴は 4 本が四角形に配されると考えられるが、Loc.49ST3 では未検出のため不明である。柱間距離 1.4～1.6mを測る。壁溝はほぼ全周を巡るが、南側で一部途切れる。

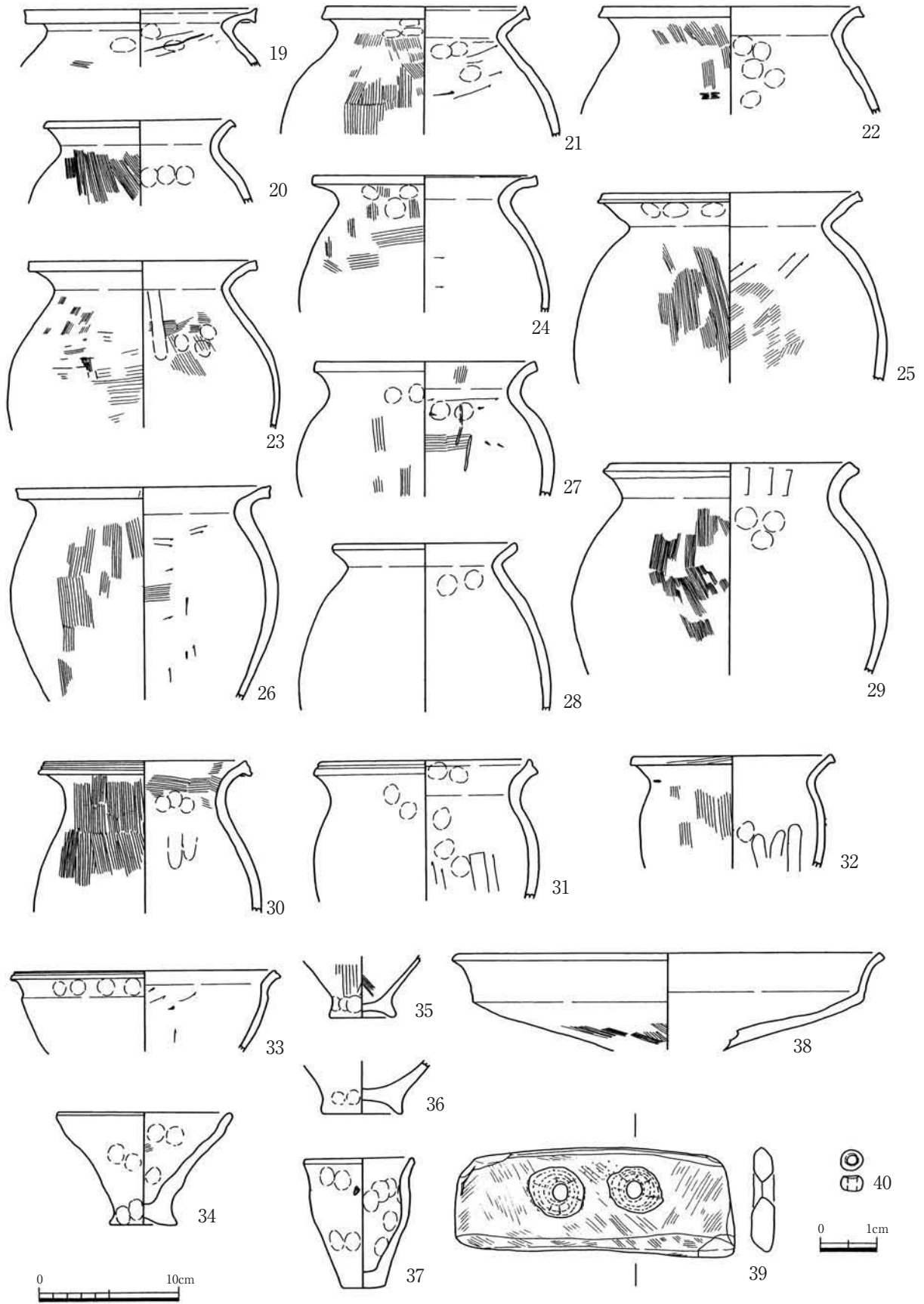
出土遺物のうち土器は細片が多く、図示し得たのは 4 点である。1～3 は壺である。4 は底部円盤充填の高杯である。石器は 3 点出土した。5 は石槍、6 は扁平片刃石斧、7 は太形蛤刃石斧である。5 のみ床面出土である。



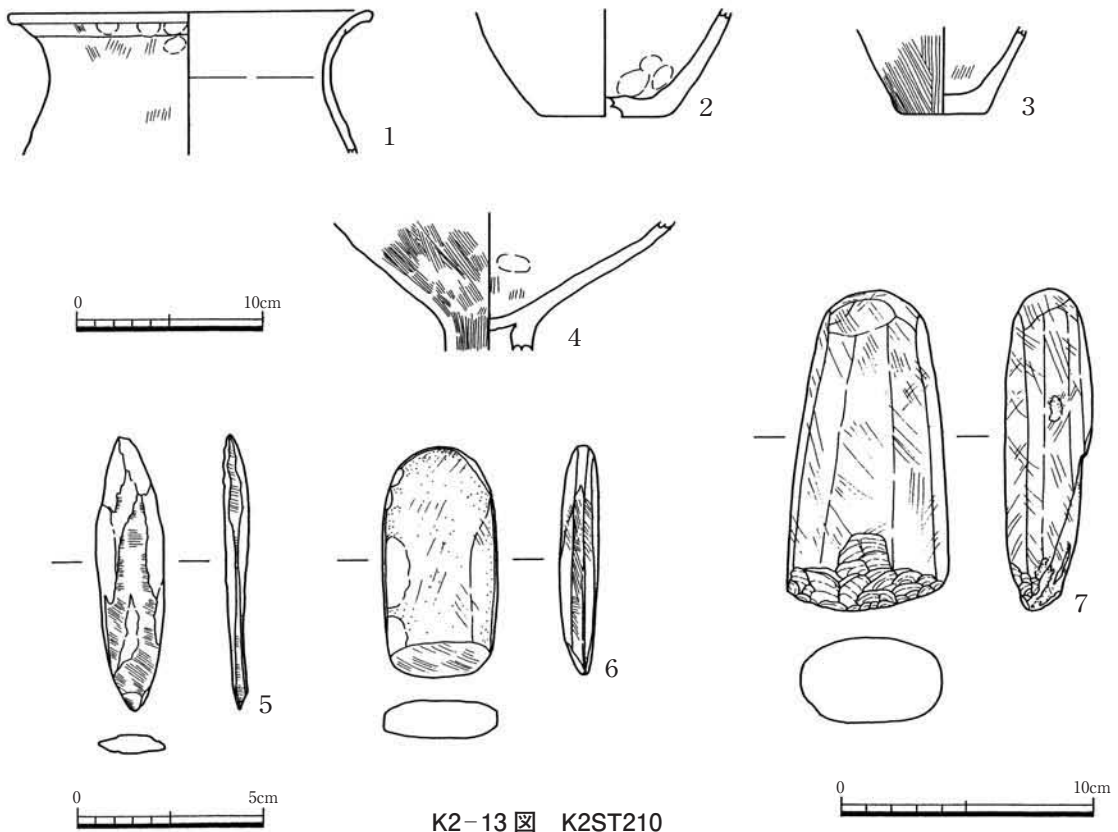
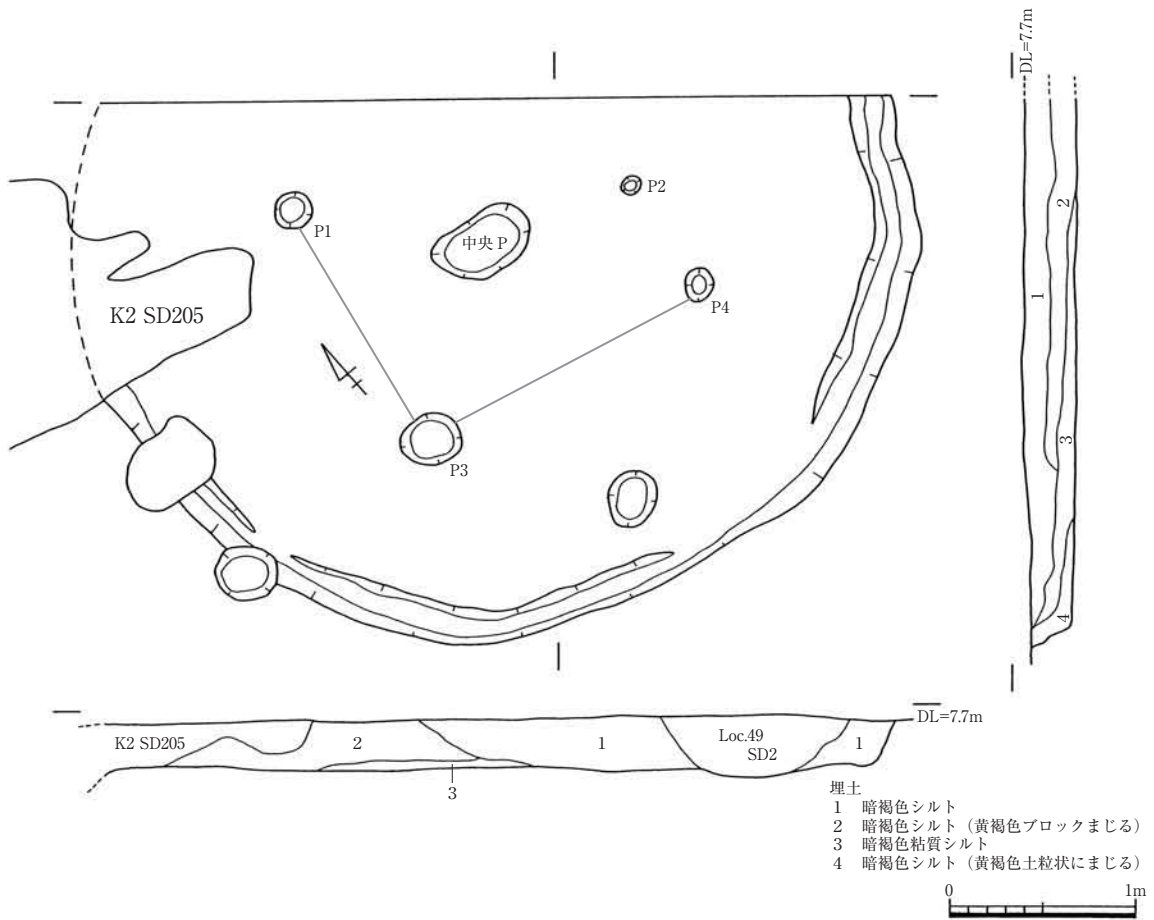
K2-10 ☒ K2ST209(1)



K2-11 図 K2ST209(2)



K2-12 ☒ K2ST209(3)



K2-13 図 K2ST210

K2ST211 (K2-14 図)

時期：弥生IV末～V 形状：方形 主軸方向：N-43°-W

規模：3.1×2.5m 深さ：0.1m 面積：7.7㎡

埋土：暗褐色シルト

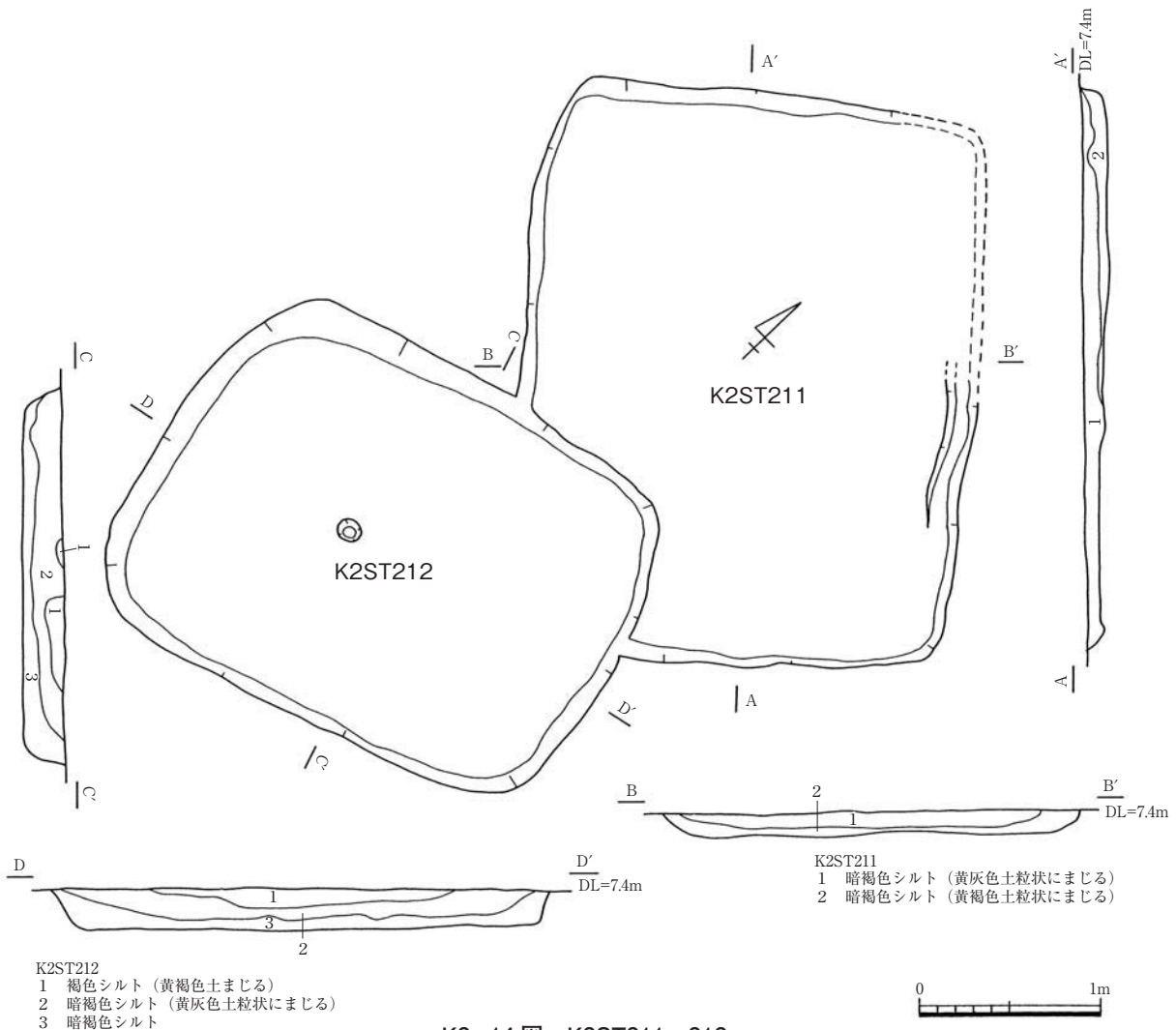
床面：1面

壁溝：1条 幅18cm 深さ2cm

出土遺物：弥生土器

所見：調査区西部、ST206の東側に位置する。ST212に切られる。北隅を現代の攪乱に壊されているが、方形のプランが復元できる。本調査区内で方形プランを持つ遺構ではST207・218と同じ南北方向西寄りの主軸方向である。埋土は暗褐色土主体であり、含まれるブロックの違いによりI・II層に分けることが出来るが、後世の削平を受け残存状態は良くない。北側の壁際に壁溝と考えられる非常に浅い溝状のくぼみがあるが、他の壁際では検出できなかった。床面南側に焼土が混じった炭化物が丸く検出されたが、床面は被熱していなかった。

出土遺物は非常に少なく図示し得るものはなかった。



K2-14 図 K2ST211・212

K2ST212(K2-14 図)

時期；弥生V 形状；方形 主軸方向；N-72°-E

規模；2.8×2.1m 深さ；0.23m 面積；5.8㎡

埋土；暗褐色シルト

ピット；数 1

出土遺物；弥生土器

所見；調査区西部、ST206 東側に位置する。ST211 を切る。本調査区内で方形プランを持つ遺構ではST209・226 と同じ東西方向北寄りの主軸方向である。床面では中央やや西寄りに直径 12cm を測るピット 1 個を検出したのみである。

出土遺物は非常に少なく、図示し得るものはなかった。

K2ST213(K2-15 図)

時期；弥生III 形状；円形 主軸方向；N-90°-E

規模；7.1×6.6m 深さ；0.1m 面積；36.2㎡

埋土；暗褐色シルト

ピット；数 37

1 次住居主柱穴数；7 主柱穴；P3、4、8、10、11、12、14

2 次住居主柱穴数；4 主柱穴；P18、21、24、30

床面；1 面

中央ピット 1；形状 楕円形 規模 55×65cm 深さ 20cm 埋土 暗褐色シルト

中央ピット 2；形状 長楕円形 規模 100×40cm 深さ 19cm 埋土 暗褐色シルト

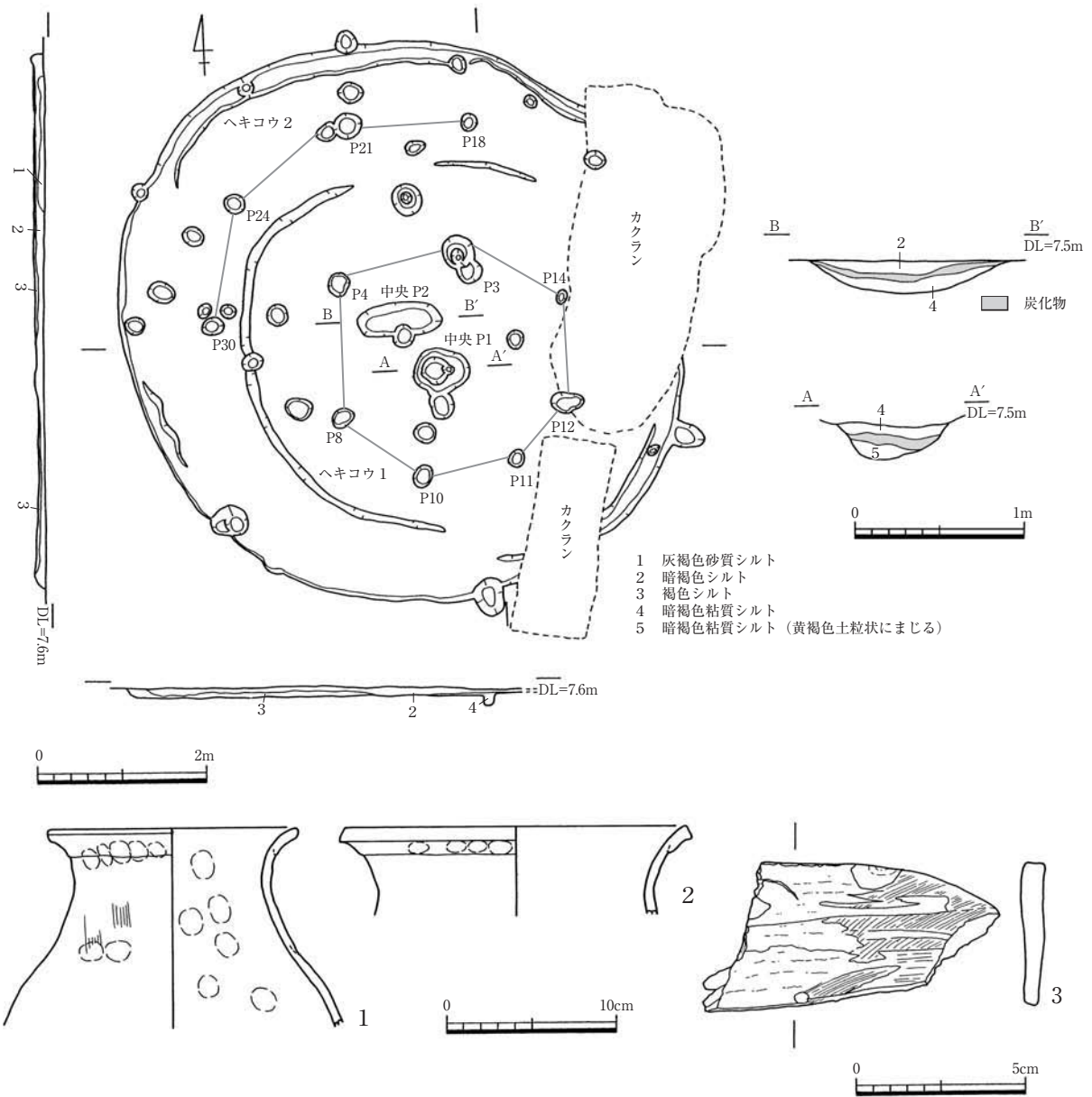
壁溝 1；幅 10～15cm 深さ 2cm

壁溝 2；幅 20～30cm 深さ 5cm

出土遺物；弥生土器(壺 2)石包丁 1

所見；調査区西部に位置する。北側に同時期のK2ST215 が隣接する。後世の削平を受け、非常に浅く残りが悪い。また、東側を現代の畔半により壊される。床面はほぼ平坦で、壁溝 2 条、中央ピット 2 個を検出した。床面ピットは 2 重の柱穴配置が見られ、拡張された住居と考えられる。内側の 1 次住居の柱穴は多角形に配置される。床面にわずかに残存する内側の壁溝から 1 次住居の規模は直径約 4.7m と推測される。中央ピット 1 の埋土中に炭化物層を含む。断面観察からは、拡張時に埋められたものと思われる。2 次住居は北西方向に拡張される。柱穴は北西部分しか検出できなかったため、1 次住居の南側の柱穴を共有していた可能性がある。壁溝は、壁沿いにほぼ全周を巡るが、南と西側で一部途切れる。中央ピット 2 の埋土中にも炭化物層を含む。

出土遺物のうち土器は細片が多く図示し得たのは 1・2 の壺 2 点のみである。その他に口縁端部に板状工具の先端による斜格子状のキザミを施した口縁部片や断面三角形の粘土帯を貼付する胴部片もある。3 は磨製石包丁の未成品である。



K2-15 図 K2ST213

K2ST215(K2-16 図)

時期：弥生III 形状：方形 主軸方向：N-0°

規模：2.3×2.2m 深さ：0.25m 面積：5.1㎡

埋土：褐色シルト

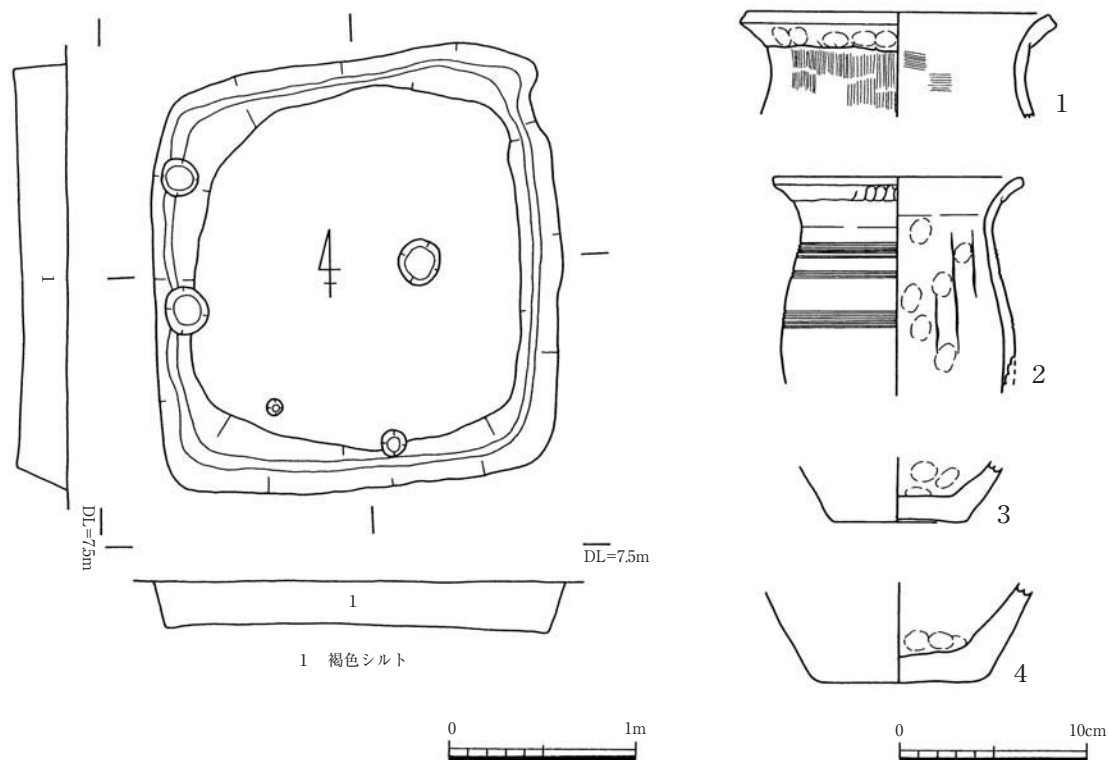
ピット：数5

床面：1面

壁溝：1条 幅10～20cm 深さ2cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区西部に位置する。南側に同時期のST213が隣接する。ほぼ正方形のプランを呈し、埋土は単一層である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。壁溝と認められるほど



K2-16 図 K2ST215

明確な掘り込みではないが、壁際はわずかに傾斜する。床面に炭化物が広がるが、被熱は認められなかった。検出されたピットには主柱穴と考えられるものはないが、床面中央やや東寄りに位置するP1を中心として弧状に西と南の壁際に並ぶ。

出土遺物のうち図示し得たものは4点である。1は壺、2の小形甕は南四国型甕の特徴を持つ。3・4は壺の底部である。

K2ST216(K2-17 図)

時期；弥生IV？ 形状；円形 主軸方向；N-90°-W

規模；4.8×4.6m 深さ；0.08m 面積；17.3㎡

埋土；暗褐色シルト

ピット；数 11 主柱穴数；5 主柱穴；P1、3、4、5、11

床面；1面

中央ピット；形状 楕円形 規模 72×34cm 深さ 8cm 埋土 黒褐色シルト

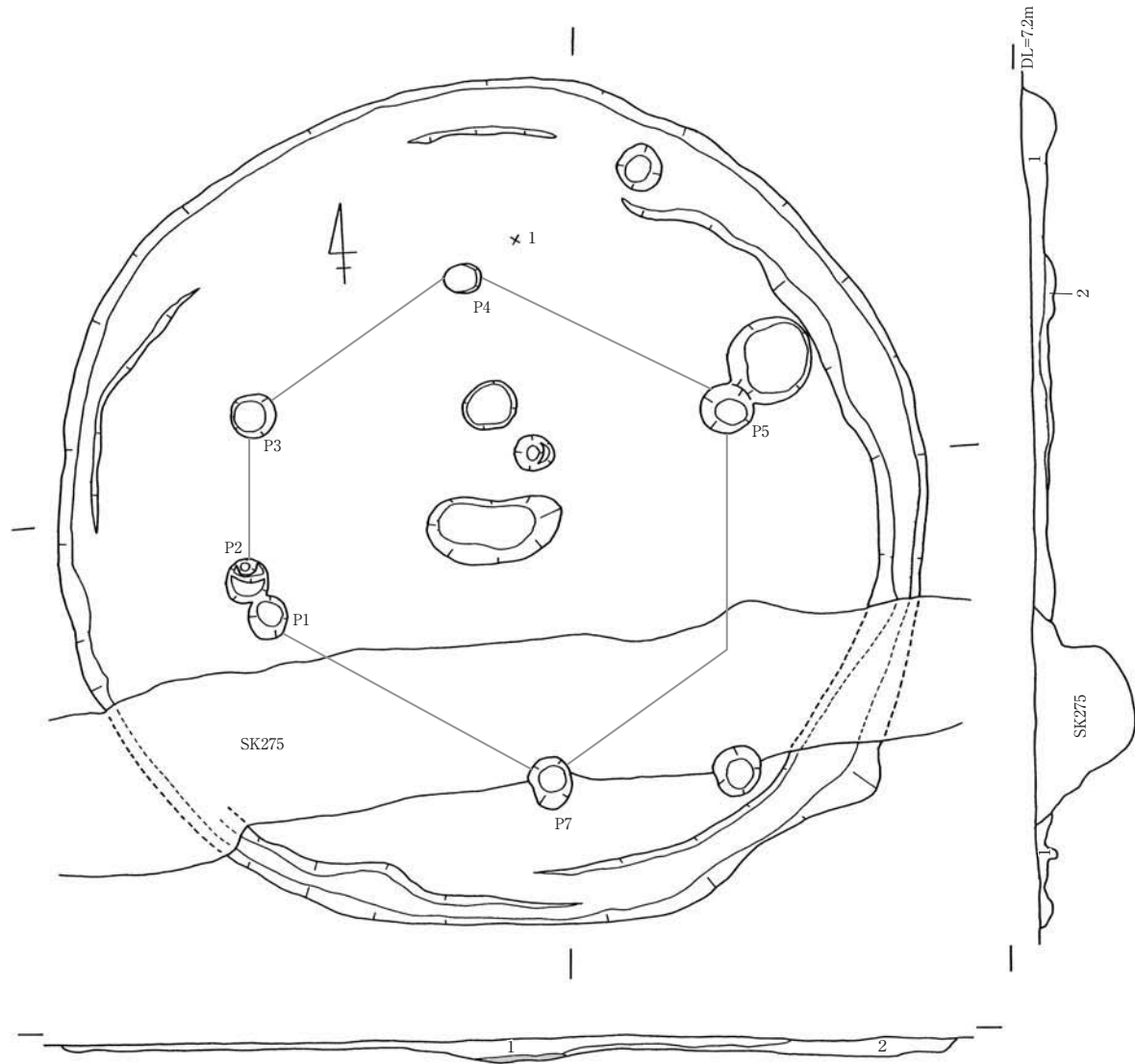
壁溝；1条 幅 12～36cm 深さ 2cm

出土遺物；弥生土器、石剣1、石斧1

所見；調査区西部南寄りに位置する。SK275に切られる。後世の削平を受け非常に残りが悪い。埋土中に遺物をほとんど含まず、時期は明確にできないが、出土した細片の胎土は全て砂粒が小さくきめが細かい。柱穴はSK275に切られているため未検出のピットを加えた多角形の配置と考えら

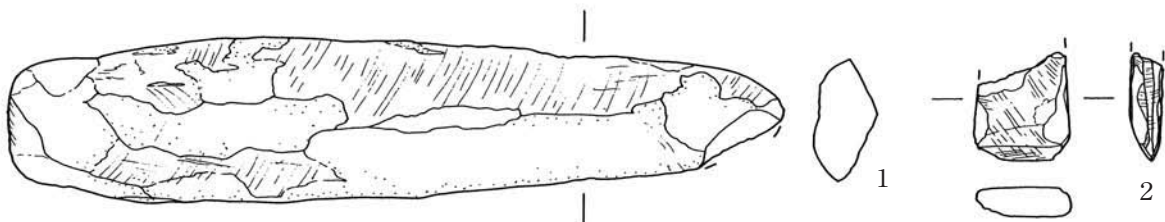
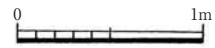
れる。壁溝は他の住居と比べ幅広く、西と北側で一部途切れるが、ほぼ全周に巡る。中央ピットの掘り込みは浅く、底に炭化物が堆積する。

出土遺物のうち図示し得たのは石器 2 点のみである。1 は北側床面で出土した石剣、2 は扁平片刃石斧の刃部片である。



- 1 黒褐色土 (シルト)
- 2 暗褐色土 (シルト、黄褐色土粒状にまじる)

■ 炭化物



K2-17 図 K2ST216

K2ST217(K2-18 図)

時期：弥生IV～V 形状：円形 主軸方向：N-80°-W

規模：直径 6.0m 深さ：0.04m 面積：28.3㎡

埋土：暗褐色シルト

ピット：数 29 主柱穴数：9 主柱穴：P9、13、15、18、20、22、24、25、26

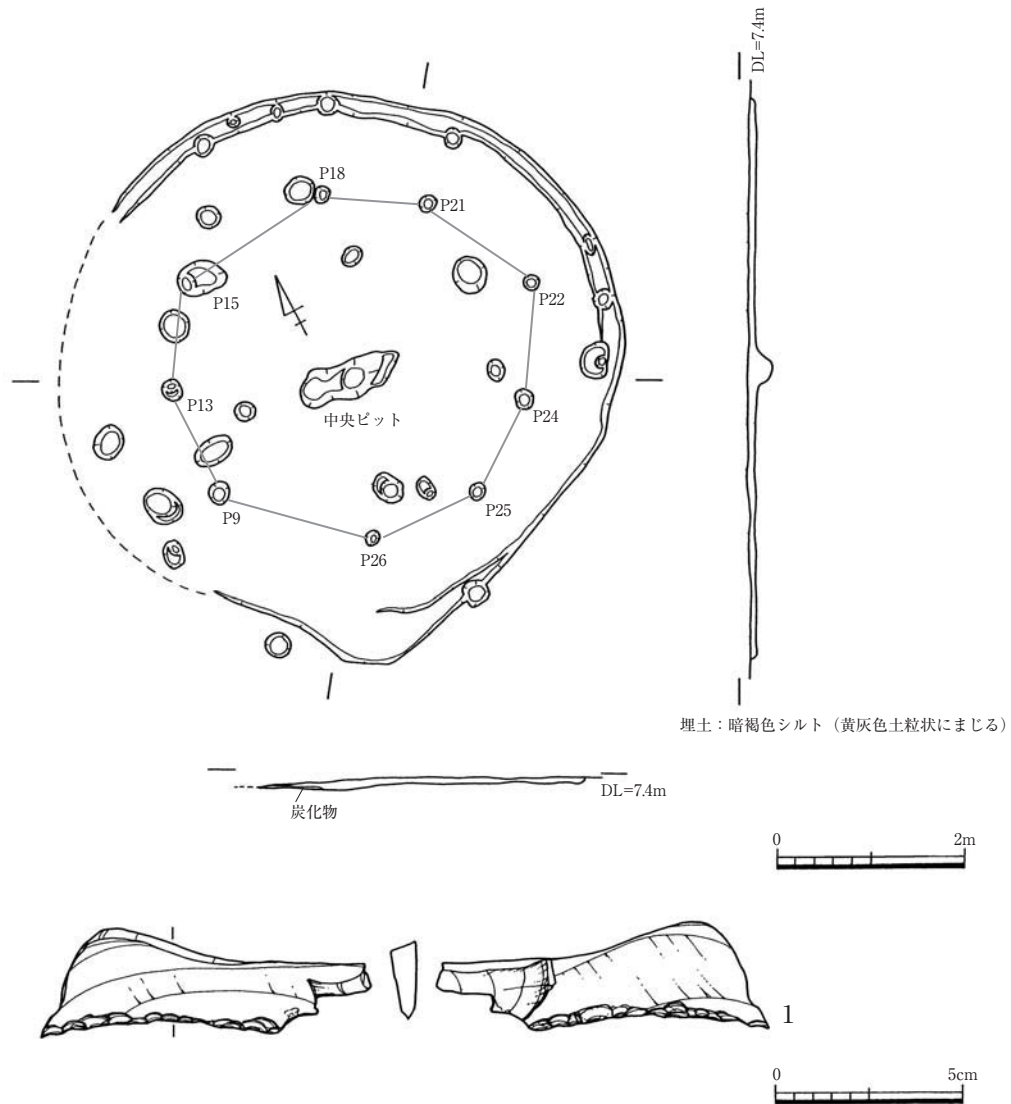
床面：1 面

中央ピット：形状 楕円形 規模 94cm 深さ 8cm 埋土 暗褐色シルト

壁溝：1 条 幅 20～22cm 深さ 2cm

出土遺物：弥生土器

所見：調査区西部南寄りに位置する。後世の削平を著しく受け、残りが悪く、西側の壁は残存しない。中央ピットは埋土中に炭化物を含むが、底や壁面は被熱していない。壁溝は壁際に 1 条巡るが、



K2-18 図 K2ST217

南と西側で途切れる。柱穴は多角形に配され、柱間距離は1.1～1.7mである。北側には壁溝内にピットが並ぶが、住居に伴うものかは明確でない。また、南側には両脇にピットのある張り出し部を持つが、著しい削平のため、残存状態が悪く、住居に伴うものかは不明である。

出土遺物は少なく、1の削器のみ図示した。端部に自然面を残すサヌカイトの不定形剥片を使用している。

K2ST218(K2-19 図)

時期；弥生IV～V 形状；方形 主軸方向；N-22°-W

規模；3.6×2.7m 深さ；0.2m 面積；9.7㎡

埋土；暗褐色シルト

ピット；数2

床面；1面

壁溝；1条 幅20～40cm 深さ2～10cm

出土遺物；弥生土器(壺、甕、高杯)

所見；調査区中央部、ST217の東側に位置する。SK251・268に切られる。床面は平坦である。壁溝の東側は浅く細いが、南側は広く深い。北側と西側では未検出である。東側壁溝の北端部分は北壁の手前で直角に屈曲するが、短く終わる。床面には主柱穴と思われるピットは確認できなかった。

出土遺物は細片が多く、図示し得た4点は全て甕である。

K2ST219(K2-20 図)

時期；弥生 形状；方形 主軸方向；N-84°-E

規模；2.0×2.1m 深さ；0.64m 面積；4.2㎡

埋土；暗褐色シルト主体

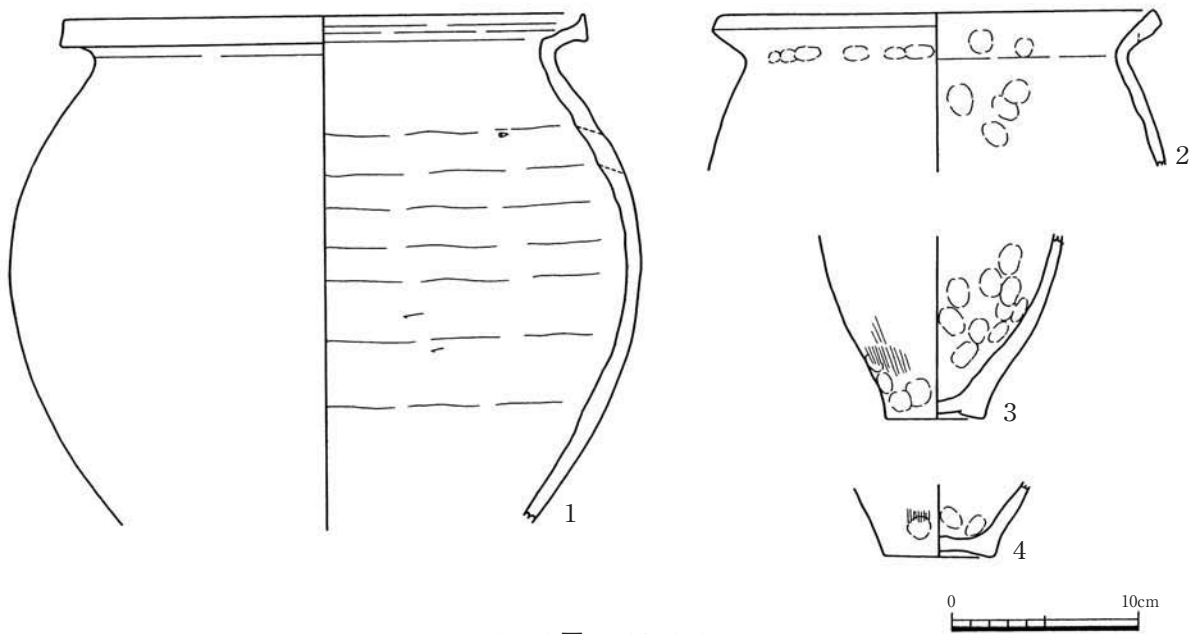
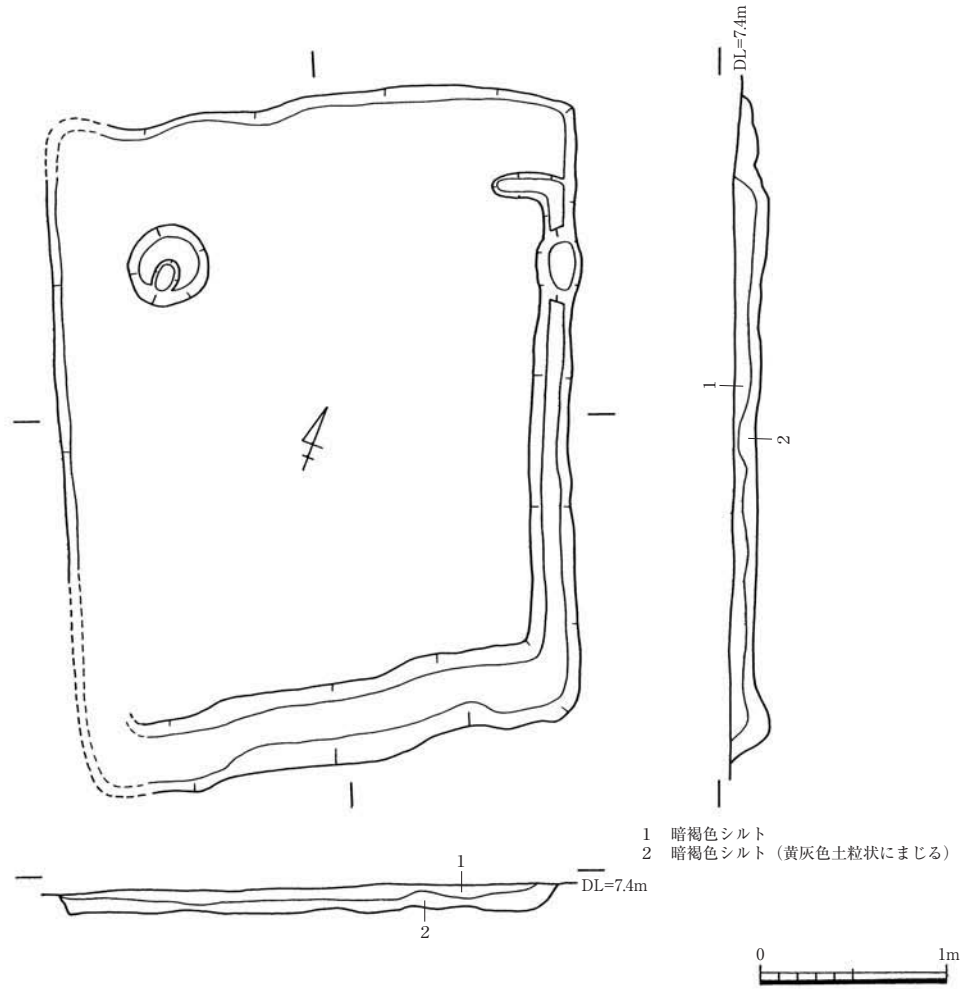
ピット；数4 主柱穴数；4 主柱穴；P1～4

床面；1面

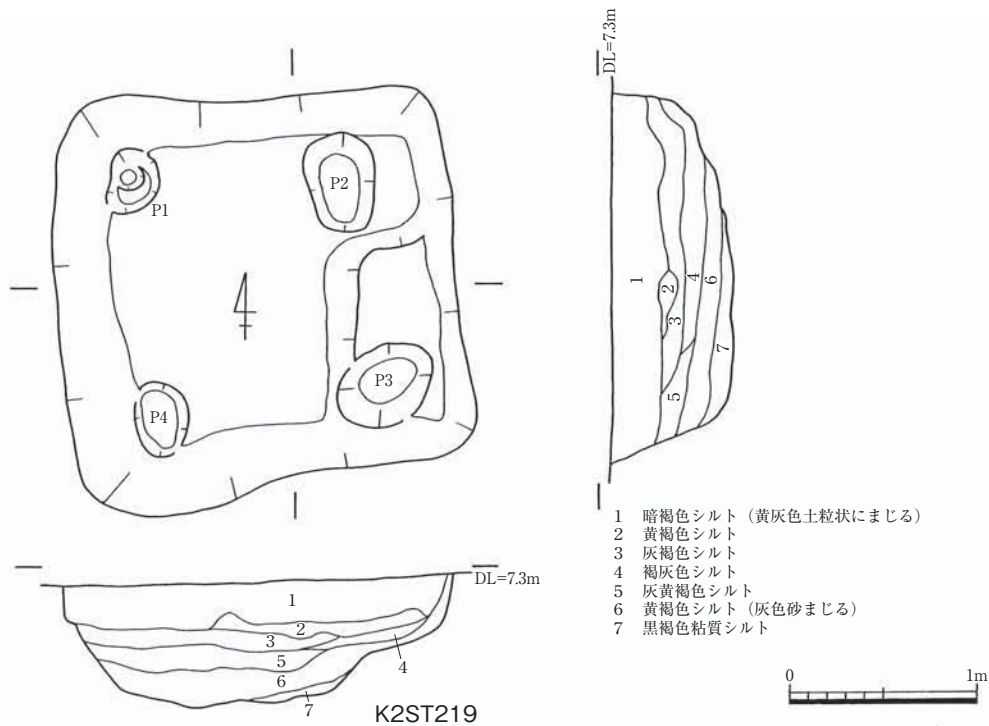
出土遺物；弥生土器

所見；調査区中部、ST220西側に位置する。ほぼ正方形のプランを呈する。非常に残りが良く、II～VII層までは緩やかに埋没し、最後にI層が一気に埋没した状況が断面観察から看取できる。床面は中央に向かって緩い傾斜を持ち、丸底状になる。壁は垂直近く立ち、四隅の壁際に柱穴と考えられるピットが配される。P1では直径約15cmの柱痕が検出された。また、床面南東隅は階段状に一段高くなっている。

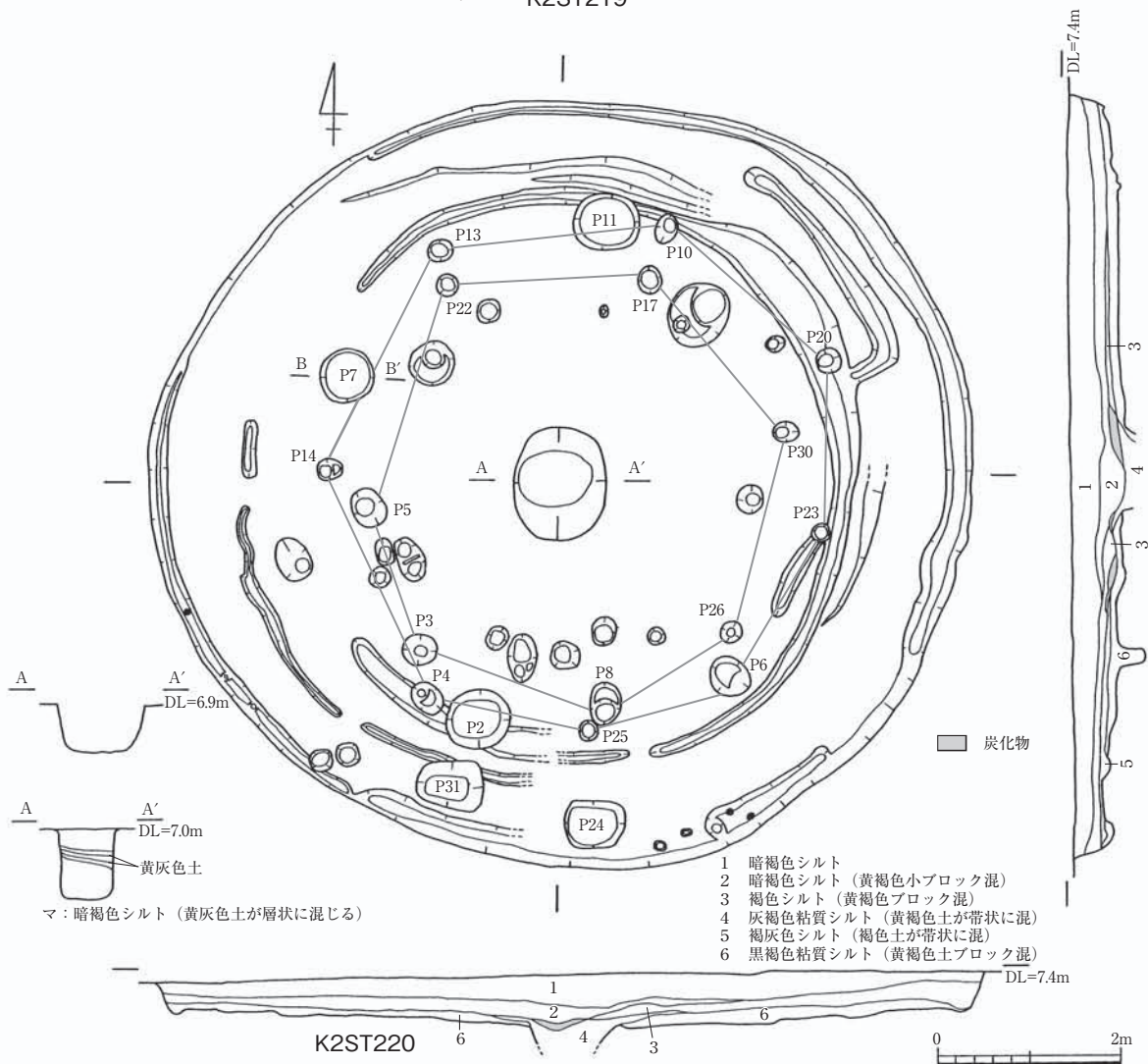
埋土中にほとんど遺物を含まないため、時期を明確には出来ないが、埋土の色調から弥生時代の遺構とした。



K2-19 図 K2ST218



- 1 暗褐色シルト (黄灰色土粒状にまじる)
- 2 黄褐色シルト
- 3 灰褐色シルト
- 4 褐灰色シルト
- 5 灰黄褐色シルト
- 6 黄褐色シルト (灰色砂まじる)
- 7 黒褐色粘質シルト



K2-20 ☒ K2ST219・220(1)

K2ST220(K2-20～22 図)

時期；弥生V-3 形状；円形 主軸方向；N-0°

規模；8.9×8.3m 深さ；0.58m 面積；58.1m²

埋土；暗褐色シルト主体

ピット；数 41 主柱穴数；8 主柱穴；P4、6、10、13、14、20、23、25

床面；2面 貼床；あり

中央ピット；形状 楕円形 規模 120×100cm 深さ 52cm 埋土 灰褐色粘質シルト

壁溝；3条 幅 10～50cm 深さ 2cm

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)削器 1、磨製石斧 1、石錘 1、鉄斧 1、ガラス玉 18

所見；調査区中央に位置する本調査区中最大の住居跡である。SK249・292に切られ、SK280を切る。壁溝は2重に巡り、主柱穴は同心円状に2組あることから、拡張し建て替えが行われている。1次住居の規模は内側の壁溝から直径約6.4mと推測される。主柱穴はP3・5・8・17・19・22・26で柱間距離1.7～2.8mを測り多角形に配される。2次住居拡張時には張り床(埋土4～6)が行われ、中央ピットは1次住居と同じ位置に掘り込まれる。張り床の土で埋まる1次住居の壁溝埋土には多量の土器片が含まれ、底に張りついた状態で出土している。床面外側は西側を除き三日月状に若干高くなる段部を持つ。段部の内側に沿って直径50～70cm、深さ30～75cmを測る貯蔵穴と思われるP2・7・9・11を持つ。主柱穴は柱間距離1.7～2.6mを測り多角形に配される。

出土遺物は非常に多く、土器は30点を図示した(K2-21・22図)。1～11は壺である。1～3は直口壺、4～7は広口壺である。4は文様に古い要素があり、混入の可能性がある。8・9は讃岐からの搬入品で同一個体である。10は鉢の可能性もある。12～23は甕である。12～17は凹線文系、18～22は南四国型甕のプロポーションを残すものである。24～27は鉢、28～30は高杯、31はミニチュア土器である。他の遺構に比べ、高杯の破片は多く、図示し得なかったが、この他にも口縁部が外反するタイプの口縁部片が多くある。また、甕または壺の胴部片には叩き目を残すものが多い。

石器は32の削器、33の扁平片刃石斧は埋土中、34の有溝石錘は張り床下面の出土である。35は袋状鉄斧である。腐植が著しく錆に包まれる。36～38のガラス玉は埋土中及び床面から出土し、出土数は18個と本調査区中最も多い。他に床面に植物繊維を編んだ敷物の圧痕を検出した。

K2ST221(K2-23、24 図)

時期；弥生IV 形状；円形 主軸方向；N-42°-E

規模；5.6×4.9m 深さ；0.32m 面積；22.1m²

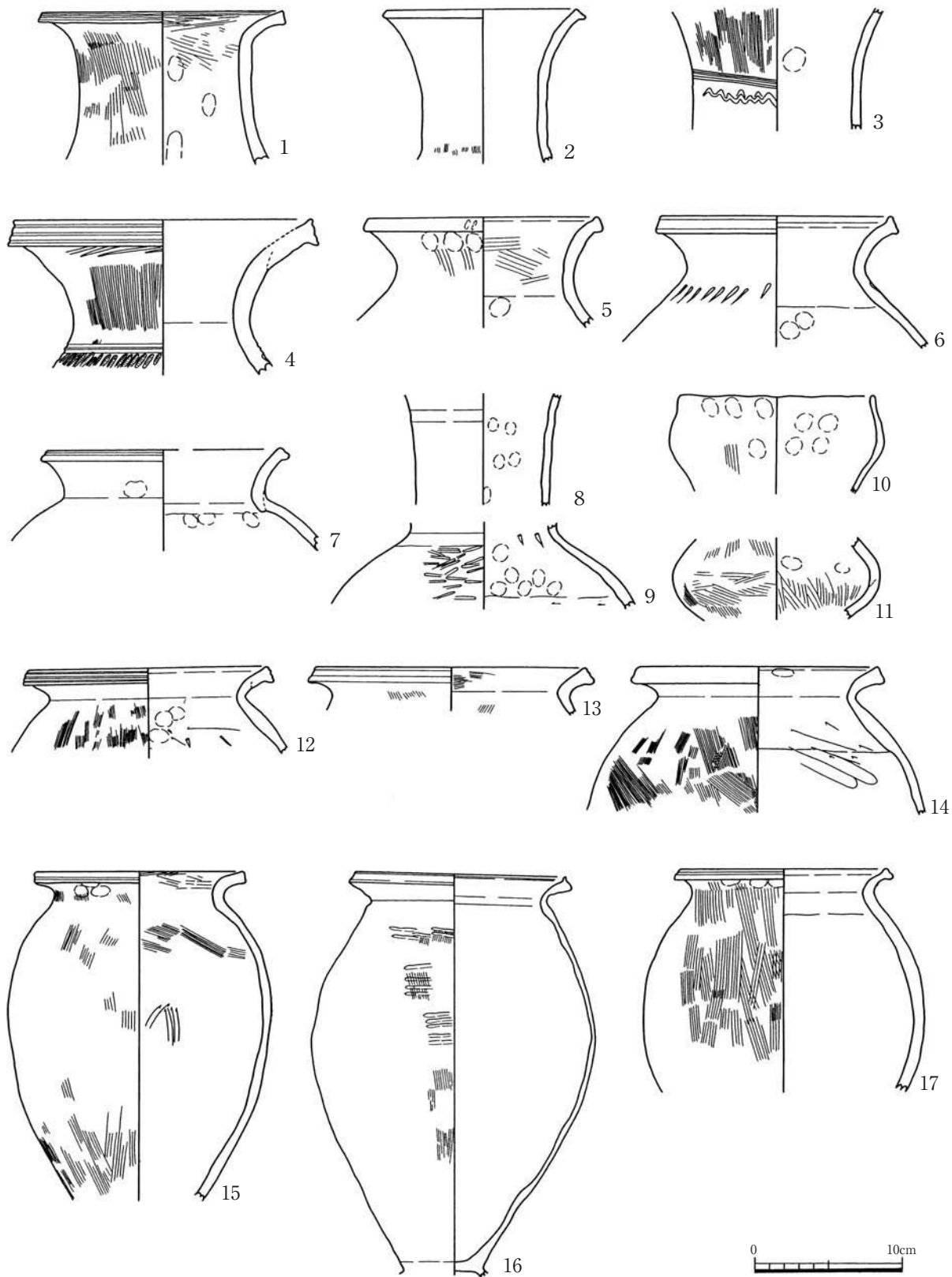
埋土；暗褐色シルト主体

ピット；数 11 主柱穴数；4以上 主柱穴；P1、7、8、9

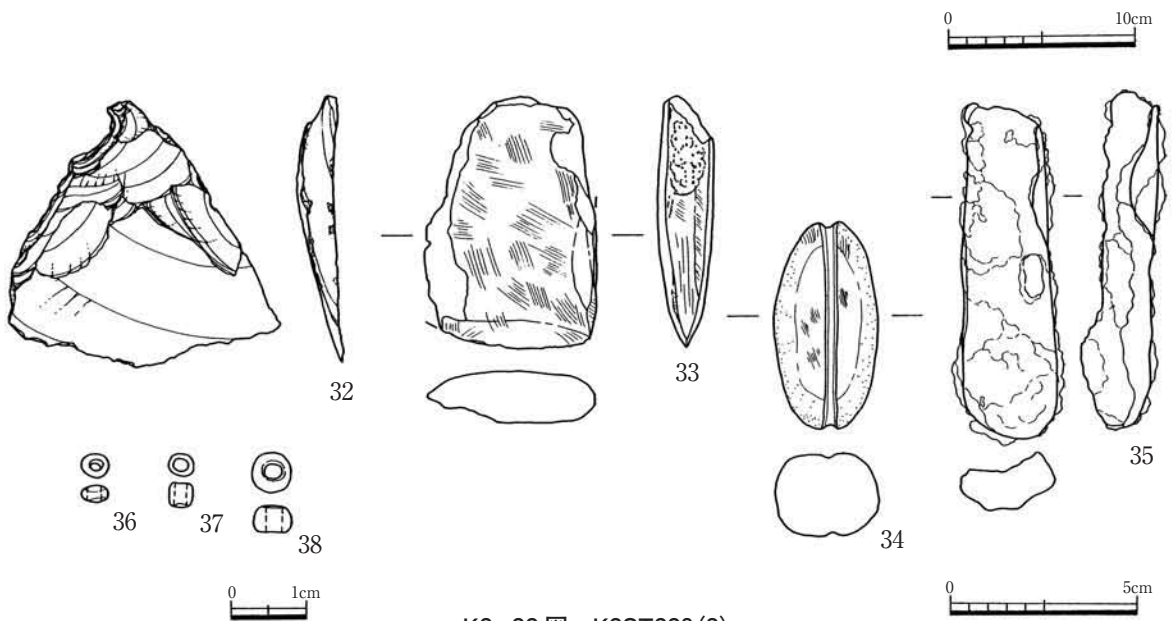
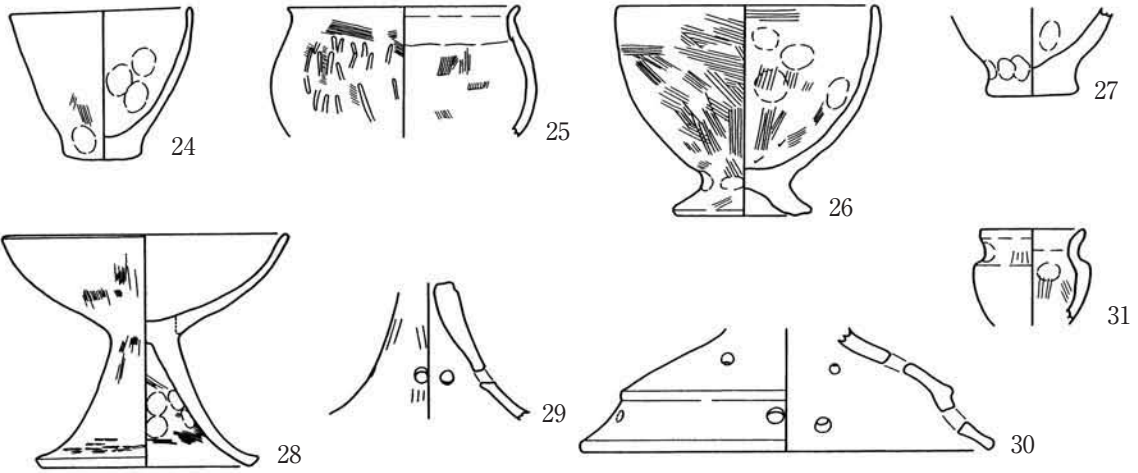
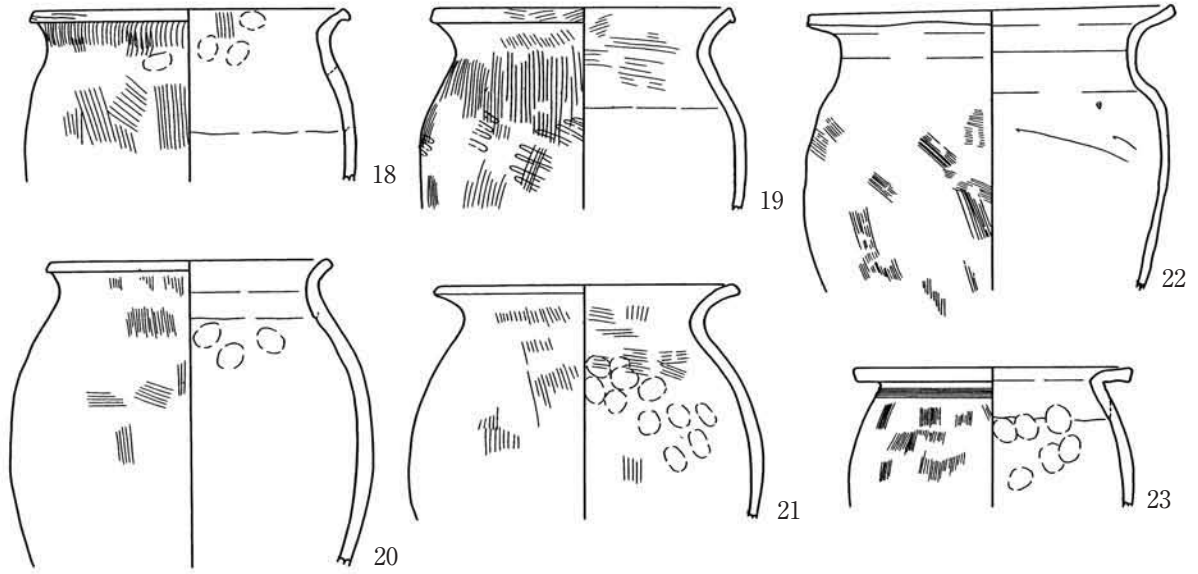
床面；1面

中央ピット；形状 楕円形 規模 78×55cm 深さ 24cm 埋土 黒褐色シルト

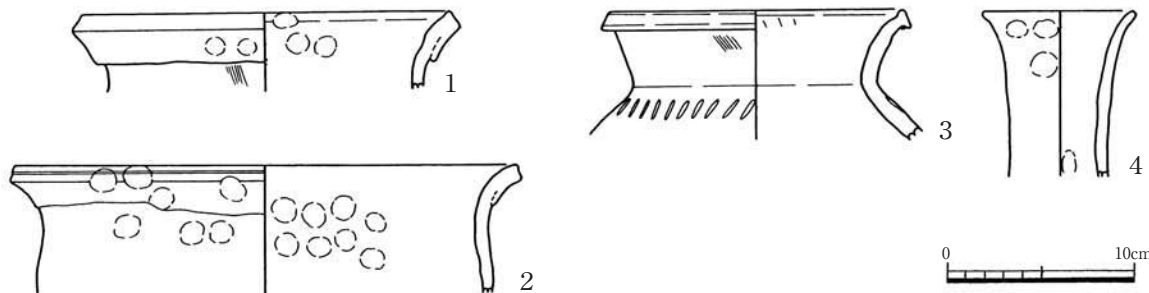
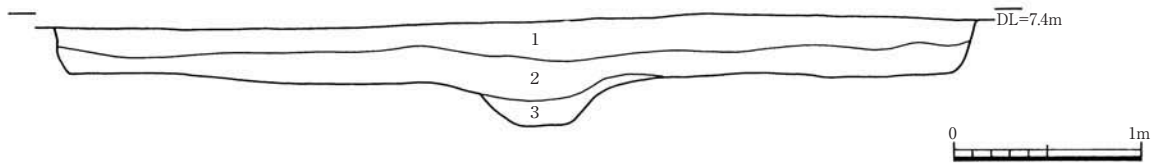
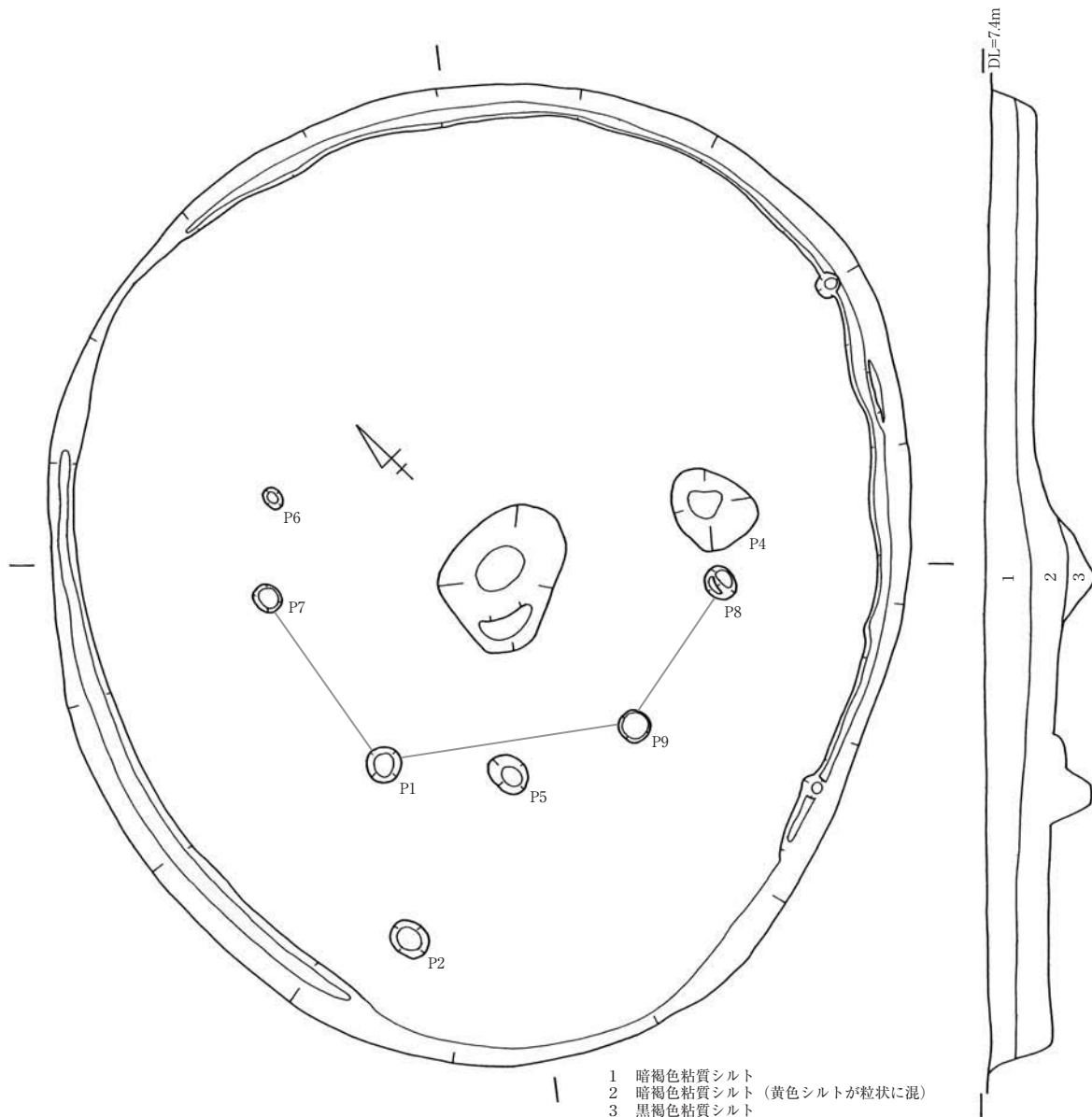
壁溝；1条 幅 6～14cm 深さ 2cm



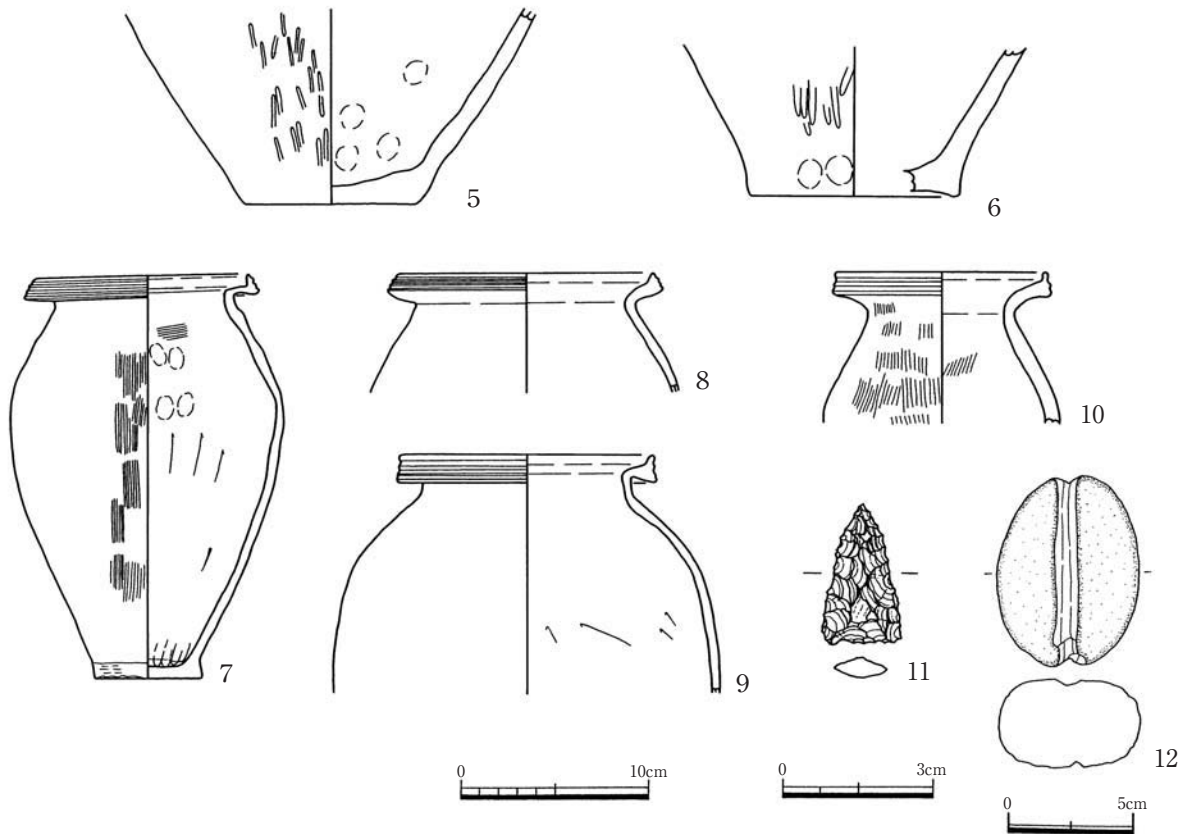
K2-21 ☒ K2ST220(2)



K2-22 図 K2ST220(3)



K2-23 ☒ K2ST221 (1)



K2-24 図 K2ST221 (2)

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、高杯、蓋)石鏃1、石錘1

所見：調査区中央部に位置する。SK281・283を切る。主柱穴は多角形に配されるが、北側は未検出である。中央ピットは埋土中に炭化物を多く含み、底には炭化物が1～2cm堆積するが被熱していない。

出土遺物のうち復元図示し得たものは10点である。1～6は壺である。2は短頸壺、3はヘラ状工具により肩部に列点文を施される。5・6の底部片は丁寧にヘラミガキが施される。7～10は甕である。いずれも頸部は「く」の字に屈曲し、端部を拡張して凹線文を施す。胴部の器壁は薄い。石器は2点出土した。11はサヌカイト製の平基式石鏃。12は床面出土の有溝石錘である。

K2ST222(K2-25～27 図)

時期：弥生V-2 形状：円形 主軸方向：N-0°

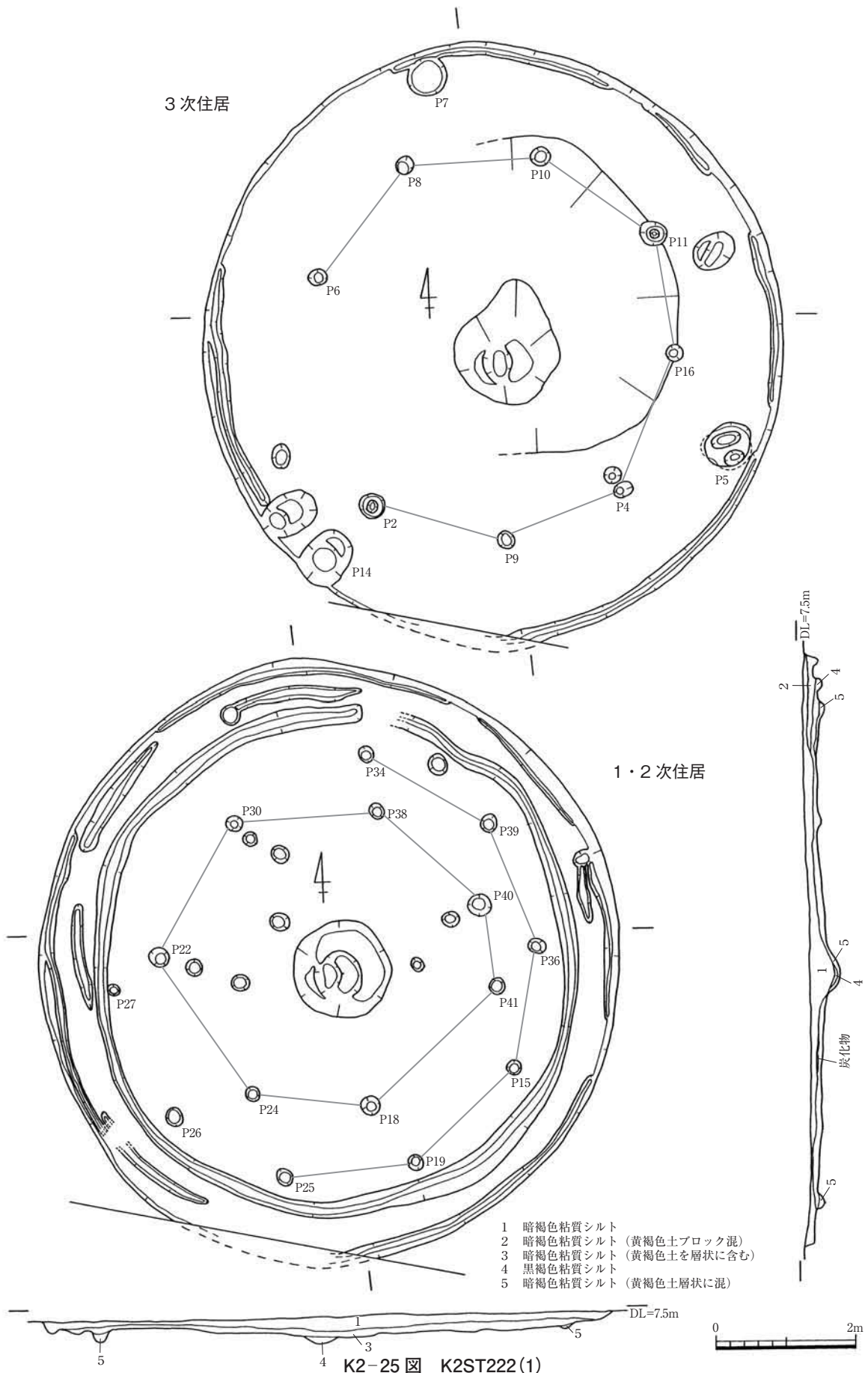
規模：8.2×8.6m 深さ：0.25m 面積：55.4㎡

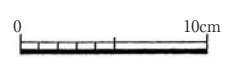
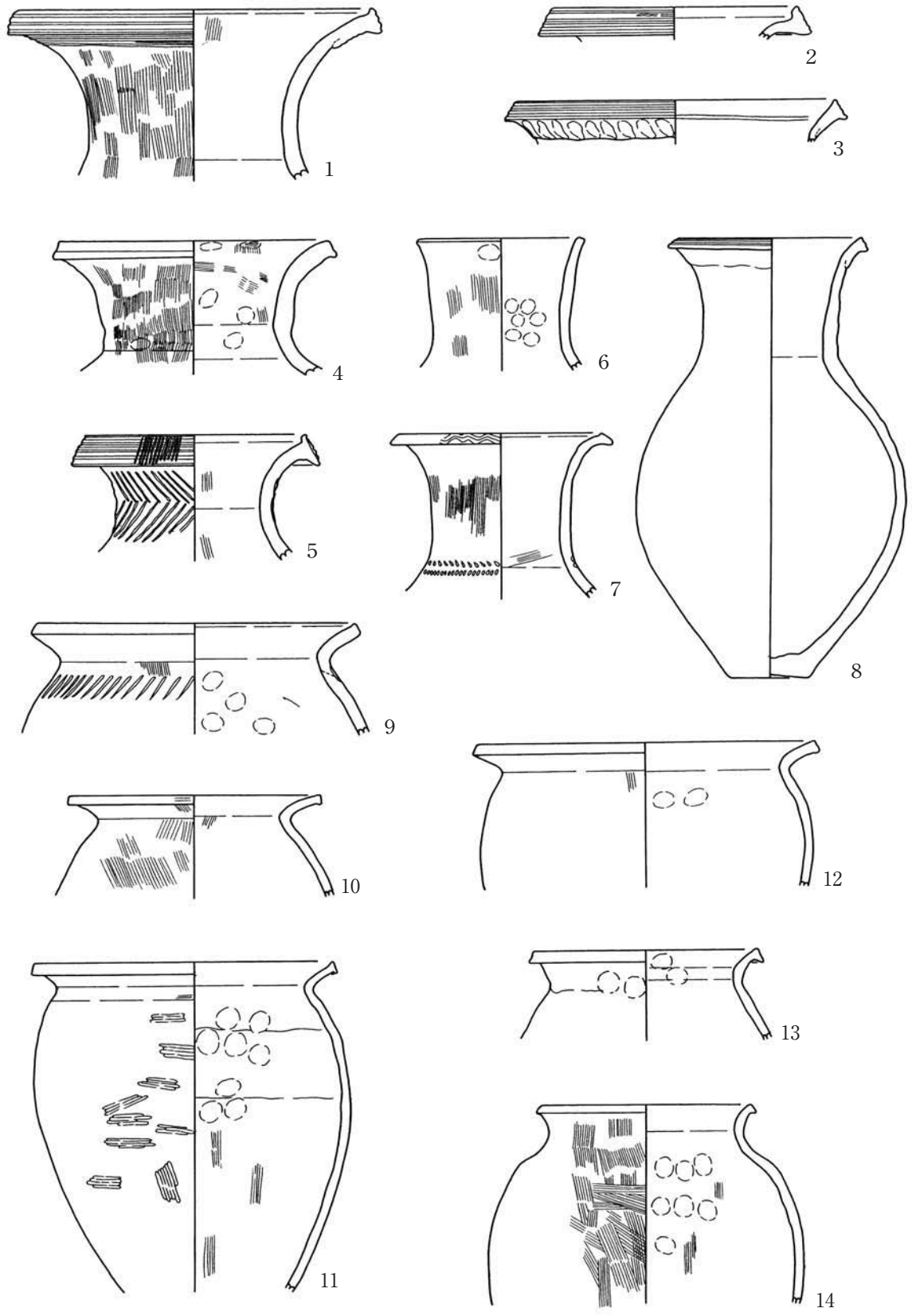
埋土：暗褐色シルト主体

ピット：数40 主柱穴数：1次5、2次8、3次8 主柱穴：1次 P18、22、24、3、38、2次 P15、19、25、26、27、34、36、39、3次 P2、4、6、8、9、10、11、16

床面：2面 貼床：あり

中央ピット：形状 楕円形 規模 1.4×1.1cm 深さ 20～30cm 埋土 黒褐色粘質シルト





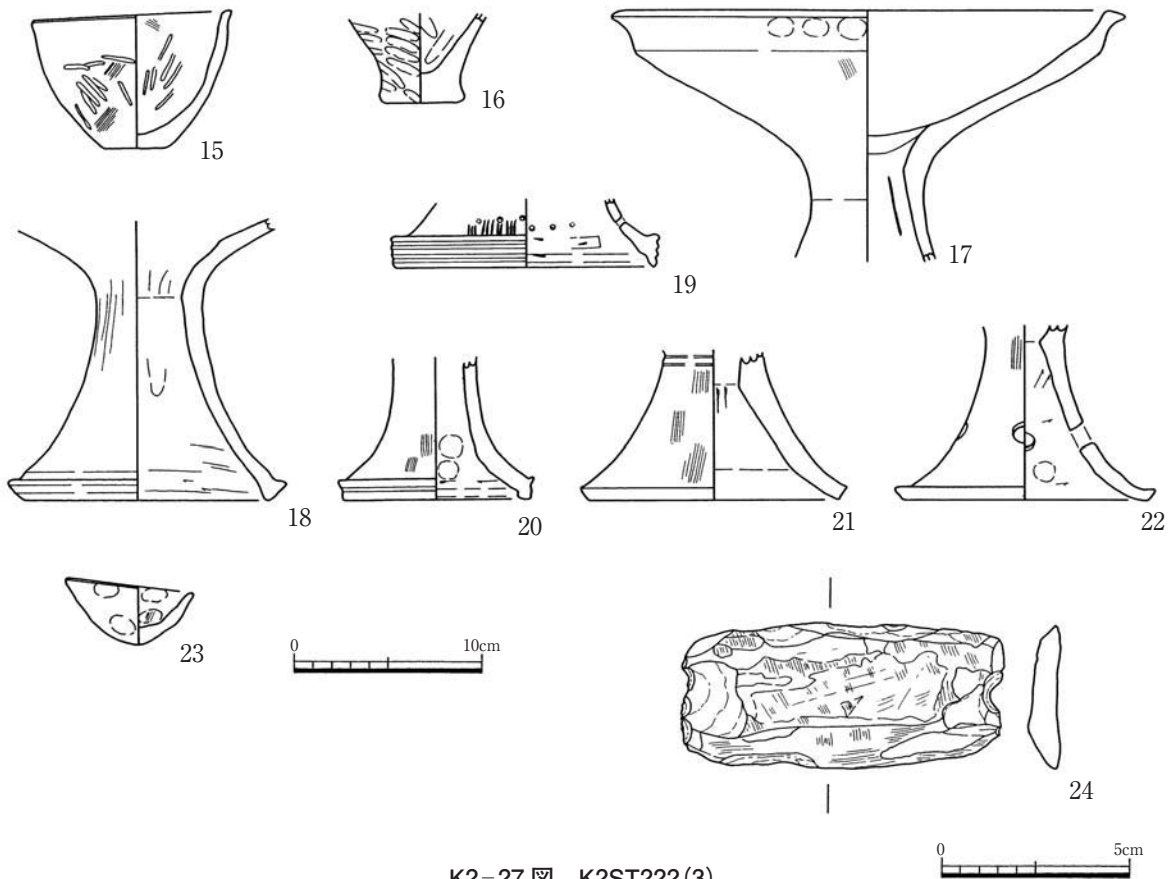
K2-26 図 K2ST222 (2)

壁溝：3条 幅10～35cm 深さ2～8cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、高杯、蓋)石包丁1、

所見：調査区中央部、ST221の東に位置する。南端部分が一部調査区外である。調査区最大規模のST220とほぼ同規模の大型住居跡である。張り床を持ち、壁溝のうち2条は張り床下面で検出したことから2度の建て替えが行われたと思われる。1次住居の規模は最も内側の壁溝から直径約7mと推測される。多角形に配された主柱穴は柱間距離1.7～2.3mを測る。中央ピットは1.4×1.1mの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。長軸方向はN-32°-Wである。2次住居は1次住居と床面を共有し若干拡張される。壁溝から推定される規模は直径約7.7mである。主柱穴は多角形に配され、柱間距離1.8～2.0mを測る。北西部分の柱穴は検出できなかった。壁溝は部分的にしか残存しておらず、3次住居の拡張時に削平されたと考えられる。中央ピットは1次住居のものを共有している。3次住居は拡張後、張り床を行い、東側が三日月状にわずかに高くなっている。主柱穴は多角形に配され、柱間距離1.7～2.0mを測る。P2・6・11では直径12～15cmの柱痕が検出された。中央ピットは1・2次住居とほぼ同じ位置に作られ、1.4×1.1mの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。長軸方向N-42°-Wである。壁際には直径50～80cm、深さ27～50cmを測るP5・7・12・14・21が並び、貯蔵穴と思われる。

出土した遺物のうち土器は23点を図示した(K2-26・27図)。1～8は壺である。1～5は広口壺、6～8は長頸壺である。4はP5からの出土である。5は混入の可能性がある。9～14は甕である。



K2-27 図 K2ST222(3)

9～12 は口縁が「く」の字に外反するタイプで器壁が非常に薄い。11 は中央ピットからの出土である。13・14 は南四国型甕のプロポーショナルを残す。15・16 は鉢である。15 は外面に叩き目を残すが、胎土に含まれる砂粒が細かく、丁寧に仕上げられる。17～22 は高杯である。高杯の出土量は他の遺構に比べて著しく多い。ほとんどのものが外反する短い口縁部を持ち、円盤充填である。23 は手づくね土器である。石器は24の石包丁のみの出土である。部分的に磨かれ、刃部として両側縁を使用している。両端の敲打による抉り部に摩耗痕がある。

K2ST223(K2-28 図)

時期；弥生V 形状；円形 主軸方向；N-40°-E

規模；4.8×(3.8)m 深さ；0.34m 面積；(18.1)m²

埋土；暗褐色シルト

ピット；数4 主柱穴数；3 主柱穴；P1～3

床面；1面

中央ピット；形状 楕円形 規模 96×68cm 深さ 18cm 埋土 暗褐色シルト

壁溝；1条 幅 5～12cm 深さ 3cm

出土遺物；弥生土器(壺、鉢)石包丁 3

所見；調査区中央部に位置する。北側の一部が調査区外であるが、前回調査時のLoc.49ST6 と同一遺構である。床面はほぼ平坦で、壁際に壁溝が巡るが、南半分で途切れる。壁溝内に小ピットが並ぶため、壁際の土止め板の抑え杭などが考えられる。主柱穴はLoc.49ST6 では検出されていないため明確ではないが、四角形の配置が考えられる。柱間距離は1.4mを測る。P2・3では直径15cmの柱痕が検出された。

出土遺物は少なく図示し得たのは10点である。1～6は壺である。1の直口壺は外面にヘラ状工具による列点文と沈線が施される。2・3は凹線文を施す広口壺である。4～6の底部片は外面に丁寧なヘラミガキが施され、内面はヘラケズリである。5はP1出土である。7は小型鉢である。叩き目を丁寧にナデ消している。8～10は石包丁である。全て刃部のみ研磨され、表裏面には自然面がほとんどであるが、部分的に擦痕が見られる。10は両端に擦り切りによる抉りが入る。11は床面出土の針状の鉄器である。

K2ST224(K2-29、30 図)

時期；弥生IV-2 形状；円形 主軸方向；N-0°

規模；4.6×4.2m 深さ；0.38m 面積；15.2m²

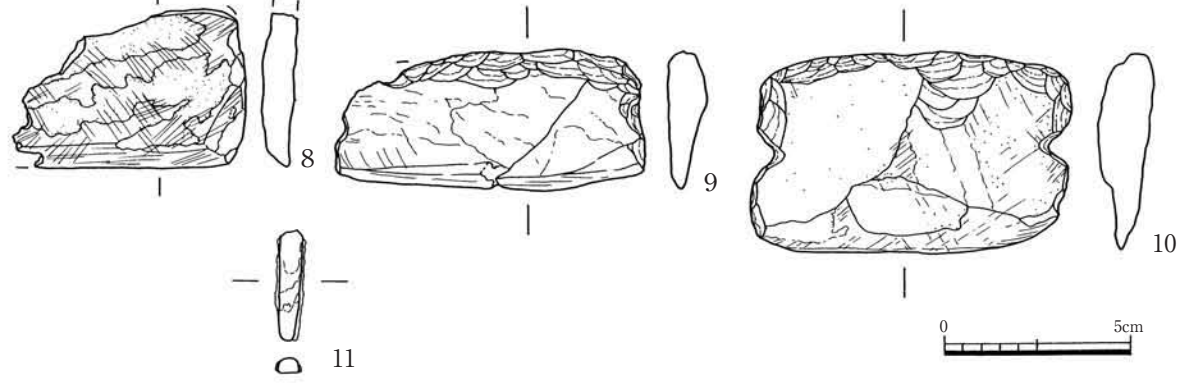
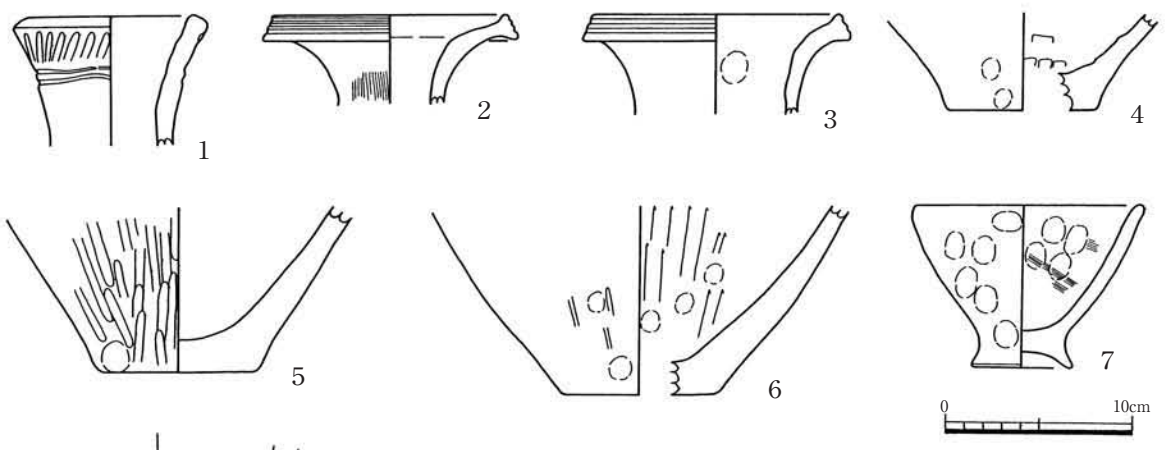
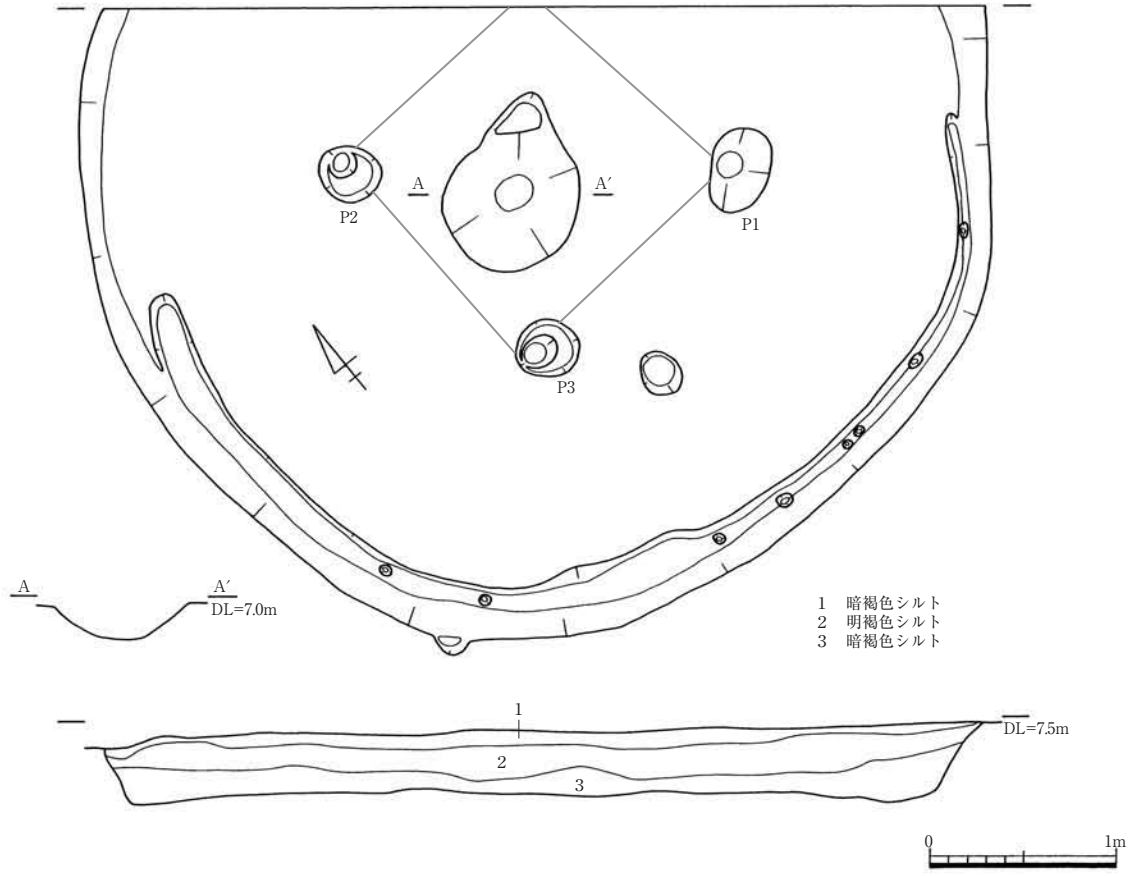
埋土；暗褐色シルト

ピット；数7 主柱穴数；4 主柱穴；P4～7

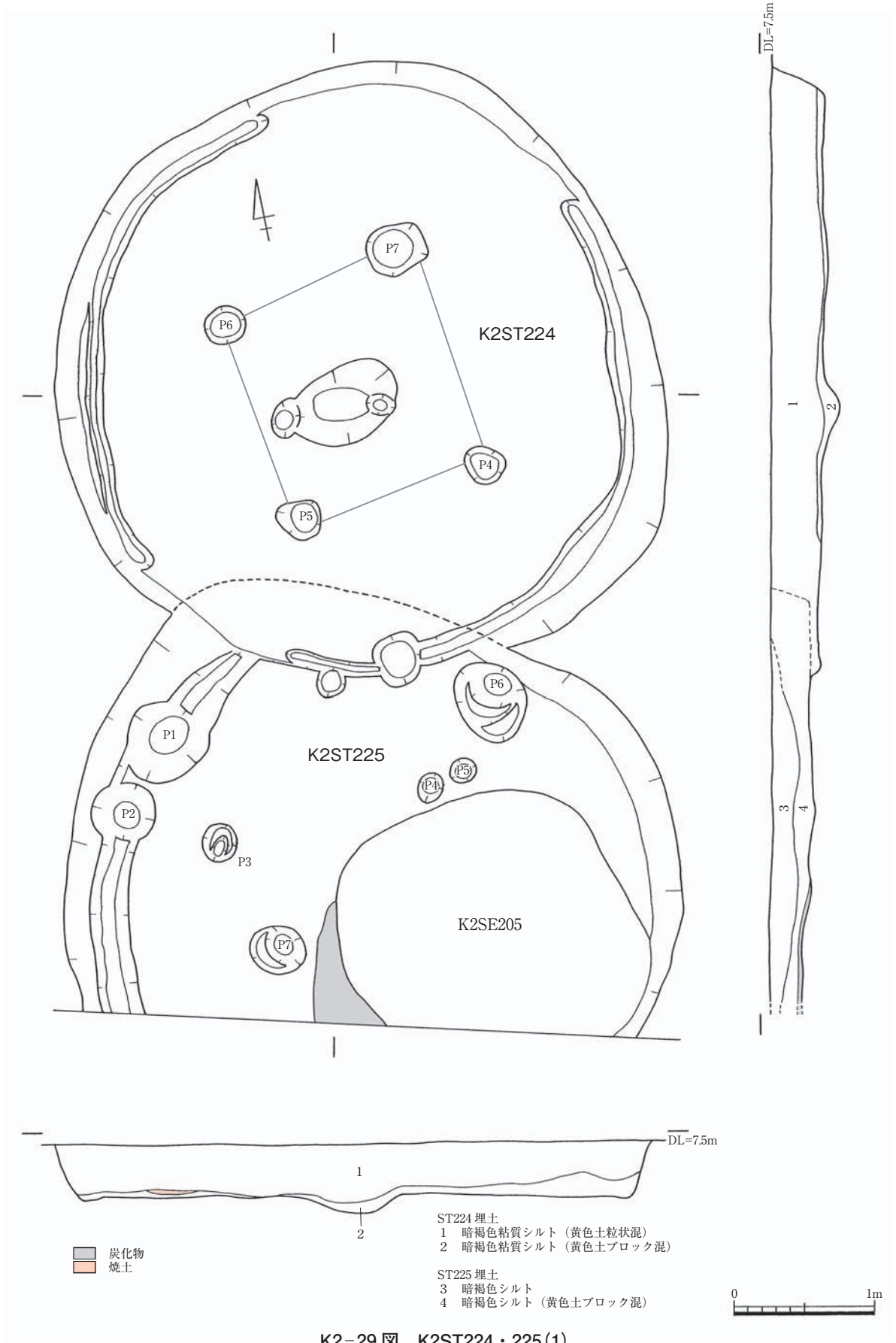
床面；1面

中央ピット；形状 楕円形 規模 84×58cm 深さ 10cm 埋土 暗褐色シルト

壁溝；1条 幅 10～20cm 深さ 2～8cm



K2-28 ☒ K2ST223

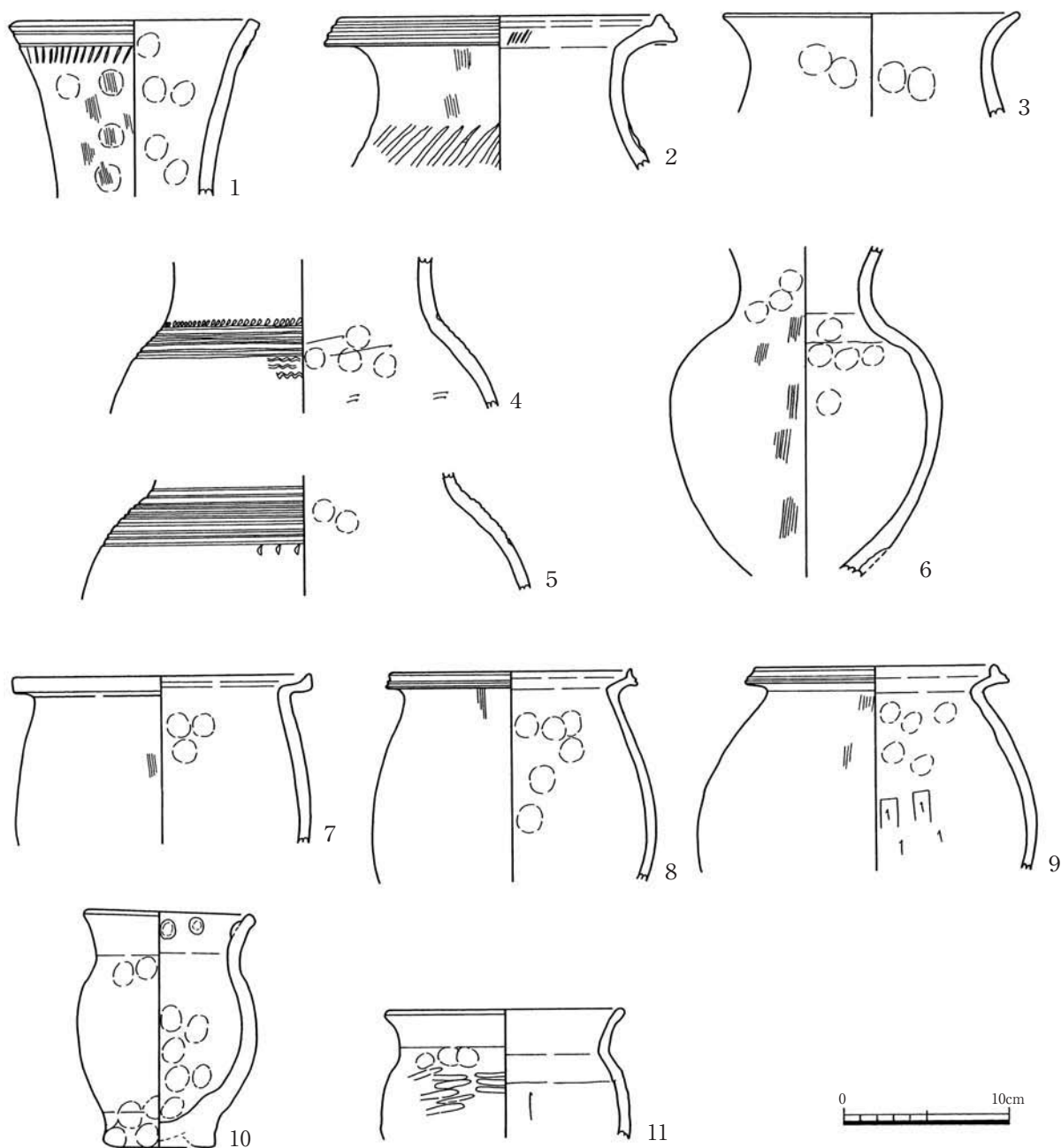


K2-29 図 K2ST224・225(1)

出土遺物；弥生土器(壺、甕、高杯)

所見：調査区東部に位置し、ST225に切られる。壁際に壁溝が巡るが、南と北では途切れる。支柱穴は四角形に配され、柱間距離は1.3～1.5mを測る。中央ピットは両脇に小ピットを伴う。

出土遺物のうち図示し得たのは9点である(K2-30 図1～5、7～10)。1～5は壺である。5は接合は出来ないがST227で同一個体片が出土している。7～9は凹線文系の甕である。10は小型の甕である。口縁内面に円形の浮文を施す。底部は本来平底で、接合部が剥離したものである。図示し得なかったが高杯は直立する口縁外面に凹線文が施される口縁部片や、拡張された裾部に凹線文が施され、5mm程の円孔をあけた脚部片がある。



K2-30 図 K2ST224・225(2) (1～5、7～10 ST224・6、11 ST225)

K2ST225(K2-29、30 図)

時期；弥生V 形状；不整形円形？ 主軸方向；N-62°-W

規模；4.4×(2.8)m 深さ；0.28m 面積；(12.3)m²

埋土；暗褐色シルト

ピット；数7 主柱穴数；2 主柱穴；P3、5

床面；1面

壁溝；1条 幅28cm 深さ7cm

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；調査区東部に位置し、ST224を切り、SE201に切られる。検出時にはST224に切られるとされていたが、出土遺物の比較からST225が切っているとした。南側が調査区外であり、SE201に東半分が壊されているため中央ピットと主柱穴の配置は不明である。西壁際に直径約60cm深さ3cmを測るP1と直径約40cm深さ33cmを測るP2が並ぶ。東側のP6と共に貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は細片が多く図示し得たのは2点である(K2-30図6・11)。6は胴部がいちじく型の小型直口壺、11は小型甕である。胴部に叩き目を残す。

K2ST226(K2-31 図)

時期；弥生IV～V 形状；方形 主軸方向；N-66°-E

規模；3.2×2.9m 深さ；0.34m 面積；9.3m²

埋土；暗褐色シルト

ピット；数3

床面；1面

出土遺物；弥生土器片

所見；調査区東部に位置し、SK296に切られSK271を切る。床面は平坦でピット3個を検出したのみである。床面東側に炭化物が広がるが、床面は被熱していない。ST207・209・211・212が同様の構造を持つ。

出土遺物は細片が多く、図示し得るものはなかった。

K2ST227(K2-31 図)

時期；弥生IV-2 形状；方形 主軸方向；N-48°-W

規模；3.3×3.0m 深さ；0.34m 面積；9.9m²

埋土；暗褐色粘質シルト

ピット；数5 主柱穴数；3 主柱穴；P2、3、6

床面；1面

中央ピット；形状 楕円形 規模 43×39cm 深さ 14cm 埋土 暗褐色粘質シルト

出土遺物；弥生土器(壺、高杯)

所見；調査区東部、ST226の南に位置する。東と西の壁はほぼ垂直に立つが、南と北の壁は傾斜が

緩やかである。中央ピットは底に炭化物層があり、床面南側にまで広がるが、被熱はしていない。主柱穴は四角形の配置と考えられるが、南隅部は検出できなかった。

出土遺物は細片が多く図示し得たのは4点である。1・2は凹線文の施される広口壺、3は壺または甕の底部である。4の高杯も口縁外面に凹線文が施される。また、ST224から出土した壺の肩部片(K2-30 図5)と同一個体が出土しているため、両遺構は併存していた可能性がある。

(2) 掘立柱建物跡

K2区では掘立柱建物は8棟検出し、全て弥生時代のものである。主に調査区中央部付近で検出され、すべてが東西棟である。棟方向はF区からK区に流れる大溝の方向に沿う。溝状土坑を伴うものは3棟あり、溝状土坑にはいずれも多量の遺物が投げ込まれる。また、1間×1間の大型掘立柱建物と思われる大きな柱穴を持つものが2棟あり、柱穴から遺物がほとんど出土していないため時期は確定し難いが、埋土の特徴からL区で検出されている大型掘立柱建物と同時期に機能していた一連のものと思われる。

K2-2表 K2区弥生掘立柱建物跡一覧

遺構名	梁間×桁行 (間)	梁間×桁行 (m)	柱間寸法 梁間×桁行 (m)	主軸方向	付属遺構	時期	備考
K2SB201	1×4	3.3×4.8	3.3×1.12~1.36	N-87°-E		弥生	
K2SB202	1×1	2.5×2.8	2.47~2.56×2.78~2.83	N-73°-E		弥生	大型
K2SB203	1×3	2.8×5.4	2.81~2.86×1.56~1.90	N-80°-W	溝状土坑 (K2SD205)	弥生 V-1~2	
K2SB204	1×3	2.8×6.7	2.85×1.3~2.08	N-84°-E	溝状土坑 (K2SK275)	弥生IV	K2ST216を切る
K2SB205	1×2	1.8×2.2	1.7~1.8×1.1~1.2	N-87°-E		弥生	
K2SB206	1×2	2.7×3.3	2.63~2.72×1.57~1.68	N-83°-E		弥生	
K2SB207	1×1	3.2×7.0	3.16~3.2×1.66~1.7	N-61°-E	溝状土坑 (K2SD208B)	弥生IV	
K2SB208	1×3以上	2.9×4.6以上	2.9×1.15~1.60	N-82°-E		弥生	一部調査区外

K2SB201 (K2-32 図)

時期：弥生 棟方向：N-87°-E

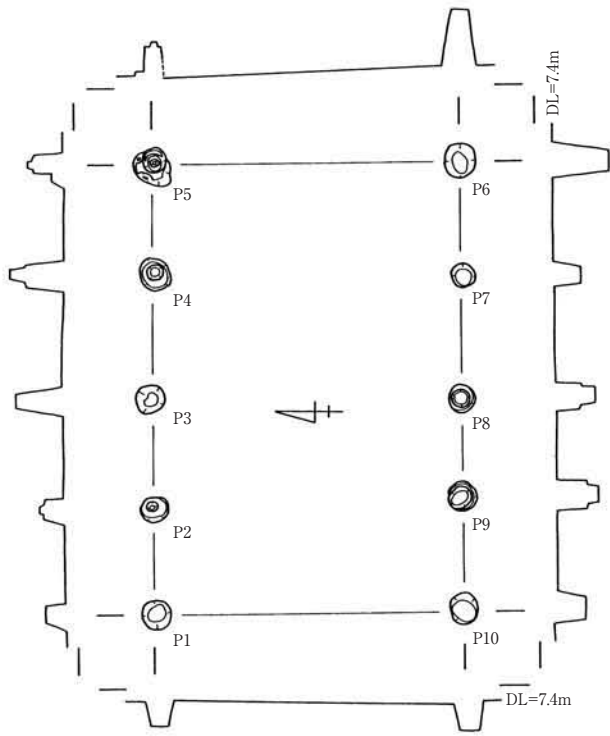
規模：1間×4間 梁間 3.3m×桁行 4.8m 面積：15.7㎡

柱間寸法：梁間 3.3m 桁行 1.12 ~ 1.36m

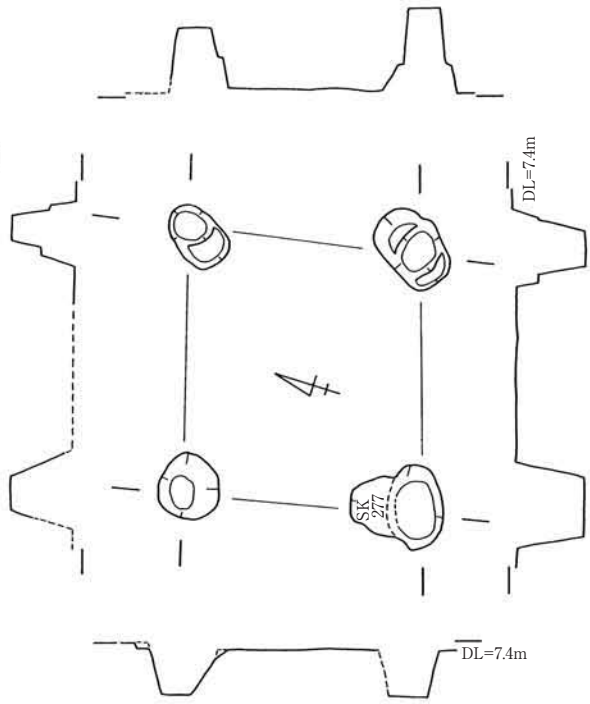
柱穴数：10 柱穴形：円形

出土遺物：弥生土器

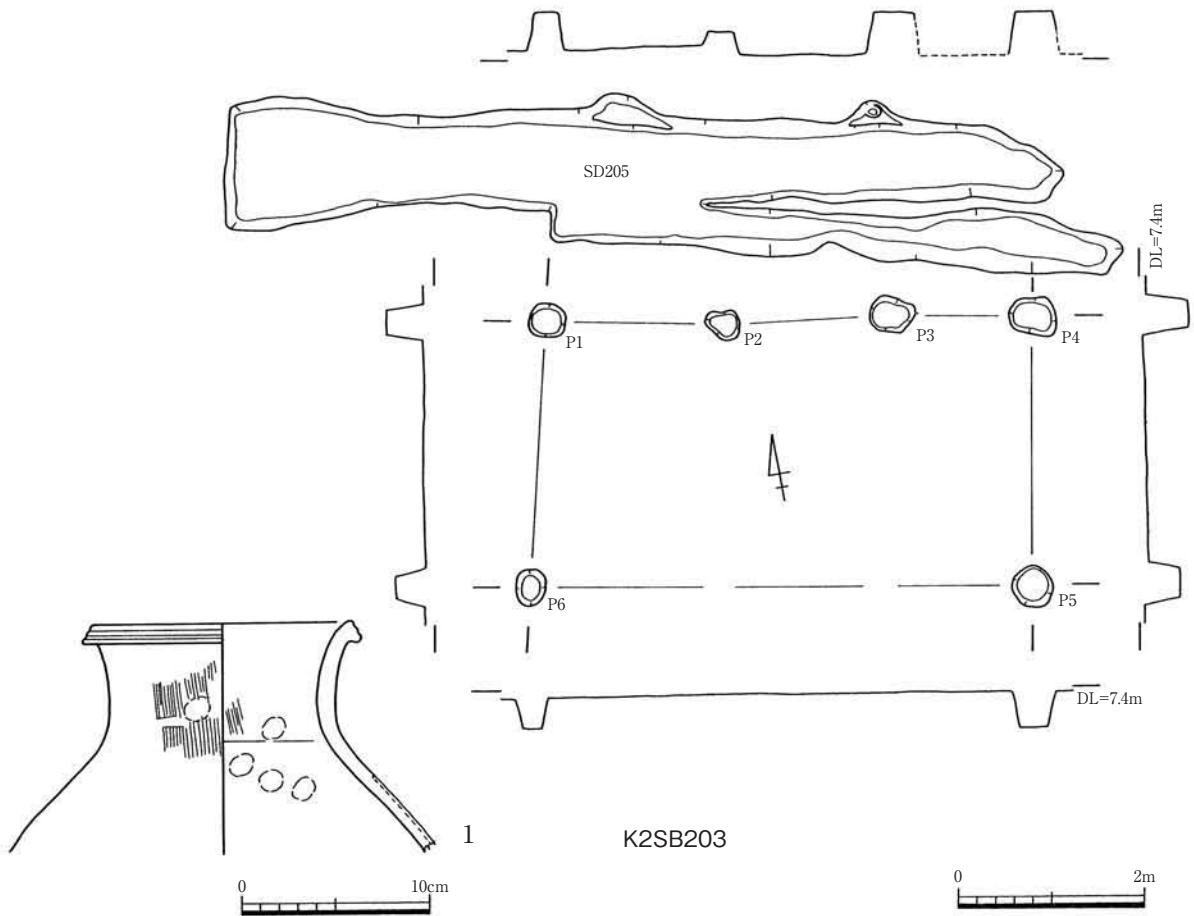
所見：調査区中央部北よりに位置する。柱穴は円形または楕円形を呈し、直径28~36cmを測る。P2・4・5・8・9は柱痕が検出され、推定される柱の直径は16~18cmである。埋土は全て暗褐色シルトである。出土遺物は細片ばかりで詳細な時期は確定しがたい。



K2SB201



K2SB202



K2SB203

K2-32 ☒ K2SB201 · 202 · 203

K2SB202 (K2-32 図)

時期；弥生 棟方向；N-73°-E

規模；1 間×1 間 梁間 2.5m×桁行 2.8m 面積；7.0㎡

柱間寸法；梁間 2.47～2.56m 桁行 2.78～2.83m

柱穴数；4 柱穴形；楕円形

出土遺物；なし

所見；調査区中央部に位置し、SB208Bに切られる。本調査区内で最大の柱穴を持ち、長径 70～93cm、短径 45～65cm、深さ 63～77cmを測る。P2・3からは柱痕を検出し、推定される柱の直径は約 45cmである。各ピットの埋土は暗褐色シルト主体で黄褐色と黒褐色のブロックが混じる。各ピットから遺物が出土しなかったため詳細な時期は確定しがたいが、埋土や柱穴の規模からL区で検出されている大型掘立柱建物と同じ時期と考えられる。

K2SB203 (K2-32 図)

時期；弥生V-1～2 棟方向；N-80°-W

規模；1 間×3 間 梁間 2.8m×桁行 5.4m 面積；15.1㎡

柱間寸法；梁間 2.81～2.86m 桁行 1.56～1.90m

柱穴数；6 柱穴形；楕円形

付属施設；溝状土坑

出土遺物；弥生土器(壺 1)

所見；調査区東部北寄りに位置し、北側に 0.3～1.0mの間隔を持って溝状土坑(SD205)を伴う。長軸方向には若干のずれを見せる。柱穴はP5を除き楕円形を呈し長径 36～50cm、短径 27～37cm 深さ 25～47cmを測る。P5は直径44cm深さ37cmを測る。いずれも柱痕は検出できなかった。また、南桁のピット 2 個は未検出である。埋土は全て暗褐色シルトである。出土遺物は細片が多く図示し得たのはP1から出土した凹線文を施す壺 1 点である (K2-32 図 1)。

K2SB204 (K2-33 図)

時期；弥生IV 棟方向；N-84°-E

規模；1 間×3 間 梁間 2.8m×桁行 6.7m 面積；18.7㎡

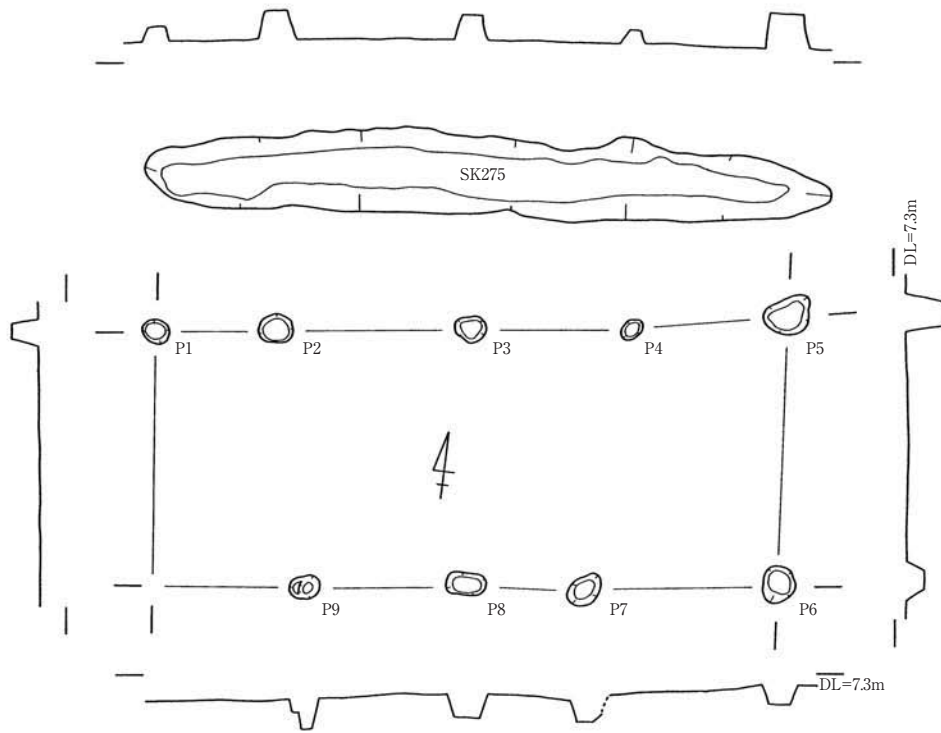
柱間寸法；梁間 2.85m 桁行 1.3～2.08m

柱穴数；9 柱穴形；円形

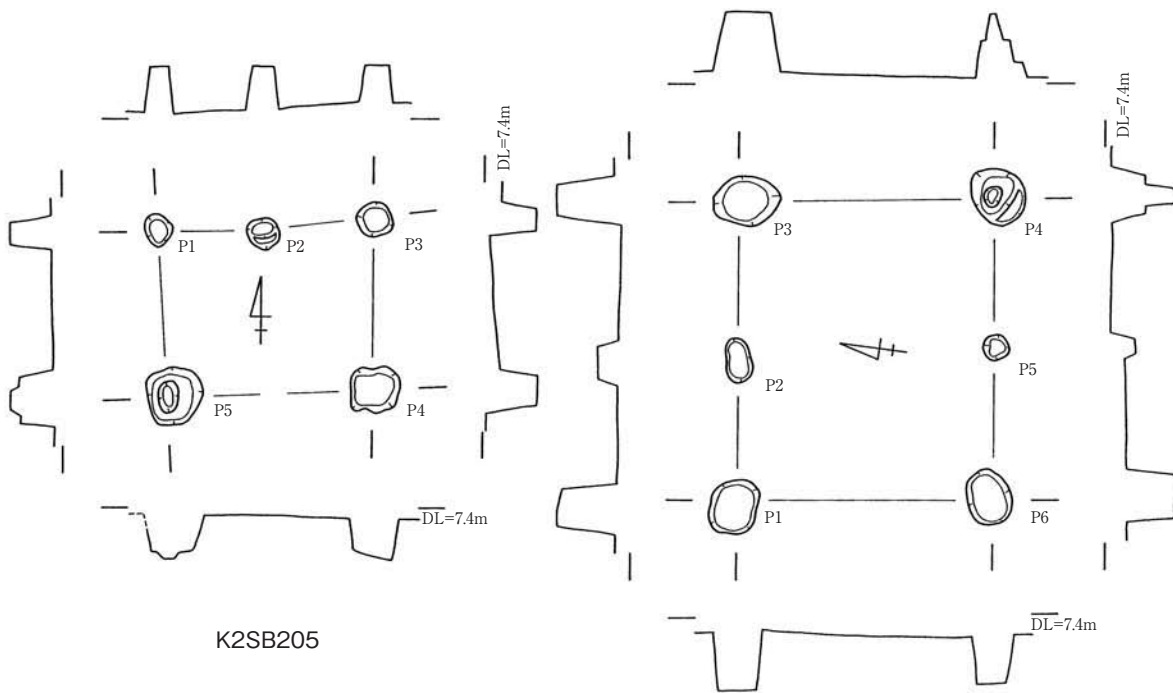
付属施設；溝状土坑

出土遺物；なし

所見；調査区中央部南寄りに位置する。北側に 1.1～1.6mの間隔を持って溝状土坑(SK275)を伴う。長軸はほぼ並行する。ST216・217と切り合い関係にあり、ST216をSK275が切る。ST217とは不明である。柱穴は円形または楕円形を呈し、直径 25～40cm、深さ 16～39cmを測る。埋土は全て暗褐色シルトある。南西隅のピットは現代の攪乱により壊され、未検出である。

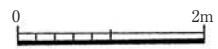


K2SB204



K2SB205

K2SB206



K2-33 ☒ K2SB204 · 205 · 206

K2SB205 (K2-33 図)

時期；弥生 棟方向；N-87°-E

規模；1 間×2 間 梁間 1.8m×桁行 2.2m 面積；3.96㎡

柱間寸法；梁間 1.7～1.8m 桁行 1.1～1.2m

柱穴数；5 柱穴形；円形

出土遺物；なし

所見；調査区中央部南寄りに位置する。SD207 を切る。柱穴は直径 28～56cm、深さ 40～43cm を測る。P4 の底で検出された柱痕から、柱の直径は約 22cm と推測される。ピット内からの遺物が出土しなかったため、詳細な時期は確定しがたいが、埋土から弥生時代の遺構とした。

K2SB206 (K2-33 図)

時期；弥生 棟方向；N-83°-E

規模；1 間×2 間 梁間 2.7m×桁行 3.3m 面積；8.9㎡

柱間寸法；梁間 2.63～2.72m 桁行 1.57～1.68m

柱穴数；6 柱穴形；楕円形

出土遺物；弥生土器片 3

所見；調査区中央部に位置し、ST218 に切られる。柱穴は長径 28～71cm、短径 25～55cm、深さ 25～67cm を測る。P6 は ST218 床面の検出である。また、P2 は小ピット 2 個の切り合いの可能性はある。P4 の底から直径 20cm 程の柱痕が検出された。四隅の柱穴の規模が大きいことから、もう少し大きな柱の使用も考えられる。埋土は全て暗褐色シルトで、遺物は P4 から弥生土器細片が 3 点出土したのみであり、詳細な時期は確定しがたい。

K2SB207 (K2-34 図)

時期；弥生IV 棟方向；N-61°-E

規模；1 間×1 間 梁間 3.2m×桁行 7.0m 面積；22.4㎡

柱間寸法；梁間 3.16～3.2m 桁行 1.66～1.7m

柱穴数；7 柱穴形；楕円形

付属施設；溝状土坑

出土遺物；弥生土器

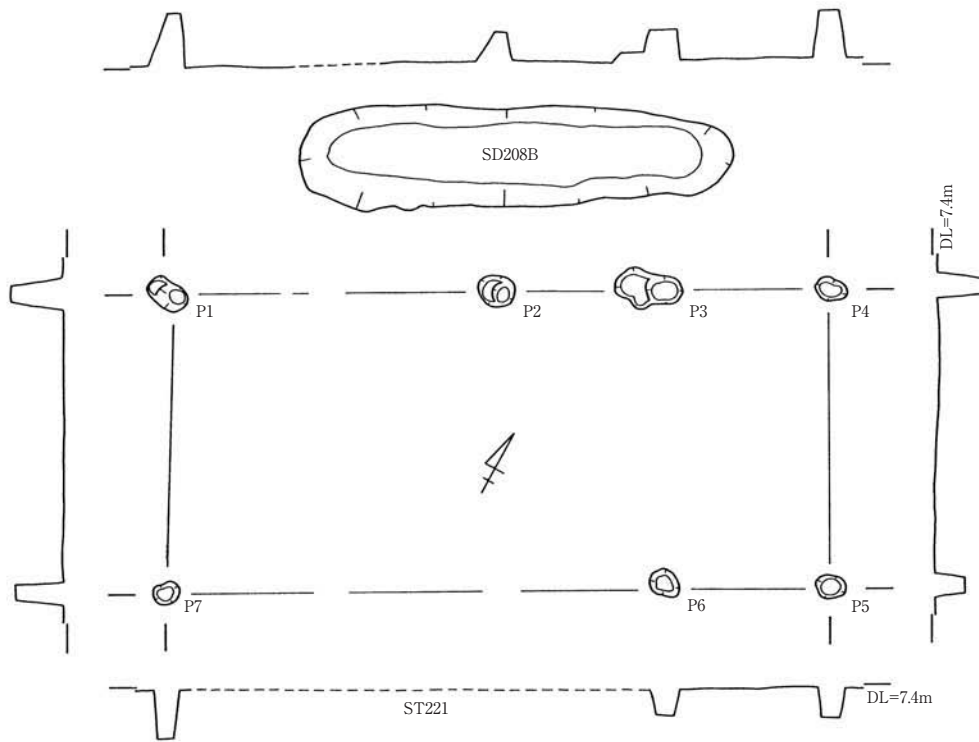
所見；調査区中央部に位置する。位置的にSD208AとST221 と切り合い関係にあるが不明である。北側に 0.8～1.1m の間隔を持って溝状土坑 (SD208B) を伴う。長軸はほぼ並行する。柱穴は円形の P2 が直径 36cm、深さ 30cm を測り、楕円形のもの長径 27～44cm、短径 22～27cm、深さ 32～68cm を測る。北側桁行の P1・2 の間と南側桁行の P6・7 の間の柱穴は未検出である。P1・3 から弥生土器細片が出土しているが詳細な時期は確定しがたいため、付属する SD208B の時期に準じた。

K2SB208(K2-34 図)

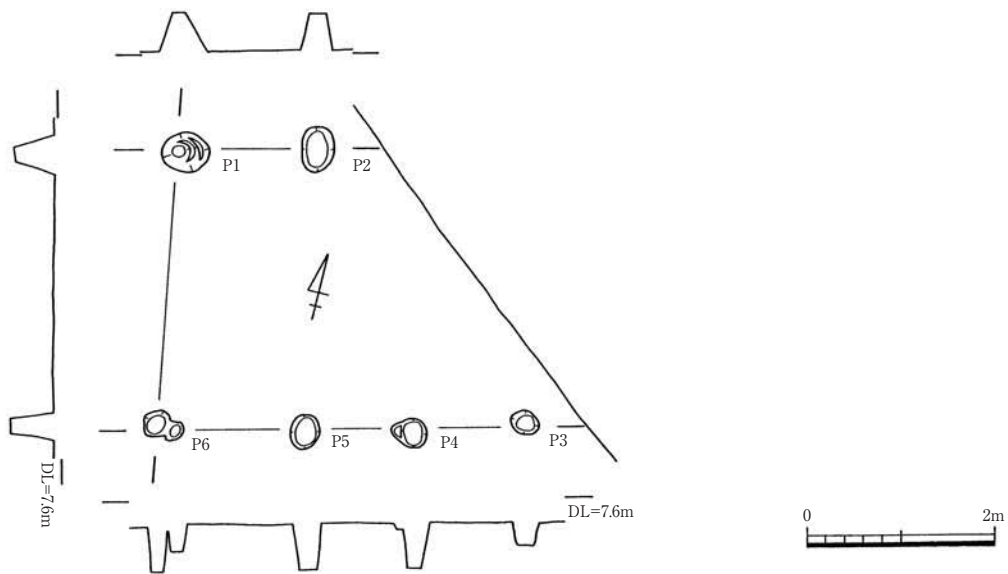
時期：弥生 棟方向：N-82°-E

規模：1間×3間以上 梁間 2.9m×桁行 4.6m以上 面積：13.3㎡以上

柱間寸法：梁間 2.9m 桁行 1.15～1.6m



K2SB207



K2SB208

K2-34 図 K2SB207・208

柱穴数：6 柱穴形：円形または楕円形

出土遺物：弥生土器

所見：調査区東部に位置する。東側が調査区外のため全体の規模は不明である。柱穴は円形のP3・6が直径24～27cm、深さ23～48cmを測る。楕円形のもの長径37～48cm、短径30～40cm、深さ28～48cmを測る。埋土は全て暗褐色シルトである。P6から弥生土器片が2点出土したが詳細な時期は確定しがたい。

(3) 土坑

K2区では土坑は99基検出し、弥生時代のものは63基である。そのうち出土遺物が多く、ある程度時期を確定できるものについて図に示した。土坑は調査区全体にまんべんなく検出し、切り合い関係は少ない。平面形プランは方形、楕円形、溝状、不定形を呈するものがある。残存状態は深さ30cm以上の残りの良いものから、後世の削平によって数cmしか残らないものもある。III～V様式まで各時期のものがあり、長軸方向は各時期によって方向性が見られる。同時期の住居や掘立柱建物に隣接し、伴っていたものと考えられるものもあり、各時期の集落内の遺構の分布がうかがえる。遺物の出土状態は底から浮いたものが多く廃棄土坑と思われるものが多い。溝状土坑には多量に遺物が投げ込まれているものが多い。長軸方向は東西方向のものと南北方向のものに2分でき、4mを超える大型のものは東西方向のみである。特徴的なものとして、前期の方形住居跡の可能性のあるSK281、土坑墓の可能性のあるSK272、臍穴のある炭化材と多量の焼土が埋まり、西端に多量の遺物が投げ込まれるSD205などがあげられる。

なお、溝状土坑は後にまとめて記述した。また、溝状土坑であるが調査時の遺構名がSDのもの(SD204～208)も溝状土坑の後で記述している。

K2-3表 K2区弥生土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
			長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					
K2SK201	長方形	逆台形	2.54	1.02	42	N-90°	暗褐色シルト		弥生IV	
K2SK212	方形	逆台形	1.50	1.20	20	N-61°-W	灰褐色シルト 暗褐色シルト		弥生IV	
K2SK216	溝状	U字形	[3.6]	0.5～0.8	24	N-81°-W	暗褐色シルト	K2SK211	弥生V-1～2	切り合い不明確
K2SK217	方形	逆台形	1.50	1.20	35	N-90°	暗褐色シルト 黒褐色シルト		弥生V-1～2	
K2SK218	溝状	U字形	4.38	0.6	28～42	N-0°	黒褐色シルト		弥生V-1～2	K2SK216とL字に並ぶ
K2SK225	方形	逆台形	1.70	1.25	44	N-10°-E	暗褐色シルト		弥生IV～V	床面に焼土と炭化物
K2SK227	溝状	逆台形	3.28	0.58	10	N-79°-W	灰褐色シルト		弥生V	
K2SK231	溝状	逆台形	4.24	0.68	22	N-80°-W	暗褐色シルト	K2ST216を切る	弥生IV	
K2SK236	方形	逆台形	1.56	1.10	36	N-90°	暗褐色シルト 褐色シルト		弥生III?	
K2SK239	方形	逆台形	0.82	0.58	16	N-69°-W	暗褐色シルト		弥生IV	K2SB201に隣接
K2SK240	溝状	U字形	3.04	0.24～0.42	28	N-7°-W	暗灰褐色シルト		弥生V-1～2	

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)					
K2SK255	溝状	U字形	2.78	0.68	36	N-24°-E	暗褐色シルト		弥生 V-1~2	
K2SK257	楕円形	U字形	1.90	1.50	52	N-90°	暗褐色シルト 黒褐色シルト		弥生III	
K2SK263	溝状	逆台形	[2.18]	0.58	21	N-62°-W	暗褐色シルト		弥生	一部調査区外
K2SK268	不整形	皿状	2.10	1.40	20	N-14°-E	暗褐色シルト	K2ST218に 切られる	弥生IV	
K2SK269	方形	逆台形	1.64	1.22	26~46	N-65°-E	暗褐色シルト		弥生IV	底は二段になる
K2SK271	方形	逆台形	1.65	0.85	24	N-66°-W	暗褐色シルト	K2ST226に 切られる	弥生IV	
K2SK272	楕円形	U字形	0.54	0.29	22	N-90°	黄灰褐色シルト	K2ST202を 切る	弥生 IV~V	壺棺墓
K2SK273	溝状	U字形	[1.8]	0.43	24	N-0°	暗褐色シルト	K2SK296に 切られる	弥生	遺物ほとんどなし
K2SK275	溝状	U字形	7.27	0.80	56	N-86°-E	暗褐色シルト		弥生IV	K2SB204に伴う
K2SK281	方形	逆台形	4.3	1.98	50	N-11°-W	灰褐色粘質シルト	K2ST221に 切られる	弥生III	K2ST211床面で検出
K2SK288	溝状	逆台形	[3.64]	0.72	20	N-26°-E	暗褐色粘質シルト	K2ST205を 切る	弥生IV	
K2SK289	方形	逆台形	2.66	1.82	40	N-64°-W	暗褐色粘質シルト	K2ST205を 切る	弥生 IV?	
K2SK290	楕円形	U字形	1.10	0.76	54	N-4°-E	暗褐色粘質シルト	K2SK289を 切る	弥生IV	K2SK288出土遺物 と接合するものが多い
K2SK293	溝状	逆台形	7.32	0.9	42	N-84°-E	暗褐色シルト		弥生IV	
K2SK295	方形	逆台形	1.90	1.46	36	N-49°-E	暗褐色シルト		弥生IV	K2ST224に隣接する
K2SK297	溝状	U字形	5.12	0.7	20	N-73°-E	暗褐色粘質シルト	K2ST202を 切る	弥生IV ~V	
K2SD204	溝状	逆台形	2.64	0.57	40	N-90°	暗褐色シルト		弥生IV ~V	
K2SD205	溝状	逆台形	8.80	0.44~ 0.90	60	N-80°-W	暗褐色シルト 黒褐色シルト		弥生 V-1~2	炭化物、焼土多い K2SB203に伴う
K2SD206	溝状	U字形	[6.2]	0.8	56	N-90°	暗褐色シルト		弥生IV	
K2SD208A	溝状	U字形	4.34	0.66	58	N-84°-W	暗褐色シルト		IV~V	
K2SD208B	溝状	U字形	4.60	1.1	60	N-63°-E	暗褐色シルト		IV	K2SB207に伴う

K2SK201 (K2-35 図)

時期：弥生IV 形状：長方形 主軸方向：N-90°

規模：2.54×1.02m 深さ：0.42m 断面形態：逆台形

埋土：暗褐色シルト

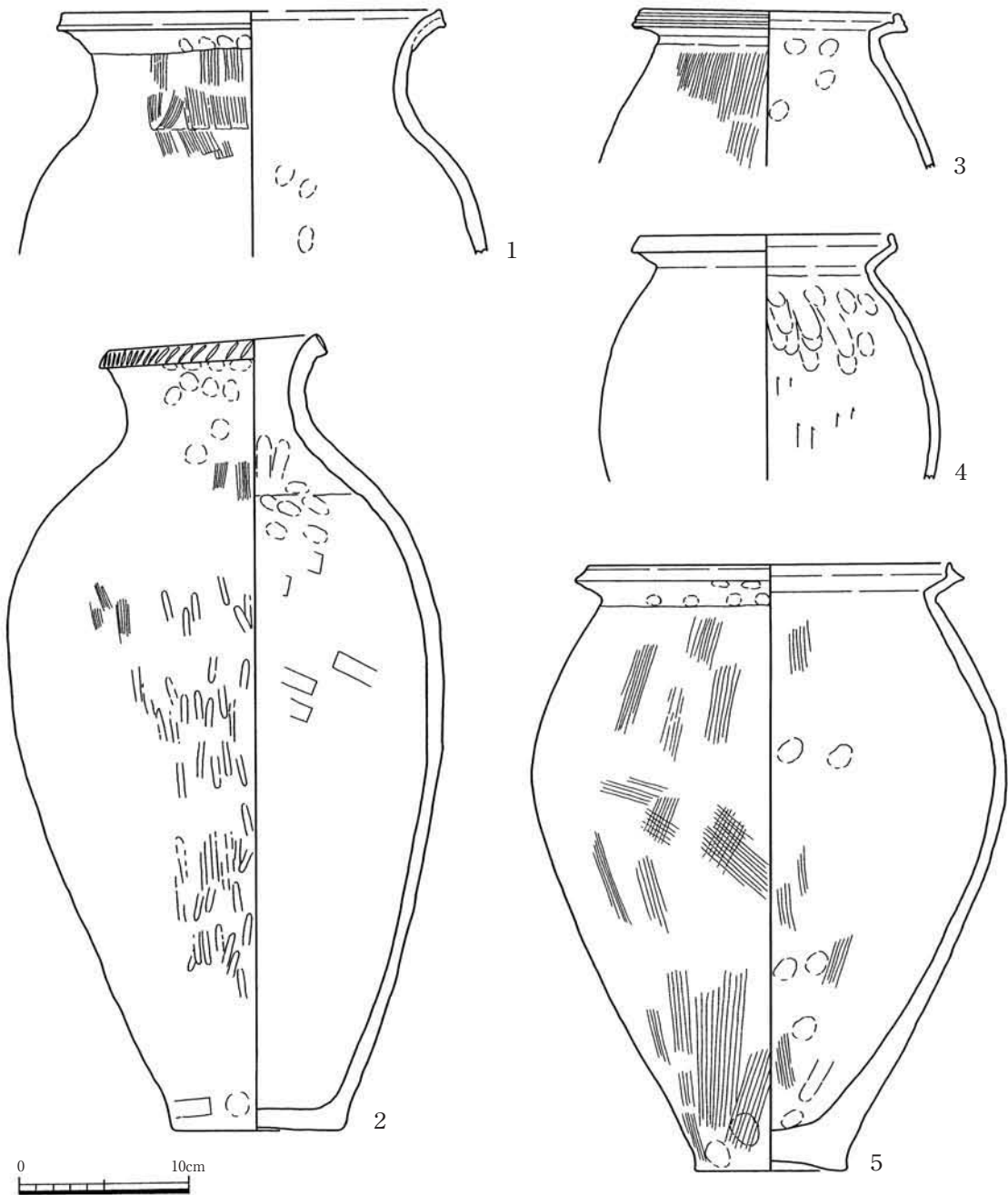
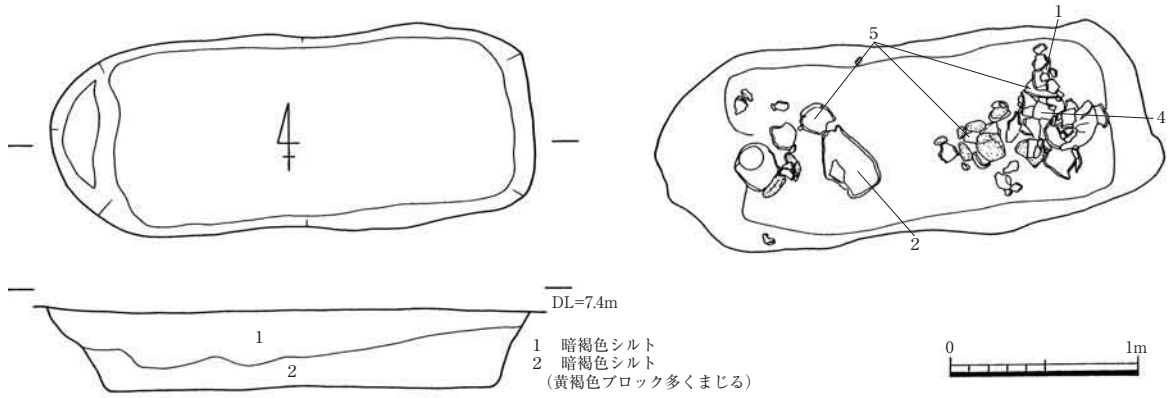
機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、高杯)

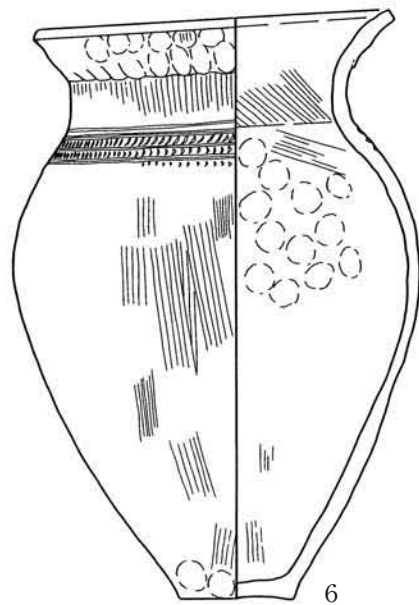
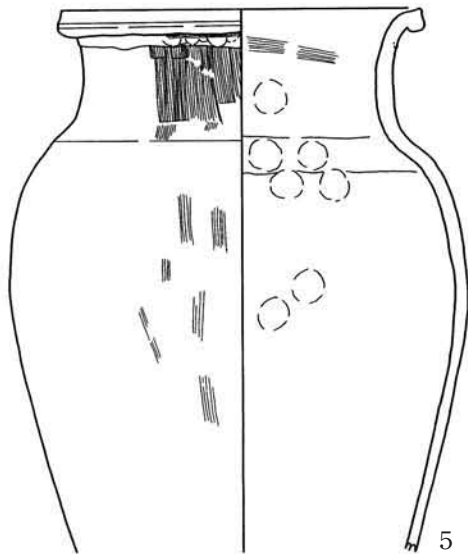
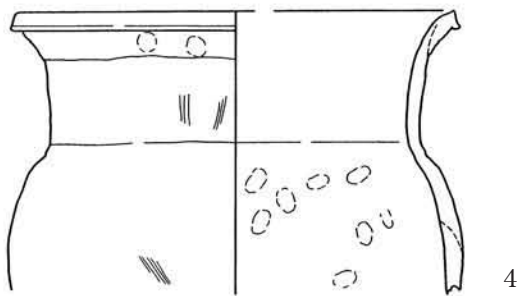
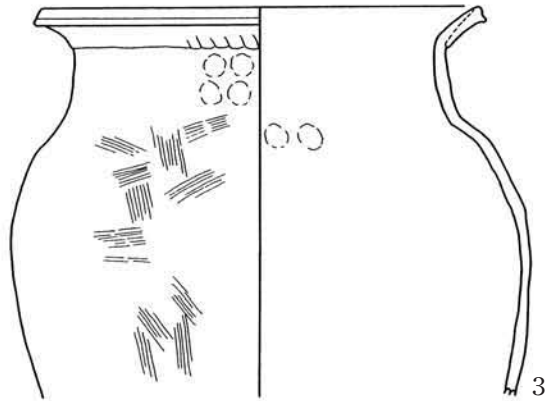
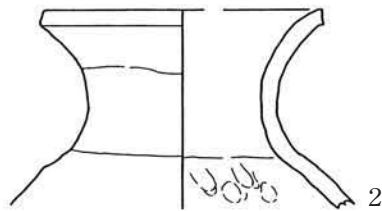
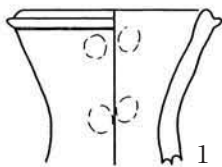
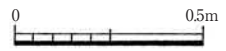
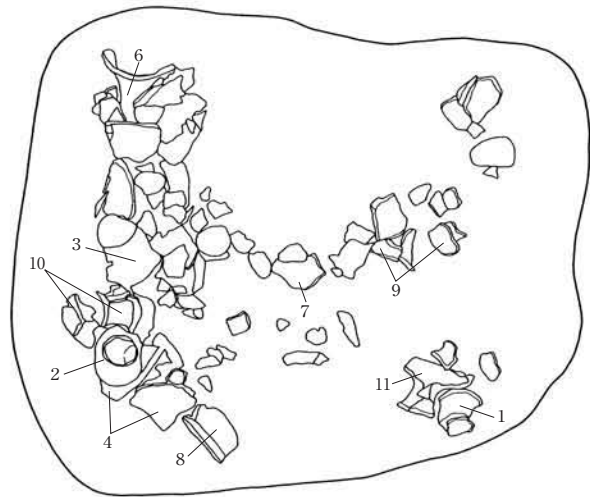
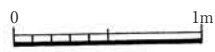
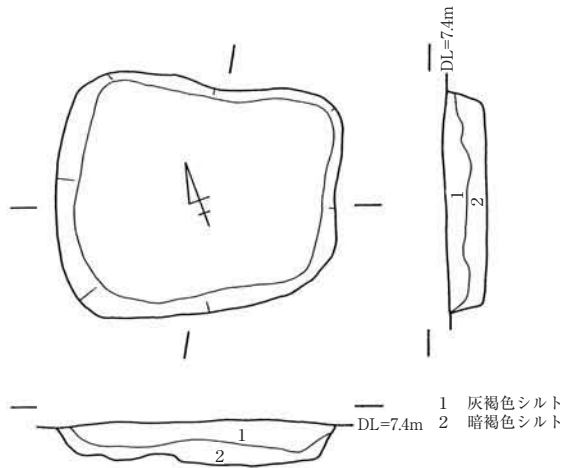
所見：調査区西部南寄りに位置する。埋土はI~II層で、遺物はII層上面の東西両端に集中して出土しており、5点を図示した。1・2は壺である。2は肥厚させた口縁端部にヘラ状工具による斜行沈線を施す。3~5は凹線文系の甕である。

K2SK212 (K2-36、37 図)

時期：弥生IV 形状：方形 主軸方向：N-61°-W



K2-35 図 K2SK201



K2-36 ☒ K2SK212(1)

規模；1.5×1.2m 深さ；0.2m 断面形態；逆台形

埋土；暗褐色シルト

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、高杯)

所見；調査区西部南寄りに位置する。埋土はI～II層である。遺物のほとんどは西壁側に集中し、底から浮いた状態での出土である。出土遺物のうち完形近く復元できたものが7個体分あるが、ほとんどが底部を欠く。1・2は壺、3～9は甕である。3～6は南四国型甕の特徴を持つ。6は肩部の沈線間に刺突を施す。10・11は高杯である。どちらも底部円盤充填で脚部が短い。

K2SK217(K2-38 図)

時期；弥生V-1～2 形状；方形 主軸方向；N-90°

規模；1.5×1.2m 深さ；0.35m 断面形；逆台形

埋土；暗褐色シルト主体

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺1、甕1)

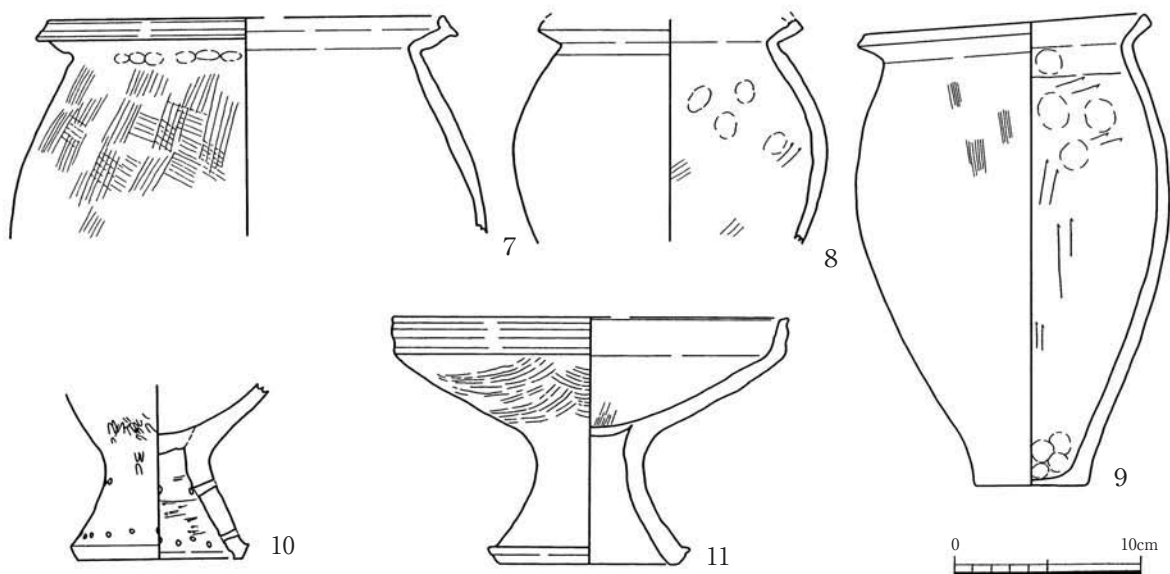
所見；調査区西部、SK216の北、SK218の東側に位置する。埋土はI～IV層でレンズ状に堆積する。出土遺物は床面から浮いており、北側で出土した。扁平な河原石が1個と図示した2個体分のみの出土である。どちらも半個体しかない。1は壺、2は甕である。

K2SK225(K2-39 図)

時期；弥生IV～V 形状；方形 主軸方向；N-10°-E

規模；1.7×1.25m 深さ；0.44m 断面形態；逆台形

埋土；暗褐色シルト



K2-37 図 K2SK212(2)

機能：—

出土遺物：弥生土器(甕 3、壺 1)石錘

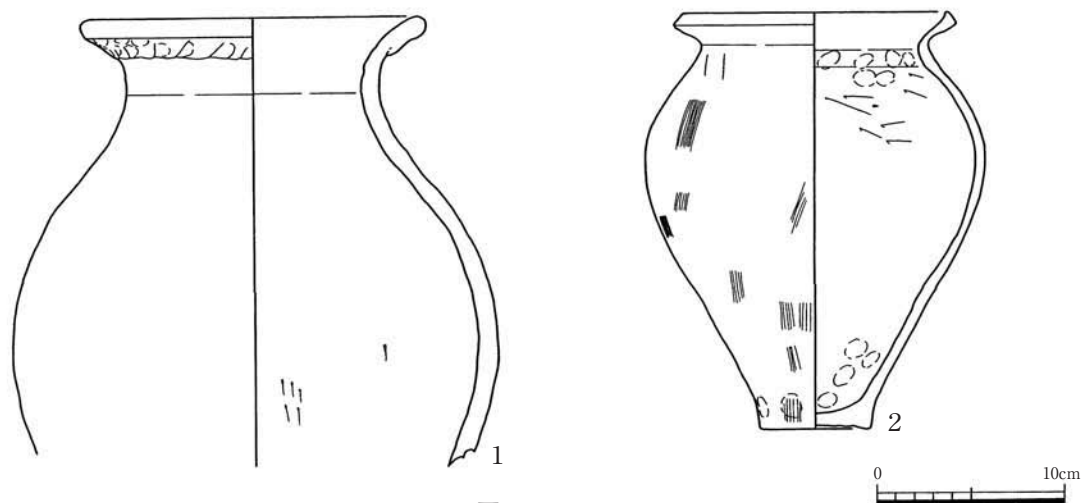
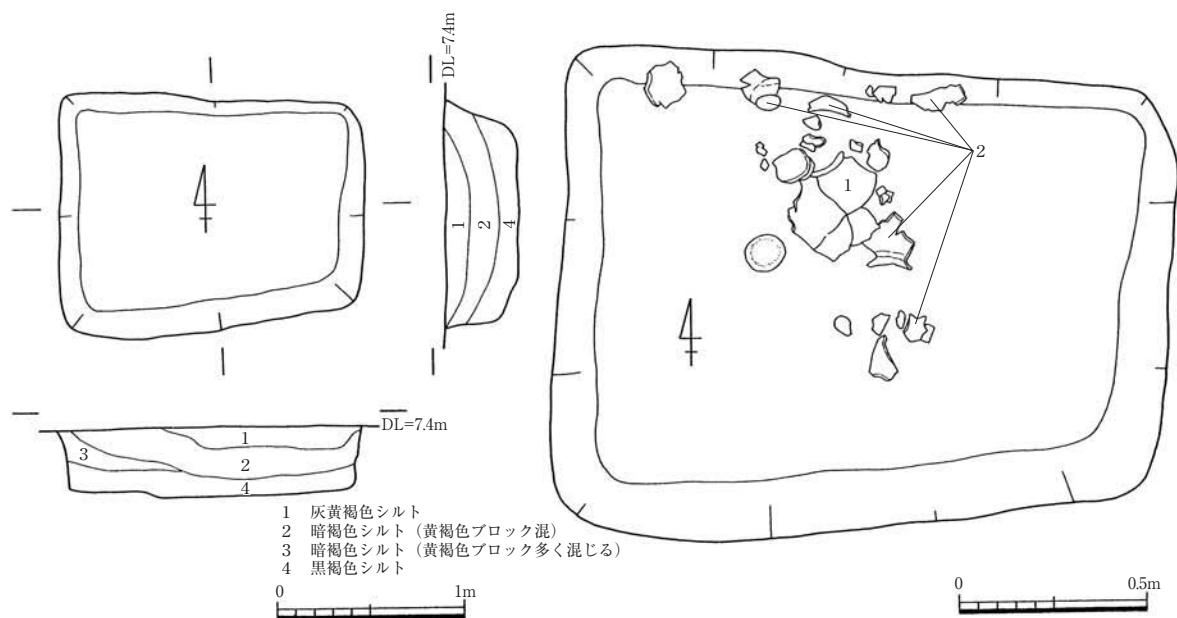
所見：調査区西部、K2ST210の西に位置する。埋土は単一層で底には炭化物と焼土が堆積する。出土遺物は南半分に集中し、底からの出土である。完形または完形近く復元できる甕が3個体投げ込まれた状態で出土し、その他は細片である。1～3は甕である。すべて南四国型甕の特徴を持つ。4は壺の底部、5は扁平な砂岩の両端に敲打による抉り入りを持つ石錘である。抉り部には摩耗痕が認められる。

K2SK236(K2-40 図)

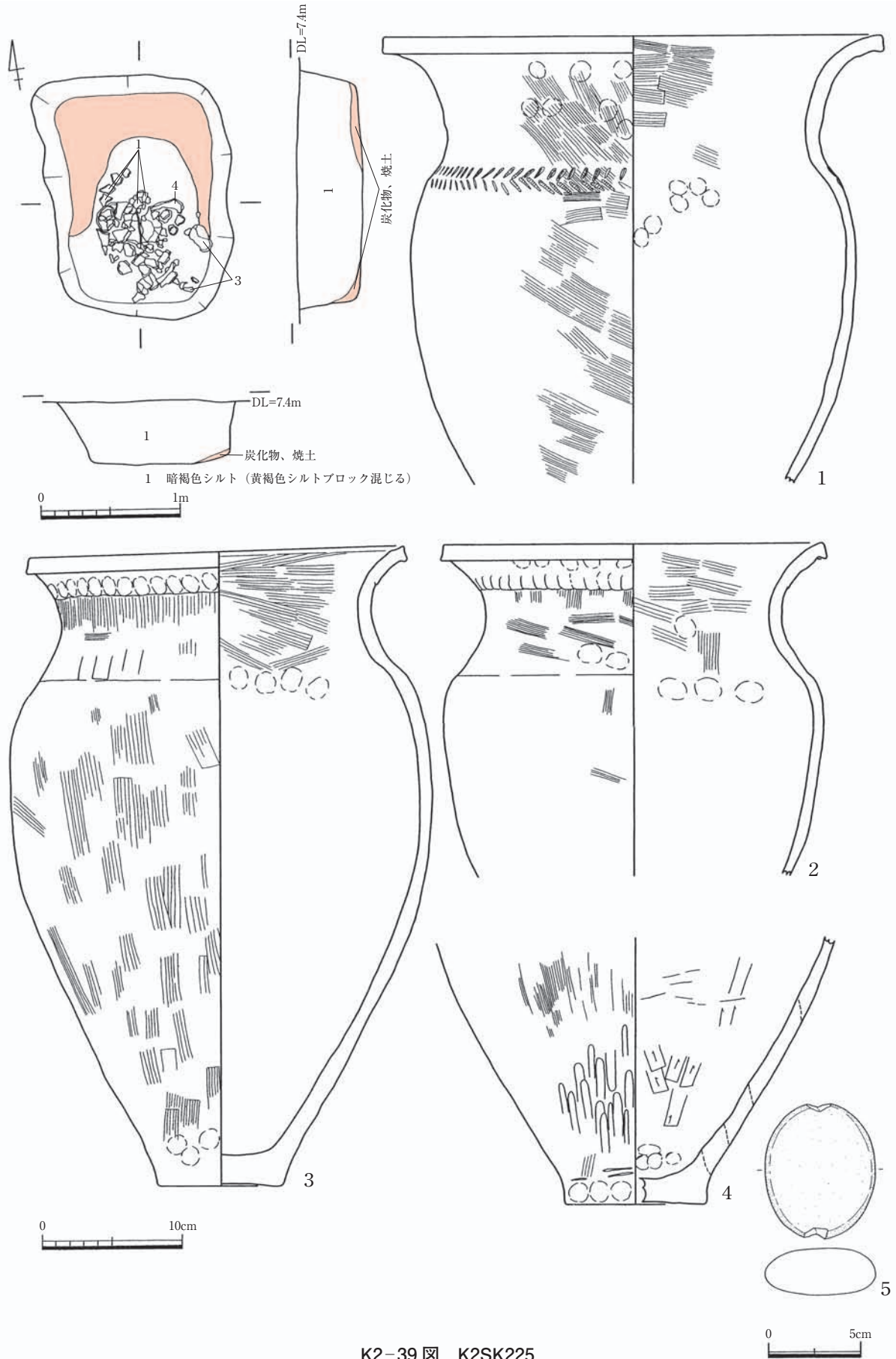
時期：弥生III? 形状：方形 主軸方向：N-90°

規模：1.56×1.1m 深さ：0.36m 断面形態：逆台形

埋土：暗褐色シルト主体



K2-38 図 K2SK217



K2-39 図 K2SK225

付属遺構；ピット 4

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、鉢)

所見；調査区西部、ST212 東側に位置する。埋土はI～II層である。床面に直径 6～8cmの小ピット 3 個、楕円形のピット 1 個を検出したが、機能については不明である。北西隅II層上面から楕円形の河原石がまとまって出土した。他に出土遺物は少なく、図示し得たのは 2 点である(K2-40 図 1、2)。1 は広口壺、2 は鉢である。

K2SK239(K2-40 図)

時期；弥生IV 形状；方形 主軸方向；N-69°-W

規模；0.82×0.58m 深さ；0.16m 断面形態；逆台形

埋土；暗褐色シルト

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区中部に位置する。埋土は暗褐色シルト単一層である。底部 3 個(壺 2、甕 1)が底に置かれ、その上に壺の口縁部と胴部片が重なった状態で出土した。いずれも接合はせず、5 個体分であり、そのうち 2 点を図示した(K2-40 図 3・4)。SB201 東側に隣接することから掘立柱建物に伴う土坑の可能性もある。

K2SK257(K2-40 図)

時期；弥生III 形状；楕円形 主軸方向；N-90°

規模；1.9×1.5m 深さ；0.52m 断面形態；U字形

埋土；暗褐色シルト主体

機能；—

出土遺物；弥生土器(甕、鉢、高杯)

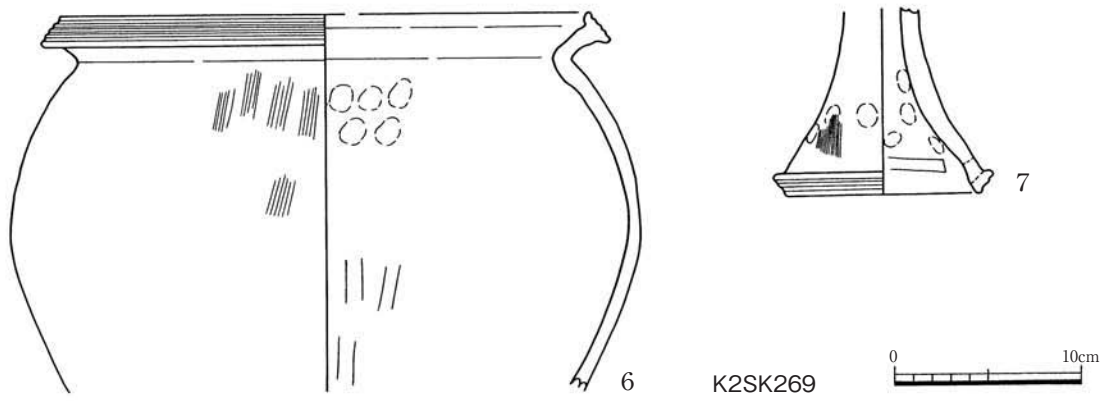
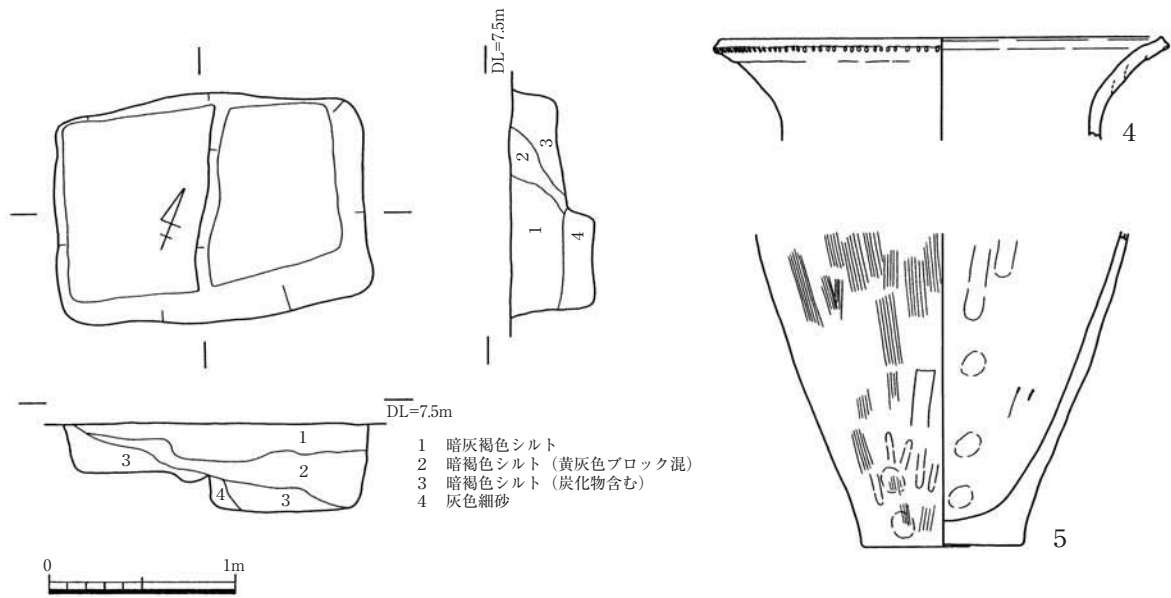
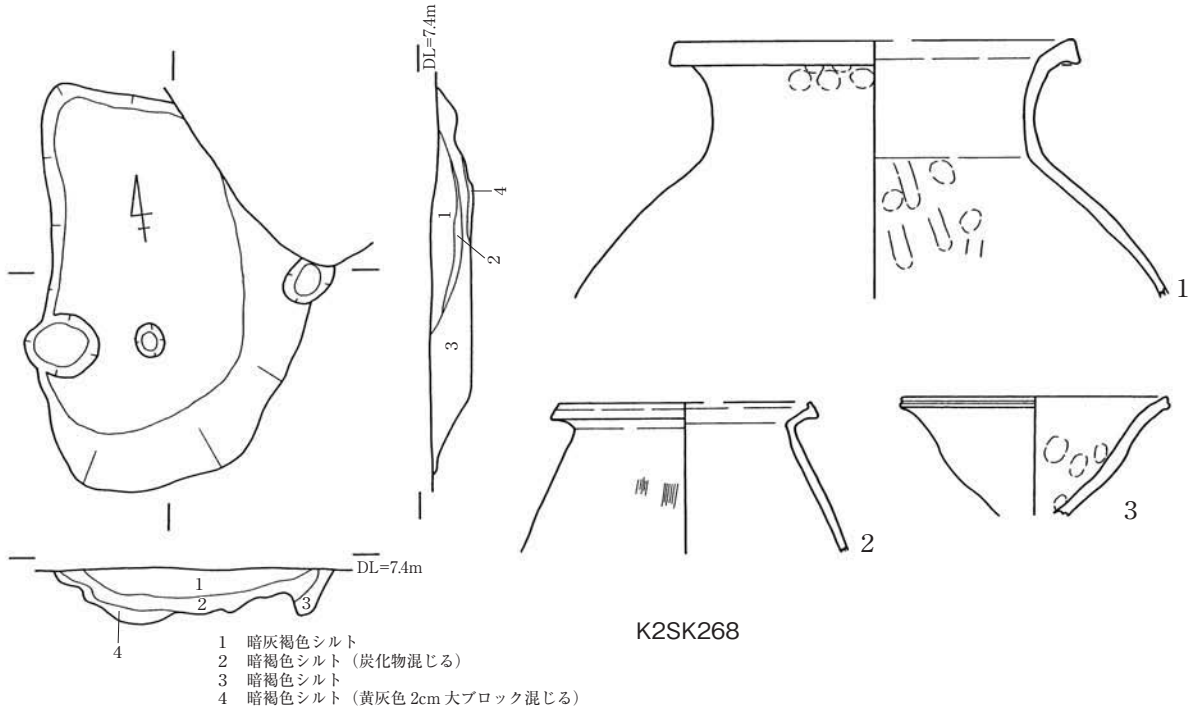
所見；調査区中央部南寄りに位置する。埋土はI～IV層である。遺物は大半がIII、IV層上面からの出土である。調査区内では唯一丸底を呈する土坑である。出土遺物は細片が多いが、胴部片には微隆起帯を巡らし、楕円形の浮文を施したものが多く含まれる。図示し得たのは 4 点である(K2-40 図 5～8)。5 は甕である。南四国型甕の特徴を持ち、肩部に断面三角形の微隆起帯と櫛描沈線を巡らし楕円形の浮文を貼付する。7・8 は壺または甕の底部片である。他に高杯の脚部片と鉢の口縁部片もある。

K2SK268(K2-41 図)

時期；弥生IV 形状；不整形 主軸方向；N-14°-E

規模；2.1×1.4m 深さ；0.2m 断面形態；皿状

埋土；暗褐色シルト主体



K2-41 図 K2SK268・269

付属遺構；ピット

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；調査区中央部に位置し、ST218 に切られる。埋土はI～IV層である。床面からピット3個を検出するが、東端の1個を除いて伴うものかは不明である。出土遺物は細片が多く図示し得たのは3点である(K2-41 図1～3)。1は広口壺、2は甕、3は高杯で脚部は欠損する。

K2SK269(K2-41 図)

時期；弥生IV 形状；方形 主軸方向；N-65°-E

規模；1.64×1.22m 深さ；0.26～0.46m 断面形態；逆台形

埋土；暗褐色シルト主体

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、高杯)

所見；調査区中央部南寄り、ST221 の東に位置する。東側が一段深くなることから2つの遺構の切り合い関係も考えられるが、埋土断面では西側から一括して埋没した様子が観察でき、2段の底を持つ1つの遺構と思われる。出土遺物は主に東側のIII層上面に集中し、一括廃棄されたものと考えられる。図示し得たのは4点である(K2-41 図4～7)。4・5は壺である。4は口縁部に貼付された粘土帯の段がへら状の工具でナデ消される。6は甕、7は高杯の脚部である。

K2SK271(K2-42 図)

時期；弥生IV 形状；方形 主軸方向；N-66°-W

規模；1.65×0.85m 深さ；0.24m 断面形態；逆台形

埋土；暗褐色シルト

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺2)

所見；調査区中央部に位置し、ST226 に切られる。埋土は単一層で図示した壺2個体のみ出土である(K2-42 図1・2)。中央北寄りにまとまって出土し、床面には炭化物が広がる。

K2SK272(K2-42 図)

時期；弥生IV～V 形状；楕円形 主軸方向；N-90°

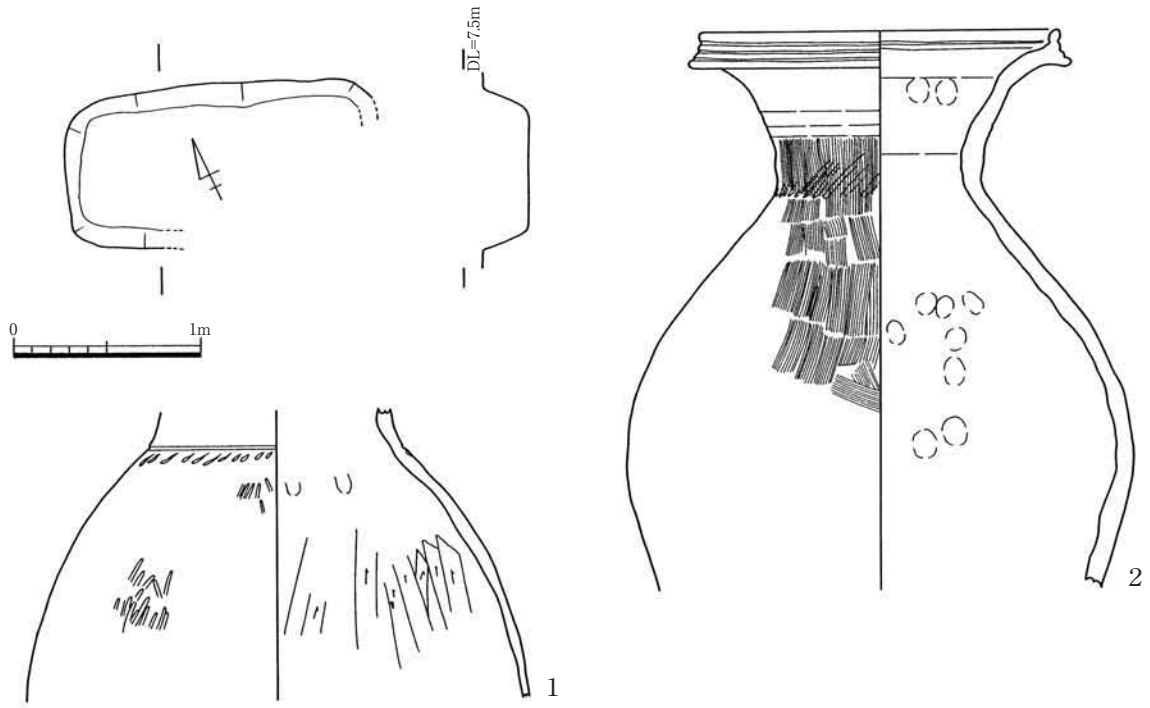
規模；0.54×0.29m 深さ；0.22m 断面形態；U字形

埋土；黄灰褐色シルト

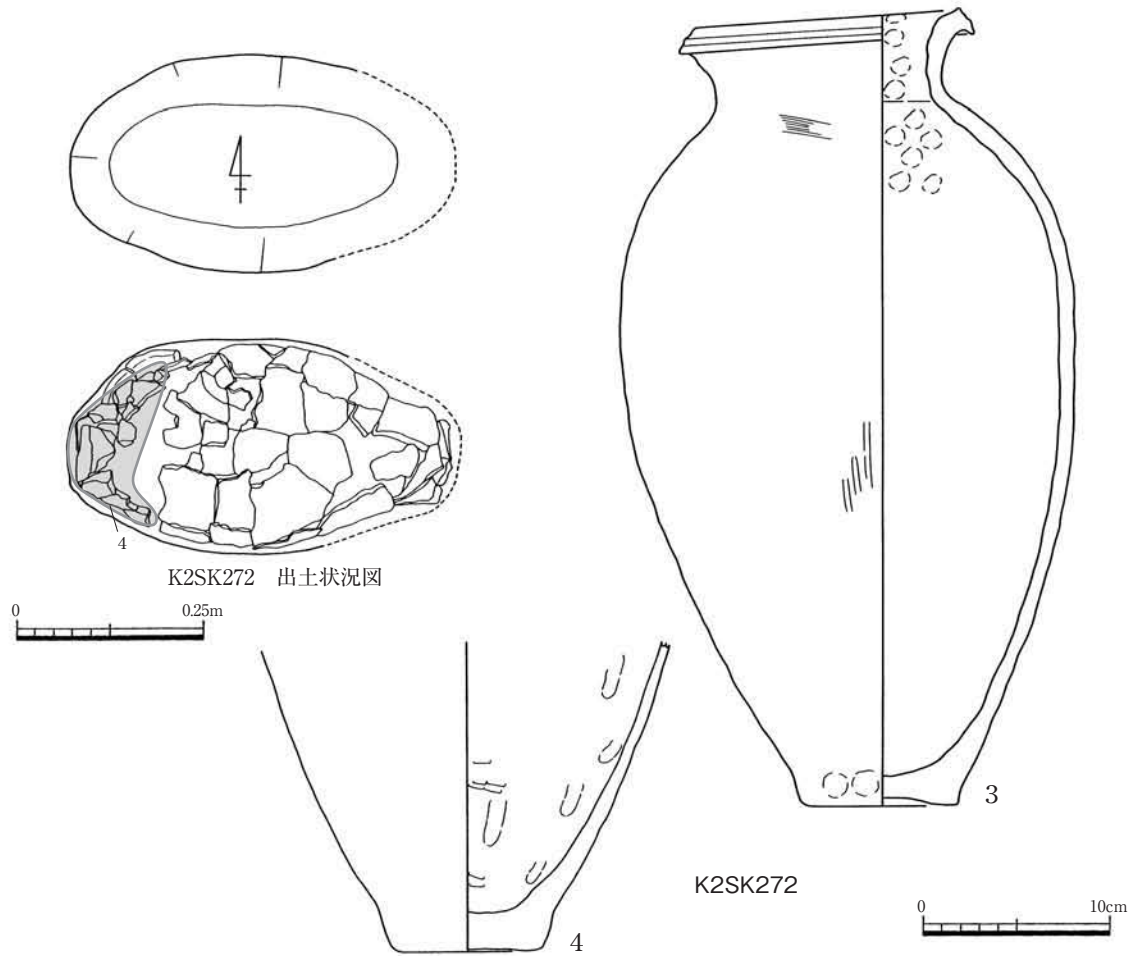
機能；土坑墓？

出土遺物；弥生土器(壺、小型鉢)

所見；調査区東部に位置し、ST202 を切る。出土した壺は口縁部を打ち欠かれ、別の壺の底部を蓋として被せ、寝かした状態で出土した。内部には土が充填されており、土圧によるつぶれはほと



K2SK271



K2SK272 出土状況図

K2SK272

K2-42 図 K2SK271・272

んどない。長軸はほぼ東西方向に沿い、蓋側を西方に向けて埋納されていた。埋土中からは打ち欠かれた口縁部も出土し、器となる壺はほぼ完形に復元できた(K2-39 図 3)。蓋になる底部片(K2-42 図 4)は接合しないが胴部片も出土している。他に別個体の底部片 1 と小型の鉢が出土している。

K2SK281 (K2-43 図)

時期；弥生Ⅲ 形状；方形 主軸方向；N-11°-W

規模；4.3×1.98m 深さ；0.5m 断面形態；逆台形

埋土；灰褐色粘質シルト

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺 1、甕、蓋 1)石鏃

所見；調査区中央部南寄りに位置し、ST221 に切られる。ST221 床面で検出され、埋土は単一層である。非常に大型の土坑であり、住居跡の可能性もある。床面にピットを検出したがいずれも ST221 のものと思われ、床面遺構は持たない。

出土遺物は細片が多く図示し得たのは 7 点である。1 は壺である。口縁部に刻み、肩部に列点を施す。2～5 の甕は南四国型甕の特徴を持つ。3 は他のものに比べ非常に摩耗が少なく残りが良い。6・7 の石鏃はサヌカイト製である。

K2SK289 (K2-44～45 図)

時期；弥生Ⅳ？ 形状；方形 主軸方向；N-64°-W

規模；2.66×1.82m 深さ；0.4m 断面形態；逆台形

埋土；暗褐色粘質シルト

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺)

所見；調査区西部に位置し、ST205、SK290 に切られる。SK288 との切り合い関係は不明である。埋土は単一層である。検出状態では切り合い関係が不明瞭であったため、サブトレンチの断面観察で立ち上がりを検出し遺構プランを確定することができた。出土遺物は少なく、図示し得たのは壺の口縁部片 3 点である(K2-45 図 14～16)。15 と同一個体が SK288 から出土しており(K2-44 図 1)、その他の遺物の時期も SK288 とほぼ同じであることから、SK288 に切られた部分の遺物である可能性がある。

K2SK290 (K2-44～47 図)

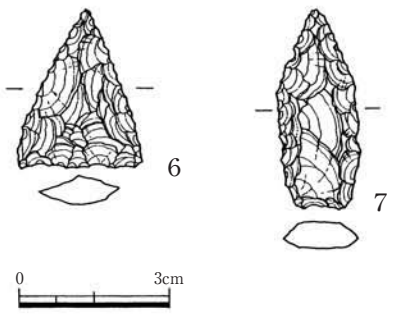
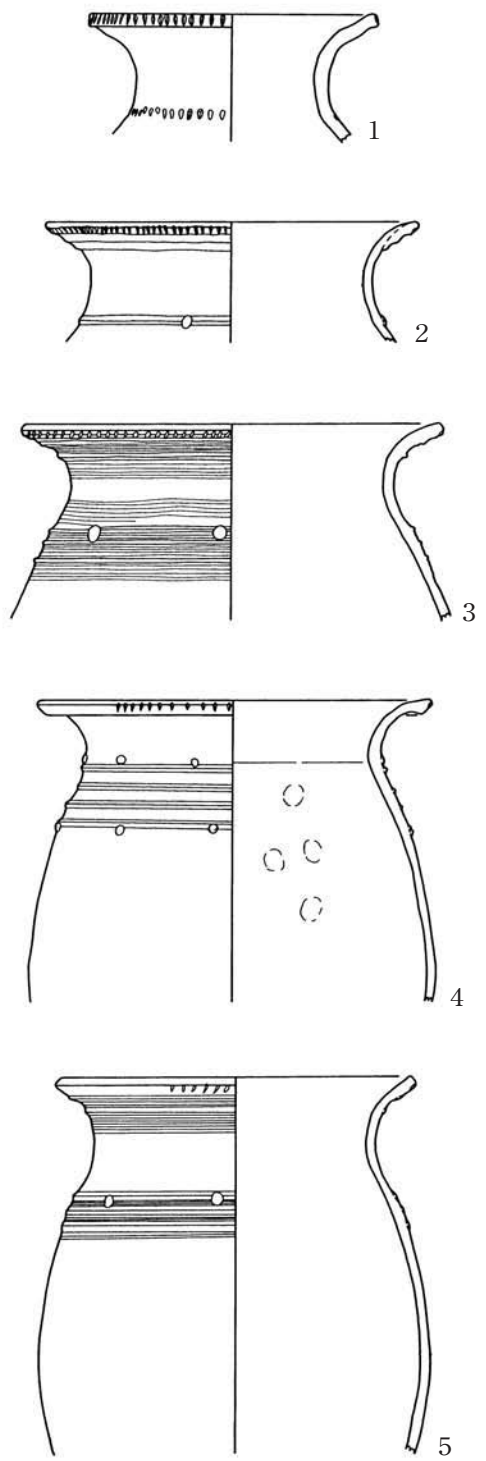
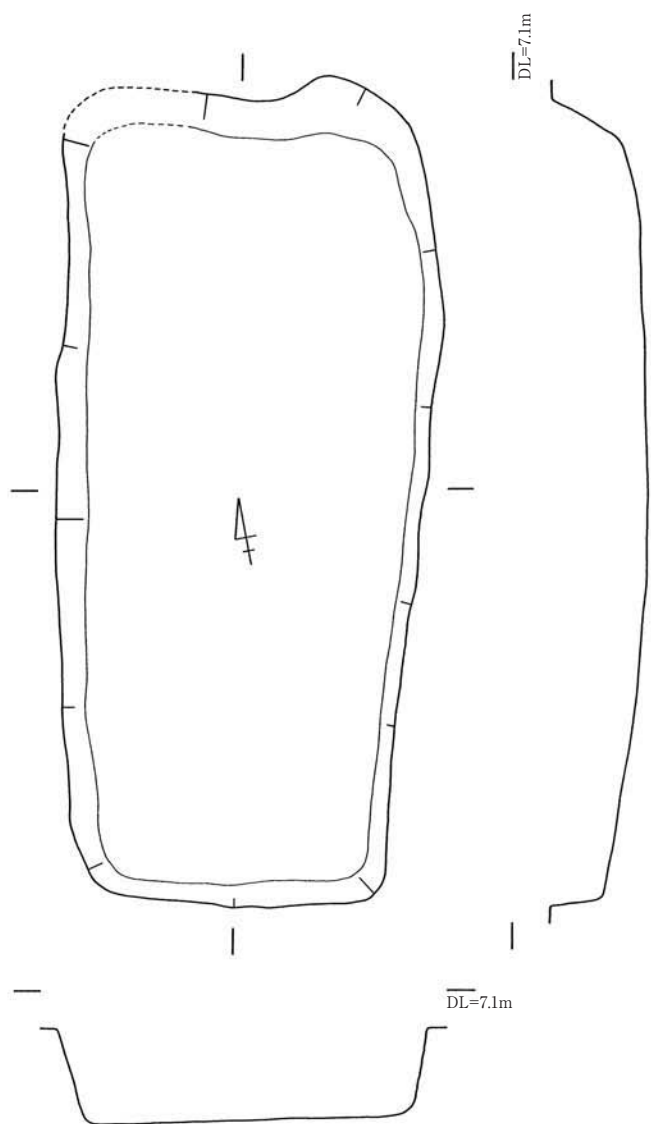
時期；弥生Ⅳ 形状；楕円形 主軸方向；N-4°-E

規模；1.1×0.76m 深さ；0.54m 断面形態；U字形

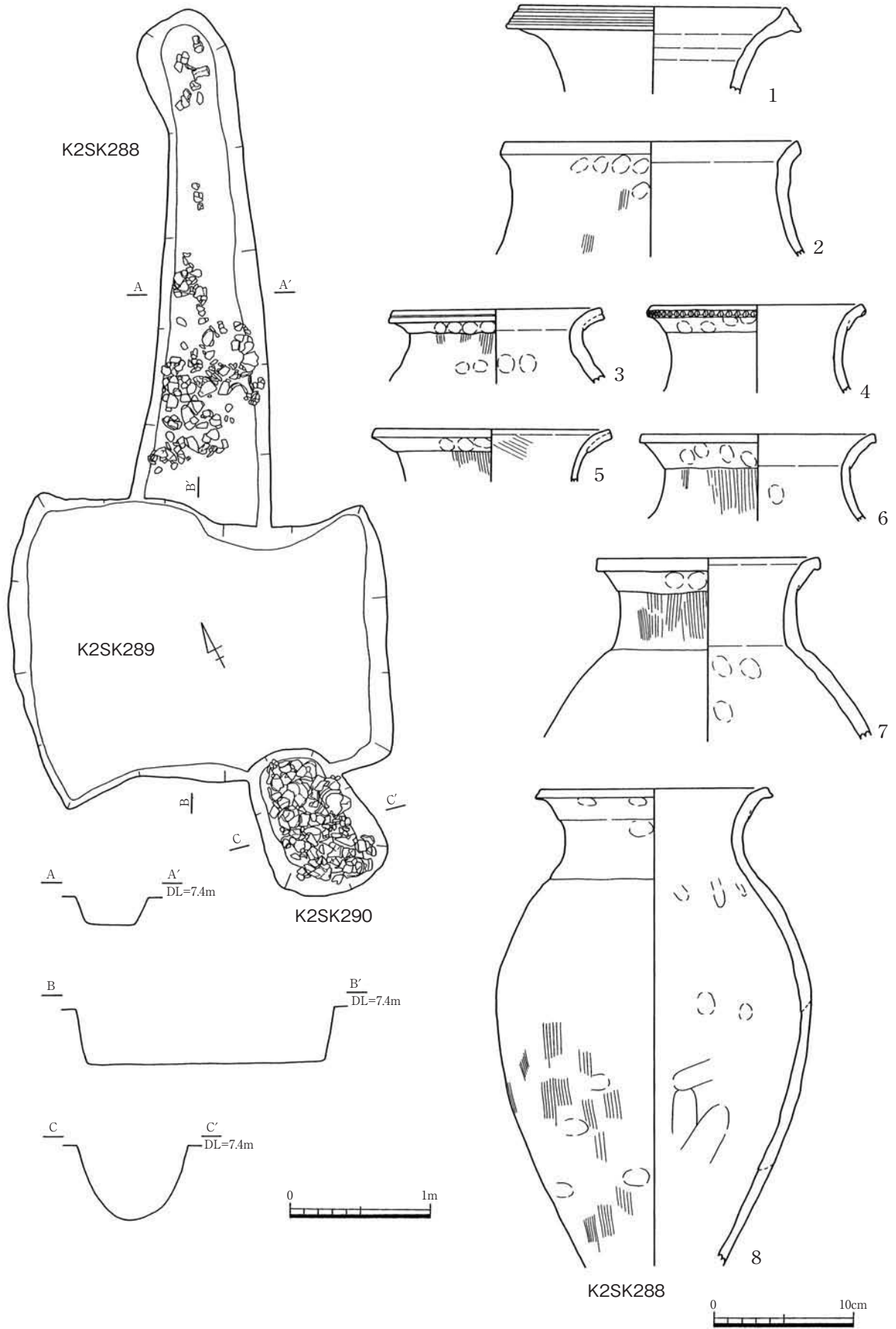
埋土；暗褐色粘質シルト

機能；—

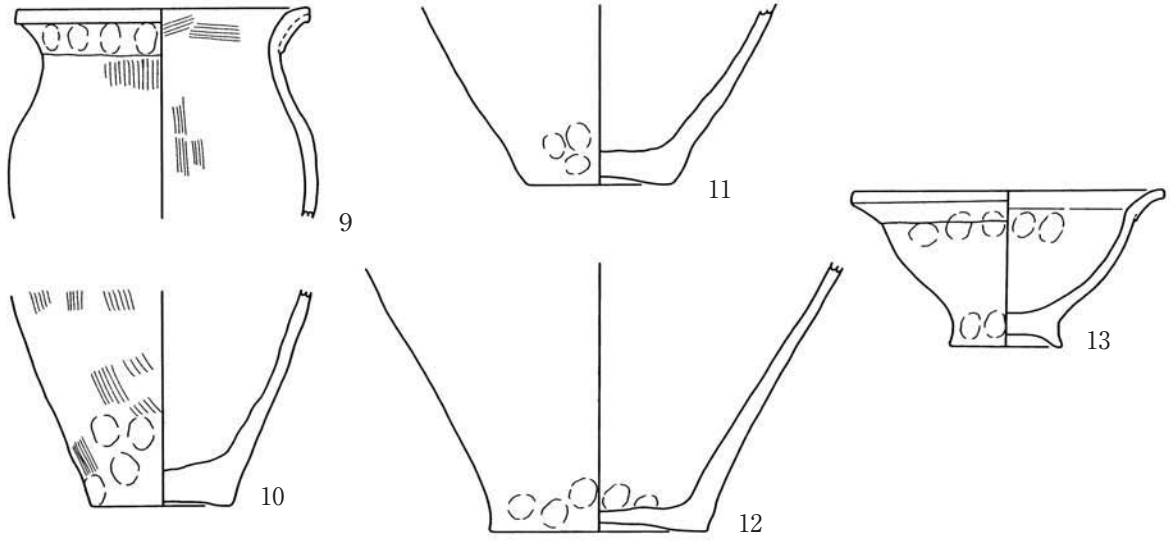
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)



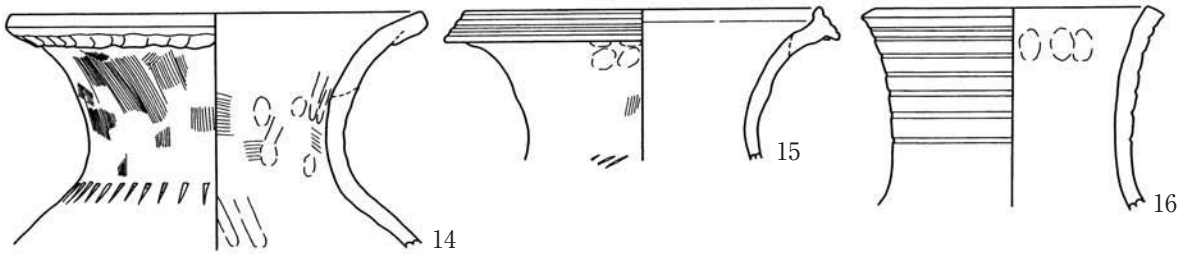
K2-43 ☒ K2SK281



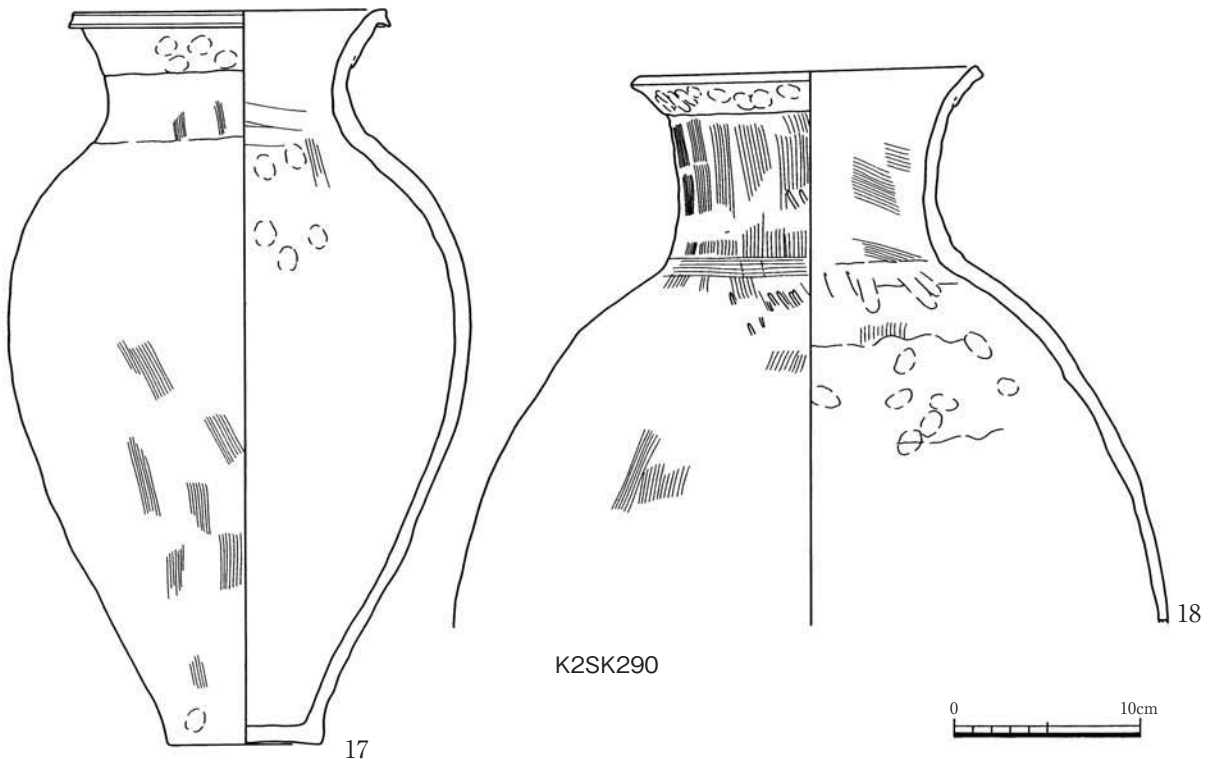
K2-44 図 K2SK288・289・290(1)



K2SK288



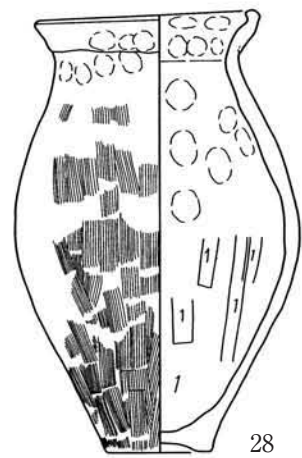
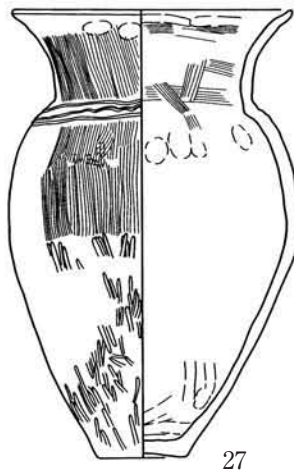
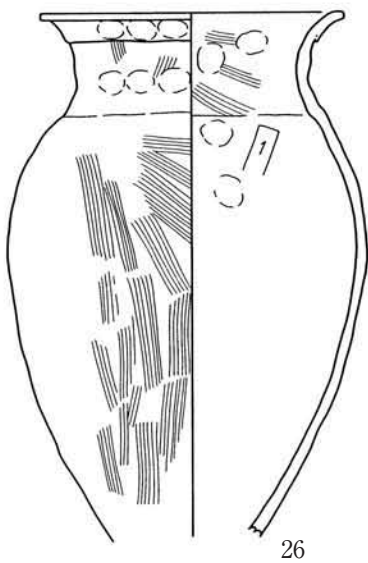
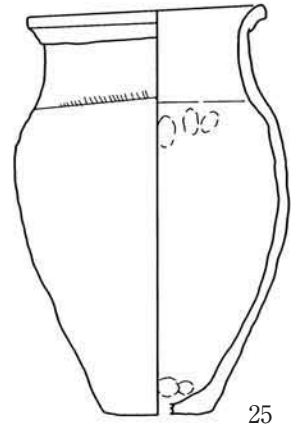
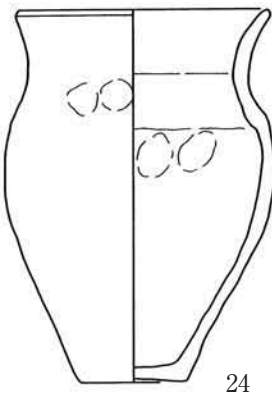
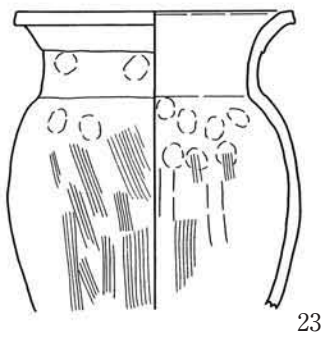
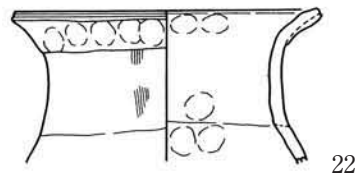
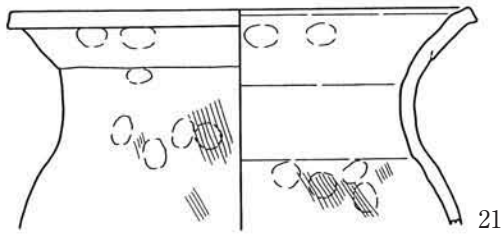
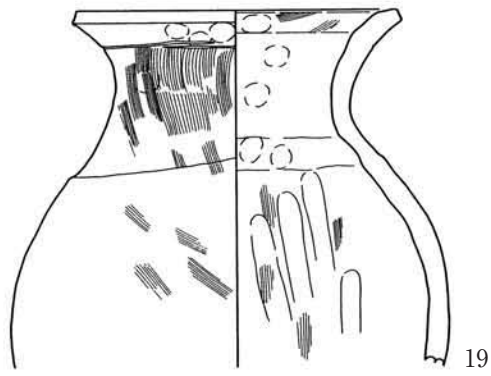
K2SK289



K2SK290

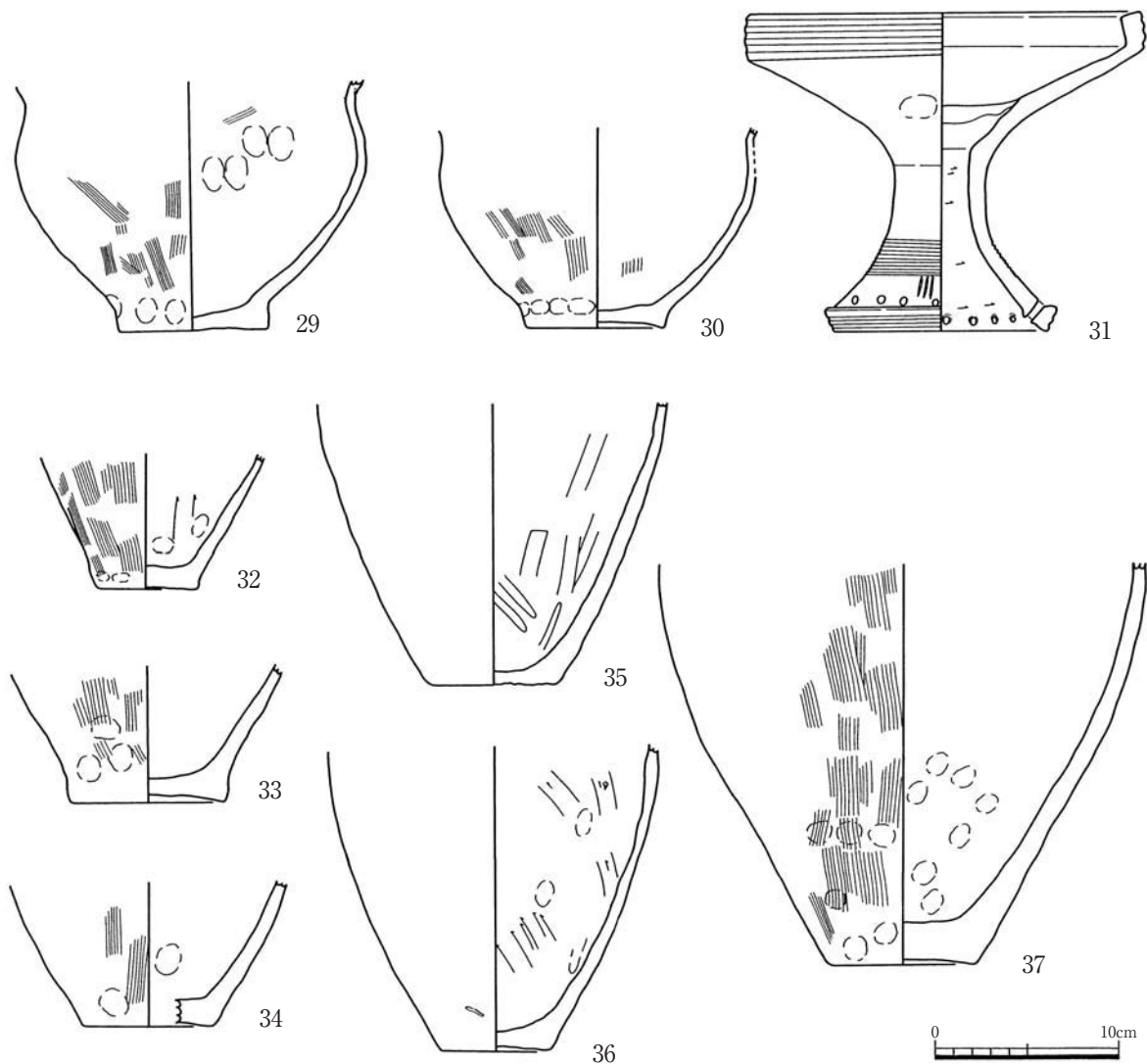


K2-45 ☒ K2SK288 · 289 · 290 (2)



K2-46 図 K2SK290 (3)

所見：調査区西部に位置し、SK289を切る。埋土は単一層で、底に遺物がぎっしり詰まった状態で出土した。出土遺物は完形近く復元できるものが多い(K2-45～47図17～37)。17～20は壺である。18はSK288からの出土した胴部が接合した。19は口縁から胴部にかけての約1/4の部分がSK288からの出土である。21～28は甕である。21～27は南四国型甕の特徴を持つ。28は頸部が短く最大径が胴部中央になる。29・30は鉢である。どちらも丸く張った胴部から短く外反する口縁部を持つ。31の高杯は完形に復元できた。32～37は壺または甕の底部である。また、SK288と出土した遺物に接合するものが多くあり(K2-44図8、K2-45図18、K2-46図19)、両遺構の遺物もほぼ同時期であるため、併存していたと考えられる。



K2-47 図 K2SK290(4)

K2SK295 (K2-48、49 図)

時期；弥生IV 形状；方形 主軸方向；N-49°-E

規模；1.9×1.46m 深さ；0.36m 断面形態；逆台形

埋土；暗褐色シルト

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見；調査区東部、ST224 の西に位置する。埋土は単一層である。出土遺物は南側壁際に集中し、潰れた状態で出土した。完形近く復元できるものが多く 12 点を図示した。1 は小型の直口壺である。頸部の 1/2 を欠くがほぼ完形に復元できた。2～6 は広口壺。2 は 12 の底部と同一個体である。接合できないが多くの胴部片もある。3～5 は凹線文と列点文が施される。8～10 は甕である。8・9 は内面に稜を持って「く」の字に外反し、口縁部は上下に拡張される。11・12 は壺の底部片である。他に図示し得なかったが、鉢の口縁部片と高杯の脚部片も出土している。同時期の ST224 に隣接することから住居に伴う貯蔵穴などの可能性がある。

土坑のうち、溝状土坑は以下にまとめて記述する。また、調査時に SD の遺構名をつけた SD 204～208 も溝状土坑として捉えられるので本節で記述している。

K2SK216 (K2-50 図)

時期；弥生V-1～2 形状；溝状 主軸方向；N-81°-W

規模；(3.6)×0.5～0.8m 深さ；0.24m 断面形態；U字形

埋土；暗褐色シルト

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；調査区西部に位置し、SK218 と L 字に並ぶ。東側の SK211 と切り合い関係は不明である。埋土は単一層で大量の土器と河原石が投げ込まれている。ほとんどのものは底から浮いた状態で出土した。1～5 は壺である。4 は直口壺である。6・7 は甕である。7 は南四国型甕の特徴を残す。8・9 は壺または甕の底部片である。図示し得なかったが鉢の口縁部片が 2 個体分ある。

K2SK218 (K2-51 図)

時期；弥生V-1～2 形状；溝状 主軸方向；N-0°

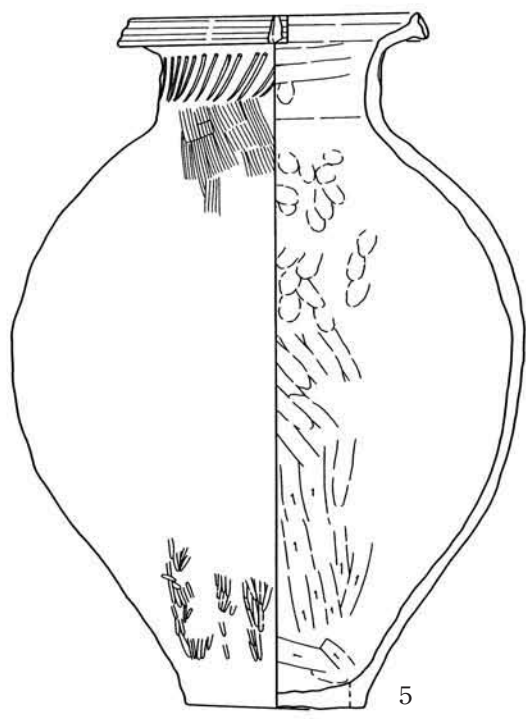
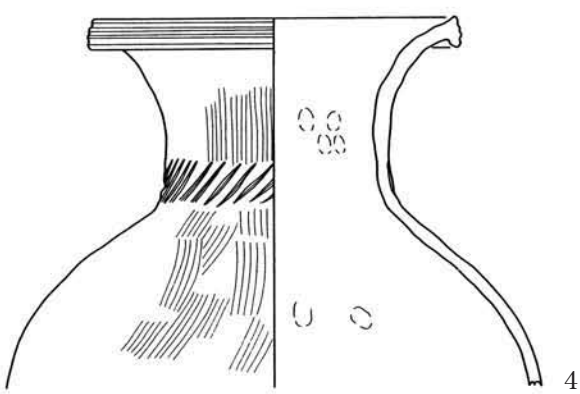
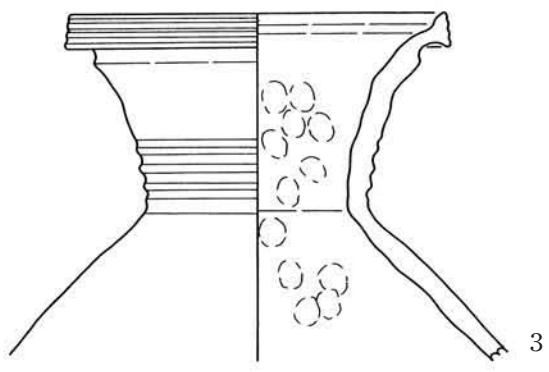
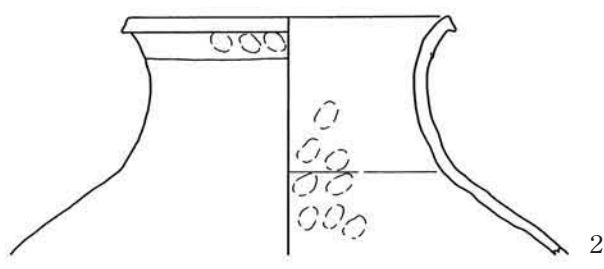
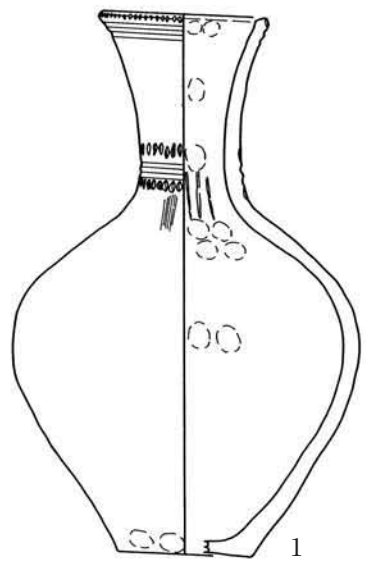
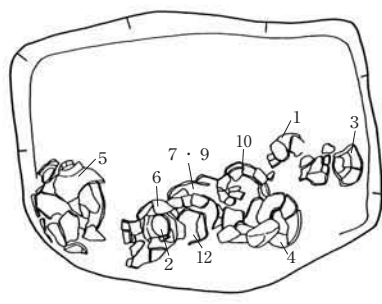
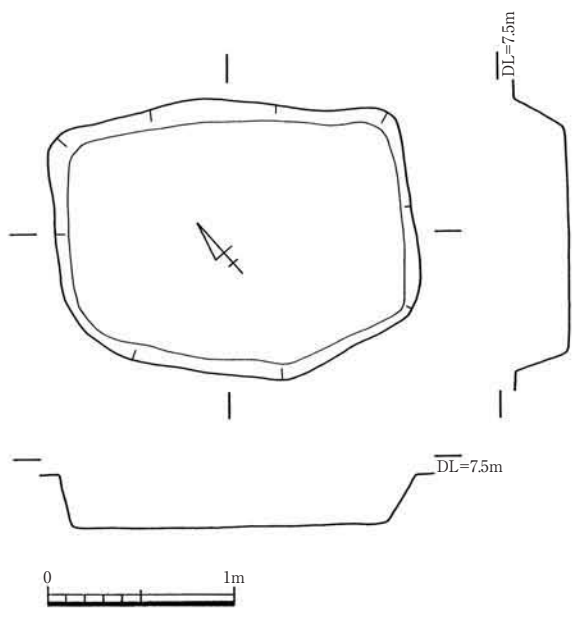
規模；4.38×0.6m 深さ；0.28～0.42m 断面形態；U字形

埋土；黒褐色シルト主体

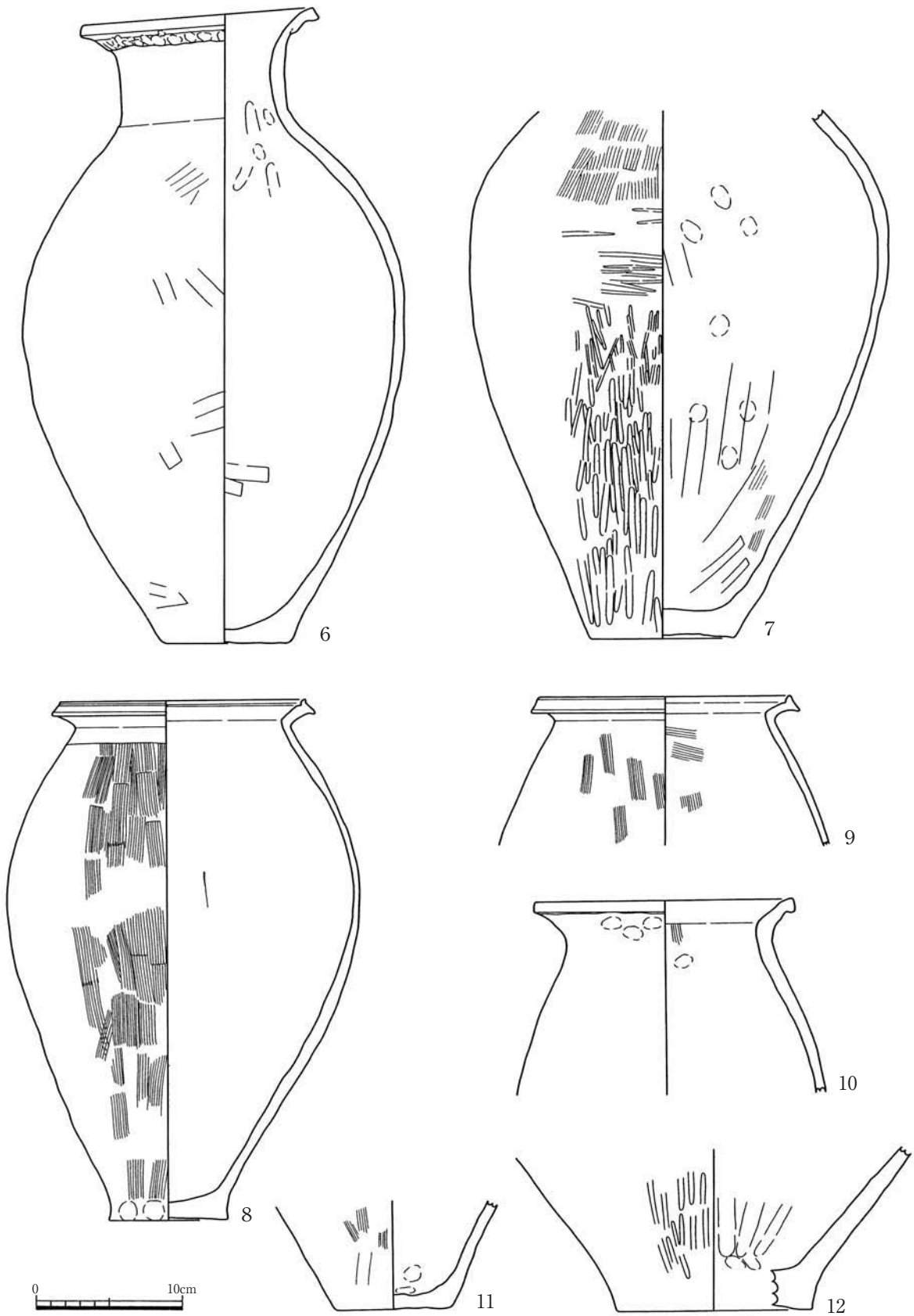
機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

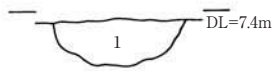
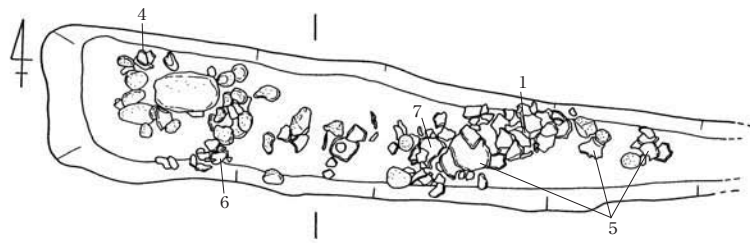
所見；調査区西部に位置し、SK216 と L 字に並ぶ。埋土は I～III 層で南が深く、北側が浅く I 層のみである。底が深くなる付近で遺構プランの幅がわずかに広がり、長軸方向が東に傾くことや、遺物



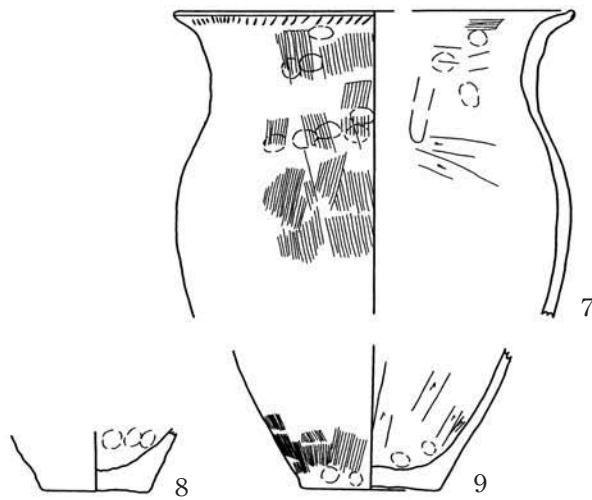
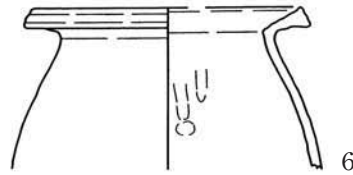
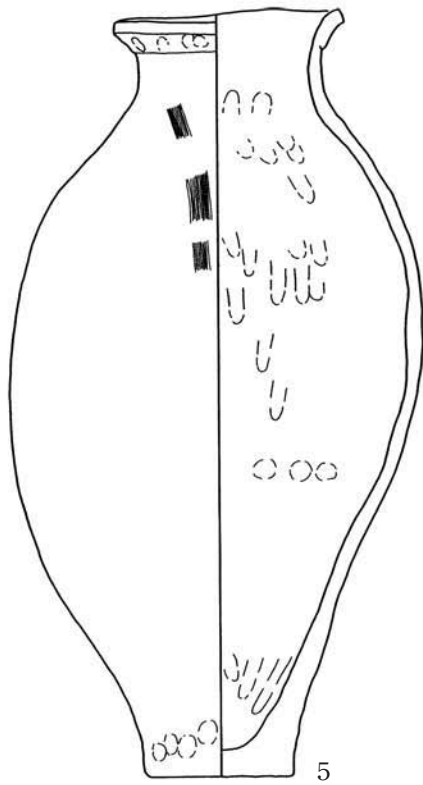
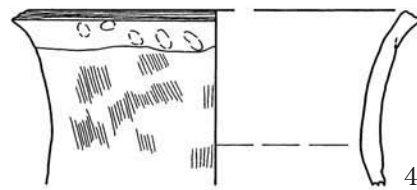
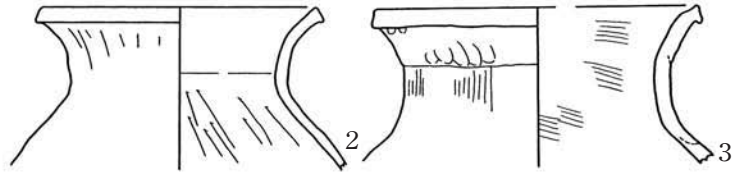
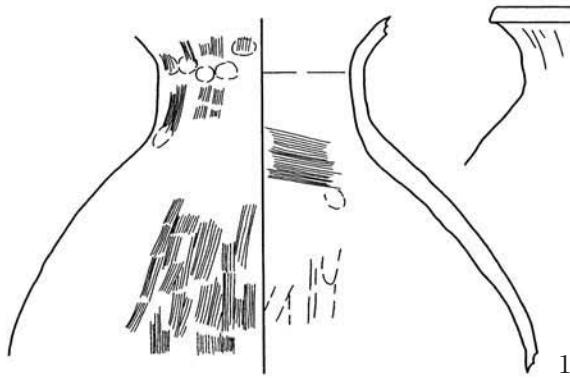
K2-48 ☒ K2SK295(1)



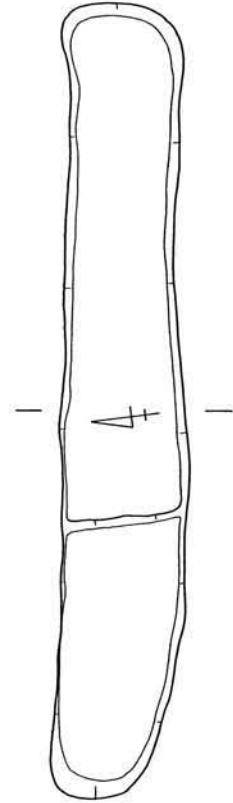
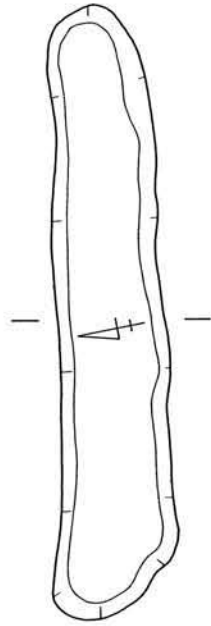
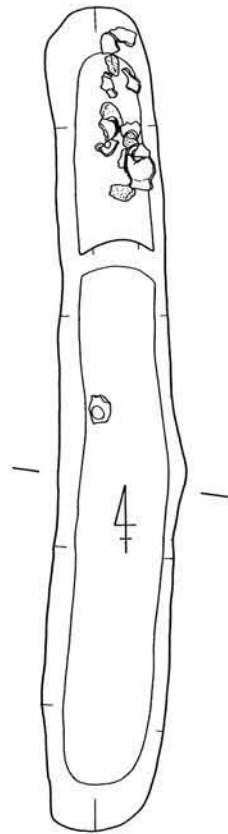
K2-49 図 K2SK295(2)



1 暗褐色シルト

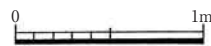


K2-50 ☒ K2SK216



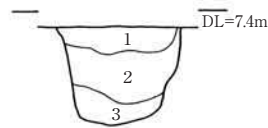
1 暗褐色シルト (炭化物含む)

K2SK227



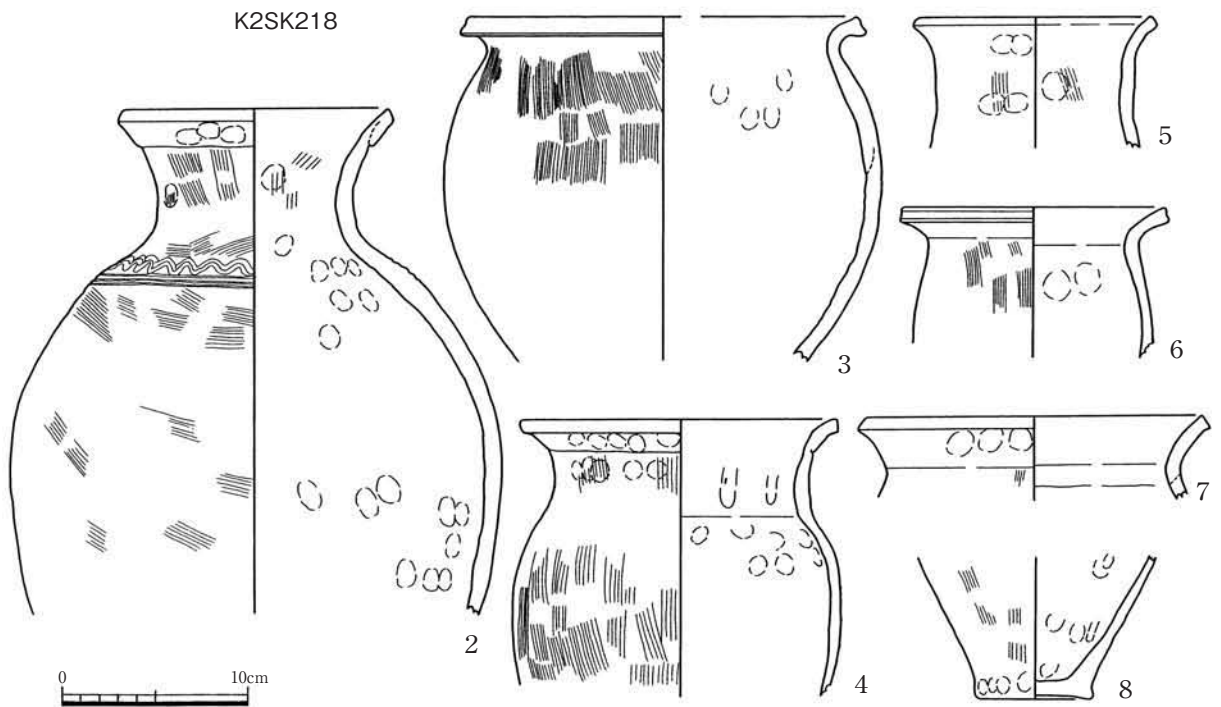
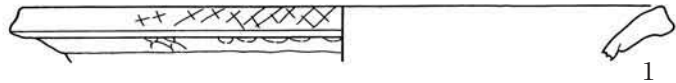
1 灰褐色シルト

K2SK231



- 1 暗灰褐色シルト
- 2 黒褐色シルト
- 3 黒褐色シルト (黄褐色ブロック泥)

K2SK218



K2-51 図 K2SK218・227・231(1 SK231・2~4, 8 SK218・5~7 SK218)

出土状況が北側の浅い部分に集中することから、2つの溝状土坑が切り合っている可能性もある。

図示した遺物はすべて北側の浅い部分での出土である(K2-51 図2～4・8)。2は壺である。肩部に櫛描の沈線と波状文を施される。3は鉢である。4の甕は南四国型甕の特徴を持つ。8は甕の底部片である。

K2SK227(K2-51 図)

時期；弥生V 形状；溝状 主軸方向；N-79°-W

規模；3.28×0.58m 深さ；0.1m 断面形態；逆台形

埋土；灰褐色シルト

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；調査区西部に位置する。後世による削平を受け、残りが悪い。埋土は単一層である。出土遺物のうち図示し得たのは3点である(K2-51 図5～7)。5は直口壺、6・7は甕である。6は南四国型甕のプロポーションを残す。

K2SK231(K2-51 図)

時期；弥生IV 形状；溝状 主軸方向；N-80°-W

規模；4.24×0.68m 深さ；0.22m 断面形態；逆台形

埋土；暗褐色シルト

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺)

所見；調査区西部に位置し、ST216を切る。埋土は単一層で、西側が一段深くなる。出土遺物は少なく、図示し得たのは広口壺の口縁部片1点のみである(K2-51 図1)。

K2SK240(K2-52 図)

時期；弥生V-1～2 形状；溝状 主軸方向；N-7°-W

規模；3.04×0.24～0.42m 深さ；0.28m 断面形態；U字形

埋土；暗灰褐色シルト

機能；—

出土遺物；弥生土器(甕)

所見；調査区西部、ST215の東に位置し、南に向かって先細りのプランを呈する。遺物は床面で検出したピット上部からが大半であり、他の部分での出土はほとんどないことから、SK240を切るピットの遺物の可能性がある。図示し得たのは2点である(K2-52 図1・4)。1は壺、4は分割成形の高杯である。

K2SK255 (K2-52 図)

時期：弥生V-1～2 形状：溝状 主軸方向：N-24°-E

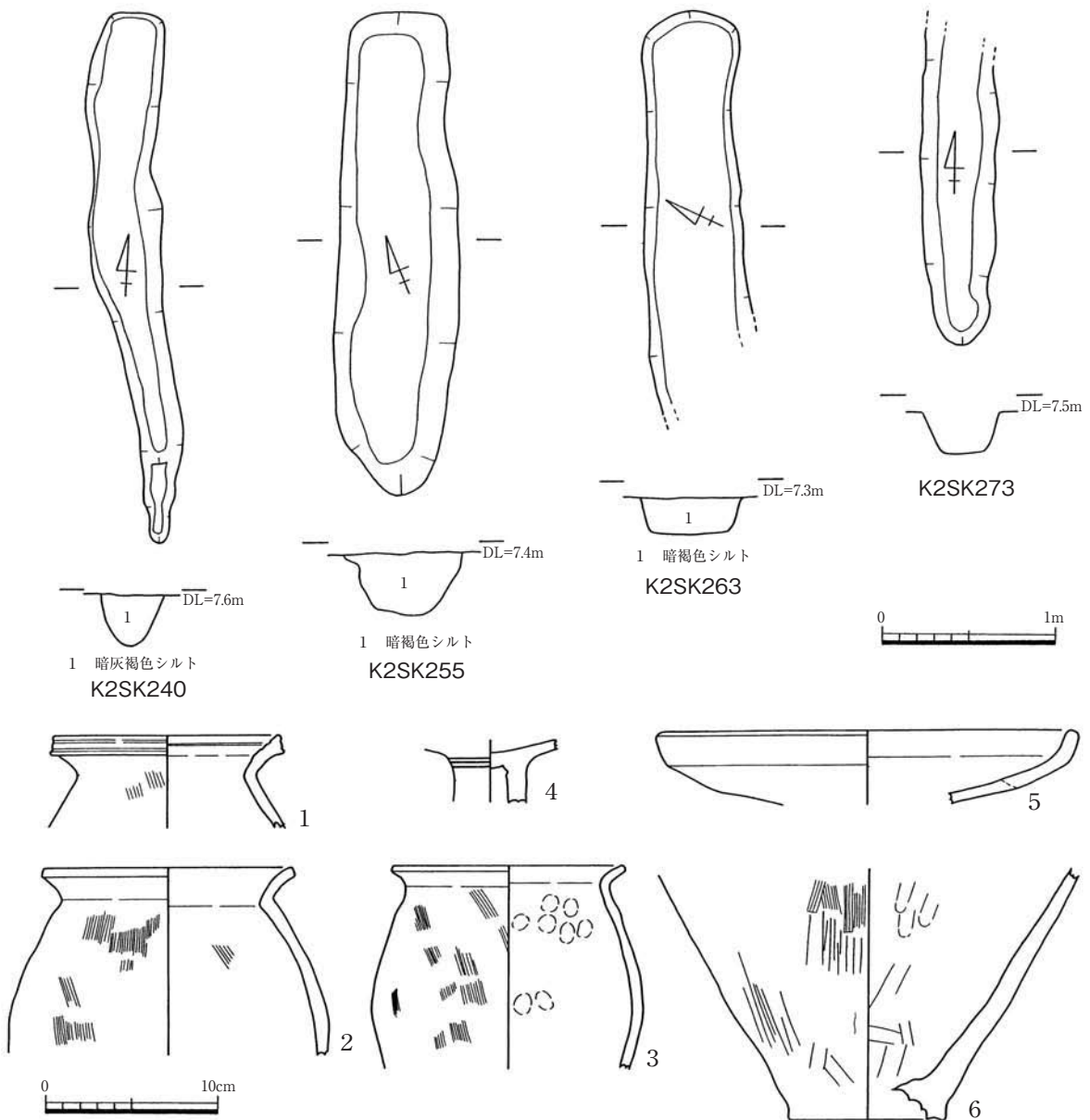
規模：2.78×0.68m 深さ：0.36m 断面形態：U字形

埋土：暗褐色シルト

機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、高杯)

所見：調査区中央部南寄りに位置する。埋土は単一層で出土遺物は全て埋土中に浮いた状態での出土である。図示し得たのは4点である(K2-52 図 2・3・5・6)。3は小型甕である。下胴部は被熱により赤色化し剥離が著しい。5は高杯である。口縁部は短く、わずかに外に開き立ち上がる。6は壺の底部片である。本調査区内の溝状土坑のうちSK255・288は長軸北端が東寄りを示す。



K2-52 図 K2SK240・255・263・273(1, 4 SK240・2, 3, 5, 6 SK255)

K2SK263(K2-52 図)

時期：弥生 形状：溝状 主軸方向：N-62°-W

規模：(2.18)×0.58m 深さ：0.21m 断面形態：逆台形

埋土：暗褐色シルト

機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見：調査区中央部南端に位置する。南側は調査区外であり、正確な規模は不明である。埋土は単一層である。出土遺物は少なく詳細な時期を確定できない。

K2SK273(K2-52 図)

時期：弥生 形状：溝状 主軸方向：N-0°

規模：(1.8)×0.43m 深さ：0.24m 断面形態：U字形

埋土：暗褐色シルト

機能：—

出土遺物：弥生土器(甕、壺、鉢、高杯)

所見：調査区東部に位置し、SK296 に切られる。埋土は単一層で出土遺物はほとんどなく図示し得るものはなかった。

K2SK275(K2-53 図)

時期：弥生IV 形状：溝状 主軸方向：N-86°-E

規模：7.27×0.8m 深さ：0.56m 断面形態：U字形

埋土：暗褐色シルト

機能：—

出土遺物：弥生土器(甕、壺、高杯)

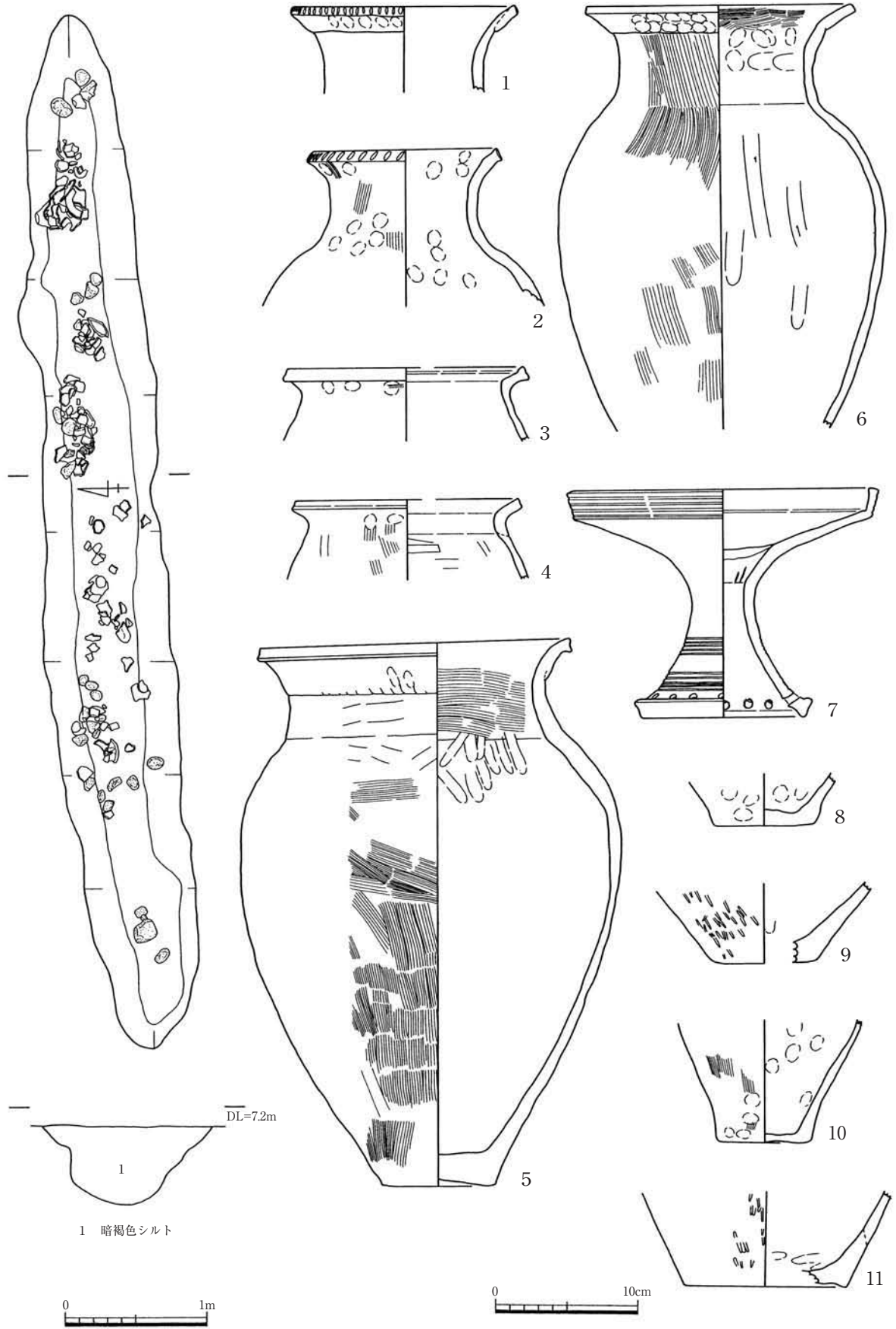
所見：調査区中央部に位置し、南側にSB204 を伴う。ST216 との切り合い関係は土層断面によってSK275 が切ると判断したが、出土遺物はあまり時期差がない。遺物が集中したのは、ほぼ同じレベルであり、底での出土はわずかであったため、ある程度埋没した後に一括して廃棄されたものと思われるが、断面の観察では分層できなかつた。出土遺物のうち図示し得たのは11点である。1・2は広口壺、3～6は甕である。5・6は南四国型甕の特徴を持つ。7は底部円盤充填の高杯である。杯部と脚部に凹線が施され、脚の裾部には等間隔に直径5mmの円孔が配される。8～11は壺または甕の底部片である。

K2SK288(K2-44、45 図)

時期：弥生IV 形状：溝状 主軸方向：N-26°-E

規模：(3.64)×0.72m 深さ：0.2m 断面形態：逆台形

埋土：暗褐色粘質シルト



K2-53 図 K2SK275

機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見：調査区西部に位置し、ST205を切る。SK289との切り合い関係は不明である。ST205との切り合いは検出状態では不明瞭であったため、遺物の出土状況をもとにプランを確定した。本調査区内の溝状土坑のうちSK255とSK288は長軸北端が東寄りを示す。遺構全体に土器と河原石が投げ込まれ、底から浮いた状態で出土した。

出土遺物のうち図示し得たのは(K2-41～42 図1～12)。1～8は壺である。1はSK289から同一個体(K2-45 図15)が出土しているため、SK288が切っている可能性がある。2は広口壺、3は黒色の胎土に細かい砂粒を多く含む。8は接合できたものの約半分がSK290からの出土である。9の甕は南四国型甕の特徴を持つ。接合はしないが10の底部と同一個体である。11・12は壺または甕の底部片、13の鉢は完形品である。SK290とは出土した遺物同士が接合するものが多くあり(K2-44 図8、K2-45 図18、K2-46 図19)、両遺構の遺物はほぼ同時期であるため、併存していたと考えられる。

K2SK293(K2-54 図)

時期：弥生IV 形状：溝状 主軸方向：N-84°-E

規模：7.32×0.9m 深さ：0.42m 断面形態：逆台形

埋土：暗褐色シルト

機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見：調査区中部、ST222の北側に位置する。埋土はI・II層でI層に炭化物を含む。遺構の規模に対して出土遺物は多くなく、すべて埋土中の出土である(K2-54 図1～5)。1・2は壺、3～5は甕である。3は南四国型甕の特徴を持つ。口縁下端に刻目が施され、肩部には楕円形の浮文を貼付し、下に櫛描沈線を巡らせる。

K2SK297(K2-54 図)

時期：弥生IV～V 形状：溝状 主軸方向：N-73°-E

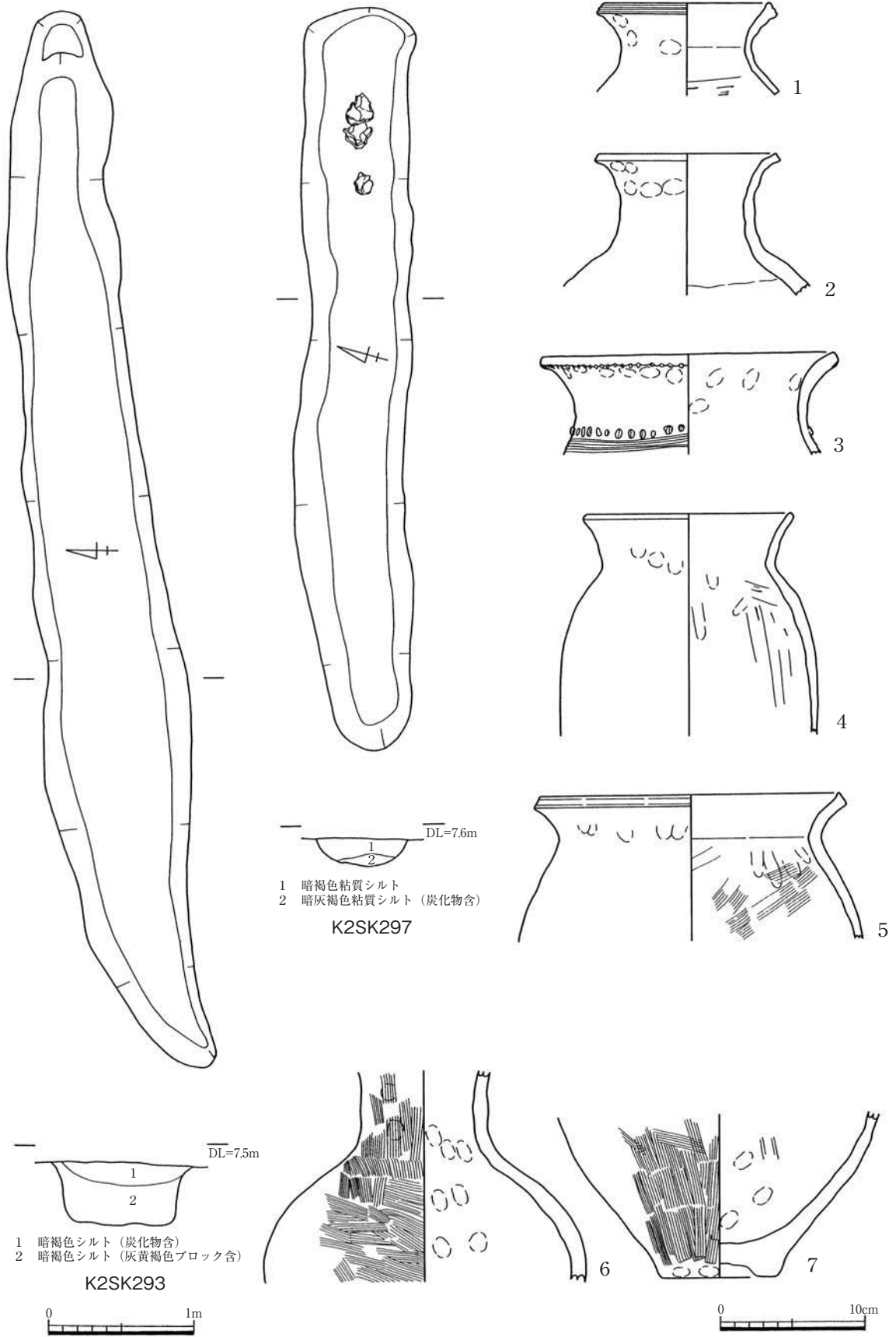
規模：5.12×0.7m 深さ：0.2m 断面形態：U字形

埋土：暗褐色粘質シルト

機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見：調査区東部に位置し、ST202を切る。埋土はI・II層でII層に炭化物を含む。出土遺物は北端部の底にまとまって出土し、図示し得たのは2点である(K2-54 図6・7)。6は壺の上胴部、7は底部片である。胎土、調整などから、接合は出来ないが同一個体と思われる。



K2-54 図 K2SK293・297(1~5 SK293・6、7 SK297)

K2SD204(K2-55 図)

時期；弥生IV～V **形状**；溝状 **主軸方向**；N-90°

規模；2.64×0.57m **深さ**；0.4m **断面形態**；逆台形

埋土；暗褐色シルト

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見；調査区東部に位置する。埋土は単一層で、出土遺物は細片が多く、2点を図示した(K2-55 図1・5)。1は直口壺、5は分割成形の高杯脚部である。

K2SD205(K2-56～58 図)

時期；弥生V-1～2 **形状**；溝状 **主軸方向**；N-80°-W

規模；8.8×0.44～0.9m **深さ**；0.6m **断面形態**；逆台形

埋土；暗褐色シルト主体

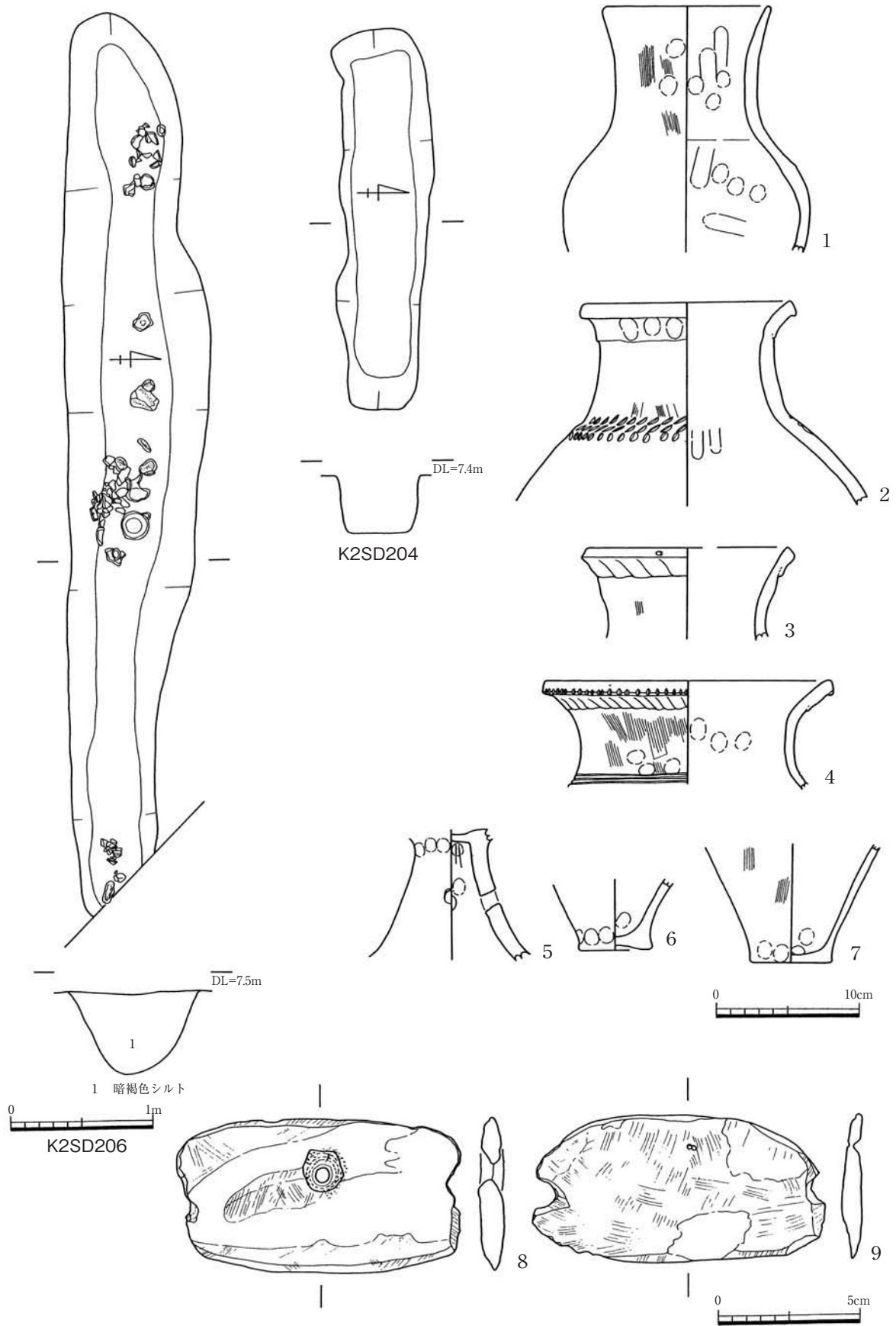
付属遺構；K2SB203

機能；—

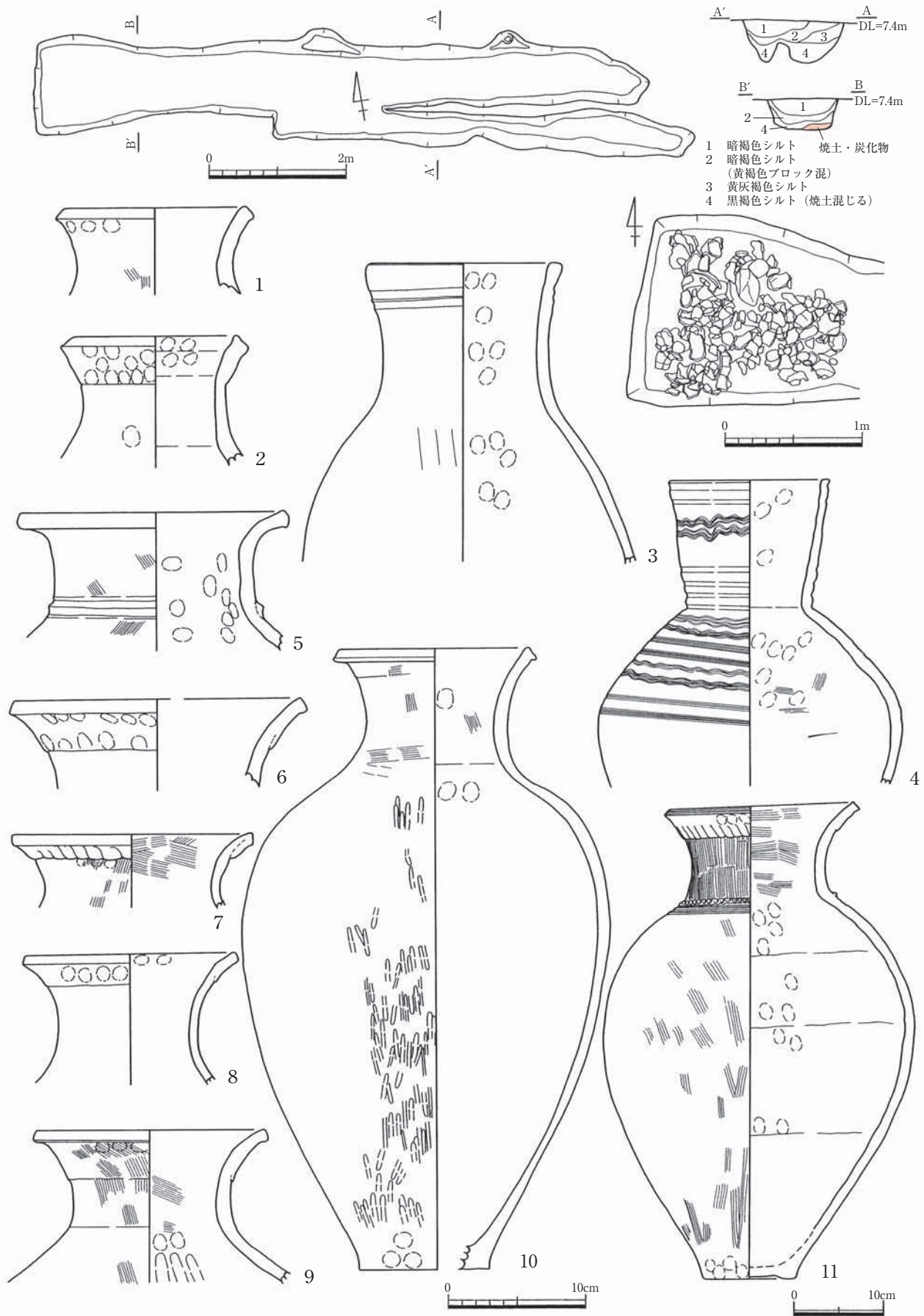
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)石包丁・スクレイパー

所見；調査区西部北寄りに位置する。SK224に切られ、ST210を切る。南側にSB203を伴う。南側に並行した細い溝状土坑があり、中央部で繋がる。どちらも同じ埋土で埋没しており、付属したものと考えられる。埋土はI～IV層である。埋土中には炭化物と焼土が多く含まれる。特に中央部には多量の焼土が堆積し、底には炭化物が広がるが床面と壁は被熱しておらず、投げ込まれたものと考えられる。また、北壁際には臍穴を開けられた炭化材も検出された。中央部分では底から浮いた状態で大型の河原石の投げ込みが多く、主にII層からの出土であり土器の出土は少なかったが、西端部では南西隅から底まで流れ込むような状態で多量の土器が投げ込まれており、壺が多い。西端部のプランは四角形を呈するため、他の遺構との切り合い関係も考えられるが、検出プランは、土層断面では確認できなかった。

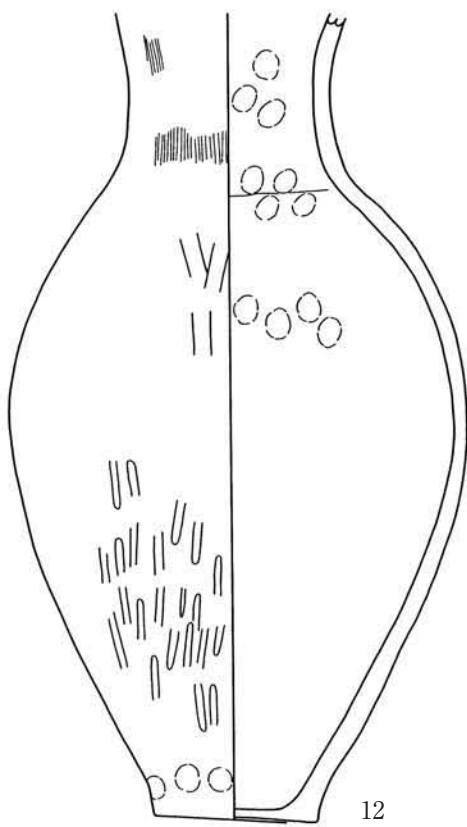
出土遺物のうち土器は完形近く復元できたものを図示した。1～17は壺である。1～4は直口壺で2は口縁部に粘土帯が貼付される。3は口縁直下に凹線文、4は凹線文、櫛描の波状文と直線文が施される。5～11は広口壺である。5は胴部と頸部の境に断面三角形の粘土帯が貼付される。11は頸部と胴部の境にヘラ状工具によるキザミを入れた扁平な粘土帯を貼付し、直下に櫛描直線文を施す。12～17は口縁部を欠く。12・13は胴部中位に最大径があり、14・15は上胴部に最大径がある。16・17は丸味を持った胴部である。18～24は甕である。18は円形浮文と櫛描の鋭角な波状文で装飾が施される。22は南四国型甕の特徴を持つ。23は小形の甕である。25は鉢の底部である。高台状の外面に凹線文が施される。26はミニチュア土器の底部片である。石器は2点を図示した。27は磨製石包丁で錐揉みの紐を2個持つ。28はサヌカイト製のスクレイパーである。



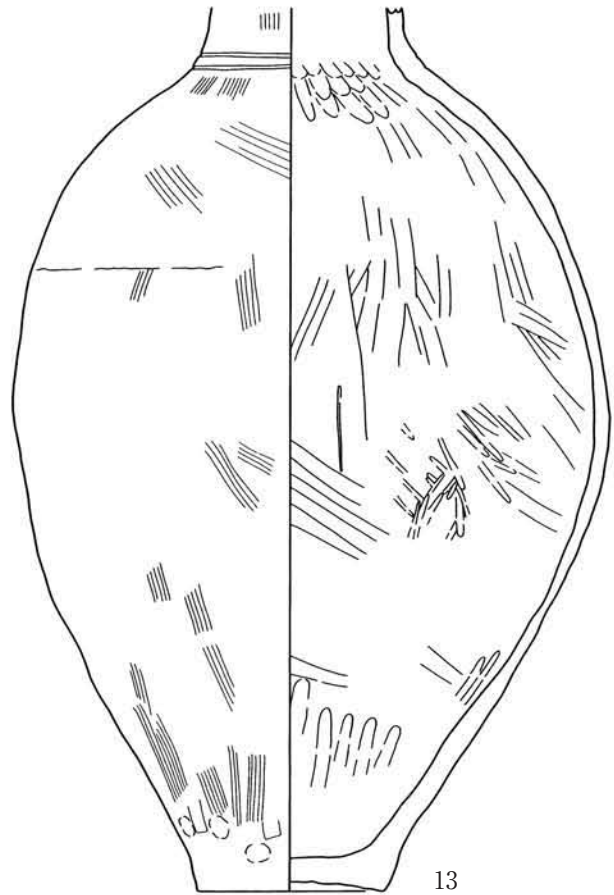
K2-55 図 K2SD204・206(1, 5 SD204)



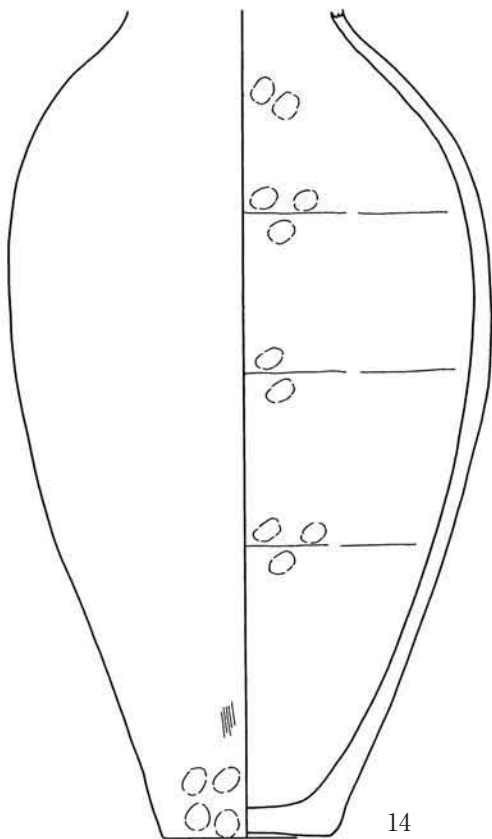
K2-56 図 K2SD205(1)



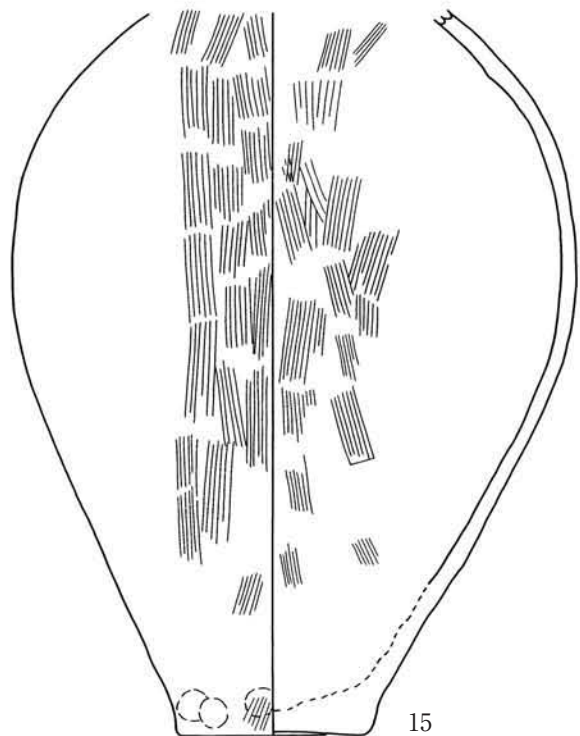
12



13



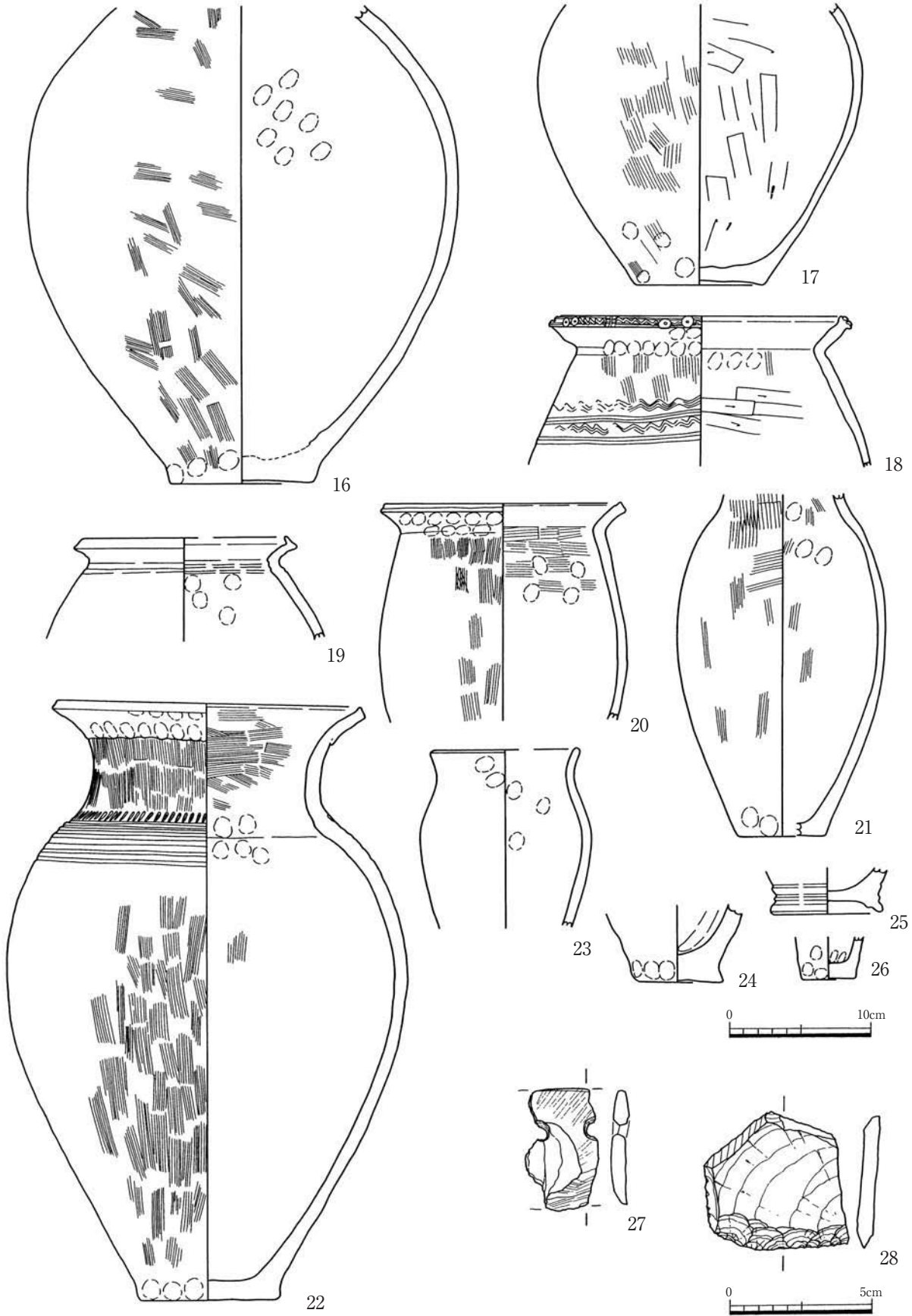
14



15



K2-57 図 K2SD205 (2)



K2-58 ☒ K2SD205(3)

K2SD206(K2-55 図)

時期；弥生IV 形状；溝状 主軸方向；N-90°

規模；(6.2)×0.8m 深さ；0.56m 断面形態；U字形

埋土；暗褐色シルト

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)石包丁

所見；調査区西部北寄りに位置する。東端の一部が調査区外で正確な規模は不明である。埋土は単一層で遺物は埋土中に浮いた状態で出土した。一定埋没後の一括廃棄と思われるが、土層断面の観察では分層し難かった。

出土遺物のうち土器は7点を図示した(K2-55図2～4、6～7)。2・3は貼付口縁の広口壺である。2は肩部にヘラ状器具による列点文を施す。4の甕は南四国型甕の特徴を持つ。6は鉢の底部の可能性がある。石器は8・9の磨製石包丁の2点が出土した。どちらも表裏面に自然面を残し、両端には敲打による抉りを持つ。8は敲打後に錐揉みによる紐を持つ。9の紐は未完通で、表面を錐により穿孔後、裏面は先端の細い錐で穿孔しはじめた状態である。

K2SD208A(K2-59 図)

時期；弥生IV～V 形状；溝状 主軸方向；N-84°-W

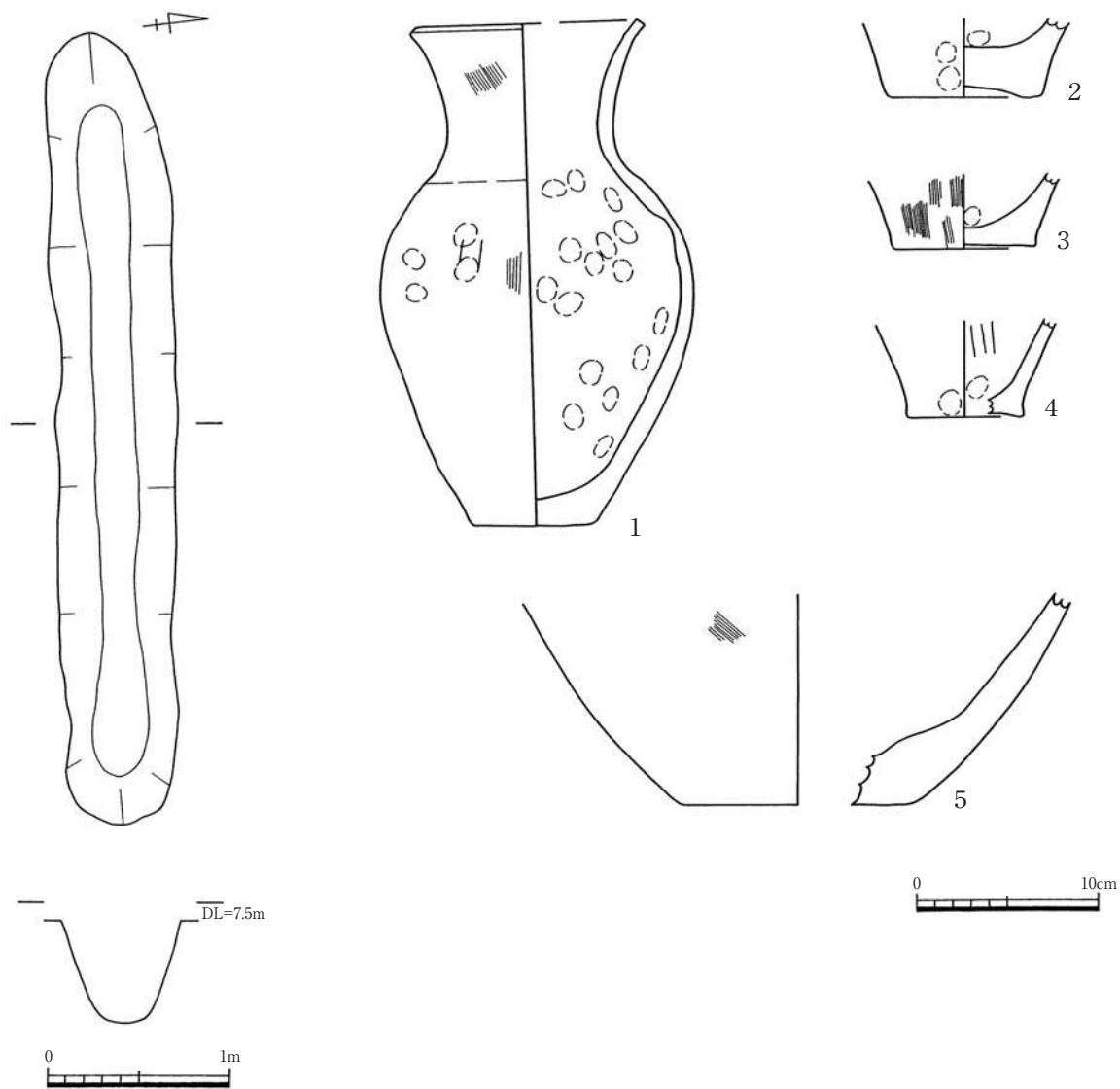
規模；4.34×0.66m 深さ；0.58m 断面形態；U字形

埋土；暗褐色シルト

機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区中央部に位置する。埋土は単一層である。検出時にはSD208Bとつながる同一遺構と捉えていたため、SD208Aとしている。出土遺物は全て埋土中からのもので、図示し得るものは少なかった。1は小型の直口壺である。2・5は壺の底部片、3・4は甕の底部片である。



K2-59 図 K2SD208A

K2SD208B (K2-60 図)

時期：弥生IV 形状：溝状 主軸方向：N-63°-E

規模：4.6×1.1m 深さ：0.6m 断面形態：U字形

埋土：暗褐色シルト

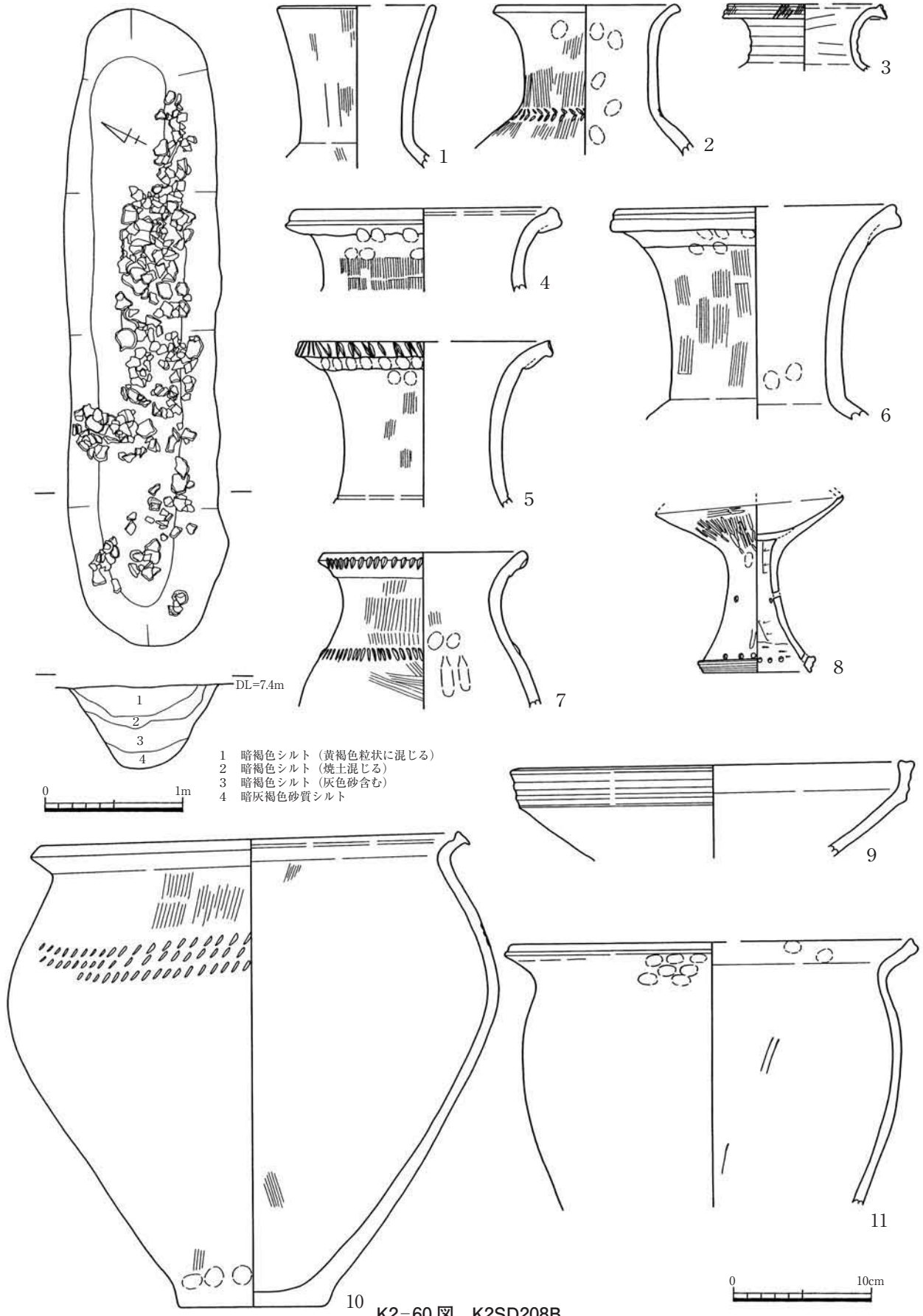
付属遺構：K2SB207

機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見：調査区中央部に位置し、南側にSB207を伴う。埋土はI～IV層でレンズ状の堆積を示す。埋土中には多くの遺物が投げ込まれており、ほとんどがII層上面からの出土である。

出土遺物のうち図示し得たものは11点である。1～6は壺である。1は直口壺、3～6は口縁部に粘土帯を貼りつけ肥厚させた広口壺である。7の甕は南四国型甕の特徴を持つ。8・9は高杯である。8は口縁部を欠く。10・11は鉢である。10はほぼ完形に復元できた。



- 1 暗褐色シルト (黄褐色粒状に混じる)
- 2 暗褐色シルト (焼土混じる)
- 3 暗褐色シルト (灰色砂含む)
- 4 暗灰褐色砂質シルト

K2-60 ☒ K2SD208B

3. K2 区中世の遺構と遺物

概要

K2 区では中世の遺構は土坑 15 基、溝 2 条、井戸 1 基を検出した。土坑は楕円形、長方形を呈するものが多く、埋土は全て灰色または灰褐色シルトの単一層である。いくつかのブロックで集中し、周辺にピットも集中して検出した。出土遺物が少ないため、性格は不明なものが多い。溝は調査区西端部と東部で検出した。西端部のSD201 は後世の削平を受け、非常に残りが悪く、底のごく一部分の検出であり、プランは不明瞭である。調査区東部ではコの字型のプランを呈するSD209 が検出された。東側は削平を受け残存しないが、屋敷の区画溝と思われる。残存する西側部分は長さ 6.8m を測り、N-14°-E を示す。南側にはSE201 が隣接し、屋敷に伴う井戸の可能性がある。

K2-4 表 K2 区中世土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)					
K2SK202	L字形	逆台形	1.6	1.12	20	N-90°	灰色シルト	K2SK216を切る		
K2SK203	楕円形	逆台形	0.94	0.68	20	N-6°-W	黄灰褐色シルト	K2SK218を切る		
K2SK205	楕円形	逆台形	1.7	1.3	20	N-11°-W	黄灰色シルト	K2ST205を切る		
K2SK214	方形	逆台形	1.55	1.05	16	N-77°-E	黄灰色シルト	K2ST204を切る		
K2SK222	円形	皿状	1.1	1.0	5	N-0°	灰褐色シルト		15世紀前半	
K2SK226	方形	逆台形	1.64	1.34	18	N-16°-E	黄灰色シルト		15世紀後半	
K2SK230	楕円形	逆台形	1.44	0.72	32	N-80°-W	灰色シルト		15世紀	
K2SK245	円形	皿状	1.44	1.20	12	N-0°	灰色シルト			
K2SK246	溝状	逆台形	2.22	0.48	14	N-90°	黄灰色シルト		15世紀前半 ~ 16世紀初頭	
K2SK247	楕円形	皿状	1.75	1.15	5	N-72°-W	黄灰色シルト			
K2SK248	楕円形	皿状	1.35	0.45	4	N-76°-W	黄灰色シルト			
K2SK249	方形	逆台形	1.10	0.85	13	N-10°-E	黄灰色シルト			
K2SK250	楕円形	皿状	1.30	1.05	21	N-11°-E	黄灰色シルト			
K2SK291	方形	逆台形	1.63	1.40	21	N-90°	灰色シルト			

K2-5 表 K2 区中世溝跡一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	接続	時期	備考
K2SD201	(10)×0.4×0.03		U字形?	N-13°-E			
K2SD203	(30)×0.4×0.2		U字形	N-11°-E	K3SD301, 302		

K2SK222 (K2-62 図)

時期；中世 形状；円形 主軸方向；N-0°

規模；1.0×1.1m 深さ；0.5m 断面形態；皿状

埋土；灰褐色シルト主体

機能；—

出土遺物；土師質土器 1

所見；調査区西部北寄りに位置する。ほぼ円形のプランを呈し、浅い皿状の掘方である。底は被熱を受け赤色化し、炭化物が全面に堆積する。炭化物の上面で多量の骨片が散積しており、火葬墓の可能性もある。出土遺物は 15 世紀前半のものと思われる手づくねの杯半個体のみの出土である (K2-62 図 2)。

K2SK226 (K2-62 図)

時期；中世 形状；方形 主軸方向；N-16°-E

規模；1.64×1.34m 深さ；0.18m 断面形態；逆台形

埋土；黄灰色シルト(鉄分多く含む)

機能；—

出土遺物；播鉢 1

所見；調査区西部に位置し、SK291 を切る。埋土は単一層で酸化した鉄分を多く含む。出土遺物は 15 世紀後半の備前焼播鉢の 1 点のみの出土である (K2-62 図 5)。

K2SK230 (K2-62 図)

時期；中世 形状；楕円形 主軸方向；N-80°-W

規模；1.44×0.72m 深さ；0.32m 断面形態；逆台形

埋土；灰色シルト

機能；—

出土遺物；鍋 1

所見；調査区西部に位置する。北側に中世埋土のピットの集中が見られる。埋土は単一層で酸化した鉄分を多く含む。出土遺物は 15 世紀代の播磨型鍋の口縁部片 1 点のみである (K2-62 図 4)。口縁端部は外反し水平な面をなす。口縁直下に鏝がつくが、欠損する。

K2SK246 (K2-62 図)

時期；中世 形状；溝状 主軸方向；N-80°-W

規模；2.22×0.48m 深さ；0.14m 断面形態；逆台形

埋土；黄灰色シルト

機能；—

出土遺物；土師質土器 1、播鉢 1

所見；調査区中央部に位置する。周囲に中世土坑SK245～250が集中する。埋土は単一層で出土遺物は2点である(K2-62 図1・6)。1は手づくねの皿である。15世紀前半のものと思われる。6は備前の播鉢である。8条1単位の条線が口縁直下まで施される。15世紀後半～16世紀初頭のものと思われる。

K2SD203(K2-61 図)

時期；中世 **主軸方向**；N-11°-E

規模；約30m×0.4m

埋土；灰褐色シルト

接続；K3-SD301、302

出土遺物；なし

所見；調査区西端に位置し、南北方向に縦断する。西側を調査区西側の水路擁壁に壊され正確な規模は不明であるため、遺構配置図(K2-61 図)に位置のみ示した。調査区内で南北端を検出することができなかったが、K3SD301・302と接続すると思われる。埋土中に多量の河原石が投げ込まれるが、遺物がほとんど出土しなかった。

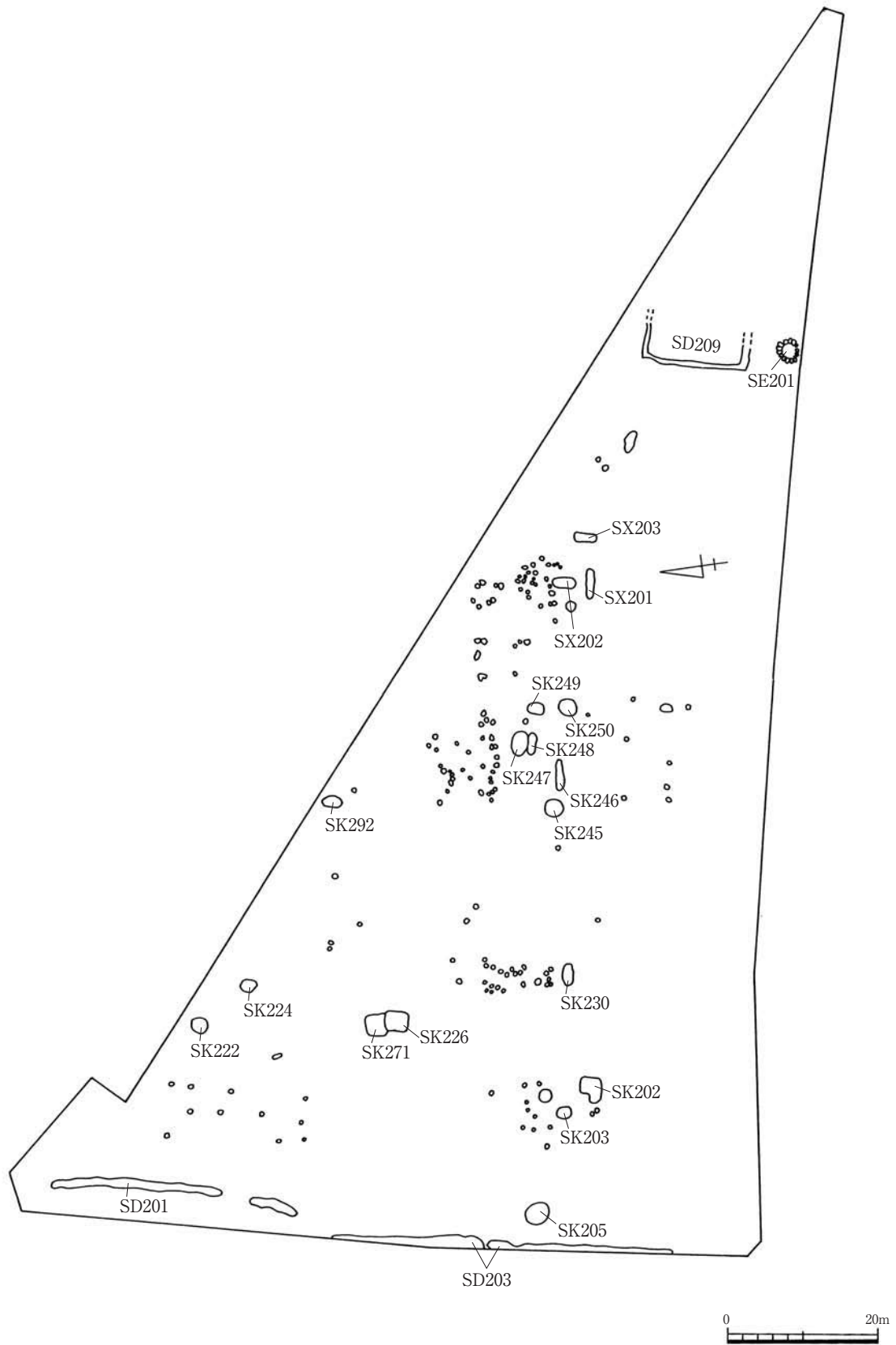
K2SE201(K2-62 図)

時期；中世

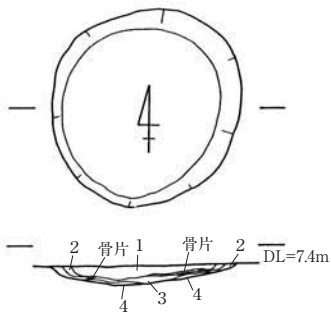
規模；直径1.0m 深さ；2.34m

出土遺物；青磁碗1、五輪塔1

所見；調査区東部南に位置し、ST225を切る。北側に区画溝SD209があり、屋敷に付属する井戸と思われる。掘方は直径約2mの隅丸形状を呈する。出土した五輪塔は空輪部分と風輪部分が一石で造られたものである。その他の出土遺物は土師質土器などの細片が多く青磁碗底部片1点を図示した(K2-62 図3)。高台内側途中まで透明感がある釉がかかり、貫入が入る。見込みにスタンプ文が施される。15世紀末の龍泉窯系の碗である。

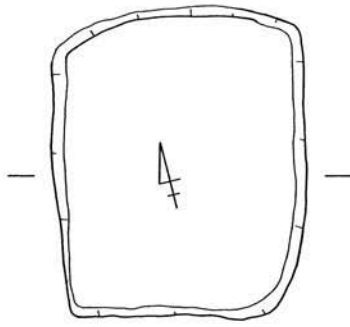


K2-61 図 K2 区中世遺構配置図



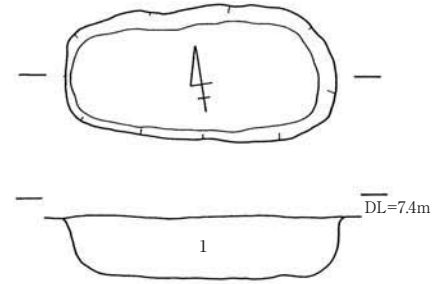
- 1 灰褐色シルト (暗褐色ブロック混じる)
- 2 赤橙色粘質土
- 3 炭化物層 (1層との間に骨片が層状に堆積する)
- 4 赤褐色シルト (地山が被熱したもの)

K2SK222



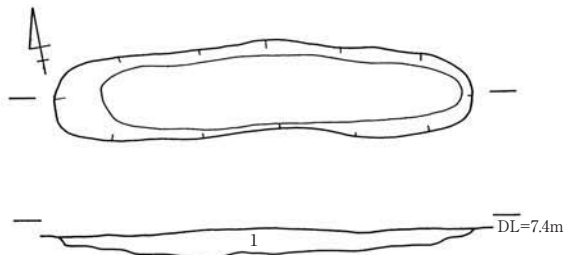
- 1 黄灰色シルト (酸化した鉄分を多く含む)

K2SK226



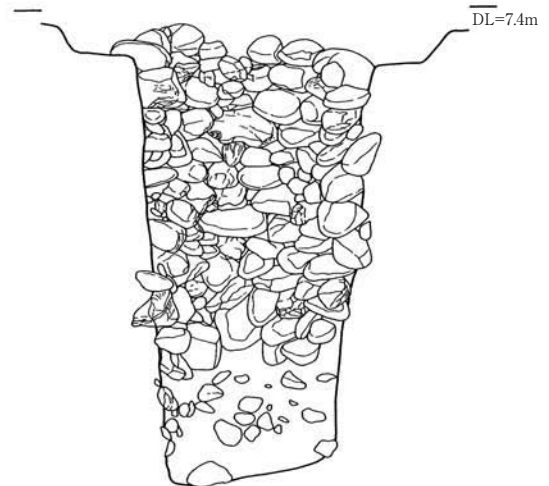
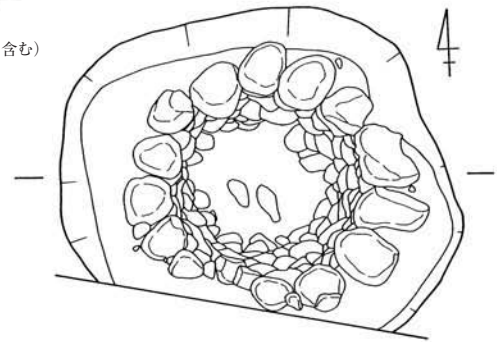
- 1 灰色シルト (鉄分を多く含む、暗褐色ブロック混じる)

K2SK230

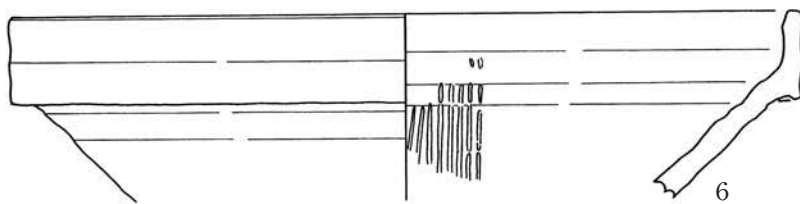
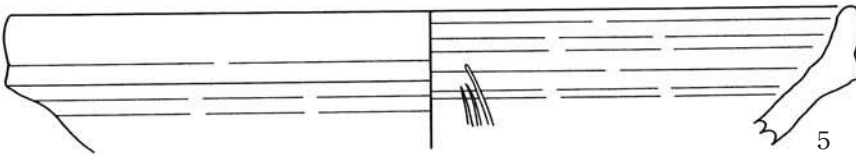
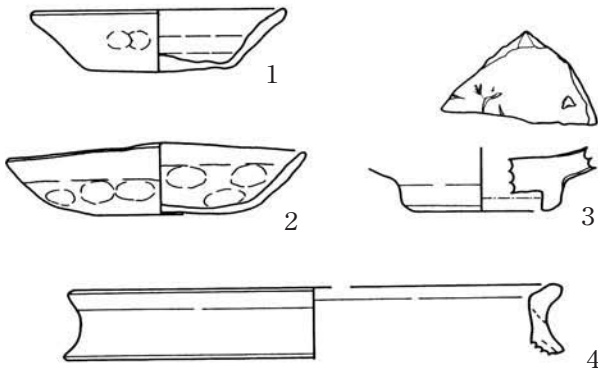


- 1 黄灰色シルト

K2SK246



K2SE201



K2-62 図 K2SK222・226・230・246・SE201(1, 6 SK246・2 SK222・3 SE201・4 SK230・5 SK226)

4. K4 区の概要

K4 区は小規模な調査区であるので、隣接するK2 区の章で記述した。

概要

今次調査の中で西側部分に位置し、K2 区とP1 区の間の南北用水路部分及び、K2 区とL2 区間の道路部分とのL字型の調査区である。調査区全体に削平を受け、用水路下面は著しくグライ化しており、遺構の残存状態は非常に悪い。

調査区北端で検出されたK4ST401 はK2 区で検出された竪穴住居跡の西側部分であるためK2ST203(K2-3 図)で記述した。調査区南の道路部分で検出されたK4ST402 は南半分が検出されたL2 区のL2ST204 で記述した。土坑は6 基検出され、そのうち、方形プランのK4SK402、溝状土坑と思われるK4SK403 が比較的残存状態がよいが、遺物は少ない。調査区南部の道路部分で検出されたK4SK401 は小型の住居跡の可能性もあるが、近世土坑に壊され、北側のK2 区側では該当する遺構が検出されていないため、平面プランの復元は困難である。調査区北端部のK4SK406 は残存状態が悪く、K4ST401 との切り合い関係も不明である。

出土したわずかな遺物も細片が多く、時期を確定し難い。K4SK402 から出土した遺物は弥生中期末から後期初頭のものと思われ、本調査区内で検出された遺構はいずれも中期末から後期初頭のものと思われる。

調査担当 坂本憲昭

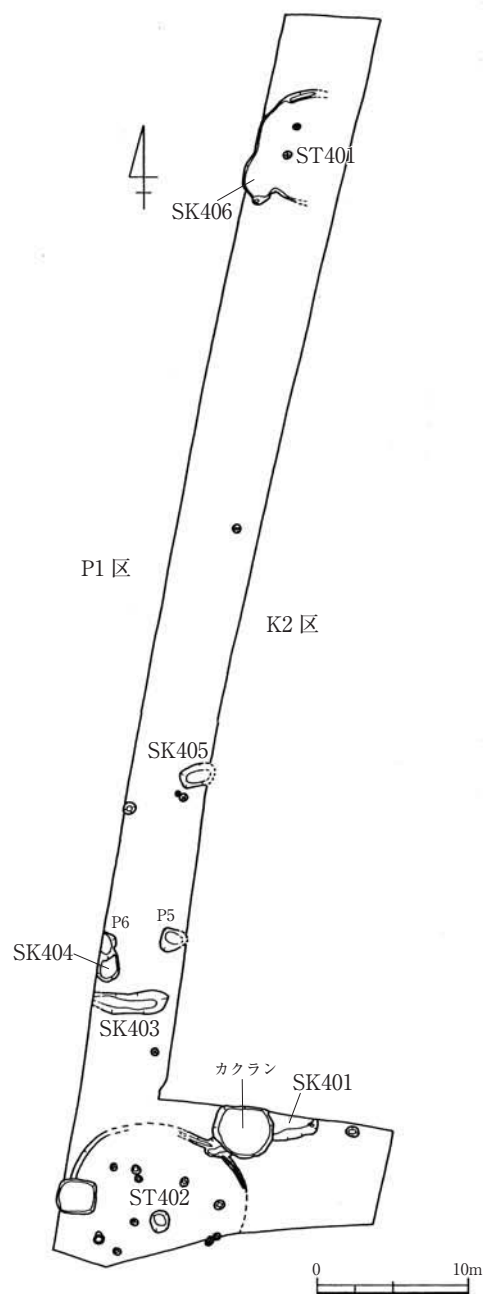
執筆担当者 坂本裕一

調査期間 平成 12 年 10 月

調査面積 148m²

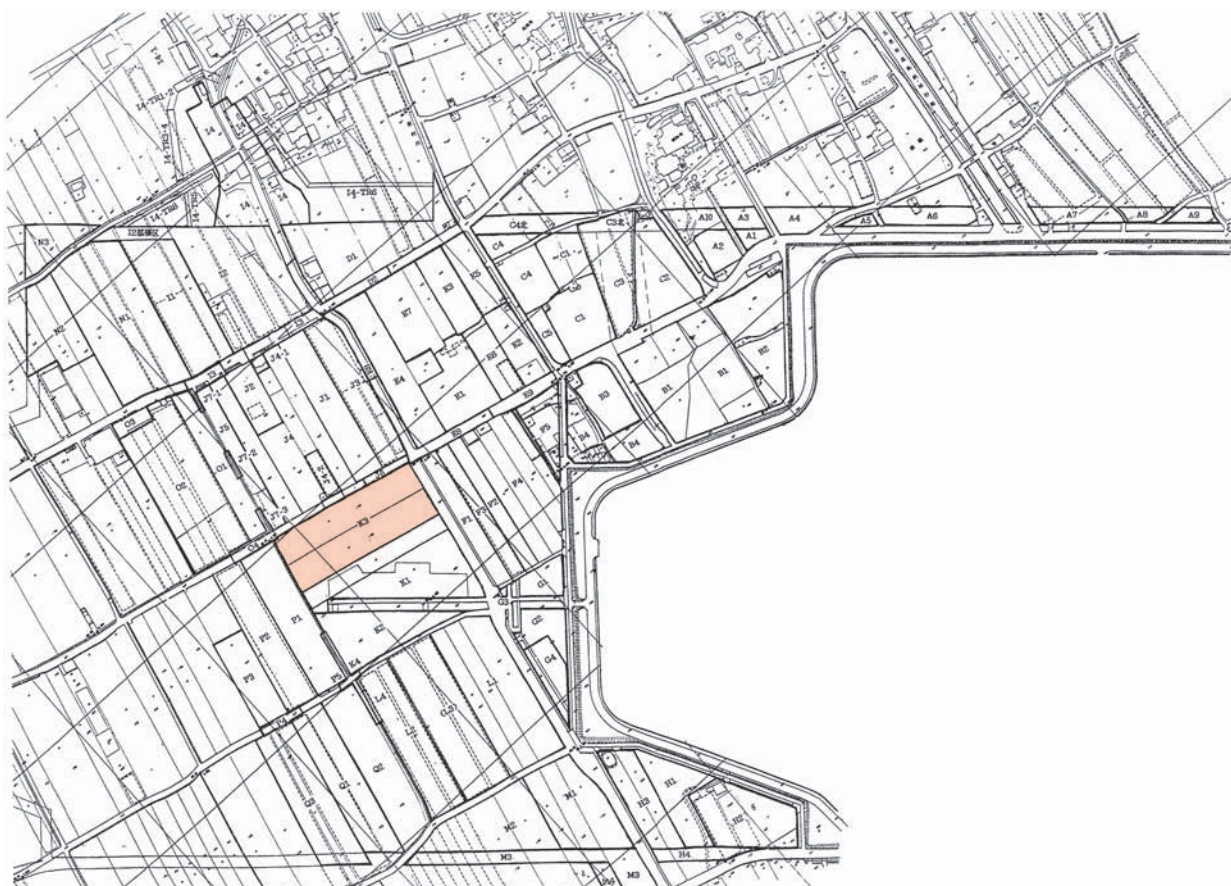
時代 弥生時代中期～後期

検出遺構 本調査区での検出遺構は、弥生時代竪穴住居跡 2 軒、土坑 6 基、ピット 18 個である。



K2-63 図 K4 区遺構全体配置図

K3 区の調査





K3-1図 K3区遺構全体配置図(S=1/250)

1. K3 区の概要

概要

今次調査の中で西側部分に位置し、弥生時代中・後期の竪穴住居跡 13 軒を検出している。住居跡は調査区のやや東側部分に片寄る傾向がある。東端部分で検出された住居跡の 3 軒は大型住居跡である。大溝は 2 条検出しており、調査区中央部を SD301 (大溝 5) が縦走する。K1SD102 (大溝 4) が K1 区に入った後、鉤状に屈曲し、再び調査区の東側で検出され、SD301 と調査区東端で並走し、東側の調査区 F 区へと続いている。大溝以外に SD301 に並走して SD305 が検出されている。掘立柱建物跡は 30 棟確認されており、竪穴住居跡以上に多い数である。規模的には小型のものが多く、棟方向は東西を向くものが大多数である。土坑は特徴的なものは検出されていない。

古代としては調査区西端で SD302・303 を検出しており、小礫を敷き詰めたような形で確認されている。条里関係か道状遺構に関する遺構の可能性はある。

中世としてはピットを検出している。

調査担当者 前田光雄、田坂京子

執筆担当者 前田光雄、久家隆芳

調査期間 平成 10 年 5 月 26 日～平成 10 年 11 月 16 日

調査面積 4,290m²

時代 弥生時代中期～後期、古代、中世

検出遺構 弥生時代竪穴住居跡 13 軒、掘立柱建物跡 30 棟、土坑 9 基、溝 7 条、性格不明遺構 1 基、古代溝 2 条、弥生・中世ピット 480 基。

2. K3 区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

K3 区では竪穴住居跡は 13 軒検出している。住居跡の配置は大きく分けてSD301 の北側部分、南側部分に分けることができる。また、南側に位置するものはSD102 との間に挟まれており、調査区の中央部に纏まりを見せる。SD301 の北側部分に展開する住居跡は中央部に散漫に検出されるものと、東側部分にやや纏まって検出されている。これらの住居跡は径 9m程の大型住居跡が 3 軒認められている。平面形プランは長方形のものがST313 以外は全て円形のものである。円形のもので、東側部分に展開するものは大型のものが多く、特にST310 は数度の建て替え・拡張が認められている。切り合い関係は 4 例認められており、小型のものが切られる傾向にある。付帯施設として中央ピット(炉跡)、周溝がほとんどの住居跡で検出されている。またST304 のピット中から粘土塊が出土しており、粘土の貯蔵穴の可能性のある住居跡が検出されている。焼失住居はST308・309・310 で、SD301 より南側に位置する住居跡には認められていない。

K3-1 表 K3 区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(m ²)	平面形	主軸方向	時期	備考
K3ST302	5.20	0.11	20.40	円形	—	弥生後期前葉	
K3ST303	5.20	0.06	21.00	円形	—	弥生後期前葉	
K3ST304	5.80	0.23	26.40	円形	—	弥生後期前葉	
K3ST305	4.10	0.07	13.20	円形	—	弥生後期初頭	
K3ST306	6.80×7.40	0.14	34.20	楕円形	—	弥生後期前葉?	
K3ST307	4.00	0.15	12.60	円形	—	弥生後期?	
K3ST308	3.80×3.40	0.15	11.00	円形	—	弥生後期?	
K3ST309	8.60	0.04	58.00	円形	—	弥生後期初頭	
K3ST310	8.40	0.15	55.40	円形	—	弥生後期前葉	
K3ST311	4.60	0.10	16.70	円形	—	弥生中期末から後期初頭	
K3ST312	9.40	0.15	69.40	円形	—	弥生後期初頭?	
K3ST313	4.50×3.10	0.10	14.00	長方形	N-90°-E	弥生後期?	

K3ST302(K3-2・3 図)

時期：弥生後期前葉 形状：円形 主軸方向：—

規模：5.2m 深さ：0.11m 面積：20.4m²

埋土：暗褐色粘質土主体

ピット：数 8 主柱穴数：4 主柱穴：P2～5

床面：1 面 貼床：無し 焼失：無し

中央ピット：形状 楕円形 規模 75×55cm 深さ 17cm 埋土 暗褐色粘質土

壁溝：数 1 幅 20cm 深さ 3cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕、高杯)、打製石包丁、ガラス小玉

所見：調査区の中央部のSD301より南側に位置し、ST303とSD305を切って構築されている。径5.2m

の円形の住居跡である。中央部には径 72cm の楕円形の炉跡、壁際には部分的に壁溝が巡る。また、ST303 の方にも ST302 の壁溝と考えられるものを検出している。柱穴は 8 基確認しているものの、内 4 基が支柱穴になるものと考えられる。P6・7 は ST303 の支柱穴と考えられる。

1～3 は壺である。1 は長頸壺であり、外面はハケ調整である。2 は広口壺である。短い頸部から口縁部が大きく外反する。頸部に竹管文を巡らせる。5～7 は甕である。5 の口縁部は「く」の字状を呈し、口唇部を強いヨコナデにより僅かに拡張する。6 は吉備系の甕である。頸部は屈曲し、口縁部は直立する。口唇部は丸くおさめる。7 は底部である。外面は叩き後、ナデ調整を施す。底部付近には叩き目が残存する。8・9 は高杯である。8 の脚部には円孔を穿つ。円盤充填である。9 の脚部は「ハ」の字状を呈し、端部は丸くおさめる。円盤充填であり、接合部に粘土を貼り付け、補強する。10 は打製石包丁である。長方形を呈し、両端に抉りを有する。自然面・剥離面を大きく残す。刃部は片刃である。

K3ST303 (K3-2・4 図)

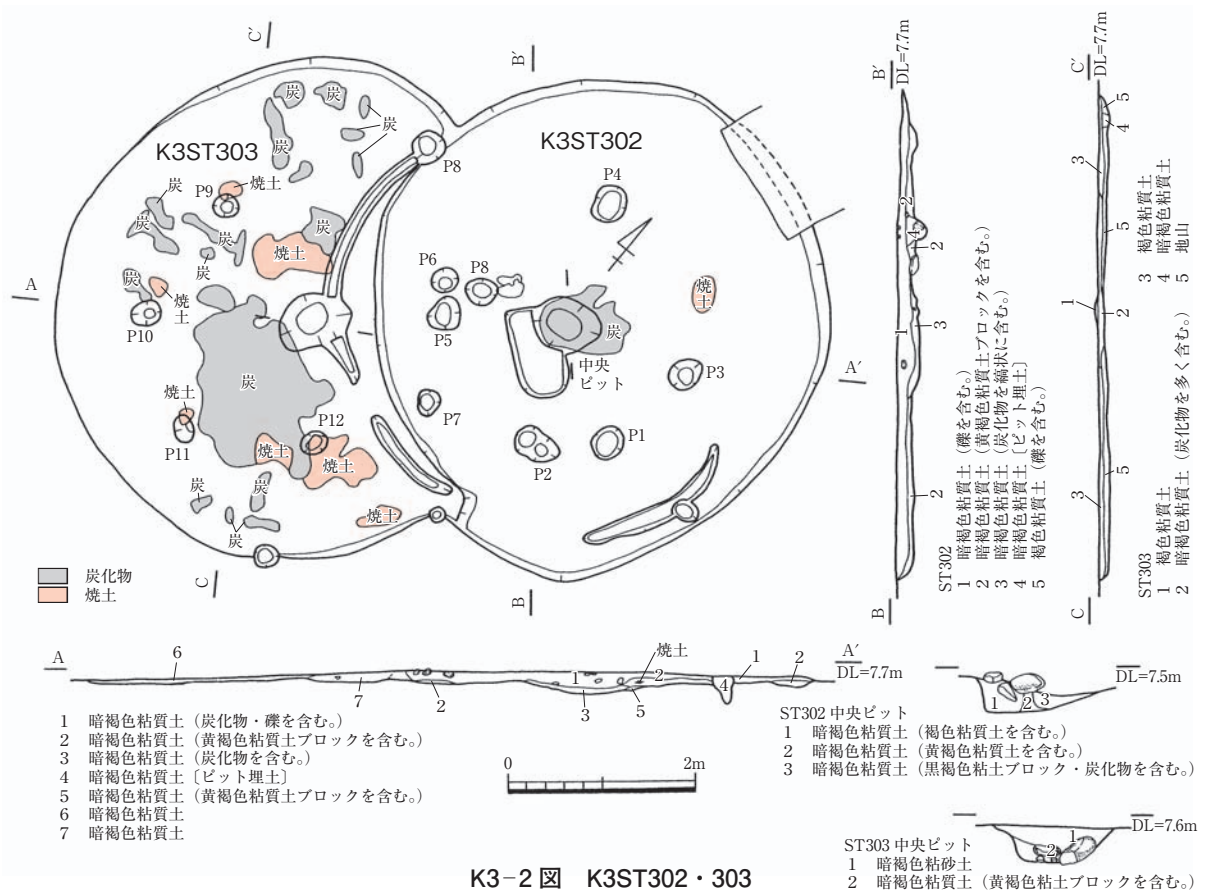
時期：弥生後期前葉 形状：円形 主軸方向：—

規模：5.2m 深さ：0.06m 面積：21m²

埋土：暗褐色粘質土主体

ピット：数 7 支柱穴数：6 支柱穴：P6・7・9～12

床面：1 面 貼床：無し 焼失：無し



K3-2 図 K3ST302・303

中央ピット；形状 円形 規模 55cm 深さ 19cm 埋土 暗褐色粘砂土、底面に礫

壁溝；無し

出土遺物；弥生土器(壺、鉢)

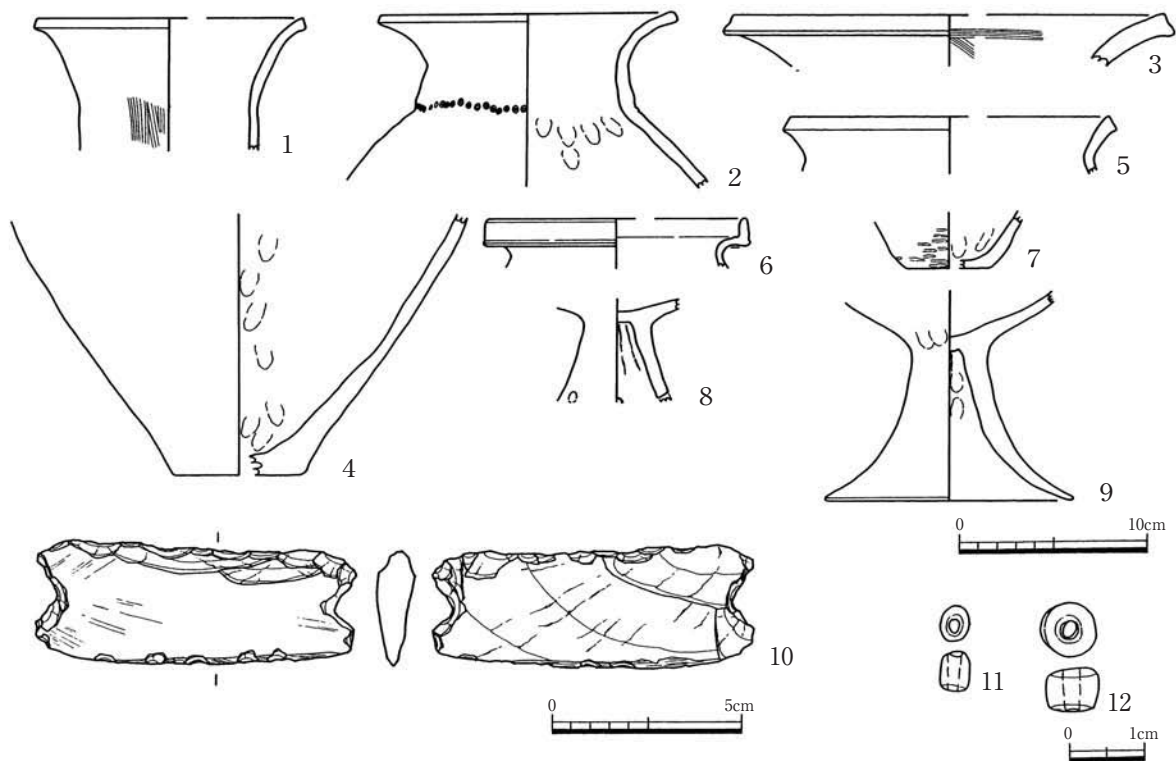
所見；調査区中央部のSD301より南側に位置し、ST302に切られる。浅いために明確にプランは確認しづらいものの、径5.2mの円形の住居跡である。中央部には径55cmの円形の炉跡があり、柱穴は4基検出しているものの、ST302内の2基も本住居跡の主柱穴になり、6本柱と考えられる。

1は甕である。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部はヨコナデ調整により拡張する。2は鉢である。体部はやや突出気味の底部から外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。

K3ST304(K3-5 図)

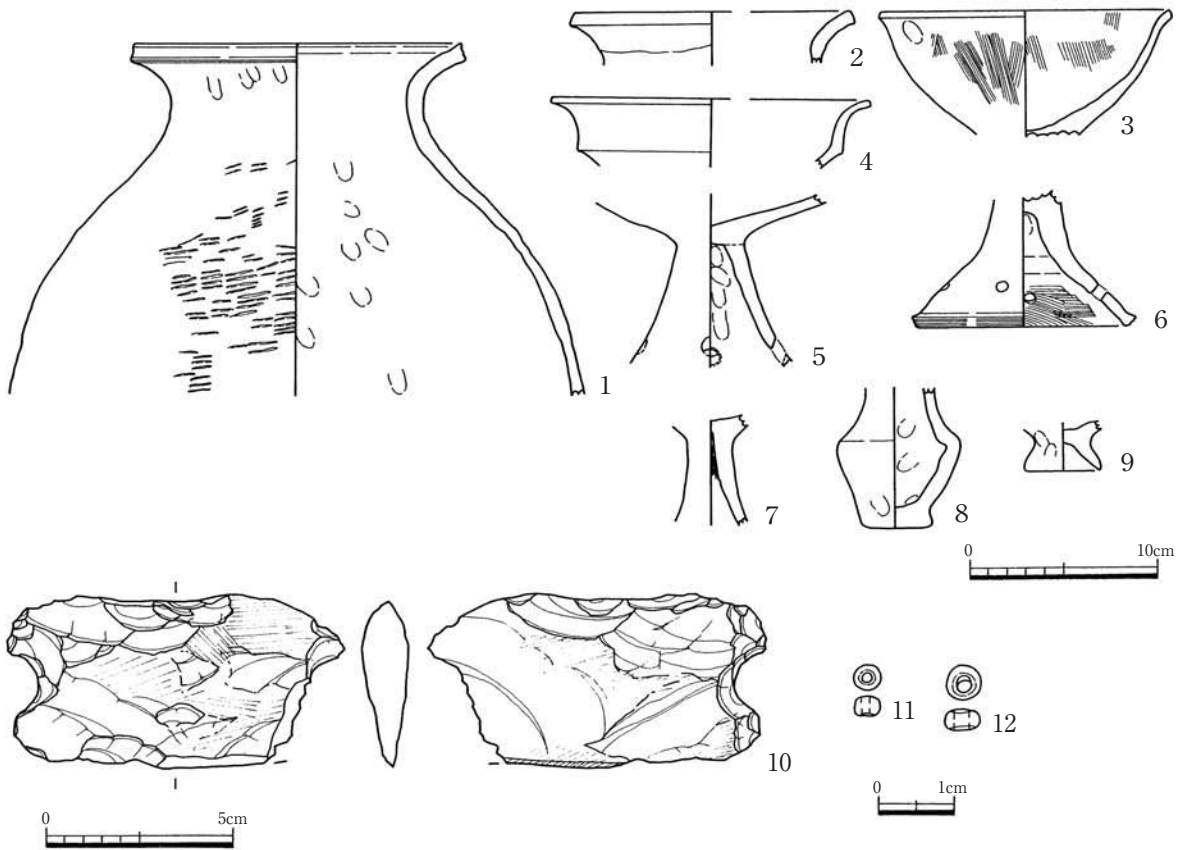
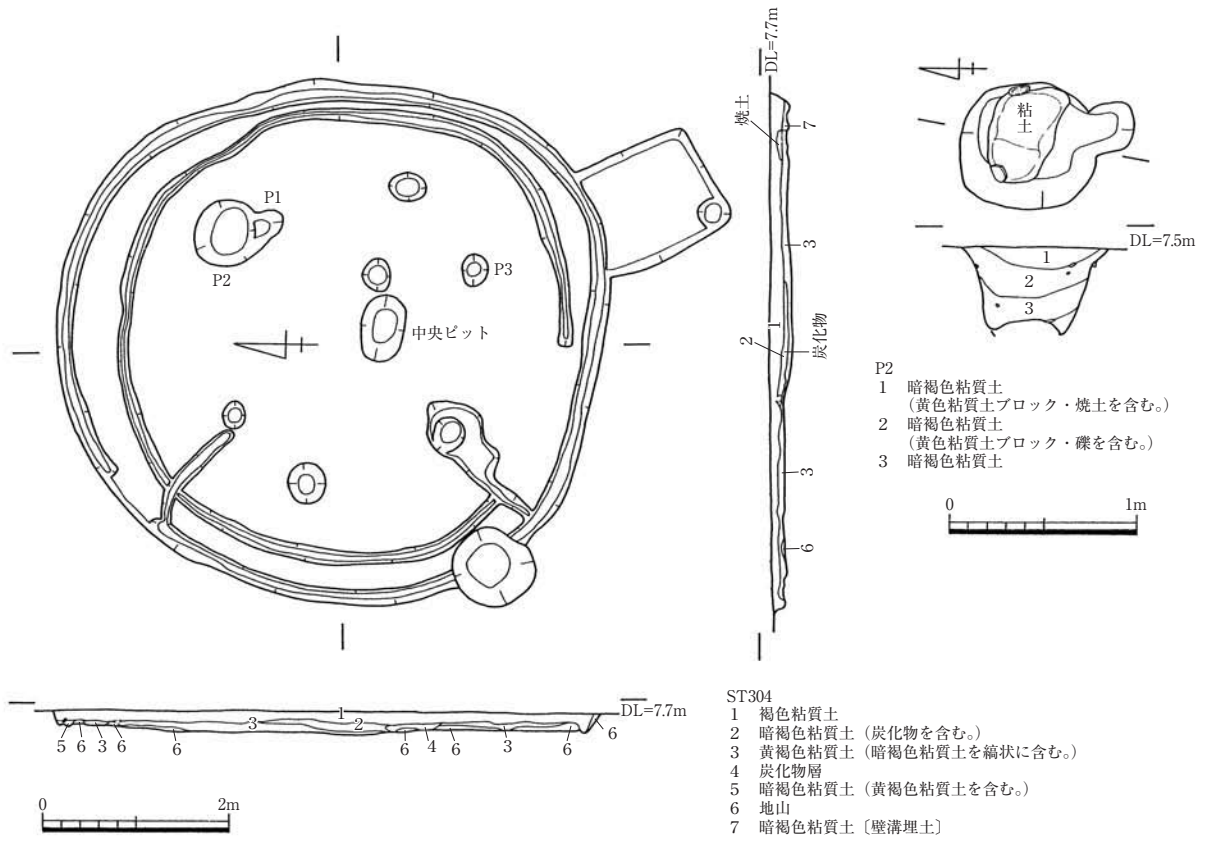
時期；弥生後期前葉 形状；円形 主軸方向；—

規模；5.8m 深さ；0.23m 面積；26.4㎡



K3-3 図 K3ST302

K3-4 図 K3ST303



K3-5 区 K3ST304

埋土：褐色粘質土主体

ピット：数7 主柱穴数：4 主柱穴：P1～5

床面：1面 貼床：無し 焼失：無し

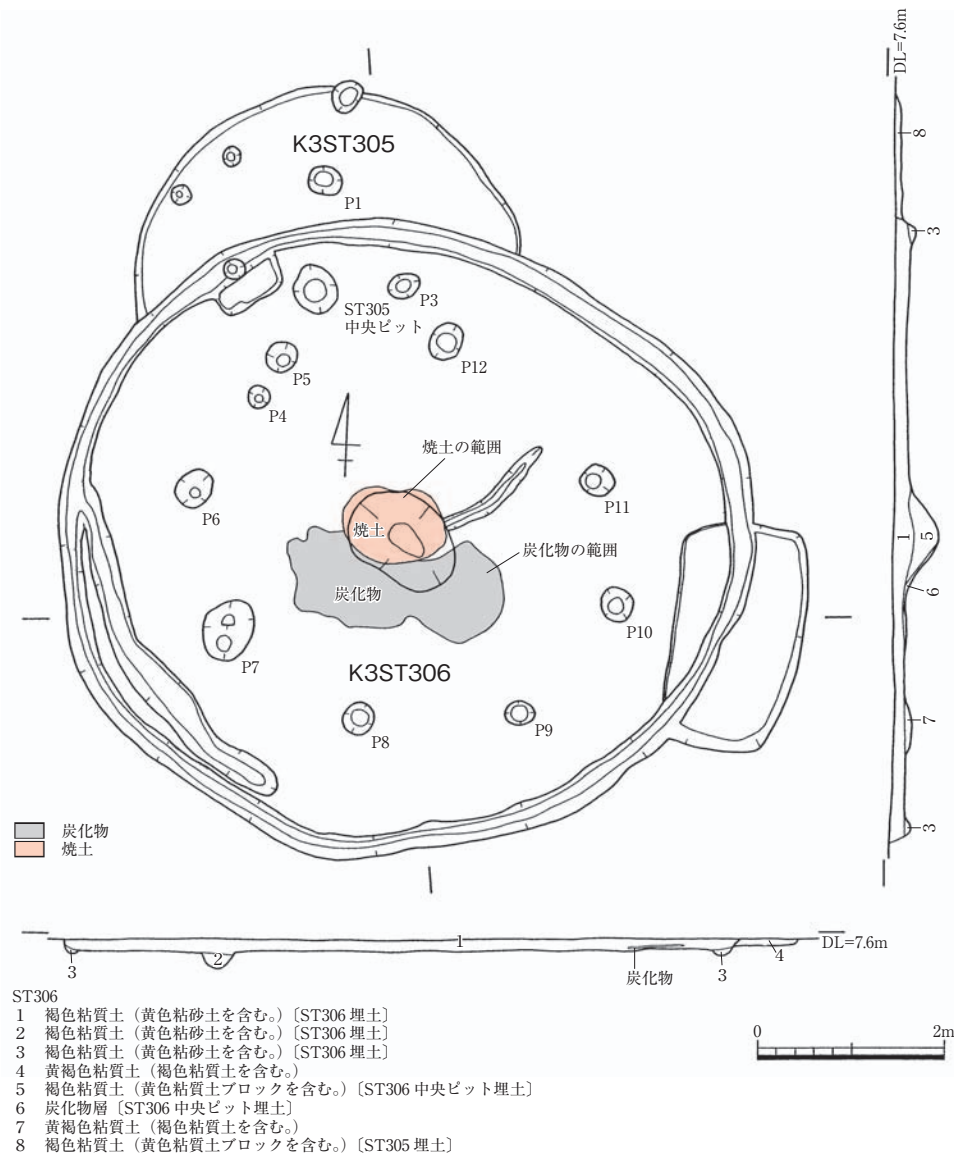
中央ピット：形状 楕円形 規模 70×45cm 深さ 21cm 埋土 —

壁溝：数2 壁溝1：幅 15cm 深さ 4cm、壁溝2：幅 15cm 深さ 4cm

出土遺物：弥生土器(壺、鉢、高杯)、ミニチュア土器、打製石包丁、ガラス小玉

所見：調査区中央南端に位置する。ST305・306が隣接する。径5.8mの中型の円形の住居跡である。楕円形の炉跡が中央部に位置し、主柱穴は4本である。壁溝は壁際と壁からやや離れて2条存在する。内側の壁溝2は南側部分で途切れる。P2からは粘土塊が出土している。

1は広口壺である。僅かに口唇部を拡張し、退化した凹線文を2条施す。肩部から体部にかけてはタタキ成形であり、タタキ後肩部は比較的丁寧なナデ調整を施すが、体部は軽くナデる程度であ



K3-6 図 K3ST305・306

る。2は甕である。口縁部に粘土帯を貼付し、口唇部はヨコナデ調整により平坦面を成す。3は鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。内外面ともハケ調整である。4～7は高杯である。4は鋭い稜を持ち、屈曲して外反する。6の脚部は丸みを持ち、ひろがる。端部を拡張し、退化した凹線文を2条施す。また、脚部には2孔1対の円孔を3方向に穿つ。8はミニチュア土器である。突出した底部から体部は直線的に外上方にのび、頸部は屈曲してのびる。内外面ともナデ調整である。10は打製石包丁である。両端部に抉りを有する。自然面を大きく残す。刃部は片刃である。

K3ST305(K3-6・7図)

時期；弥生後期初頭 形状；円形 主軸方向；—

規模；4.1m 深さ；0.07m 面積；13.2㎡

埋土；褐色粘質土主体

ピット；数4 主柱穴数；4？ 主柱穴；P1・2・(P3・4)

床面；1面 貼床；無し 焼失；無し

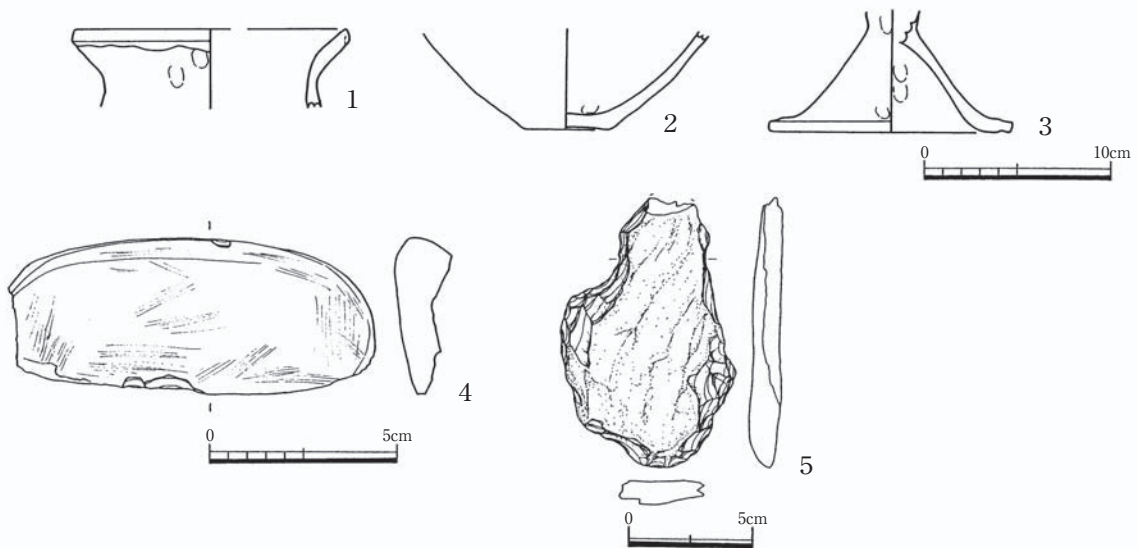
中央ピット；形状 円形 規模 55cm 深さ 18cm 埋土 褐色粘質土、炭化物を多量に含む

壁溝；無し

出土遺物；弥生土器(壺)



K3-7図 K3ST305



K3-8図 K3ST306

所見：調査区中央部南側に位置し、ST306 に半分以上が切られる。径約 4m のやや小型の円形の住居跡である。ST306 よりも浅く、床面の比高差は 10cm 余りである。本住居内で柱穴は大小合わせて 4 基確認しているものの、支柱穴と考えられるものは P1 のみで、他は ST306 内で検出した P2・3 と考えられ、また P4 も可能性が強い。中央ピットも ST306 内の床面で確認しており、炭化物が多量に出土している。壁溝は検出されていない。

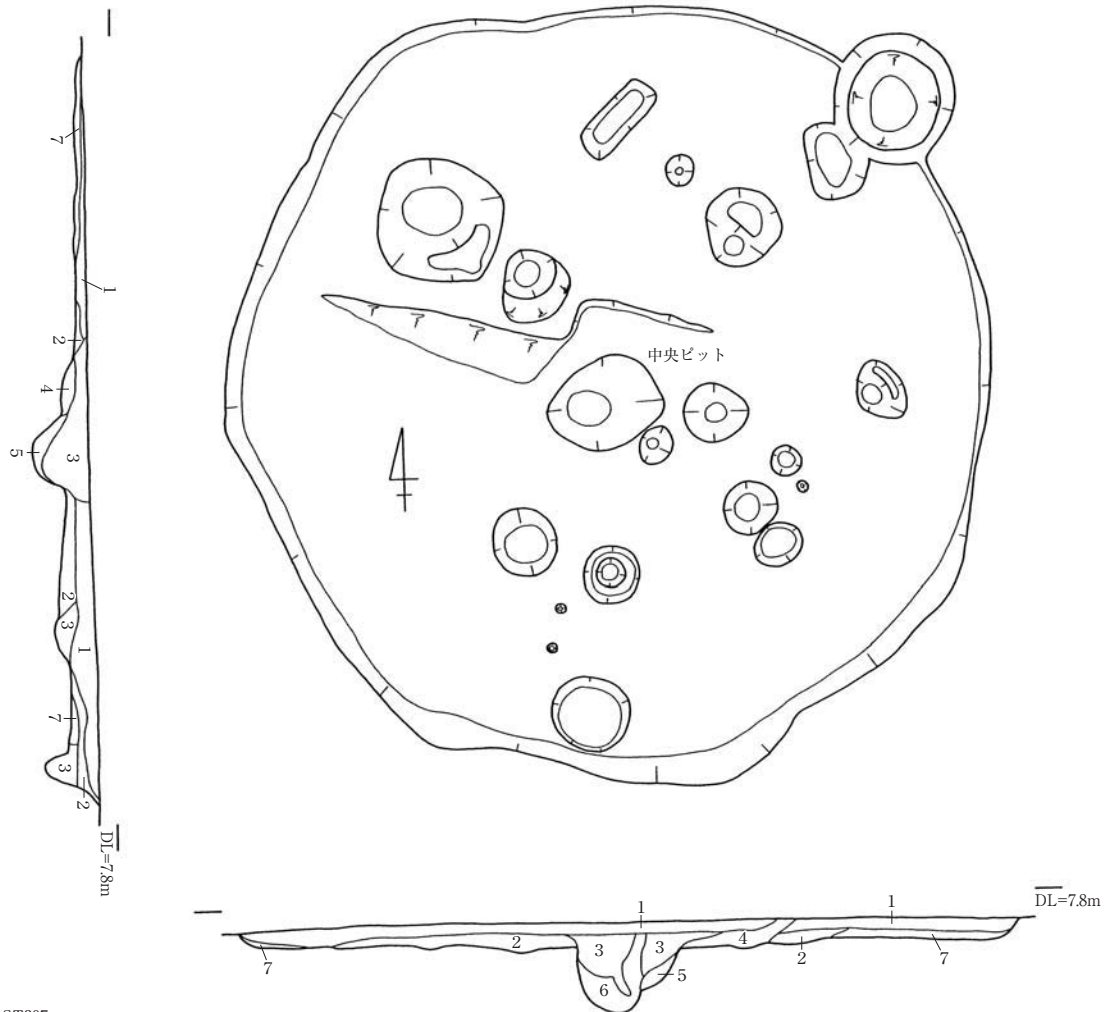
1・2 は壺である。1 は口唇部を下方に拡張し、2 条の凹線文を施す。2 は口縁端部付近で大きくひろがる。

K3ST306 (K3-6・8 図)

時期：弥生後期前葉？ 形状：楕円形 主軸方向：—

規模：6.8×7.4m 深さ：0.14m 面積：34.2㎡

埋土：褐色粘質土主体



- ST307
- 1 黄褐色粘質土 (淡黄色粘質土ブロックを含む。)
 - 2 暗褐色粘質土 (黒褐色粘質土ブロック・淡黄褐色粘質土ブロックを縞状に含む。)
 - 3 暗褐色粘質土
 - 4 褐色粘質土 (淡黄褐色粘質土ブロックを含む。)
 - 5 黒褐色粘質土
 - 6 暗褐色粘質土 (淡黄色粘質土ブロックを含む。)
 - 7 地山

K3-9 図 K3ST307



ピット；数 11 主柱穴数；8 主柱穴；P5～12

床面；1面 貼床；無し 焼失；無し

中央ピット；形状 楕円形 規模 120×90cm 深さ 40cm 埋土 暗褐色粘質土、底面に炭化物

壁溝；数 2 壁溝 1；幅 30cm 深さ 10cm、壁溝 2；幅 35cm 深さ 15cm

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見；調査区中央部南端に位置し、ST305 を切る。やや楕円形の径 7.4m の大型の住居跡である。主柱穴は 8 本と考えられ、住居跡全周にほぼ均等に柱穴が配され、中央部には炉跡が位置する。東側部分の長方形の土坑も切る。

1・2 は壺である。1 の口縁部は短く外反し、僅かに粘土帯を貼付する。また、口唇部は尖らせる。2 の体部は平底から外上方へのびる。内外面ともナデ調整である。3 は蓋である。体部は「ハ」の字状を呈し、口縁部は端部付近で水平に大きくひろがる。

K3ST307(K3-9 図)

時期；弥生後期？ 形状；円形 主軸方向；—

規模；径 4m 深さ；0.15m 面積；12.6㎡

埋土；暗褐色粘質土主体

ピット；数 15 主柱穴数；不明 主柱穴；不明

床面；1面 貼床；無し 焼失；無し

中央ピット；形状 楕円形 規模 60×50cm 深さ 35cm 埋土 暗褐色粘質土、淡黄褐色ブロックを含む。

壁溝；—

所見；調査区南端のやや東寄りに位置する。径 4m の円形の小型の住居跡で平面形プランはやや乱れる。中央部で炉跡を検出しているものの、主柱穴は判然としない。小ピットと中ピットを 15 基確認しているものの、浅いものが多く、配置も不規則であるため主柱穴は特定できない。また壁溝は検出できていない。

K3ST308(K3-10・11 図)

時期；弥生後期？ 形状；円形 主軸方向；—

規模；3.8×3.4m 深さ；0.15m 面積；11㎡

埋土；暗褐色粘質土主体、礫を多く含む。下層には炭化物、焼土を含む。

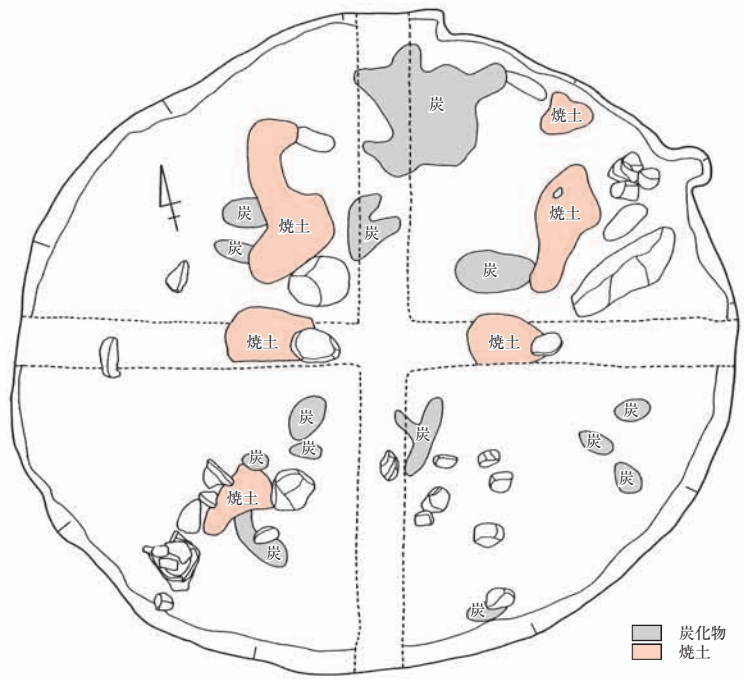
ピット；数 7 主柱穴数；3 以上？ 主柱穴；P1～3

床面；1面 貼床；無し 焼失；有り

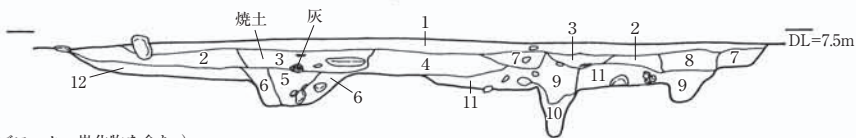
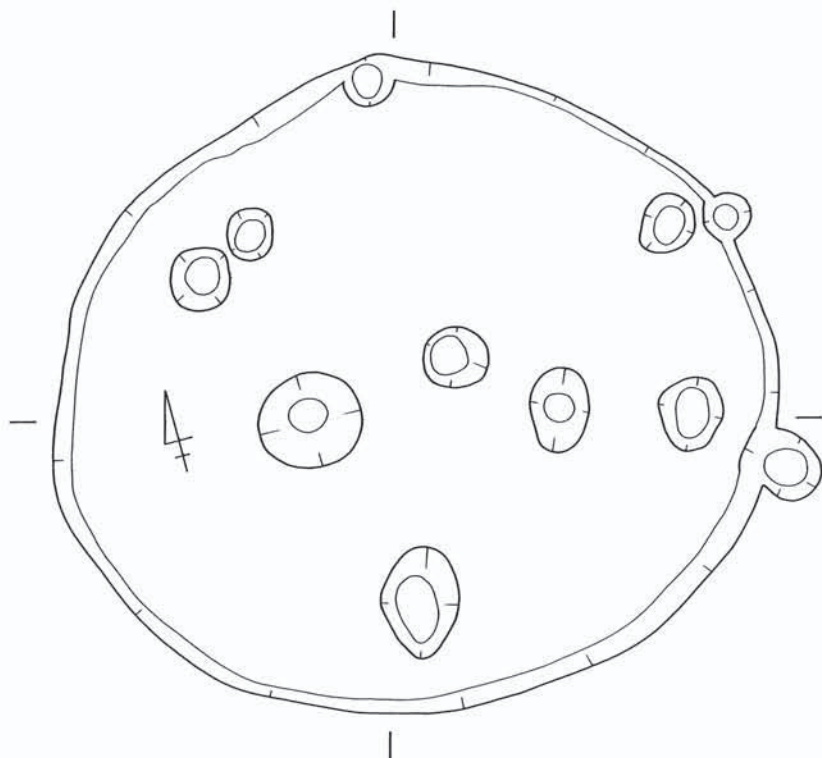
中央ピット；形状 円形 規模 55cm 深さ 26cm 埋土 暗褐色粘質土、上層に焼土、炭化物を多く含む。

壁溝；—

出土遺物；弥生土器(壺)



炭化物
焼土



ST308

- 1 黄褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 焼土层 (暗褐色粘質土ブロック・炭化物を含む。)
- 4 暗黒褐色粘質土 (礫を含む。)
- 5 黒褐色粘質土
- 6 褐色粘質土 (礫を含む。)
- 7 焼土层
- 8 暗褐色粘質土 (礫を含む。)
- 9 黒褐色粘質土
- 10 暗褐色粘質土
- 11 褐色粘質土 (礫を多く含む。)
- 12 地山

K3-10 図 K3ST308(1)



所見；大溝SD301 より北側の調査区中央部に位置する。径 3.8m の小型の住居跡で、礫層の上に構築されている。また住居内からも大型の礫が 4 点程出土しており、下層には炭化物が出ており、焼失の可能性がある。中央よりやや西側部分に炉跡を検出している。支柱穴は 3 本以上と考えられ、明確なものは P1 ～ 3 である。壁溝は検出されていない。

1 は広口壺であり、口唇部はヨコナデ調整を施し、凹状を成す。頸部に櫛描文を施す。外面はタテハケ調整であり、内面はナデ調整後、ヨコハケ調整を施す。

K3ST309 (K3-12 図)

時期；弥生後期初頭 形状；円形 主軸方向；—

規模；8.6m 深さ；0.04m 面積；58 m²

埋土；褐灰色粘質土主体、焼土粒を含む。

ピット；数 9 支柱穴数；8 以上 支柱穴；P1 ～ 8

床面；1 面 貼床；無し 焼失；有り

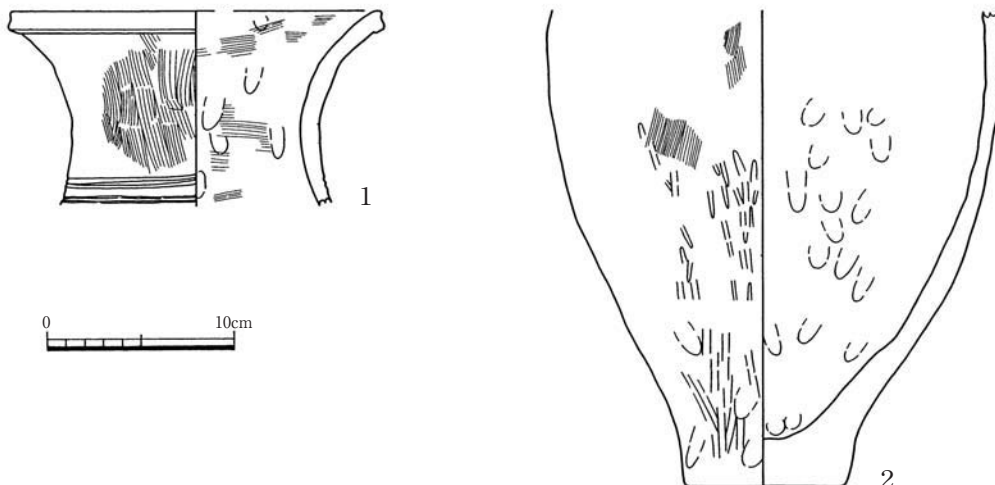
中央ピット；形状 瓢箪 規模 240 × 14cm 深さ 60cm 埋土 褐灰色粘質土、焼土粒を含む。

壁溝；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)、石包丁未製品

所見；調査区北東部に位置する。北側部分は調査区外へと広がる。全体的に上面が削平されており、立ち上がりは明確ではない。部分的に壁が確認されているのみである。しかしながら、焼土、炭化物、ピットの配列からすると径 8.6m の大型の円形の住居跡と考えられる。中央部には底面を 2 ケ所有する瓢箪形の大型の炉跡を検出している。円形の 2 基が切り合うような形で検出しており、セクション図からすると北側部分の浅い方が南側部分に切られたような堆積状況を呈しており、北側部分は土坑の可能性も考えられる。柱穴は 9 基検出しているものの、その内 8 基が支柱穴になるものと考えられる。北側部分に更に広がるため実際の支柱穴の本数は 12 本の可能性がある。壁溝は検出できなかった。焼土、炭化物は床面全体に広がり、焼失住居である。

1 は直口壺であり、口唇部を丸くおさめる。頸部に断面三角形の突帯を貼付する。口縁部内面を



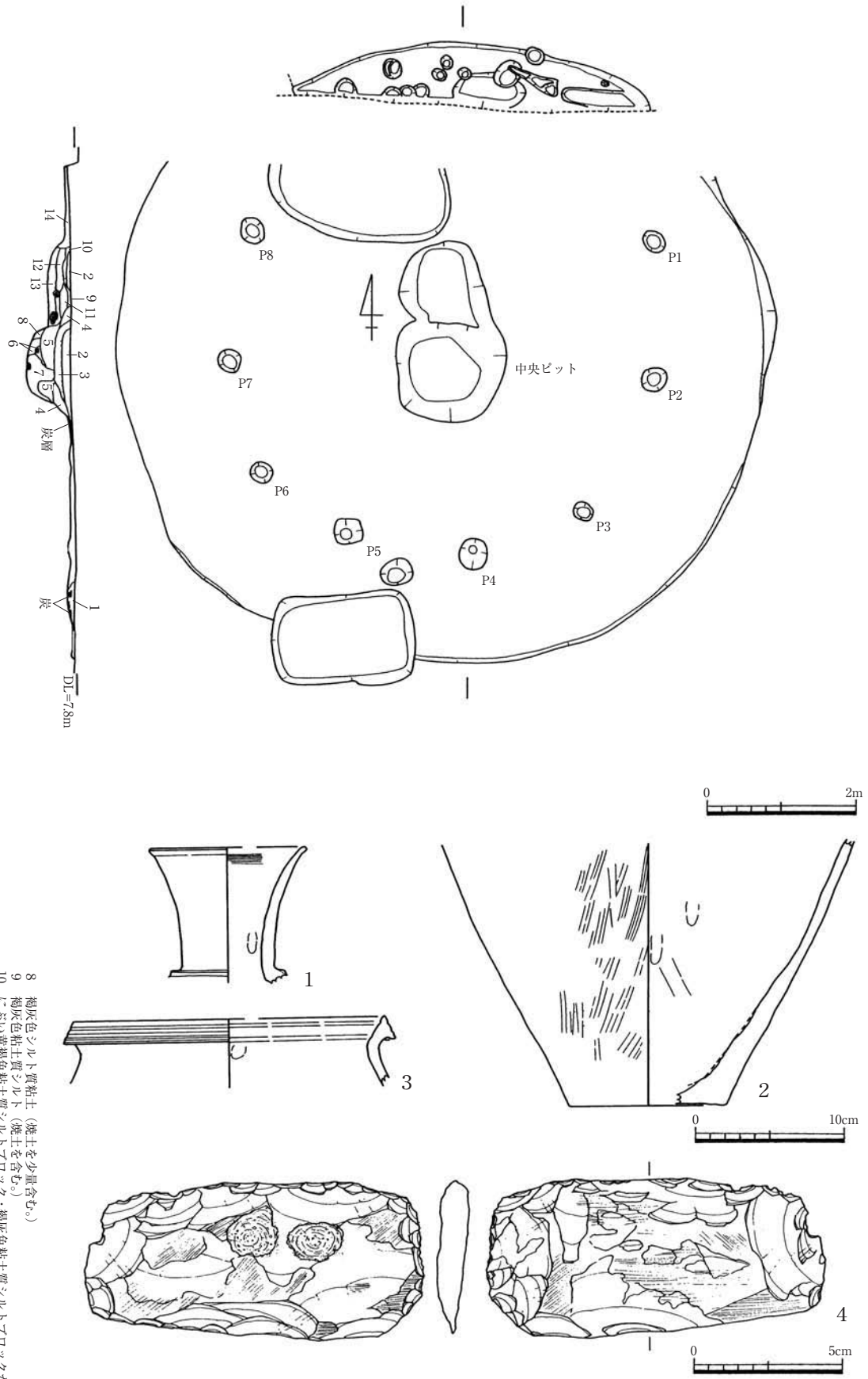
K3-11 図 K3ST308 (2)

ST309

- 1 縄灰色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルト・炭化物・焼土を含む。)
- 2 縄灰色粘土質シルト (焼土を多く含む。)
- 3 縄灰色粘土質シルト (焼土を含む。)

- 4 縄灰色粘土質シルト (に多い黄褐色粘土質シルト・炭化物・焼土を含む。)
- 5 縄灰色粘土質シルト (に多い黄褐色粘土質シルト・炭化物・焼土を多く含む。)
- 6 縄灰色粘土質シルト (に多い黄褐色粘土質シルト・炭化物・焼土を多く含む。)
- 7 縄灰色粘土質シルト (に多い黄褐色粘土質シルト・炭化物・焼土を多く含む。)

- 8 縄灰色シルト質粘土 (焼土を少量含む。)
- 9 縄灰色粘土質シルト (焼土を含む。)
- 10 に多い黄褐色粘土質シルト・炭化物・焼土を含む。
- 11 縄灰色粘土質シルト (に多い黄褐色粘土質シルト・炭化物を含む。)
- 12 縄灰色粘土質シルト (に多い黄褐色粘土質シルトを含む。)
- 13 縄灰色粘土質シルト (に多い黄褐色粘土質シルトを含む。)
- 14 に多い黄褐色粘土質シルト



K3-12 図 K3ST309



K3-13 図 K3ST310(1)

ヨコハケ調整する以外はナデ調整である。3は甕である。口唇部を上下に拡張し、3条の凹線文を施す。内面にも2条の凹線文を施す。

K3ST310(K3-13・14 図)

時期；弥生後期前葉 形状；円形 主軸方向；—

規模；8.4m 深さ；0.15m 面積；55.4㎡

埋土；褐灰色粘質土主体、下層に炭化物、焼土を多く含む。

ピット；数 約 40 主柱穴数；23 主柱穴；P1～9・P10～23

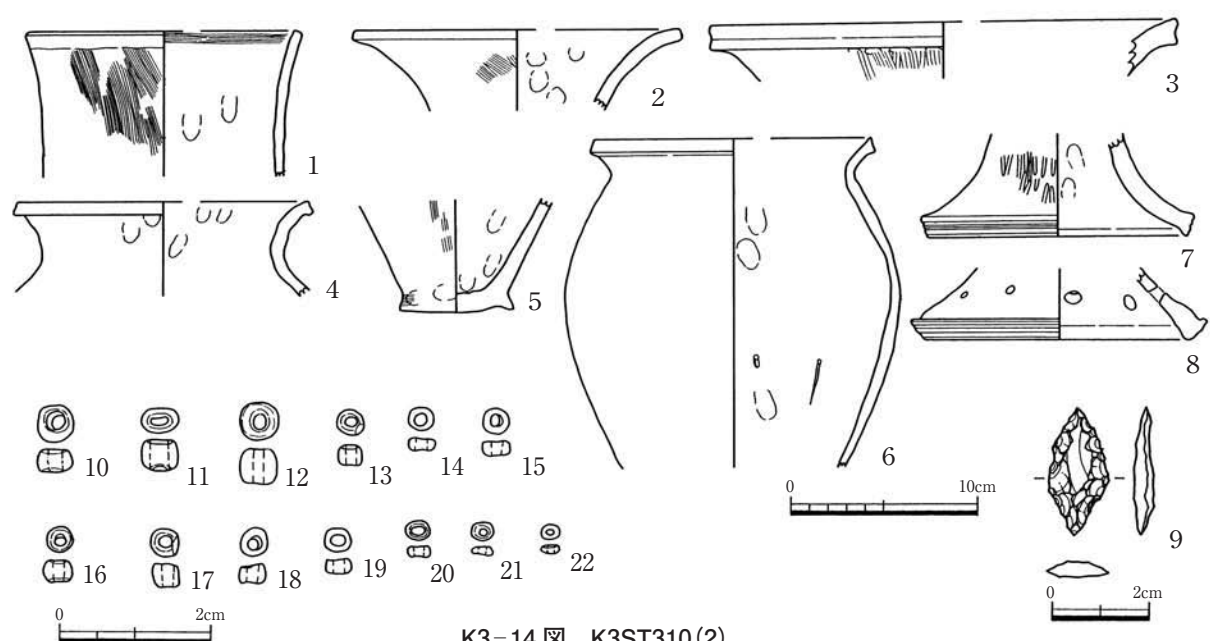
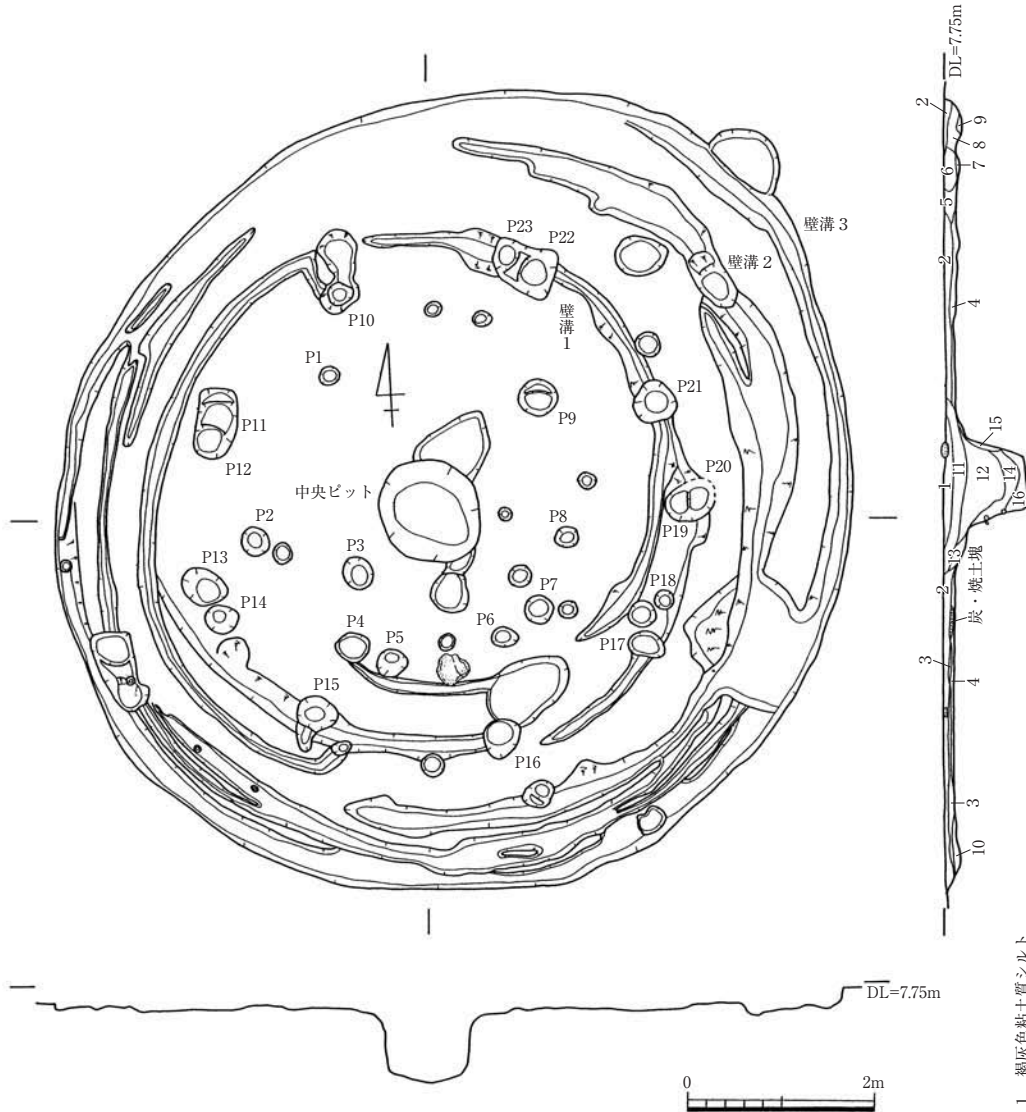
床面；1面 貼床；無し 焼失；有り

中央ピット；形状 円形 規模 110cm 深さ 82cm 埋土 褐灰色粘質土主体、下層に焼土多量。

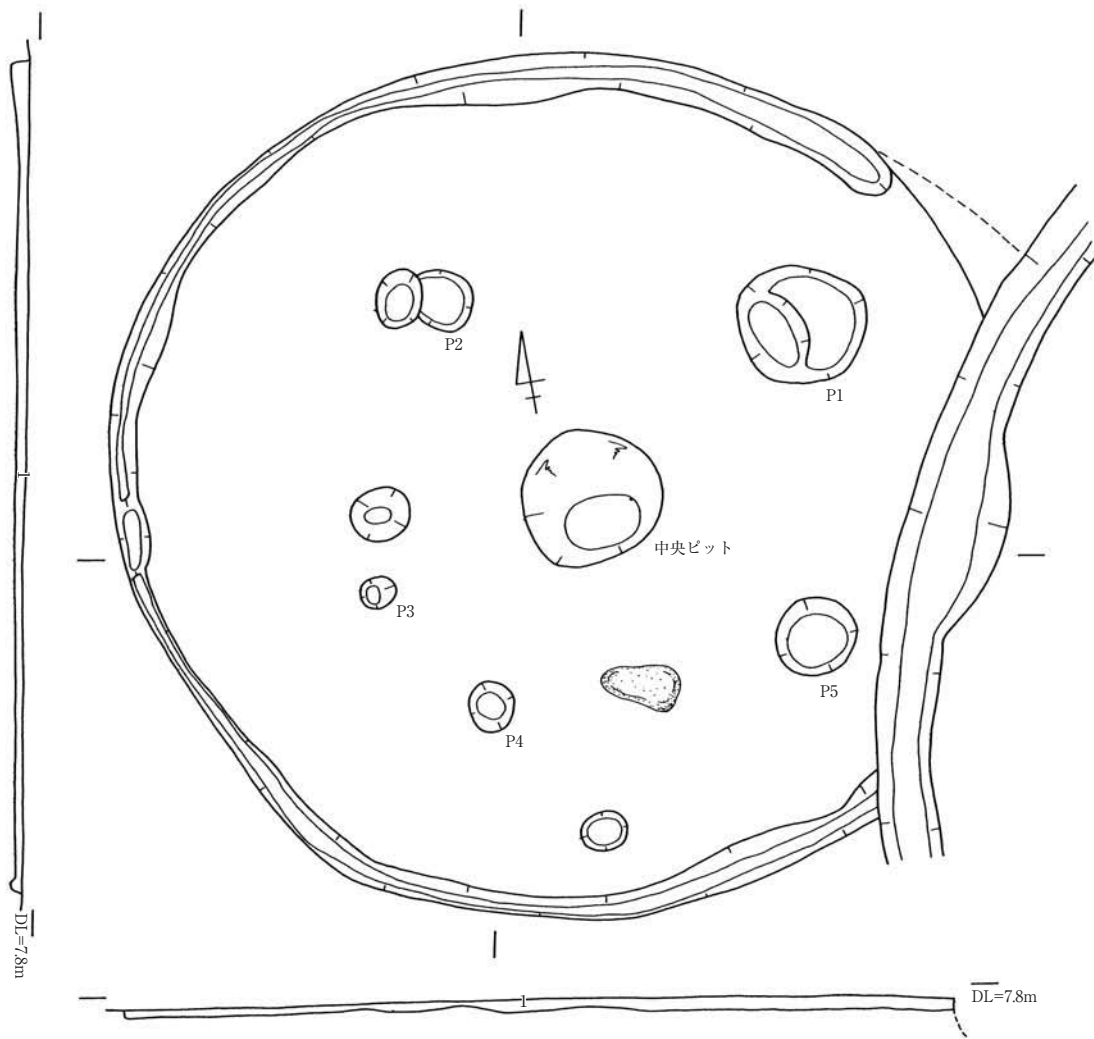
壁溝；数 3以上 壁溝 1；幅 18cm 深さ 5cm、壁溝 2；幅 40cm 深さ 7cm、壁溝 3；幅 20cm 深さ 5cm

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)、打製石鏃、ガラス小玉、鈍

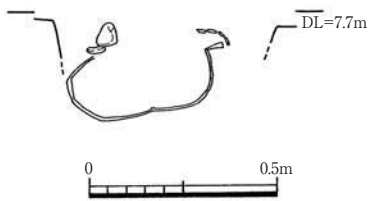
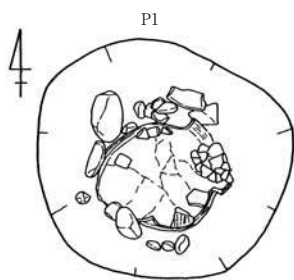
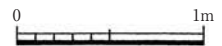
所見；調査区東側部分に位置し、南側にはSD301、また北東側にはST311～313が纏まって検出されている。径8.4mの大型の円形の住居跡で、3回以上の建て替え・拡張が行われている。中央部には径1.1mの大型の炉跡を検出しており、壁溝が3条以上巡る。壁溝1が1次の住居跡に伴うものと考えられ、主柱穴はP1～9が対応する可能性が強い。壁溝2に対応する主柱穴は判然とせず、P10



K3-14 ☒ K3ST310(2)



ST311
1 褐灰色粘質土シルト



K3-15 図 K3ST311 (1)

～23が2次、3次住居跡に伴う可能性がある。3次の壁溝は壁際で確認されたものと考えられる。壁溝は整然と全体に巡るものではなく、途中で途切れたり、枝分かれする。柱穴の大部分が壁溝1より内側に穿たれている。また壁溝1際または壁溝1内にP11・12、P13・14、P19・20、P22・23のように間近に再構築されており、建て替えの痕跡と考えられる。1次住居跡の規模は壁溝の規模からして、径6m程の中型の住居跡から最終段階では8.4mにまで拡張が行われたものと考えられる。

1～3は壺である。1は直口壺であり、口唇部は平坦面を成す。外面はタテハケ調整であり、内面は口縁端部をヨコハケ調整する以外はナデ調整である。2は広口壺である。口縁部は大きくひらき、口唇部は平坦面を成す。3は広口壺である。口縁部下端を指頭により摘み出し、口唇部は凹状を呈する。外面はタテハケ調整である。4～6は甕である。4の口縁部は外反し、口唇部は凹状を呈する。内外面ともナデ調整である。5の底端部は突出し、底部外面の縁周は凹む。6の体部は中位よりやや上に最大径を持つ。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部を摘み上げる。内面下半にはケズリ調整を施す。7・8は高杯の脚部であり、「ハ」の字状を呈する。端部を拡張し、凹線文を巡らせる。8は脚部に円孔を穿つ。讃岐地域からの搬入品である。9は凸基式の打製石鏃である。側縁を調整剥離する。両面とも主要剥離面を残す。また、鉞が出土している(第8分冊 田村遺跡群出土の鉄器集成)。

K3ST311(K3-15・16 図)

時期：弥生中期末から後期初頭 形状：円形 主軸方向：—

規模：4.6m 深さ：0.1m 面積：16.7㎡

埋土：褐灰色粘土質シルト主体

ピット：数8 主柱穴数：8 主柱穴：P1～5

床面：1面 貼床：無し 焼失：無し

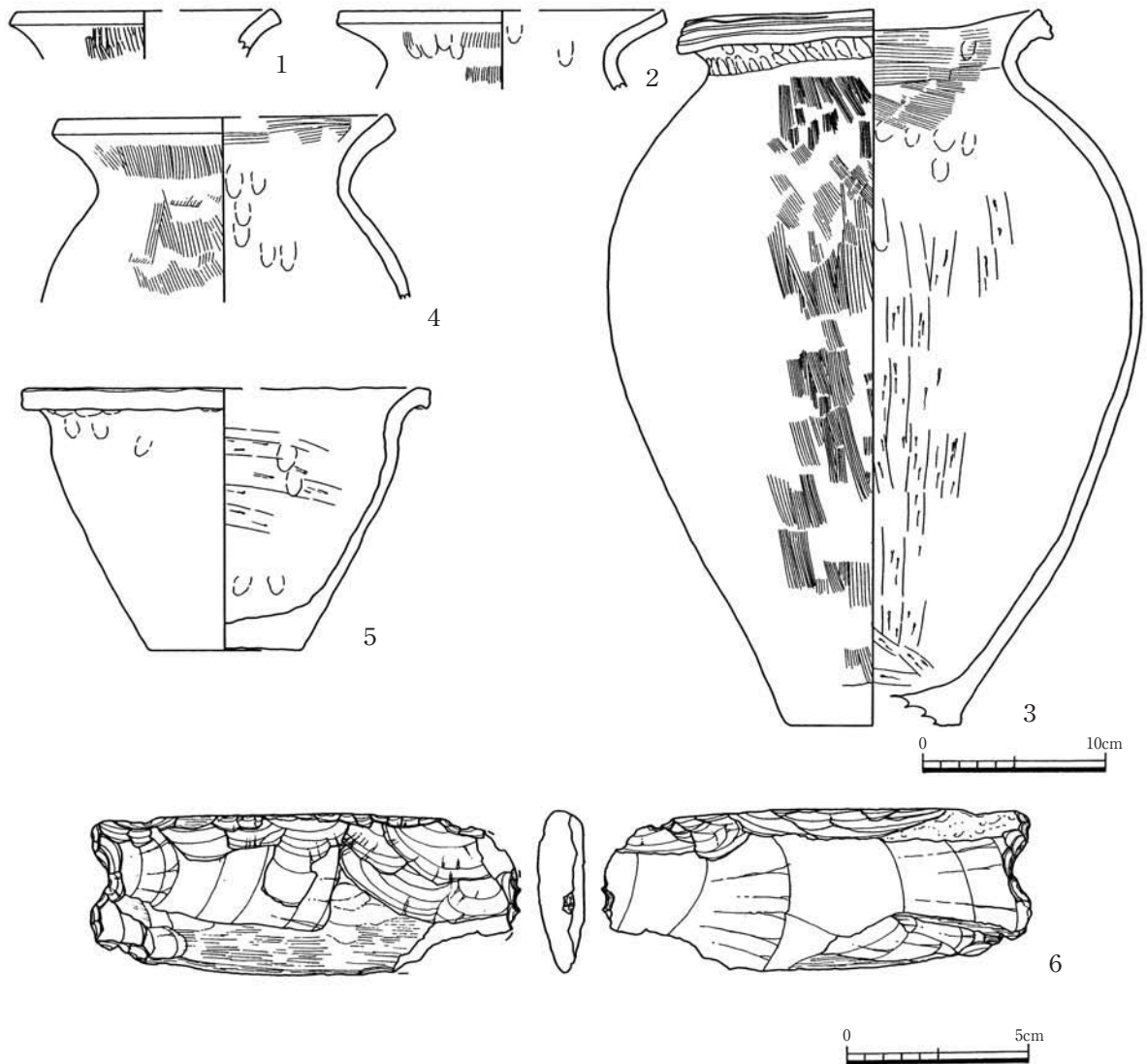
中央ピット：形状 円形 規模 70cm 深さ 27cm 埋土 褐灰色粘土質シルト主体

壁溝：数1 幅 20cm 深さ 5cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢)、打製石包丁未製品

所見：調査区北東部に位置し、ST312に切られる。ST312との床面の比高差は3cm程高い。径4.6mの小型の住居跡である。中央部に炉跡を検出しており、主柱穴は5本である。壁溝は壁際に1条検出しており、東北部で部分的に途切れる。壁高は10cm弱で浅く、上面が削平されている可能性がある。P1からは甕(3)が横位の状態で出土している。

1～4は甕である。2・4は頸部の屈曲は甘く、口唇部を若干摘み上げる。外面はタテハケ調整であり、内面は口縁部がヨコハケ調整、体部がナデ調整である。3は上胴部に最大径を持ち、口縁部は「く」の字に外反する。口縁部外面に粘土帯を貼付する。口唇部を拡張し、3条の凹線文を施す。外面はタテハケ調整である。内面は上胴部付近以下にケズリ調整を施し、口縁部はヨコハケ調整である。また、肩部には指頭圧痕が認められる。5は鉢である。安定した底部から体部が外上方にのび、口縁部は外反する。口縁部外面には指頭圧痕が認められる。内面上半部には横位のケズリ調整を施す。



K3-16 図 K3ST311 (2)

K3ST312 (K3-17 図)

時期；弥生後期初頭？ 形状；円形 主軸方向；—

規模；9.4m 深さ；0.15m 面積；69.4 m²

埋土；褐灰色粘土質シルト主体

ピット；数9 主柱穴数；5以上 主柱穴；P1～5

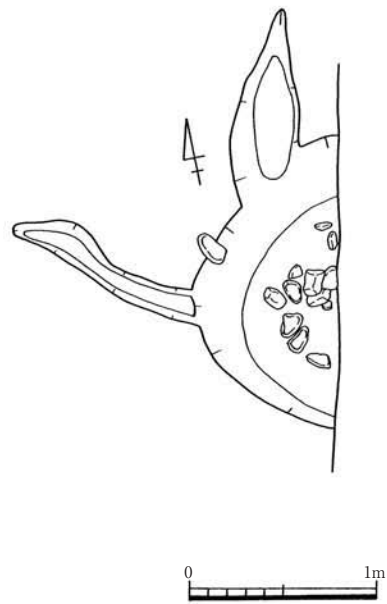
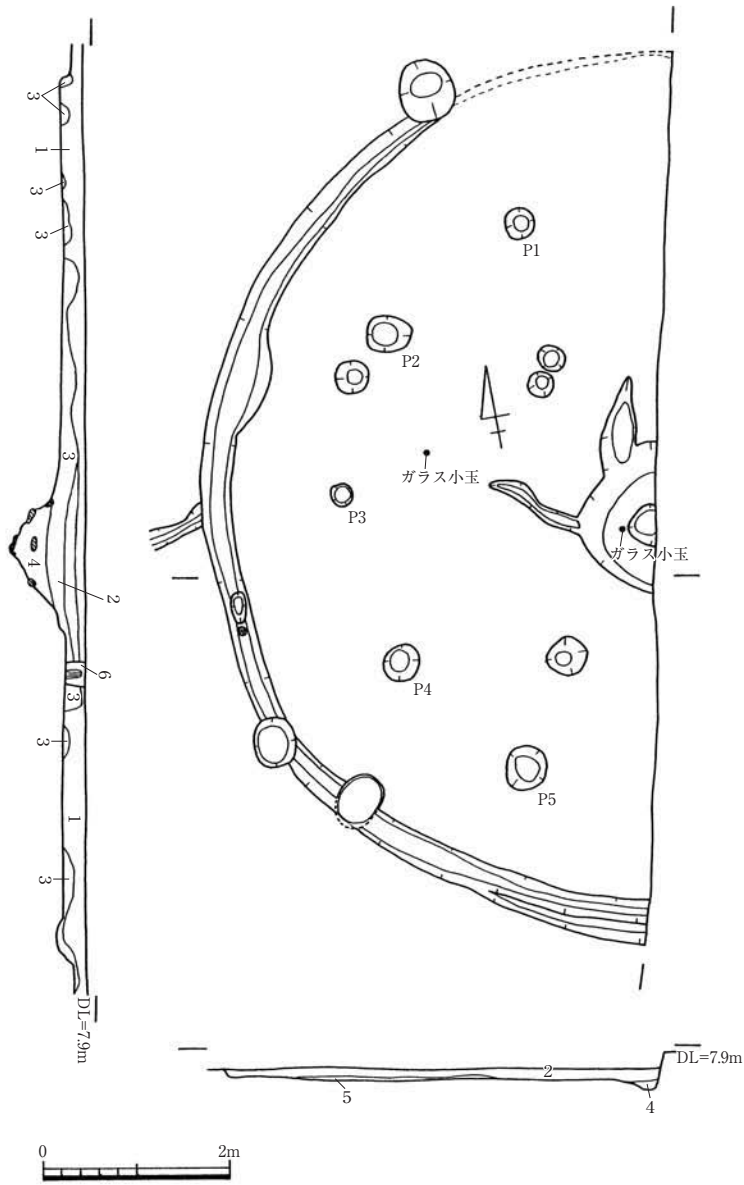
床面；1面 貼床；無し 焼失；無し

中央ピット；形状 円形 規模 (160)cm 深さ 60cm 埋土 褐灰色シルト質粘土、底面に礫数点、炭化物層

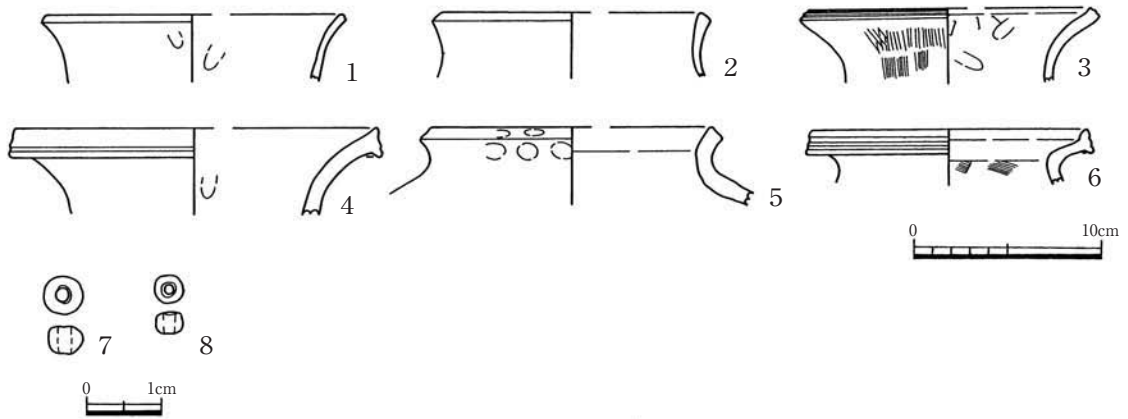
壁溝；数1 幅 35cm 深さ 5cm

出土遺物；弥生土器(壺)、ガラス小玉

所見；調査区東端北部に位置する。ST311・313を切って構築されている。東側半分は調査区外へと続き、炉跡も半截したような形で検出されている。径9.4mの大型の円形の住居跡で本遺跡内で



- ST312
- 1 表土
 - 2 褐灰色粘土質シルト
(にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを含む。)
 - 3 褐灰色粘土質シルト
 - 4 褐灰色粘土質シルト
(焼土を含む。)[中央ピット埋土]
 - 5 褐灰色粘土質シルト
(にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを含む。)
 - 6 攪乱



K3-17 図 K3ST312

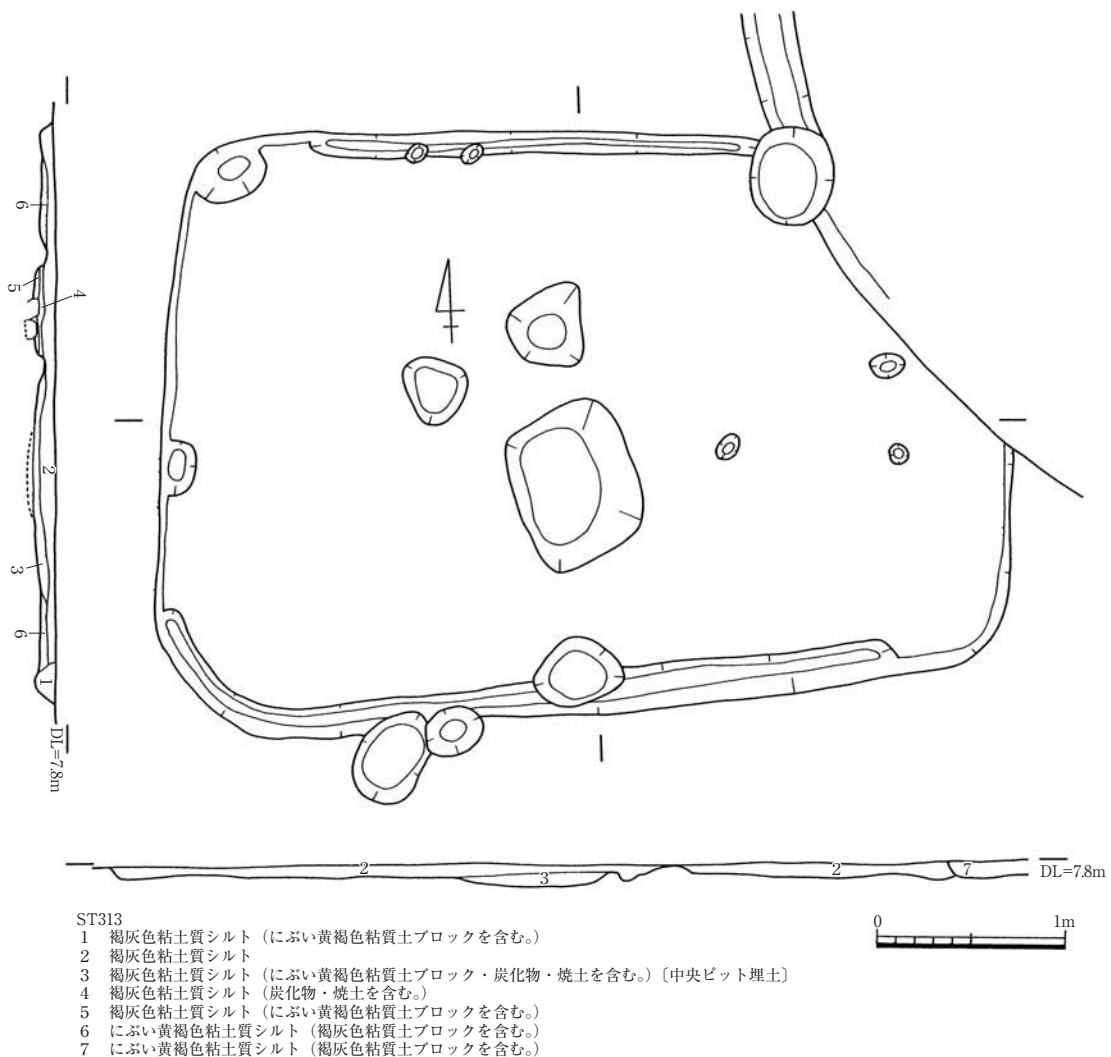
も最大級の規模である。建て替え・拡張の痕跡は認められず、当初から大型の住居跡である。炉跡は中央に位置し、支柱穴は調査区内では5本を検出しているものの、実際は10本の可能性がある。壁溝は壁際で検出しており、北側部分は判然としない。また南側部分では2条に分岐する。ガラス小玉がP3と炉跡の中間部で出土しており、また炉跡内でも1点出土している。

1～4は壺である。1・2は口縁部の外反度合いが弱い。3・4は広口壺である。3の口唇部を上方に拡張し、沈線を2条施す。4の口唇部を上下に拡張し、凹線文を2条施す。内外面ともナデ調整である。5・6は甕である。5の口縁部は「く」の字状に強く外反し、口唇部は指頭により凹状を成す。6の口縁部は「く」の字状に強く外反する。口唇部を拡張し、2条の凹線文を施す。内外面ともナデ調整である。

K3ST313(K3-18 図)

時期：弥生後期？ 形状：長方形 主軸方向：N-90°-E

規模：4.5×3.1m 深さ：0.1m 面積：14㎡



K3-18 図 K3ST313

埋土：褐灰色粘土質シルト主体

ピット：数5 主柱穴数：不明 主柱穴：—

床面：1面 貼床：無し 焼失：無し

中央ピット：形状 長方形 規模 78×65cm 深さ 6cm 埋土 褐灰色粘土質シルト、底面は焼土が硬化

壁溝：数1 幅 22cm 深さ 4cm

所見：調査区東北部に位置し、ST312に部分的に切られる。本調査区では唯一の小型の長方形の住居跡である。中央部やや南側で炉跡を検出しており、炉跡の底面は焼土が堆積し、硬化する。柱穴は5本検出しているものの、浅く主柱穴と判断できるものはない。

(2) 掘立柱建物跡

K3区では掘立柱建物跡は30棟検出している。SD301(大溝5)を挟んで北側の一群と南側の一群にわけることができる。特に、SD301の北側に密集する傾向が認められる。規模的には1×2間のものが13棟、1×3間のものが16棟、1×4間のものが1棟であり、圧倒的に1×2間あるいは1×3間のもので占められる。

K3-2表 K3区弥生掘立柱建物跡一覧

遺構名	梁間×桁行 (間)	梁間×桁行 (m)	柱間寸法 梁間×桁行(m)	棟方向	付属施設	時期	備考
K3SB301	1×2	2.5×4	2.5×2.1	N-56°-E	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB302	1×2	2.2×4.2	2.2×2.1	N-15°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB303	1×3	3×3.9	3×1.3	N-90°-E	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB304	1×3	3.1×4.3	3.1×1.4	N-80°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB305	1×3	(2.9)×(4.2)	(2.9)×(1.4)	N-80°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB306	1×3	3×4.2	3×1.4	N-90°-E	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB307	1×3	3.1×4.6	3.1×1.5	N-81°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB308	1×2	3.1×4.4	3.1×2.3	N-81°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB309	1×3	3.4×5.3	3.4×1.7	N-18°-E	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB310	1×3	2.7×3.6	2.7×1.2	N-65°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB311	1×2	2.7×3	2.7×1.5	N-56°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB312	1×3	—×4.0以上	—×2.15	N-50°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB313	1×4	3.1×6.6	3.1×1.4	N-73°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB314	1×3	2.6×4.7	2.6×1.7	N-19°-E	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB315	1×3	2.8×3.9	2.8×1.4	N-77°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB316	1×2	3×3.7	3×1.8	N-70°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB317	1×2	2.6×3.2	2.6×1.5	N-66°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB318	1×3	2.2×4.7	2.2×1.5	N-33°-E	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB319	1×3	2.5×4.6	2.5×1.6	N-52°-E	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB320	1×2	2.8×—	2.8×—	N-28°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB321	1×3	3.2×5.1	3.2×1.6	N-62°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB322	1×2	3.2×4.7	3.2×2.5	N-64°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB323	1×3	2.8×4.4	2.8×1.5	N-60°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB324	1×2	2.7×3.8	2.7×1.8	N-37°-E	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB325	1×2	—×3.3	—×1.8	N-29°-E	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB326	1×3	3×4.6	3×1.4	N-61°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB327	1×3	2.9×—	2.9×1.3	N-49°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB329	1×3	—	—	N-54°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB330	1×2	3.5×3.5	3.5×1.6	N-86°-W	—	弥生中期末から後期前葉	
K3SB331	1×2	4.2×4	4.2×1.8	N-79°-W	—	弥生中期末から後期前葉	

K3SB301 (K3-19 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 棟方向；N-56°-E

規模；梁間 1×桁行 2 梁間 2.5 × 桁行 4.0m 面積；10.0㎡

柱間寸法；梁間 2.5m 桁行 2.1m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

所見；調査区北東隅に位置し、ST309・311 に隣接する。棟方向は他の掘立柱建物跡と方位を違えており、北東方向に振る。柱穴の規模は径 40cm 前後を測るものが多く、深さは 20～30cm のものが多く、桁行は 2 間と短いものの、中型の掘立柱建物跡である。

K3SB302 (K3-19 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 棟方向；N-15°-W

規模；梁間 1×桁行 2 梁間 2.2 × 桁行 4.2m 面積；9.2㎡

柱間寸法；梁間 2.2m 桁行 2.1m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

所見；調査区の東の北端に位置する。ST309 に隣接する。軸方向は南北で、若干西に振る。柱穴は 30cm 未満の小型のものが多いものの、西北隅の土坑状のものが掘立柱建物跡を構成する柱穴となるのかははっきりとはしない。深さは 20cm 未満のものが多く、小型のものである。

K3SB303 (K3-19 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 棟方向；N-90°-E

規模；梁間 1×桁行 3 梁間 3.0 × 桁行 3.9m 面積；11.7㎡

柱間寸法；梁間 3m 桁行 1.3m

柱穴数；7 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

所見；調査区北東部に位置し、ST309 の南側で検出した。軸方向は東西で、桁行の北列では中間柱が検出できていないものの、間数 1×3 間と考えられる。柱穴の規模は径 30cm 以下のもので大半が占められる。深さも 20cm 以下のもので、小型の柱穴で構成される。

K3SB304 (K3-19 図)

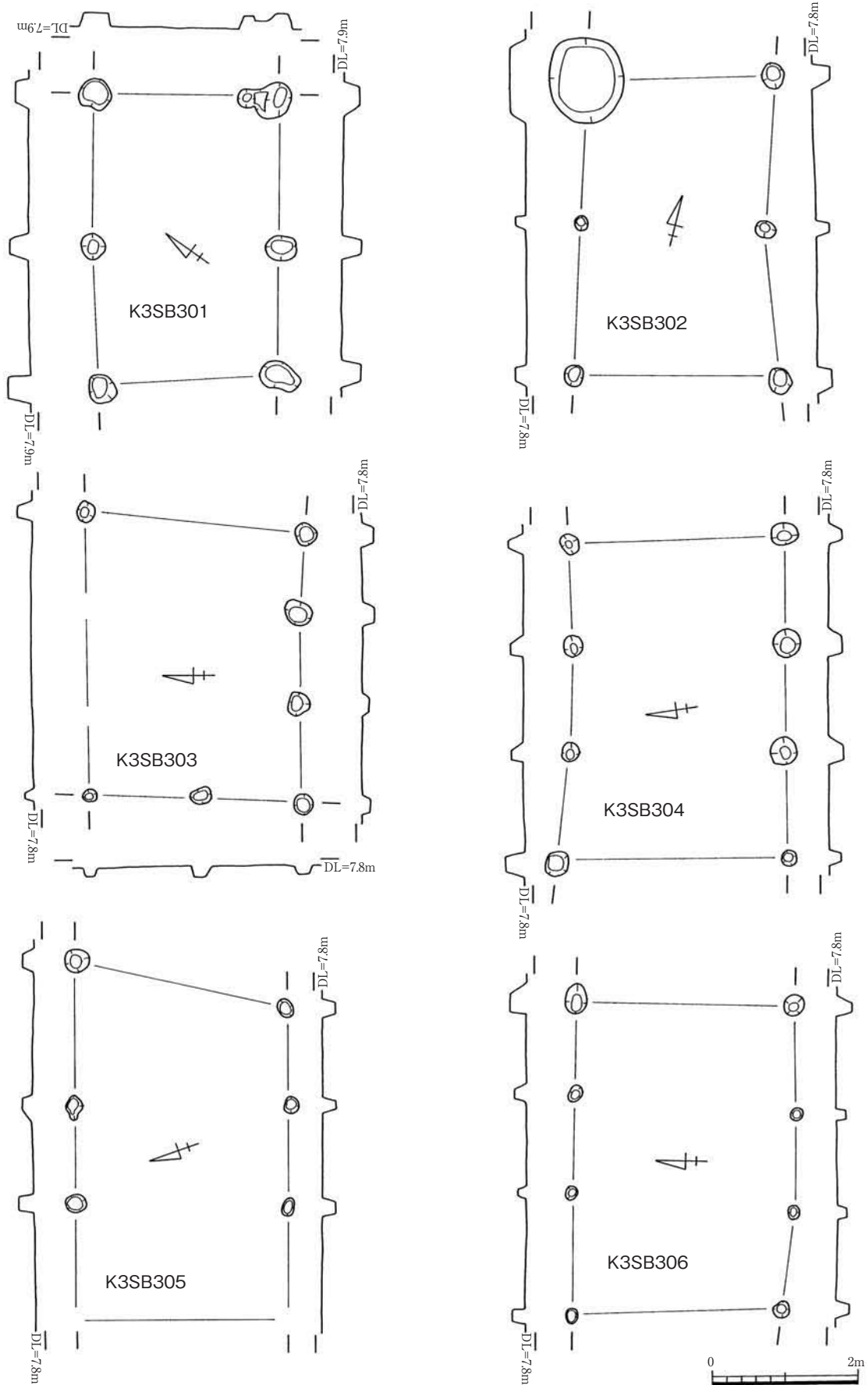
時期；弥生中期末から後期前葉 棟方向；N-80°-W

規模；梁間 1×桁行 3 梁間 3.1 × 桁行 4.3m 面積；13.3㎡

柱間寸法；梁間 3.1m 桁行 1.4m

柱穴数；8 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—



K3-19 ☒ K3SB301 ~ 306

所見；調査区の北東部の掘立柱建物跡密集地の東端に位置する。北側にSK302があるものの、本掘立柱建物跡には伴わないと考えられる。SB305と切り合い関係にあるものの、新旧関係は不明である。棟方向は他の掘立柱建物跡と同様で東西方向である。柱穴の規模は最小のもので径18cm、大半のものが30cm前後のもので占められている。深さも20cm前後のもので占められている。

K3SB305 (K3-19 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 **棟方向**；N-80°-W

規模；梁間1×桁行3 梁間(2.9)×桁行(4.2)m **面積**；(12.2)m²

柱間寸法；梁間(2.9)m 桁行(1.4)m

柱穴数；(8) **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

所見；調査区やや東寄り北に位置し、周辺域には掘立柱建物跡が多く、その中の一つである。SB306と切り合い関係にあるものの、新旧関係は不明である。棟方向は他の掘立柱建物跡と同様で東西方向である。柱穴の規模は小さく径20～30cmのもので占められている。深さも20cm前後のもので占められている。

K3SB306 (K3-19 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 **棟方向**；N-90°-E

規模；梁間1×桁行3 梁間3.0×桁行4.2m **面積**；12.6m²

柱間寸法；梁間3m 桁行1.4m

柱穴数；8 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

所見；調査区やや東寄り北に位置し、周辺域には掘立柱建物跡が多く、その中の一つである。SB305と切り合い関係にあるものの、新旧関係は不明である。棟方向は他の掘立柱建物跡と同様で東西方向である。柱穴の規模は極めて小さく径15～30cmのもので占められている。深さも20cm前後のもので占められている。

K3SB307 (K3-20 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 **棟方向**；N-81°-W

規模；梁間1×桁行3 梁間3.1×桁行4.6m **面積**；14.3m²

柱間寸法；梁間3.1m 桁行1.5m

柱穴数；8 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

所見；調査区やや東北部に位置する。周辺域には掘立柱建物跡が多く、その中の一つである。SB306と切り合い関係にあるものの、新旧関係は不明である。棟方向は他の掘立柱建物跡と同様で東西方向である。柱穴の規模にはばらつきがあり、小さいもので径20cm、大きなもので40cm強で

ある。深さは20cm前後のもので占められている。

K3SB308(K3-20 図)

時期：弥生中期末から後期前葉 棟方向：N-81°-W

規模：梁間1×桁行2 梁間3.1×桁行4.4m 面積：13.6㎡

柱間寸法：梁間3.1m 桁行2.3m

柱穴数：6 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

所見：調査区やや東寄り中央に位置し、周辺域には掘立柱建物跡が多く、その中の一つである。棟方向は他の掘立柱建物跡と同様に東西方向である。棟方向が南北のSB309と切り合い関係にあるものの、新旧関係は不明である。柱穴の規模は小さく径30cm弱のもので占められている。深さも20cm前後のもので占められている。

K3SB309(K3-20 図)

時期：弥生中期末から後期前葉 棟方向：N-18°-E

規模：梁間1×桁行3 梁間3.4×桁行5.3m 面積：—

柱間寸法：梁間3.4m 桁行1.7m

柱穴数：8 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

所見：調査区やや東寄り中央に位置し、周辺域には掘立柱建物跡が多く、その中の一つである。棟方向は他の掘立柱建物跡と違い南北方向である。棟方向が東西のSB308と切り合い関係にあるものの、新旧関係は不明である。柱穴の規模は不規則で小さいもので径18cm、大きいもので42cmを測る。深さは20cm前後のもので占められている。

K3SB310(K3-20 図)

時期：弥生中期末から後期前葉 棟方向：N-65°-W

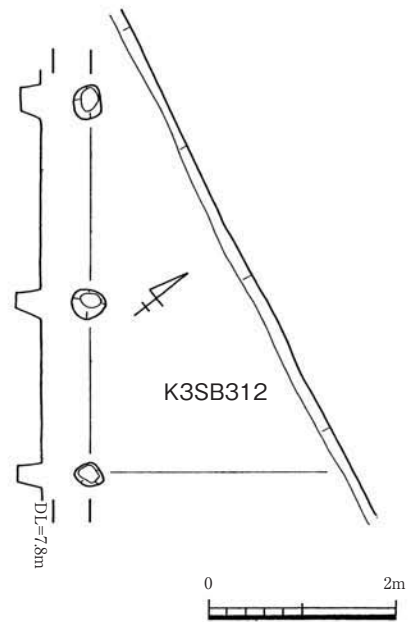
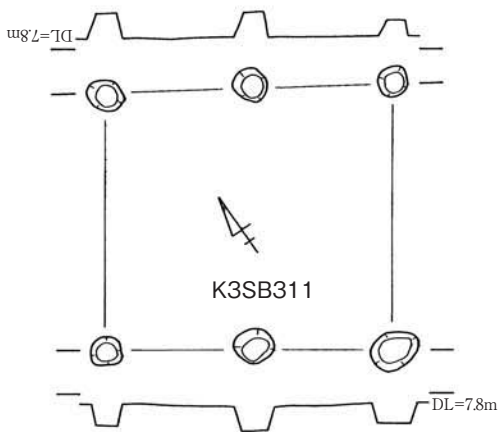
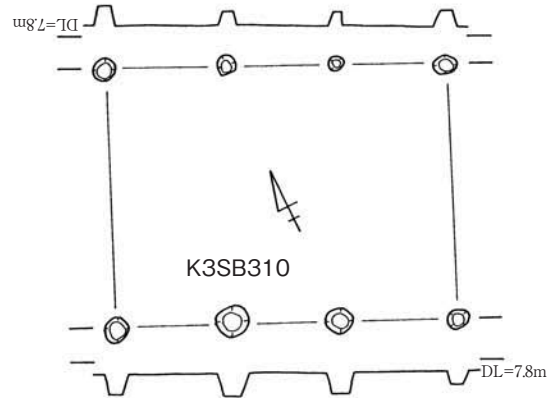
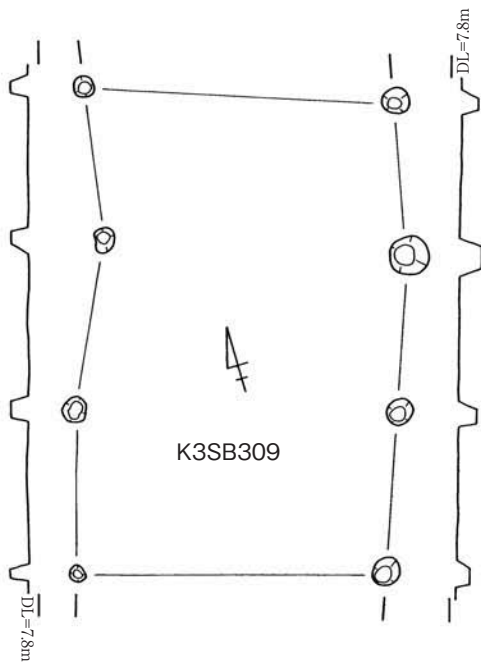
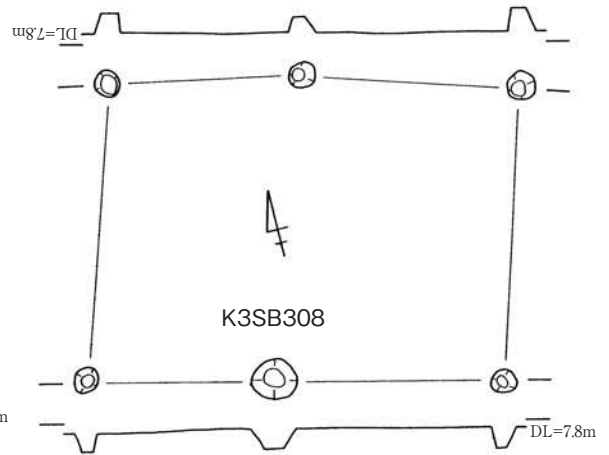
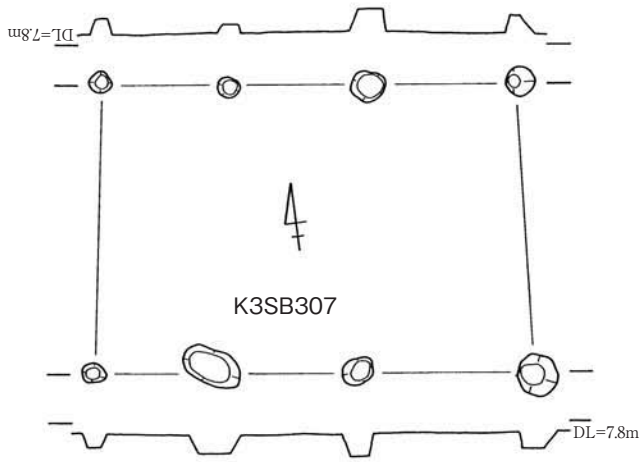
規模：梁間1×桁行3 梁間2.7×桁行3.6m 面積：9.7㎡

柱間寸法：梁間2.7m 桁行1.2m

柱穴数：8 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

所見：調査区やや東寄り中央に位置し、周辺域には掘立柱建物跡が多く、その中の一つである。棟方向は他の掘立柱建物跡と同様に東西方向である。SB311と切り合い関係にあるものの、新旧関係は不明である。柱穴の規模は極めて小さいものが多く、最小のもので径16cm、大部分が25cmで、最大のもので35cmを測る。深さは15～20cm前後のものが多い。



K3-20 ☒ K3SB307 ~ 312

K3SB311(K3-20 図)

時期：弥生中期末から後期前葉 棟方向：N-56°-W

規模：梁間1×桁行2 梁間2.7×桁行3.0m 面積：8.1㎡

柱間寸法：梁間2.7 桁行1.5m

柱穴数：6 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

所見：調査区やや東寄り中央に位置し、周辺域には掘立柱建物跡が多く、その中の一つである。棟方向は他の掘立柱建物跡と同様に東西方向である。SB310と切り合い関係にあるものの、新旧関係は不明である。柱穴の規模は径40cm前後、深さは20～30cm前後のものが多い。

K3SB312(K3-20 図)

時期：弥生中期末から後期前葉 棟方向：N-50°-W

規模：梁間1×桁行3 梁間—×桁行4.0m以上 面積：—

柱間寸法：梁間(2)m 桁行—×2.15m

柱穴数：8 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

所見：調査区中央北端に位置し、調査区外へと続く。調査区内で検出した柱穴数は3基のみであるが、他の周辺域の掘立柱建物跡からすると1×3間の掘立柱建物跡の可能性が強いと考えられる。棟方向は他の掘立柱建物跡と違い南北方向でもN-50°-Wと振っている。柱穴の規模は径30～40cm程で、深さは25cm程である。

K3SB313(K3-21 図)

時期：弥生中期末から後期前葉 棟方向：N-73°-W

規模：梁間1×桁行4 梁間3.1×桁行6.6m 面積：20.5㎡

柱間寸法：梁間3.1 桁行1.4m

柱穴数：10 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

所見：調査区中央北に位置し、周辺域には掘立柱建物跡が多く、その中の一つである。SB315と切り合い関係にあるものの、新旧関係は不明である。またSB314と極めて隣接する。棟方向は他の掘立柱建物跡と同様に東西方向である。柱穴の規模にはややばらつきが認められ最小のもので径22cm、最大のもので60cmを測るものがある。大部分は30cm強のもので占められている。深さは25～30cm前後のものが多い。

K3SB314(K3-21 図)

時期：弥生中期末から後期前葉 棟方向：N-19°-E

規模：梁間1×桁行3 梁間2.6×桁行4.7m 面積：12.2㎡

柱間寸法；梁間 2.6m 桁行 1.7m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

所見；調査区中央北に位置し、周辺域には掘立柱建物跡が多い。また上述のようにSB313と近接する。棟方向は南北方向である。柱穴の規模は径 20～30cm前後のものが多い。深さは 10～20cmである。

K3SB315(K3-21 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 棟方向；N-77°-W

規模；梁間 1×桁行 3 梁間 2.8 × 桁行 3.9m 面積；10.9㎡

柱間寸法；梁間 2.8m 桁行 1.4m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

所見；調査区中央北に位置し、周辺域には掘立柱建物跡が多い。SB313と切り合い関係にあるものの、新旧関係は不明である。またSB314・317と極めて隣接する。棟方向は他の掘立柱建物跡と同様で東西方向である。柱穴の規模は径 20～30cmであり、深さは 10～20cm前後のものが多い。

K3SB316(K3-21 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 棟方向；N-70°-W

規模；梁間 1×桁行 2 梁間 3.0 × 桁行 3.7m 面積；11.1㎡

柱間寸法；梁間 3m 桁行 1.8m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

所見；調査区中央北に位置する。ST308と切り合い関係にある。棟方向は東西方向である。柱穴の規模は径 20～40cmであり、深さは 20～30cm前後のものが多い。

K3SB317(K3-21 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 棟方向；N-66°-W

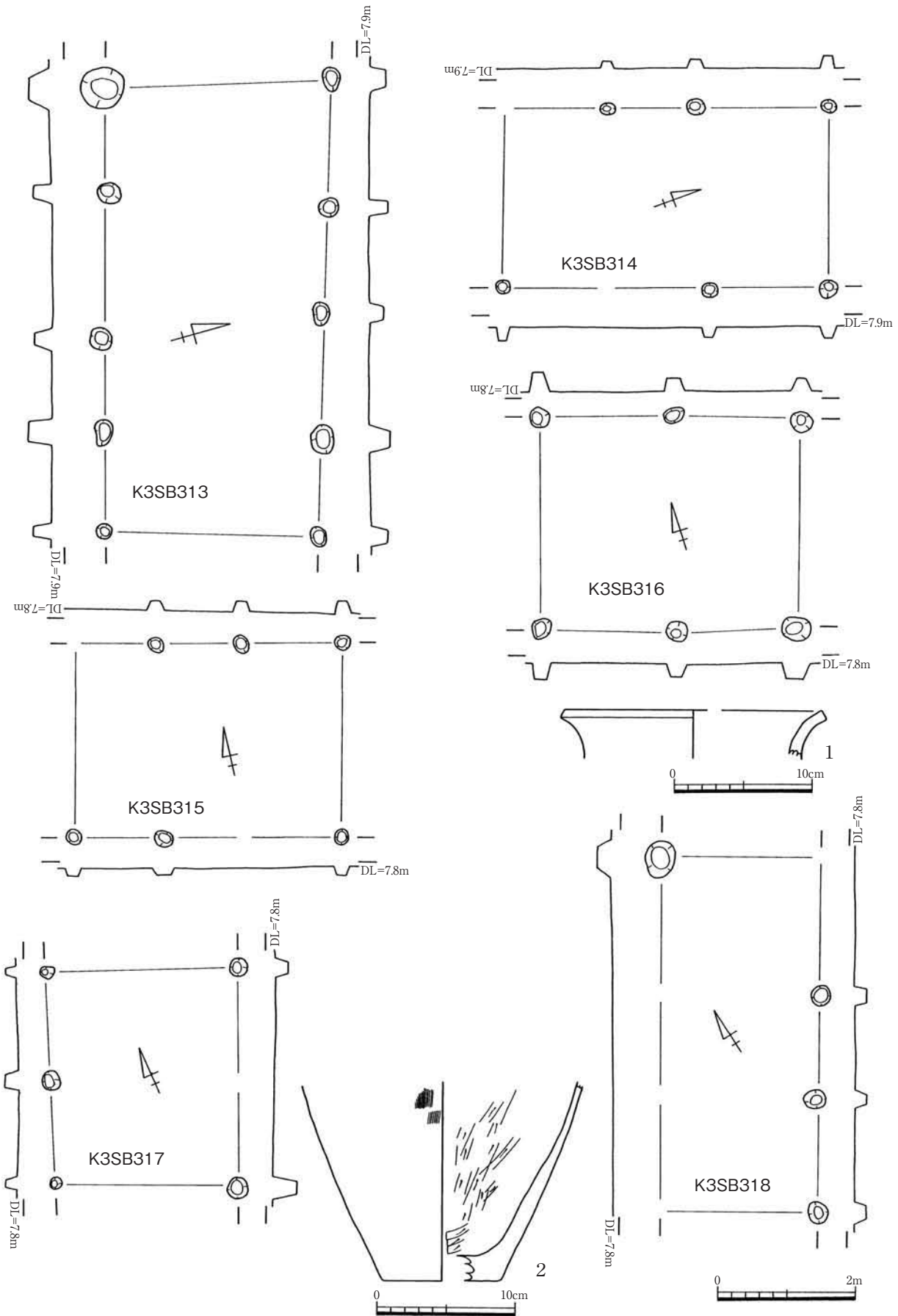
規模；梁間 1×桁行 2 梁間 2.6 × 桁行 3.2m 面積；8.3㎡

柱間寸法；梁間 2.6m 桁行 1.5m

柱穴数；5 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

所見；調査区中央北に位置する。ST308と切り合い関係を有し、SB315と近接する。棟方向は南北方向である。柱穴の規模は径 20～30cmであり、深さは 15～35cm前後のものが多い。



K3-21 ☒ K3SB313 ~ 318

K3SB318(K3-21 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 棟方向；N-33°-E

規模；梁間 1×桁行 3 梁間 2.2 ×桁行 4.7m 面積；10.3㎡

柱間寸法；梁間 2.2m 桁行 1.5m

柱穴数；4 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

所見；調査区中央北に位置する。SB319 と切り合い関係を持つが、新旧関係は不明である。棟方向は南北方向である。柱穴の規模は径 25 ～ 55cm であり、深さは 20cm 前後である。

K3SB319(K3-22 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 棟方向；N-52°-E

規模；梁間 1×桁行 3 梁間 2.5 ×桁行 4.6m 面積；11.5㎡

柱間寸法；梁間 2.5m 桁行 1.6m

柱穴数；7 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

所見；調査区中央北に位置する。SB318 と切り合い関係を持つが、新旧関係は不明である。棟方向は南北方向である。柱穴の規模は径 25 ～ 50cm であり、ややばらつきがある。深さは 15 ～ 25cm 前後である。

K3SB320(K3-22 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 棟方向；N-28°-W

規模；梁間 1×桁行 2 梁間 2.8 ×桁行— 面積；—

柱間寸法；梁間 2.8m 桁行—

柱穴数；4 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

所見；調査区中央南に位置する。掘立柱建物跡の集中箇所から離れて単独で存在する。棟方向は南北方向である。柱穴の規模は径 20 ～ 30cm である。深さは 15cm 前後である。

K3SB321(K3-22 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 棟方向；N-62°-W

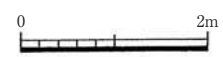
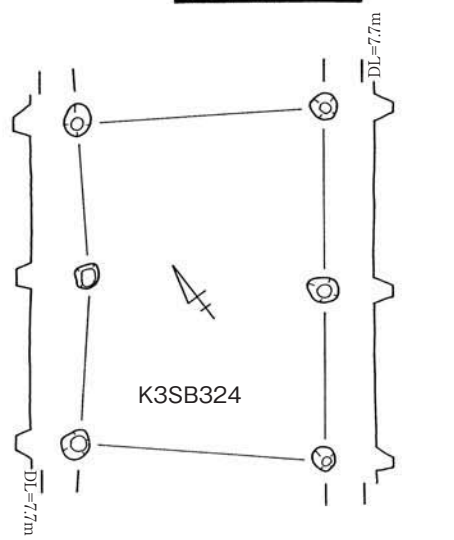
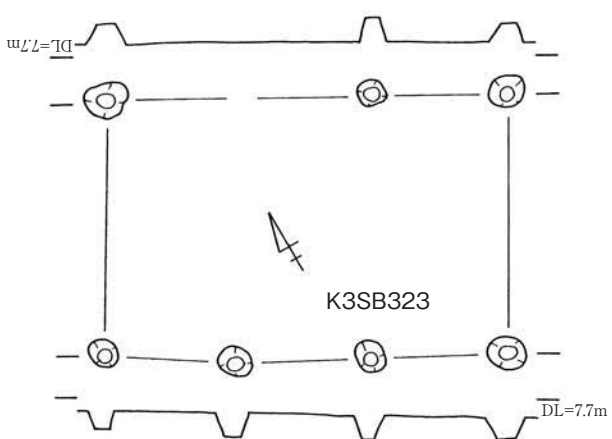
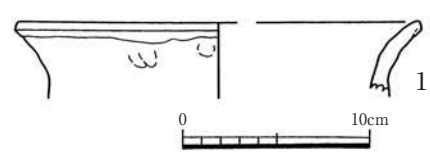
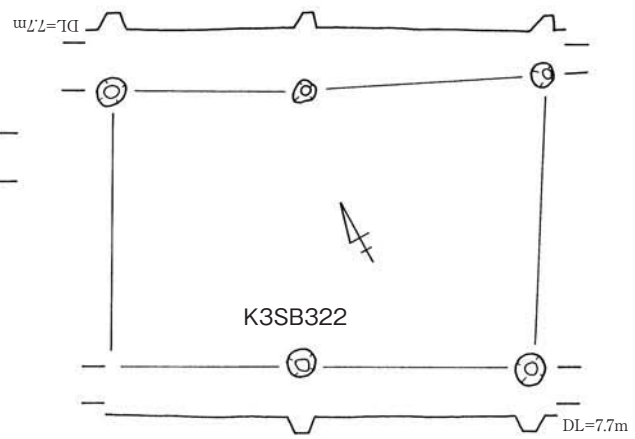
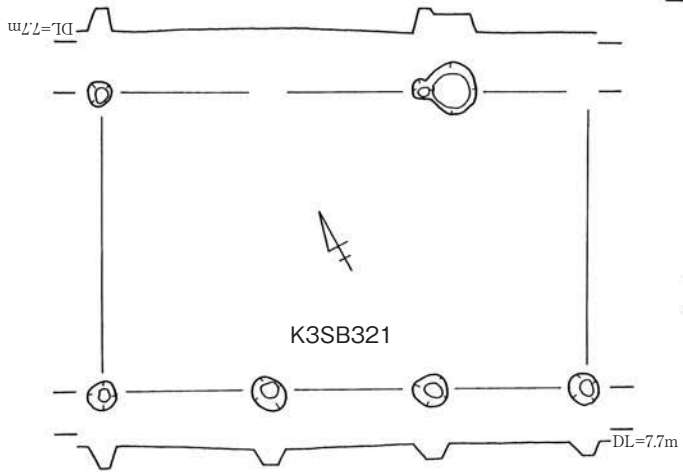
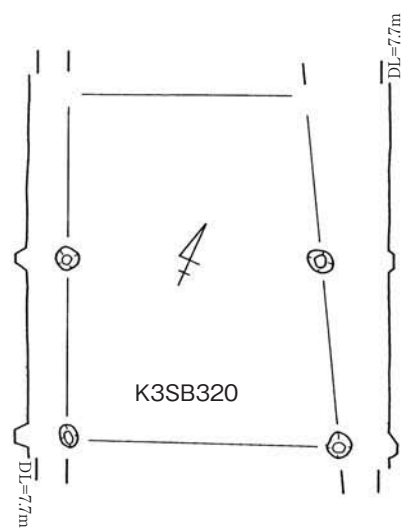
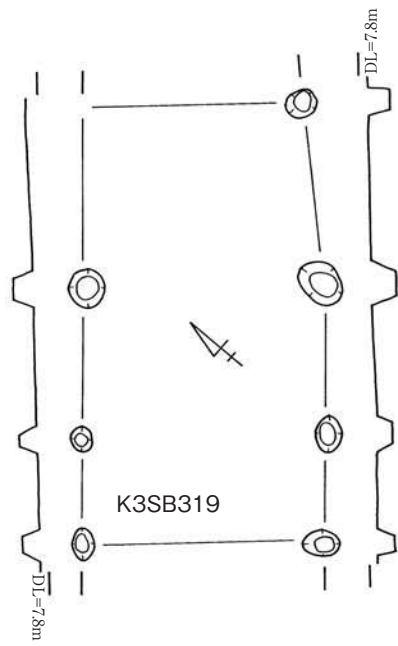
規模；梁間 1×桁行 3 梁間 3.2 ×桁行 5.1m 面積；16.3㎡

柱間寸法；梁間 3.2m 桁行 1.6m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

所見；調査区中央南に位置する。SD305 と切り合い関係を持つが、新旧関係は不明である。棟方向は東西方向である。柱穴の規模は径 25 ～ 60cm である。深さは 15 ～ 25cm 前後である。



K3-22 ☒ K3SB319 ~ 324

K3SB322(K3-22 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 棟方向；N-64°-W

規模；梁間 1×桁行 2 梁間 3.2 × 桁行 4.7m 面積；15㎡

柱間寸法；梁間 3.2m 桁行 2.5m

柱穴数；5 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

所見；調査区中央南に位置する。SB321 と近接し、棟方向もほぼ同じである。棟方向は東西方向である。柱穴の規模は径 25 ～ 30cm であり、深さは 20cm 前後である。

K3SB323(K3-22 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 棟方向；N-60°-W

規模；梁間 1×桁行 3 梁間 2.8 × 桁行 4.4m 面積；12.3㎡

柱間寸法；梁間 2.8m 桁行 1.5m

柱穴数；7 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

所見；調査区中央南に位置する。ST304 と切り合い関係を有するが、新旧関係は不明である。また、SB324 と近接する。棟方向は東西方向である。柱穴の規模は径 30 ～ 45cm であり、深さは 20 ～ 25cm 前後である。

K3SB324(K3-22 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 棟方向；N-37°-E

規模；梁間 1×桁行 2 梁間 2.7 × 桁行 3.8m 面積；10.3㎡

柱間寸法；梁間 2.7m 桁行 1.8m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

所見；調査区中央南に位置する。ST303 と切り合い関係を有する。また、SB323 と近接する。棟方向は南北方向である。柱穴の規模は径 25 ～ 30cm であり、深さは 20cm 前後である。

K3SB325(K3-23 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 棟方向；N-29°-E

規模；梁間 1×桁行 2 梁間—×桁行 3.3m 面積；—

柱間寸法；梁間— 桁行 1.8m

柱穴数；3 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

所見；調査区中央南に位置する。棟方向は南北方向である。柱穴の規模は径 25cm 前後であり、深さは 10 ～ 20cm 前後である。

K3SB326(K3-23 図)

時期：弥生中期末から後期前葉 棟方向：N-61°-W

規模：梁間 1×桁行 3 梁間 3×桁行 4.6m 面積：13.8㎡

柱間寸法：梁間 3.0m 桁行 1.4m

柱穴数：8 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

所見：調査区中央やや西に位置する。SB327 と切り合い関係を持つ。棟方向は東西方向である。柱穴の規模は径 20～40cm であり、深さは 15～25cm 前後である。

K3SB327(K3-23 図)

時期：弥生中期末から後期前葉 棟方向：N-49°-W

規模：梁間 1×桁行 3 梁間 2.9m×桁行— 面積：—

柱間寸法：梁間 2.9m 桁行 1.3m

柱穴数：5 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

所見：調査区中央やや西に位置する。SB326 と切り合い関係を持つ。棟方向は東西方向である。柱穴の規模は径 20～30cm であり、深さは 25cm 前後である。

K3SB329(K3-23 図)

時期：弥生中期末から後期前葉 棟方向：N-54°-W

規模：梁間 1×桁行 3 梁間—×桁行— 面積：—

柱間寸法：梁間— 桁行—

柱穴数：3 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

所見：調査区北西に位置する。棟方向は東西方向であり、柱穴の規模は径 20～40cm である。深さは 20cm 前後である。

K3SB330(K3-23 図)

時期：弥生中期末から後期前葉 棟方向：N-86°-W

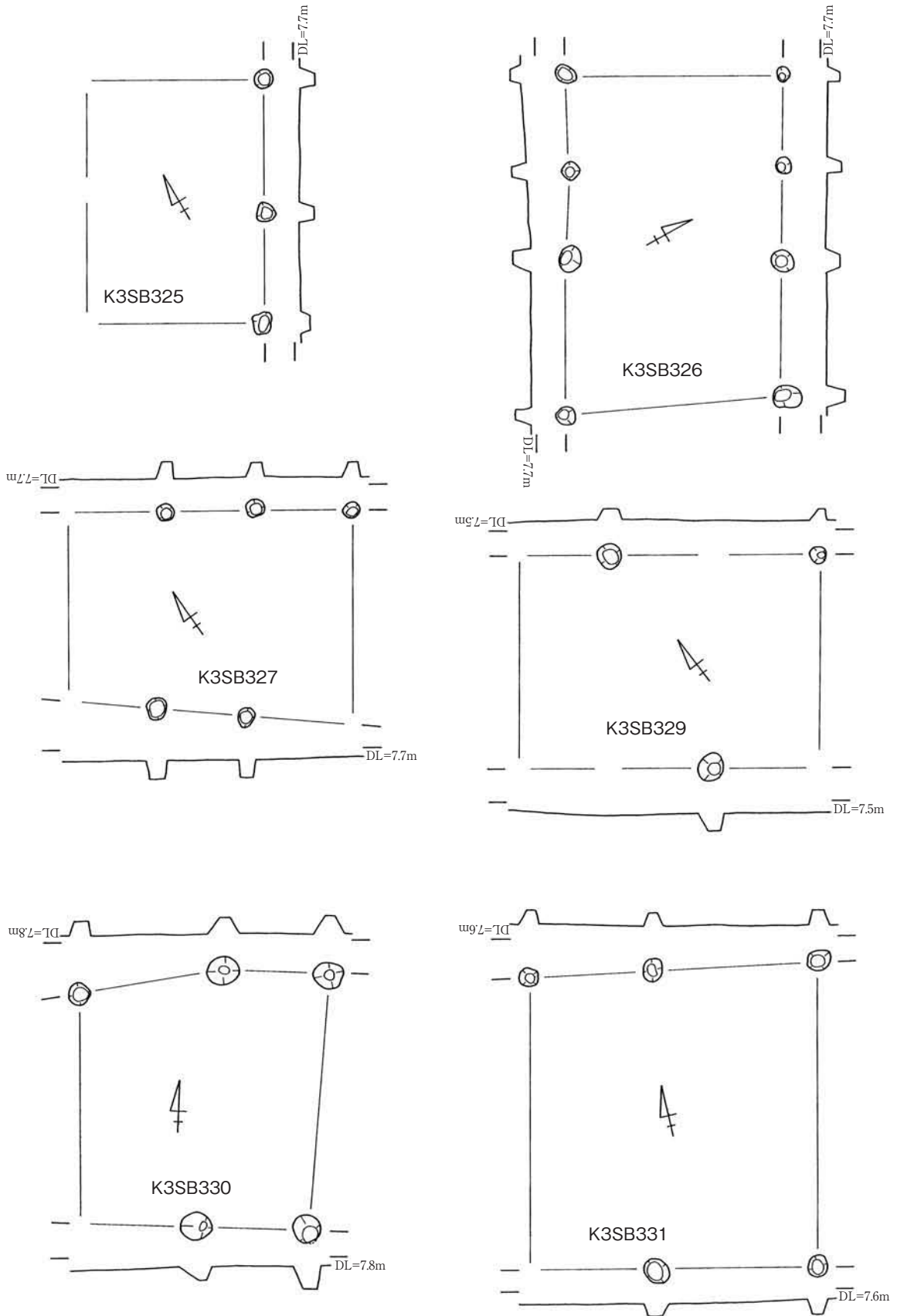
規模：梁間 1×桁行 2 梁間 3.5×桁行 3.5m 面積：12.3㎡

柱間寸法：梁間 3.5m 桁行 1.6m

柱穴数：5 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

所見：調査区北西に位置する。棟方向は東西方向である。柱穴の規模は径 30～45cm であり、深さは 20～30cm 前後である。



K3-23 図 K3SB325 ~ 327 · 329 ~ 331



K3SB331(K3-23 図)

時期：弥生中期末から後期前葉 棟方向：N-79°-W

規模：梁間1×桁行2 梁間4.2×桁行4m 面積：16.8㎡

柱間寸法：梁間4.2m 桁行1.8m

柱穴数：5 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

所見：調査区北西に位置する。棟方向は東西方向である。柱穴の規模は径25～40cmである。深さは20cm前後である。

(3) 土坑

K3区では土坑は9基検出している。その内、円形のSK308は近現代のものである。弥生時代の土坑は調査区東部に散在する傾向がある。平面形は長楕円形のものが多い。しかしながら柱穴、掘立柱建物跡と関連するものは皆無である。単独のものが多く、遺物も少ないものも多い。掘方もあまりしっかりしたものは認められていない。

K3-3表 K3区弥生土坑一覧

遺構名	長径×短径×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	付属遺構	時期	備考
K3SK301	3.20×1.03×0.40	溝状	皿状	N-12°-E		弥生中期末	
K3SK305	1.40×0.74×0.06	不整形	—	N-71°-E		弥生中期末から後期前葉	
K3SK306	2.50×0.57×0.20	溝状	U字状	N-79°-E		弥生中期末から後期初頭	
K3SX301	2.4×2.26×0.07	円形	皿状	—		弥生後期前葉	

K3SK301(K3-24・25 図)

時期：弥生中期末 形状：溝状 主軸方向：N-12°-E

規模：3.2×1.03m 深さ：0.4m 断面形態：皿状

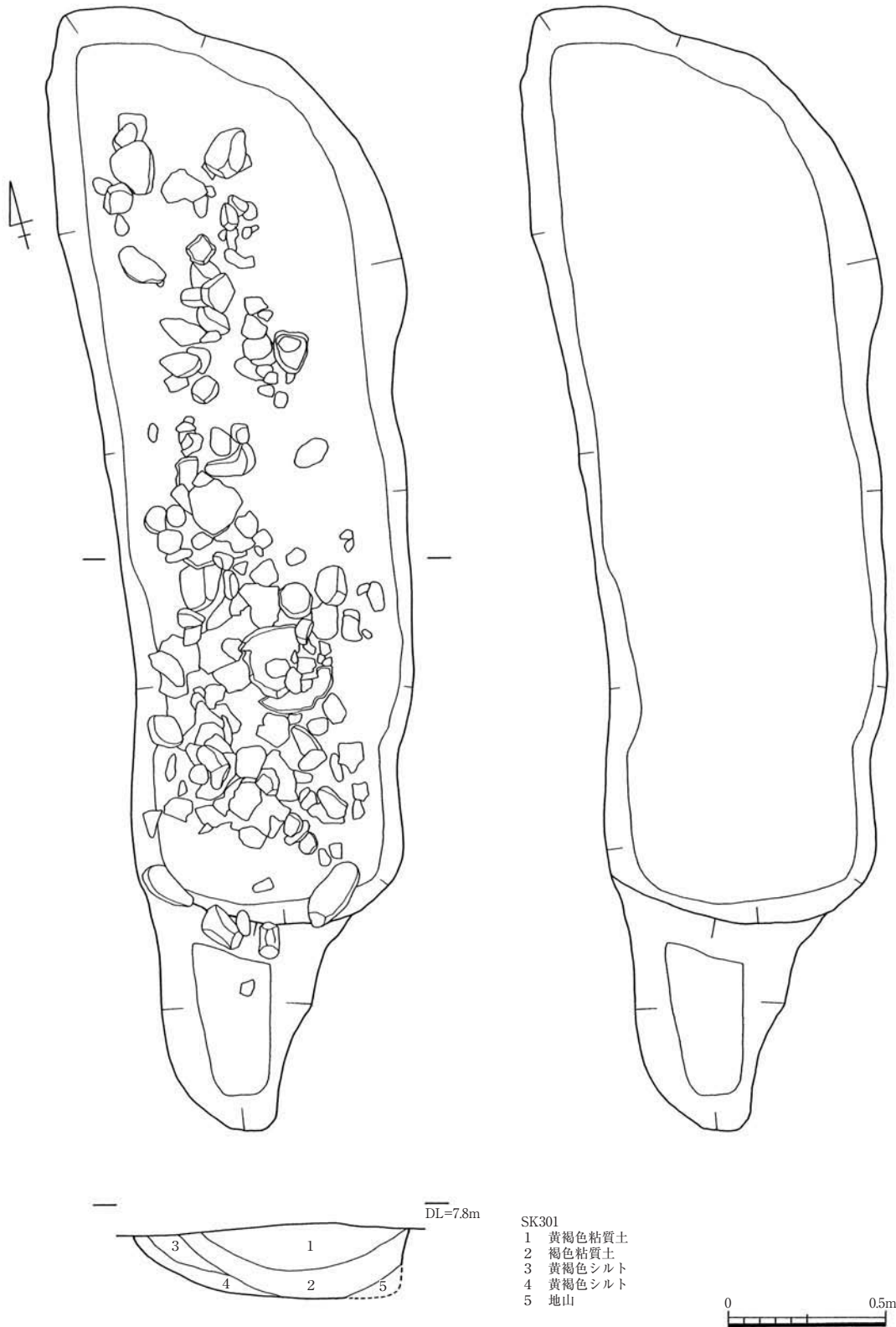
埋土：黄褐色土

付属遺構：— 機能：—

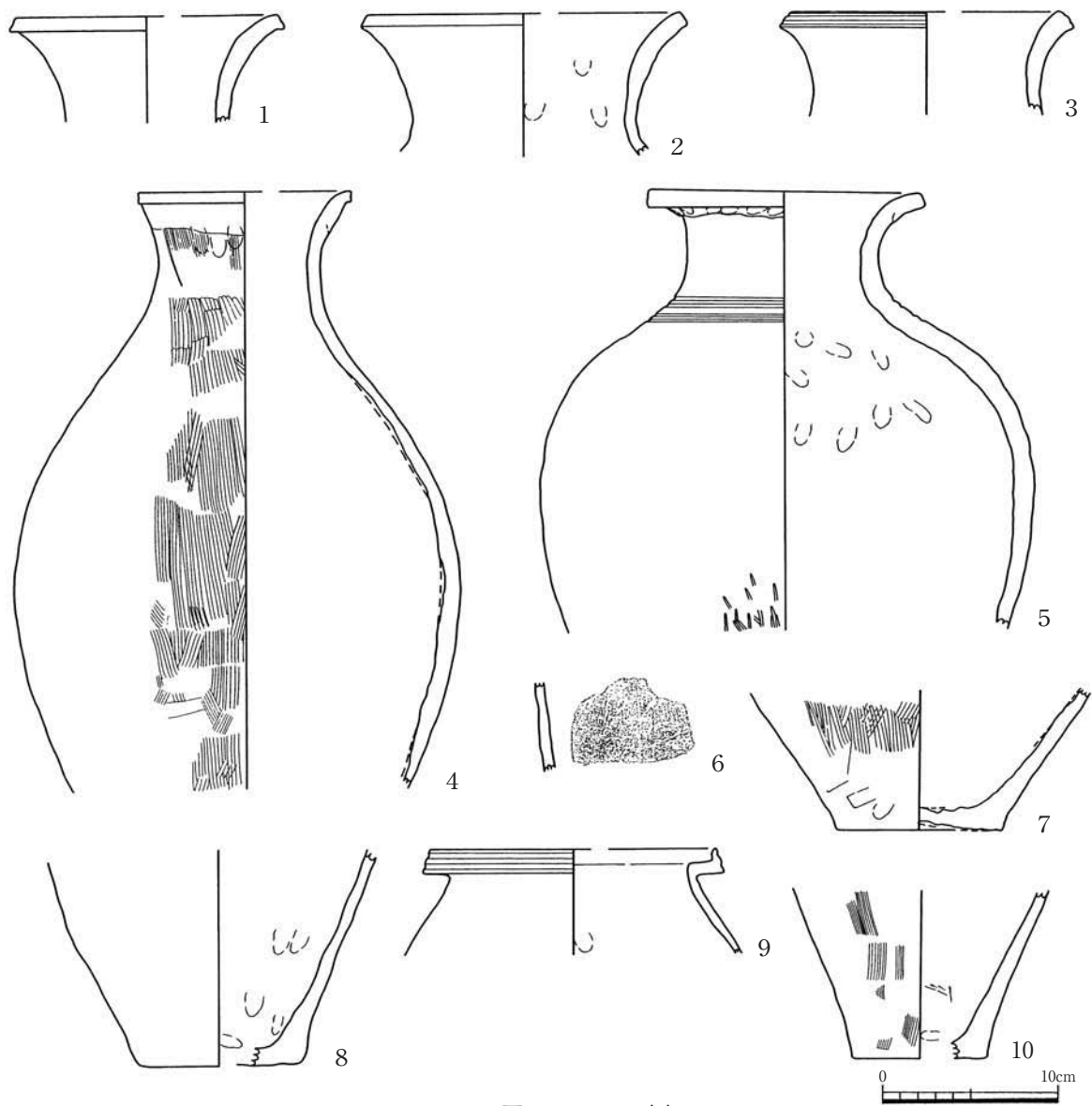
出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区東側の住居跡群の中に位置する。やや長い土坑で、比較的多くの土器が出土している。

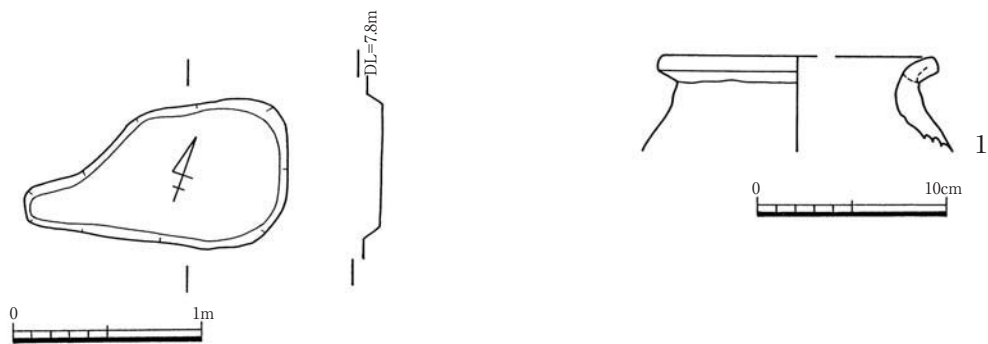
1～8は壺である。3の口縁部は短く外反する。口唇部を拡張し、2条の凹線文を施す。4は長胴の体部から外反度合の弱い口縁部がつく。口縁部外面には粘土帯を貼付する。口唇部はヨコナデ調整により平坦面を成す。外面はタテハケ調整であり、内面はナデ調整である。5は肩部の張った体部を持つ。口縁部は大きく外反し、粘土帯を貼付する。頸部には櫛描直線文を施す。9・10は甕である。9の口縁部は水平に屈曲する。口唇部を上方に拡張し、2条の凹線文を施す。



K3-24 図 K3SK301(1)



K3-25 图 K3SK301(2)



K3-26 图 K3SK305

K3SK306 (K3-27 図)

時期；弥生中期末から後期初頭 形状；溝状 主軸方向；N-79°-E

規模；2.5×0.57m 深さ；0.2m 断面形態；U字状

埋土；—

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺)

所見；調査区南東に位置する。幅が狭くやや長い土坑である。周辺域にピットが幾つか有るものの、本土坑と関連するものは確認できていない。

1は壺である。上胴部に列点文を施す。内外面ともナデ調整である。

K3SX301 (K3-28 図)

時期；弥生後期前葉 形状；円形 主軸方向；—

規模；2.4×2.26m 深さ；0.07m 断面形態；皿状

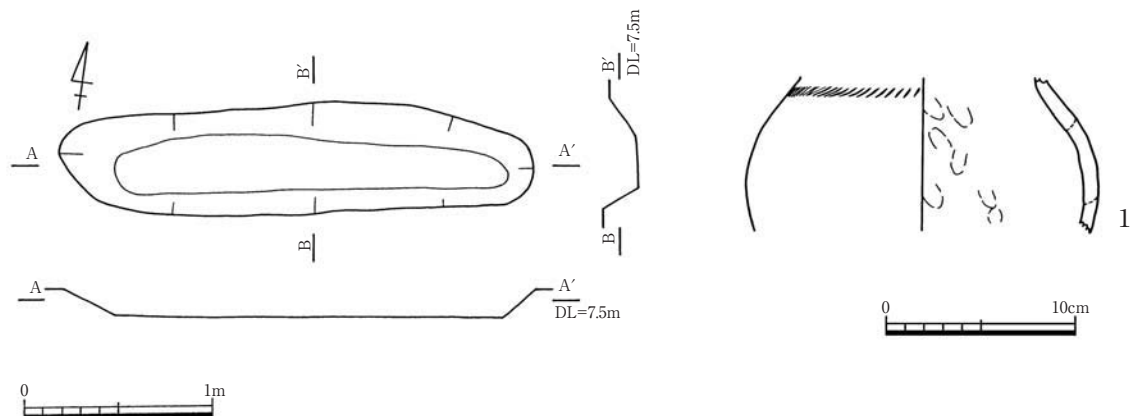
埋土；暗褐色粘質土

付属遺構；ピット状の小落ち込み8ヶ所 機能；—

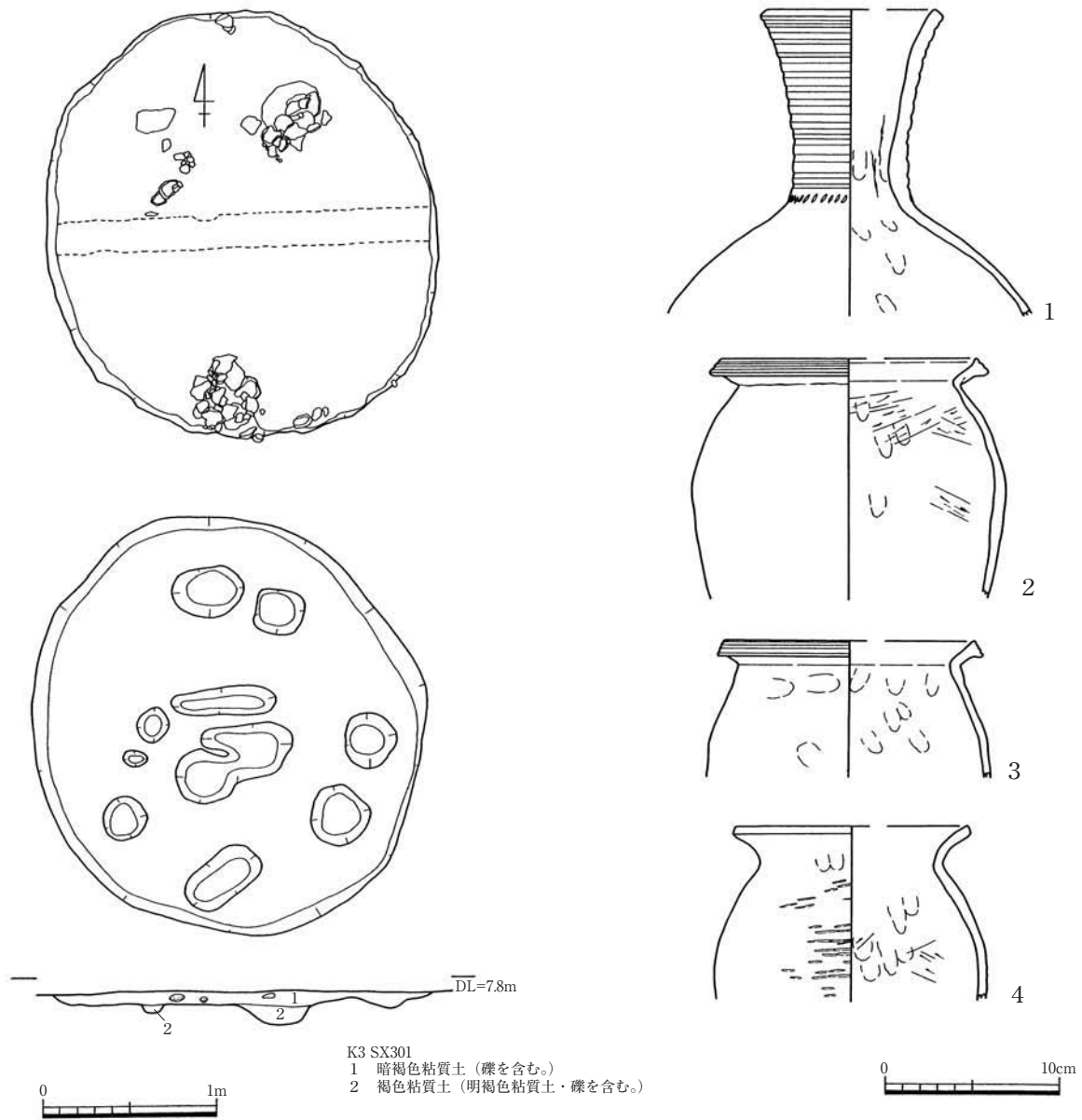
出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区の中央部近くに位置する。周辺域には掘立柱建物群が展開している。径2.4mの浅い土坑か極めて小型の住居跡の形態をしている。焼土とは認められず、また床面は起伏が有り、小ピット状の凹凸となっている。壁はなだらかに立ち上がる。

1は壺である。頸部全面に凹線文を巡らせる。また、頸部と胴部の境に列点文を施す。2～4は甕である。2・3の口縁部は「く」の字に外反する。口唇部を拡張し、凹線文を施す。2の内面は頸部直下にケズリ調整が認められるが、下半部のケズリ痕跡は不明瞭である。4の口縁部は「く」の字に外反する。体部外面は細身の叩き成形であり、その後ナデ調整を施した可能性がある。口縁部の調整は甘く、凹凸が認められる。内面は肩部にしぼり目が残存し、上半部以下にケズリ調整を施す。



K3-27 図 K3SK306



K3-28 図 K3SX301

(4) 溝跡

K3-4 表 K3 区弥生溝跡一覧

遺構名	幅×深さ(m)	断面形	主軸方向	接続	時期	備考
K3SD304	0.95×0.22	箱形	N-21°-W	—	弥生中期末から後期	
K3SD305	0.49×0.12	皿状	N-21°-W	—	弥生中期末から後期	
K3SD306	0.42×0.17	皿状	N-29°-W	—	弥生中期末から後期	
K3SD130	0.62×0.25	皿状	N-36°-E N-40°-W	—	弥生中期末から後期	

K3SD304(K3-29 図)

時期：弥生中期末から後期前葉 形状：— 主軸方向：N-21°-W

規模；幅 0.95m 深さ；0.22m 断面形態；箱形

埋土；灰黄色シルト・灰色砂質土・褐色砂質土・黄褐色粘砂土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区中央部を東西方向に走る。SD301 と平走し、調査区中央部で合流する。

1 は壺である。口縁部は大きくひらき、口唇部は僅かに拡張する。2 は甕である。口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は凹状を呈し、僅かに摘み上げる。内外面ともナデ調整である。

K3SD305 (K3-30 図)

時期；弥生中期末から後期前葉 形状；— 主軸方向；N-21°-W

規模；幅 0.49m 深さ；0.12m 断面形態；皿状

埋土；灰褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺)

所見；調査区中央部を東西方向に走る。SD301 と平走し、SD102 と合流する。

1 は壺であり、口唇部は丸くおさめる。2 は底部であり、上げ底である。内面はナデ調整である。

K3SD306 (K3-31 図)

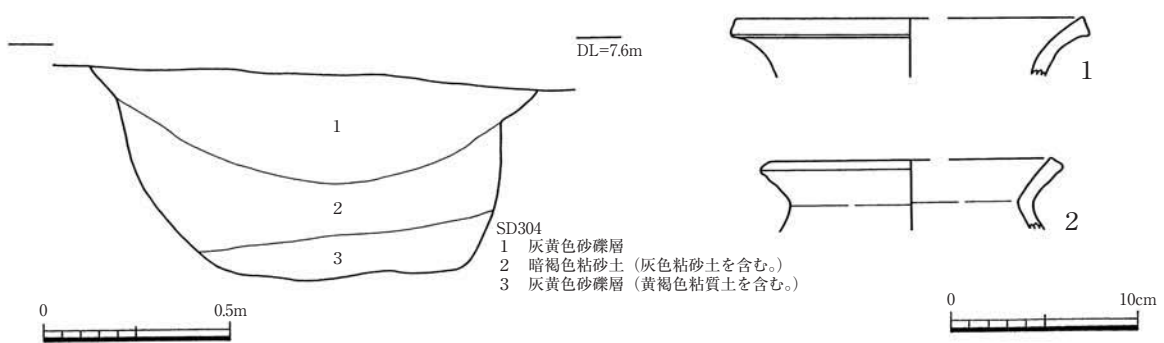
時期；弥生中期末から後期前葉 形状；— 主軸方向；N-29°-W

規模；幅 0.42m 深さ；0.17m 断面形態；皿状

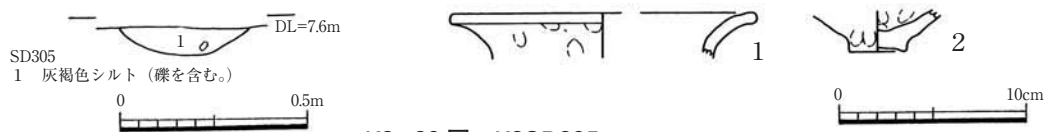
埋土；暗褐色粘質土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(甕、蓋)



K3-29 図 K3SD304



K3-30 図 K3SD305

所見：調査区北東部で検出した。SD301 と平走する。

1は甕である。外面はハケ調整後、ケズリ調整である。内面はナデ調整である。2は蓋である。摘み上端部は突出し、上面の周縁は凹む。

K3SD130(K3-32 図)

時期：弥生中期末から後期前葉 形状：— 主軸方向：N-36°-E・N-40°-W

規模：幅 0.62m 深さ：0.25m 断面形態：皿状

埋土：暗褐色粘質土

付属遺構：— 機能：—

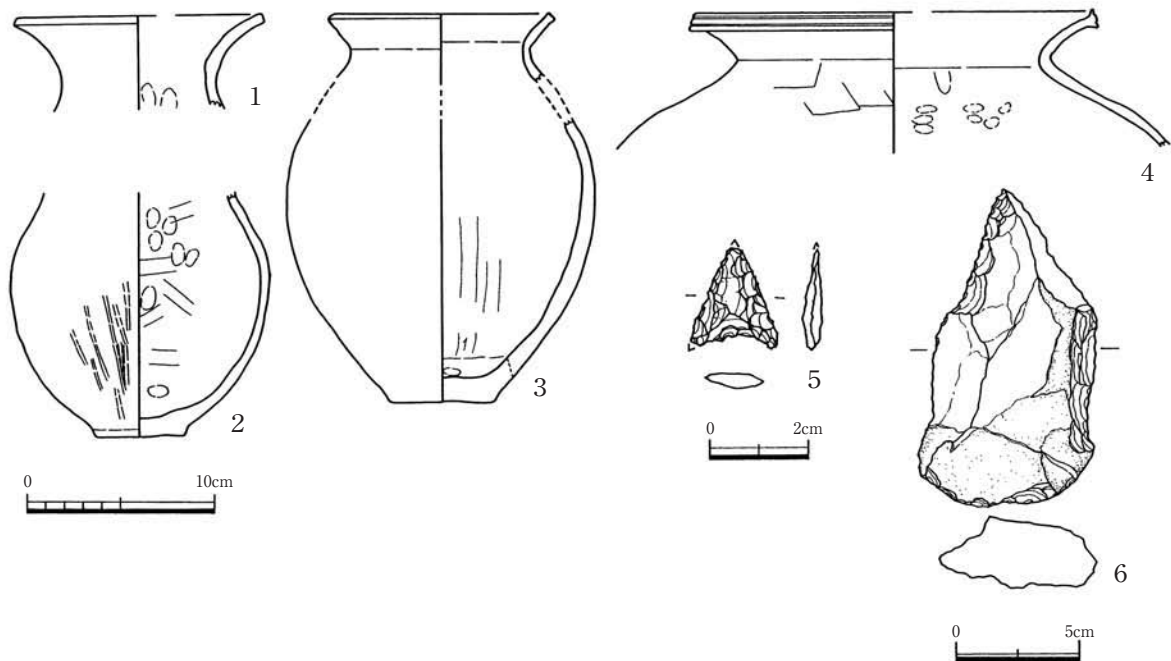
出土遺物：弥生土器(壺)、打製石鏃、打製石斧

所見：調査区南西部で検出した。「L」字状に屈曲する。

出土遺物は1～4の壺が出土している。口唇は肥厚しないもので占められており、4には僅かに凹線文を施す。時期は弥生IV-2～V-1期と考えられるが、V-1期により近いものと推定される。石器は5のサヌカイト製の石鏃と6の打製石斧と考えられるものが出土しているが、石器は共に混入の可能性が強い。



K3-31 図 K3SD306



K3-32 図 K3SD130

(5) ピット

K3P3030(K3-33 図)

時期；弥生後期前葉 形状；円形 主軸方向；—

規模；直径 0.44m 深さ；0.22m 断面形態；—

埋土；褐色粘質土

付属遺構；無し 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、高杯)

所見；調査区南東部で検出した。

1・2は壺である。1の口縁部は直線気味にのび、口唇部は平坦面を成す。外面はタテハケ調整であり、内面はナデ調整である。2の口縁部は大きく外反し、口唇部は平坦面を成す。内外面ともナデ調整である。3・4は甕である。3の口縁部は「く」の字に外反し、頸部に明瞭な稜を持つ。口唇部は平坦面を成す。4の口縁部は外反するが屈曲度はあまい。口唇部は平坦面を成す。5は高杯である。口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。口縁部外面には沈線文・波状文・重弧文を施す。内外面ともミガキ調整である。一部に朱の塗布が認められる。搬入品である。

K3P3060(K3-34 図)

時期；弥生後期？ 形状；円形 主軸方向；—

規模；直径 0.43m 深さ 0.26m 断面形態；—

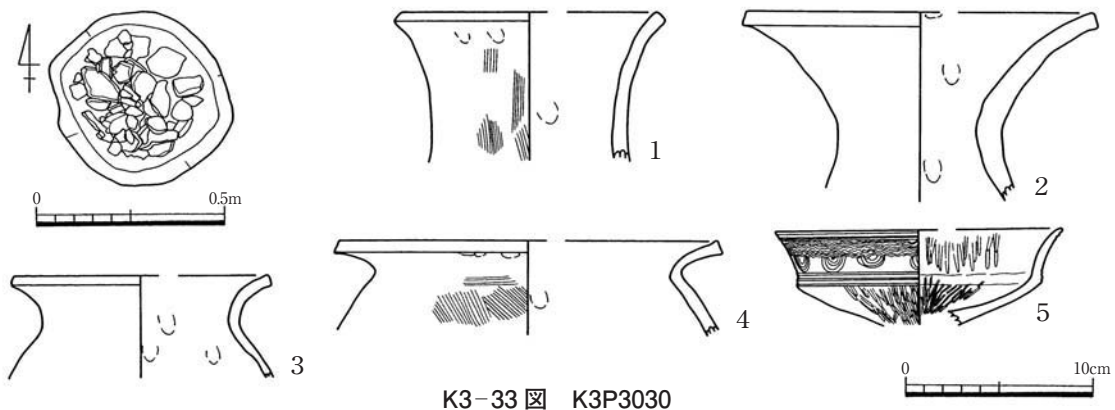
埋土；—

付属遺構；無し 機能；—

出土遺物；弥生土器(高杯)

所見；調査区中央で検出した。ST302と切り合い関係を持つ。

1は高杯である。脚部は「ハ」の字状を呈し、端部は平坦面を成す。内外面ともナデ調整である。



K3-33 図 K3P3030

K3-34 図 K3P3060

3. K3 区古代・中世の遺構と遺物

(1) 溝跡

K3-5 表 K3 区古代・中世溝跡一覧

遺構名	幅×深さ(m)	断面形	主軸方向	接続	時期	備考
K3SD302	0.54×0.08	皿形	N-17°-E	K3SD303	12世紀後半	
K3SD303	0.58×0.05	皿状	N-16°-E	K3SD302	12世紀後半	

K3SD302 (K3-35・36・37 図)

時期；中世 形状；— 主軸方向；N-17°-E

規模；0.54×34.3m以上 深さ；0.08m 断面形態；皿状

埋土；黄灰色シルト・淡灰色砂層・黄褐色粘質土

付属遺構；無し 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺)

所見；調査区西端部で検出した。調査区の西辺に沿って走る。SD303 と 2 箇所で見交差する。図化できた遺物は弥生土器であるが、SD303 との関連等から、時期は中世と考えられる。礫が多量に検出された。

1・2 は壺である。1 の口縁部外面に粘土帯を貼付し、口唇部に斜格子目文を施す。2 の口唇部はヨコナデ調整により凹状を成す。

K3SD303 (K3-35・36・38 図)

時期；中世 形状；— 主軸方向；N-16°-E

規模；6.3×34.3m以上 深さ；0.14m 断面形態；皿状

埋土；黄灰色シルト・淡灰色シルト・淡灰色砂層

付属遺構；無し 機能；—

出土遺物；須恵器(甕)、白磁(碗)

所見；調査区西端部で検出した。調査区の西辺に沿って走る。SD302 と 2 箇所で見交差する。SD302 と同様、礫が多量に検出された。

1 は須恵器甕である。口縁部は玉縁状を呈する。内外面ともヨコナデ調整である。2 は白磁碗Ⅳ類である。灰白色の釉薬を施す。外面体部下半は一部を除いて露胎である。

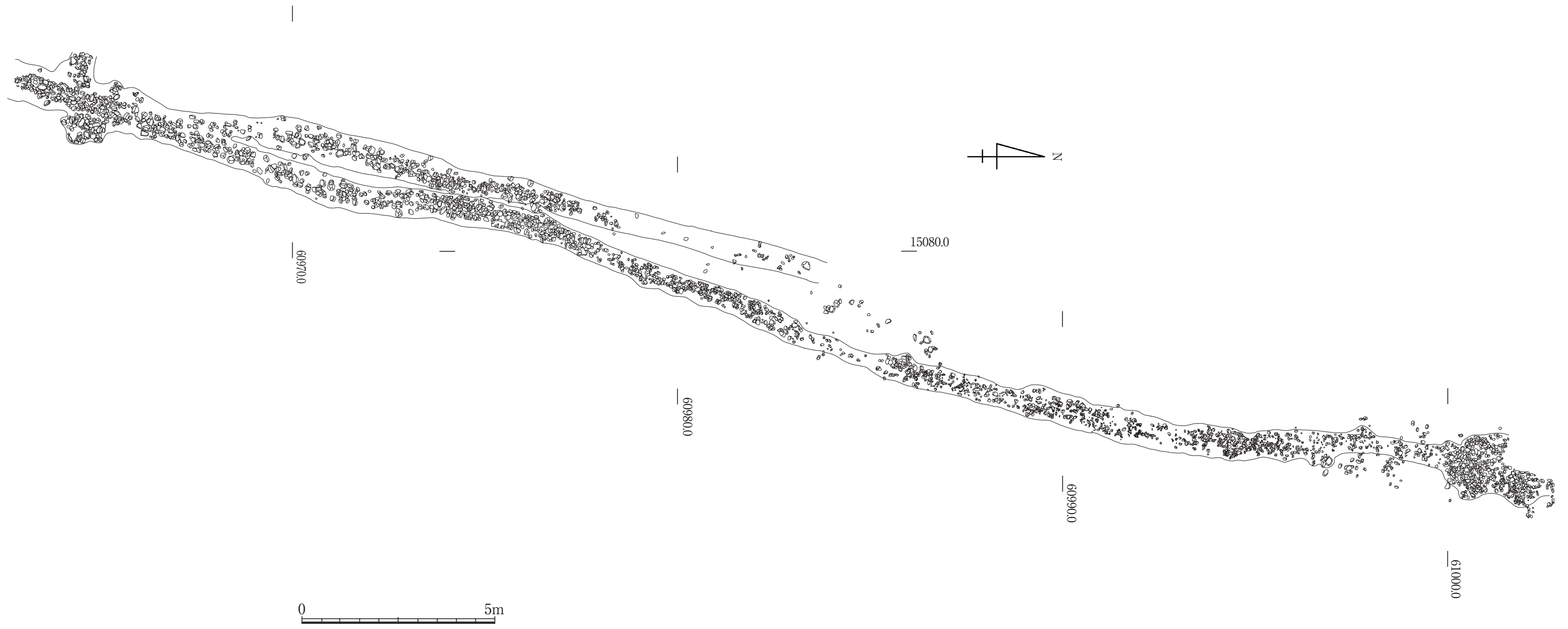
(2) ピット

K3P3002 (K3-39 図)

時期；中世 形状；円形 主軸方向；—

規模；直径 0.47m 深さ；0.19m 断面形態；—

埋土；褐色粘質土



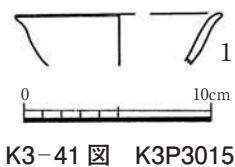
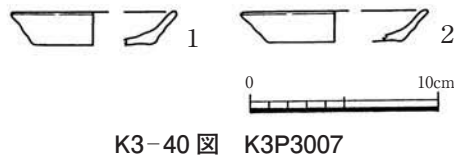
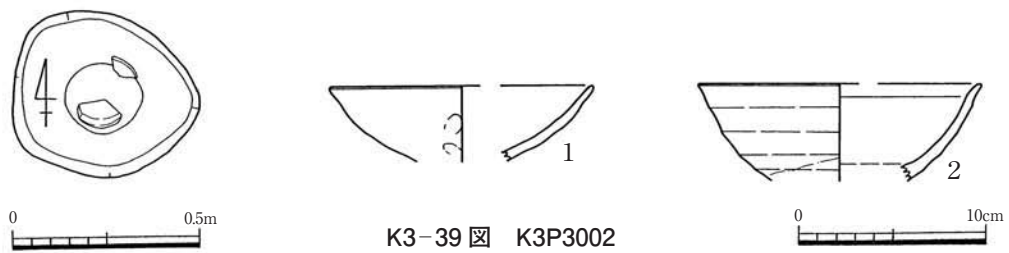
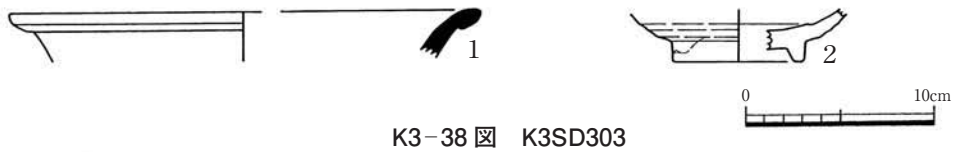
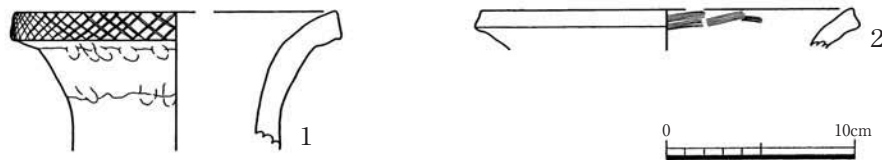
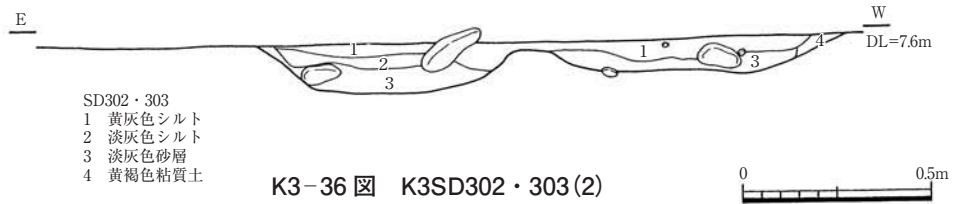
K3-35 図 K3SD302・303(1) 礫出土状況

付属遺構：無し 機能：—

出土遺物：瓦器(椀)、白磁(碗)

所見：調査区南東部で検出した。

1は瓦器椀である。口縁部外面にヨコナデ調整を施す。外面に指頭圧痕が認められる。2は白磁碗であり、口縁端部を外反させる。残存部分では、内面及び外面上半部に施釉する。



K3P3007(K3-40 図)

時期；中世 形状；円形 主軸方向；—

規模；直径 0.40m 深さ；0.22m 断面形態；—

埋土；褐色粘質土

付属遺構；無し 機能；—

出土遺物；土師質土器(小皿)

所見；調査区南東部で検出した。

1・2 は土師質土器の小皿である。ロクロナデ調整を施す。

K3P3015(K3-41 図)

時期；中世 形状；円形 主軸方向；—

規模；直径 0.23m 深さ；0.10m 断面形態；—

埋土；褐色粘質土

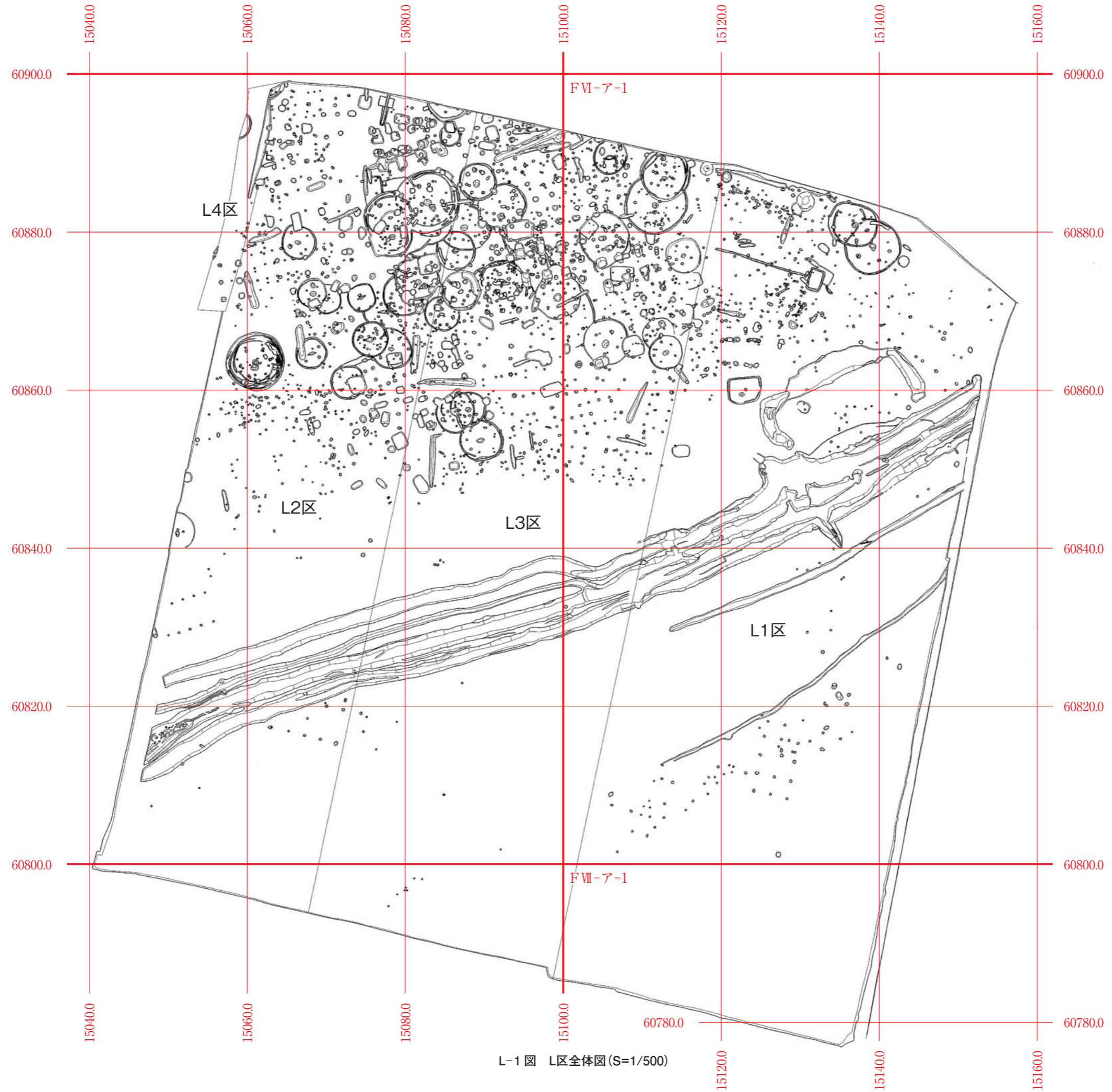
付属遺構；無し 機能；—

出土遺物；土師質土器(椀)

所見；調査区南東部で検出した。

1 は土師質土器の椀であり、口縁端部を外反させる。

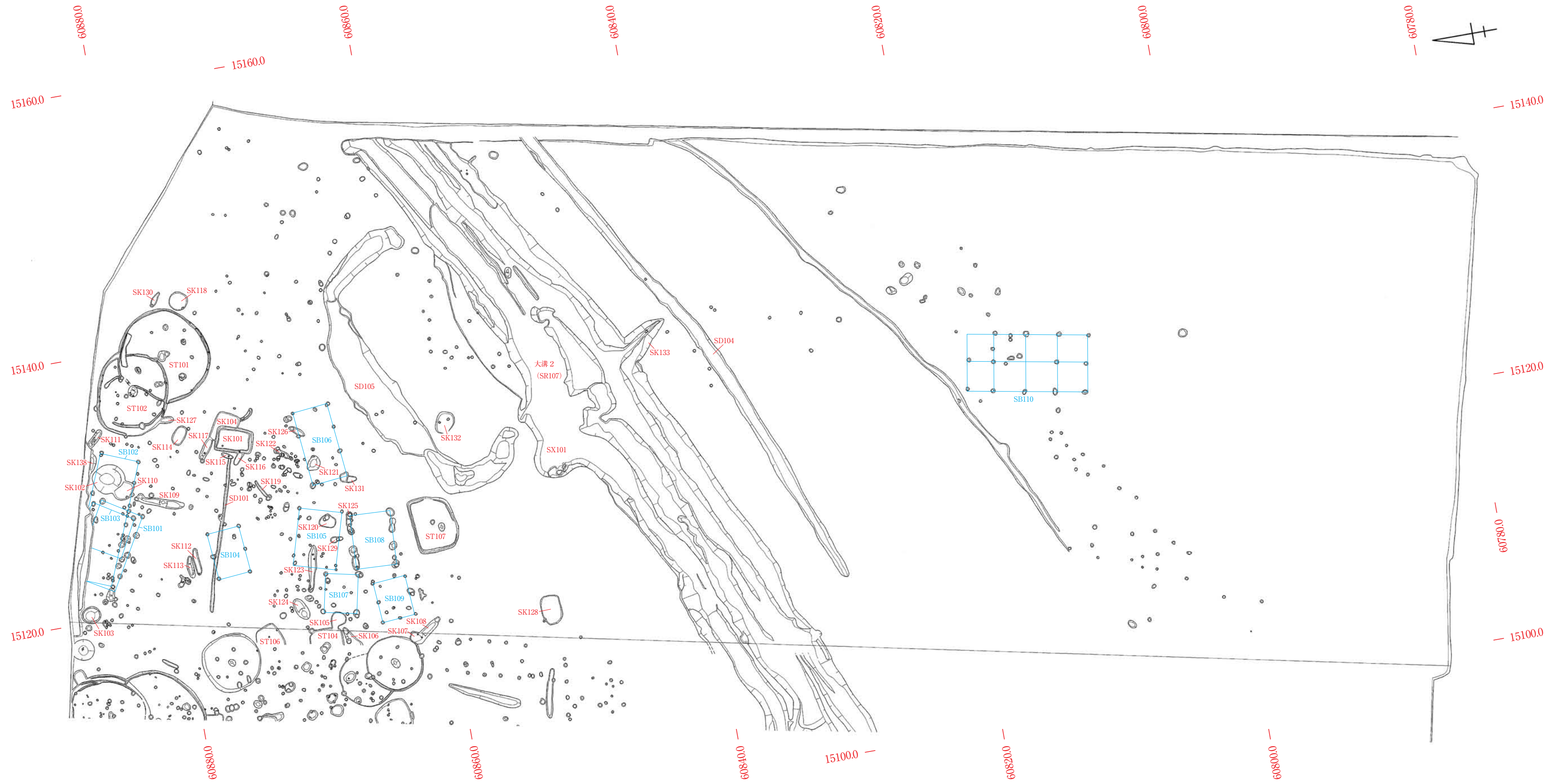
L区の調査



L-1 図 L区全体図(S=1/500)

L1 区の調査





L1-1 図 L1 区遺構全体配置図 (S=1/250)

1. L1 区の概要

概要

L1 区はL区の東端に位置し、西はL3 区と接する。道を隔てた北はK区である。調査区の北では標高約 7.2m、南部では約 6.8mを測り、北から南に向かって地形的に落ち込む。大溝 2 を境に低く落ち込む調査区南部では、2 枚の包含層が確認できた。II層からはわずかに土師器が、III層からは弥生IV～V様式のものともみられる土器が少量であるが出土した。ただしいずれも細片のため、復元図示できるものはなかった。

地形の高低差は遺構の分布に影響を与えている。弥生時代のL1 区はK区から続く集落の外れであったと考えられ、弥生時代の遺構は比較的微高地に当たる調査区北部に集中する。大溝 2 から南の低地部にはほとんど認められず、若干みられる土坑・ピット状のものは明確な掘り込みが確認できないことから人為的な掘削ではない可能性が高い。調査区の中央部で検出した大溝 2 は、排水施設として利用される他に、集落を区画する意図を持ったものであったと考えられる。大溝 2 より南に明確な遺構が認められるのは、中世からである。

弥生時代の遺構は調査区北半部で検出した。集落の外れに当たるため、竪穴住居跡は 2～5 軒、掘立柱建物跡 9 棟と遺構密度は低い。竪穴住居跡は小～中規模で、円形、方形のものが認められる。切り合いはほとんどみられない。掘立柱建物跡は 1 間×1 間の倉庫とみられるものから、1 間×6 間の比較的大型のものまでみられる。いずれも梁間は 1 間である点が共通する。建物の棟方向は区々であるが、N-58～74°-Wに納まるものが約半数を占める。

居住域は大溝 2 より 10m程北で終わり、居住域と大溝の間の空間は遺構分布密度が極めて低い。SD105 はその空間に所在する。SD105 は大溝 2 にほぼ並行し、南に向かってコの字状の平面プランを呈する。埋土は黒褐色シルトが主体で、水が常時流れていた形跡はみられなかった。遺物は比較的多く出土している。調査当初は方形周溝墓の可能性も考えられたが、主体部に当たる部分に埋葬施設は認められなかった。

調査区中央部には大溝 2 が所在し、北東から南西に向かって調査区を横断する。大溝の中央部では南北に張り出すプランが確認できた。SK133、SX101 は、大溝を挟んでほぼ対応する位置にあり、溝に付属する施設の可能性が考えられる。

調査担当者 坂本裕一、小野由香

執筆担当者 小野由香

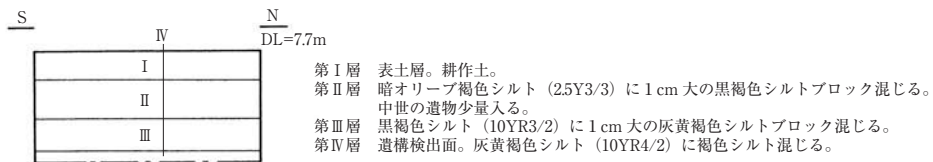
調査期間 平成 9 年 10 月 29 日～平成 10 年 2 月 6 日

下層調査 平成 10 年 3 月 12 日～平成 10 年 3 月 17 日

調査面積 4,066㎡

時代 弥生時代中～後期、中～近世

検出遺構 竪穴住居跡 5 軒、掘立柱建物跡 10 棟、
土坑 36 基、性格不明遺構 1 基、溝跡 5 条(うち 1 条は大溝 2)、ピット 160 個



L1-2 図 調査区西壁柱状図

2. L1 区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

L1 区では 5 軒の竪穴住居跡を検出した。そのうち 3 軒は調査区西端で確認したもので、住居の平面プラン等は不明瞭である。また隣接する L3 区で確認されていないことから、大型の土坑の可能性もある。集落の外れに当たるため、住居は ST101・102 を除いて切り合いはみられない。いずれも規模は小～中型で、平面プランは円形、方形が認められる。

L1-1 表 L1 区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(m ²)	平面形	主軸方向	時期	備考
L1ST101	7.08	0.2	39.3	円形	—	弥生V-1～2	
L1ST102	(6.4)×5.36	0.2	(28.7)	楕円形	—	弥生IV～V	
L1ST104	2.54×(1.13)	0.31	(2.6)	方形?	—	弥生IV～V?	
L1ST106	(1.85)×1.84	0.12	(2.1)	方形	—	弥生V?	
L1ST107	4.04×3.33	0.25	12.4	方形	—	弥生V	

L1ST101(L1-3・4 図)

時期；弥生V-1～2 形状；円形 主軸方向；—

規模；7.08m 深さ；0.2m 面積；39.3m²

埋土；暗褐色シルト主体。埋土 2・3 に黄色シルトブロック混じる。

ピット；数 8 主柱穴数；6 主柱穴；P1～6

床面；1 面

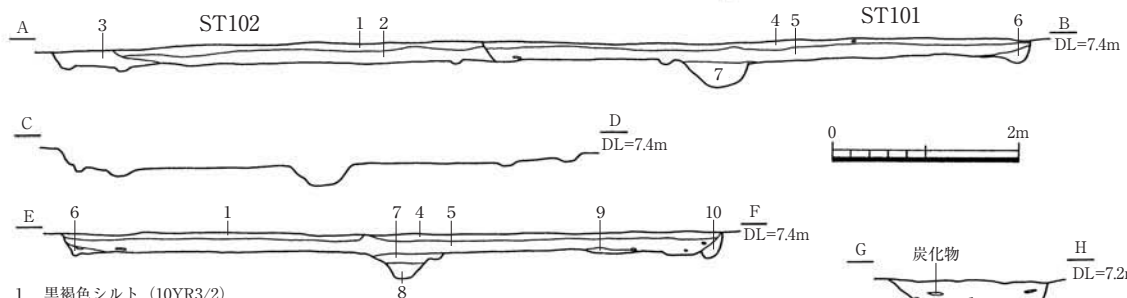
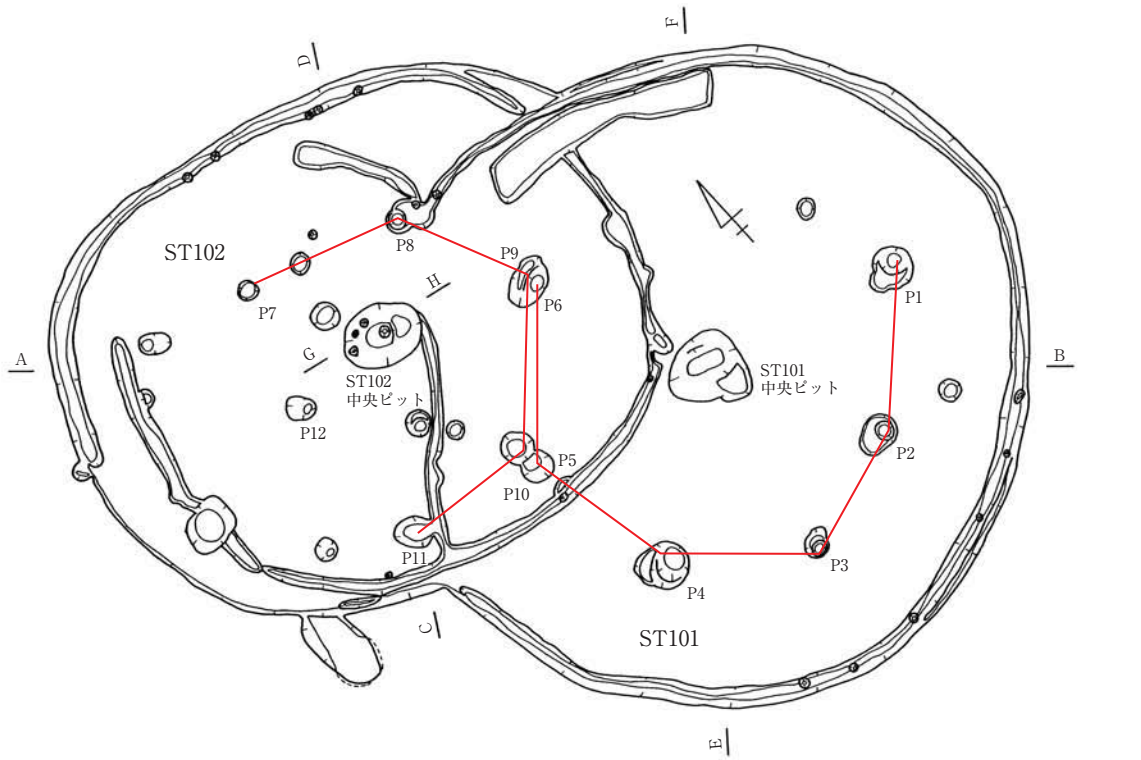
中央ピット；形状 楕円形 規模 84×48cm 深さ 26cm 埋土 黒褐色シルト

壁溝；1 条 幅 11～26cm 深さ 5～8cm

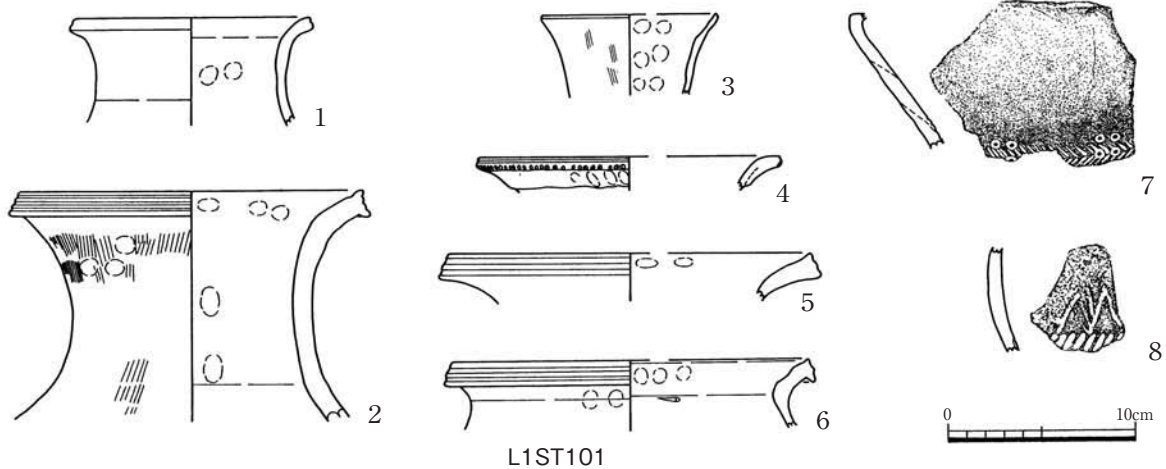
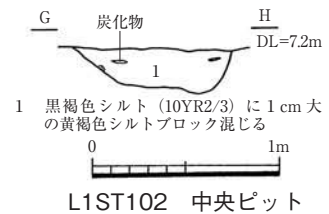
出土遺物；弥生土器(壺、甕、高杯)、叩石 1、サヌカイト剥片 1

所見；調査区北部で検出した竪穴住居跡で、ST102 を切る。P1～6 が主柱穴とみられる。また P1 と P6 の間には柱穴がもう 1 個存在した可能性がある。柱穴の規模は直径 29～49cm、深さ 26～53cm を測る。埋土は暗褐色シルトである。住居床面からは焼土・炭化材が僅かであるが出土した。ST101 の床面に被熱の痕跡もみられないことから、これらの焼土・炭化物は周辺の焼失住居等のものを廃棄したと考えられる。また炉跡である中央ピット周辺の床面では、炭化物が少量であるが認められた。中央ピットからはサヌカイト剥片が 1 点出土している。

遺物は比較的多く出土した。そのうち、復元図示できたのは 18 点である。1～5、7～9 は壺である。1・3 の素口縁のもの、2・5 の凹線文を施すもの、4 の口縁部外面に粘土帯を貼付するものがみられる。また 7・9 のような肩部の張った器形で、綾杉文と竹管文の文様構成を持つ壺は、第 7 分冊で報告する大溝 2 からも出土している。16・17 は高杯である。



- 1 黒褐色シルト (10YR3/2)
- 2 L1ST102 埋土。暗褐色シルト (10YR3/3) に黄色シルトブロック混じり、焼土・炭化物・遺物入る
- 3 L1ST102 埋土。暗褐色シルト (10YR3/3) に黄色シルトブロック混じる
- 4 L1ST101 埋土。暗褐色シルト (10YR3/4) に黄色シルトブロック、遺物混じる
- 5 L1ST101 埋土。暗褐色シルト (10YR3/3) に黄色シルトブロック混じり、焼土・炭化物・遺物入る
- 6 L1ST101 埋土。黒褐色シルト (10YR2/3)
- 7 L1ST101 埋土。黒褐色シルト (10YR3/2)
- 8 L1ST101 埋土。黒褐色シルト (10YR3/2) で下層に黒色シルトが層状に堆積する
- 9 L1ST101 埋土。黒褐色粘土質シルト (10YR2/2)
- 10 L1ST101 埋土。黒褐色シルト (10YR2/2)



L1-3 図 L1ST101・102(1)

L1ST102(L1-3・4 図)

時期；弥生IV～V 形状；楕円形 主軸方向；—

規模；(6.4)×5.36m 深さ；0.2m 面積；(28.7)㎡

埋土；暗褐色シルト主体。埋土2には焼土・炭化物・黄色シルトブロック混じる。

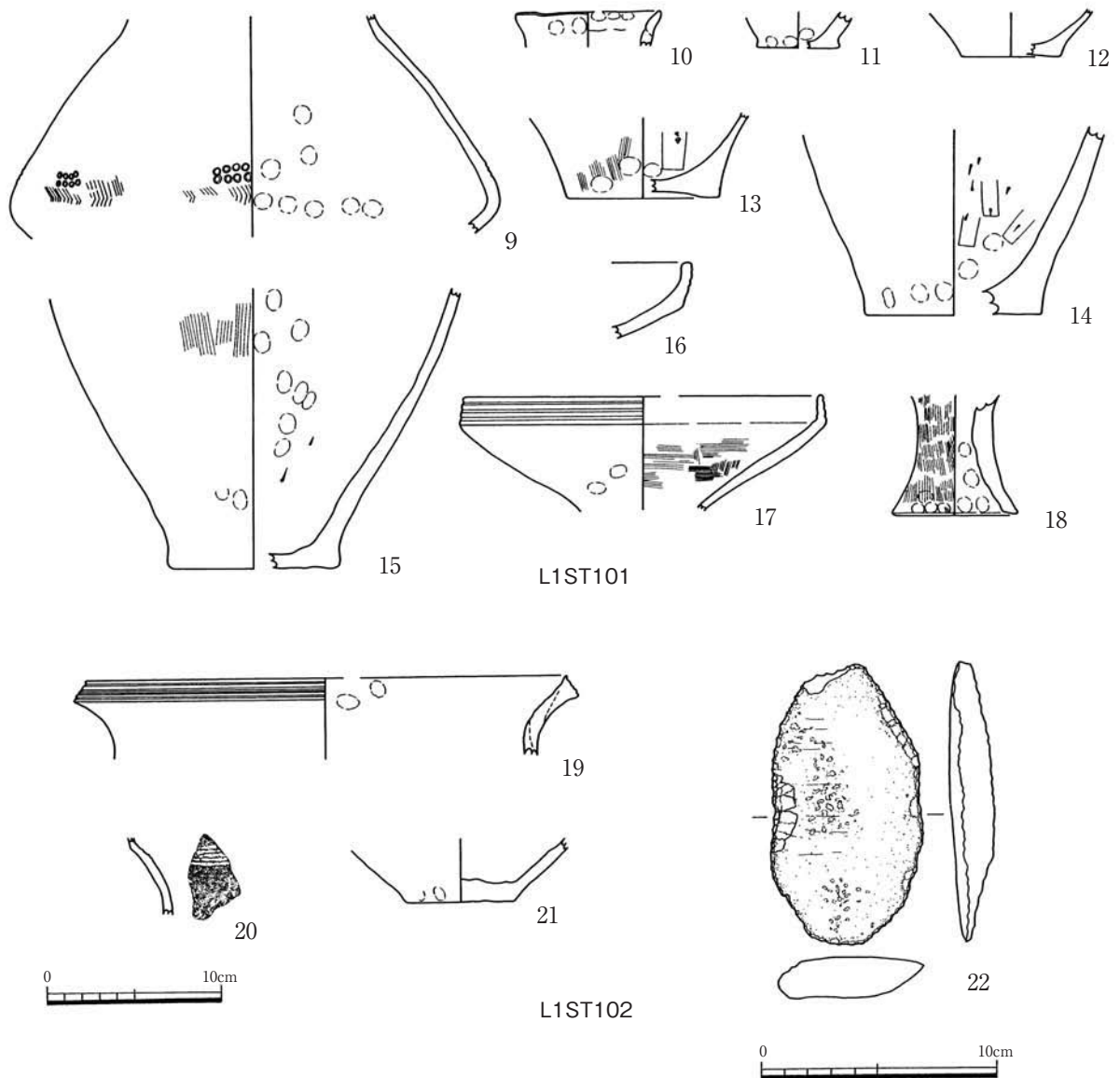
ピット；数15 主柱穴数；5 主柱穴；P7～11

床面；2面？

中央ピット；形状 楕円形 規模 87×66cm 深さ 20cm 埋土 黒褐色シルトに黄褐色シルトブロック混じる。

壁溝；2条？ 幅 10～25cm 深さ 3cm

出土遺物；弥生土器(壺、甕)、叩石1、石斧素材1



L1-4 図 L1ST101・102(2)

所見：調査区北部で検出した竪穴住居跡で、ST101 に切られる。平面形は楕円形を呈する。P7～11 が支柱穴とみられる。P7 と 11 の間の柱穴は認められなかった。規模は直径 18～33cm、深さ 26～45cm を測る。埋土は暗褐色シルトである。中央ピット及び P12 東半部の基底面で検出した炭化物層は、中央ピット南の住居床面まで広がるのを確認した。

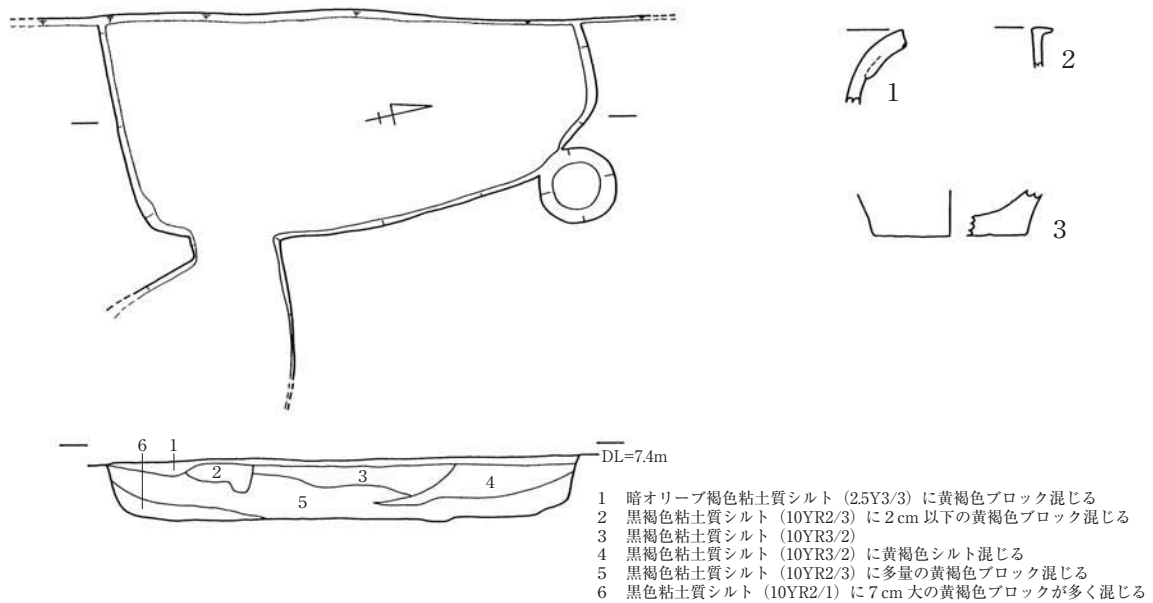
遺物は少量の出土にとどまる。出土遺物のうち、復元図示できたのは 19～22 の 4 点である。19 は口縁端部に凹線文を施す甕である。22 は叩石である。

L1ST104 (L1-5 図)

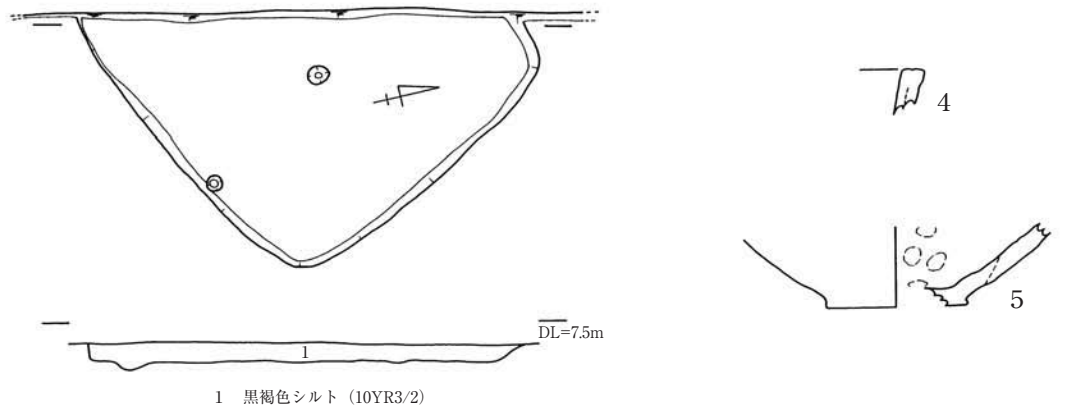
時期：弥生IV～V？ 形状：方形？ 主軸方向：—

規模：2.54×(1.13) 深さ：0.31m 面積：(2.6)m²

埋土：黒褐色シルト主体。全体に黄褐色シルトブロック混じる。



L1ST104



L1ST106

L1-5 図 L1ST104・106

ピット；—

床面；1面

中央ピット；—

壁溝；—

出土遺物；弥生土器(甕)、叩石 1

所見；調査区北部西端で検出した遺構である。L1 区で検出したのは遺構の約 1/3 で、調査区外に延びるとみられたが、西隣のL3 区では認められなかった。壁溝、主柱穴等は検出しておらず、大型の土坑の可能性もある。

遺物は弥生土器の胴部片が少量出土したにとどまり、そのうち復元図示できたのは 3 点である。

L1ST106(L1-5 図)

時期；弥生V？ 形状；方形 主軸方向；—

規模；(1.85)×1.84 深さ；0.12m 面積；(2.1)m²

埋土；黒褐色シルト

ピット；2

床面；1面

中央ピット；—

壁溝；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区北部西端で検出した遺構である。L1 区で検出したのは遺構の約 1/2 で、調査区外に延びるとみられたが、西隣のL3 区では認められなかった。床面では小ピット 2 個を検出したが、機能等是不明瞭である。壁溝、中央ピット等は検出しておらず、土坑の可能性もある。

遺物は少量の出土にとどまり、復元図示できたのは 2 点である。5 は壺とみられる。

L1ST107(L1-6 図)

時期；弥生V 形状；方形 主軸方向；—

規模；4.04×3.33m 深さ；0.25m 面積；12.4m²

埋土；黒褐色シルト主体

ピット；数 2 主柱穴数；—

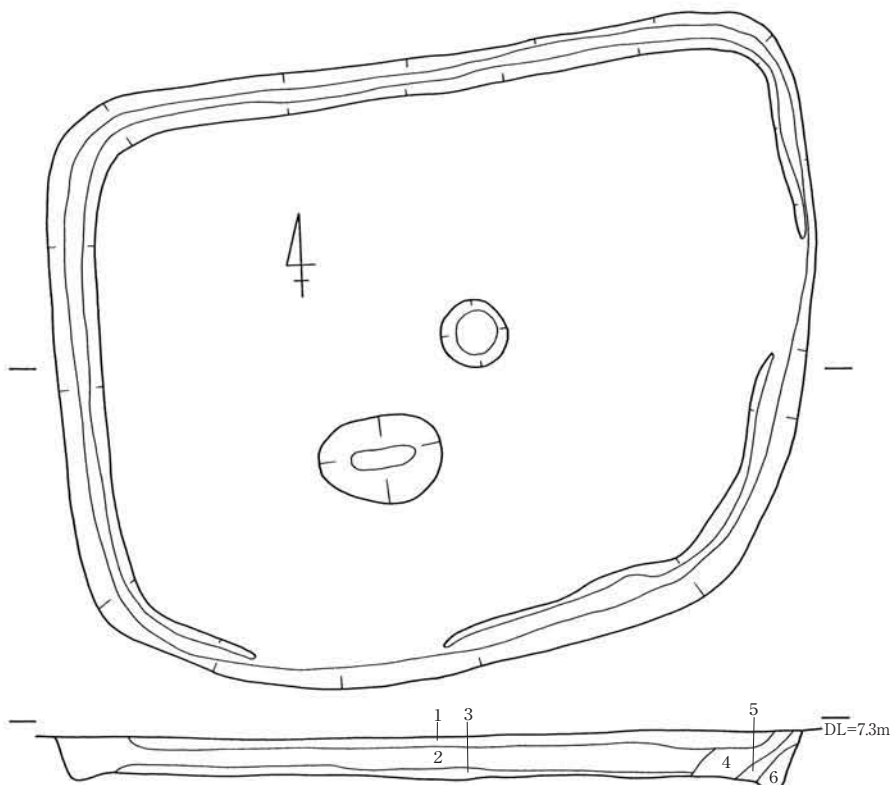
床面；1面

中央ピット；—

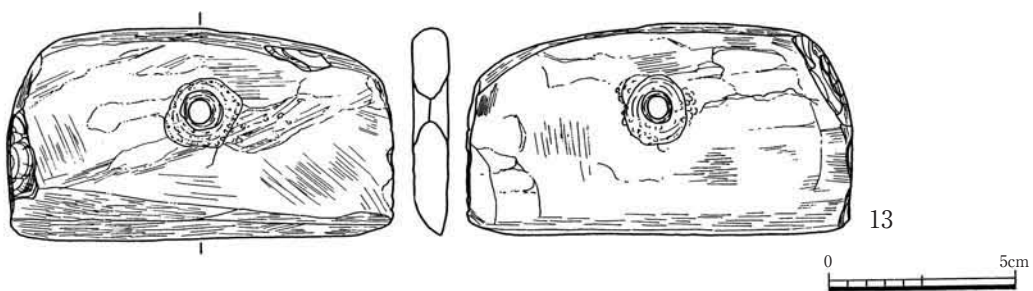
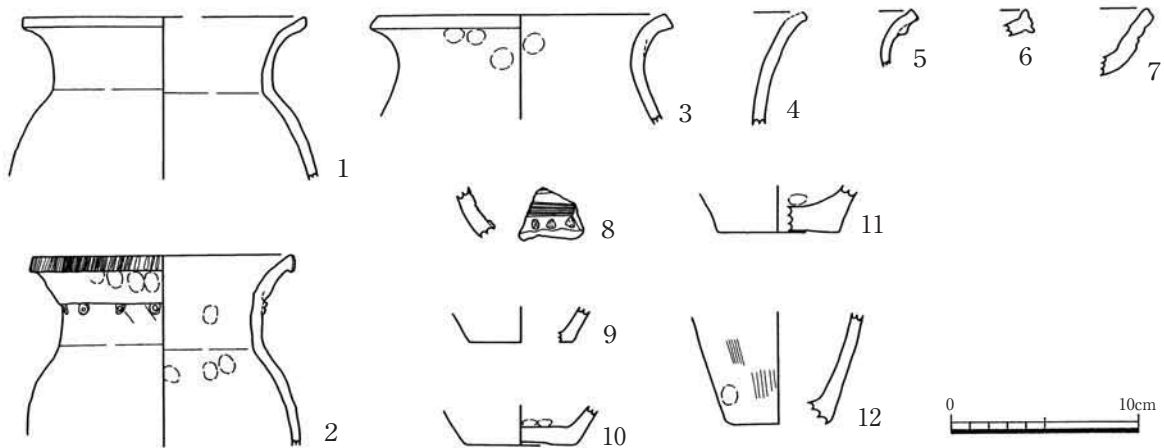
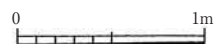
壁溝；1条 幅 8～22cm 深さ 5cm

出土遺物；弥生土器(甕、鉢、高杯)、石包丁 1、叩石？ 1

所見；調査区北部で検出した遺構で、切り合いはみられない。床面ではピット 2 個と、壁溝 1 条を検出した。住居の中央部で検出したピットは炉としては機能しておらず、中央ピットになるかは不明瞭である。住居ではなく、大型の土坑として利用された可能性も考えられる。



- 1 黒褐色粘土質シルト (10YR2/3)
- 2 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2)
- 3 暗褐色粘土質シルト (10YR3/3)
- 4 黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) に黄褐色シルト混じる
- 5 暗褐色シルト (10YR3/4)
- 6 灰黄褐色粘土質シルト (10YR4/2)



L1-6 図 L1ST107

遺物は少量の出土にとどまる。そのうち復元図示できたのは、14点である。土器の口縁部又は端部に凹線文を施すもの(6・7)、外面に粘土帯を貼付し肥厚させるもの(2)がみられる。13は有側の磨製石包丁である。

(2) 掘立柱建物跡

L1区では10棟の掘立柱建物跡を検出した。そのうち弥生時代の掘立柱建物跡は9棟を数える。いずれも東西棟建物で、特に調査区北端では3棟の建物がほぼ同じ位置で切り合い、一部調査区外に延びるとみられる。またSB108のように、北側柱を布掘り状に掘削する例もある。

L1-2表 L1区掘立柱建物跡一覧

遺構名	梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	柱間寸法 梁間×桁行(m)	主軸方向	付属遺構	時期	備考
L1SB101	1×5	3.33×8.53	3.33×1.5~1.86	N-58°-W	—	弥生IV?	
L1SB102	1×6	2.95×9.81	2.95×1.5~1.75	N-69°-W	—	弥生IV~V	
L1SB103	1×2	3.25×3.34	3.25×1.61~1.73	N-63°-W	—	弥生IV~V	
L1SB104	1×2	2.45×3.51	2.45×1.74	N-86°-E	—	弥生IV~V	
L1SB105	1×2	3.15×4.21	3.15×2.05~2.15	N-76°-W	—	弥生	
L1SB106	1×3	2.86×5.68	2.86×1.8~2.03	N-85°-E	—	弥生IV~V	
L1SB107	1×1	2.64×3.0	2.64×3.0	N-74°-W	—	弥生IV~V	
L1SB108	1×3	3.1×4.13	3.1×1.3~1.48	N-87°-W	—	弥生IV~V	
L1SB109	1×2	2.54×3.05	1.25×1.34~1.7	N-85°-E	—	弥生	

L1SB101(L1-7図)

時期；弥生IV? 棟方向；N-58°-W

規模；梁間1×桁行5 梁間3.33m×桁行8.53m 面積；28.4㎡

柱間寸法；梁間3.33m 桁行1.5~1.86m

柱穴数；8 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区北端部で検出した東西棟建物である。1間×5間の比較的大型の建物で、北側柱の柱穴4個が確認できなかったが、調査区外に延びるとみられる。SB102・103と切り合う。SB102との先後関係は不明である。柱穴の埋土はいずれも黒褐色シルトである。

遺物は柱穴から弥生土器の胴部細片が少量出土したが、復元図示できるものはなかった。

L1SB102(L1-7図)

時期；弥生IV~V 棟方向；N-69°-W

規模；梁間1×桁行6 梁間2.95m×桁行9.81m 面積；28.9㎡

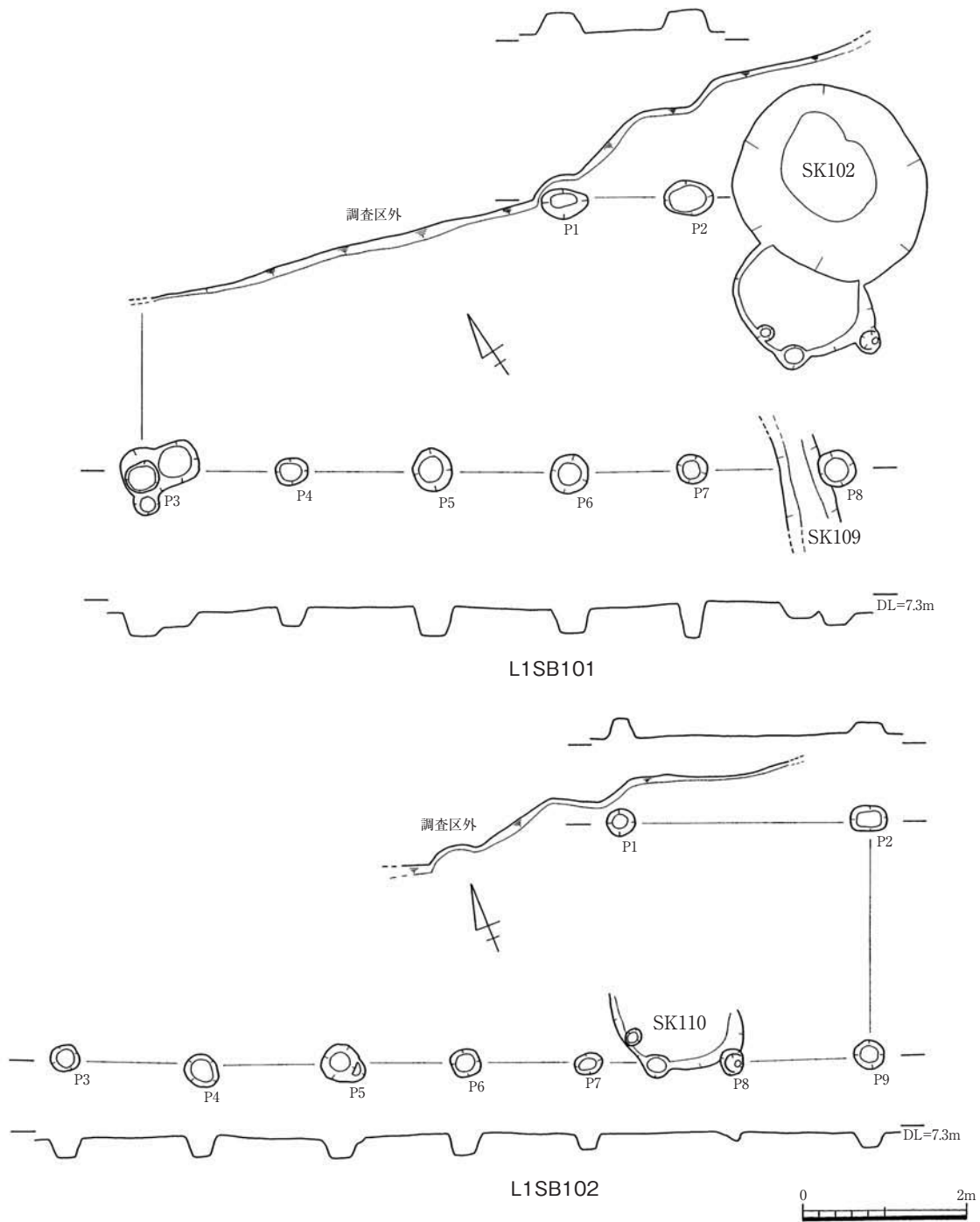
柱間寸法；梁間2.95m 桁行1.5~1.75m

柱穴数；9 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器

所見：調査区北端部で検出した東西棟建物である。1間×6間の大型の建物とみられるが、建物の北半部は調査区外に当たるため不明瞭である。北側柱の東から1間目の柱穴は確認できなかった。SB101・103、SK110と切り合うが、先後関係は不明瞭である。柱穴の埋土は黒褐色シルトである。遺物は柱穴から弥生土器の胴部細片が少量出土したが、復元図示できるものはなかった。



L1-7 図 L1SB101・102

L1SB103(L1-8 図)

時期；弥生IV～V 棟方向；N-63°-W

規模；梁間1×桁行2 梁間3.25m×桁行3.34m 面積；10.9㎡

柱間寸法；梁間3.25m 桁行1.61～1.73m

柱穴数；4 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区北端部で検出した東西棟建物である。北側柱は北東隅を除き調査区外に当たるため未検出だが、1間×2間以上の建物になるとみられる。SB101・102と切り合う。建物の先後関係は不明である。柱穴の埋土はオリーブ褐色～黒褐色シルトである。

遺物は柱穴から弥生土器の胴部細片が少量出土したが、復元図示できるものはなかった。

L1SB104(L1-8 図)

時期；弥生IV～V 棟方向；N-86°-E

規模；梁間1×桁行2 梁間2.45m×桁行3.51m 面積；8.6㎡

柱間寸法；梁間2.45m 桁行1.74m

柱穴数；4 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区北部で検出した東西棟建物で、SD101に切られる。1間×2間の小型の建物である。柱穴の埋土は黒褐色シルトである。

遺物は柱穴2個から弥生土器の胴部細片が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

L1SB105(L1-8 図)

時期；弥生 棟方向；N-76°-W

規模；梁間1×桁行2 梁間3.15m×桁行4.21m 面積；13.2㎡

柱間寸法；梁間3.15m 桁行2.05～2.15m

柱穴数；6 柱穴形；円形

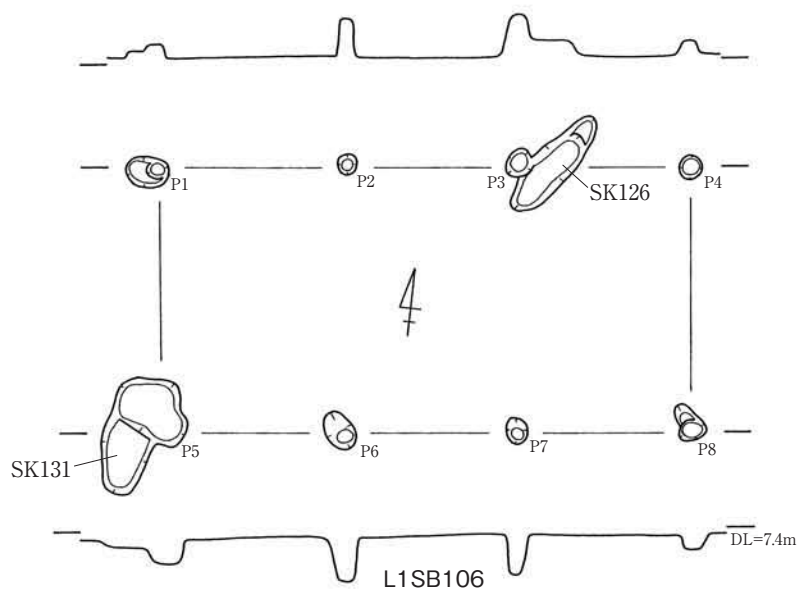
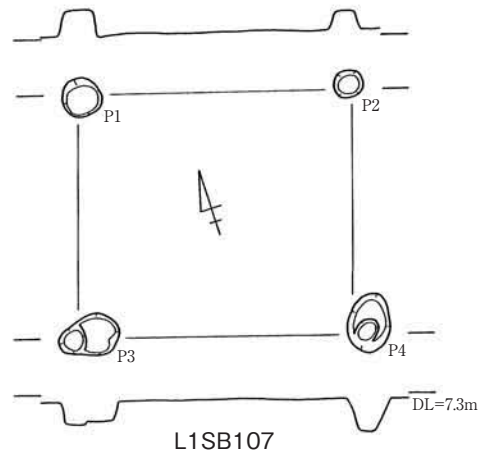
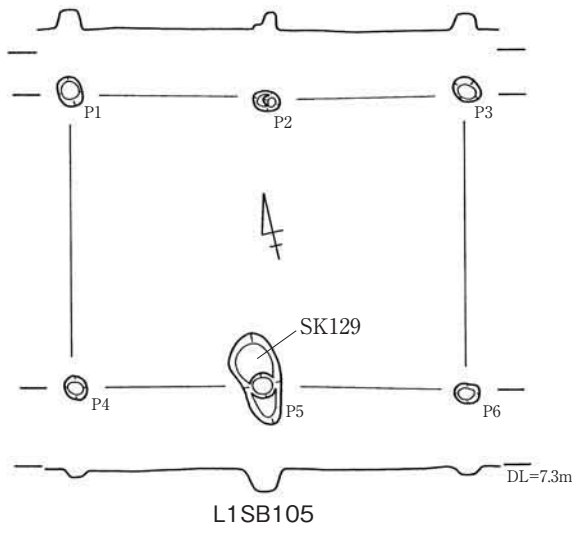
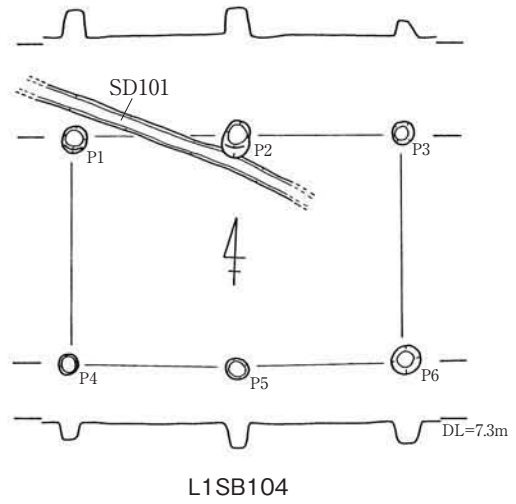
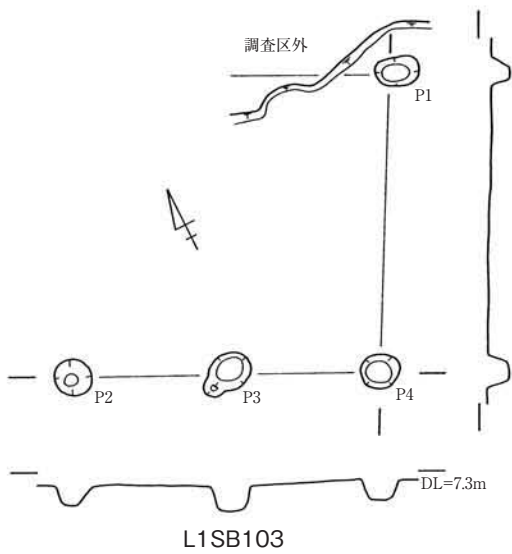
性格；— 付属施設；—

出土遺物；—

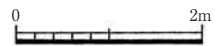
所見；調査区北部で検出した東西棟建物である。SK129を切り、SK123と切り合う。SK123との先後関係は不明である。柱穴の埋土は黒褐色シルトである。遺物の出土は認められず、埋土の色調から弥生時代の掘立柱建物跡と考えられる。

L1SB106(L1-8 図)

時期；弥生IV～V 棟方向；N-85°-E



L1-8 ☒ L1SB103 ~ 107



規模；梁間 1×桁行 3 梁間 2.86m×桁行 5.68m 面積；16.2㎡

柱間寸法；梁間 2.86m 桁行 1.8～2.03m

柱穴数；8 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器(壺)

所見；調査区北部で検出した東西棟建物である。SK121・126 と切り合うが、先後関係は不明である。柱穴の埋土は黒褐色シルトである。

遺物はP7を除く全ての柱穴から出土しており、特にP6・8では比較的多くの遺物が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

L1SB107(L1-8 図)

時期；弥生IV～V 棟方向；N-74°-W

規模；梁間 1×桁行 1 梁間 2.64m×桁行 3.0m 面積；7.9㎡

柱間寸法；梁間 2.64m 桁行 3.0m

柱穴数；4 柱穴形；円形

性格；倉庫？ 付属施設；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区北部で検出した東西棟建物である。1間×1間の小規模な建物で、倉庫的な利用が考えられる。柱穴の埋土は黒褐色シルトである。

遺物は柱穴 1 個から弥生土器が出土したが、復元図示できるものはなかった。

L1SB108(L1-9 図)

時期；弥生IV～V 棟方向；N-87°-W

規模；梁間 1×桁行 3 梁間 3.1m×桁行 4.13m 面積；12.8㎡

柱間寸法；梁間 3.1m 桁行 1.3～1.48m

柱穴数；8 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器(壺)

所見；調査区北部で検出した東西棟建物である。北側柱は 2 個の柱穴が連結し、布掘り状に掘削されている。いずれの柱穴も深く、断面の土層観察から柱穴中央部には柱状に黒褐色シルトの堆積が認められた。その周囲には地山土に黒褐色シルトの混じった、意図的に埋めたとみられる土層がある。黒褐色シルト層の堆積部分には柱があったものとみられる。いくつかの柱穴では、黒褐色シルト層が柱穴の上場部分で大きく広がっているのが認められる。これらは柱の抜き取り痕の可能性が考えられる。

遺物は 6 個の柱穴から弥生土器が出土したが、復元図示できるものはなかった。

L1SB109(L1-9 図)

時期：弥生 棟方向：N-85°-E

規模：梁間1×桁行2 梁間2.54m×桁行3.05m 面積：3.8㎡

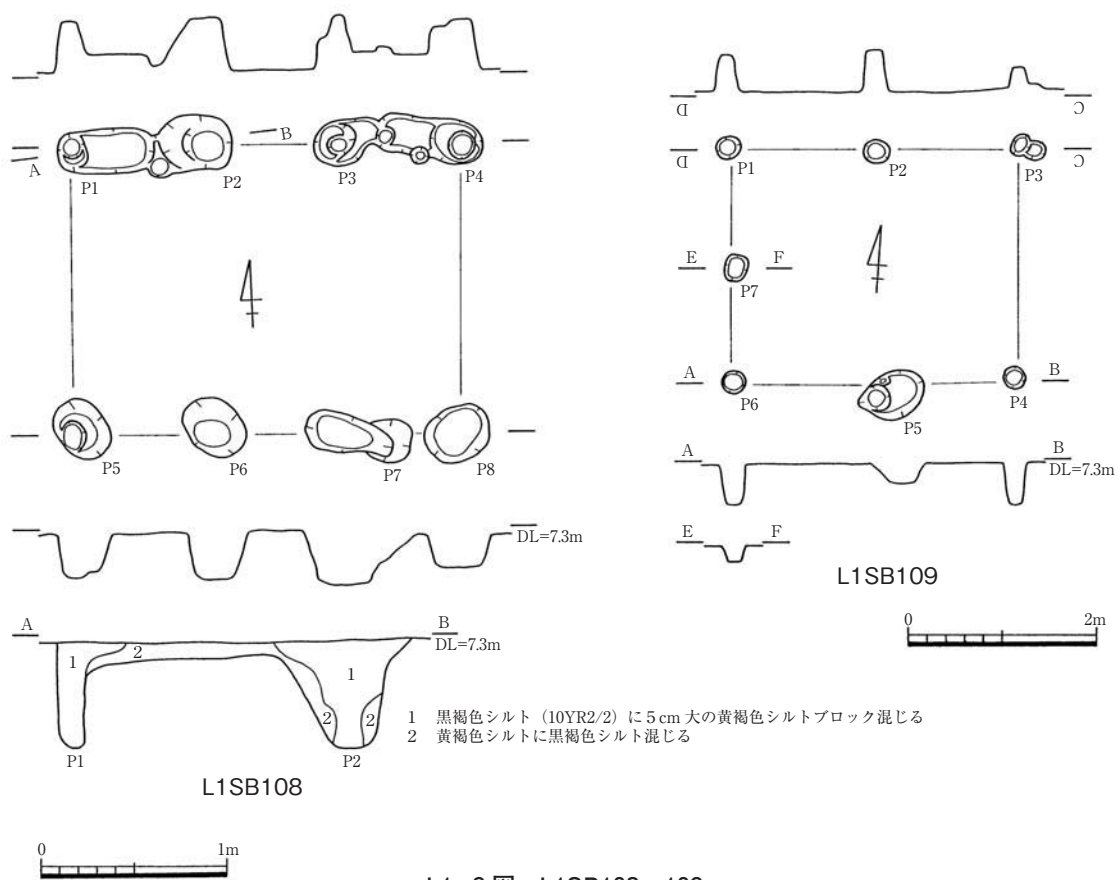
柱間寸法：梁間1.25m 桁行1.34～1.7m

柱穴数：6 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：—

所見：調査区北部で検出した東西棟建物で、SB108の西に位置する。柱穴の埋土は黒褐色シルトが主体である。遺物の出土は認められず、埋土の色調から弥生時代の建物と考えられる。



(3) 土坑・性格不明遺構

弥生時代の土坑は 34 基を数える。遺構は調査区の北に集中しており、特に北西部に認められる。比較的切り合いは少ないが、SK101・104 のようにほぼ同規模のものが切り合う例もある。調査区南半部で検出した遺構状の窪みは、明確な掘り込みはなく、人為的なものではないと考えられる。

土坑の平面プランは楕円形または方形が多く、時期による偏差は認められない。溝状土坑は 1.58～3.6m と長径の短いものが多く、残存状態も悪い。掘立柱建物跡に伴うものはみられなかった。

またSXで表記した性格不明遺構 1 基は、機能的にSK133 と同じものとみられるため、この中で扱うこととする。

L1-3 表 L1 区土坑・性格不明遺構一覧

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
			長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					
L1SK101	長方形	逆台形	2.89	2.01	26	N-19°-E	黒褐色シルト(10YR2/3)	SK104・115・116を切る	弥生IV-2～V	
L1SK103	円形	U字状	1.47	1.25	36	N-1°-W	暗褐色シルト(10YR3/3)	—	弥生	
L1SK104	長方形	逆台形～箱形	2.61	1.78	14	N-59°-W	黒褐色シルト(10YR3/2)	SK101・117に切られる	弥生IV～V	
L1SK105	円形	皿状	1.16	1.04	13	—	黒褐色シルト(10YR2/3)	—	弥生V?	
L1SK106	不整形	皿状	(1.28)	0.64	23	—	黒褐色シルト(10YR2/3)	ST104との切り合い不明	弥生	
L1SK107	楕円形	逆台形	1.15	0.9	23	N-32°-E	黒褐色シルト(10YR2/3)	ST105・SK108を切る	弥生	
L1SK108	溝状	逆台形	(1.78)	0.72	29	N-38°-W	黒褐色シルト(10YR3/2)	SK107に切られる	弥生V	
L1SK109	溝状	U字状	3.58	0.72	27	N-20°-E	黒褐色シルト(10YR2/3)	P1022に切られ、P1051と切り合う	弥生V-1～2	
L1SK110	円形	逆台形	1.8	(1.1)	18	—	黒褐色シルト(10YR3/2)	SK102に切られ、SB102と切り合う	弥生V?	
L1SK111	楕円形	逆台形	1.7	(0.52)	15	N-47°-W	黒褐色シルト(10YR3/1)	—	弥生V	
L1SK112	溝状	U字状	2.14	0.48	26	N-87°-E	黒褐色シルト(10YR2/3)	—	弥生IV～V	
L1SK113	溝状	U字状	1.73	0.47	22	N-90°	黒褐色シルト(10YR3/2)	—	弥生IV～V	
L1SK114	長方形	箱形	1.49	0.94	26	N-55°-W	黒褐色シルト(10YR3/2)	P1070と切り合う	弥生V?	
L1SK115	楕円形?	U字状	1.22	0.68	14	N-29°-E	黒褐色シルト(10YR2/2)	SK101に切られる	弥生	
L1SK116	楕円形?	皿状	(0.8)	0.49	8	N-48°-W	黒褐色シルト(10YR2/2)	SK101に切られる	弥生	
L1SK117	溝状	U字状	1.91	0.54	21	N-53°-W	暗褐色シルト(10YR3/3)	SK104を切る	弥生IV-2～V	
L1SK118	円形	皿状	1.5	1.42	18	—	黒褐色シルト(10YR2/2)	—	弥生IV～V	
L1SK119	溝状	逆台形	1.58	0.29	8	N-60°-E	黒褐色シルト(10YR2/3)	P1019・1020に切られる	弥生IV～V	
L1SK120	楕円形	逆台形	1.3	1.0	36	N-17°-E	黒褐色シルト(10YR2/3)	—	弥生IV～V	
L1SK121	楕円形?	U字状	1.22	0.95	33	N-36°-W	黒褐色シルト(2.5Y3/2)	SB106と切り合う	弥生IV～V	
L1SK122	楕円形	U字状	1.32	0.39	10	N-39°-E	暗灰黄色シルト(2.5Y4/3)	P1067に切られる	弥生V?	

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)					
L1SK123	溝状	逆台形	3.6	0.58	31	N-75°-W	黒褐色シルト (10YR2/2)	SB105と切り合う	弥生V	
L1SK124	楕円形	逆台形	1.8	0.93	83	N-65°-E	黒褐色シルト (10YR2/2)	—	弥生V	
L1SK125	円形	U字状	0.4	0.4	55	—	黄褐色シルト に黒褐色シルト (10YR2/2) 混じる。	—	弥生	SB108-P4
L1SK126	楕円形	U字状	1.29	0.43	7	N-34°-E	暗褐色シルト (10YR3/3)	SB106に切られる	弥生V?	
L1SK127	楕円形	U字状	(1.01)	0.52	20	N-2°-W	黒褐色シルト (10YR3/2)	ST102に切られる	弥生V	
L1SK128	隅丸方形	皿状	2.19	1.57	11	N-84°-E	黒褐色シルト (10YR2/3)	—	弥生IV～V	
L1SK129	楕円形	皿状	0.98	0.5	24	—	黒褐色シルト (10YR3/2)	SB105に切られる	弥生IV～ V?	
L1SK130	楕円形	不明	1.42	0.37	12	N-53°-W	黒褐色シルト (10YR3/2)	—	弥生	
L1SK131	不整形	逆台形	0.82	0.64	22	N-57°-W	暗褐色シルト (10YR3/3)	—	弥生IV～V	
L1SK133	三角形	U字状	3.35	2.11	50	—	黒褐色シルト (10YR3/2)	—	弥生IV～V	大溝2の付 属施設?
L1SK134	楕円形	U字状	1.05	0.73	17	N-26°-W	暗褐色シルト (10YR3/3)	—	弥生IV～V	
L1SX101	不整形	不明	7.3	(3.0)	40	—	褐色シルト (10YR4/4)	—	弥生IV～V	大溝2の付 属施設?
L1SK102	円形	逆台形	2.48	2.25	51	N-3°-E	灰色粘土質シルト (5Y4/1)	SB101・SK110を切 る	近世	
L1SK132	楕円形	逆台形	1.77	1.34	9	N-52°-W	オリブ 褐色シルト (2.5Y4/4)	SD105を切る	中～近世	

L1SK101 (L1-10・11 図)

時期；弥生IV-2～V 形状；長方形 主軸方向；N-19°-E

規模；2.89×2.01m 深さ；26cm 断面形態；逆台形

埋土；黒褐色シルト主体。埋土2には黄褐色シルトブロック混じる。

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢?、高杯)、石包丁1、石器未製品1

所見；調査区北部で検出した方形の土坑で、SK104・115・116を切る。基底面では小ピット1個と、壁際に壁溝1条を検出した。また壁溝の底からも小ピット1個を検出した。遺物は基底面より若干上層で出土した。またSK117出土土器と同一個体とみられる壺口縁部片も1点出土している。

出土遺物は比較的多く出土した。そのうち復元図示できたのは20点である。1～4は壺である。壺は口縁部外面に粘土帯を貼付するものが主体を占める。2は頸部外面に櫛描状の沈線を施す。7～9は甕、16～18は高杯である。18は口縁部外面に凹線文を施す。18と接合する口縁部片がSK117からも出土しており、いずれもIV～V様式の段階に廃棄されたと考えられる。19は打製石包丁である。両側縁に抉りが入る。刃部はなく、未製品とみられる。20は粘板岩の用途不明製品である。形状から、打斧又は磨製石斧の未製品とみられる。

L1SK104(L1-10・11 図)

時期；弥生IV～V 形状；長方形 主軸方向；N-59°-W

規模；2.61×1.78m 深さ；14cm 断面形態；逆台形～箱形

埋土；黒褐色シルト主体

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、高杯)

所見；調査区北部で検出した土坑で、SK101・117 に切られる。SK101 とほぼ同じ規模である。基底面で小ピット状のものを1個検出したが、人為的なものかは不明瞭である。深さは14cmを測り、土坑の残存状態は悪い。

出土遺物のうち復元図示できたのは6点である。21～23は甕で、21・22は口縁端部に凹線文を施す。24～26は高杯である。25は口縁部外面に凹線文を施し、内面は放射状にミガキ調整を行う。

L1SK115(L1-10 図)

時期；弥生 形状；楕円形？ 主軸方向；N-29°-E

規模；1.22×0.68m 深さ；14cm 断面形態；U字状

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；—

所見；調査区北部で検出した土坑で、SK101 に切られると考えられる。遺物の出土は認められなかった。

L1SK116(L1-10 図)

時期；弥生 形状；楕円形？ 主軸方向；N-48°-W

規模；(0.8)×0.49m 深さ；8cm 断面形態；皿状

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；—

所見；調査区北部で検出した土坑で、SK101 に切られる。平面形は楕円形とみられる。非常に残存状態は悪く、遺物の出土は認められない。

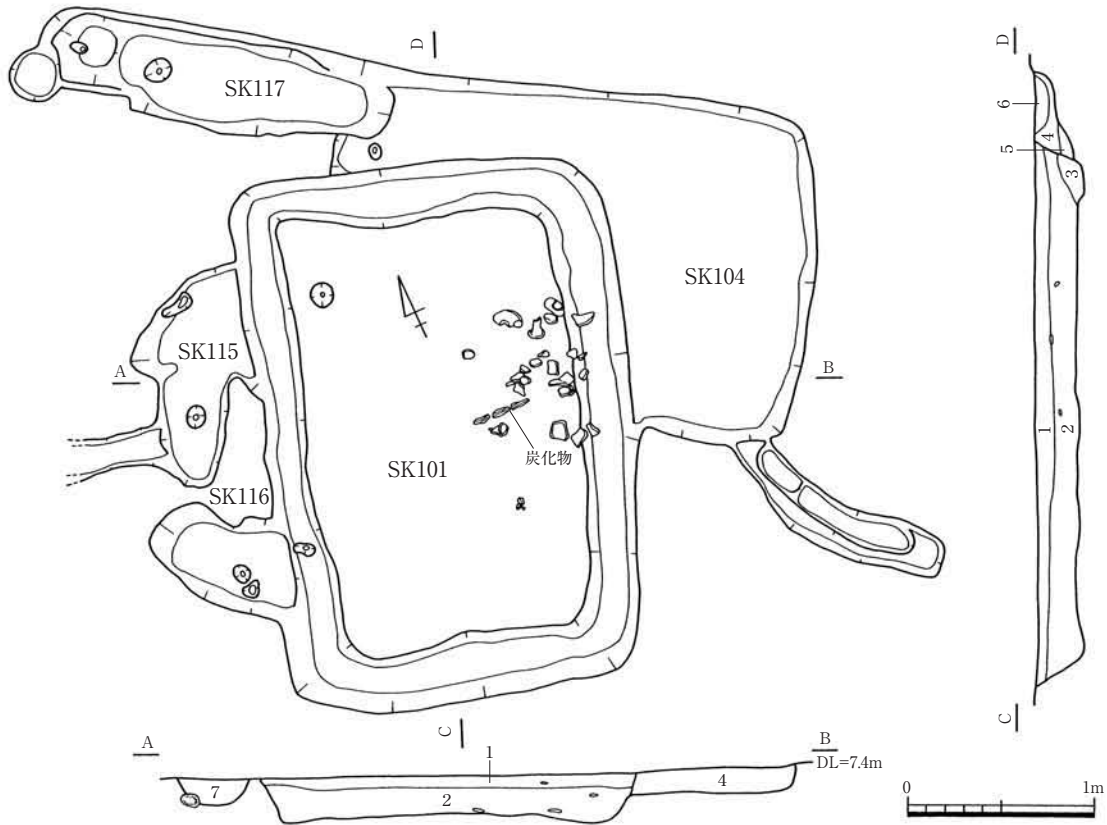
L1SK117(L1-10・11 図)

時期；弥生IV-2～V 形状；溝状 主軸方向；N-53°-W

規模；1.91×0.54m 深さ；21cm 断面形態；U字状

埋土；暗褐色シルト

付属遺構；— 機能；—



L1SK101

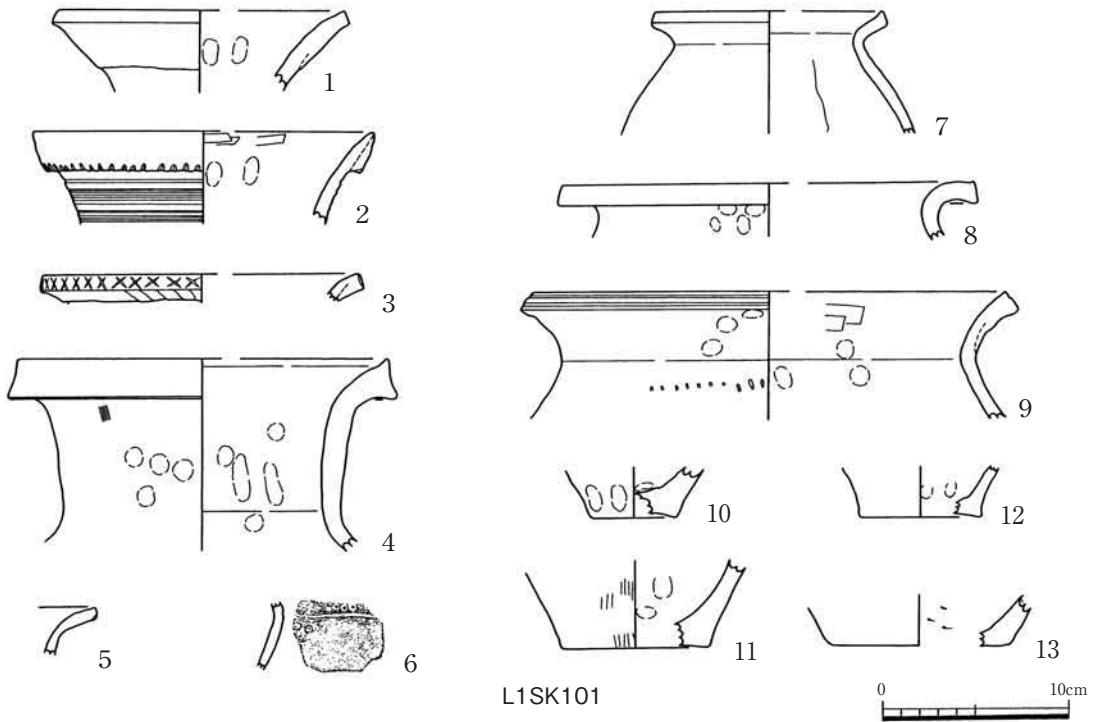
- 1 暗オリーブ褐色シルト (25Y3/3)
- 2 黒褐色シルト (10YR2/3) に5cm以下の黄褐色シルトブロック混じる
- 3 黒褐色シルト (10YR2/3)

L1SK104

- 4 黒褐色シルト (10YR2/3) に黄褐色シルトが少量混じる
- 5 暗褐色シルト (10YR3/3) に3~5cm大の黄褐色シルトブロック混じる
- 6 暗褐色シルト (10YR3/3) に褐色シルト混じる

L1SK115

- 7 黒褐色シルト (10YR2/2) に1~3cm大の黄褐色シルトブロックが少量混じる



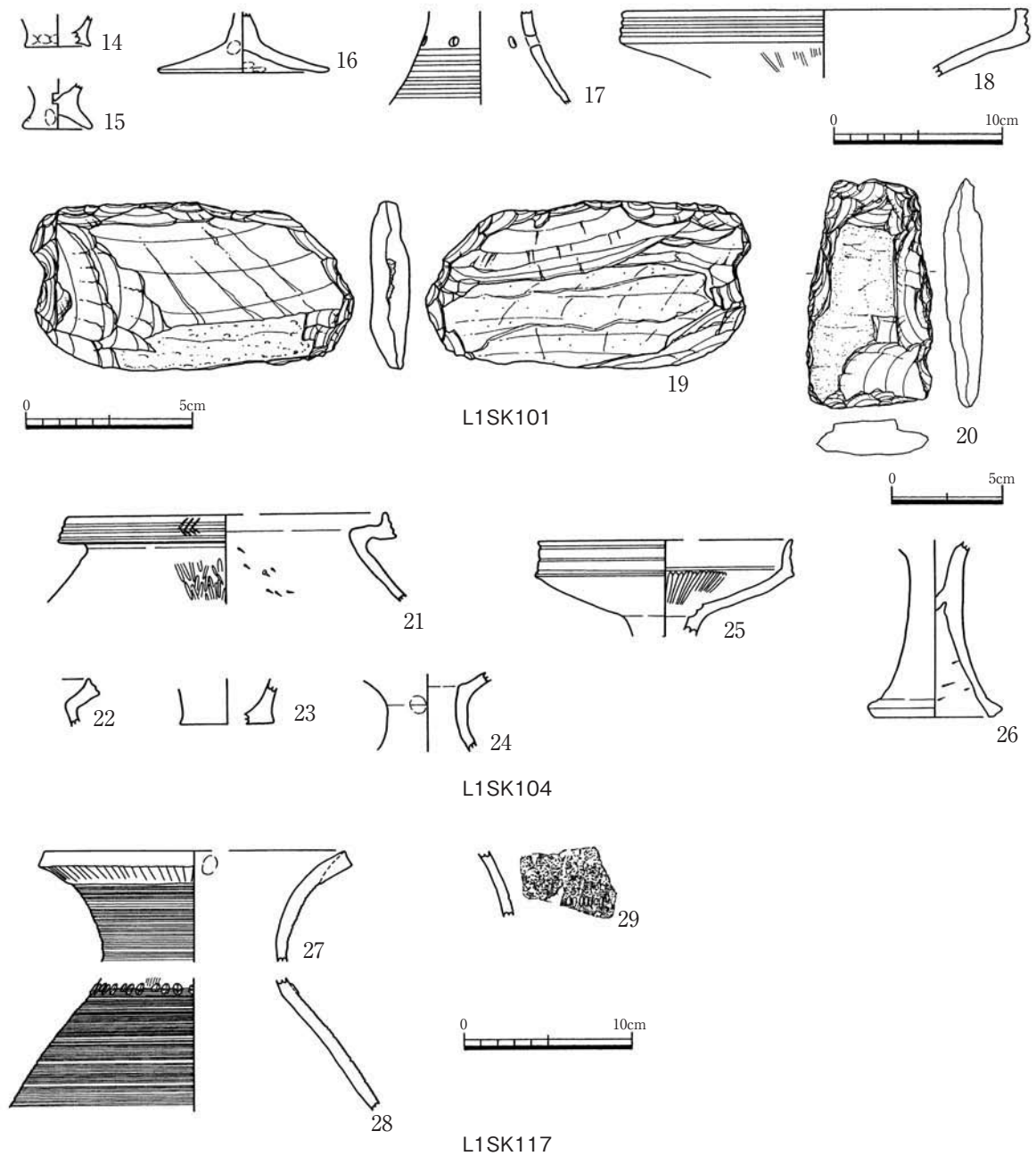
L1SK101

L1-10 図 L1SK101・104・115～117

出土遺物：弥生土器(壺、鉢?、高杯)

所見：調査区北部で検出した土坑で、平面プランは溝状を呈する。断面はU字状で、土坑中央部が深くなる。基底面では小ピット状の窪みを確認したが、人為的なものかは不明瞭である。

出土遺物のうち、復元図示できたのは3点である。27・28は壺で、接合はできないが同一個体とみられる。またこれらと同一個体とみられる口縁部片がSK101からも出土している。SK101出土の18と接合する土器片もあり、SK101・117はほぼ同時期の段階で廃棄された遺構と考えられる。29は甕の胴部片とみられ、外面には列点文を施す。



L1-11 図 L1SK101・104・117

L1SK109(L1-12 図)

時期：弥生V-1～2 形状：溝状 主軸方向：N-20°-E

規模：3.58×0.72m 深さ：27cm 断面形態：U字状

埋土：黒褐色シルト。黄褐色シルトブロック、炭化物、焼土混じる。

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢?)

所見：調査区北部で検出した溝状土坑で、SK110の南に所在する。弥生時代のピットと切り合う。土坑の中央部がピット状に窪む。

出土遺物は胴部細片が多い。そのうち復元図示できたのは8点である。1・2は壺である。いずれも口縁部外面に薄い粘土帯を貼付する。また、2は口縁端部に沈線1条を施す。

L1SK110(L1-12 図)

時期：弥生V? 形状：円形 主軸方向：—

規模：1.8×(1.1)m 深さ：18cm 断面形態：逆台形

埋土：黒褐色シルトに黄褐色シルトブロック、焼土混じる。

付属遺構：— 機能：貯蔵穴

出土遺物：弥生土器(甕)、伐採斧1、炭化子葉

所見：調査区北部で検出した土坑で、SK102に切られ、SB102と切り合う深さは18cmと残存状態は悪い。基底面からは焼土と共に、炭化したイチイガシの子葉が多量に出土した。イチイガシは食用になることから、SK110は貯蔵用の土坑であったとみられる。

出土遺物はほとんどが胴部細片である。そのうち復元図示できたのは3点である。いずれも土器底部で、器種は甕とみられる。

L1SK114(L1-12 図)

時期：弥生V? 形状：長方形 主軸方向：N-55°-W

規模：1.49×0.94m 深さ：26cm 断面形態：箱形

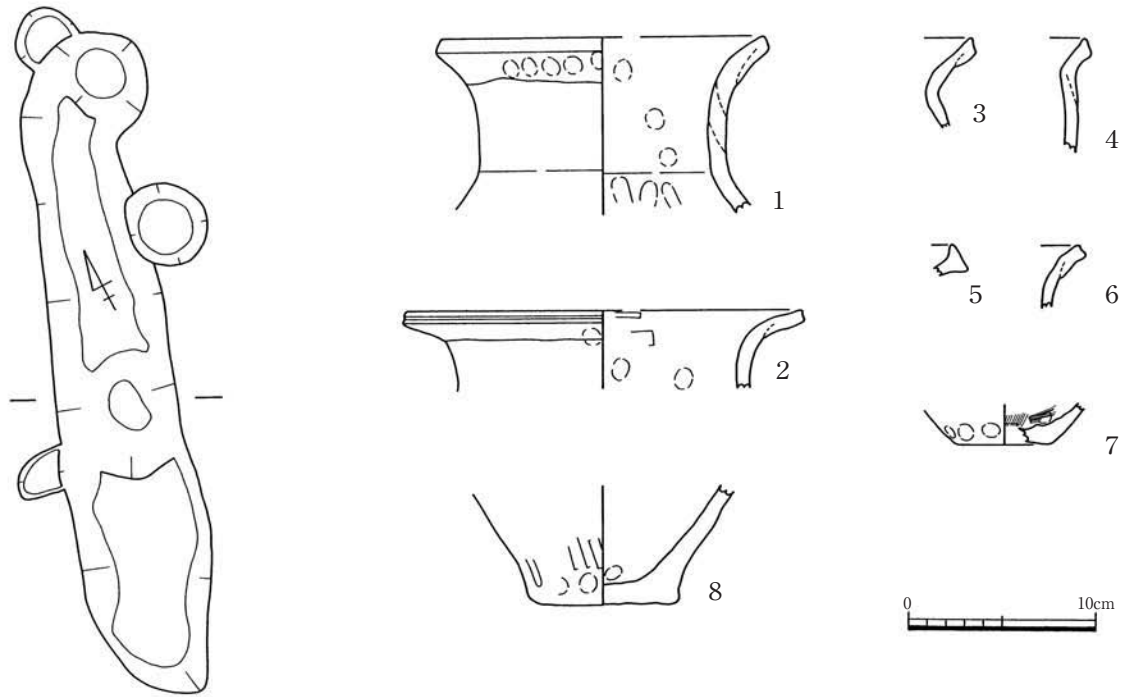
埋土：黒褐色シルトに3cm以下の黄褐色シルトブロック入る

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

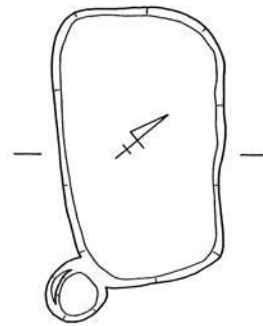
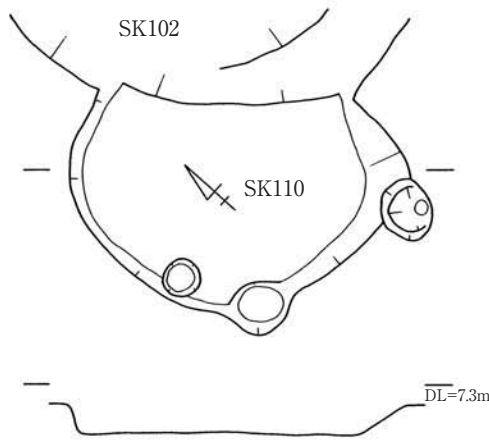
所見：調査区北部で検出した土坑で、ST102の約2m南に位置する。土坑の埋土は単一層で、埋土中に黄褐色シルトブロックがみられることから、比較的短時間のうちに埋まった可能性がある。

出土遺物は少量にとどまり、復元図示できたのは2点である。12は壺の口縁部である。外面に粘土帯を貼付し、口縁部を肥厚させる。



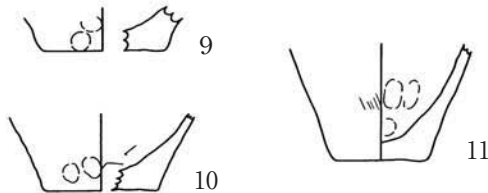
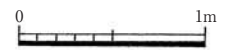
DL=7.3m 1 黒褐色シルト (10YR2/3) に黄色ブロック、炭化物・焼土を含む
 2 黒褐色シルト (10YR2/2) に黄色ブロック、焼土を含む

L1SK109

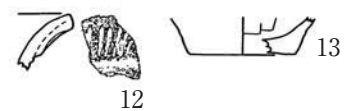


DL=7.4m 1

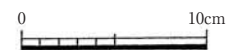
1 黒褐色シルト (10YR3/2) に 3cm 以下の黄色シルトブロックが少量混じる



L1SK110



L1SK114



L1-12 図 L1SK109・110・114

L1SK121(L1-13 図)

時期；弥生IV～V 形状；楕円形？ 主軸方向；N-36°-W

規模；1.22×0.95m 深さ；33cm 断面形態；U字状

埋土；黒褐色シルト主体。埋土3には黄褐色シルトブロック混じる。

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区北部で検出した土坑で、SB106と切り合うとみられる。先後関係は不明である。

遺物は少量の出土にとどまる。そのうち復元図示できたのは1点である。1は器種不明の底部である。

L1SK123(L1-13 図)

時期；弥生V 形状；溝状 主軸方向；N-75°-W

規模；3.6×0.58m 深さ；31cm 断面形態；逆台形

埋土；黒褐色シルトに炭化物混じる。

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)、叩石1、砥石1

所見；調査区北部で検出した溝状土坑で、SB105と切り合うとみられる。先後関係は不明である。基底面からは小ピット2個を検出したが、土坑に伴うものかは不明瞭である。

遺物は基底面よりやや上層から、比較的多く出土した。そのうち復元図示できたのは6点である。2は壺で、ハケ状原体を用いて頸部外面に綾杉文を施す。

L1SK127(L1-13 図)

時期；弥生V 形状；楕円形 主軸方向；N-2°-W

規模；(1.01)×0.52m 深さ；20cm 断面形態；U字状

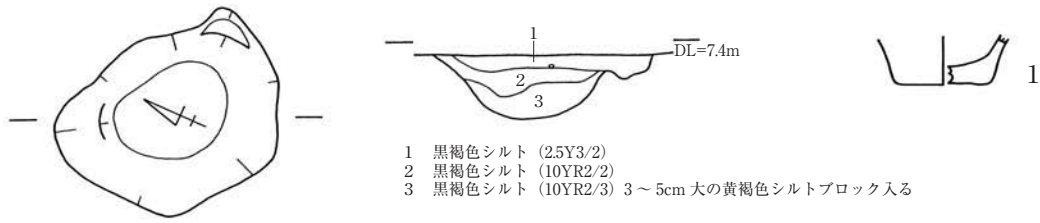
埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

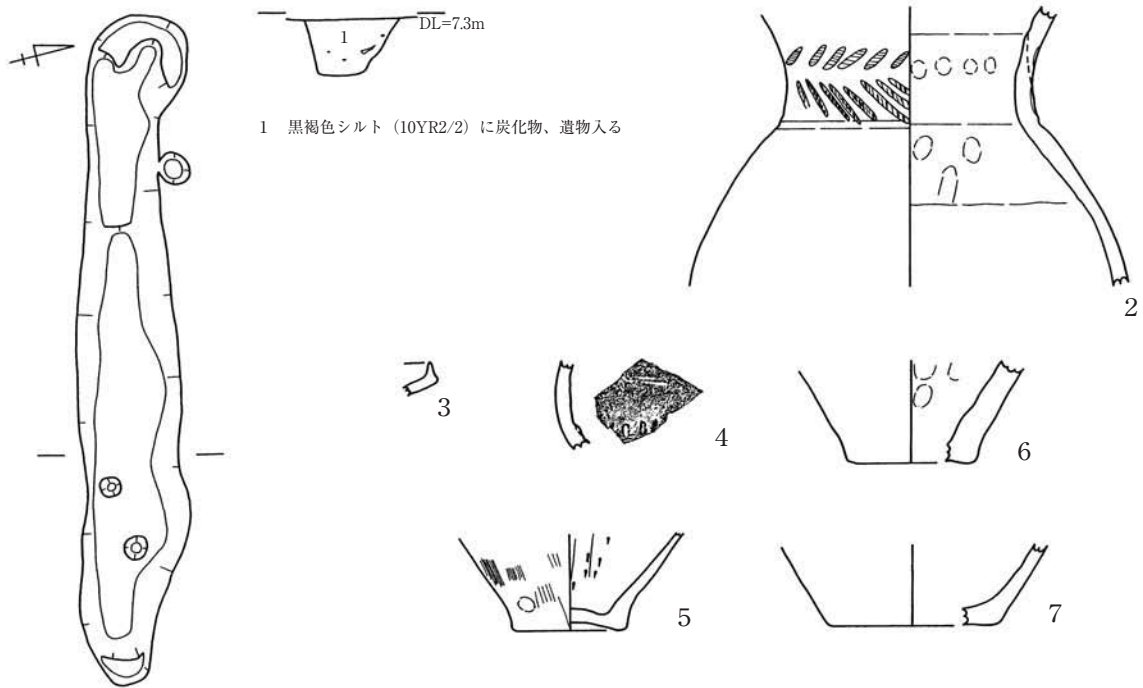
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；調査区北部で検出した土坑で、ST102に切られる。土坑の南半部は、下場がオーバーハングする。

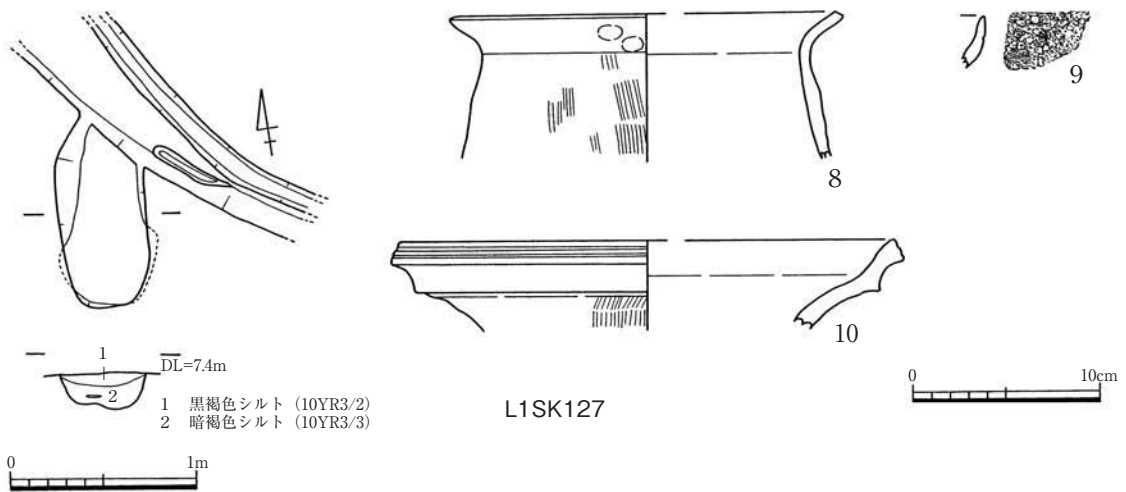
遺物は量的に少なく、埋土2から出土した。そのうち復元図示できたのは3点である。8は甕、9は高杯又は鉢、10は壺とみられる。いずれも細片である。



L1SK121



L1SK123



L1SK127

L1-13 図 L1SK121・123・127

L1SK128(L1-14 図)

時期：弥生IV～V 形状：隅丸方形 主軸方向：N-84°-E

規模：2.19×1.57m 深さ：11cm 断面形態：皿状

埋土：黒褐色シルト

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見：調査区中央部、西側で検出した土坑である。北部に集中する遺構群からやや離れた地点に所在する。非常に残存状態は悪い。基底面でピット1個を検出したが、土坑に伴うものかは不明瞭である。

遺物はほとんどが胴部片である。そのうち復元図示できたのは1点である。1は壺または甕の底部である。

L1SK133(L1-14 図)

時期：弥生IV～V 形状：三角形 主軸方向：—

規模：3.35×2.11m 深さ：50cm 断面形態：U字状

埋土：黒褐色シルト

付属遺構：大溝2 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見：調査区中央部で検出した遺構である。大溝2の南肩部に位置する。SK133の対岸には同様の遺構(SX101)が認められる。これらは大溝2に伴う施設の一部と考えられるが、便宜上土坑として表記している。

SK133の基底面付近では15cm以下の円礫が数個出土した。また対岸に位置するSX101まで、小円礫が約4m幅の帯状に集中して認められた。これらは基底面に敷設されたような状態で出土しており、何らかの機能を持っていた可能性がある。

出土遺物は胴部片がほとんどで、そのうち復元図示できたのは5点である。いずれも細片である。

L1SX101(L1-15 図)

時期：弥生IV～V 形状：不整形 主軸方向：—

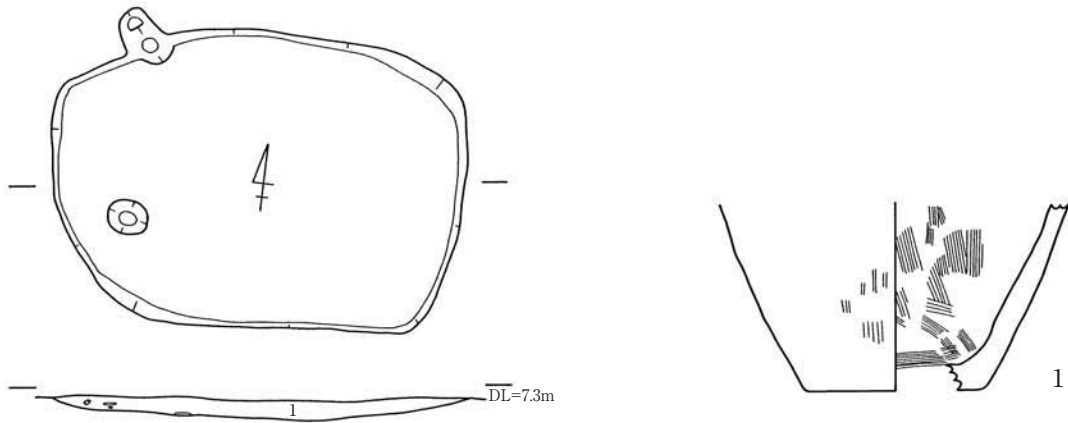
規模：7.3×(3.0)m 深さ：40cm 断面形態：不明

埋土：褐色シルト

付属遺構：大溝2 機能：—

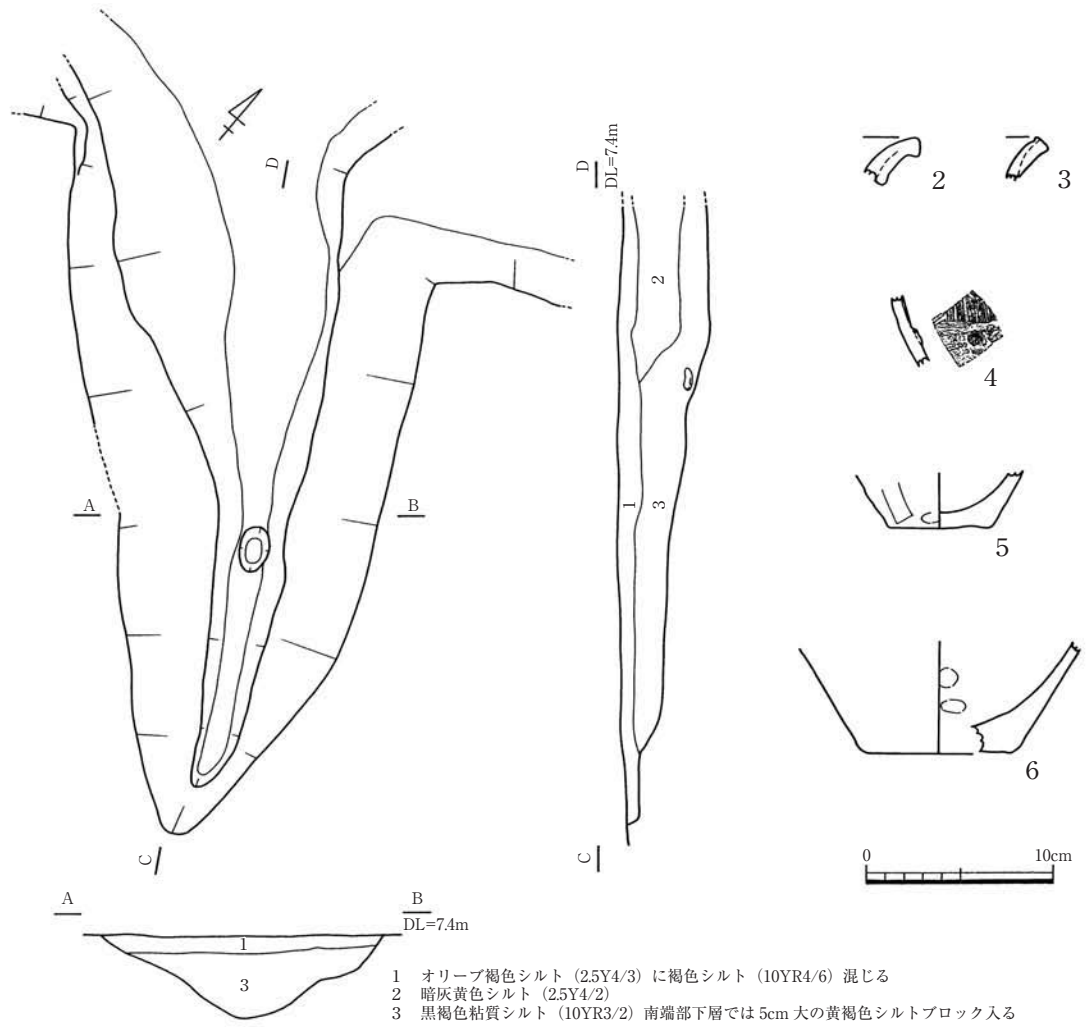
出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)、石斧1、石包丁未製品1

所見：調査区中央部で検出した遺構である。大溝2の北肩部に位置する。平面形は不整形で、SK133のような明確なプランではないが、大溝2の利水施設の一部と考えられる。SX101とSK133を結ぶ基底面では、約4m幅の帯状に小円礫が敷設された状態で認められた。これは人為的なものの可能性がある。基底面に小円礫を敷設する意図等は不明であり、類例の増加を待ちたい。

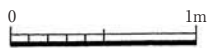


1 黒褐色シルト (10YR2/3) に炭化物混じる

L1SK128

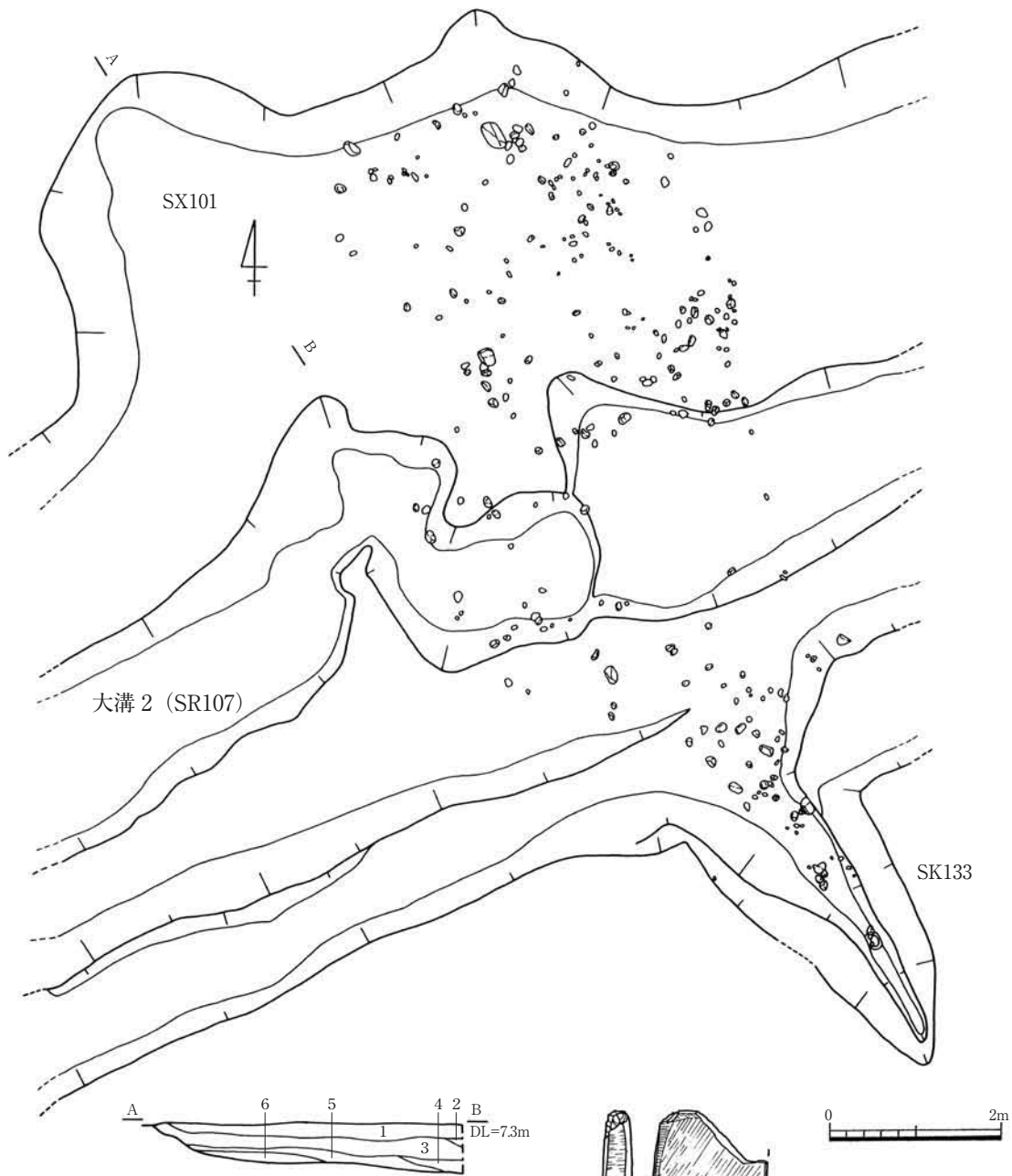


1 オリーブ褐色シルト (2.5Y4/3) に褐色シルト (10YR4/6) 混じる
 2 暗灰黄色シルト (2.5Y4/2)
 3 黒褐色粘質シルト (10YR3/2) 南端部下層では5cm大の黄褐色シルトブロック入る

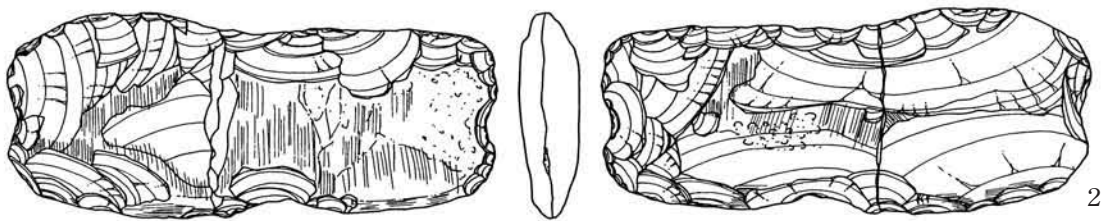
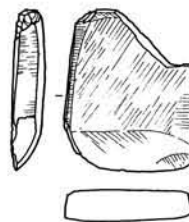


L1SK133

L1-14 図 L1SK128・133



- 1 灰黄褐色シルト質砂 (10YR5/2) に黄褐色シルト混じる
- 2 暗灰黄色砂 (2.5Y4/2) に黄褐色シルトわずかに混じる
- 3 褐色砂質シルト (10YR4/4) に褐灰色砂がまだらに入る
- 4 褐灰色砂 (10YR4/1) に黄褐色砂、炭化物がわずかに混じる
- 5 灰黄褐色シルト (10YR5/2) に黄褐色シルトわずかに混じる
- 6 暗灰黄色砂 (2.5Y4/2) 遺物入



L1SX101



L1-15 図 L1SK133・L1SX101

出土遺物は少量にとどまり、ほとんどが弥生土器胴部片であった。そのうち復元図示できたのは石器 2 点である。1 は蛇紋岩製の扁平片刃石斧で、刃部再生を繰り返したためか基部が非常に短い。2 は打製石包丁で、高所部は部分的に研磨される。有側で両側縁に抉りがあり、刃部に研磨と剥離がみられる。刃部再生の際に廃棄された可能性がある。

(4) 溝跡

L1 区では 4 条の溝跡を検出した。そのうち SD105 は平面形がコの字状を呈しており、SD 表記であるがその他の溝跡とは性格的に異なるとみられる。SD103・104 は大溝 2 に沿って、調査区中央部を北東から南西に向かって流れる。これらの溝跡は非常に浅い。

L1-4 表 L1 区溝跡一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	接続	時期	備考
L1SD101	11.81×0.29×0.1	—	U字状	N-73°-W	—	弥生V	
L1SD103	42.8×0.53×0.12	—	皿状	N-54°-E	—	弥生	
L1SD104	40.9×1.0×0.14	—	U字状	N-64°-E	—	弥生IV～V?	
L1SD105	29.7×3.3×0.38	コの字状	U字状～逆台形	N-63°-E	—	弥生IV	

L1SD105(L1-16～19 図)

時期；弥生IV 方向；N-63°-E

規模；29.7×3.3m 深さ 0.38m 断面形態；U字状～逆台形

埋土；黒褐色シルト主体

床面標高；6.888～7.170m

接続；—

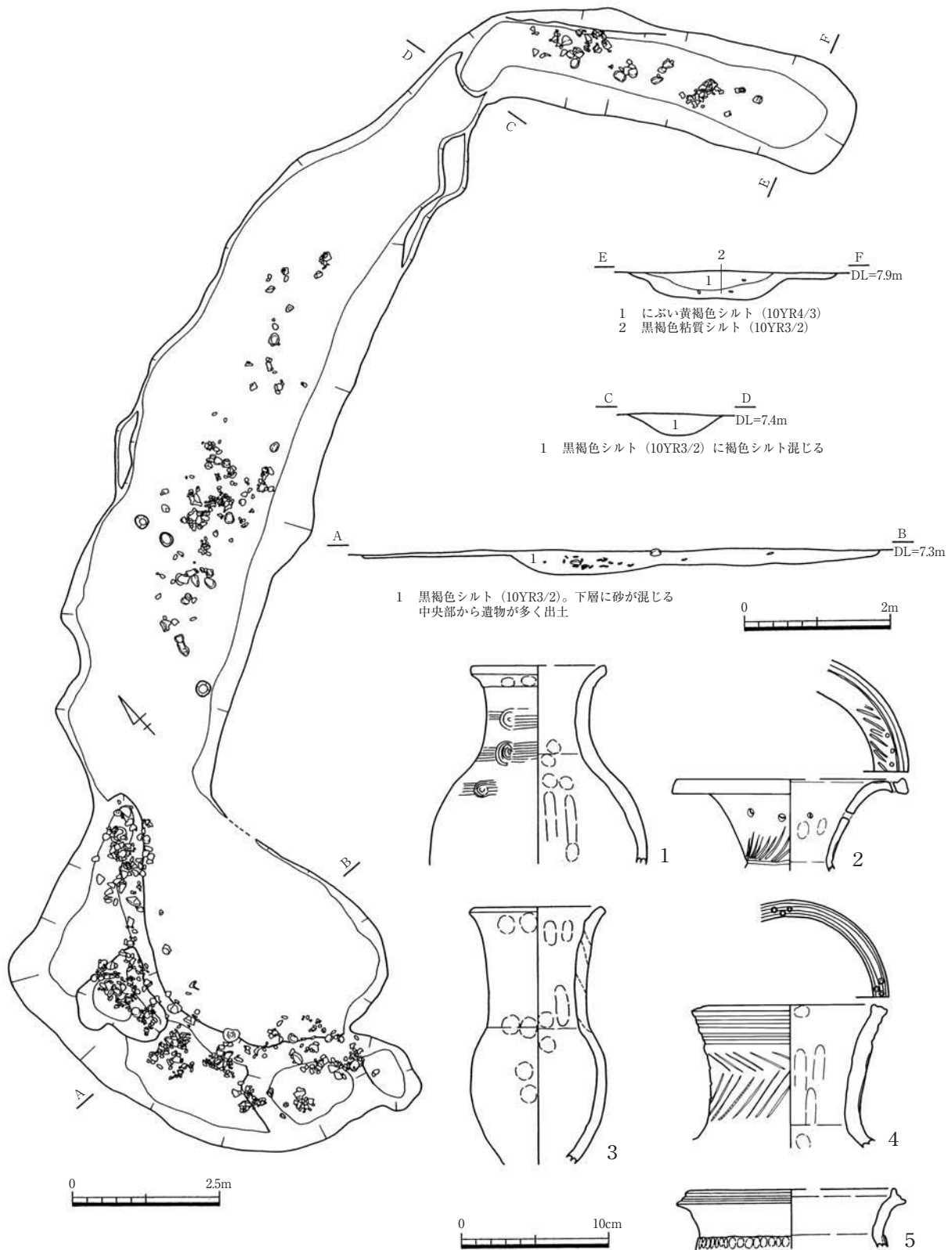
出土遺物；弥生土器(壺、甕、高杯)、石包丁 3、石斧 1、叩石 3、投弾 2、砥石 2、台石 5、剥片石器 28

所見；調査区中央部で検出した遺構である。平面形はコの字状を呈し、南の大溝 2 に向かって開く。大溝 2 と位置的にはほぼ平行する。調査当初は方形周溝墓の可能性も考えられたが、主体部にあたる部分で埋葬施設は認められなかった。大溝 2 の付属施設とも考えられるが、埋土下層では砂質が強くなるものの水が頻繁に流れた形跡はみられない。

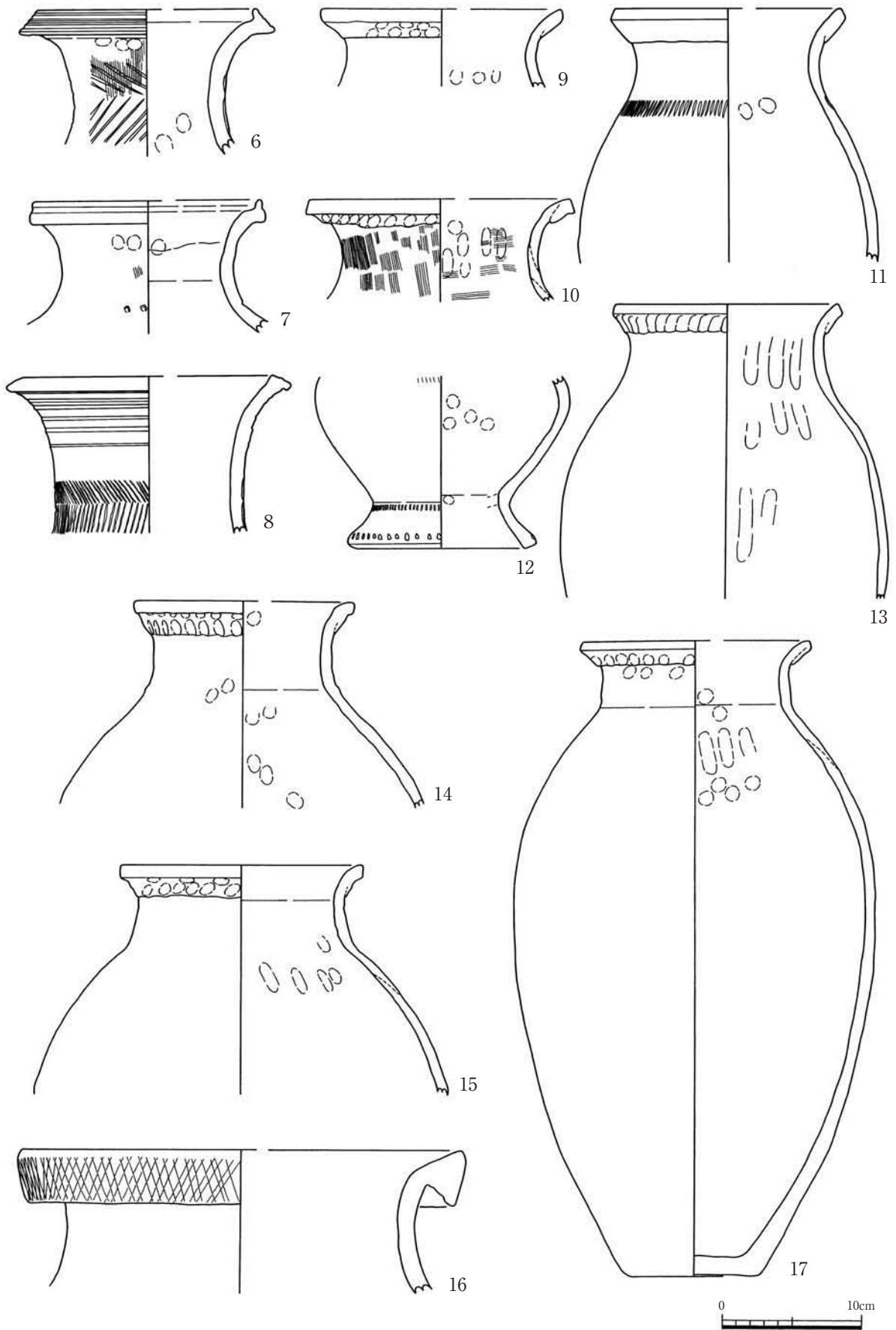
遺物は埋土中層から多く出土した。口縁形態を見る限りでは壺が比較的多く、甕は凹線文を有するものが主体を占める。遺構によって器種構成の比率は異なるが、壺が多くみられるという現象は、廃棄に際し器種の選択が意図的になされた可能性も考えられる。また図示はしていないが、砂岩製の剥片石器が 28 点出土した。これらは一面に礫皮が残り、刃縁には磨滅のみられるものがある。また刃部付近に刃縁と平行に線状痕らしきものがあるが、用途は不明である。

出土遺物のうち、復元図示できたのは 42 点である。1～20 は壺である。1 は口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚させる。頸部外面には櫛描直線末端扇状文を施文する。4 は口縁端部に凹線文と竹管文、外面には凹線文と綾杉文を施文する。また 11・13～15・17 のように口縁部に粘土帯を貼付し、頭部は直立気味に立ち上がってゆるく外反し、上胴部に最大径を持つ壺が比較的多くみられる。21～25 は甕で、23～25 は口縁端部に凹線文を施す。36～39 は高杯である。36 は小型の高

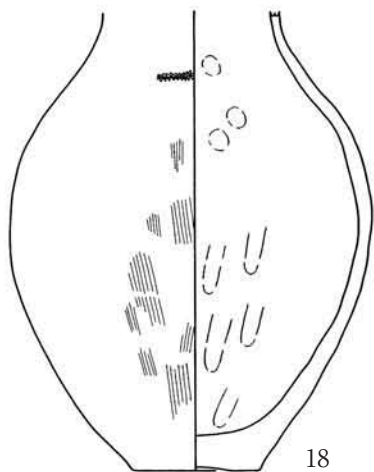
杯で、口縁部外面を列点文状に刻む。図示できた石器は3点である。40はサヌカイト製の有茎式石鏃である。41は蛇紋岩製の扁平石斧で、刃部は欠損している。42は叩石である。



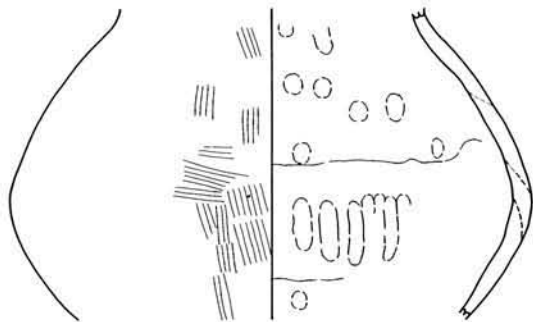
L1-16 図 L1SD105(1)



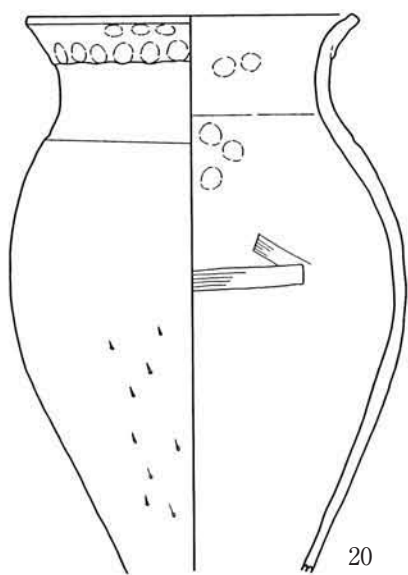
L1-17 図 L1SD105(2)



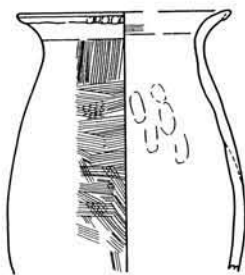
18



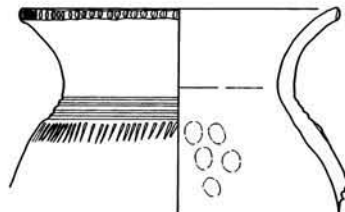
19



20



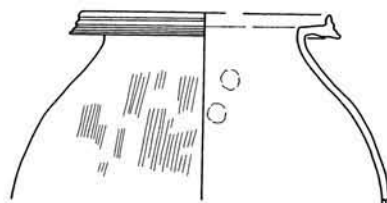
21



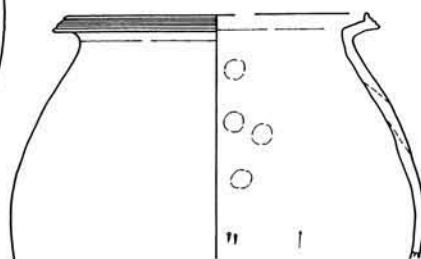
22



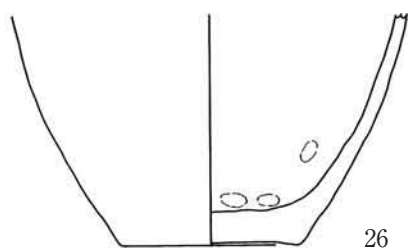
23



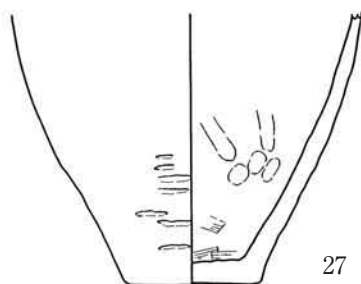
24



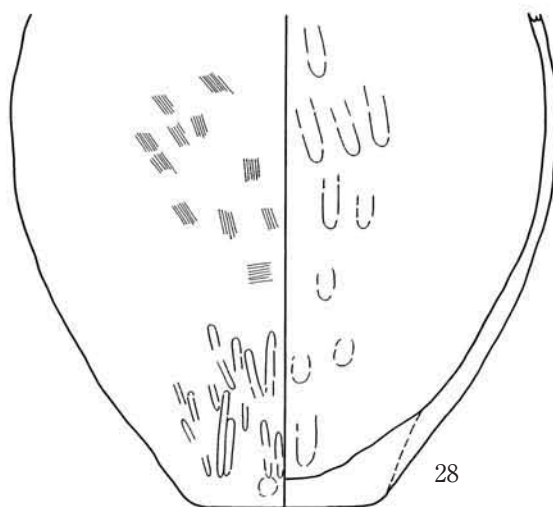
25



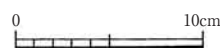
26



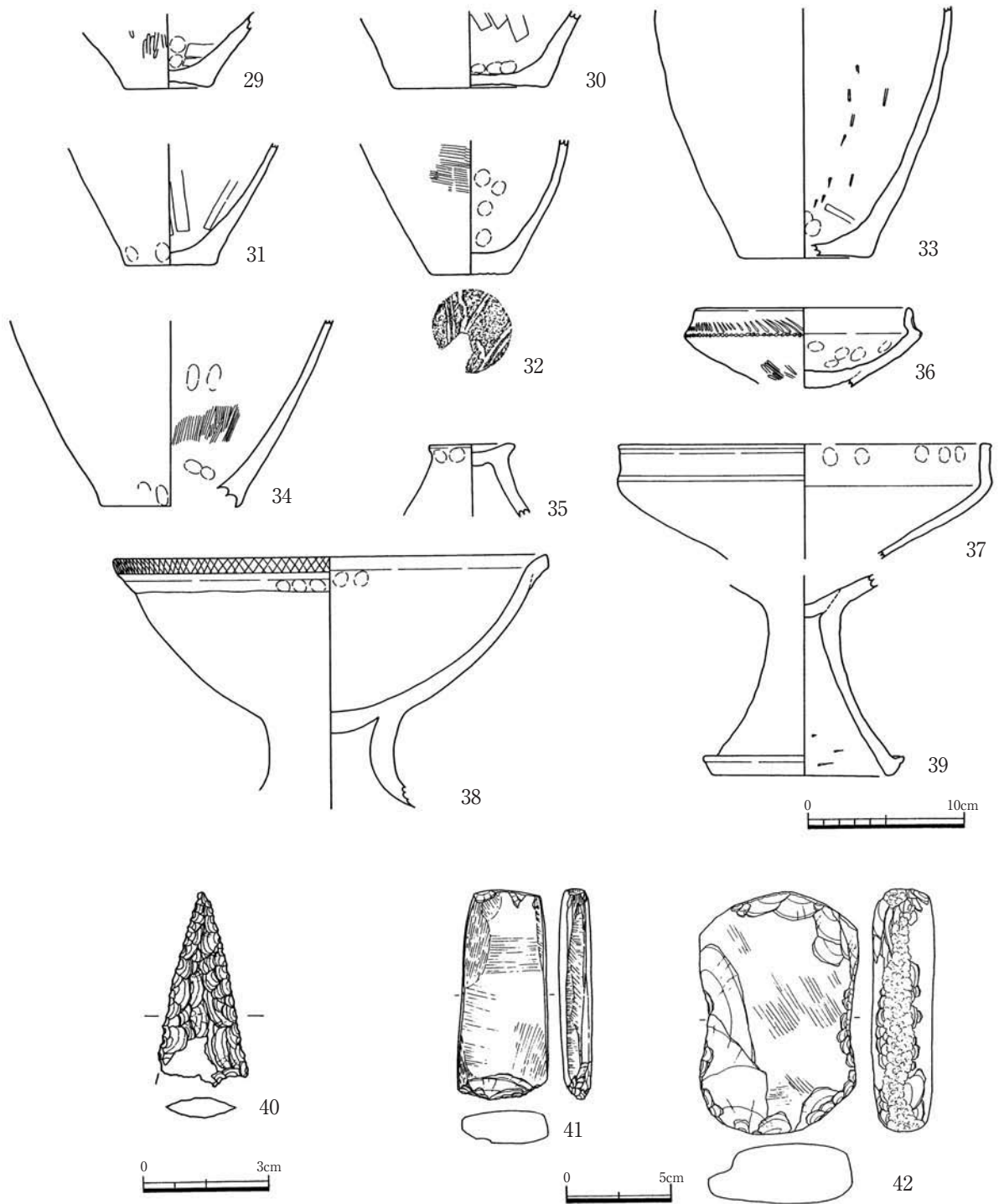
27



28



L1-18 ☒ L1SD105(3)



L1-19 図 L1SD105(4)

3. L1 区中世の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

調査区南部、SD103 の南で中世の掘立柱建物跡 1 棟を検出した。掘立柱建物跡は弥生時代の包含層とみられる黒色シルト層を掘り込んで建てられている。周辺で弥生時代の明確な遺構は確認できず、調査区南部を居住域として利用するようになったのは中世以降のことと考えられる。

L1SB110(L1-20 図)

時期：中世前期 棟方向：N-11°-E

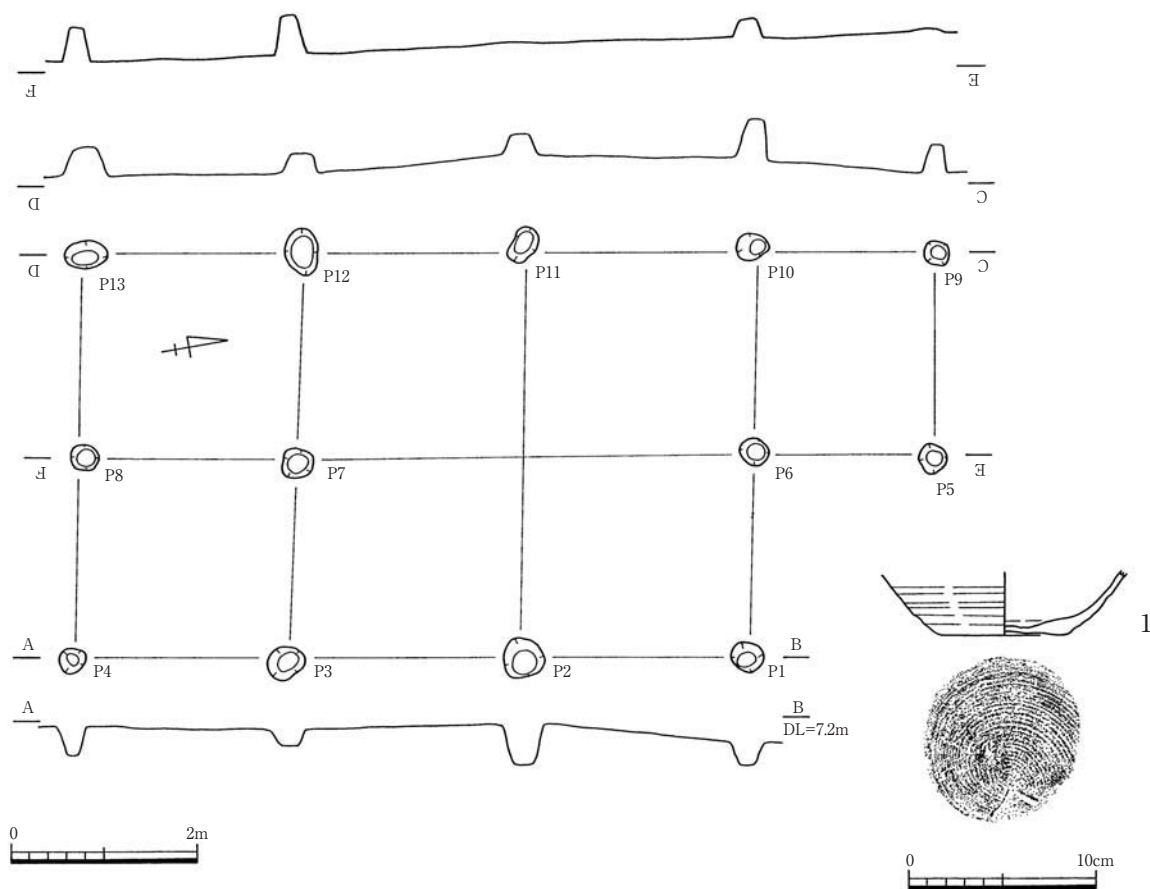
規模：梁間 2×桁行 4 梁間 4.31m×桁行 9.01m 面積：38.8㎡

柱間寸法：梁間 2.13～2.24m 桁行 1.95～2.52m

柱穴数：13 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：土師器(杯)



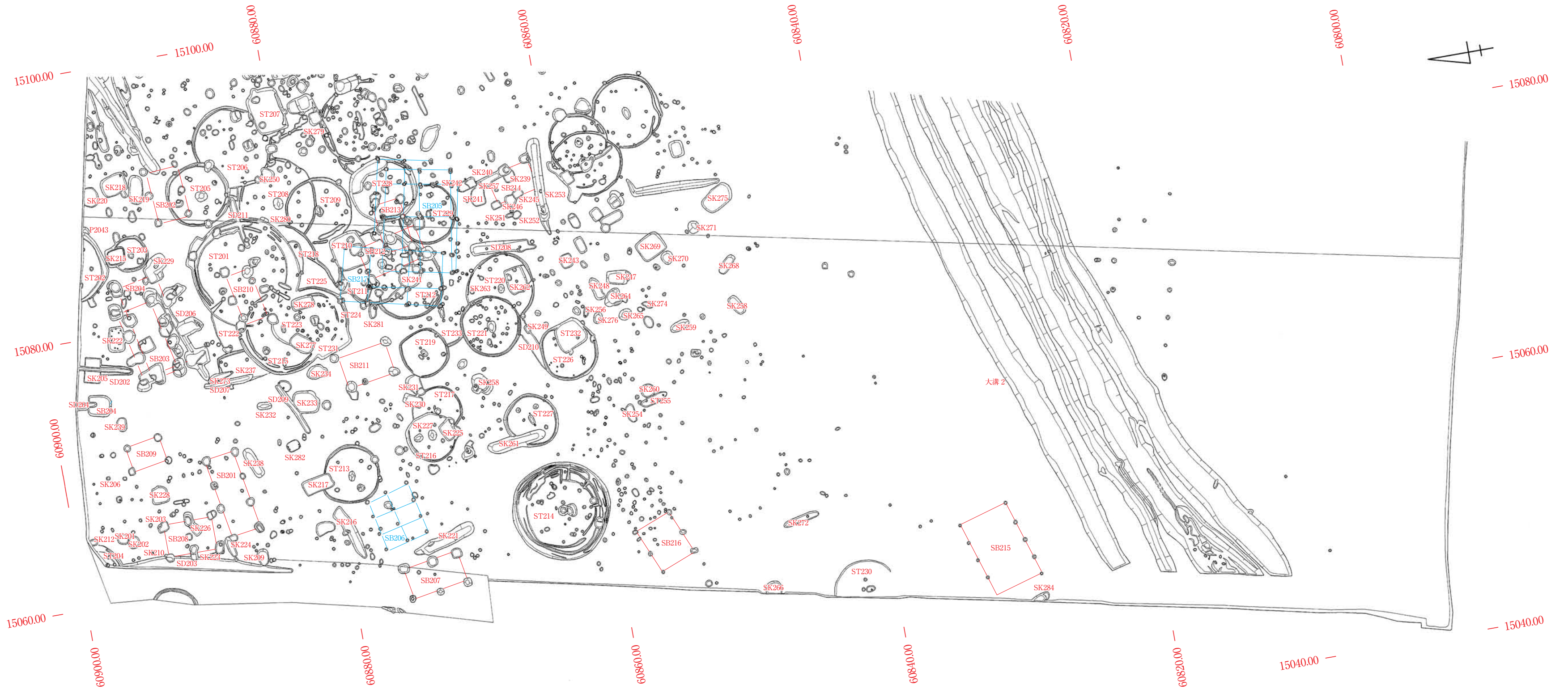
L1-20 図 L1SB110

所見；調査区南部で検出した南北棟建物で、黒褐色シルト層を掘り込んで建てられている。北東隅と中央の柱穴は認められなかったが、本来は総柱であったとみられる。柱穴の埋土はいずれもオリーブ褐色シルトである。

遺物は柱穴から土師器片が出土した。そのうち復元図示できたのは、P5 から出土した 1 の土師質土器の杯 1 点である。底径 7.0cm、残高 3.4cm を測る。底部外面に糸切り痕がみられる。

L2 区の調査





L2-1図 L2区遺構全体配置図(S=1/250)

※青色は上層遺構

1. L2 区の概要

概要

本調査区はK区の南側の調査区で、田村遺跡群の西南部に位置する。調査区南部には当遺跡群の中央北部から南西部に向かって流れる大溝2と北部には同じ大溝から分かれる大溝4・5が走っており、この間に挟まれた微高地に立地する。遺構は表土直下より検出し、弥生時代の中期中葉から後期に至る竪穴住居跡33軒、掘立柱建物跡14棟、土坑138基、溝11条、ピット800個を確認した。これらの遺構は調査区のなかでも北部において密度が高くなっているのが特徴である。南部の大溝2付近では2棟の掘立柱建物跡以外はほとんど検出されておらず、この大溝が集落の南限を画する性格をもつ可能性が高い。検出された住居跡は大型で壁溝を巡らしたのや幾度となく建て替えられたものが複雑に切り合っていた。また住居跡のなかには直径8mを越える大型の焼失住居跡(ST201)が検出された。壁が焼けて赤化し、床面上には炭化材や焼土がみられた。また焼土とともに200点を越えるガラス小玉が出土しており、1棟の住居跡からの出土量としては県下最大である。また他の住居跡からも60点程出土しており、調査区全体では265点を数える。また住居跡群の床面や周辺からは、本調査区を特徴付ける掘立柱建物跡が14棟検出された。これらは柱穴の規模によって3種類に分けることができ、最も大きい掘立柱建物跡(SB204)では柱穴の規模は100cm×108cmのものから、136cm×180cm、深さは約60～80cmを測るものがみられる。前述したように大型住居跡からはガラス玉が203個・近辺の住居跡からは翡翠製の勾玉が出土するなど、集落の南端部に位置する本調査区は田村遺跡群の中でも特殊なエリアと言える。西隣に隣接する小調査区L4区については、L2区で検出した遺構の延長を確認していることから、本調査区において詳細を述べる。

中世では、同じく北部において3棟の掘立柱建物跡を検出した。3棟の内2棟(SB206、SB217)は総柱の建物跡で、庇がつく。また建物に添うように柵列も検出されている。出土遺物からは15世紀前半代とそれに先行する時期の2時期が考えられるものである。

調査担当者 小島恵子・筒井三菜・久家隆芳

執筆担当者 小島恵子が主として執筆を行ない、筒井三菜が補助を行った。

調査期間 平成9年9月12日～平成10年3月4日

調査面積 9,501㎡(L2・L3・L4 合同)

時代 弥生時代中期～後期、中世

検出遺構 弥生時代竪穴住居跡33軒、掘立柱建物跡13棟、土坑138基、溝11条、ピット800個、中世掘立柱建物跡3棟

2. L2 区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

本調査区では弥生時代の中期中葉から後期に至る竪穴住居跡 33 軒を検出した。規模は直径 8m を越える大型のもの、直径 5～6m の中型、直径 4m 以下の小型のものと 3 種類の住居跡がみられる。これらの住居跡は調査区の北側に密集しており、それらの内 11 棟は幾重にも重なり、複雑な切り合い関係をなしている。数回の建て替えが行われた様子が分かるものや壁構や柱穴が 2 重、3 重に巡り改修し拡張された跡が明確に残るもの (ST214) も検出されている。直径 8m を越える大型の住居跡 ST201 は床面に炭化材・焼土が広がる焼失住居跡であるが、200 点を越えるガラス小玉が出土しているのが特徴的である。その他 ST214 からは 60 点程のガラス小玉が出土しており調査区全体では 265 点を数える。その他 ST212・221 からは勾玉が出土など、他の調査区とは違う様相を示す。

L2-1 表 L2 区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(cm)	面積(m ²)	形状	主軸方向	時期	備考
L2ST201	8.2×8.15	50.0	52.78	円形		弥生V-1	
L2ST202	5.2×—	42.0	—	隅丸方形		弥生V-1	
L2ST203	2.74×2.65	38.0	5.7	隅丸方形		弥生IV	
L2ST204	6.56×6.36	20.0	32.75	円形		弥生V-1	
L2ST205	4.72×4.64	21.0	17.3	円形		弥生V-1	
L2ST206	6.12×5.8	12.0	27.86	円形		弥生IV	
L2ST207	3.28×2.52	36.0	8.45	方形	N-11°-W	弥生V-1	
L2ST208	6.28×6.0	8.0	30.96	円形		弥生IV	
L2ST209	5.06×5.0	4.0	19.6	円形		弥生IV-2	
L2ST210	2.72×2.52	28.0	5.8	方形	N-77°-E	弥生V-1	
L2ST211	6.88×6.64	16.0	35.87	円形		弥生IV-2	
L2ST212	7.0×6.84	24.0	37.59	円形		弥生	
L2ST213	4.68×4.4	12.0	16.18	円形		弥生IV	
L2ST214	7.42×7.35	42.5	42.81	円形		弥生V-1～2	
L2ST215	6.44×6.4	30.0	32.35	円形		弥生IV-2	
L2ST216	3.72×3.6	36.0	10.52	円形		弥生IV-2	
L2ST217	3.64×3.52	32.0	10.06	円形		弥生IV-2	
L2ST218	4.64×4.6	2～3	16.76	円形		弥生	
L2ST219	3.56×3.52	28.0	9.84	隅丸方形		弥生IV	
L2ST220	5.36×5.04	24.0	21.23	楕円形		弥生IV-2	
L2ST221	4.64×4.56	28.0	16.61	円形		弥生IV-1～V-1	
L2ST222	—	9.0	—	円形		弥生	
L2ST223	2.8×2.52	16.0	5.55	隅丸方形		弥生IV	
L2ST224	3.88×3.6	8.0	10.98	円形		弥生IV-2	
L2ST225	—	19.0	—	円形		弥生	
L2ST226	4.72×4.2	34.0	15.61	多角形		弥生	
L2ST227	4.12×4.0	40.0	12.94	円形		弥生IV-2～V-1	
L2ST228	5.08×4.8	32.0	19.16	円形		弥生IV-2～V-1	
L2ST229	4.54×4.32	16.0	15.41	円形		弥生III～IV	
L2ST230	4.8×4.44	16.0	16.76	円形		弥生IV-2	
L2ST231	4.0×3.0	33.0	9.62	方形		弥生	
L2ST232	2.24×2.12	28.0	3.73	方形	N-17°-E	弥生	
L2ST233	5.15×5.12	—	20.7	円形		弥生	

L2ST201 (L2-2～4 図)

時期：弥生V-1 形状：円形

規模：8.20×8.15m 深さ：50.5cm 面積：52.78㎡

埋土：暗褐色(焼土、炭化物含む)

ピット：数 25 主柱穴数：8 主柱穴：(一次 P4・11・16・19・22・27 二次、三次 P1・6・8・9・10・11・28・29)

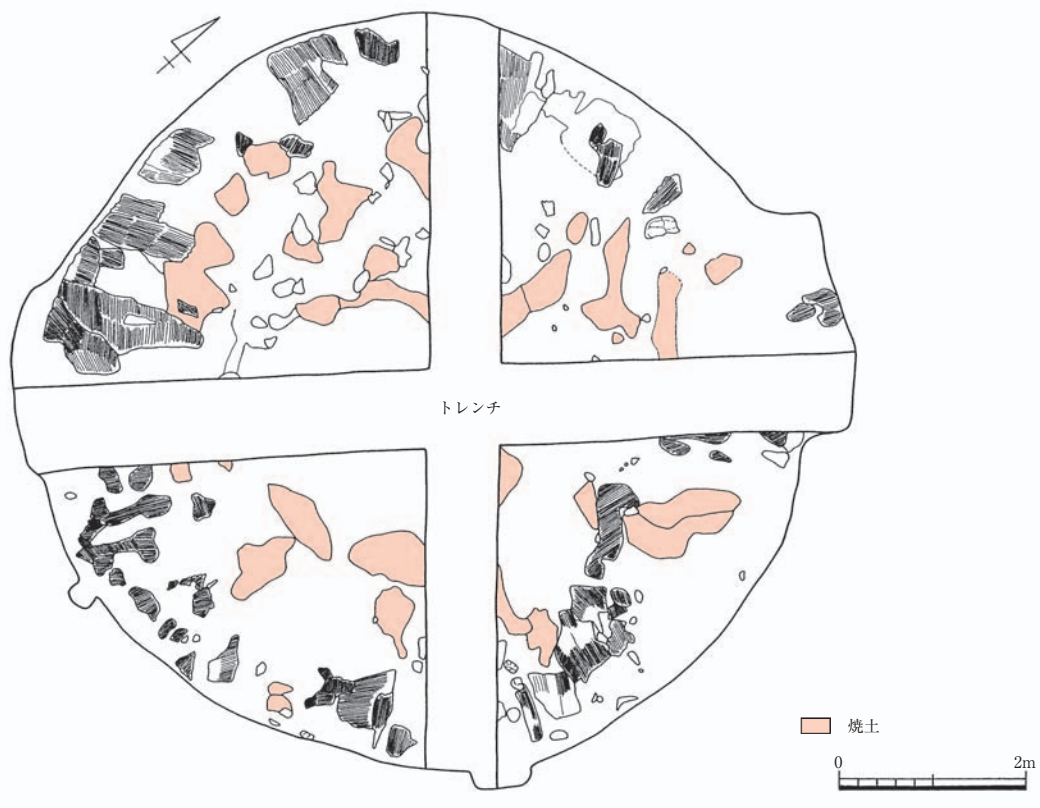
床面：2面 貼床：有 焼失：有

中央ピット：形状 楕円形 規模 1.2×9.2cm 深さ 117.8cm 埋土 暗褐色土(焼土・炭化物含む)

壁溝：2条 幅 21cm 深さ 4～13cm

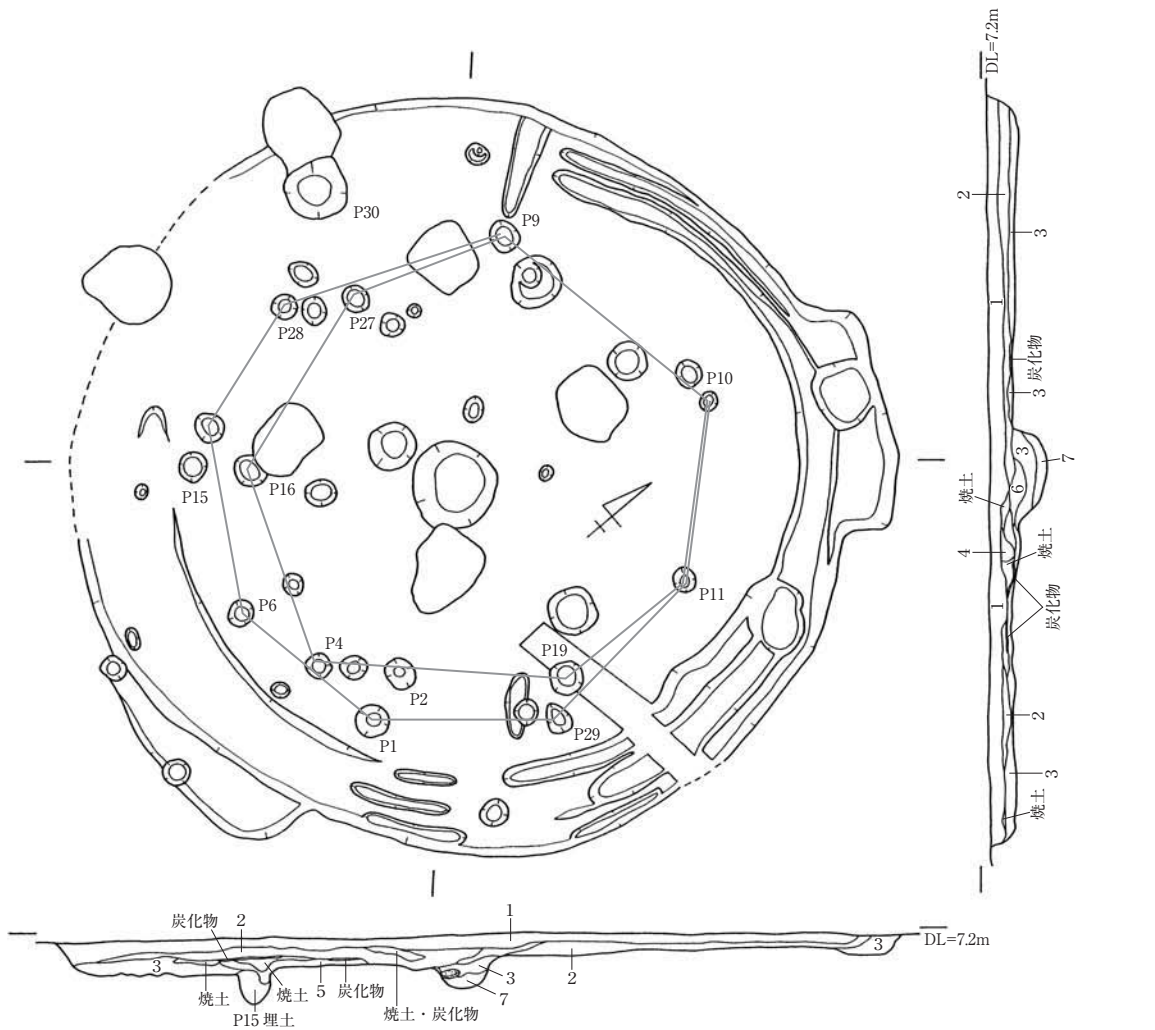
出土遺物：弥生土器(壺、鉢、高杯)、ガラス玉、管玉、石鏃、石斧、石包丁、サヌカイト剥片

所見：調査区の北方において検出した。直径8mを越える最大規模の住居跡で、5軒の住居跡 ST208・215・218・223・225 を切る。埋土は褐色・暗褐色粘土質シルトを基調とする6層で、焼土・炭化物が遺構全体の埋土中に含まれ、床面直上からは炭化した板材や厚さ10cmを測る焼土塊が広い範囲で残る。壁溝が遺構の北部で2重に、南部では3重に巡り、2～3回の建て替えがあったと思われる痕跡が残る。また、壁溝から中心部に向かって幅24～32cm、長さ1～1.8mを測る溝状の遺構が確認でき、これらは間仕切りの可能性も考えられる。中央ピットはほぼ中央部に位置し、断面はすり鉢状を呈する。埋土には人頭大の礫が一個入り、焼土・炭化物が混じる。土器の口

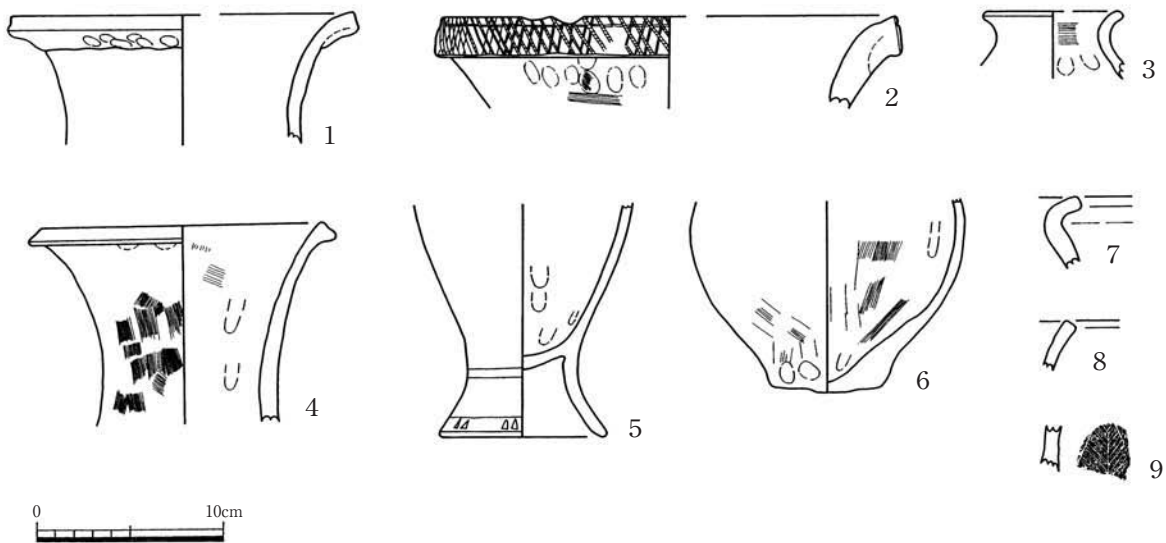
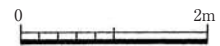


L2ST201 床面直上(焼土・炭化材)検出状況

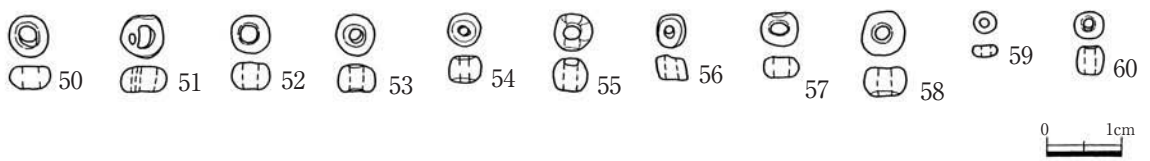
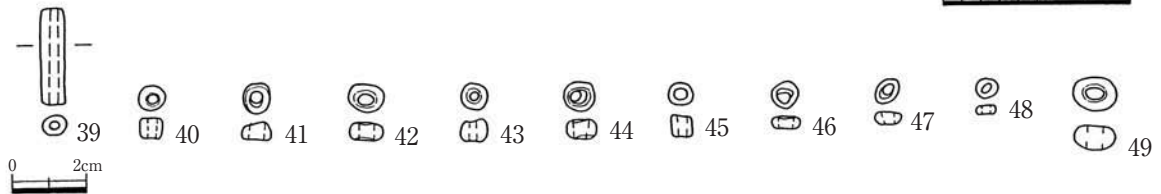
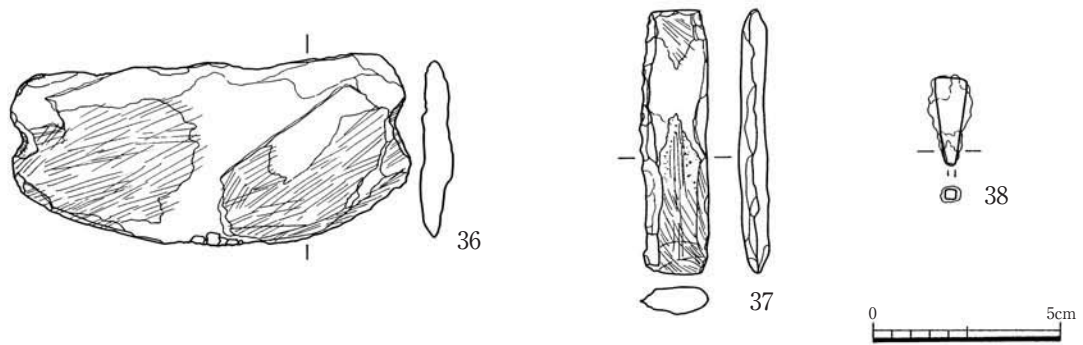
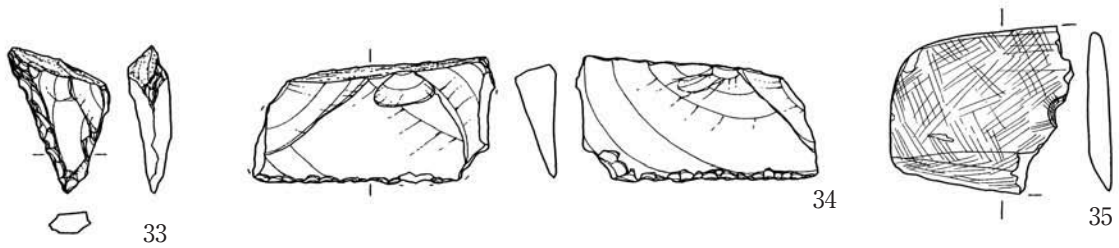
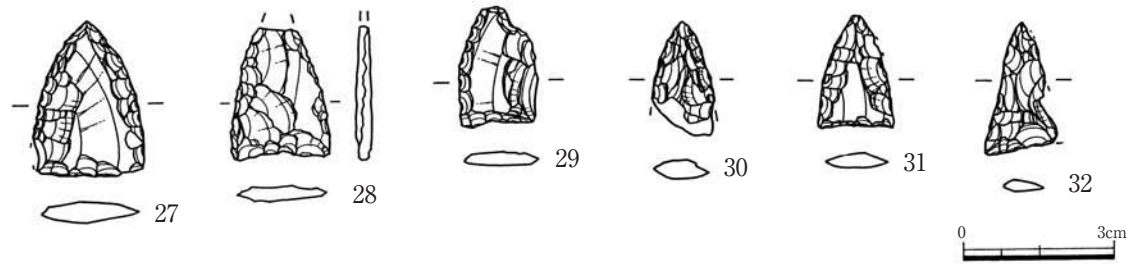
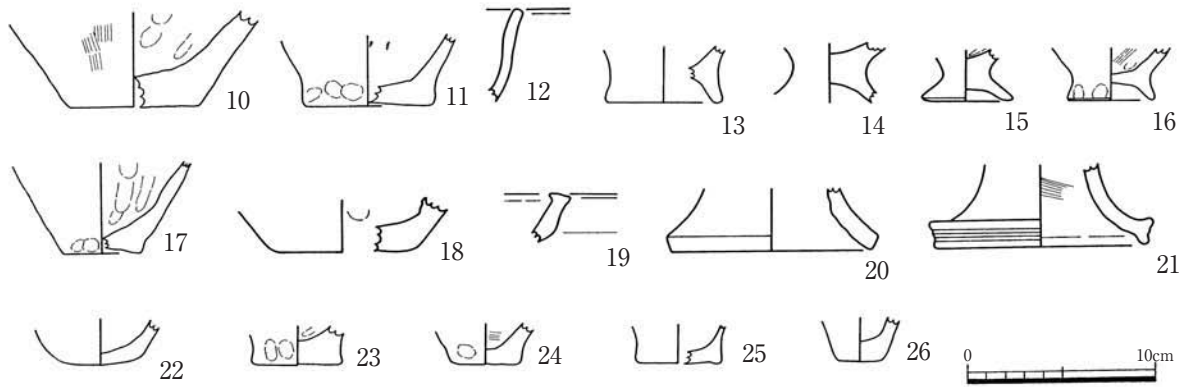
L2-2 図 L2ST201 (1)



- | | |
|--------------------------------|---------------------------------|
| 1 褐色粘土質シルト (10YR4/4) | 5 暗褐色粘土質シルト (10YR3/4) 焼土入る。(貼床) |
| 2 褐色粘土質シルト (10YR3/4) 焼土、炭化物含む。 | 6 褐色シルト (10YR4/4) 焼土、炭化物含む。 |
| 3 暗褐色粘土質シルト (10YR3/4) 焼土含む。 | 7 褐色粘土質シルト (10YR4/4) 焼土入る。 |
| 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土がブロックで入る。 | |



L2-3 図 L2ST201 (2)



L2-4 ☒ L2ST201 (3)

縁部細片も出土している。主柱穴は一次住居で6個、二次・三次の住居では8個を共有し、最大主柱穴間は3.2mを測る。遺構の西端のピット(P30)は貯蔵穴で焼土・炭化物塊が小礫とともに多量に入る。北東部には幅48cm・長さ2.32mを測る台形状の張り出し部があり、三次住居に伴うものと思われる。床面では掘立柱建物跡SB210を検出し、本遺構の北側では2棟の大型の掘立柱住居跡(SB203・204)が確認された。大型のSBに関しては調査区全体に関わる遺構である可能性が高い。

出土遺物は細片が多くを占め、その中で口縁部が206点、底部は65点を数える。図示し得ない遺物は多数で、全て埋土中からの出土である。図示できた遺物は壺、高杯、鉢、小型土器である。壺は貼付口縁を有するもの(1)で、高杯は凹線文を施すもの(21)・小型の土器は台付のものが3点(14~16)出土している。他に硬玉製の管玉が1点(39)、小鍛冶関係の鉄片(38)、打製の石鏃が6点(27~32)、スクレイパーと小型石斧が各1点、石包丁4点がみられる。また特徴的な遺物としてガラス玉203点が埋土中から出土している。これらのガラス玉は中国南部原産のカリガラスに酷似していることや、当遺跡で原料生産の痕跡がないことからガラス玉の原料が搬入されている可能性が考えられる。ガラス玉の出土量等から考えると、祭祀に関連する遺構の可能性が高く、弥生時代後期前葉頃に意図的に廃絶された住居と考えられる。

L2ST202(L2-5 図)

時期：弥生V-1 形状：隅丸方形

規模：5.2×—m 深さ：42cm 面積：—m²

埋土：暗黒褐色～黄褐色粘土質シルト

ピット：数3 主柱穴数：推定6 主柱穴：P1～P3

床面：1面 貼床：無 焼失：無

中央ピット：調査区外

壁溝：1条 幅35cm 深さ8～10cm

出土遺物：弥生土器(甕、壺)、石包丁

所見：調査区の北東隅において検出した。遺構の北側2/3は調査区外に伸びるが、遺構の形状は隅丸方形が推定される。遺構の東端部ではイノシシの下顎骨が出土しているP2043を切る。埋土は褐色シルトを基調とする4層である。壁溝が1条巡る。中央ピットは未確認で、調査区外に位置すると考えられる。主柱穴は推定される6個のうち3個を検出し、最大柱穴間は1.28mを測る。

出土遺物は床面から壺、甕、土器の底部が出土している。2は壺で頸部に櫛描文・楕円浮文・竹管の刺突文・列点文を施すもので、3の甕は口縁端部に円形浮文を有するものである。石器では石包丁が出土している。頁岩製で1孔を有する。

L2ST203(L2-6 図)

時期：弥生IV 形状：隅丸方形

規模：2.74×2.65m 深さ：38cm 面積：5.7m²

埋土：暗褐色、黒褐色(炭化物、焼土含む)

ピット：数 1 主柱穴数：不明

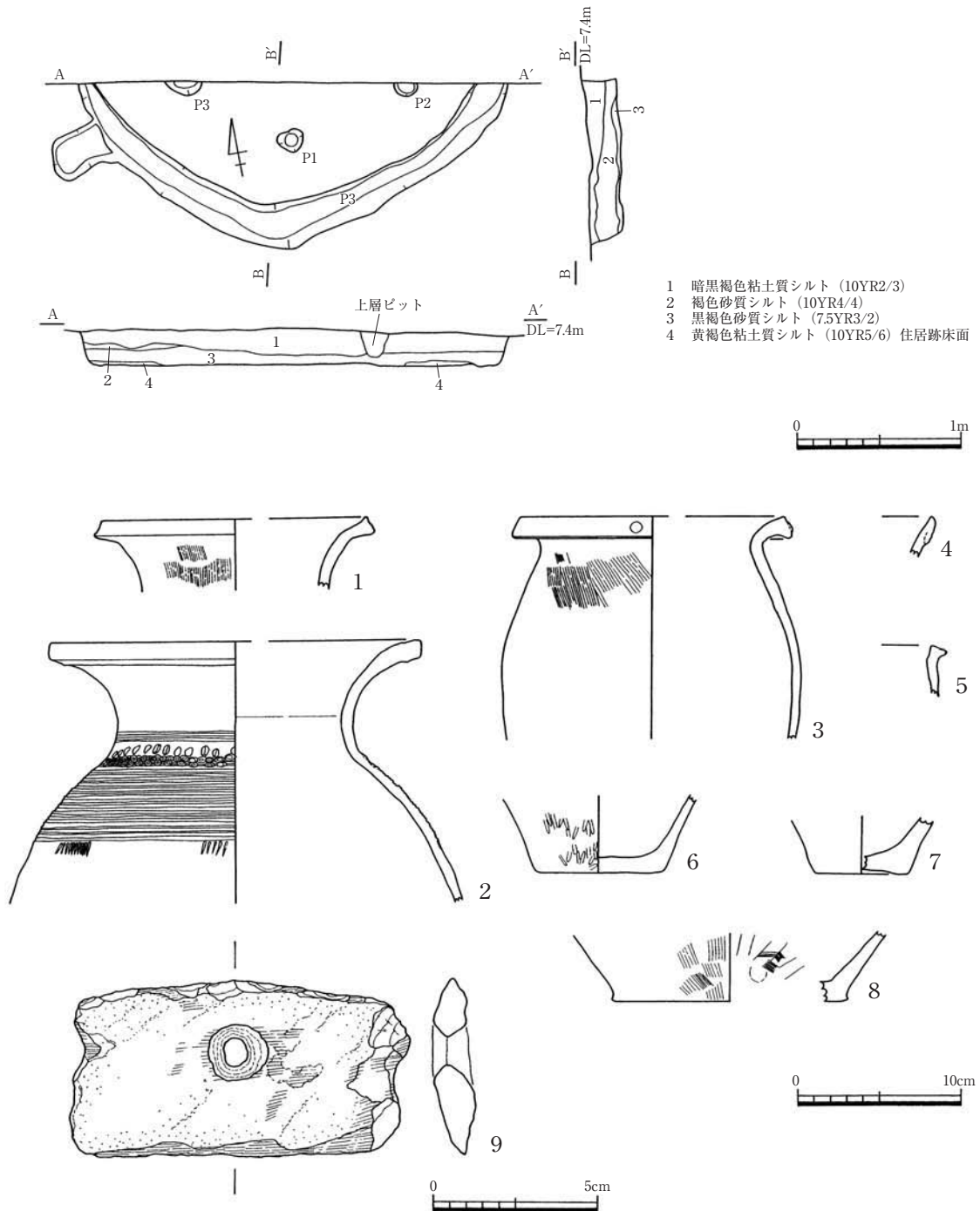
床面：1面 貼床：無 焼失：無

中央ピット：形状 円形 規模58×48cm 深さ20cm 埋土 暗褐色、黒褐色土(焼土・炭化物を含む)

壁溝：1条 幅12～16cm 深さ4～14cm

出土遺物：弥生土器(甕、壺、鉢、高杯)、口縁部8点、石鏃

所見：調査区北東において検出した。住居跡ST202の南側に位置する円形を呈した小型の住居跡で



L2-5 図 L2ST202

ある。北側に隣接する土坑SK215を切る。埋土は暗褐色シルトを基調とする2層で、下層からは焼土・炭化物を検出している。床面には1条の壁溝が巡り、遺構の西部で40cmに渡って途切れている。中央ピットはほぼ中央部に位置し、断面はU字状を呈する。最下層には焼土・炭化物が混じる。

出土遺物は極少量で、埋土中から貼付口縁を有する甕(1・2)と底部が2点・破損した石鏃(5)が1点出土している。

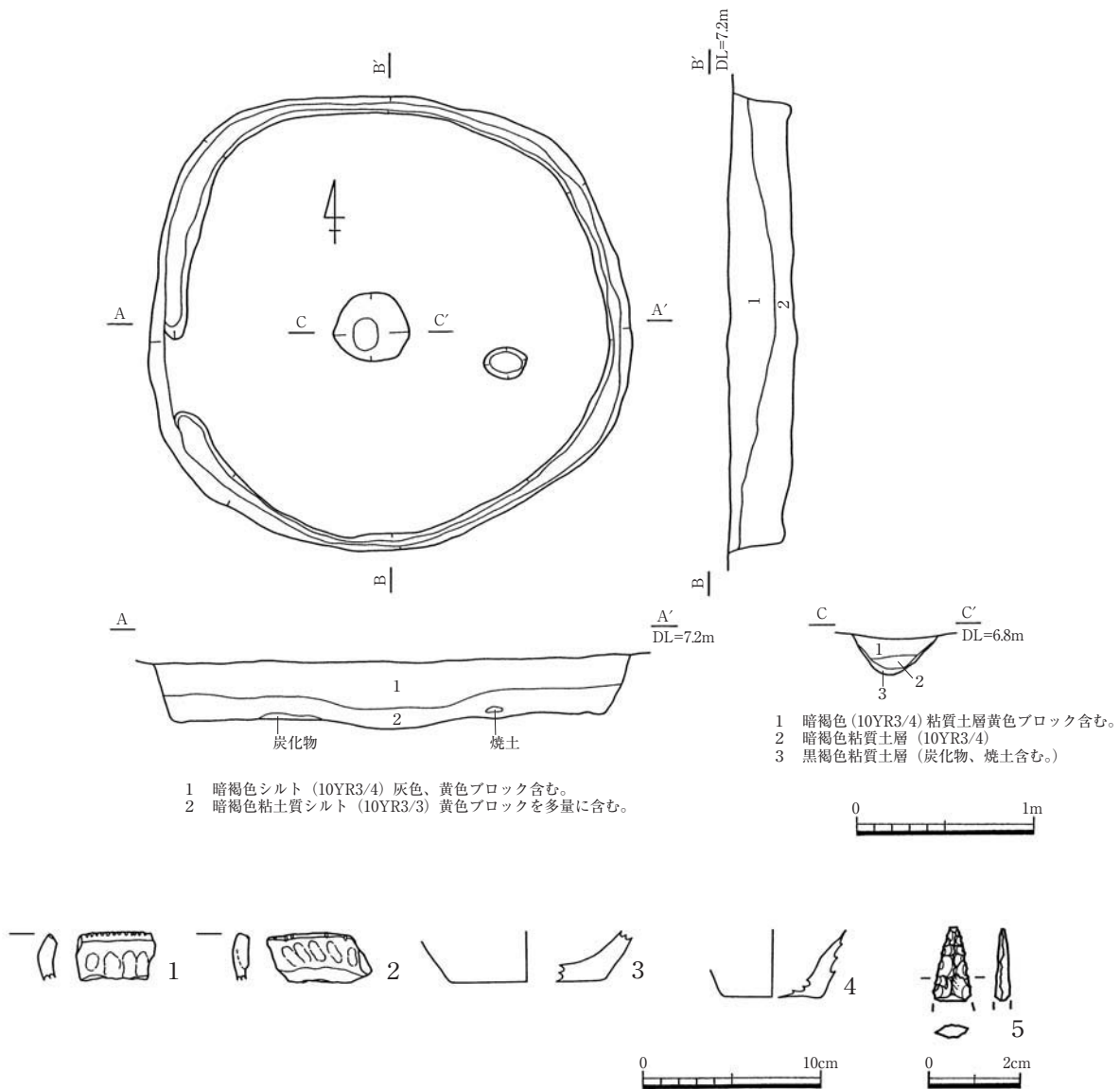
L2ST204 (L2-7 図)

時期：弥生V-1 形状：円形 主軸方向：—

規模：6.56×6.36m 深さ：20cm 面積：32.75㎡

埋土：黒褐色シルト質粘土

ピット：数10 主柱穴数：推定6のうち3 主柱穴：P1～P3



L2-6 図 L2ST203

床面；1面 貼床；無 焼失；無

中央ピット；形状 円形 規模 72×64cm 深さ 28.5cm 埋土 暗褐色土

壁溝；2条 幅 16～28cm 深さ 5～8cm

出土遺物；弥生土器

所見；調査区の北西隅より検出した住居跡である。遺構の大部分が隣接する調査区(K4・Q2区)に延びる。上層が攪乱を受けているため床面で遺構のライン確認したのみであった。壁溝は遺構の南部と北部で部分的に2条が確認できたが、詳細は不明である。中央ピットは断面が逆台形状で埋土は黒褐色シルトの単純一層である。支柱穴は3個を確認し、最大柱穴間は1.84mを測る。

出土遺物は埋土中から細片が出土しているのみで図示できなかった。

L2ST205(L2-8 図)

時期；弥生V-1 形状；円形 主軸方向；—

規模；4.72×4.64m 深さ；21cm 面積；17.3㎡

埋土；暗褐色、褐色シルト(炭化物を含む)

ピット；数 11 支柱穴数；推定 5 のうち 4 支柱穴；P1～P4

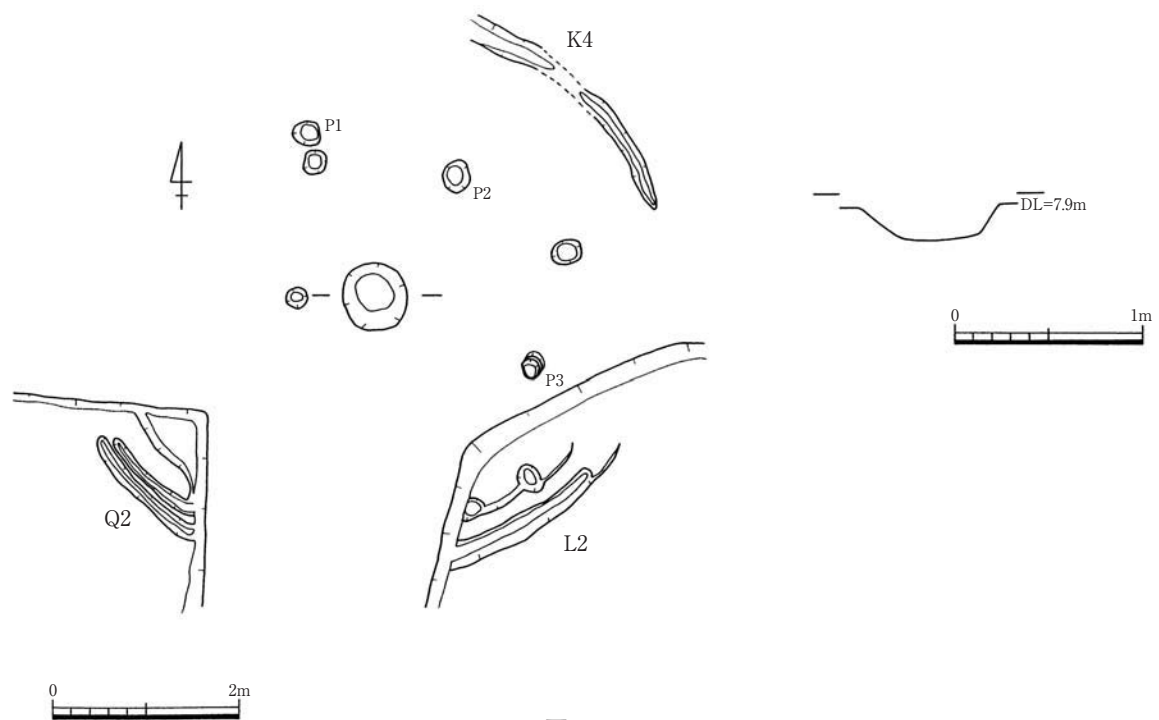
床面；1面 貼床；無 焼失；無

中央ピット；形状 円形 規模 88×76.7cm 深さ 42cm 埋土 黒褐色シルト(炭化物含む)

壁溝；1条 幅 16～20cm 深さ 6～7cm

出土遺物；弥生土器(壺、高杯)、石鏃

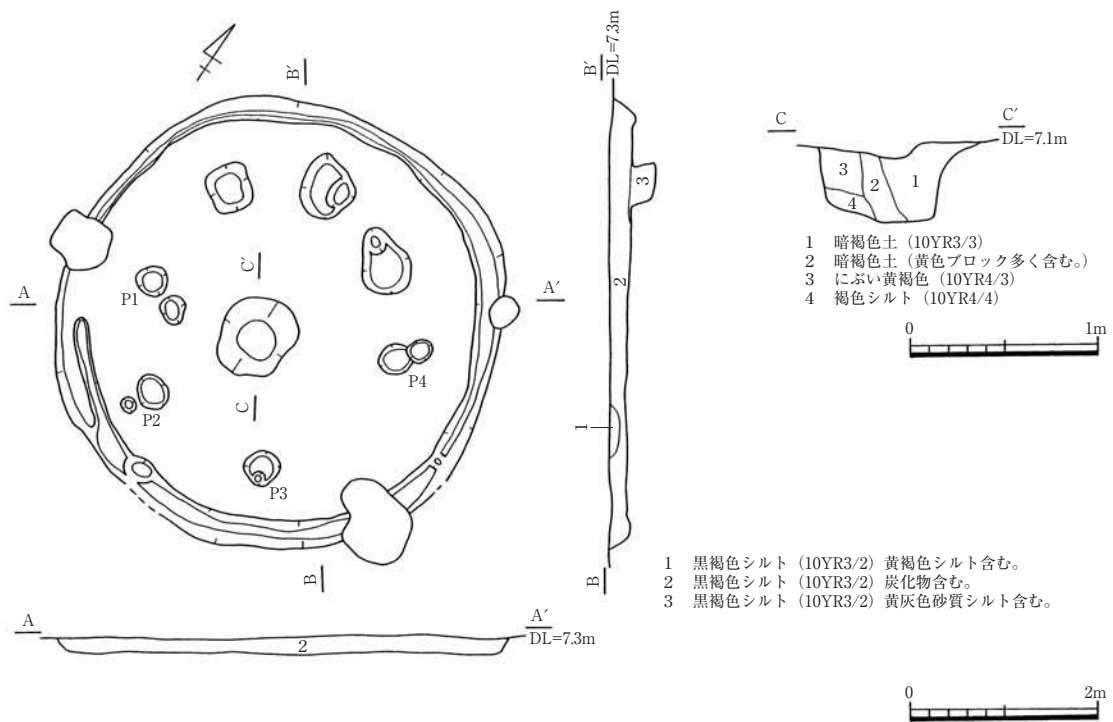
所見；調査区中央部、住居跡が密集する北部において検出した中型の竪穴住居跡である。大型の住



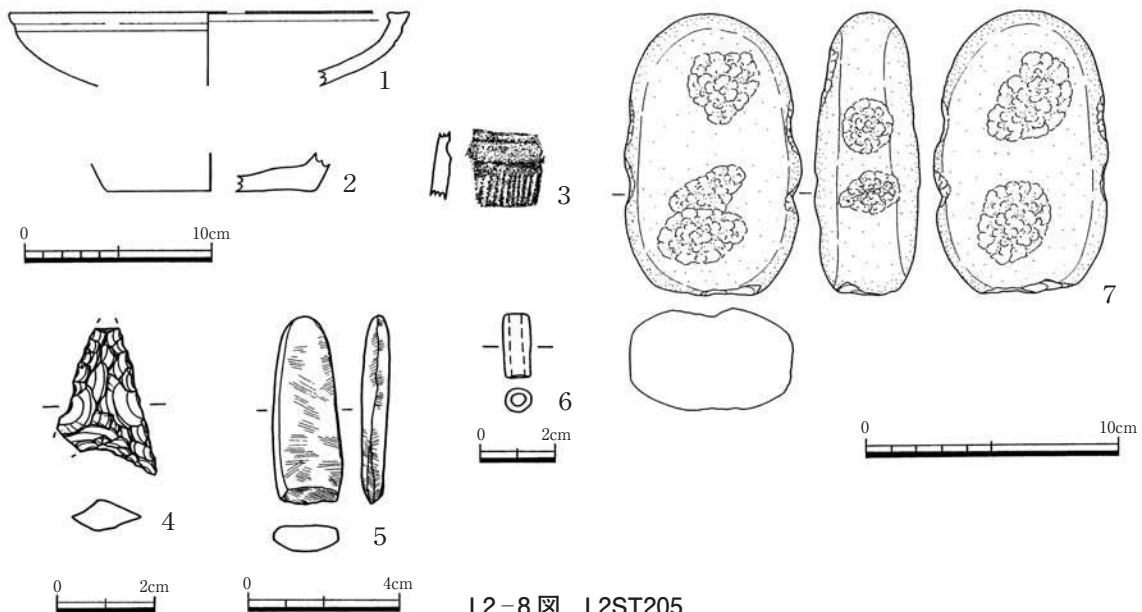
L2-7 図 L2ST204

居跡ST201の東側に隣接し、ST206を切る。埋土は黒褐色シルトを中心とする3層からなり、炭化物を含む。壁溝は1条巡り、遺構の西部では52cm程途切れている。また壁構の東部と西部に小ピットを確認し、南部と西部の壁構内には60cm×48cm、72cm×68cmを測る性格不明のピット2個が認められる。中央ピットはほぼ中央部に位置し、断面箱形を呈する。埋土中には炭化物が混じる。支柱穴は推定数5個の内4個を確認した。支柱穴間は最大1.28mを測る。床面ではSB202のP5・P6を検出した。

出土遺物は埋土中からの出土で極少量である。貼付口縁を有する壺の口縁部細片と口縁部に凹線



- 1 黒褐色シルト (10YR3/2) 黄褐色シルト含む。
 2 黒褐色シルト (10YR3/2) 炭化物含む。
 3 黒褐色シルト (10YR3/2) 黄灰色砂質シルト含む。



L2-8 図 L2ST205

文を施す高杯(1)、底部の土器片1点、石器ではサヌカイト製の大型の石鏃(4)、管玉(6)、叩石(7)が出土している。弥生時代後期前葉の可能性が考えられる。

L2ST206(L2-9 図)

時期：弥生IV 形状：円形 主軸方向：—

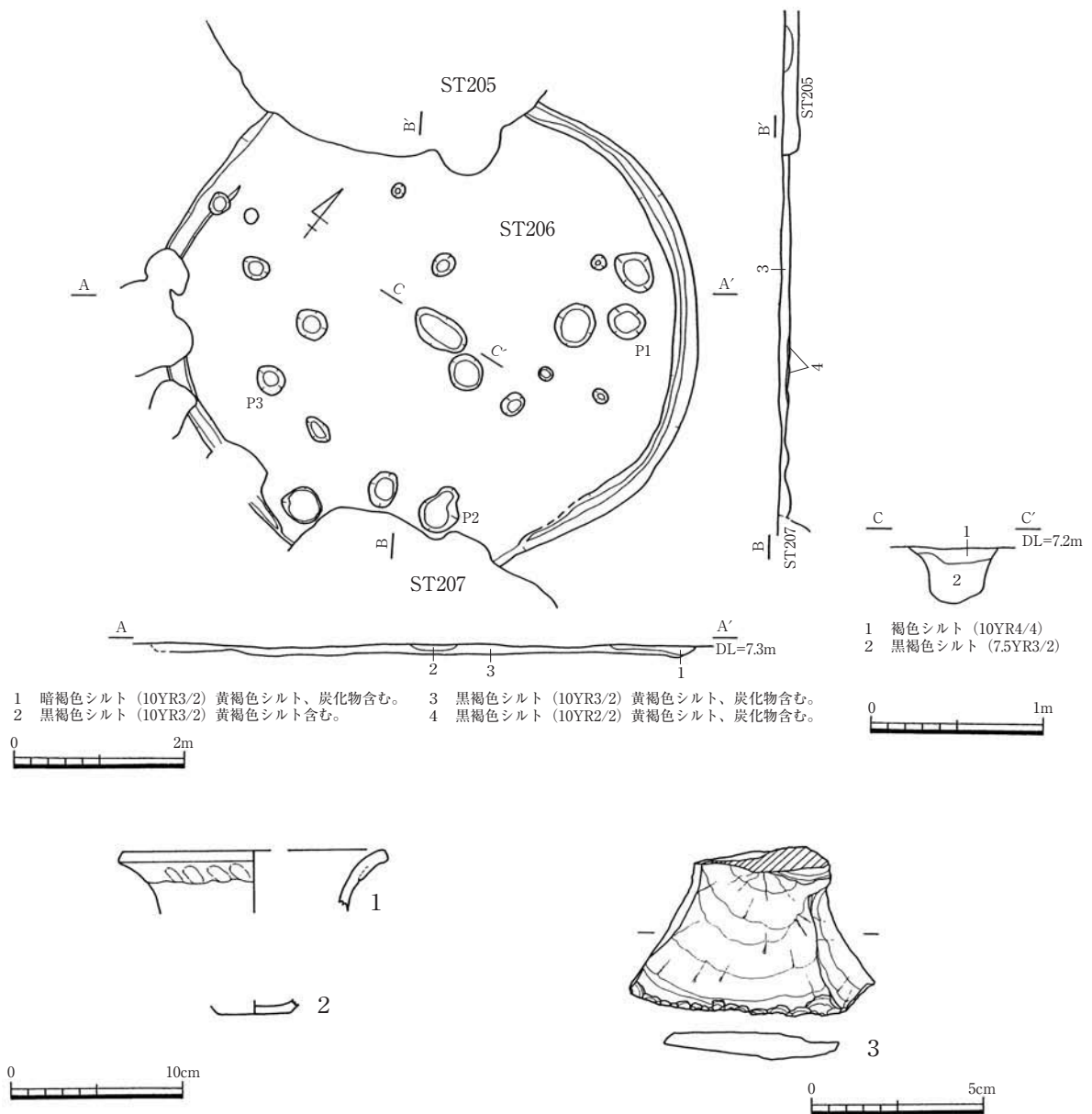
規模：6.12×5.8m 深さ：12cm 面積：27.86㎡

埋土：褐色・黒褐色シルト

ピット：数 20 主柱穴数：推定 4 個の内 3 個 主柱穴：P1～P3

床面：1 面 貼床：無 焼失：無

中央ピット：形状 楕円形 規模 68×36cm 深さ 32cm 埋土 黒褐色シルト(炭化物含む)



L2-9 図 L2ST206

壁溝：1条 幅20～28cm 深さ3～6cm

出土遺物：弥生土器(壺)、スクレイパー

所見：調査区の北東部において検出したやや大型の住居跡である。住居跡が幾重にも切り合い、密集する遺構群の中にあり、3軒の住居跡と切り合っている(ST205・207に切られ、ST208を切る)。上面が削平されているため、埋土の深さは約12cmと浅く、褐色・黒褐色シルトの2層からなり、下層には炭化物が混じる。壁溝は1条巡り、遺構北部の西半分と南部の東半分は別遺構に切られているため詳細は不明である。中央ピットは楕円形でほぼ中央部に位置し、断面はU字状を呈する。下層には炭化物が混じる。主柱穴は推定4個の内3個を確認し、主柱穴間は最大3.2mを測る。遺構内では20個近いピットを検出するが、切り合いが複雑なため、本遺構に不随するピットを特定することは困難であった。南半分の床面で確認したP2138・P2175は先行する時期の掘立柱建物跡である。

出土遺物は極めて少なく、貼付口縁を有する壺の口縁部(1)と底部の土器片2点、サヌカイト製のスクレイパーが1点出土しているのみである。弥生時代中期と考えられる。

L2ST207(L2-10 図)

時期：弥生V-1 形状：方形 主軸方向：N-11°-W

規模：3.28×2.52m 深さ：36cm 面積：8.45㎡

埋土：黒褐色シルト

ピット：数5 主柱穴数：4 主柱穴：P1～P4

床面：1面 貼床：有 焼失：無

中央ピット：不明

壁溝：1条 幅12～20cm 深さ3～5cm

出土遺物：弥生土器(甕、壺、高杯)

所見：密集する住居跡の東端において検出した。数少ない方形を呈する住居跡で、南側に隣接する住居跡ST206を切る。埋土は黒褐色シルトを基調とする3層からなる。壁溝が1条巡り、北部隅で30cm程途切れている。中央ピットは検出できなかった。主柱穴は4個を確認し、P1の埋土中には焼土・炭化物が混じる。最大柱穴間は1.4mを測る。

出土遺物は埋土中から壺、甕、高杯が出土している。1は壺で貼付口縁を有し、端部に刻目を巡らすもので、2の甕は摩耗が著しいが口縁端部に凹線文を施すものである。高杯は円孔を有する脚部(7・8)が出土している。

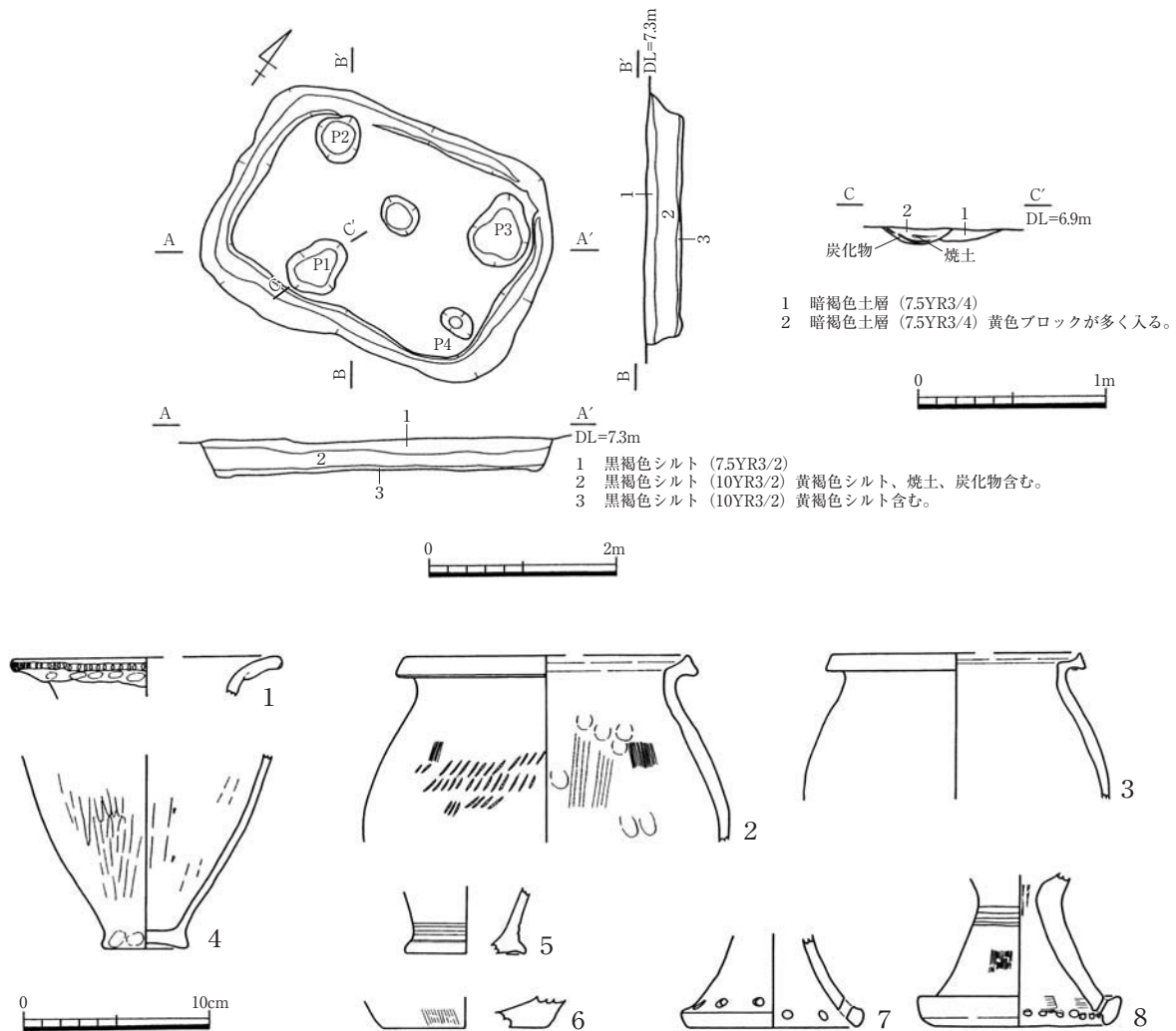
L2ST208(L2-11～12 図)

時期：弥生IV 形状：円形 主軸方向：—

規模：6.28×6.0m 深さ：8cm 面積：30.96㎡

埋土：黒褐色シルト(炭化物含む)

ピット：数14 主柱穴数：4 主柱穴：P1～P4



L2-10 図 L2ST207

床面：1面 貼床：無 焼失：無

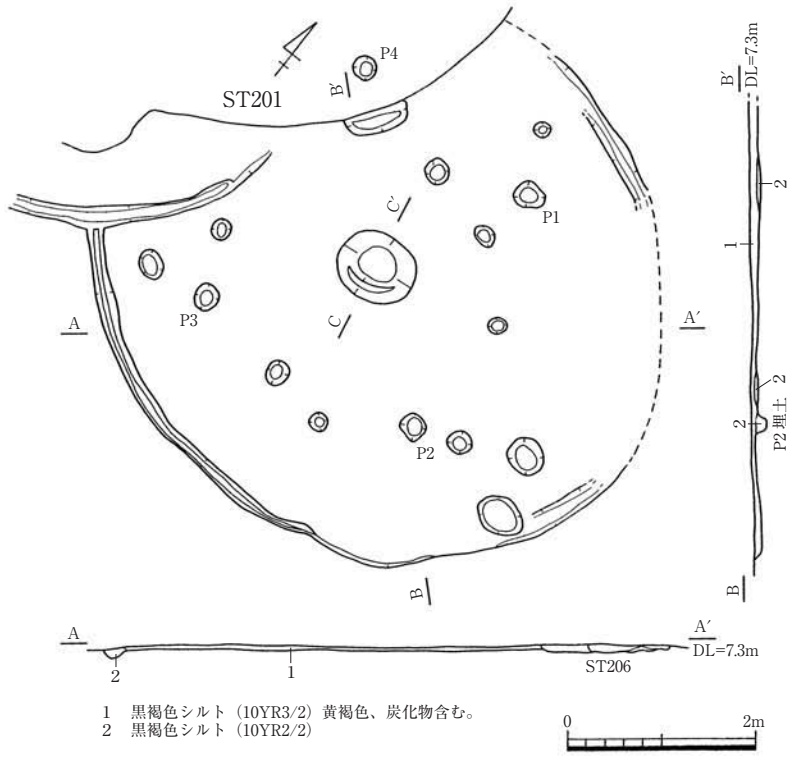
中央ピット：形状 円形 規模 86×72cm 深さ 28cm 埋土 黒褐色シルト

壁溝：1条 幅 8cm 深さ 7cm

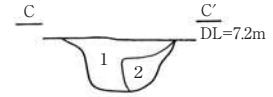
出土遺物：弥生土器(壺、把手)、石斧、砥石

所見：調査区北方、密集する住居跡群に位置するやや楕円形状を呈した住居跡である。切り合い関係はST201・218・206に切られ、ST209を切る。埋土は上層が削平されているため浅く、黒褐色を基調とするシルトに炭化物が混じる。壁溝は1条巡るが、北部と南東部は途切れているため詳細は不明である。中央ピットはほぼ中央部に位置し、断面逆台形を呈する。埋土は黒褐色シルトを基調とする2層からなり、下層に炭化物が混じる。支柱穴は4個が確認されており、支柱穴間は最大2.72mを測る。

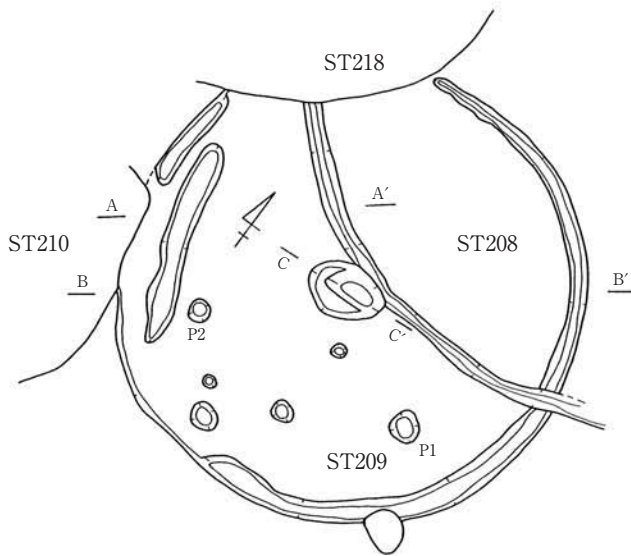
出土遺物は少量で、埋土中から器種不明の把手(7)、底部の土器片(4)、頁岩製の小型石斧(9)、砂岩製の砥石(12)が出土している。



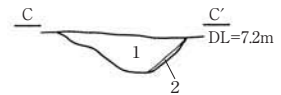
L2ST208



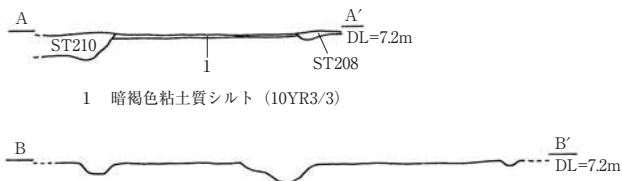
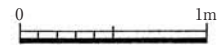
- 1 黒褐色シルト (10YR3/2) 黄褐色シルト入る。
- 2 黒褐色シルト (10YR3/2) 炭化物含む。



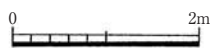
L2ST209



- 1 黒褐色シルト (10YR3/2)
- 2 黒褐色シルト (10YR3/2) 黄褐色シルト含む。



- 1 暗褐色粘土質シルト (10YR3/3)



L2-11 図 L2ST208・209(1)

L2ST209(L2-11・12 図)

時期：弥生IV-2 形状：円形 主軸方向：—

規模：5.06×5.0m 深さ：4cm 面積：19.6㎡

埋土：黒褐色シルト、黄褐色シルト

ピット：数 11 主柱穴数：推定 4 主柱穴：P1～P4

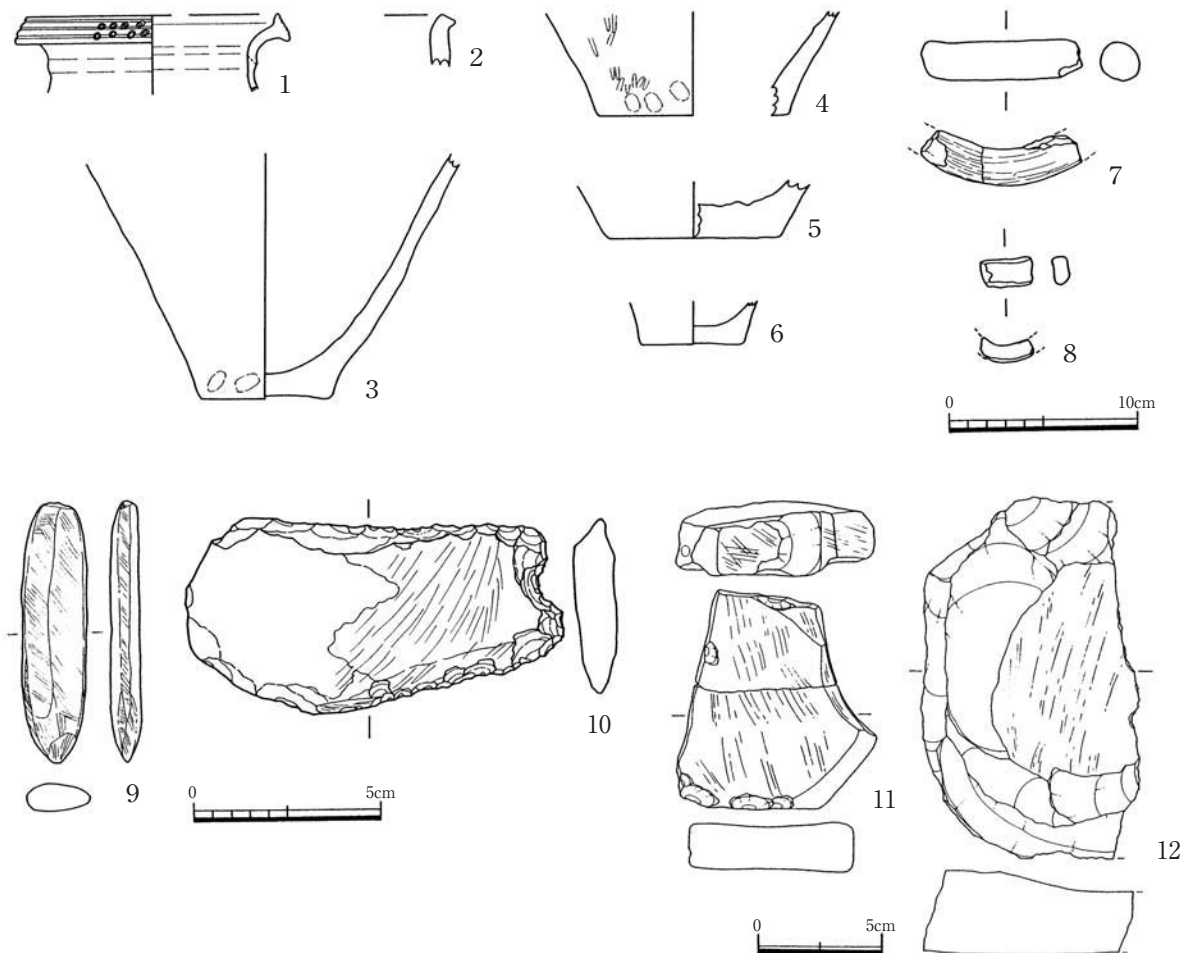
床面：1面 貼床：無 焼失：無

中央ピット：形状 円形 規模 84×58cm 深さ 40cm 埋土 黒褐色シルト(炭化物含む)

壁溝：1条 幅 12～20cm 深さ 4～6cm

出土遺物：弥生土器(壺、把手)、石包丁

所見：密集する住居跡群の中央部に位置する円形の住居跡である。2軒の住居跡ST208・210に切られる。埋土は上面が削平されているため堆積は浅く、暗褐色粘土質シルトの単純一層である。床面直上で壁溝を1条検出したが、南西部で一部途切れているため詳細は不明である。中央ピットはほぼ中央部に位置し、断面逆台形を呈する。埋土は黒褐色シルトを基調とする2層である。主柱穴は4個を確認し、主柱穴間は最大2.24mを測る。



L2-12 図 L2ST208・209(2) (ST208：4・7・9・11・12、ST209：1～3・5・6・8・10)

出土遺物は床面から壺、把手、土器の底部が出土している。1は壺である。口縁部に凹線文を巡らし、円形の刺突文を施すものである。その他把手(8)がみられる。底部土器片(5・6)は中央ピットからの出土である。石器では粘板岩製の石包丁1点を確認した。出土遺物からは弥生時代中期後葉が考えられる。

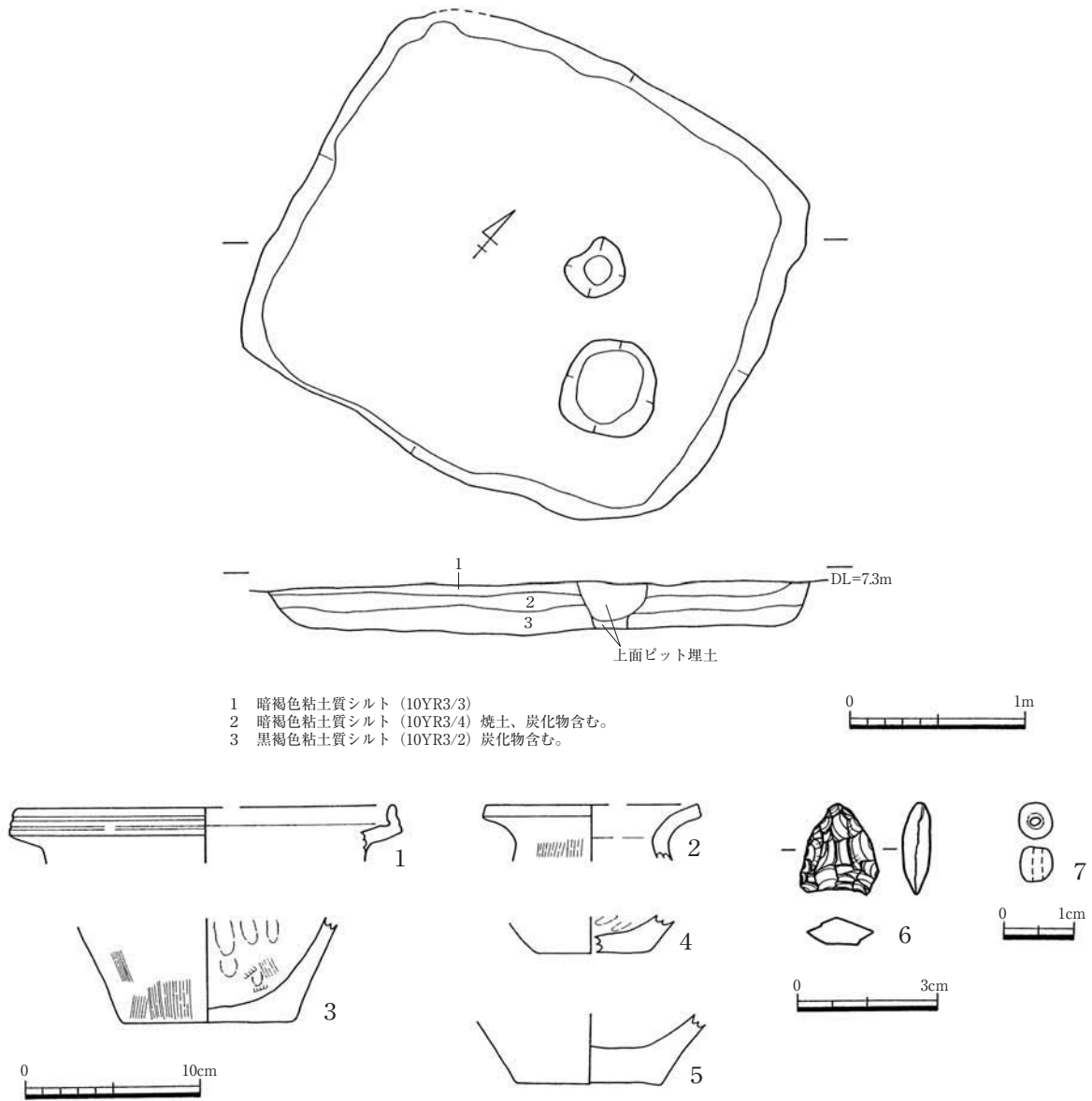
L2ST210(L2-13 図)

時期；弥生V-1 形状；方形 主軸方向；N-77°-E

規模；2.72×2.52m 深さ；28cm 面積；5.8m²

埋土；暗褐色・黒褐色シルト質粘土

ピット；数3 主柱穴数；不明



L2-13 図 L2ST210

床面；1面 貼床；無 焼失；無

中央ピット；—

壁溝；—

出土遺物；弥生土器(甕、壺)、石鏃、ガラス小玉、サヌカイト剥片

所見；調査区の中央、東側において検出した方形を呈する小型の住居跡である。密集する住居跡群の中で3軒の住居跡と切りあっており、ST209・211、P2132を切る。埋土は褐色の粘土質シルトを基調とする3層で、下層からは焼土・炭化物が検出された。壁溝、中央ピット、主柱穴等は確認できなかった。床面からは先行する時期の掘立柱建物跡SB212のP1が検出された。

出土遺物は少量であるが、埋土中より壺、甕の口縁部の細片が出土している。1は甕である。口縁部に凹線文を施すものである。石器ではサヌカイト製の打製石鏃が1点(6)、ガラス小玉1点(7)が出土している。

L2ST211(L2-14・15 図)

時期；弥生IV-2 形状；円形 主軸方向；—

規模；6.88×6.64m 深さ；16cm 面積；35.87㎡

埋土；黒褐色シルト(炭化物、焼土含む)、黒褐色シルト質粘土

ピット；数12 主柱穴数；不明 主柱穴；P1～P3

床面；1面 貼床；無 焼失；無

中央ピット；形状 円形 規模 84×80cm 深さ 40cm 埋土 暗褐色シルト(炭化物含む)、黒褐色シルト

壁溝；1条 幅7～9cm 深さ11cm

出土遺物；弥生土器(甕、壺、鉢、高杯)、石鏃、石包丁

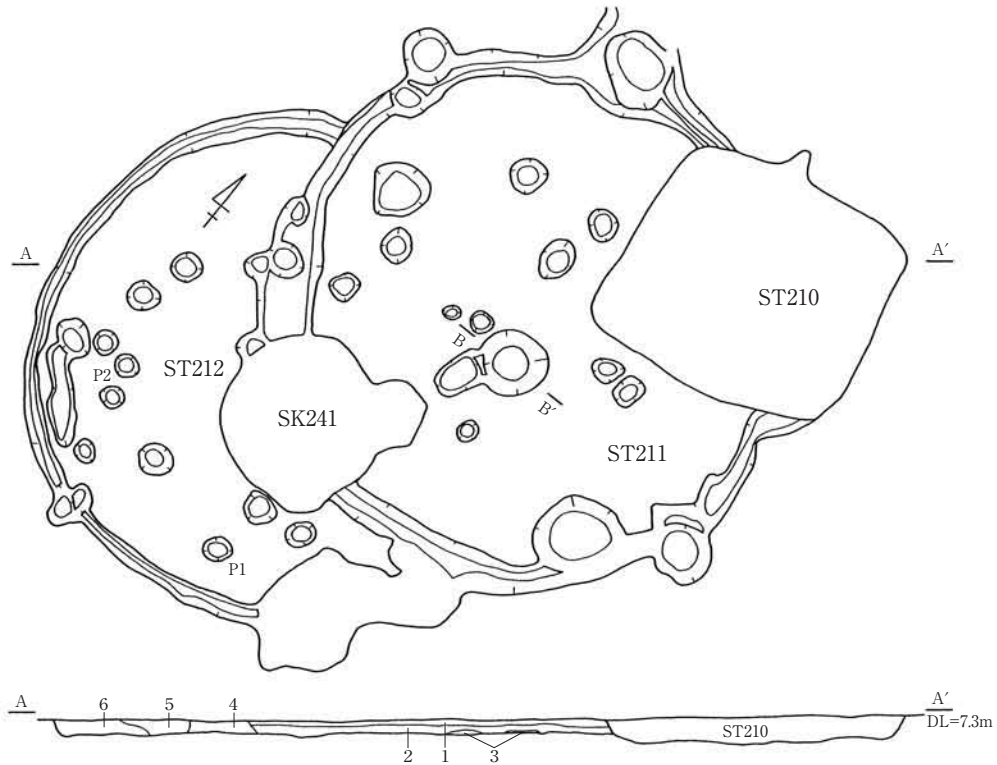
所見；調査区中央部において検出した。密集する住居跡群の中ではやや南方に位置する円形の住居跡である。方形の住居跡ST210と円形の土坑SK241に切られ、ST212、掘立柱建物跡SB212・213を切る。埋土は上面が削平されているため堆積は浅く、暗褐色と黒褐色粘土質シルトを基調とする3層からなる。埋土中には炭化物が混じる。壁溝1条を検出する。遺構の中央やや南側より、中央ピットを確認する。断面が逆台形状を呈し、埋土は黒褐色シルトを基調とする2層からなり、焼土・炭化物が混じる。主柱穴は3個を確認し、最大柱穴間は1.92mを測る。

出土遺物は床面から壺・甕・鉢・高杯が出土している。特に中央ピットからは壺の口縁部2点(1・2)、高杯の脚部1点(20)、小型土器2点、底部2点の計7点が出土し、他の住居跡と性格を異にする。他の埋土からは長頸壺の口縁部(5)、タタキ目が残る壺の胴部(9)、石器ではサヌカイト製の打製石鏃3点(22～24)、粘板岩製の石包丁1点(21)が確認されている。

L2ST212(L2-14・15 図)

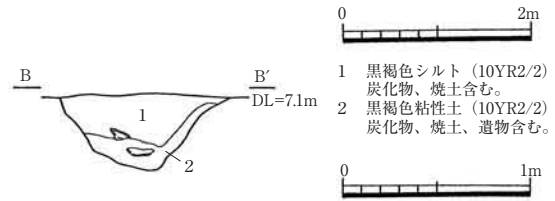
時期；弥生 形状；円形 主軸方向；—

規模；7.0×6.84m 深さ；24cm 面積；37.59㎡

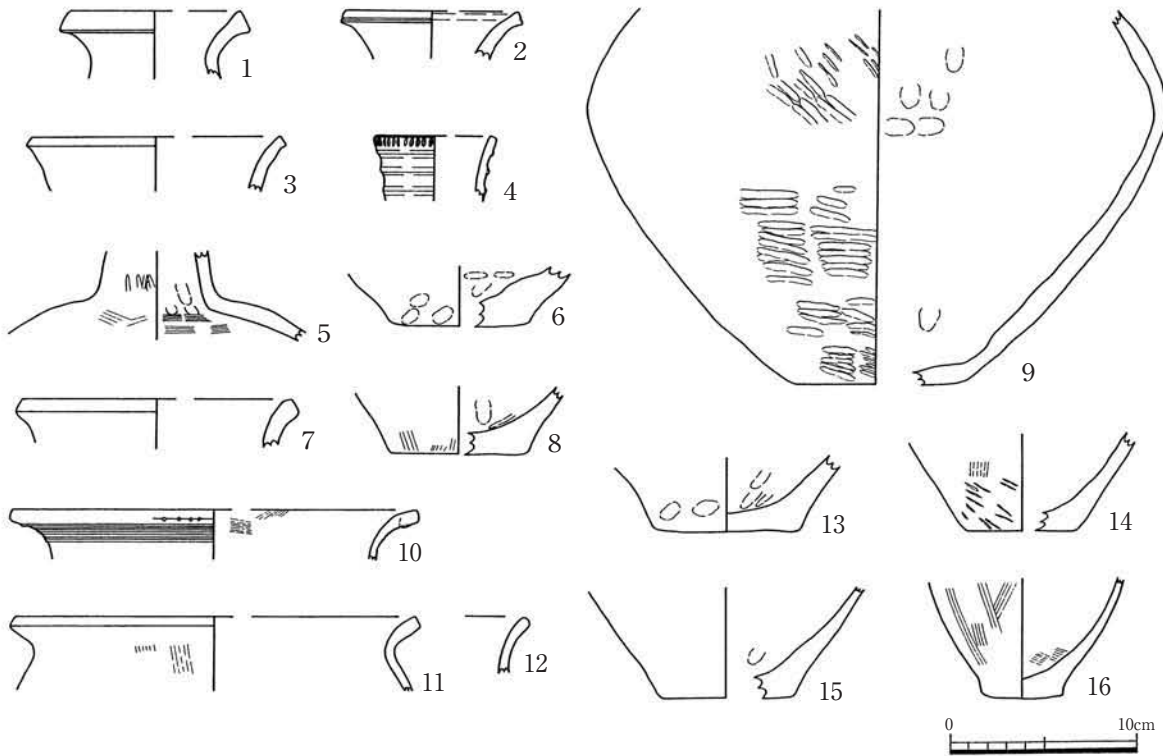


- ST211 埋土
 1 暗褐色シルト (10YR3/3) 炭化物含む。
 2 黒褐色シルト (10YR3/2) 炭化物含む。
 3 黒褐色シルト (10YR3/2) 黄褐色シルト含む。

- ST212 埋土
 4 黄褐色粘性土 (2.5Y5/4)
 5 黒褐色シルト (10YR3/2) 炭化物含む。
 6 暗褐色粘性土 (10YR3/3)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 炭化物、焼土含む。
 2 黒褐色粘性土 (10YR2/2) 炭化物、焼土、遺物含む。



L2-14 図 L2ST211・212(1) (ST211: 1~6・8~11・14~16, ST212: 7・12・13)

埋土；黒褐色シルト

ピット；数 9 主柱穴数；推定 4 のうち 2 主柱穴；P1・P2

床面；1 面 貼床；無 焼失；無

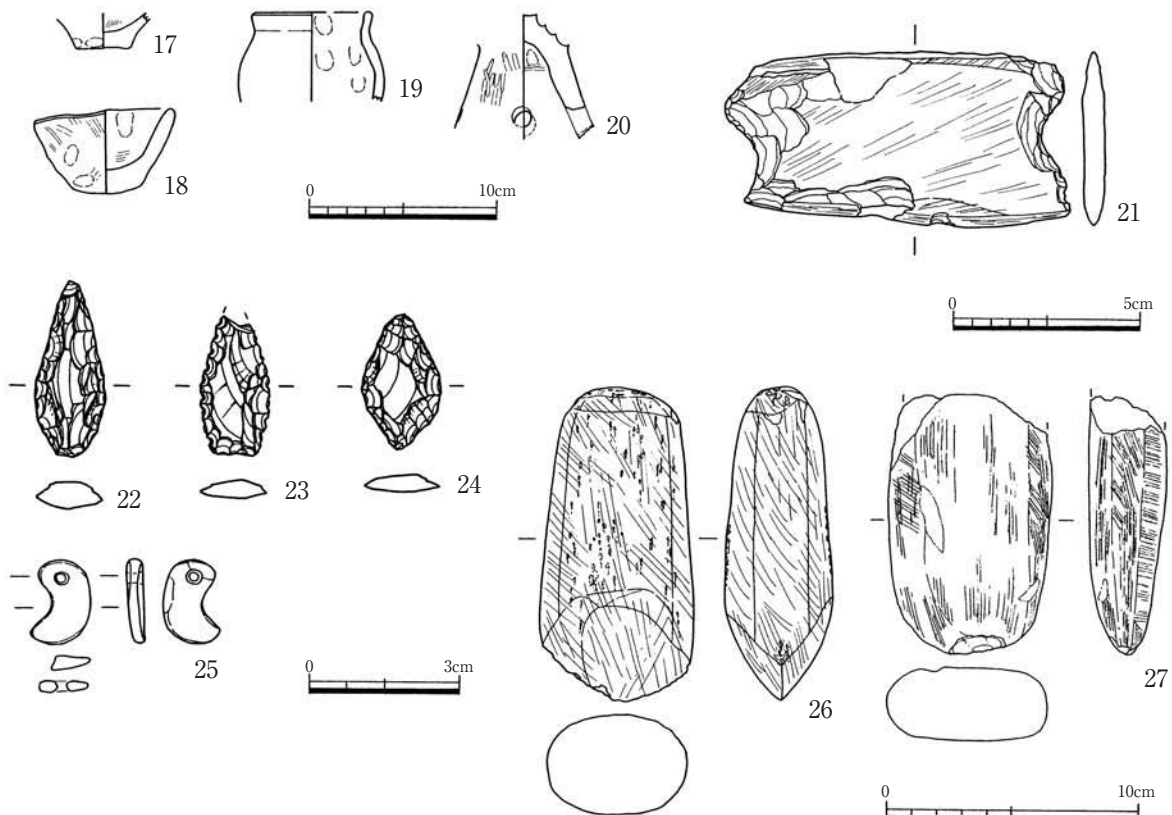
中央ピット；不明

壁溝；1 条 幅 16～28cm 深さ 5～9cm

出土遺物；弥生土器(壺)、太型蛤刃石斧、勾玉、サヌカイト剥片

所見；調査区中央部、東側において検出した。密集する住居跡群の南方に位置する円形状の住居跡で、住居跡ST211と土坑SK241に切られる。ST211と同じく上面を削平されているため、堆積は浅い。埋土は褐色の粘土質シルトを基調とする3層で、黒褐色シルト層には炭化物を含む。1条の壁溝が全面に巡り、壁の立ち上がりは5～9cmである。中央ピットは遺構の中央部がSK241によって切られているため確認できなかった。主柱穴は位置関係から4個と推定されるが、2個のみを検出した。最大主柱穴間は1.72mを測る。

出土遺物は細片であるが、床面から壺の口縁部(7)と底部(13)が出土し、石器では太型蛤刃石斧が2点(26・27)と勾玉が1点(25)確認できた。



L2-15 図 L2ST211・212(2) (ST211；17～24、ST212；25～27)

L2ST213(L2-16 図)

時期：弥生IV 形状：円形 主軸方向：—

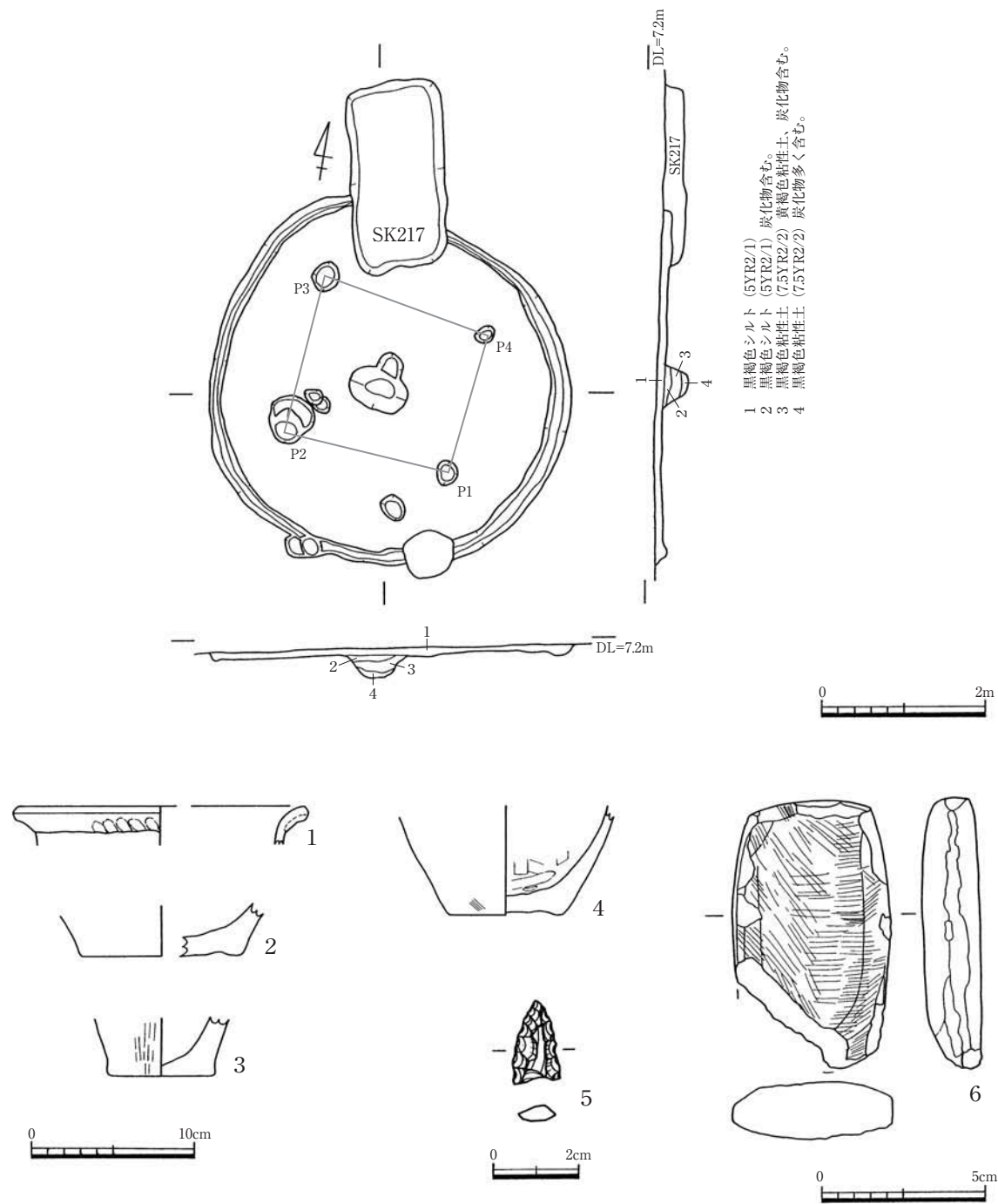
規模：4.68×4.4m 深さ：12cm 面積：16.18㎡

埋土：黒褐色シルト(炭化物を含む)

ピット：数8 支柱穴数：4 支柱穴：P1～P4

床面：1面 貼床：無 焼失：無

中央ピット：形状 楕円形 規模 27×68cm 深さ 28cm 埋土 黒褐色シルト(炭化物を含む)



L2-16 図 L2ST213

壁溝；1条 幅4～16cm 深さ4～12cm

出土遺物；弥生土器(壺)、石鏃

所見；調査区中央部、西方において検出した円形を呈する住居跡である。住居跡ST216の北側、SK216の東隣りに位置する。北側に隣接する方形の土坑SK217を切る。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトの単統一層で、床面には壁溝が1条巡る。中央ピットは楕円形でほぼ中央に位置し、断面はすり鉢状を呈する。埋土は黄褐色シルト及び粘性土の3層からなり、炭化物が混じる。主柱穴は4個を検出し、最大柱穴間は1.8mを測る。

出土遺物は細片であるが、貼付口縁を有する壺の口縁部が1点(1)と底部3点(2～4)が床面から出土している。石器ではサヌカイト製の打製石鏃1点(5)と刃部が破損している蛇紋岩製の石斧(6)が出土している。出土遺物からは弥生時代中期の住居跡と考えられる。

L2ST214(L2-17～19 図)

時期；弥生V-1～2 形状；円形 主軸方向；—

規模；7.42×7.35m 深さ；42.5cm 面積；42.81㎡

埋土；黒褐色シルト質粘土(焼土、炭化物含む)、赤褐色(焼土)、黒色シルト質粘土

ピット；数25 主柱穴数；19

主柱穴；(一次 P3・6・12・16・19・25 二次 P2・3・6・12・16・19 三次 P1・4・7・8・9・14・20)

床面；2面 貼床；有 焼失；有

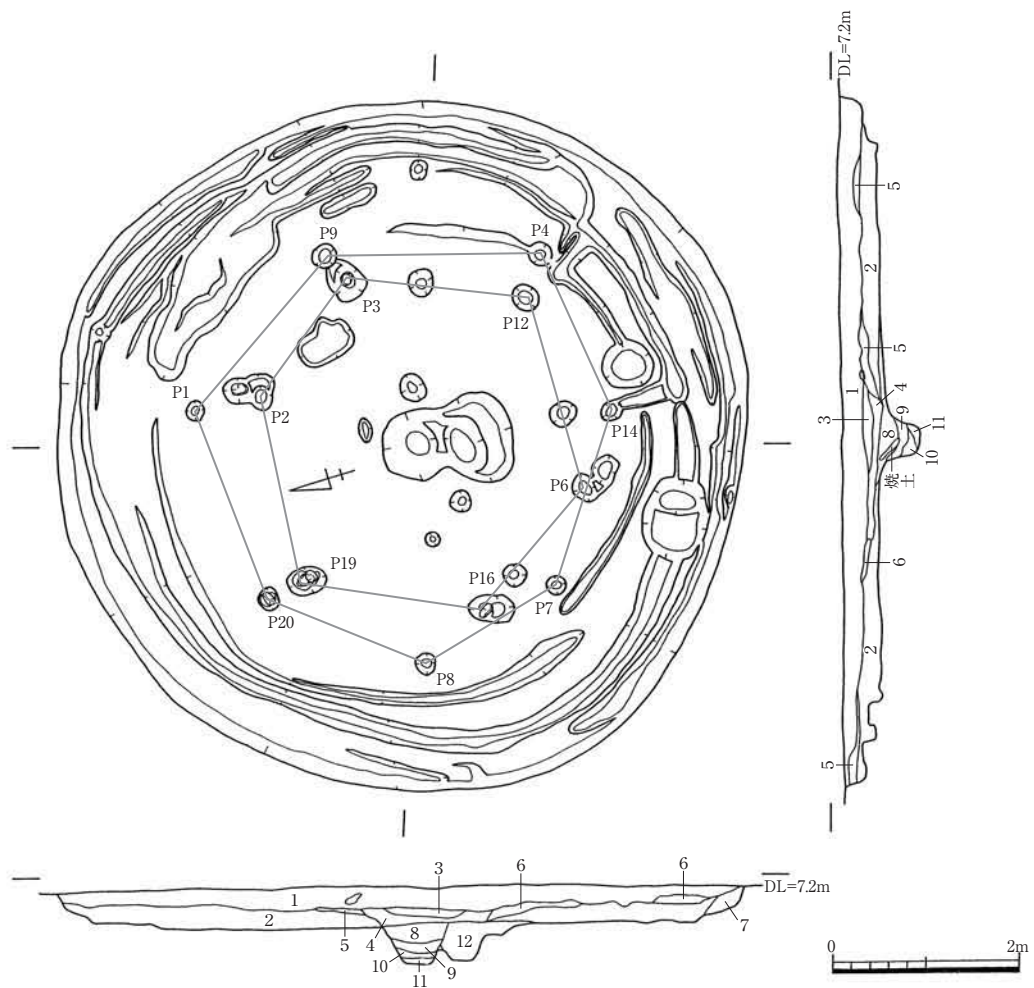
中央ピット；形状 楕円形 規模 92×76cm 深さ 24cm 埋土 黒褐色シルト(炭化物、焼土含む)

壁溝；3条 幅12～32cm 深さ5～14cm

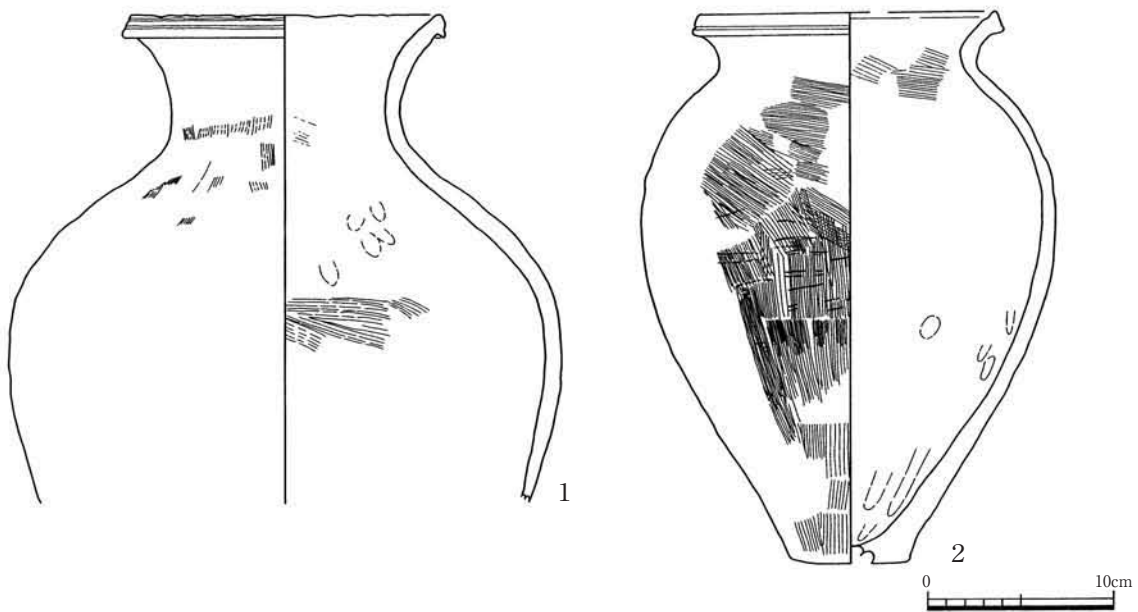
出土遺物；弥生土器(甕、壺、鉢、高杯、手捏土器)、石鏃、石斧、砥石、石包丁、石錘、ガラス玉

所見；調査区の西端において検出した直径7mを越える大型の住居跡である。住居跡ST217の西隣りに位置する。埋土は黒褐色シルトを基調とする4層で、2層には炭化物と多量の焼土が含まれる。壁溝が3条巡っていることから、3時期に亘っての建て替えが行なわれた痕跡が明確に残る。三次住居の壁構は北から北西部にかけて途切れているが、一次と二次住居では残りが良い。中央ピットは断面が逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘性土を基調とする4層である。埋土中及び床面全面に焼土・炭化物が入り、特に2層目は焼土層であった。中央ピットの南部には補助的なピットがあり、遺物とともに多量の焼土・炭化物が検出された。主柱穴では一次と二次住居が各6個、三次住居が7個を確認する。一次住居の最大柱穴間は1.88mで二次住居では2m、三次住居は2.08mを測る。P9・10・11・15・19・25からは明確な柱痕跡が残っていた。三次住居で使用された2個の柱穴P8・P20からは砂岩製の砥石が出土している。3次住居で使用されたと考えられる貯蔵穴を遺構南側より確認する。床面には厚さ20cmの貼床が施されている。

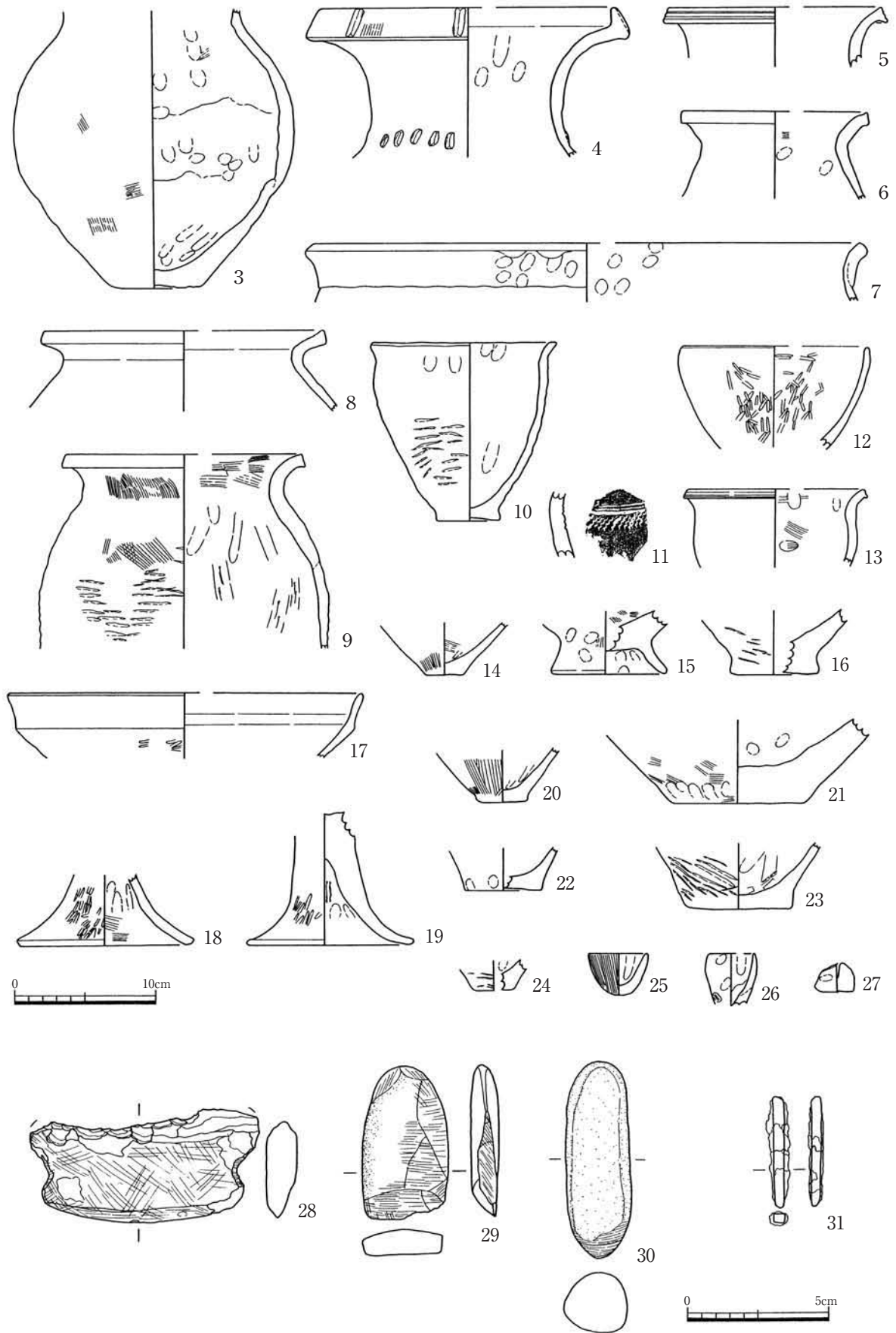
出土遺物は壺、甕、鉢、高杯、小型土器、小鉢、手捏土器が出土している。1・4・5は壺である。1・5は口縁部に凹線文を施し、4は浮文を貼付するものである。2・9・10は甕で胴部にタタキ目を残すものである。その内2は中央ピットからの出土である。11・12は鉢で12は口縁部に凹線文を施し、



- | | |
|---------------------------------------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色シルト (5YR2/1) 黄褐色シルトを少し含む、遺物を含む。 | 7 黒褐色シルト (5YR2/2) 黄褐色シルトを少し含む。 |
| 2 黒褐色粘性土 (5YR2/1) 黄褐色粘性土が帯状に横に入る。(貼床) | 8 黒褐色粘性土 (10YR2/2) 炭化物を含む。 |
| 3 黒褐色粘性土 (5YR2/1) 黄褐色シルトを少し含む。 | 9 黒褐色粘性土 (7.5YR2/2) 焼土・炭化物が入る。 |
| 4 黒褐色シルト (10YR2/2) 焼土を含む。 | 10 焼土層 (赤褐色) |
| 5 黒褐色粘性土 (5YR3/1) 炭化物・焼土を含む。 | 11 黒褐色粘性土 (10YR2/1) 焼土・炭化物・遺物が入る。 |
| 6 黒褐色粘性土 (5YR3/1) 炭化物・焼土を強く含む。 | 12 黒褐色粘性土 (5YR2/1) 黄褐色シルトが入る。 |



L2-17 図 L2ST214(1)



L2-18 図 L2ST214(2)

11は胴部にヘラミガキが残る。18は高杯の脚部で搬入品と考えられるものである。手捏(26・27)や小型土器(24・25)、小型鉢(20)の出土は特徴的である。石器ではサヌカイト製の石鏃が5点(33～37)、石槍(32)、蛇紋岩製の小型石斧(29)、抉り入りの頁岩製石包丁(28)、砂岩製の有溝石錘(51)が1点、砂岩製の穿孔具(30)が出土している。特異な遺物としてはガラス玉が68個出土している(38～50)。また器種は不明であるが、鉄片が1点(31)とサヌカイト剥片が確認できた。ガラス玉の出土量等から考えると、ST201と同様に廃絶に伴う祭祀的な行為が伺われる。

L2ST215(L2-20 図)

時期：弥生IV-2 形状：円形 主軸方向：—

規模：6.44×6.4m 深さ：30cm 面積：32.35㎡

埋土：黒褐色シルト質粘土(炭化物)

ピット：数9 主柱穴数：推定6のうち5 主柱穴：P1～P5

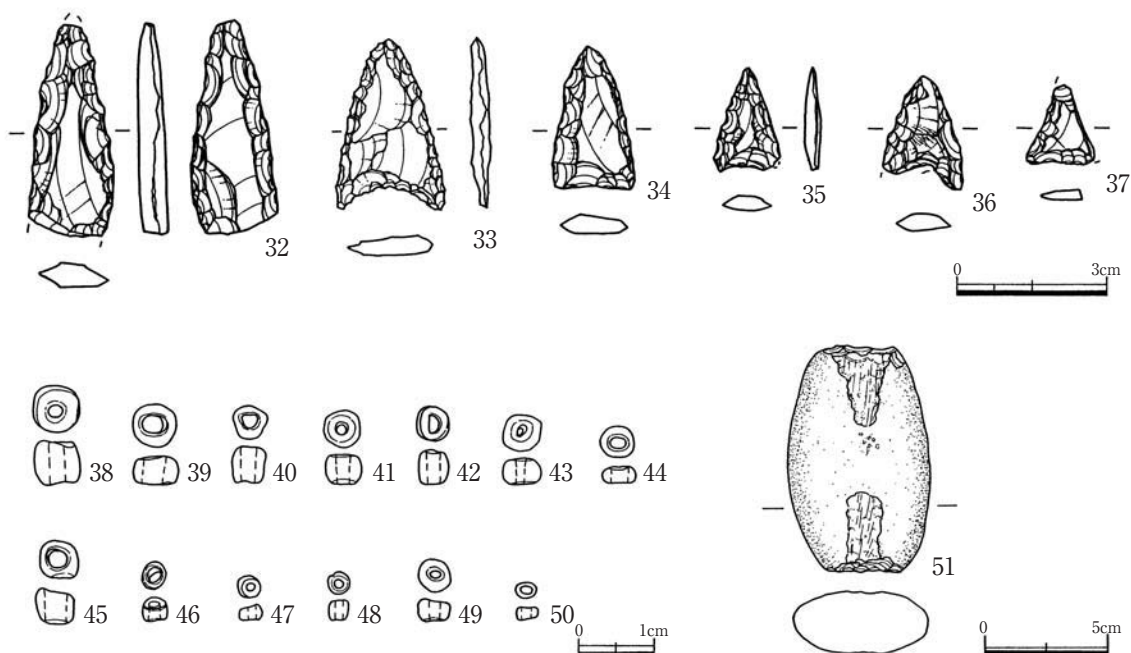
床面：1面 貼床：有 焼失：無

中央ピット：形状 楕円形 規模 52×32cm 深さ 30cm 埋土 暗褐色シルト、黒褐色シルト

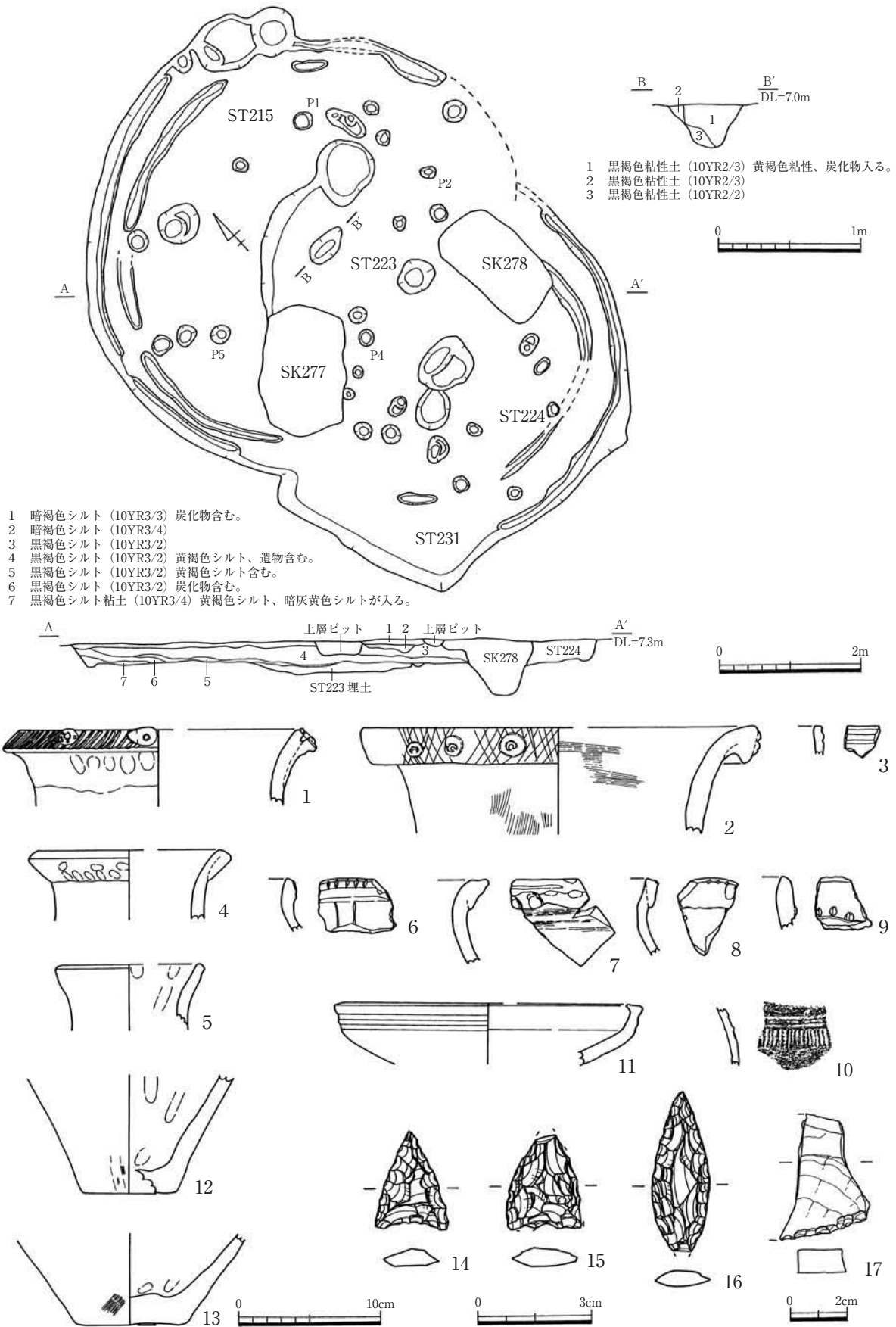
壁溝：2条 幅8～20cm 深さ4～5cm

出土遺物：弥生土器(壺、高杯)、石鏃、石斧、スクレイパー、サヌカイト剥片

所見：調査区の北方、密集する住居跡群の西端に位置する。大型住居跡ST201に切られ、ST222・223・224・225・231・土坑SK278を切り、SK277に切られる等複雑な切り合い関係をなす。プランは全体の北側2/3ほどが確認できる。埋土は暗褐色・黒褐色を基調とする4層で炭化物が混じる。壁溝が2条巡り、遺構の西部側では32cm程途切れている。中央ピットはほぼ中央部に位置し、



L2-19 図 L2ST214(3)



L2-20 図 L2ST215

断面がU字状を呈する。埋土は黒褐色粘性土で炭化物が混じる。埋土中にはサヌカイト片が多数(55.81g)入る。支柱穴は推定6個と考えられ、支柱穴間は最大2.2mを測る。一次住居で使用されたと思われる貯蔵穴も確認する。床面の炭化物層からは炭化米が検出されている。

出土遺物は壺、高杯、土器の底部である。1と2の壺は貼付口縁を有し端部に円形浮文を貼付するものである。6・8は貼付口縁を有し、端部に刻目を施すもの、11の高杯の杯部は口縁部に凹線文を施すものである。また図示できなかったが、中央ピットから未貫通の透かしを有する高杯脚部細片が出土している。石器は打製石鏃(14～16)、ノミ状の小型石斧、サヌカイト製のスクレイパー(17)が出土している。

L2ST216(L2-21 図)

時期：弥生IV-2 形状：円形 主軸方向：—

規模：3.72×3.6m 深さ：36cm 面積：10.52㎡

埋土：黒褐色シルト(炭化物含む)

ピット：数1 支柱穴数：4 支柱穴：P1～P4

床面：1面 貼床：無 焼失：無

中央ピット：形状 円形 規模 80×64cm 深さ 20cm 埋土 黒褐色シルト(炭化物含む)

壁溝：1条 幅 16～20cm 深さ 4cm

出土遺物：弥生土器(壺、鉢)

所見：調査区西中央、西側より検出した円形を呈する小型住居跡である。東に隣接するST217を切る。埋土は黒褐色シルトを基調とする3層で、切り合うST217との境である2層下には炭化物層がみられた。壁溝は遺構の西半分で1条検出したが、東半分では確認できなかった。中央ピットはほぼ中央に位置し、断面舟底状を呈する。上層はシルトで下層は炭化物を含む粘性土である。支柱穴は4個を確認し、支柱穴間は最大1.2mを測る。床面では方形状を呈した土坑SK225を検出した。

出土遺物は壺、鉢が出土している。1～3は壺で1は貼付口縁を有し、3は長頸で凹線文を巡らす。12は鉢で口縁部に強いヨコナデを有し、外面ヘラミガキを施す。13のように端部平坦面をなすものも出土している。その他石器ではサヌカイト製の石鏃(14)が出土している。出土遺物からは弥生時代中期が考えられる。

L2ST217(L2-21 図)

時期：弥生IV-2 形状：円形 主軸方向：—

規模：3.64×3.52m 深さ：32cm 面積：10.06㎡

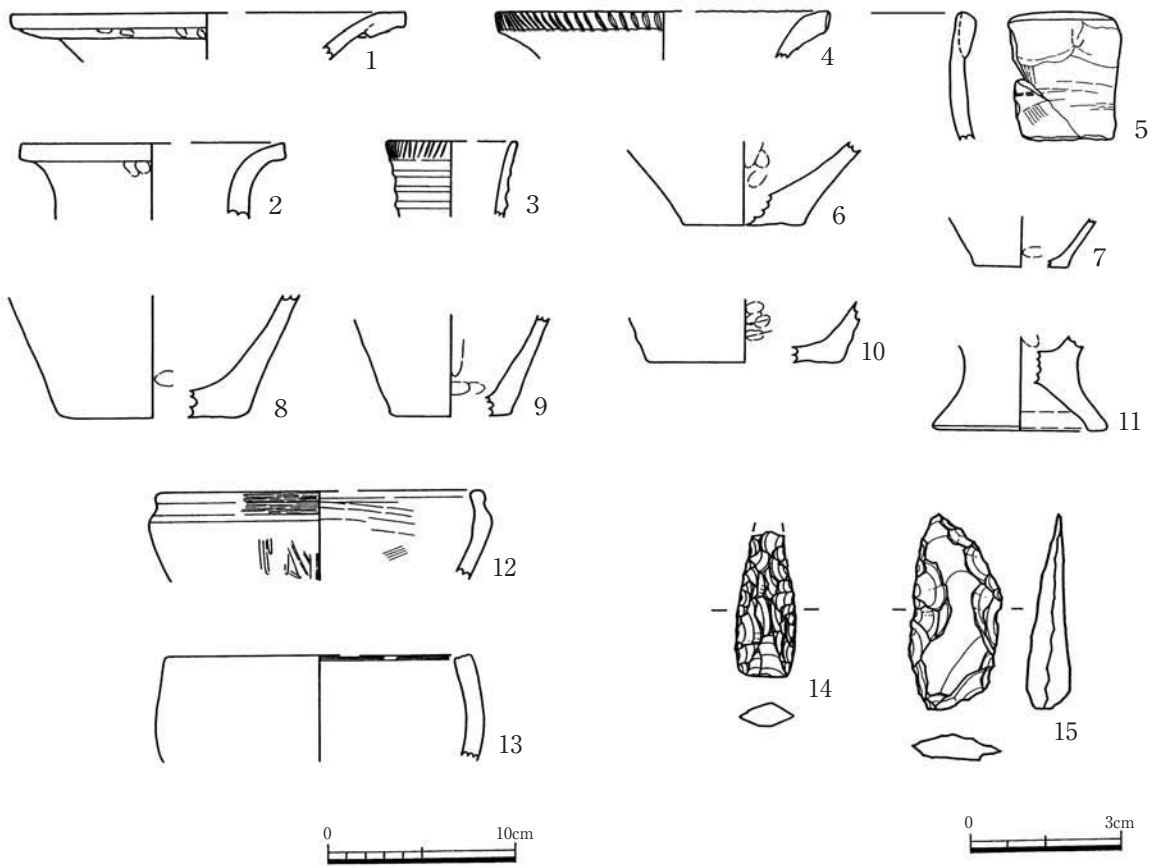
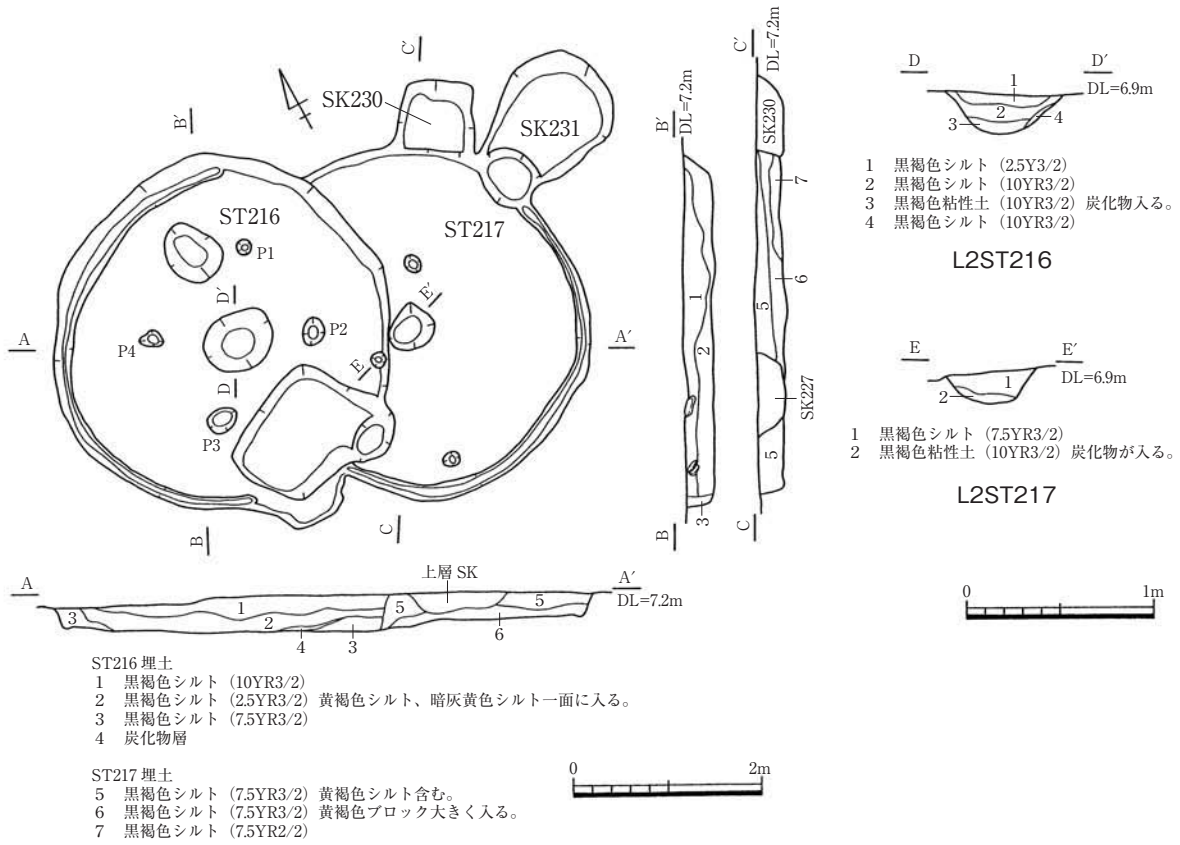
埋土：黒褐色シルト

ピット：数4 支柱穴数：不明

床面：1面 貼床：無 焼失：無

中央ピット：形状 楕円形 規模 56×40cm 深さ 16cm 埋土 黒褐色シルト

壁溝：—



L2-21 図 L2ST216・217(ST216: 1~3・8・9・12・14, ST217: 4~7・10・11・13・15)

出土遺物；弥生土器(壺、鉢)、石斧、サヌカイト剥片

所見；調査区の西部に位置する円形を呈した中型の住居跡である。住居跡ST213の南側、ST219の西側に位置し、隣接するST216に切られ、SK230・231を切る。埋土は黒褐色シルトを基調とする3層である。南半分に壁溝が1条巡るが、遺構の北部では確認できなかった。中央ピットはほぼ中央部に位置し、断面が逆台形状を呈する。埋土は黒褐色を基調とする2層からなり、上層はシルト、下層は炭化物が混じる粘性土である。主柱穴は確認できなかった。

出土遺物は壺、鉢が出土している。壺は4の口縁部に刻目を有するものと5の貼付口縁の細片である。他には底部片と脚付き鉢の脚部(11)が出土している。石器ではサヌカイトの剥片(15)とノミ状の小型石斧が出土している。

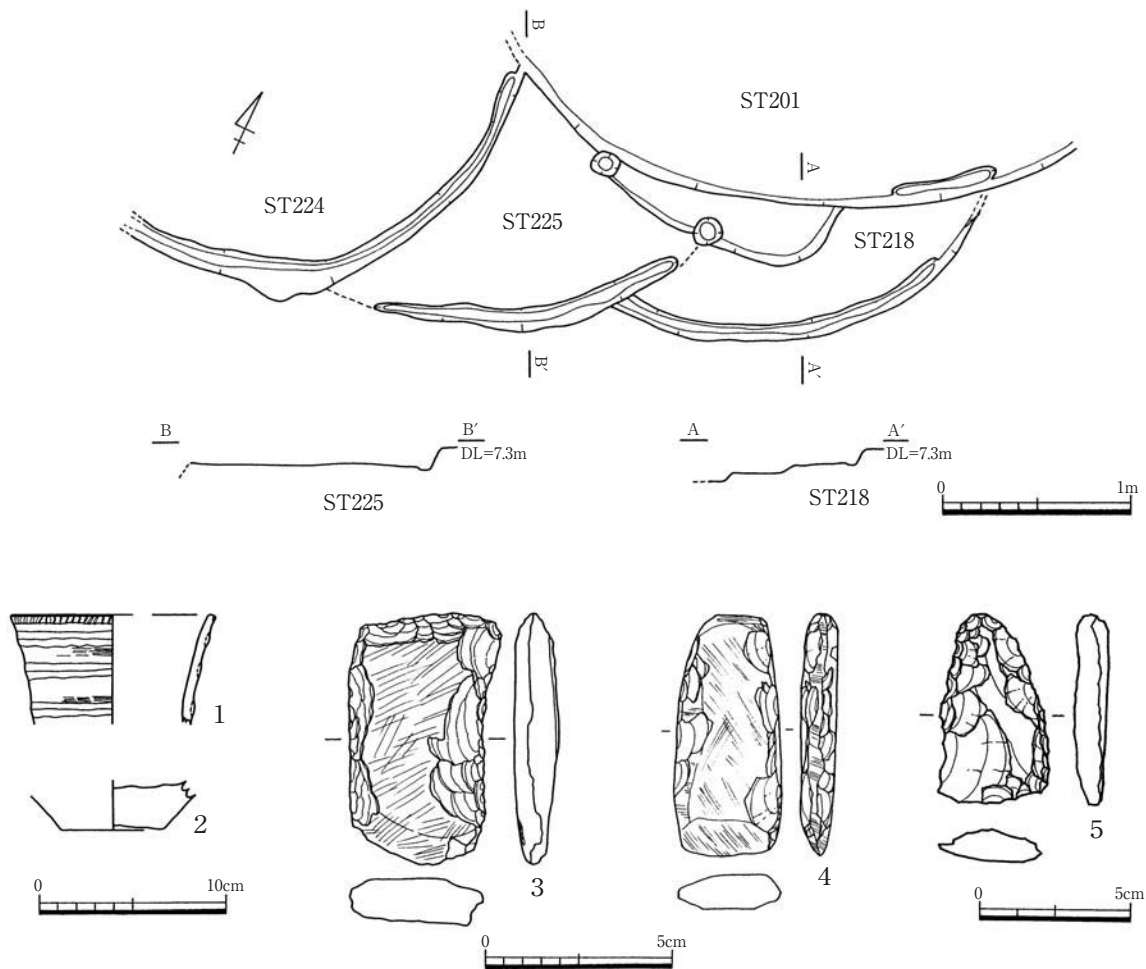
L2ST218(L2-22 図)

時期；弥生 形状；円形 主軸方向；—

規模；4.64×4.6m(推定) 深さ；2～3cm 面積；16.76㎡

埋土；黒褐色シルト

ピット；数不明



L2-22 図 L2ST218

床面；不明 貼床；不明 焼失；無

中央ピット；形状 不明

壁溝；1条 幅 12～20cm 深さ 2cm

出土遺物；弥生土器(甕、壺、鉢、高杯)、石包丁

所見；調査区の北方、密集する住居跡群内に位置し、大型の住居跡ST201に切られる住居跡である。プランの一部を検出したのみであるが、遺構のカーブからは円形を呈すると考えられる。埋土の堆積は約3cmと非常に浅い。床面から1条の壁溝を南部において確認したのみで、支柱穴や中央ピットに関しては確認することはできなかった。

出土遺物は、床面において少量の土器の細片とともに壺の口縁部と底部が出土している。1は壺で器壁の薄い断面三角形の微隆起帯を貼付する長頸壺である。石器では一部破損しているが、蛇紋岩製の石斧未製品(3)、両刃を有する緑色岩製の小型石斧(4)、未製品のサヌカイト製の石鏃(5)が出土している。

L2ST219(L2-23 図)

時期；弥生IV 形状；隅丸方形 主軸方向；一

規模；3.56×3.52m 深さ；28cm 面積；9.84㎡

埋土；褐色・暗褐色粘土質

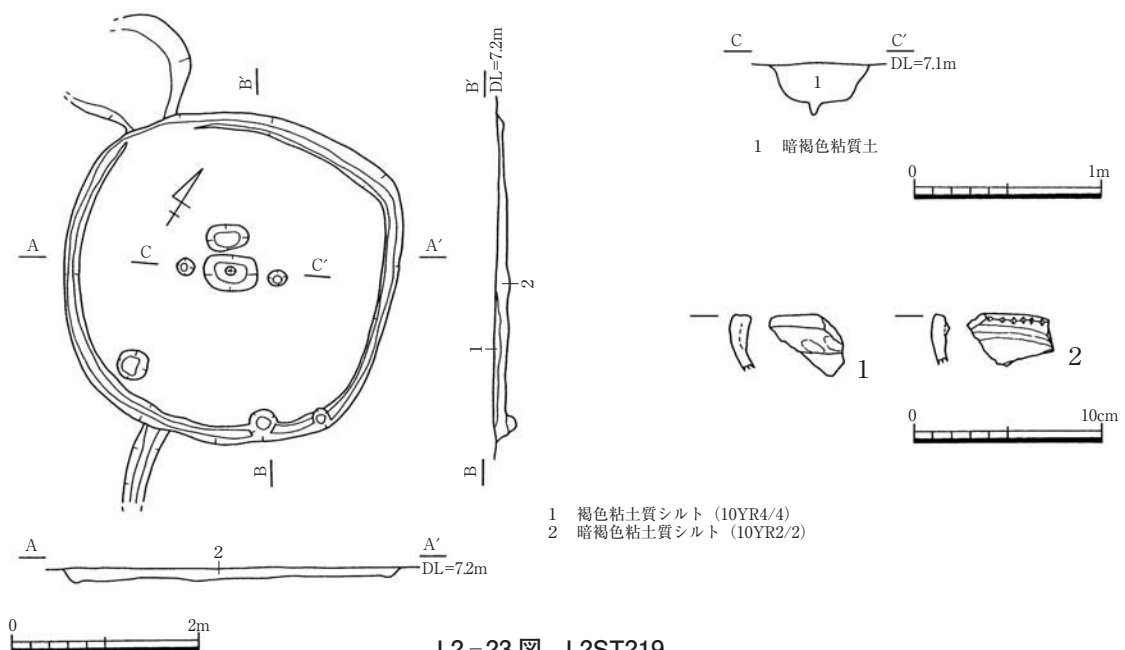
ピット；数6 支柱穴数；不明

床面；1面 貼床；無 焼失；無

中央ピット；形状 楕円形 規模 56×36cm 深さ 20cm 埋土 暗褐色粘土質

壁溝；1条 幅 4～8cm 深さ 4cm

出土遺物；弥生土器(壺)



L2-23 図 L2ST219

所見；調査区の中央部において検出した。円形に近い隅丸方形を呈した小型の住居跡である。住居跡ST217の東側に位置し、南側に隣接する住居跡ST223を切る。埋土は褐色・暗褐色粘土質シルトを基調とする2層である。壁溝が1条巡るが、北西部で68cm程途切れている。中央ピットはほぼ中央部に位置し、断面がすり鉢状を呈する。埋土は暗褐色粘土の単一層である。基底面中央に円形状の掘り込みがみられる。また中央ピットの両脇には2個の小ピットが確認され、さらに北側にはやや小さめの楕円形状を呈するピットが並行する。

出土遺物は少量で口縁部の細片が埋土中から出土しているのみである。1は貼付口縁を有する壺で、2は断面三角形の微隆起帯を貼付する口縁部の細片である。出土遺物などから弥生時代中期と考えられる。

L2ST220(L2-24・25 図)

時期；弥生IV-2 **形状**；楕円形 **主軸方向**；—

規模；5.36×5.04m **深さ**；24cm **面積**；21.23㎡

埋土；褐色・暗褐色粘土質

ピット；数9 **主柱穴数**；推定7のうち6 **主柱穴**；P1～P6

床面；1面 **貼床**；無 **焼失**；無

中央ピット；**形状** 円形 **規模** 64×48cm **深さ** 28cm **埋土** 暗褐色粘土質

壁溝；1条 **幅** 4～12cm **深さ** 4cm

出土遺物；弥生土器(壺、高杯)、サヌカイト剥片

所見；調査区中央部南西に位置し、密集する住居跡群の南方において検出した。円形を呈した住居跡である。西側に隣接するST221に切られる。遺構の東隣りには溝状土坑SK208が位置する。埋土は褐色・暗褐色粘土質シルトを基調とする4層で、最下層の4層目には貼床がみられた。床面には壁溝が1条巡るが、北東部で80cm程途切れている。また壁構上には小型のピット3基を確認した。中央ピットはほぼ中央部に位置し、断面が舟底状を呈する。埋土中に土器片と5～6mm大の炭化物が混じる。主柱穴は6基を確認し、最大主柱穴間は1.4mを測る。この他床面において方形状の土坑SK262を検出した。

出土遺物は壺、高杯及び土器の底部片が出土している。1～9は壺で、6の貼付口縁を有するもの、口縁部に凹線文を施し頸部に微隆起帯を有する瀬戸内系のもの(2)が出土している。10は4孔を穿った高杯の脚部である。

L2ST221(L2-24・25 図)

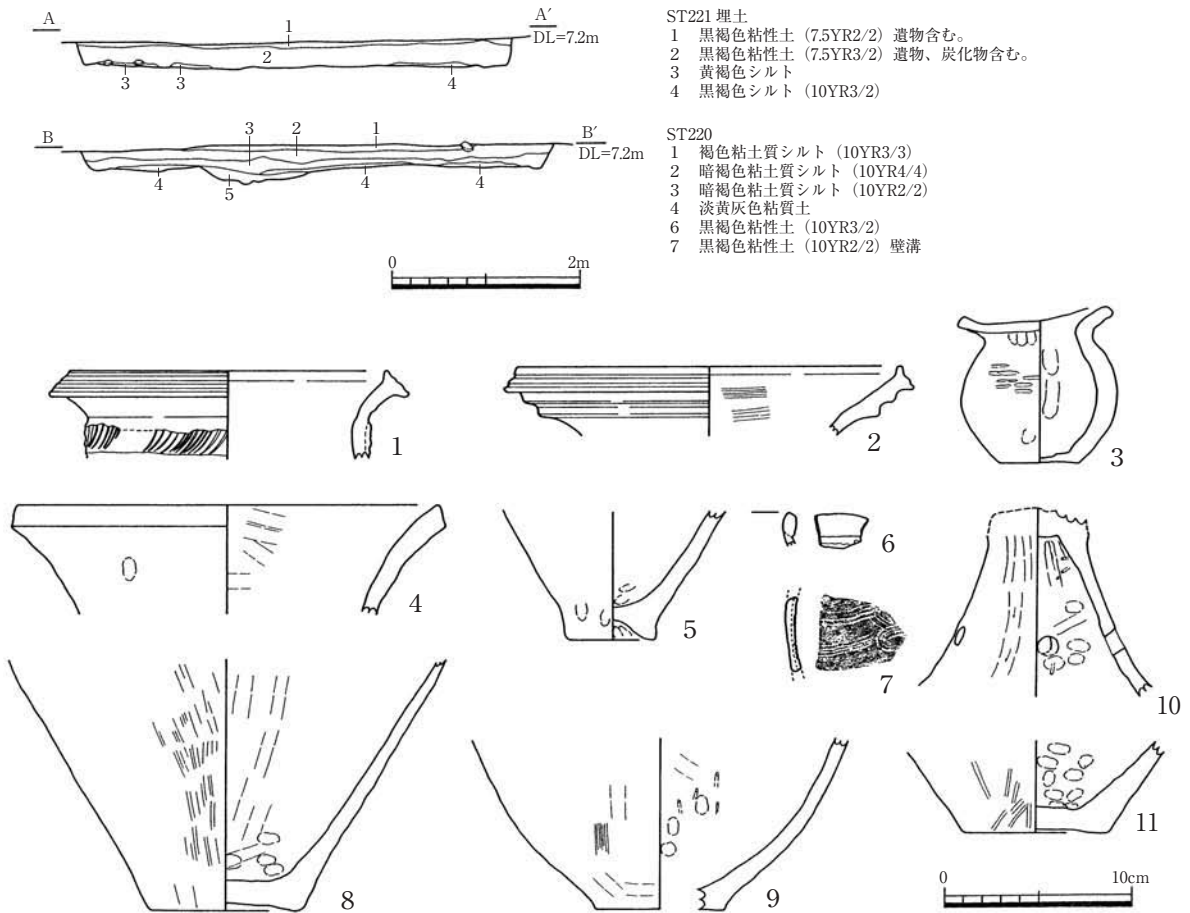
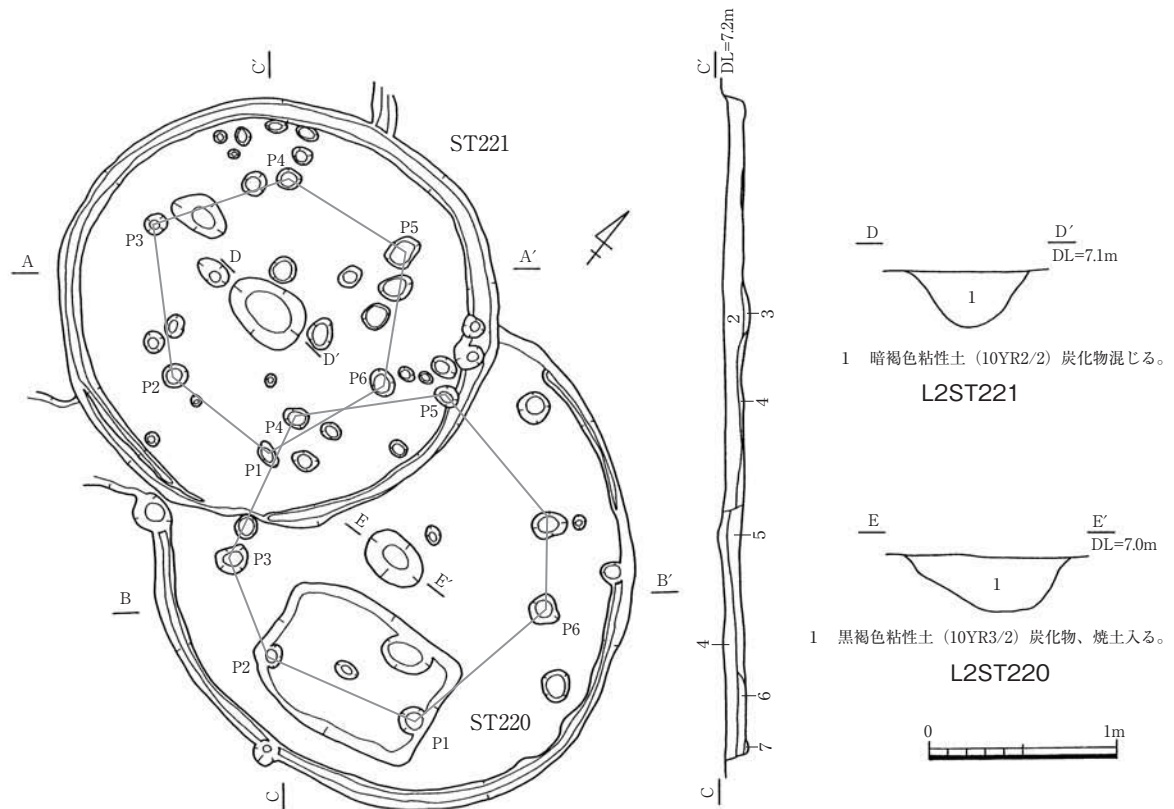
時期；弥生IV-1～V-1 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；4.64×4.56m **深さ**；28cm **面積**；16.61㎡

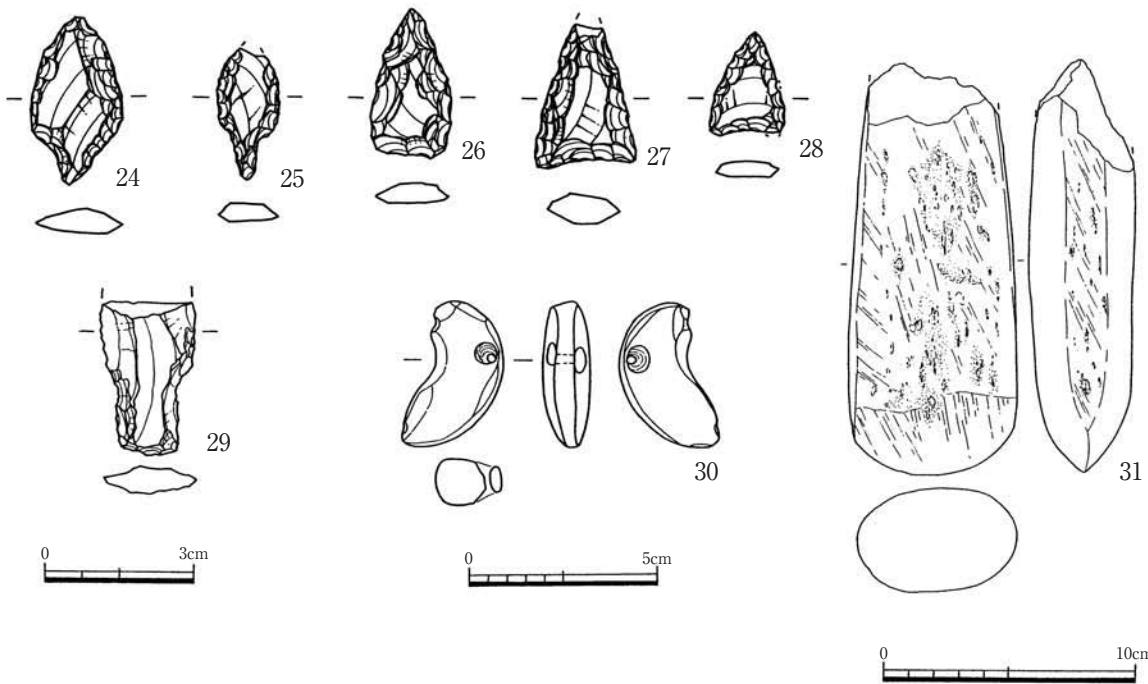
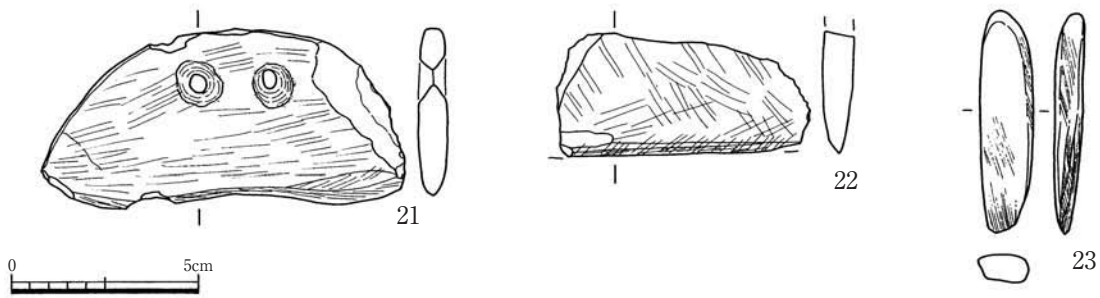
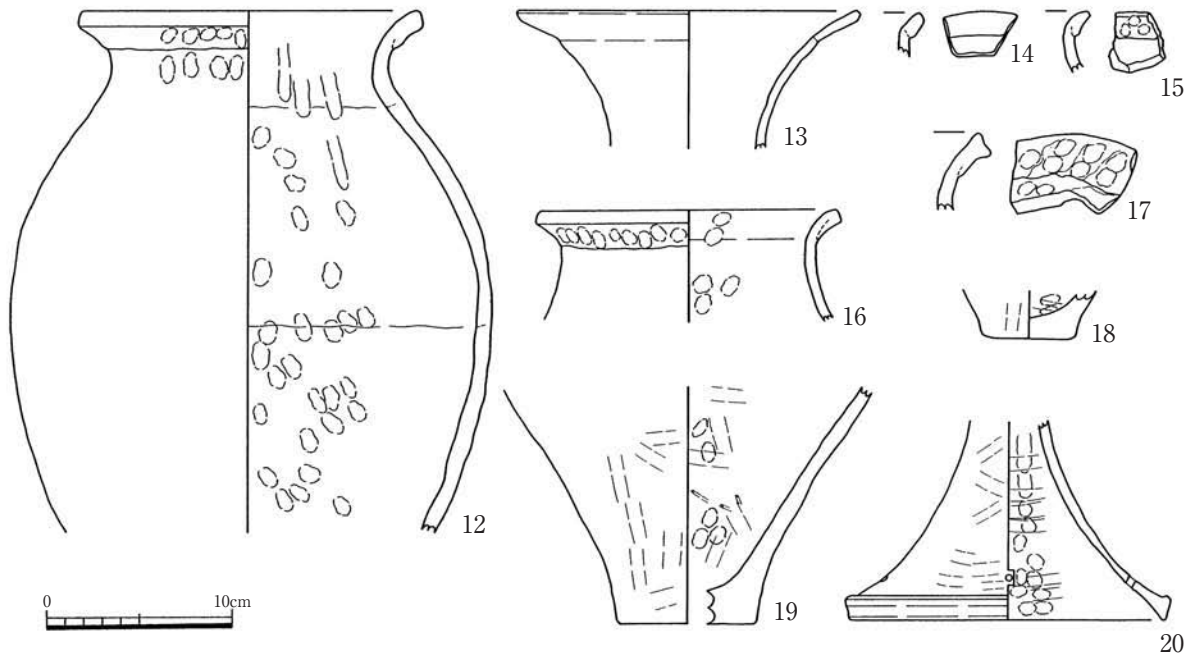
埋土；黒褐色粘土質

ピット；数36 **主柱穴数**；6 **主柱穴**；P1～P6

床面；1面 **貼床**；無 **焼失**；無



L2-24 図 L2ST220・221(1) (ST220: 1~8・10・11, ST221: 9)



L2 - 25 ☒ L2ST220 · 221 (2)

中央ピット；形状 楕円形 規模 88×60cm 深さ 28cm 埋土 黒褐色粘土

壁溝；1 条 幅 8～12cm 深さ 4～7cm

出土遺物；弥生土器(壺、高杯)、石鏃、石斧、翡翠製勾玉、サヌカイト剥片

所見；調査区中央部において検出した円形を呈する中型の住居跡である。東側に隣接するST220を切る。埋土は褐色・黒褐色粘土質シルトを基調とする4層で、最下層は貼床の埋土である。床面には壁溝が1条巡る。中央ピットはほぼ中央部に位置し、断面は逆台形を呈する。埋土中には焼土・炭化物が粒になって混じる。中央ピットの両脇には2基の小ピットを配しているなど特徴的である。主柱穴は6個を検出し、最大主柱穴間は1.4mを測る。

出土遺物は壺と高杯が出土している。12・14～17は壺で貼付口縁を有するものが殆どである。20は脚部に穿孔を施した高杯で搬入品である。石器ではサヌカイト製の打製石鏃5点(24～28)、緑色岩製の太型蛤刃石斧1点(31)、蛇紋岩製の小型扁平片刃石斧1点、頁岩製で自然石を用いた小型のノミ状石斧1点(23)、2つ孔の石包丁(21)、翡翠製の勾玉1点(30)、サヌカイト剥片(103g)が出土している。出土遺物からは弥生時代中期後葉と考えられる。

L2ST222(L2-26 図)

時期；弥生 形状；円形 主軸方向；—

規模；— 深さ；9cm 面積；不明

埋土；黒褐色シルト

ピット；数 不明

床面；1面 貼床；不明 焼失；無

中央ピット；不明

壁溝；—

出土遺物；—

所見；調査区北方、住居跡の密集区に位置する住居跡であるが、切り合いが複雑なため床面でのプラン確認のみであった。隣接する大型の住居跡ST201・215に切られる。床面で円形のプランを検出した。埋土は黒褐色シルトの単純一層であるが、堆積は9cmと非常に浅い。

出土遺物は皆無であったため時期などは不明である。

L2ST223(L2-26 図)

時期；弥生IV 形状；隅丸方形 主軸方向；—

規模；2.8×2.52m 深さ；16cm 面積；5.55㎡

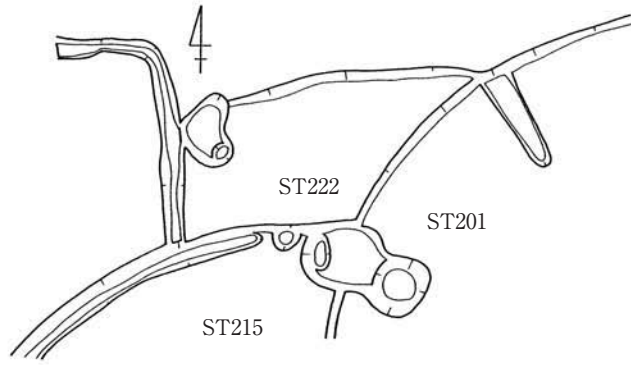
埋土；黒褐色粘土質

ピット；数 不明

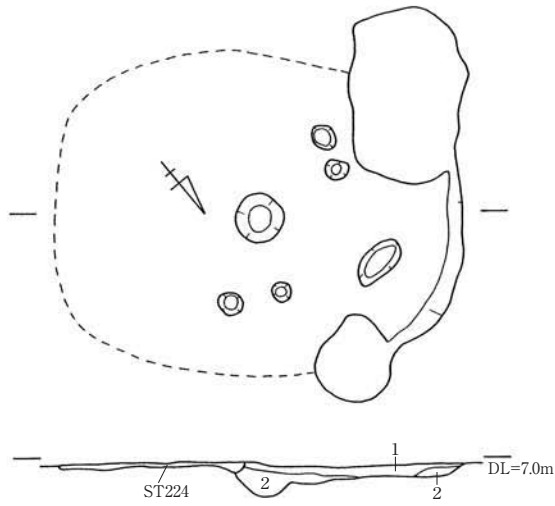
床面；1面 貼床；無 焼失；無

中央ピット；形状 円形 規模 52×48cm 深さ 32cm 埋土 黒褐色粘土質

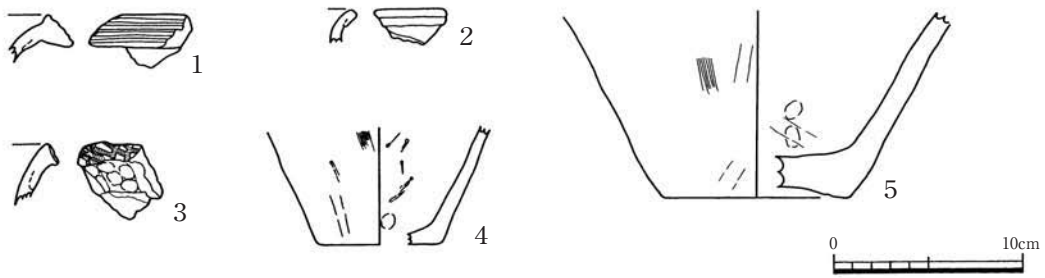
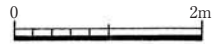
壁溝；—



L2ST222



- 1 黒褐色シルト (10YR3/2) 黄褐色粘土質シルト入る。
- 2 黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) 黄褐色シルトが帯状に入る、炭化物含む。



L2ST223

L2-26 図 L2ST222・223

出土遺物；弥生土器(壺)、サヌカイト剥片

所見；調査区北方、密集する住居跡群において検出した。隅丸方形状を呈した小型の住居跡である。ST215の床面調査時に検出した。ST201・215に切られる。埋土は黒褐色シルトを基調とする2層である。中央ピットはほぼ中央部に位置し、断面がU字状を呈する。埋土は黒褐色粘性土で炭化物が埋土全面に混じる。主柱穴は確認できなかった。

出土遺物は床面から壺と土器の底部が出土している。1～3は壺である。2・3は貼付口縁を有し、1は口縁部に凹線文を施すものである。いずれも口縁部細片である。その他底部片が出土している。出土遺物からは弥生時代中期中葉が考えられる。

L2ST224(L2-27 図)

時期；弥生IV-2 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；3.88×3.6m **深さ**；8cm **面積**；10.98㎡

埋土；黒褐色粘土質・褐色シルト

ピット；数 17 **主柱穴数**；推定 5 **主柱穴**；P2～P5

床面；1面 **貼床**；無 **焼失**；無

中央ピット；**形状** 不定形 **規模** 80×64cm **深さ** 34cm **埋土** 黒褐色粘土質

壁溝；2条 **幅** 12～20cm **深さ** 5cm

出土遺物；弥生土器(壺)、石鏃

所見；調査区北方、住居跡が複雑に切り合い密集する遺構群に位置する。円形状を呈したやや小型の住居跡である。隣接する大型の住居跡ST201・215、土坑SK228に切られる。埋土は黒褐色粘土質と褐色シルトの2層で、床面には壁溝が2条巡っている。中央ピットはほぼ中央に位置し、断面は不定形で一部落ち込みがみられる。埋土は黒褐色粘性土で、下層には焼土・炭化物が堆積している。主柱穴は4個が確認できた。

出土遺物は壺と土器の底部である。1～3は壺である。1は貼付口縁でキザミ目を施す。3は貼付口縁を有する長頸のもので、2は口縁部に凹線文を巡らすものである。いずれも口縁部の細片である。また石器では打製石鏃(5)が1点出土している。

L2ST225(L2-27 図)

時期；弥生 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；不明 **深さ**；19cm **面積**；不明

埋土；暗褐色シルト

ピット；—

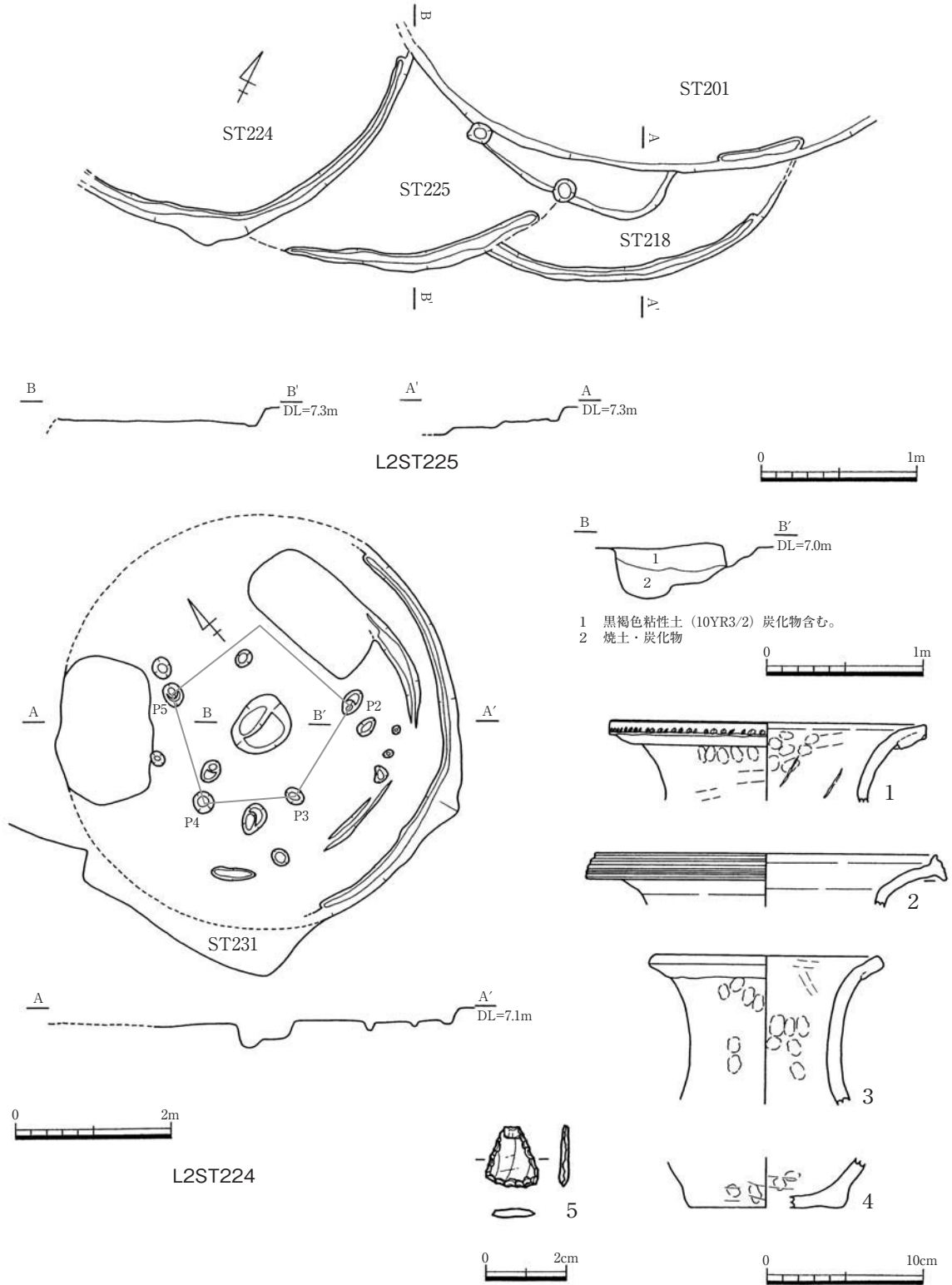
床面；1面 **貼床**；不明 **焼失**；無

中央ピット；—

壁溝；1条 **幅** 16～20cm **深さ** 4cm

出土遺物；弥生土器(壺)

所見：調査区の北方、大型の住居跡ST201 を中心に複雑に切り合う住居跡群に位置する。切り合い関係はST201・224 に切られ、ST218 を切る。複雑に切り合うためプランの一部を確認したのみであるが、遺構のカーブからは円形を呈したプランが想定できる。埋土は暗褐色シルトの単純一層で



L2-27 図 L2ST224・225

あるが、床面検出のため詳細は不明である。遺構の南側には壁構の一部(約 3.2m)を確認した。

出土遺物は図示できなかったが、斜格子文を有する壺の口縁部細片が床面から出土している。

L2ST226(L2-28 図)

時期：弥生 形状：多角形 主軸方向：—

規模：4.72×4.20m 深さ：34cm 面積：15.61㎡

埋土：黒褐色粘土(焼土・炭化物含む)

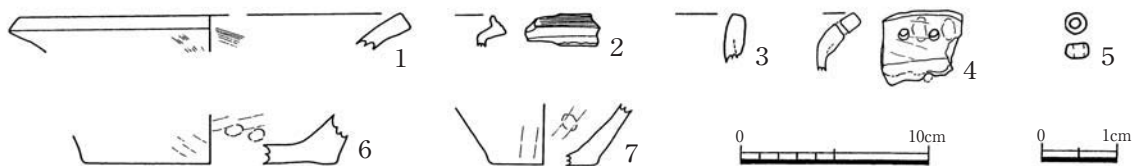
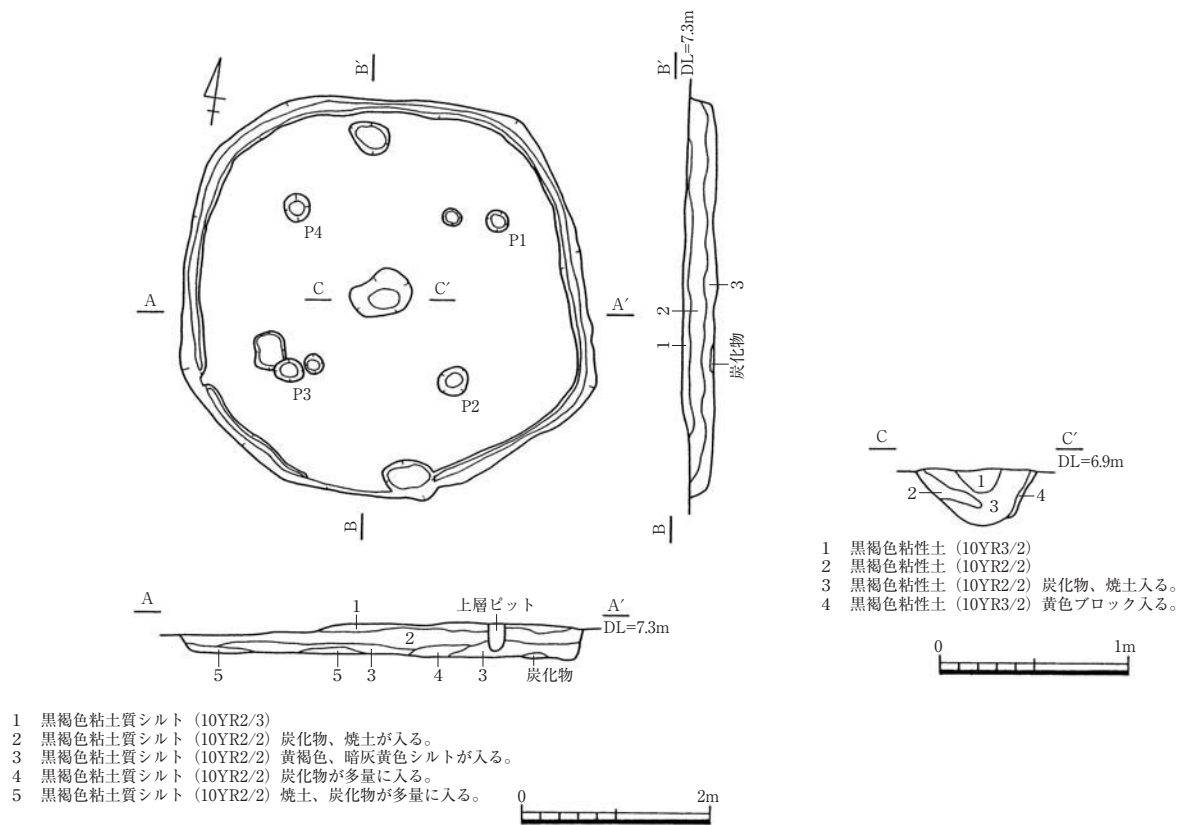
ピット：数 12 主柱穴数：4 主柱穴：P1～P4

床面：1面 貼床：有 焼失：有

中央ピット：形状 楕円形 規模 64×48cm 深さ 30cm 埋土 黒褐色粘土質

壁溝：1条 幅 8～12cm 深さ 3cm

出土遺物：弥生土器(甕、壺、鉢、高杯)、ガラス小玉



L2-28 図 L2ST226

所見：調査区の中央部、住居跡群が密集する区域の南端部において検出した。やや多角形状を呈する中型の住居跡で、ST220・221の南西に位置する。遺構埋土は黒褐色粘性土を基調とする3層で、下層には焼土と炭化物が多量に入る。床面には1条の壁溝がほぼ全体に巡るが、遺構南部においては88cm程途切れている。中央ピットはほぼ中央部に位置し、断面は不整形を呈しており、埋土の下層には焼土と炭化物が混じる。主柱穴は4個で、最大柱穴間は1.52mを測る。床面からは焼けた板材が炭化し、倒れたままの状態を検出されていることから、焼失住居の可能性が考えられる。床面においてST232を確認する。

出土遺物には壺、甕、土器の底部が出土している。1・3・4は壺である。4は貼付口縁を有し、2対の穿孔を施したものである。2は甕で口縁部に凹線文を施したものである。その他には底部片が数点出土している。

L2ST227(L2-29 図)

時期：弥生IV-2～V-1 **形状**：円形 **主軸方向**：—

規模：4.12×4.0m **深さ**：40cm **面積**：12.94㎡

埋土：暗褐色・黒褐色粘土質

ピット：数7 **主柱穴数**：推定4のうち3 **主柱穴**：P1～P3

床面：1面 **貼床**：有 **焼失**：無

中央ピット：形状 楕円形 **規模** 76×36cm **深さ** 30cm **埋土** 黒褐色粘土質

壁溝：1条 **幅** 12～16cm **深さ** 5～13cm

出土遺物：弥生土器(壺)、石包丁、石鏃

所見：調査区中央部の西に位置し、ST214の東側に隣接する円形を呈する小型の住居跡である。溝状土坑のSK261を切る。遺構埋土は暗褐色・黒褐色粘土質シルトを基調とする4層で、埋土中には炭化物が混じる。床面には1条の壁溝が巡る。中央ピットは平面形は楕円形を呈し、ほぼ中央部に位置する。断面は逆台形状を呈し、埋土中には炭化物が混じる。また中央ピットの両脇には径10～15cmを測る小ピットを配置する。主柱穴は推定4個のうち3個を確認し、最大柱穴間は1.4mを測る。

出土遺物は壺と土器の底部が床面から出土している。1～3・5・6は壺である。1は貼付口縁を有するもので、6は貼付口縁に端部キザミ目を巡らすものである。3は頸部に凹線文を施し、2は頸部に微隆起帯を有するものである。石器では打製石鏃(11)と2つ孔の石包丁(12)が出土している。出土遺物からは弥生時代中期末が考えられる。

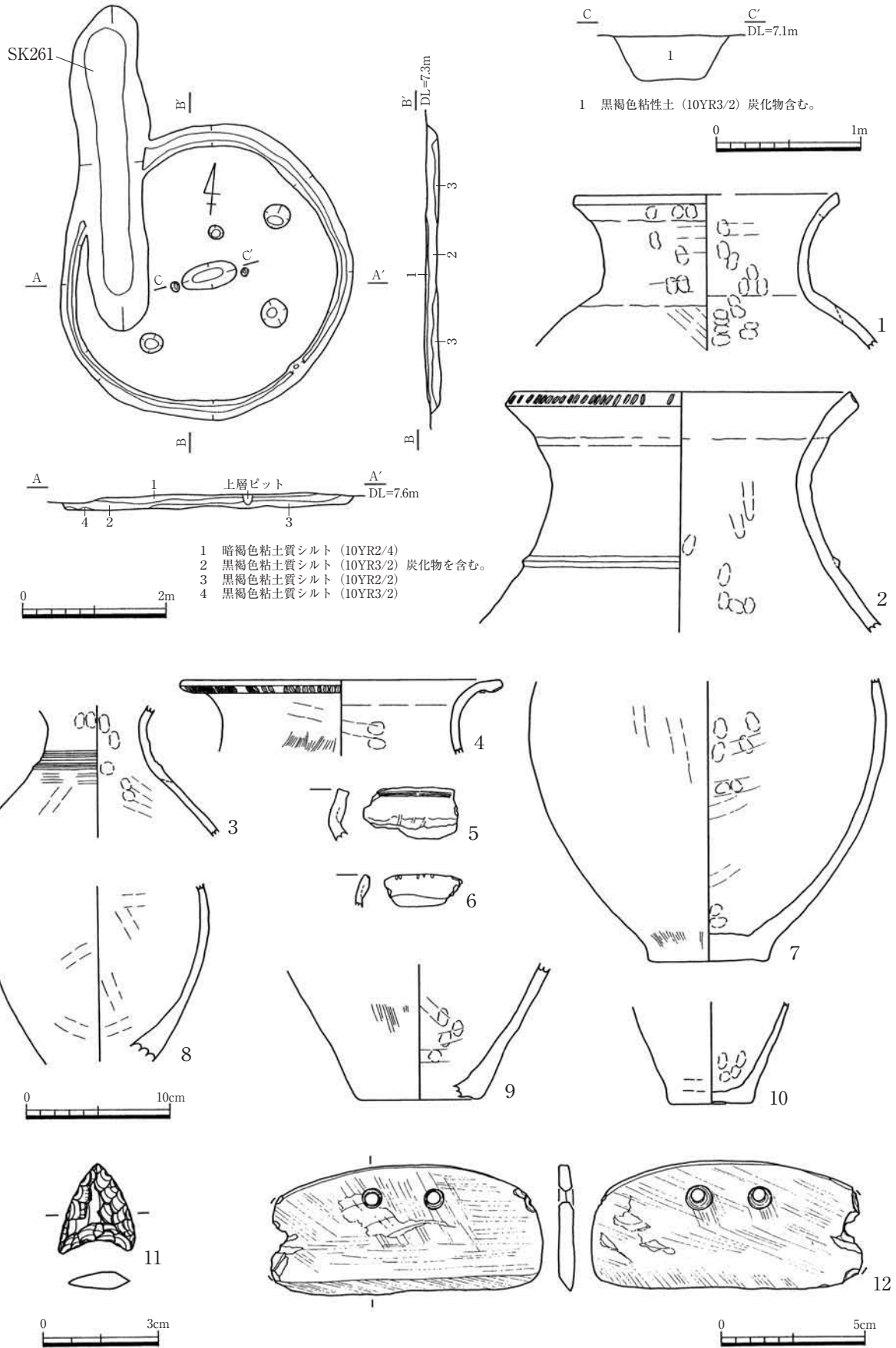
L2ST228(L2-30・31 図)

時期：弥生IV-2～V-1 **形状**：円形 **主軸方向**：—

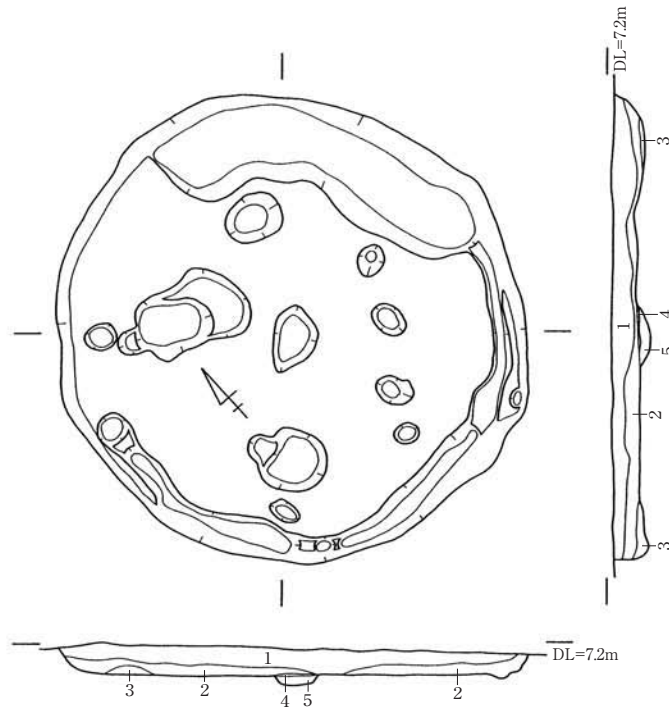
規模：5.08×4.8m **深さ**：32cm **面積**：19.16㎡

埋土：暗褐色・黒褐色シルト

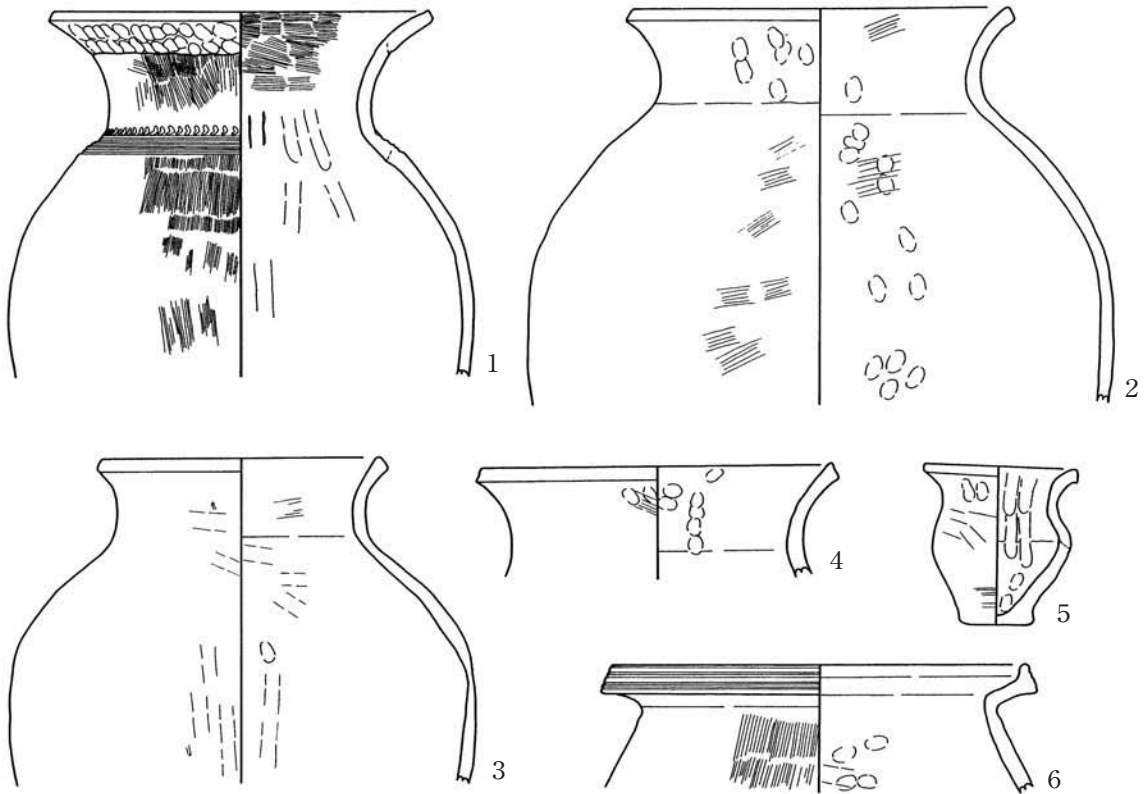
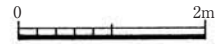
ピット：数11 **主柱穴数**：不明



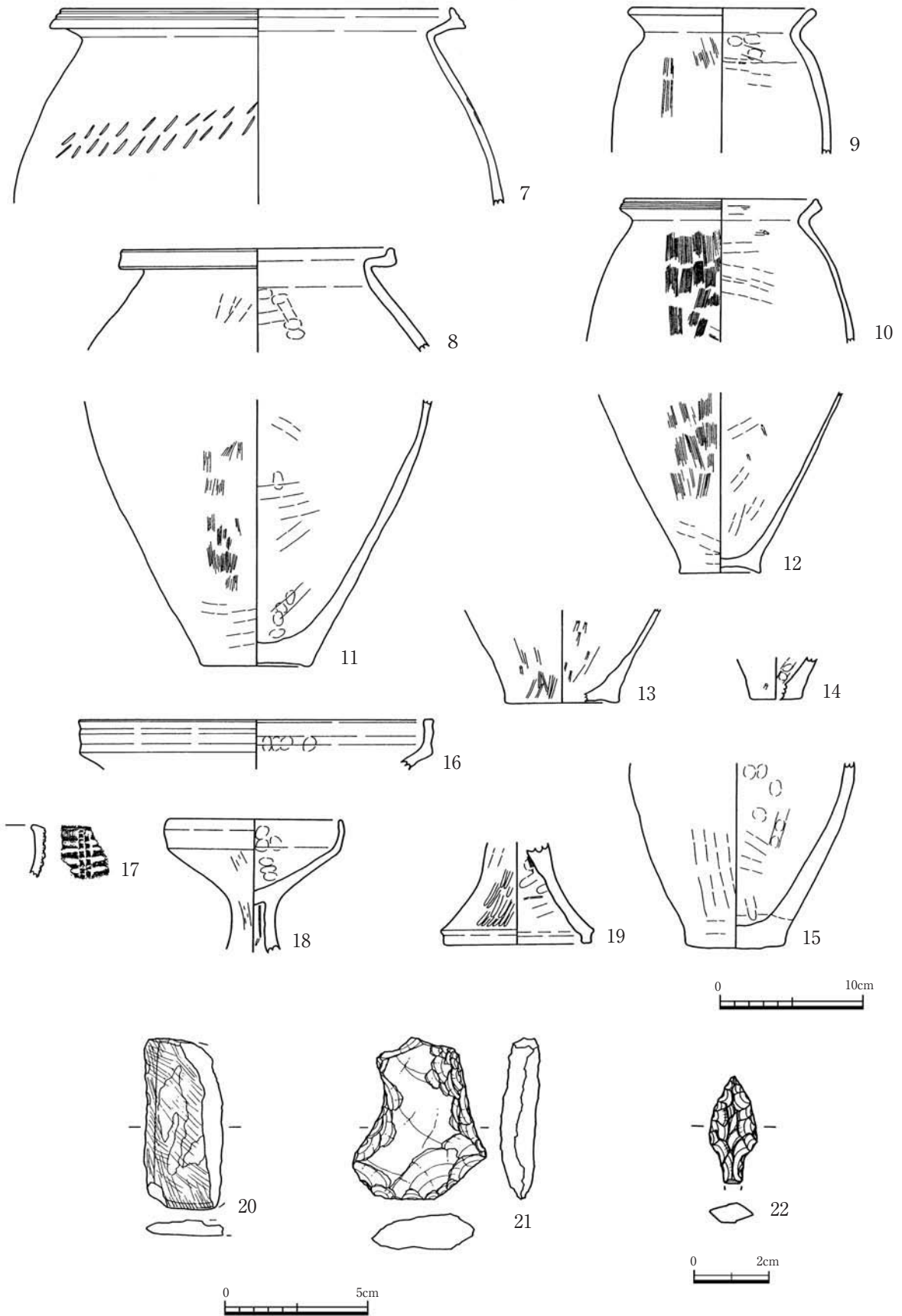
L2-29 図 L2ST227



- | | |
|-------------------------------------|----------------------------------|
| 1 黒褐色シルト (10YR2/4) 黄褐色、炭化物含む。 | 4 黒褐色シルト (10YR3/2) 中央ピット |
| 2 黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) 黄褐色シルト、炭化物含む。 | 5 黒褐色シルト (7.5YR3/1) 炭化物を含む。中央ピット |
| 3 黒褐色シルト (10YR3/2) 炭化物含む。 | |



L2-30 図 L2ST228(1)



L2-31 図 L2ST228(2)

床面：1面 貼床：無 焼失：無

中央ピット：形状 不定形 規模 72×48cm 深さ 13cm 埋土 黒褐色シルト

壁溝：1条 幅 16～24cm 深さ 10cm

出土遺物：弥生土器(甕、壺、高杯)、石鏃、石斧

所見：調査区中央部東側において検出した。やや不整な円形を呈する住居跡である。南側に隣接する住居跡ST229、掘立柱建物跡SB213のP1とP6を切る。遺構埋土は暗褐色、黒褐色シルトを基調とする3層で、下層は粘土質をおびて炭化物が混じる。床面には壁溝が南半分に一条巡り、北部の壁際には幅約1m、長さ3.6mを測る浅い溝状の遺構を検出した。埋土はやや砂質が混じるシルト層である。中央ピットは不定形でほぼ中央部に位置しており、断面が浅い皿形を呈する。埋土の下層には炭化物が混じる。遺構床面からは11個のピットを確認するが主柱穴に関しては不明であった。

出土遺物は床面から壺、甕、高杯、土器の底部が出土している。1～4は壺である。1は貼付口縁を有し、肩胴部に列点文と櫛描波状文を施す。2・3は口縁端部が平面をなすものである。6～10は甕で、6・7・10は口縁部に凹線文、7は上胴部に列点文を施し、内面にケズリをナデ消す。その内、10は搬入品と考えられるもので床面からの出土である。16・18・19は高杯で、16は口縁部に凹線文を有し、直線的に立ち上がる。18はやや小型で外面にケズリの調整を施すものである。埋土中からは甕や小型土器、高杯が出土している。甕では9の小型で口縁端部は丸みをおび、内面に粗いケズリの調整を施すもの、高杯では19の外面にヘラミガキを施す脚部がみられる。

その他石器ではサヌカイト製の打製石鏃(21)、頁岩製で小型のノミ状石斧(20)が出土している。床面出土のものは一括性の高いものである。

L2ST229(L2-32 図)

時期：弥生III～IV 形状：円形 主軸方向：一

規模：4.54×4.32m 深さ：16cm 面積：15.41㎡

埋土：黒褐色粘土質

ピット：数 15 主柱穴数：推定5のうち4 主柱穴：P1～P4

床面：1面 貼床：有 焼失：無

中央ピット：形状 楕円形 規模 64×36cm 深さ 26cm 埋土 黒褐色シルト主体

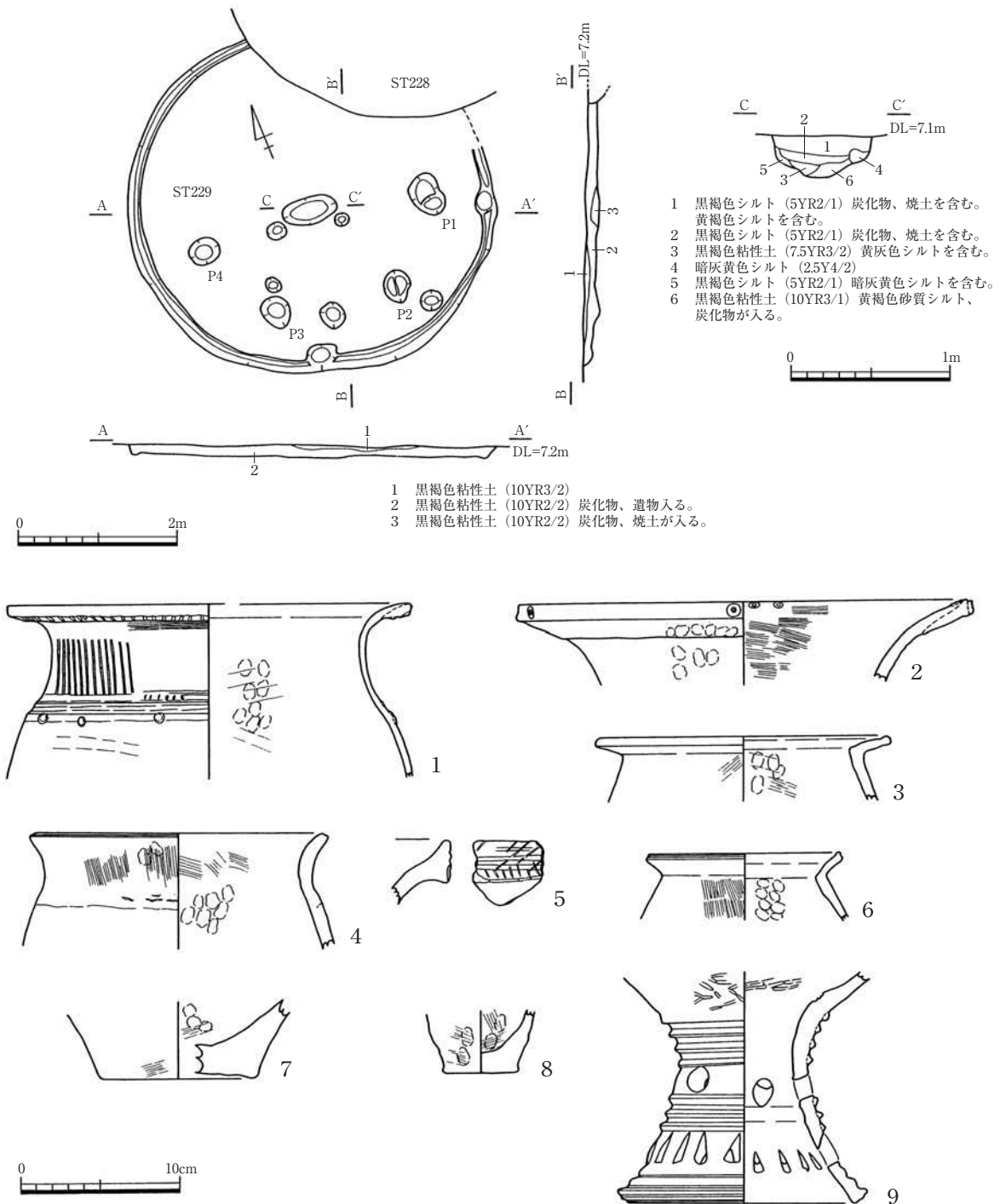
壁溝：1条 幅 12～20cm 深さ 3～8cm

出土遺物：弥生土器(甕、壺)

所見：調査区中央部、東側より検出した中型で円形を呈した住居跡である。北側に隣接するST228に切られ、掘立柱建物跡SB212のP3を切る。埋土は黒褐色粘土質の3層で、下層には炭化物が混じる。壁溝は1条で遺構全面に巡る。中央ピットは不定形で中央部に位置し、断面が舟底形を呈する。埋土は黒褐色シルトを基調とする6層からなる。埋土中には焼土と炭化物が多量に入る。また中央ピットの両脇付近では小ピット2個が確認された。主柱穴は推定6個の内4個が確認でき、最大柱穴間は1.16mを測る。

出土遺物は壺、甕、脚付き壺、土器の底部が出土している。床面からは2の貼付口縁を有し、口

縁端部に円形の刺突浮文を施す壺や、1の貼付口縁を有し、端部キザミ目、3条の貼付突帯を有する甕がみられる。埋土中からは、6の頸部が「く」の字に屈曲する搬入品の甕や搬入品で口縁部に凹線文を有する薄手土器、上胴部に三条の貼付凸帯を施す甕、また9の3条の凸帯を貼付し、透かしを穿つ脚付壺の脚部が出土している。この脚部は瀬戸内系の搬入品である。



L2-32 図 L2ST229

L2ST230(L2-33 図)

時期：弥生IV-2 形状：円形 主軸方向：—

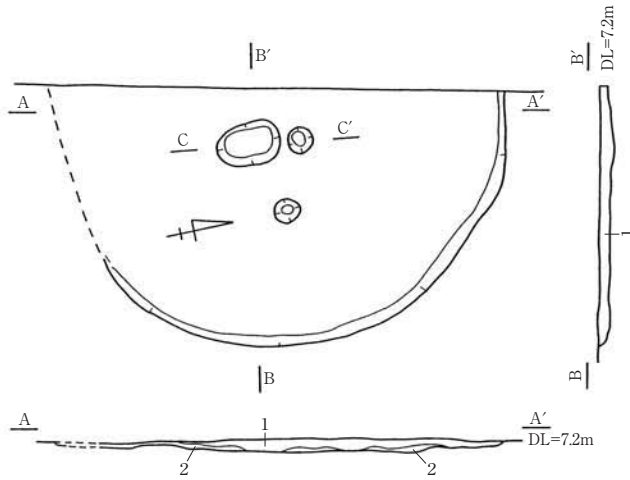
規模：4.8×4.44m 深さ：16cm 面積：16.76㎡

埋土：黒褐色・暗褐色粘土質シルト

ピット：数2 支柱穴数：不明

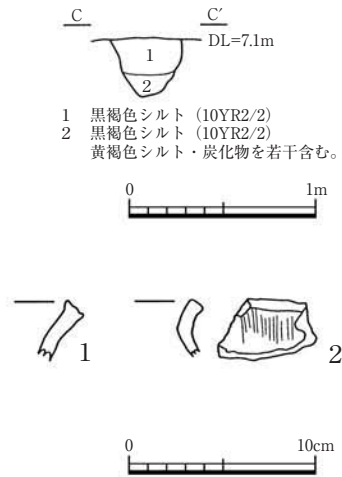
床面：1面 貼床：無 焼失：無

中央ピット：形状 楕円形 規模 68×44cm 深さ 18cm 埋土 黒褐色粘土質(炭化物含む)

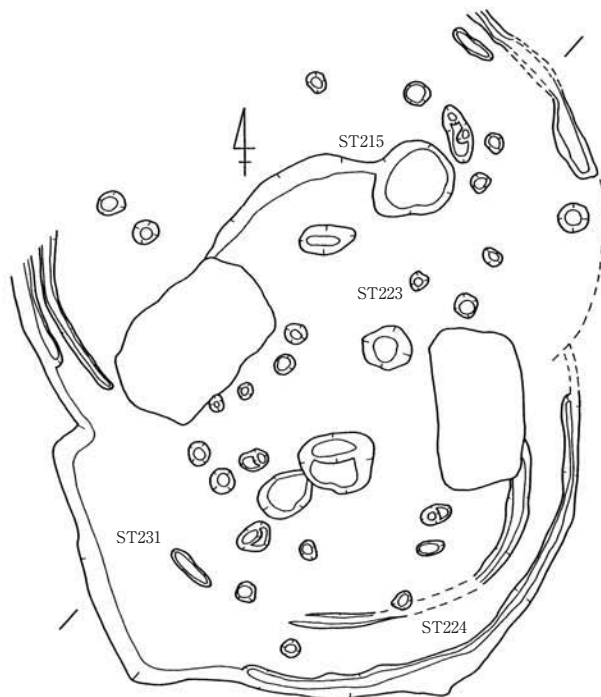


L2ST230

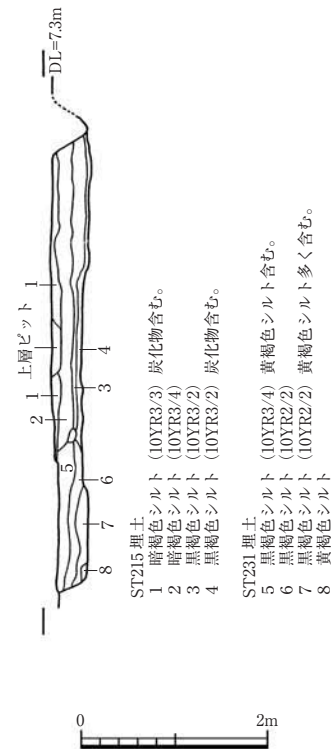
- 1 黒褐色粘土質シルト (7.5YR2/2) 黄褐色シルト含む。
- 2 黒褐色粘土質シルト (10YR3/3) 褐色粘土が入る。



- 1 黒褐色シルト (10YR2/2)
- 2 黒褐色シルト (10YR2/2)
黄褐色シルト・炭化物を若干含む。



L2ST231



- ST215 埋土
- 1 暗褐色シルト (10YR3/3) 炭化物含む。
- 2 暗褐色シルト (10YR3/4)
- 3 黒褐色シルト (10YR3/2)
- 4 黒褐色シルト (10YR3/2) 炭化物含む。
- ST231 埋土
- 5 黒褐色シルト (10YR3/4) 黄褐色シルト含む。
- 6 黒褐色シルト (10YR2/2)
- 7 黒褐色シルト (10YR2/2)
- 8 黄褐色シルト

L2-33 図 L2ST230・231

壁溝；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区の南西部端において検出した円形を呈する住居跡である。遺構の西半分が調査区Q2区に延び、南端は攪乱を受けているため詳細は不明である。埋土は黒褐色粘土質シルトと暗褐色粘土質シルトの2層と予測できるが、東西セクションでは1層のみの確認であった。中央ピットは断面がU字状を呈し、埋土は黒褐色シルトの2層からなり、下層には炭化物が混じる。中央ピットの北側においてピット2個を検出するが支柱穴は不明である。

遺物は少量で口縁部の土器片(1・2)が出土しているのみである。

L2ST231(L2-33 図)

時期；弥生 形状；方形 主軸方向；—

規模；4.0×3.0m(推定) 深さ；33cm 面積；9.62㎡

埋土；暗褐色シルト

ピット；数2

床面；1面 貼床；無 焼失；無

中央ピット；不明

壁溝；—

出土遺物；—

所見；調査区北方の最も複雑に切り合う住居跡群に位置する。住居跡ST215に切られ、ST223・224を切る。遺構の西半分の残りから方形状の住居跡を想定したが、床面検出のため詳細は不明である。

出土遺物は皆無であった。

L2ST232(L2-34 図)

時期；弥生 形状；方形 主軸方向；N-17°-E

規模；2.24×2.12m 深さ；28cm 面積；3.73㎡

埋土；黒褐色シルト

ピット；数2 支柱穴数；不明

床面；1面 貼床；無 焼失；無

中央ピット；無

壁溝；—

出土遺物；—

所見；調査区の中央、住居跡ST220・221の南側に位置する方形状の小型住居跡である。ST226の床面で検出されており、ST226に切られている。埋土は黒褐色・暗褐色シルトを基調とする4層からなる。住居跡として位置付けたが、ST226に付属する遺構の可能性も考えられる。

出土遺物は皆無であった。

L2ST233(L2-34 図)

時期：弥生 形状：円形 主軸方向：—

規模：5.15×5.12m 深さ：— 面積：20.7㎡

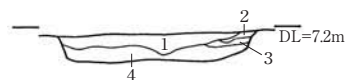
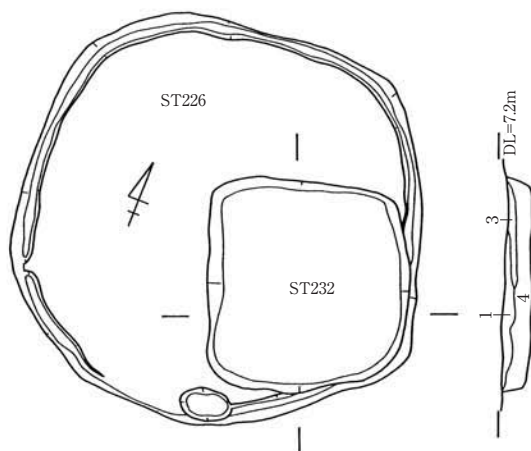
埋土：黒褐色シルト

ピット：数 13 主柱穴数：推定 5 のうち 3 主柱穴：P1～P3

床面：1 面 貼床：無 焼失：無

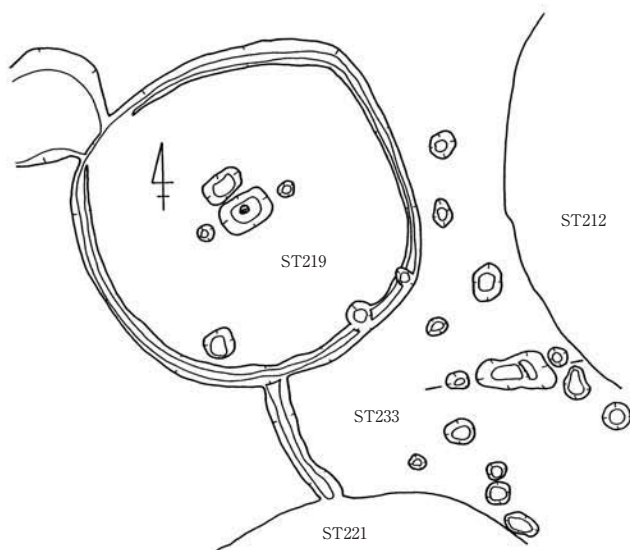
中央ピット：形状 楕円形 規模 84×36cm 深さ 30cm 埋土：黒褐色シルト

壁溝：1 条 幅 16～24cm 深さ 6cm

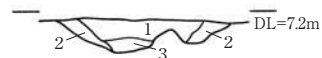


L2ST232

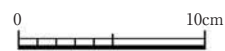
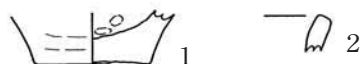
- 1 黒褐色粘土質シルト (10YR2/3)
- 2 黄褐色シルト
- 3 黒褐色粘土質シルト (10YR2/3) 黄褐色シルト入る。
- 4 黄褐色粘土質シルト (10YR3/2) 黒褐色シルト粒が少量入る。



L2ST233



- 1 黒褐色粘性土 (5YR2/1)
- 2 黒褐色粘性土 (7.5YR3/2) 黄褐色粘性土が入る。
- 3 黒褐色粘性土 (2.5Y3/2)



L2-34 図 L2ST232・233

出土遺物：弥生土器

所見：調査区の中央部に位置する円形状の住居跡である。東側に隣接するST212に切られ、ST219を切る。南側に隣接するST221とも切り合うが切り合い関係は不明である。西側に1条の壁溝を検出し、中央ピットとの対応関係から円形のプランを想定した。中央ピットは楕円形状を呈し、両脇には径20～24cmの小ピットが配置される。断面は皿状を呈しており、埋土は黒褐色粘性土の3層からなり、下層には炭化物が混じる。支柱穴は3基が確認でき、最大柱穴間は1.2mを測る。

出土遺物では口縁部片と底部片が出土しているのみである。

(2) 掘立柱建物跡

本調査区において14棟の掘立柱建物跡を検出した。これらの殆どは遺構の密集した北部からの検出である。建物跡は1間×1間が2棟、1間×2間が8棟、1間×3間のものが4棟を数え、さらに柱穴の規模によって3種類に分けることが可能である。柱穴の直径が約20cm程度の円形を呈するもの、長軸約70cm程度の楕円形の掘方を持ち、1間×2間(約10㎡)の規模を有する高床の倉庫と考えられる中規模の建物跡、さらに最も規模の大きなものが2棟(SB203・204)検出されている。柱穴の規模は100cm×108cmのものから136cm×180cm、深さは約60～80cmを測るものがみられ、わずかに残る柱痕から柱の直径は40cm以上あったと推定される。建物の規模は1間×2間ながら、SB203は梁間2.9m×桁行5.8m、SB204が梁間3.5m×桁行7.6mと中間の広いしっかりとした建物であったと考えられる。このような規模の建物跡は他の調査区では確認されておらず、本調査区を特徴づける特殊な建物跡といえる。また、これらの建物跡は南に走る大溝2の方向に並行しており、集落内の建物群に関するなんらかの規格性がみられる。

L2-2表 L2区弥生掘立柱建物跡一覧

遺構名	梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	柱間寸法 梁間×桁行(m)	棟方向	付属遺構	時期	備考
L2SB201	1×3	2.25×6.0	2.25×1.8～2.0	N-83°-E		弥生III-3	
L2SB202	1×2	2.35×3.9	2.35×1.9～2.0	N-83°-E			
L2SB203	1×3	2.9×5.8	2.8～2.9×1.8～2.0	N-74°-E		弥生III～IV	
L2SB204	1×3	3.5×7.6	3.0～3.4×2.3～2.6	N-73°-E		弥生IV	
L2SB207	1×2	2.4×4.2	2.4×2.0～2.25	N-6°-W		弥生IV-2～V-1	
L2SB208	1×2	2.4×6.3	2.4～2.5×1.8～2.0	N-7°-W			
L2SB209	1×1	1.85×2.8	1.85×2.8	N-10°-E		弥生IV	
L2SB210	1×2	2.5×4.5	2.5×2.0～2.3	N-79°-E			
L2SB211	1×1	2.4×3.5	2.4×3.5～4.0	N-10°-W			
L2SB212	1×2	2.4×4.2	2.4×2.1～2.3	N-11°-W		弥生IV	
L2SB213	1×2	2.0×3.8	2.0×1.8～2.0	N-86°-E			
L2SB214	1×2	2.0×3.3	1.9～2.0×1.75～1.8	N-19°-W			
L2SB215	1×4	3.9×6.0	4.0×1.5	N-73°-E			
L2SB216	1×2	3.0×3.7	2.85～3.0×1.7～2.0	N-68°-E			

L2SB201(L2-35 図)

時期：弥生III-3 棟方向：N-83°-E

規模：梁間1間×桁行3間 梁間2.25m×桁行6.0m 面積：8.89㎡

柱間寸法：梁間2.25m 桁行1.8～2.0m

柱穴数：8 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器(甕、壺)

所見：調査区の西部で検出した梁間1間、桁行3間の東西棟の建物跡である。SB208の南隣りに位置する。柱穴の平面形は円形、楕円形を呈し、長軸は44～80cm、短軸では40～64cmを測る。柱穴の深さは20～80cmを測り、ややばらつきがみられる。P2～P5・P7には径20～25cmの柱痕跡が残る。埋土は黒褐色粘性土を基調に2～5層で、埋土中には黄褐色の粘性ブロックがブロック状に混じる。

出土遺物は細片が殆どであったが、P1・P7から甕と壺が出土している。P1では1の甕の口縁部が出土している。口縁部が外方に強く屈曲し、胎土に結晶片岩を含み、搬入品と思われる。P7では2の壺が出土している。口縁部に凹線文、頸部にハケ原体の押圧を施す突帯を有するものである。出土遺物からは弥生時代中期中葉の時期が考えられる。

L2SB202(L2-35 図)

時期：弥生 棟方向：N-83°-E

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.35m×桁行3.9m 面積：9.17㎡

柱間寸法：梁間2.35m 桁行1.9～2.0m

柱穴数：6 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器

所見：調査区の北部で検出した梁間1間、桁行2間の東西棟の建物跡である。密集する住居跡の北側に隣接する。P5とP6は南側に接する住居跡ST205によって切られる。調査区西側で検出されたSB201と同じ棟方向を示す。柱穴の平面形は円形を呈し、径は20～28cm、深さは26～30cmを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする3～5層で、埋土には黄褐色土がブロック状に混じる。P2・P3には16～20cmを測る柱穴痕が残る。

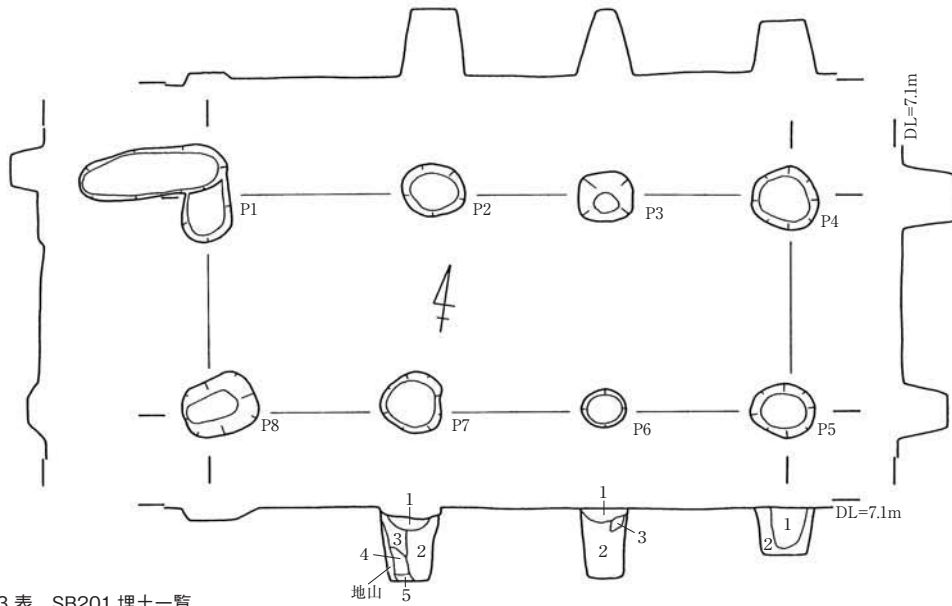
出土遺物は細片が殆どであったが、P3からは壺の口縁部が出土している。器壁が薄く、貼付口縁を有するものである。

L2SB203(L2-36 図)

時期：弥生III～IV 棟方向：N-74°-E

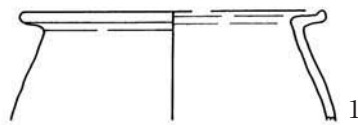
規模：梁間1間×桁行3間 梁間2.9m×桁行5.8m 面積：16.8㎡

柱間寸法：梁間2.8～2.9m 桁行1.8～2.0m

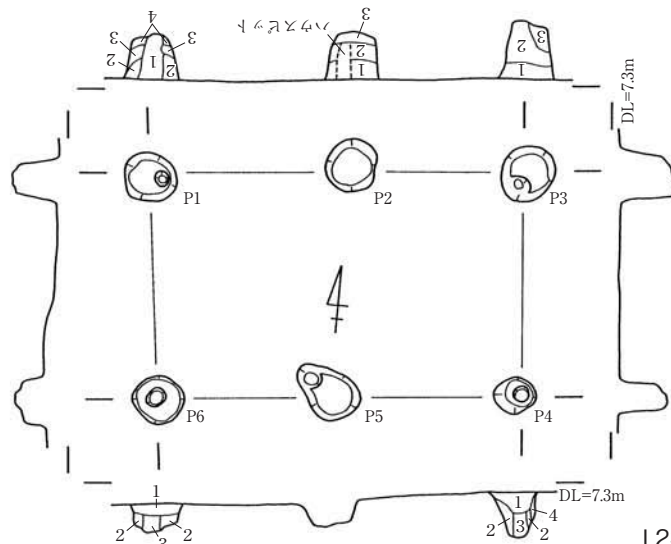
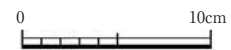
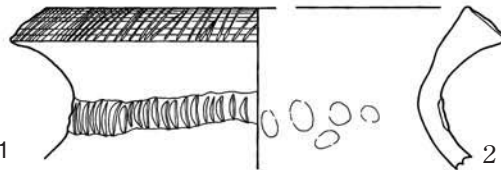


L2-3 表 SB201 埋土一覧

遺構番号	ビット	柱穴形	規模 (cm)		埋土	備考
			直径	深さ		
SB201	P5	円形	65	50	1.黒褐色粘性土(7.5YR2/2) 2.黒褐色粘性土(10YR2/2) 黄褐色土入る。	
SB201	P6	円形	46	24	1.黒褐色粘性土 (7.5YR2/2) 2.黒褐色粘性土(10YR2/2) 黄褐色土入る。 3.黒褐色粘性土(7.5YR2/2)に黄色土が全面に入る。	
SB201	P7	円形	65	80	1.黒褐色粘性土(7.5YR2/2) 炭化物入る 2.黒褐色粘性土(10YR2/2) 黄褐色土入る 3.黒褐色粘性土に黄色土が全面に入る。4.黒褐色粘性土(7.5YR2/2) 5.黒褐色粘性土(10YR2/2) 黄褐色粘性土全面に入る。	



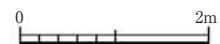
L2SB201



L2SB202

L2-4 表 SB202 埋土一覧

遺構番号	ビット	柱穴形	規模 (cm)		埋土	備考
			直径	深さ		
SB202	P1	円形	55×50	50	1.黒褐色シルト(2.5Y3/2) 2.暗灰黄色シルト(2.5Y4/2) 3.黒褐色シルト(2.5Y3/2) 炭化物・焼土含む。4.黒褐色粘性土(10YR2/2)	
SB202	P2	円形	55×50	50	1.黒褐色シルト(10YR3/2) 2.褐色シルト(10YR4/4) 3.黒褐色粘性土(10YR2/2)	
SB202	P3	円形	55×58	67	1.黒褐色シルト(10YR3/2) 炭化物含む。2.黒褐色シルト(10YR2/2) 炭化物・焼土含む。3.黒褐色シルト(10YR2/2) 黄灰色シルト入る。	
SB202	P4	円形	45×40	50	1.暗灰黄シルト(2.5Y4/2) 2.黒褐色シルト(2.5Y3/2) 3.黒褐色シルト(2.5Y3/2) 暗灰黄色入る。4.黄灰色シルト	
SB202	P6	円形	52×55	32	1.黒褐色シルト(10YR3/2) 2.黒褐色シルト(10YR3/2) 暗灰黄色シルト入る。3.黒褐色シルト(2.5Y3/2)	



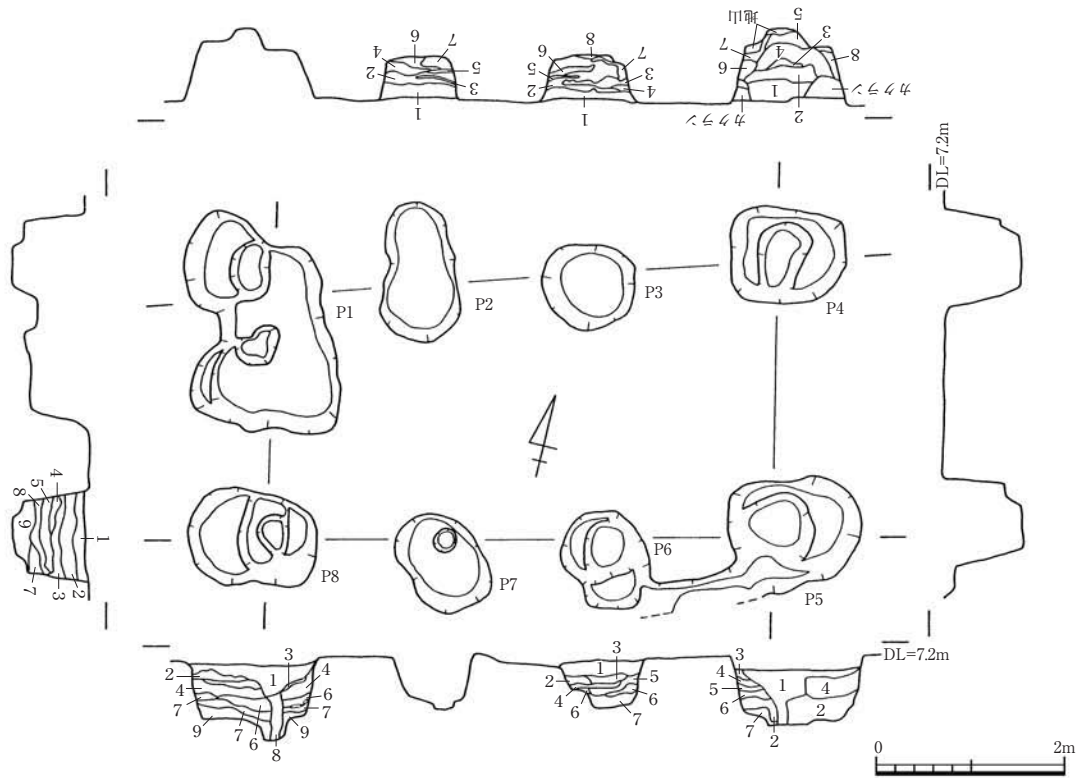
L2-35 図 L2SB201・202

柱穴数：8 柱穴形：円形、楕円形、隅丸方形

性格：— 付属施設：—

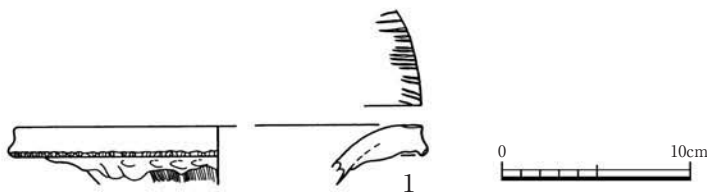
出土遺物：弥生土器(壺)

所見：調査区北部で検出した梁間1間、桁行3間の東西棟建物である。密集する竪穴住居群の北側



L2-5 表 SB203 埋土一覧

遺構番号	ピット	柱穴形	規模(cm)		埋土	備考
			直径	深さ		
SB203	P2	楕円形	78×150	45	1.黒褐色シルト(10YR2/3) 2.黄褐色粘性土 3.黒褐色シルト(10YR2/3) 4.黒褐色シルト(10YR2/3) 黄褐色土入る。5.黒褐色シルト(10YR3/2) 6.黄褐色粘性土 7.黒褐色シルト(10YR2/3) 黄褐色土入る。	
SB203	P3	円形	95×90	48	1.黒褐色シルト(5YR3/1) 2.黒褐色シルト(2.5Y3/2) 3.黒褐色粘性土(7.5YR3/2) 4.黒褐色シルト(5YR3/1) 黄褐色シルト入る。5.黒褐色粘性土(7.5YR2/2) 6.黄褐色粘性土 7.黒褐色粘性土(7.5YR2/2) 8.黄褐色粘性土	
SB203	P4	不整形	100×120	78	1.黒褐色シルト(7.5YR3/2) 2.黒褐色シルト(10YR3/1) 3.黄褐色粘質土 4.黒褐色粘性土(5YR2/1) 5.黒褐色粘性土(5YR2/1) 黄褐色粘性土入る。6.黒褐色粘性土(5YR2/1) 褐灰色シルト入る。7.黒褐色粘性土(5YR2/1) 黄褐色粘性土入る。8.黒褐色粘性土(7.5YR3/2)	
SB203	P5	不整形	120×120	70	1.黒褐色シルト(10YR2/2) 2.黒褐色シルト(2.5Y3/2) 3.黄褐色シルト 4.黒褐色シルト(10YR3/2) 5.黄褐色シルト 6.黒褐色シルト(2.5Y3/2) 炭化物含む。	
SB203	P6	不整形	75×110	50	1.黒褐色シルト(7.5YR2/2) 黄褐色シルト入る。2.黒褐色シルト(10YR2/2) 3.黒褐色シルト(7.5YR3/1) 4.黒褐色シルト(2.5Y3/2) 5.黄褐色シルト 6.黒褐色シルト(2.5Y3/2) 炭化物含む。	
SB203	P8	不整形	135×100	78	1.黒褐色シルト(10YR2/2) 2.黒褐色シルト(10YR2/2) 黄褐色粘性土入る。3.黒褐色粘性土(5YR2/1) 炭土・炭化物入る。4.黒褐色粘性土(5YR2/1) 黄褐色粘性土入る。5.黒褐色粘性土(5YR2/1) 黄褐色シルト入る。6.黒褐色粘性土(5YR2/1) 7.オリーブ褐色粘性土(2.5Y4/3) 炭化物含む。8.黒褐色粘性土(10YR2/2) 黄褐色粘性土入る。9.黒褐色粘性土(5YR2/1) 遺物含む。	



L2-36 図 L2SB203

に隣接する。掘立柱建物跡SB204を切り、P3の北隣に位置する土坑SK222に切られる。SB204と重なり、ほぼ同じ棟方向を示す。本遺構がやや北側に位置することから、建て替えの可能性が考えられる。柱穴の掘方は建物の四隅は隅丸方形や不定形を呈し、P4(1.24m×1m)、P5(1.4m×1.08m)、P8(1.4m×1m)、P1(1.2m×1.12m)を測る。他の柱穴の掘方は円形から楕円形を呈し、直径0.8m～1mを測る。柱穴の深さは50～95cmで、P1・P4～8には30～56cmの柱痕跡が残る。埋土は黒褐色シルト・粘性土を基調とする7～10層で、黄褐色シルトの大粒がブロック状に入る。

出土遺物は細片が殆どであったが、P8から1の壺の口縁部片が出土している。貼付口縁を有し、下方に拡張した口縁端部に刻み目、口縁部内面に列点文を施すものである。出土遺物からは弥生時代中期の建物と考えられる。田村遺跡群の中でも特徴的な大型の掘立柱建物跡である。調査区全体に関連のある建物跡なのか、いずれにしろ本遺跡を性格付ける重要な遺構であると考えられる。

L2SB204(L2-37 図)

時期；弥生IV **棟方向**；N-73°-E

規模；梁間1間×桁行3間 梁間3.5m×桁行7.6m **面積**；26.6㎡

柱間寸法；梁間3.0～3.4m 桁行2.3～2.6m

柱穴数；8 **柱穴形**；隅丸方形、楕円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器(甕、壺)

所見；調査区の北部より検出した梁間1間、桁行3間の東西棟である。大型の竪穴住居跡ST201の北側に隣接し、SD206に切られる。SB203と重なり、ほぼ同じ棟方向を示す。柱穴の掘方はP3の100cm×108cmのものから、P8の136cm×180cmのものまでややばらつきがみられる。P1・P3・P5・P6には柱痕跡が残り、径は26～40cmを測る。またP8・P6・P5・P1の床面には20～36cmを測る根石が置かれていた。根石は河原石を使用している。建物の北側に並行するSB203では根石は確認されなかった。埋土は黒褐色シルトを基調とする3～9層で、埋土中には黄褐色シルト・粘性土がブロック状に入る。SB203・204の掘立柱建物は埋土がほぼ同一で時期差は不明である。

出土遺物は細片が殆どを占めるが、P7から壺(1)、P6からは壺(2)と甕(3)が出土している。1の壺は貼付口縁を有し、口縁部外面に円形の刺突浮文を貼付するもので、3の甕は口縁部に刻目、口縁下に櫛描文、上胴部に微隆起帯文・円形浮文を施すものである。本遺構もSB203と同様に、田村遺跡群の南端部の集落に位置する大型な建物であり、本集落を位置付ける上で重要な遺構であると考えられる。

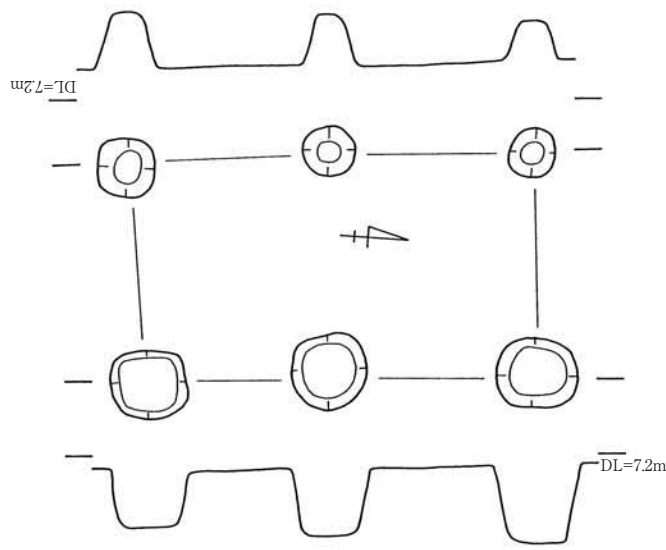
L2SB207(L2-38 図)

時期；弥生IV-2～V-1 **棟方向**；N-6°-W

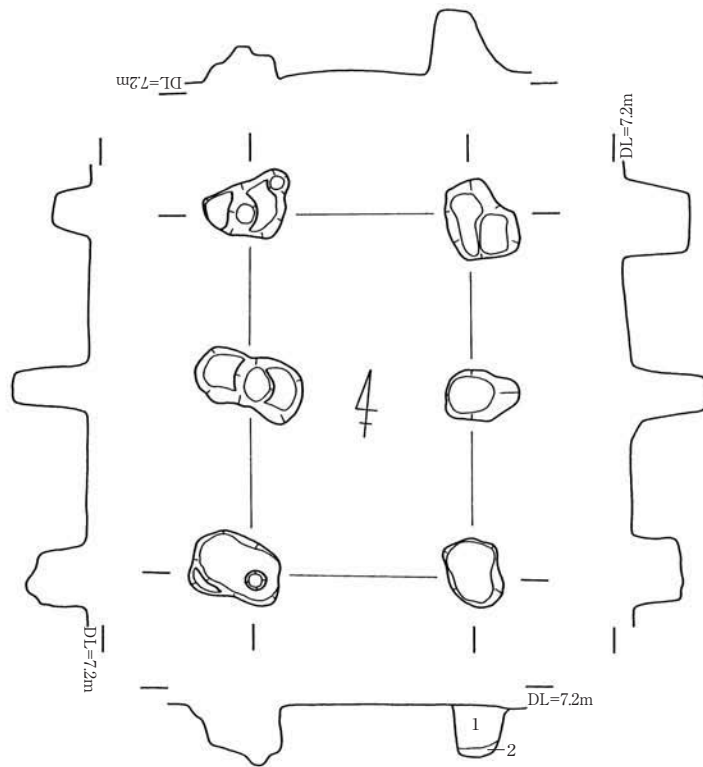
規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.4m×桁行4.2m **面積**；10.08㎡

柱間寸法；梁間2.4m 桁行2.0～2.25m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形、方形



L2SB207



L2SB208

- 1 黒褐色粘性土 (10YR2/2) 黄褐色粘性土入る。
- 2 黒褐色粘性土 (10YR2/2) 黄褐色粘性土がブロック状に入る。



L2-38 図 L2SB207・208

性格：— 付属施設：SK221

出土遺物：弥生土器細片

所見：調査区中央部西隅から検出した梁間1間、桁行2間の南北棟建物である。遺構の西半分は隣接する調査区(Q2)において検出されたが、SB207として詳細を述べる。柱穴の掘方は48～88cmを測り、平面形は円形から方形を呈する。柱穴の深さは48～84cmを測り、Q2側では上面削平を受けているため浅くなっている。埋土は黒褐色粘性土を基調とする3～4層である。

出土遺物はいずれも細片のみであり、図示できるものはなかった。

L2SB208(L2-38 図)

時期：弥生 棟方向：N-7°-W

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.4m×桁行6.3m 面積：15.1㎡

柱間寸法：梁間2.4～2.5m 桁行1.8～2.0m

柱穴数：7(8) 柱穴形：方形、円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器

所見：調査区の北西隅より検出した梁間1間、桁行2間の南北棟建物である。建物の南隣にはSB201が位置している。P6はSD203に切られる。調査区中央部の西隅から検出したSB207は棟方向を同じくする。掘方は不定形で、径は50cm～1m、深さは20～40cmを測り、ややばらつきがみられる。埋土は黒褐色粘性土を基調とする2層からなり、黄褐色粘土がブロック状に混じる。P3・P4には約25cmを測る柱痕跡が残る。

出土遺物はP4より底部の土器片が出土しているのみである。

L2SB209(L2-39 図)

時期：弥生IV 棟方向：N-10°-E

規模：梁間1間×桁行1間 梁間1.85m×桁行2.8m 面積：5.18㎡

柱間寸法：梁間1.85m 桁行2.8m

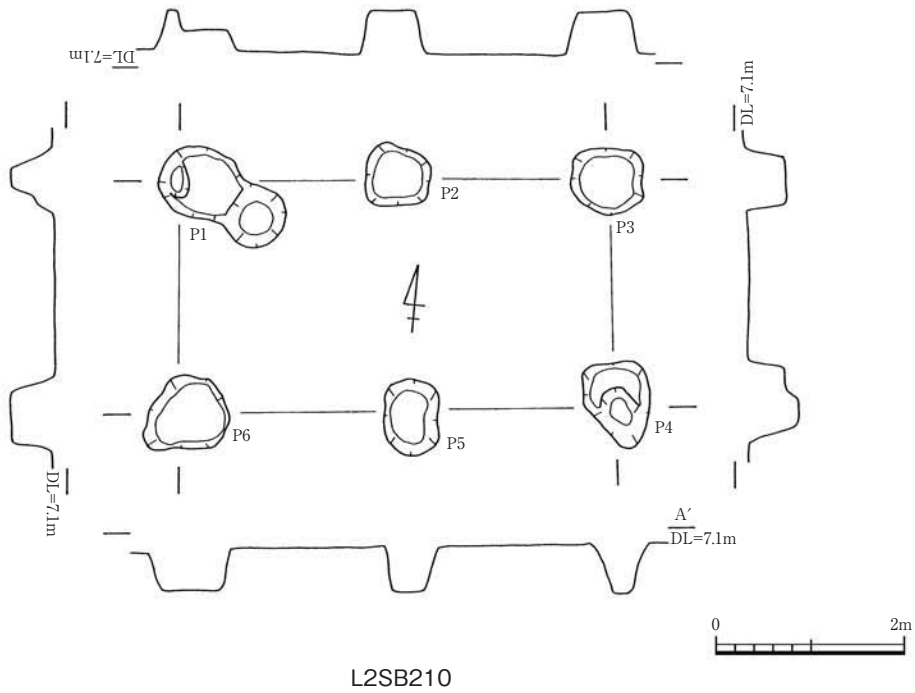
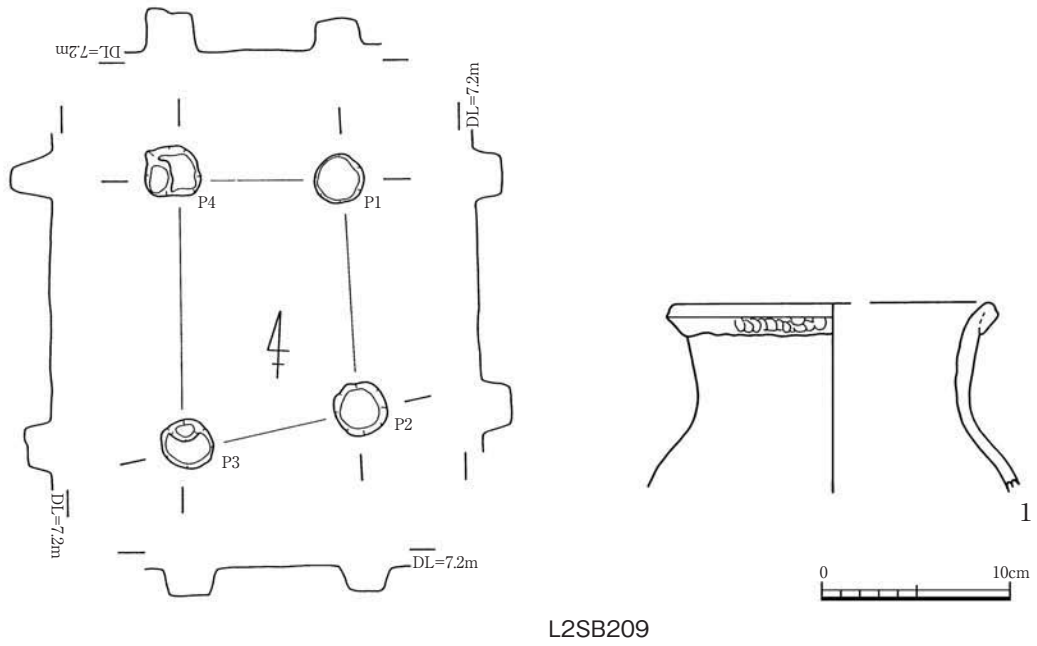
柱穴数：4 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器

所見：調査区北部において検出した梁間1間、桁行1間の建物である。上面に厚さ20cm程の黒褐色粘土層が堆積しており、堆積土掘削中に検出した。棟方向がN-10°-Eで、他にSB207・208・211・212が棟方向を同じくする。柱穴の掘方は概ね円形で直径は40～60cm、深さは20～44cmを測る。埋土は黒褐色粘性土を基調とする1層から2層で、黄褐色粘土がブロック状に混じる。P3の床面には約20cmを測る柱痕跡が残る。

出土遺物は弥生土器の細片のみの出土が殆どであったが、P3から1の貼付口縁を有する壺の口縁部が出土している。



L2-39 図 L2SB209・210

L2SB210(L2-39 図)

時期；弥生 棟方向；N-79°-E

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.5m×桁行4.5m 面積；11.25㎡

柱間寸法；梁間2.5m 桁行2.0～2.3m

柱穴数；6 柱穴形；方形、円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区の北部中央から検出した梁間1間、桁行2間の東西棟建物である。最も複雑に切り合う住居跡群ST201とST215の下層から検出した。これら2棟に切られる。棟方向はSB201・202とほぼ同じである。柱穴の掘方は約70cm×60cmを測る円形から楕円形を呈する。深さは約30～60cmとややばらつきがみられる。埋土は黒褐色シルト・粘性土を基調とする5層から6層で、黄褐色粘土がブロック状に混じる。P1・P4に径30～40cmを測る柱痕跡が残り、さらにP1には根石が残っていた。

出土遺物は少量の細片である。図示できなかったが、P6から貼付口縁を有する口縁部片が出土している。

L2SB211(L2-40 図)

時期；弥生 棟方向；N-10°-W

規模；梁間1間×桁行1間 梁間2.4m×桁行3.5m 面積；8.4㎡

柱間寸法；梁間2.4m 桁行3.5～4.0m

柱穴数；4 柱穴形；円形、楕円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区の中央部より検出した梁間1間、桁行1間の建物である。密集する住居跡群の西に隣接する。SB207・208・209・212と棟方向を同じくする。掘方は直径70～85cmの円形を呈し、深さは約20～30cmを測る。P1～P3には径20cm程の柱痕跡が残る。埋土は黒褐色シルトを基調とする1層から3層である。

出土遺物は細片のみで、図示できるものはなかった。

L2SB212(L2-40 図)

時期；弥生IV 棟方向；N-11°-W

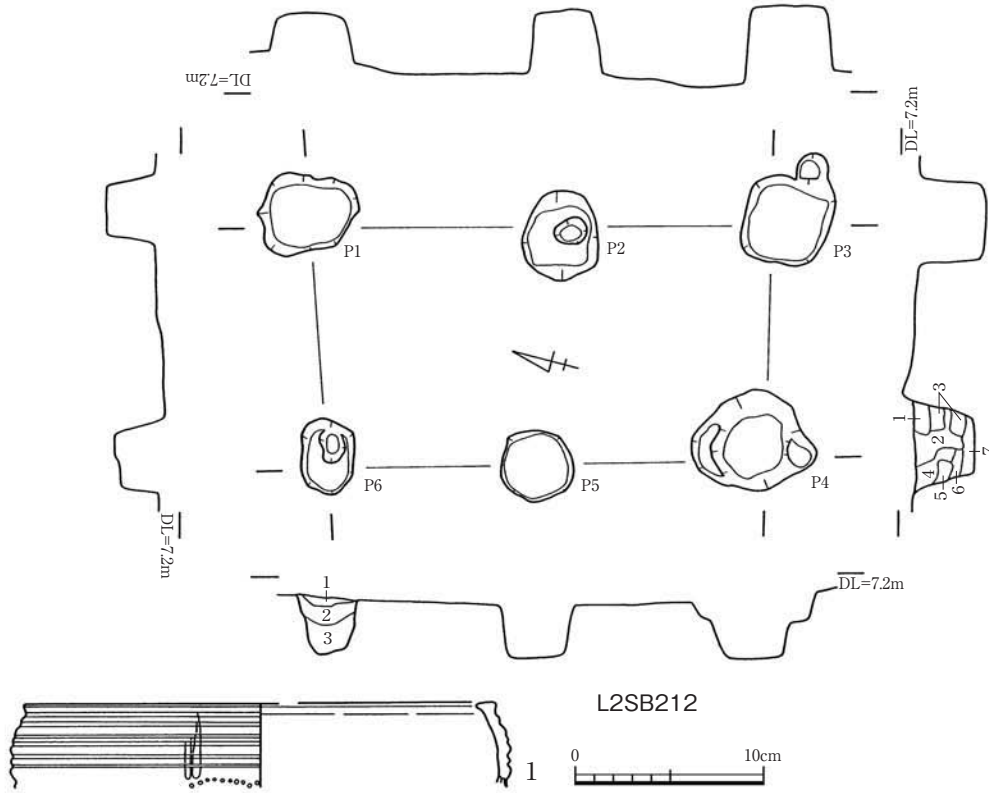
規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.4m×桁行4.2m 面積；10.08㎡

柱間寸法；梁間2.4m 桁行2.1～2.3m

柱穴数；6 柱穴形；方形、楕円形

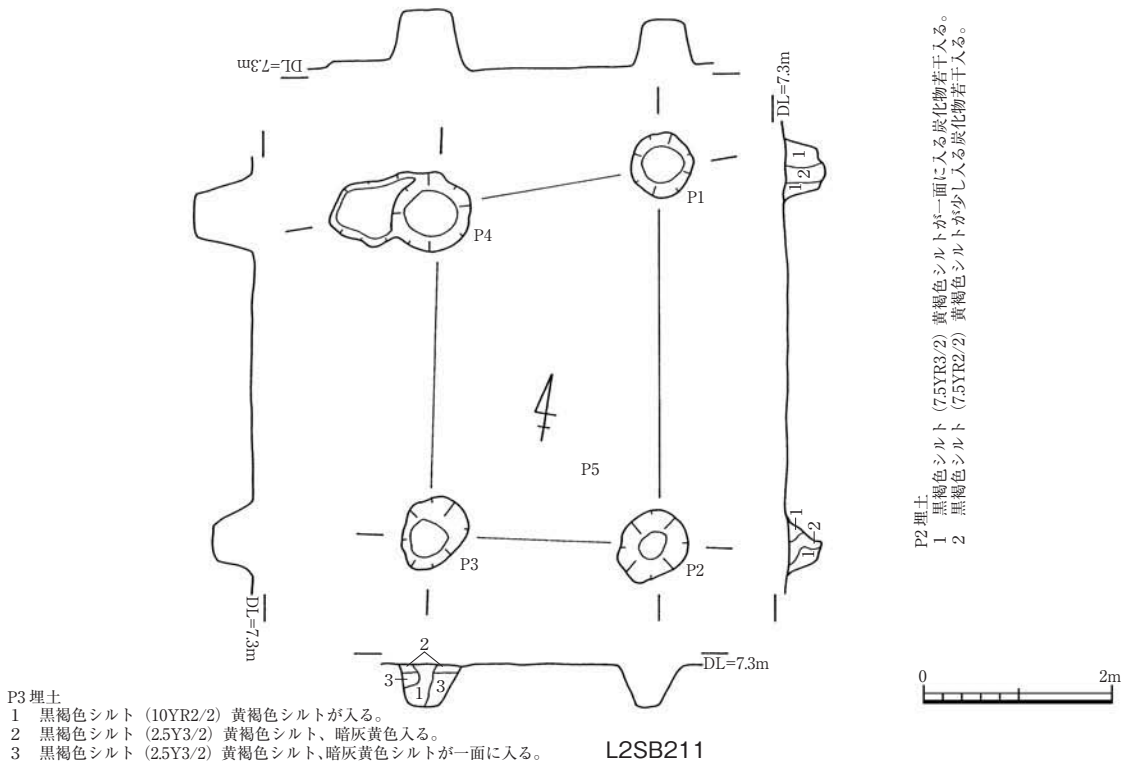
性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器(鉢)



L2-7 表 SB212 埋土一覧

遺構番号	ビット	柱穴形	規模 (cm)		埋土	備考
			直径	深さ		
SB212	P4	円形	130×105	62	1.黄褐色粘性土 2.黒褐色粘性土(10YR2/2) 遺物・黄褐色粘性土入る。 3.黄褐色粘性土に黄灰シルト入る。 4.黒褐色粘性土(10YR3/2) 5.黒褐色粘性土(10YR2/2) 6.黒褐色粘性土(10YR2/2) 7.黒褐色粘性土(7.5YR2/1) 黄褐色ブロック入る。	
SB212	P5	円形	80×55	62	1.黄褐色シルト 2.黒褐色シルト(10YR3/2) 3.黒褐色シルト(10YR2/2) 炭化物含む。	



P3 埋土

- 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 黄褐色シルトが入る。
- 2 黒褐色シルト (2.5Y3/2) 黄褐色シルト、暗灰黄色入る。
- 3 黒褐色シルト (2.5Y3/2) 黄褐色シルト、暗灰黄色シルトが一面に入る。

L2SB211

L2-40 図 L2SB211・212

所見：調査区の中央部に位置する梁間1間、桁行2間の南北棟建物である。密集する住居跡群ST210・211・212・229の下層より検出した。3軒の住居跡ST210・211・212に切られ、ST229を切る。掘方は約30cm×40cm～55cm×60cmを測り、形状は円形から楕円形を呈する。柱穴の深さは約30～40cmを測る。P2・P4には径20～35cmの柱痕跡が残る。埋土は黄褐色シルト・粘性土や黒褐色シルトの単一層から黒褐色シルトを基調とする7層までである。

出土遺物は細片が殆どであるが、P3から鉢(1)が出土している。口縁部に凹線文を有し、垂下する粘土紐を貼付、さらに刺突文を施すもので、口縁部の細片である。搬入である可能性も考えられる土器である。

L2SB213(L2-41 図)

時期：弥生 棟方向：N-86°-E

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.0m×桁行3.8m 面積：9.6㎡

柱間寸法：梁間2.0m 桁行1.8～2.0m

柱穴数：6 柱穴形：円形、楕円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器

所見：調査区の住居跡が密集する下層で確認された梁間1間、桁行2間の建物である。4棟の住居跡ST210・212・228・229に切られる。棟方向はSB201・202・210とほぼ同一である。掘方は概ね円形を呈し、径64～84cmで深さは48～80cmを測る。住居跡の床面で検出し、SB212と交差する。SB212よりは梁間と桁行が各40cm程短く、一回り小さい。埋土は黒褐色粘性土を基調にした2から9層で、P1には柱痕跡が約35cm残る。P6の基底面には砂岩やチャートの礫が入っていた。

出土遺物は土器の細片のみであり、図示できるものはなかった。

L2SB214(L2-41 図)

時期：弥生 棟方向：N-19°-W

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.0m×桁行3.3m 面積：6.6㎡

柱間寸法：梁間1.9～2.0m 桁行1.75～1.8m

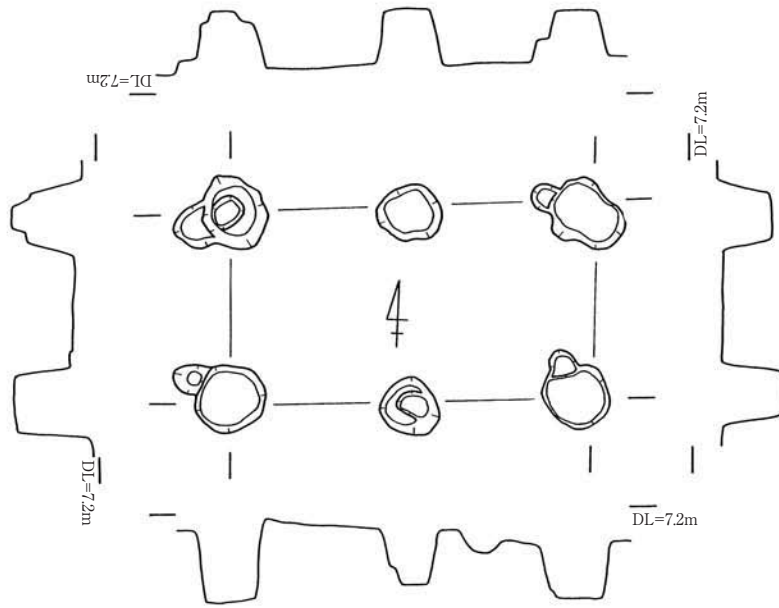
柱穴数：5(6) 柱穴形：方形、楕円形

性格：— 付属施設：—

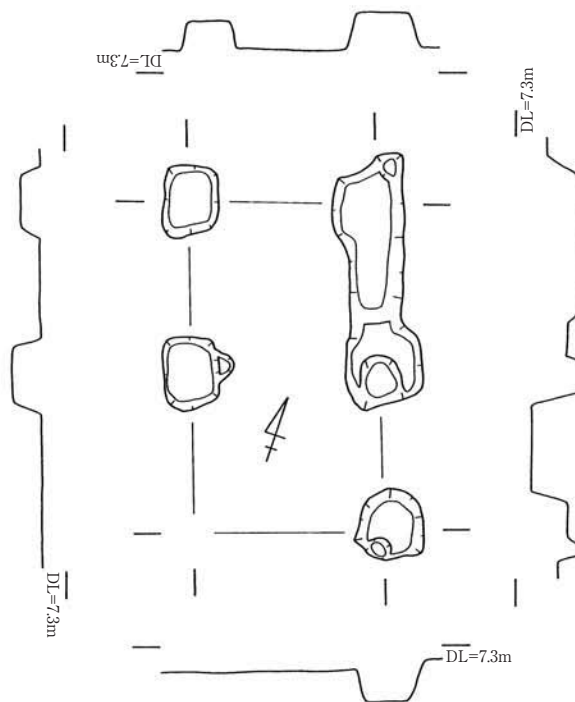
出土遺物：弥生土器

所見：調査区の中央部東側から検出した梁間1間、桁行2間の建物である。建物南西隅のピットは確認できなかった。南東隅のP3は溝状土坑SK253によって切られ、P1・P2は土坑SK240を切る。掘方は楕円形、方形、不定形で、長軸68～88cm、短軸56～80cmを測る。柱穴の深さは20～52cmを測るがややばらつきがみられる。P3には径25cm程の柱痕跡が残る。埋土は黒褐色粘性土・シルトを基調とする3層から10層で、埋土中には黄褐色粘土がブロック状に入る。

出土遺物は細片のみであり、図示できるものはなかった。



L2SB213



L2SB214



L2-41 図 L2SB213・214

L2SB215(L2-42 図)

時期：弥生 棟方向：N-73°-E

規模：梁間1間×桁行4間 梁間3.9m×桁行6.0m 面積：23.4㎡

柱間寸法：梁間4.0m 桁行1.50m

柱穴数：9(10) 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器片

所見：調査区の西南部隅において検出した梁間1間、桁行4間の東西棟建物である。南側には大溝2が走っており、桁行方向とほぼ併走する。掘方はほぼ円形で、径は20～32cmとやや小さい。柱穴の深さは10～20cmを測り、他の建物に比べ浅い。また梁間が3.9mと長いのも特徴的である。棟方向はSB216と同じくする。西側には土坑(SK284)が隣接しており、建物に付随する遺構の可能性も考えられる。

出土遺物はいずれも細片であり、図示できるものはなかった。

L2SB216(L2-42 図)

時期：弥生 棟方向：N-68°-E

規模：梁間1間×桁行2間 梁間3.0m×桁行3.7m 面積：11.1㎡

柱間寸法：梁間2.85～3.0m 桁行1.7～2.0m

柱穴数：6 柱穴形：円形、不定形

性格：— 付属施設：—

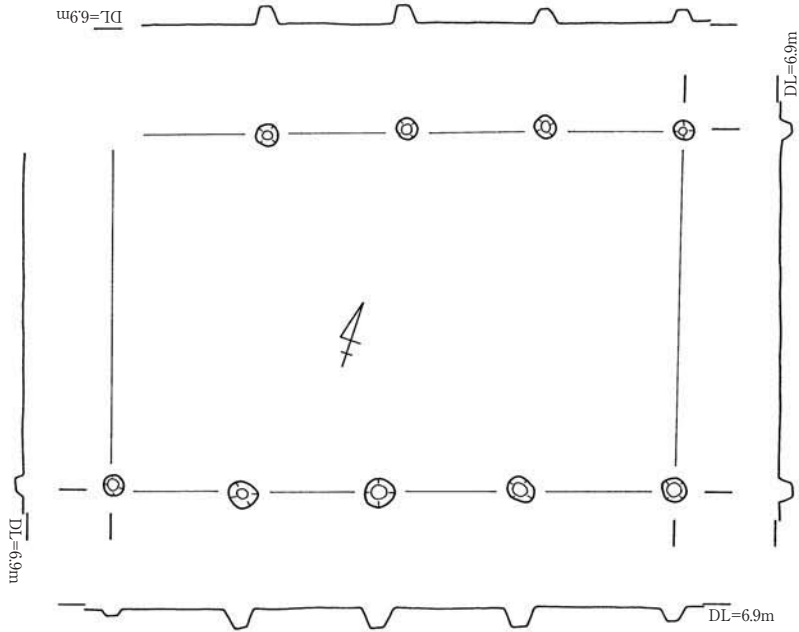
出土遺物：弥生土器

所見：調査区の南西、ST214の南西部より検出した梁間1間、桁行2間の東西棟建物である。掘方は径が20～50cmを測る円形から楕円形を呈し、ピットの深さは20～45cmを測る。ST214の南部からは多くのピットを検出しており、建物の建て替えが行われた可能性も考えられる。

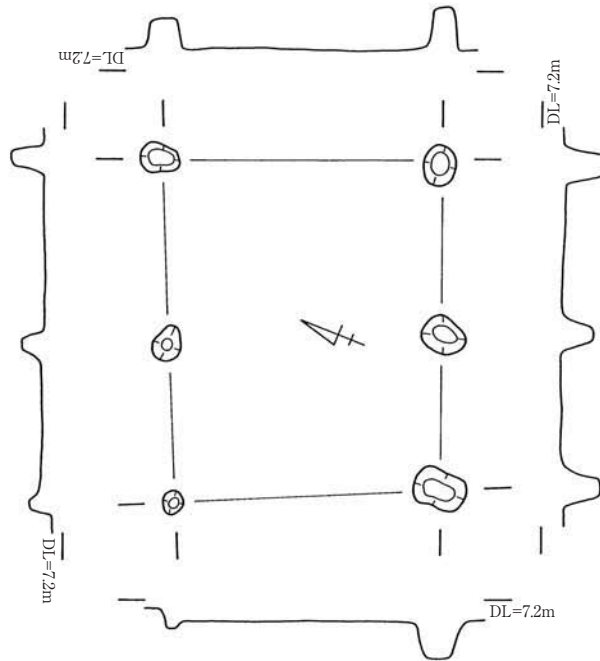
出土遺物は少量で、細片のみであるため図示できなかった。

(3) 土坑

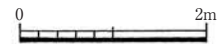
本調査区では138基の土坑を検出した。遺構の多くが、竪穴住居跡・掘立柱建物跡と同様に調査区北部においての検出である。土坑の形態には平面が方形、隅丸方形、楕円形、溝状のものがみられるが、楕円形と隅丸方形を呈する土坑を多く検出した。なかでも溝状土坑の場合は掘立柱建物跡に付随するものと考えられる。検出された138基の土坑のうち、その殆どは遺物量も少なく、図示できたのは19基のみである。そのなかでも調査区北部から検出したSK222の埋土中から完形の壺が、下層の焼土層からは、炭化米が詰まった土器の底部が出土した。



L2SB215



L2SB216



L2-42 図 L2SB215・216

L2-8表 L2区土坑一覧

遺構名	形態	断面形	規模			主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)					
L2SK201	円形	皿形	0.85	0.82	24	—	黒褐色粘性土			
L2SK202	円形	不定形	0.97	0.85	34	N-63°-W	黒褐色シルト・黒褐色粘土			
L2SK204	隅丸方形	箱形	1.71	1.57	46	N-15°-W	褐灰色シルト・黄橙色シルト		近世	ハンダ土坑
L2SK205	長方形	箱形	1.85	1.23	0.29	N-77°-W	黒褐色粘土・オリープ褐色シルト	SD202	近世	
L2SK208	楕円形	皿形	0.9	0.67	46	N-74°-E	黒褐色シルト・黒褐色粘土	SB203	弥生IV	
L2SK209	楕円形	箱形	1.3	0.85	31.45	N-89°-E	黒褐色粘土質シルト	SD203	弥生IV-2~V-1	
L2SK212	不整形	箱形	0.99	0.6	12.25	—	黒褐色粘土			調査区外に延びる
L2SK215	隅丸方形	箱形	1.55	1.45	50.05	N-4°-W	黒褐色シルト	ST203		
L2SK216	溝状	U字状	4.24	0.86	34	N-67°-E	黒褐色シルト質粘土		弥生V-2	SB206の溝状土坑か?
L2SK217	隅丸方形	台形	2.35	1.17	25.4	N-73°-E	黒褐色シルト質粘土	ST213		
L2SK218	隅丸方形	箱形	1.96	1.53	39.15	N-14°-W	黒褐色シルト・黄灰色シルト			
L2SK219	楕円形	箱形	2.17	1.08	58	N-82°-W	黒褐色粘性土			
L2SK220	不明	箱形	1.5	1.1	31	N-85°-E	黒褐色シルト			調査区北側に延びる
L2SK221	溝状	U字状	4.85	1.02	34	N-14°-W	黒褐色粘性土		弥生IV-2~V-1	
L2SK222	隅丸方形	箱形	1.19	1.3	46	N-78°-W	黒褐色シルト	SB203	弥生IV-2	炭化米出土
L2SK224	楕円形	U字状	1.15	0.56	34	N-74°-E	黒褐色シルト・粘性土			
L2SK225	隅丸方形	皿形	1.44	1.01	31	N-61°-E	黒褐色シルト	ST216・217	弥生IV-2~V	
L2SK226	楕円形	皿形	0.99	0.68	13	N-55°-E	黒褐色粘性土		弥生III	
L2SK227	—	U字状	3.2	0.54	37	N-82°-E	黒褐色シルト	ST216・ST217		
L2SK228	隅丸方形	箱形	1.37	1.32	50	N-87°-E	黒褐色シルト	SD201	弥生IV-2	
L2SK229	不整形	逆台形	1.6	0.79	34	N-72°-E	黒褐色シルト	SB204		
L2SK230	隅丸方形	箱形	1.4	0.84	32	N-28°-E	黒褐色シルト	ST217		
L2SK231	不整形	不定形	1.17	1.23	14	N-55°-E	黒褐色粘性土	ST217		
L2SK232	楕円形	逆台形	1.1	0.65	34	N-2°-E	黒褐色粘性土			
L2SK233	隅丸方形	箱形	2.04	1.72	36	N-17°-E	黒褐色シルト	SD209		
L2SK234	不整形	皿形	1.56	1.02	32	N-10°-E	黒褐色シルト			
L2SK236	楕円形	皿形	1.04	0.77	20	N-84°-W	黒褐色シルト			
L2SK237	長方形	箱形	—	1.18	3~5	—	黒褐色粘性土	ST215・ST222・SD207		炭化米出土
L2SK238	隅丸方形	箱形	2.37	0.88	29	N-68°-E	黒褐色シルト			
L2SK239	隅丸方形	U字状	1.02	0.88	12	N-75°-E	黒褐色シルト	SK240		
L2SK240	溝状	箱形	2.97	0.76	49	N-19°-W	黒褐色シルト・黒褐色粘土	SK239・SK257		
L2SK241	円形	皿状	1.7	1.67	32	N-64°-W	黒褐色シルト	ST211・ST212	弥生III	
L2SK242	不整形	不定形	1.37	0.78	16	N-14°-W	黒褐色シルト	SK240・SK244		
L2SK243	隅丸方形	箱形	1.06	0.91	13	N-80°-E	黒褐色シルト			
L2SK244	隅丸方形	箱形	1.38	1.07	8	N-87°-E	黒褐色粘性土	SK240・SK242		
L2SK246	不整形	皿形	0.88	1.01	12	—	黒褐色シルト	SK245		
L2SK247	隅丸方形	箱形	1.8	1.05	39	N-8°-E	黒褐色粘性土		弥生IV	
L2SK248	楕円形	逆台形	1.79	0.74	13	N-69°-E	黒褐色粘性土			
L2SK249	楕円形	逆台形	0.69	0.43	45	N-74°-E	黒褐色粘性土	SD210		
L2SK250	不整形	箱形	1.1	1.08	32	N-49°-W	黒褐色シルト・粘性土	ST206・ST208		
L2SK251	楕円形	逆台形	0.65	0.33	25	N-4°-W	黒褐色シルト	SK252		
L2SK252	不整形	皿形	0.68	0.53	10.75	—	黒褐色シルト	SK251		
L2SK253	溝状	U字状	7.33	1.14	79.3	N-88°-W	黒褐色粘性土	P2146	弥生V-1	
L2SK254	楕円形	皿形	1.43	0.67	12.9	N-85°-E	黒褐色粘性土			

遺構名	形態	断面形	規模			主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)					
L2SK255	楕円形	皿形	2.14	0.66	10.2	N-14°-W	黒褐色粘性土			
L2SK256	楕円形	皿形	0.76	0.36	12.5	N-73°-W	黒褐色粘性土			
L2SK257	隅丸方形	箱形	1.14	0.58	26.4	N-21°-W	黒褐色粘性土	SK240		
L2SK258	楕円形	不定形	1.81	1.03	47.05	N-48°-E	暗褐色シルト・黒褐色シルト	P2167		
L2SK259	楕円形	皿形	1.49	0.72	22.85	N-19°-W	暗褐色シルト			
L2SK260	不整形	箱形	1.05	0.95	11.2	N-12°-W	黒褐色シルト		弥生IV-2~V-1	
L2SK261	溝状	台形	4.45	1.03	48.8	N-7°-W	黒褐色・暗褐色・褐色シルト	ST227	弥生V-1	
L2SK262	隅丸方形	皿形	1.95	1.51	21.65	N-82°-E	黒褐色粘性土	ST220		
L2SK264	不定形	箱形	1.39	1.24	29.5	N-28°-W	黒褐色粘性土			
L2SK265	楕円形	U字状	1.03	0.8	50.75	N-22°-W	黒褐色粘性土			
L2SK266	不明	皿形	1.28	[1.0]	18.25	—	黒褐色粘性土			調査区西側に延びる
L2SK267	隅丸方形	箱形	1.16	0.66	17.05	N-47°-W	黒褐色粘性土			
L2SK268	隅丸方形	箱形	1.55	0.81	18.75	N-82°-E	黒褐色シルト			
L2SK269	隅丸方形	箱形	2.03	1.75	22.85	N-26°-W	黒褐色粘性土			
L2SK270	円形	皿形	1.0	0.87	15.9	N-85°-E	黒褐色粘性土			
L2SK271	円形	不定形	0.97	0.8	33	N-78°-W	黒褐色粘性土			
L2SK272	溝状	皿形	2.78	0.55	9.9	N-10°-W	黒褐色シルト			
L2SK273	楕円形	逆台形	1.99	0.53	27.55	N-13°-W	黒褐色シルト			
L2SK274	楕円形	皿形	0.9	0.42	12.2	N-24°-E	黒褐色シルト			
L2SK275	隅丸方形	箱形	2.51	1.53	52.8	N-36°-W	黒褐色粘性土			
L2SK276	楕円形	—	0.87	0.65	18.4	N-61°-W	黒褐色シルト	P2197		
L2SK277	隅丸方形	箱形	1.86	1.24	30.8	N-24°-E	黒褐色粘性土	ST223	弥生IV-2	
L2SK278	隅丸方形	箱形	1.8	0.94	50.35	N-7°-W	黒褐色シルト		弥生IV-2	
L2SK281	楕円形	逆台形	1.03	0.56	29.05	N-83°-W	黒褐色シルト	ST211		
L2SK282	隅丸方形	皿形	0.99	0.77	10	N-18°-W	黒褐色粘性土			
L2SK284	不明	U字状	1.28	0.49	49.05	N-20°-W	黒褐色粘土・黒褐色シルト			調査区西側に延びる

L2SK209(L2-43 図)

時期；弥生IV-2～V-1 形状；楕円形 主軸方向；N-89°-E

規模；1.3×0.85m 深さ；31.45cm 断面形態；箱形

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(甕、壺)

所見；調査区の北西隅より検出した楕円形状を呈する土坑である。SB201の西側に位置し、北西隅のSD203に切られる。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする3層で、埋土中には焼土・炭化物を含む。

出土遺物では壺と甕が出土している。1・2は壺で、貼付口縁を有するものである。3は甕の口縁部で強いナデにより突帯状を呈するものである。その他、底部片が数点出土している。

L2SK215(L2-43 図)

時期；弥生 形状；隅丸方形 主軸方向；N-4°-W

規模；1.55×1.45m 深さ；50.05cm 断面形態；箱形

埋土：黒褐色シルト

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺)

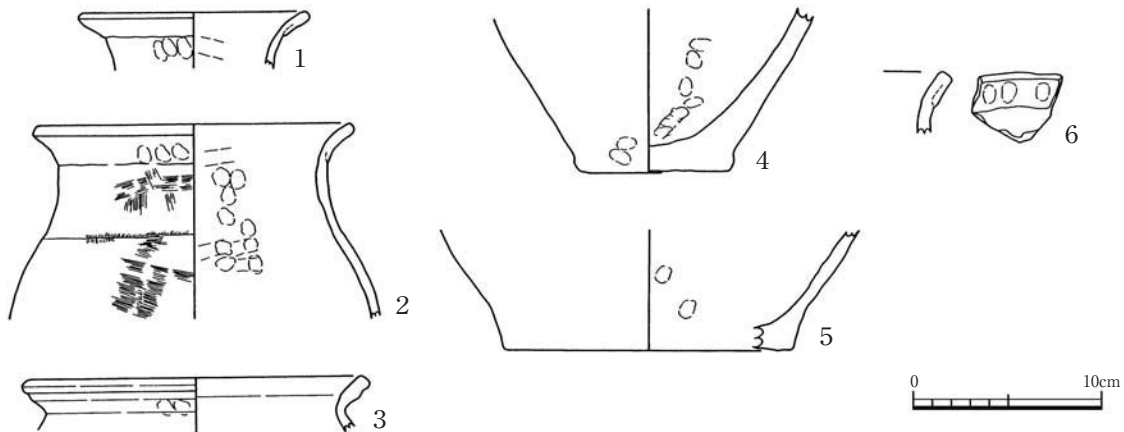
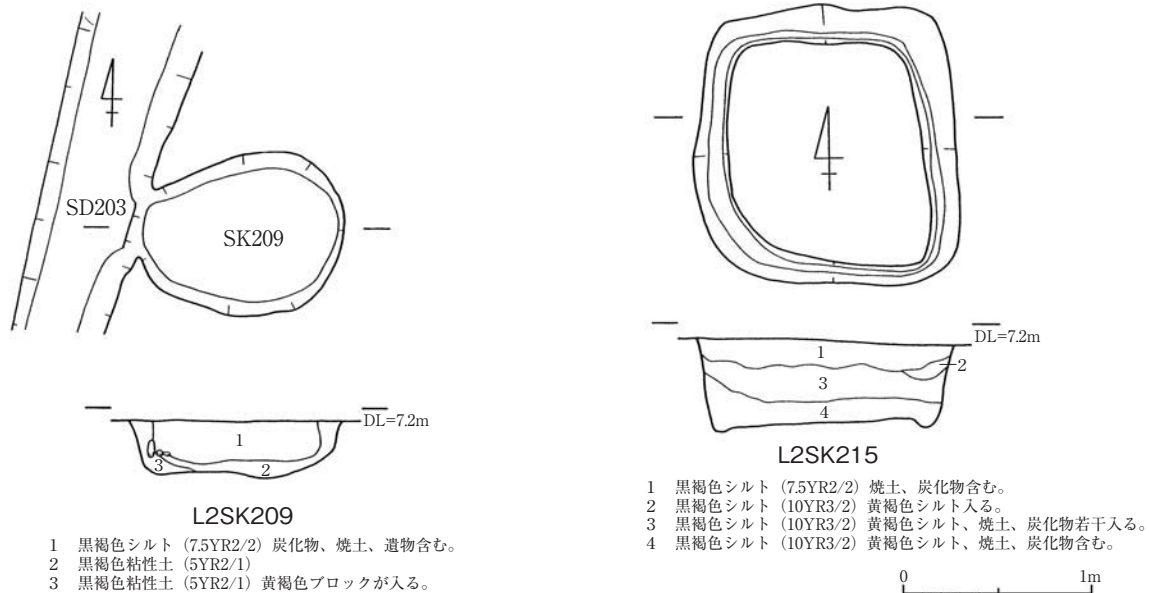
所見：調査区の中央部北方において検出された隅丸方形の土坑である。ST202の南側、SB203・204の東側に位置し、南に隣接する住居跡ST203によって切られる。基底面には幅6～10cm、深さ約4cmの壁溝が一条巡っている。埋土は黒褐色シルトを基調とする4層で埋土中には焼土・炭化物が混じる。出土遺物は細片が殆どであったが、貼付口縁を有する口縁部片(6)が1点図示できた。

L2SK216(L2-44 図)

時期：弥生V-2 形状：溝状 主軸方向：N-67°-E

規模：4.24×0.86m 深さ：34cm 断面形態：U字状

埋土：黒褐色シルト質粘土



L2-43 図 L2SK209・215(SK209：1～5、SK215：6)

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(甕、壺、高杯)

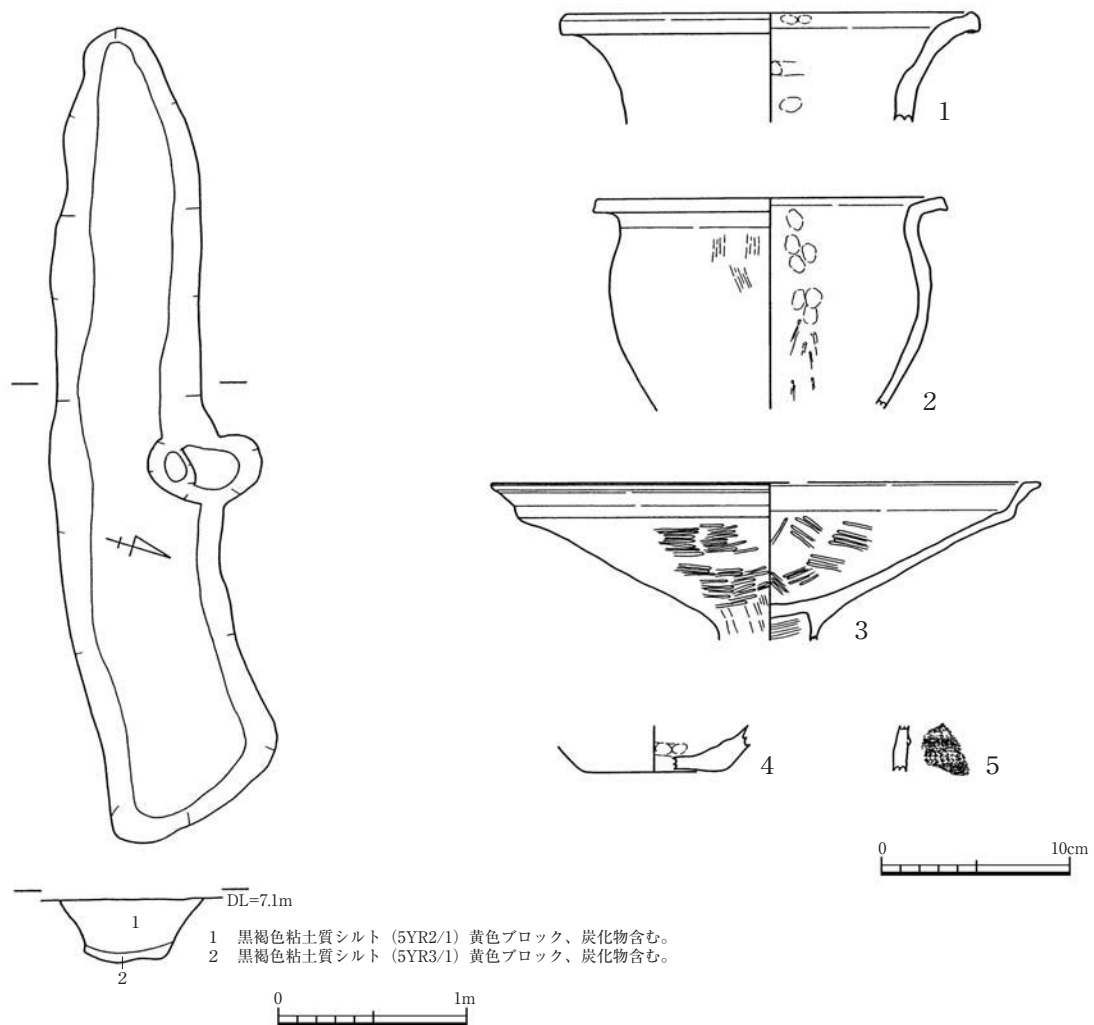
所見：調査区中央部の西側隅において検出した溝状を呈する土坑である。住居跡ST213の西側掘立柱建物跡SB207の北側に位置する。周辺には多くのピットを検出したが、遺構に伴うと思われる建物は確認できなかった。埋土は黒褐色シルト質粘土を基調とする2層からなり、埋土中には炭化物が混じる。

出土遺物は床面から壺・甕の口縁部や器壁が薄く搬入品と思われる高杯の杯部が出土している。1は口縁部が外方に開き、端部は平坦な面をなす壺、2は口縁部が強く外反する甕、3は薄い作りを呈し、内外面に丁寧なミガキが残る高杯である。

L2SK218(L2-45 図)

時期：弥生 形状：隅丸方形 主軸方向：N-14°-W

規模：1.96×1.53m 深さ：39.15cm 断面形態：箱形



L2-44 図 L2SK216

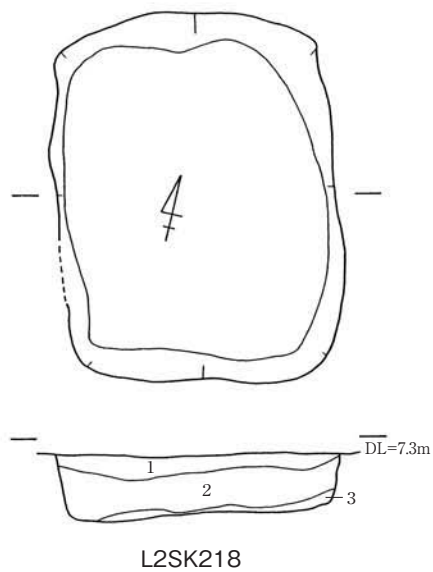
埋土：黒褐色シルト・黄灰色シルト

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器

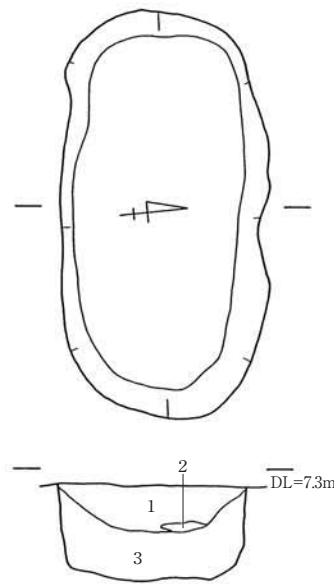
所見：調査区の北方において検出された隅丸方形を呈する土坑である。SK219 と掘立柱建物跡 SB202 の北隣りに位置する。埋土は黒褐色シルト・黄灰色シルトの3層からなり、埋土中には黄褐色土がブロック状に混じる。

出土遺物は少量であったが、貼付口縁を有する口縁部の細片や2の櫛描文を施した細片が出土している。



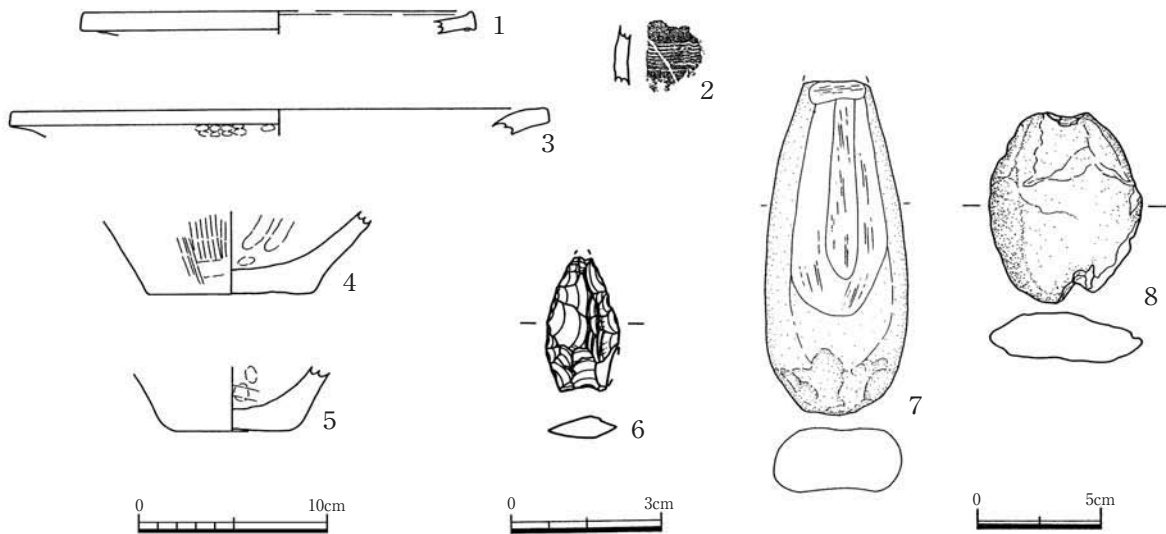
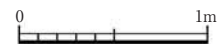
L2SK218

- 1 黒褐色シルト (7.5YR3/2) 黄褐色シルト、暗灰黄色シルトがブロック状に入る。
- 2 黒褐色シルト (10YR3/2) 黄褐色シルト、暗灰黄色シルトブロックが大きく入る。
- 3 黄灰色砂質シルト (2.5YR4/1)



L2SK219

- 1 黒褐色粘土質シルト (7.5YR2/2)
- 2 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 黄褐色シルトが多く入る。
- 3 黒褐色粘土質シルト (5YR2/1)



L2-45 図 L2SK218・219(SK218 : 2, SK219 : 1・3~8)

L2SK219(L2-45 図)

時期；弥生 形状；楕円形 主軸方向；N-82°-W

規模；2.17×1.08m 深さ；58cm 断面形態；箱形

埋土；黒褐色粘性土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(甕、壺)、石鏃、砥石、サヌカイト剥片

所見；調査区北方において検出した長径2mを越える楕円形の土坑である。SK218の南側、SB202の北側に隣接する。埋土は黒褐色粘性土を基調とする2層であり、埋土中には黄褐色シルトがブロック状に混じる。出土遺物は少量で、壺、甕の口縁部細片(1・3)と底部片(4・5)が出土しており、4の内面には水銀朱が付着している。石器ではサヌカイト製の打製石鏃(6)、両面を使用したと思われる砥石(7)がみられる。

L2SK221(L2-46 図)

時期；弥生IV-2～V-1 形状；溝状 主軸方向；N-14°-W

規模；4.85×1.02m 深さ；34cm 断面形態；U字状

埋土；黒褐色粘性土(炭化物含む)

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(甕、壺、鉢)

所見；調査区中央部、西側隅において検出した溝状を呈する土坑である。遺構の西部に掘立柱建物跡SB207が並行するため、SB207に付属する遺構の可能性が高い。断面はU字状を呈し、埋土は黒褐色粘性土を基調とする2層からなる。上層には炭化物が混じり、下層には黄褐色粘土がブロック状に混じる。

出土遺物は床面から壺、甕、鉢が出土している。1・3～5は壺である。4は口縁部に凹線文・頸部に列点文、口縁部内面にヘラ描きによる文様を有し、3は貼付口縁を有し、頸部に櫛描沈線を施すものである。5は上胴部に矢羽状の文様をもつ。7～10は甕である。8は口縁部凹線文を施すものである。埋土中からは6の脚付の鉢が完形で出土している。その他底部片が数点出土している。

L2SK222(L2-47～49 図)

時期；弥生IV-2 形状；隅丸方形 主軸方向；N-78°-W

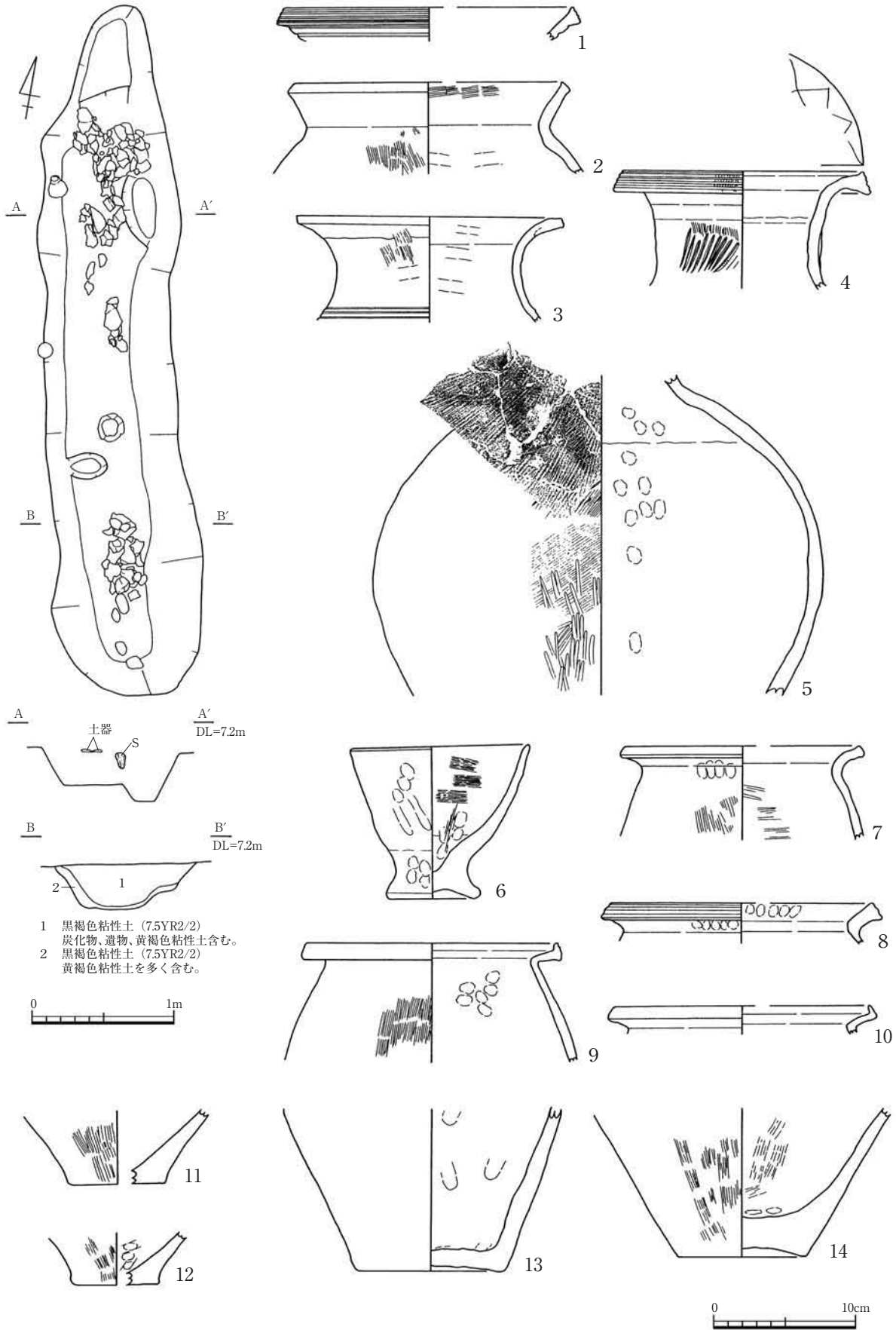
規模；1.91×1.30m 深さ；46cm 断面形態；箱形

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(甕、壺、鉢、高杯)、炭化米

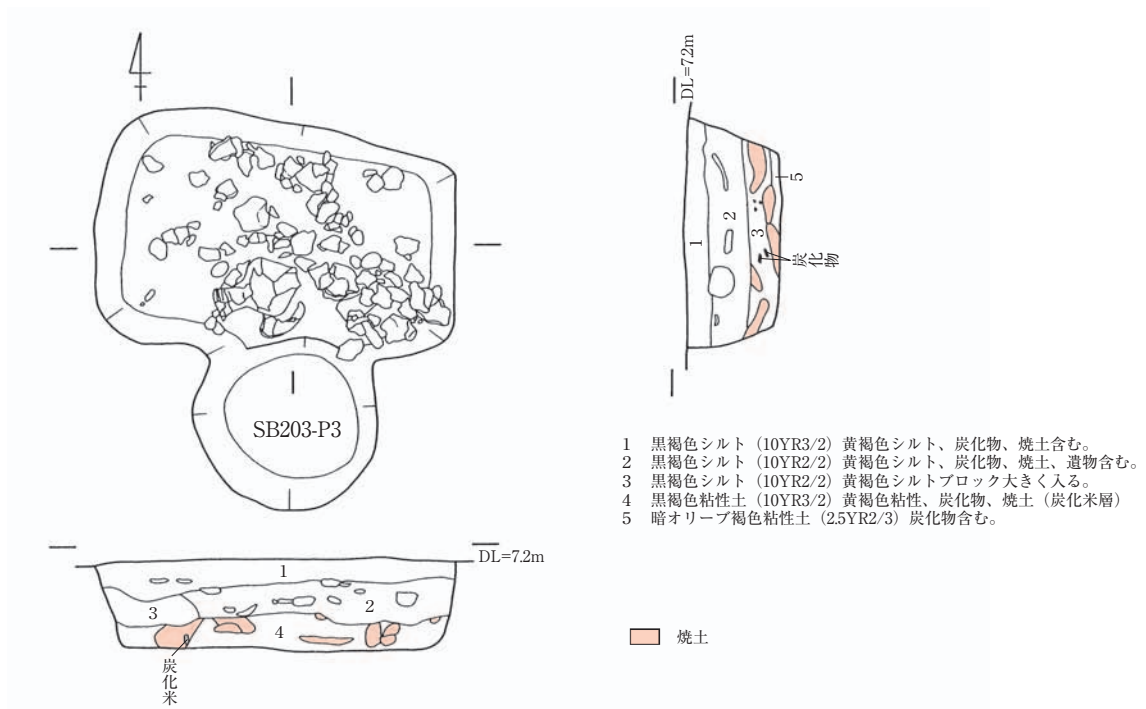
所見；調査区中央、北側において検出した隅丸方形を呈する土坑である。掘立柱建物跡SB203の北側に隣接し、SB203のP3を切る。断面は箱形を呈し、埋土は黒褐色シルトを基調とする4層からなり、各層ともに焼土・炭化物が多量に混じる。殆どの遺物は第2層より出土している。さらに、



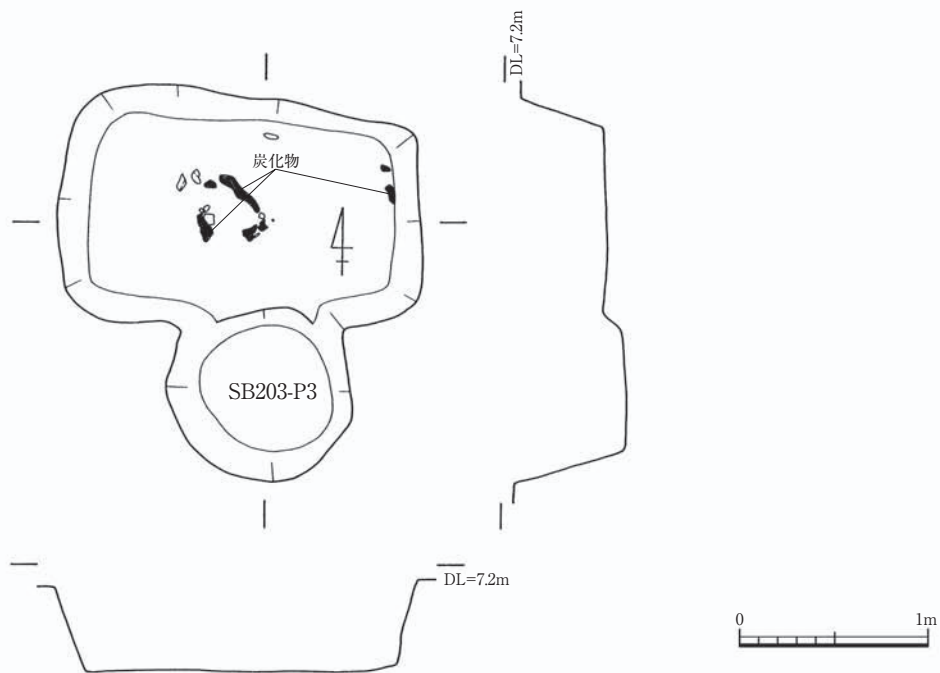
L2-46 図 L2SK221

最下層の4層では焼土塊がブロック状に入り、この焼土層から数点の土器片と土器の底部に炭化米が詰まった状態で検出された。

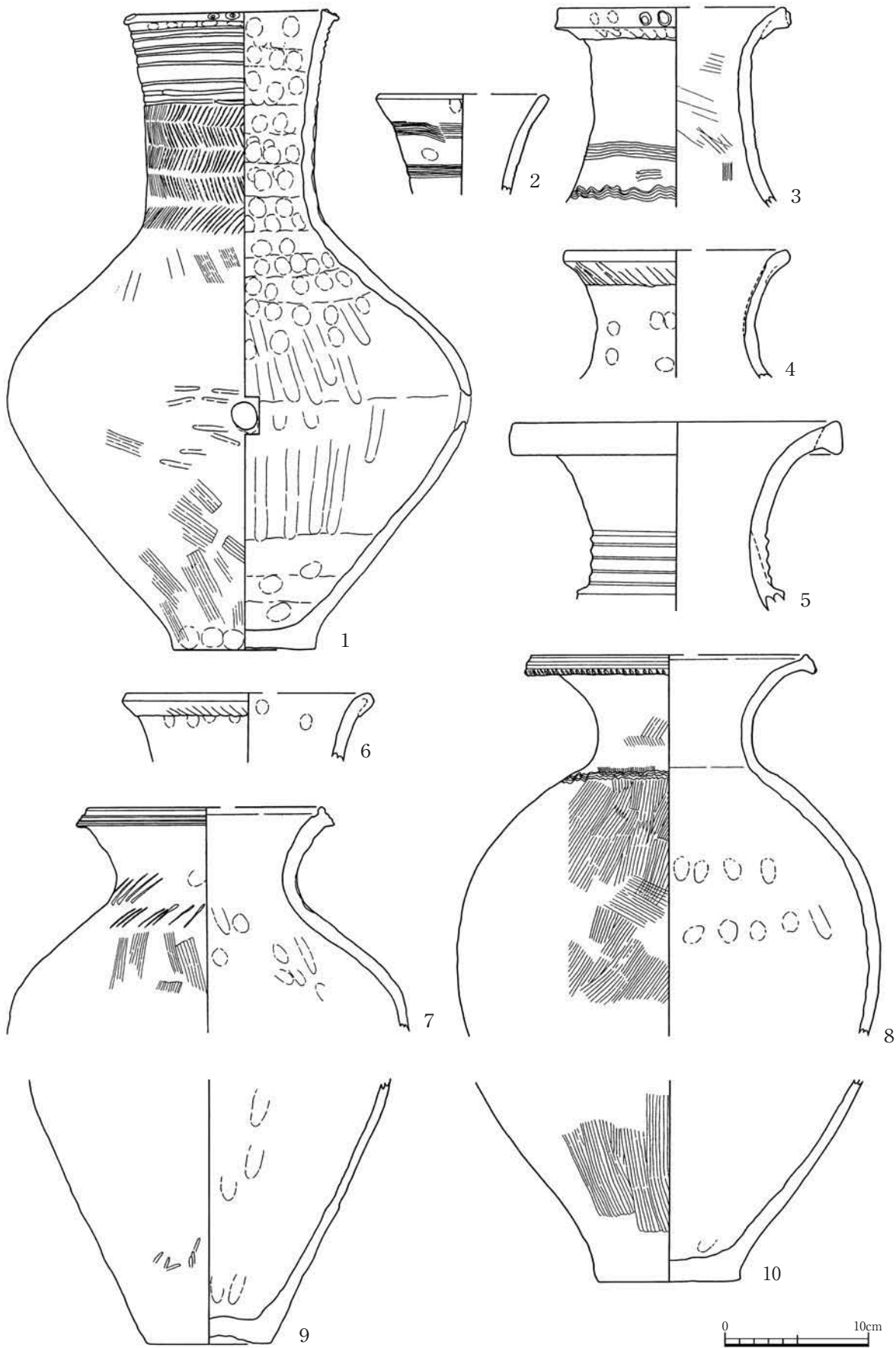
出土遺物は壺、甕、鉢、把手が出土している。1～8は壺である。1は長頸で口縁端部に2対の円形刺突文の貼付、頸部に8条の凹線文、相互の列点文を施し、胴部に穿孔するものである。3は貼付口縁で、口縁端部に円形浮文を貼付し、頸部に櫛描文を有するもの、2は長頸で、櫛描文を施すもの、5・7・8の口縁部、頸部に凹線文を巡らすものがある。11・12は甕で11は器壁が薄く、



L2SK222 遺物出土状況及びセクション



L2-47 図 L2SK222(1)



L2-48 图 L2SK222(2)

口縁端部を上下に拡張し、胴部外面にハケ、内面上部にはユビナデ、下部ではヘラケズリを施す。12は貼付口縁を有し、端部にキザミ目を施す小型のものである。高杯は脚部のみであるが2点出土している。19は端部に凹線文がみられる。13は脚付きの鉢の可能性も考えられる。

L2SK225(L2-50 図)

時期：弥生IV-2～V 形状：隅丸方形 主軸方向：N-61°-E

規模：1.44×1.01m 深さ：31cm 断面形態：皿形

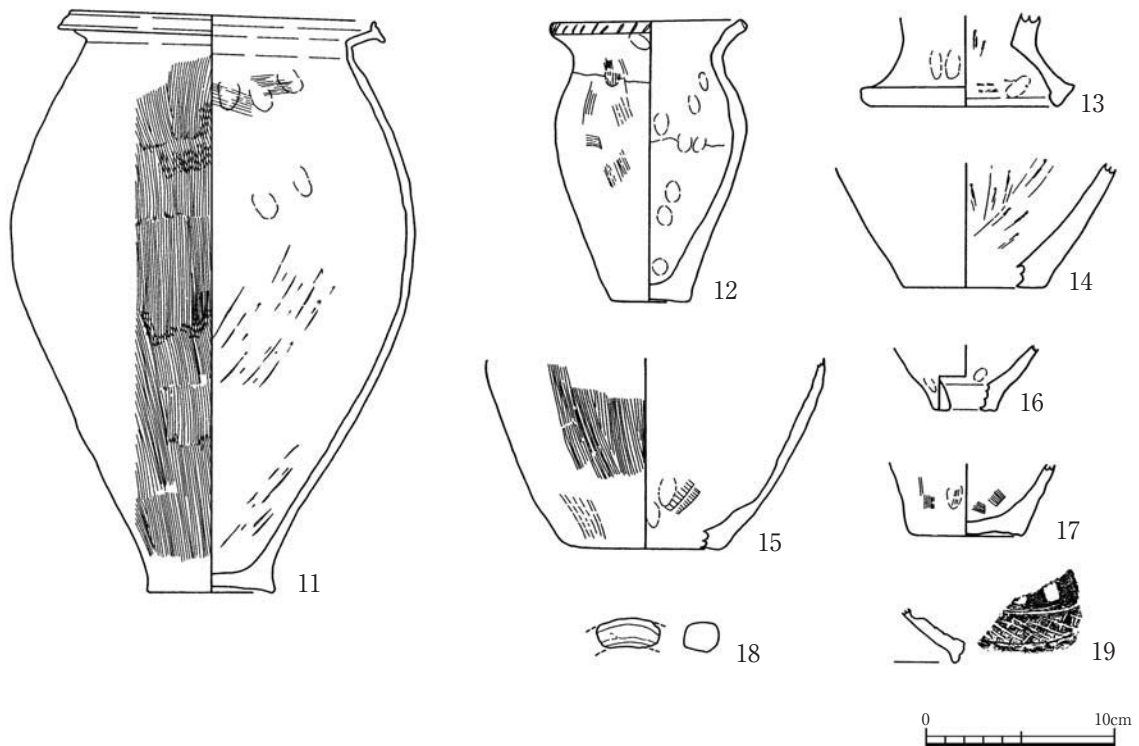
埋土：黒褐色シルト

付属遺構：— 機能：—

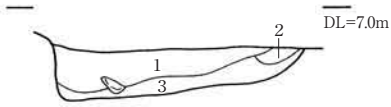
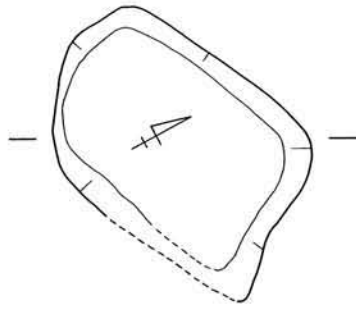
出土遺物：弥生土器(壺、鉢、高杯)

所見：調査区中央部の西において検出された隅丸方形の土坑である。住居跡ST216の下層で検出され、隣接するST216・SK227によって切られる。断面は皿形を呈し、埋土は黒褐色シルトを基調とする3層からなり2層目には焼土・炭化物が混じる。

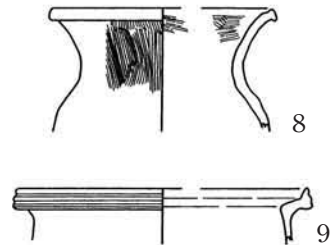
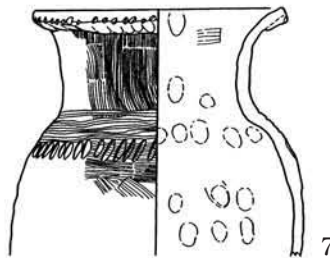
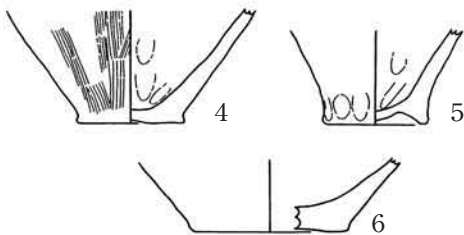
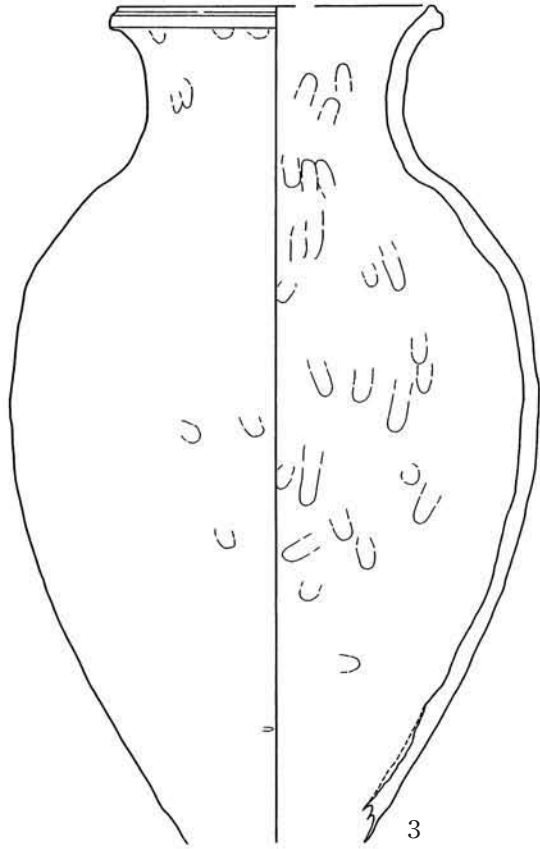
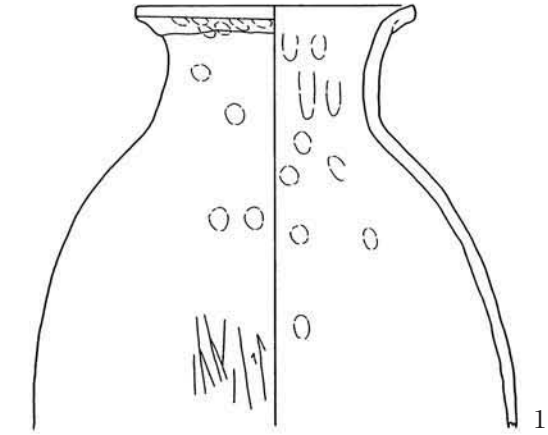
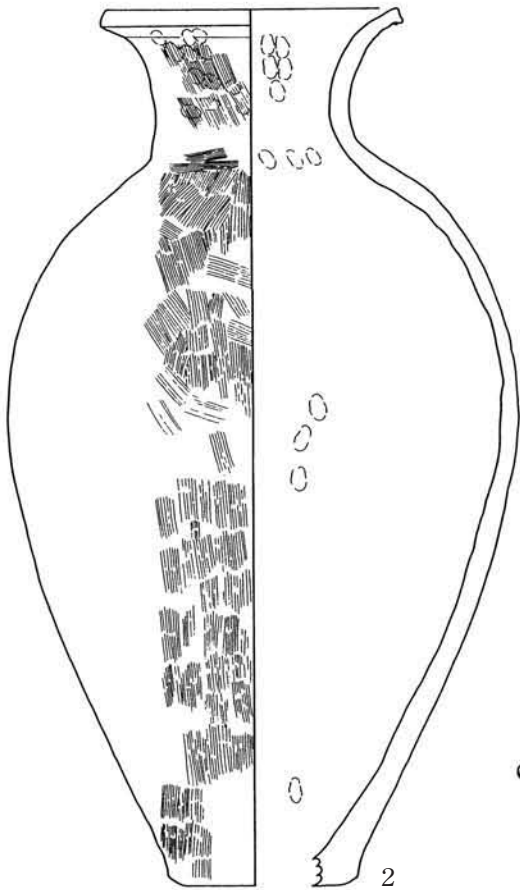
出土遺物は床面より壺、高杯、鉢などが出土している。1～3は壺で、1は貼付口縁を有するもの、甕では7の貼付口縁を有し、上胴部に櫛描直線文と列点文を施すものと口縁端部に凹線文を有するものがみられる。10は高杯の脚部のみであるが、裾端部に凹線文を施すものが出土している。



L2-49 図 L2SK222(3)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 黄褐色シルトが入る。
- 2 黒褐色シルト (2.5YR3/2) 黄褐色シルト、暗灰黄色シルトが入る。
- 3 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2)



L2-50 図 L2SK225

L2SK226(L2-51 図)

時期；弥生III 形状；楕円形 主軸方向；N-55°-E

規模；0.99×0.68m 深さ；13cm 断面形態；皿形

埋土；黒褐色粘性土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺)

所見；調査区の北西部より検出した楕円形を呈する土坑である。上面では掘立柱建物跡SB208のP2と切り合う。上層の削平が著しく、堆積は浅い。基底面近くで本遺構を確認したため切り合い関係は確認できなかった。埋土は単層の黒褐色粘性土である。

出土遺物は壺の口縁部と土器の底部片数点が出土している。1～3は壺である。1は長頸で、頸部に櫛描による直線末端扇形文を施す。2は貼付口縁を有し、3は口縁端部にキザミ目を巡らすものである。

L2SK228(L2-51 図)

時期；弥生IV-2 形状；隅丸方形 主軸方向；N-87°-E

規模；1.37×1.32m 深さ；50cm 断面形態；箱形

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(甕、壺、高杯、把手)

所見；調査区の北西部より検出した隅丸方形を呈した土坑である。掘立柱建物跡SB208と209の中間に位置する。断面は箱形を呈し、埋土は黒褐色シルトを基調とする2層からなる。埋土の上層には焼土・炭化物が混じり、下層には炭化物が入る。

出土遺物は床面から壺、甕、高杯あるいは脚付き鉢、把手が出土している。4・5は壺で、4は口縁端部に凹線文、頸部に列点文を施すものである。7は甕で、口縁部「く」の字に屈曲、端部を上下に拡張し、凹線文を巡らすものである。その他10の高杯または脚付き鉢の脚部と11の把手が出土している。

L2SK241(L2-52 図)

時期；弥生III 形状；円形 主軸方向；N-64°-E

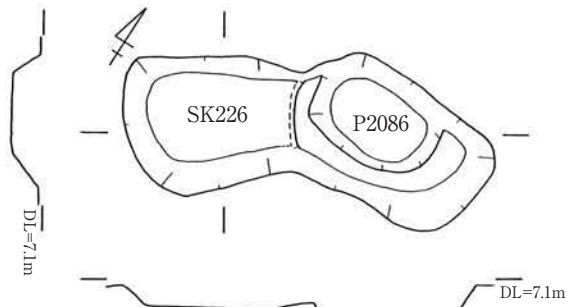
規模；1.7×1.67m 深さ；32cm 断面形態；皿状

埋土；黒褐色シルト(炭化物を含む)

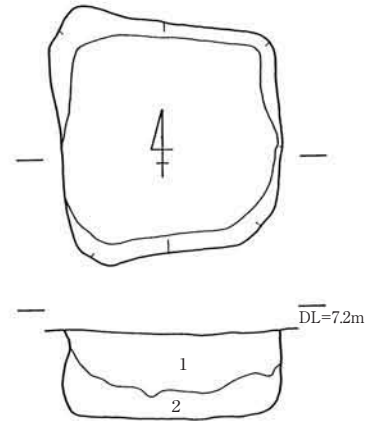
付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺)、石鏃

所見；調査区の中央部、竪穴住居が密集する地点において検出した円形を呈する土坑である。住居跡ST211・212によって切られ、掘立柱建物跡SB212のP5を切る。断面は皿状を呈し、埋土は黒褐色シルトを基調とする4層からなり、下層には炭化物が混じる。

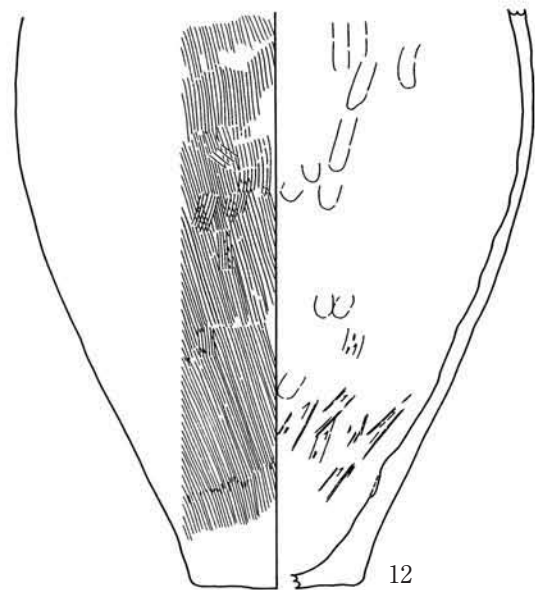
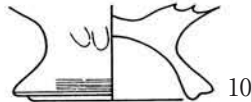
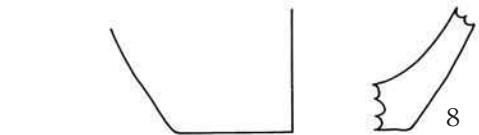
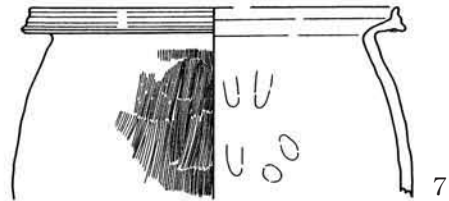
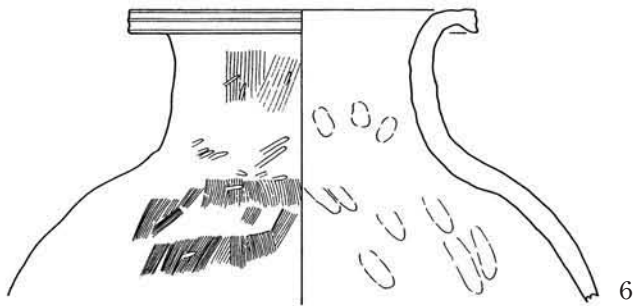
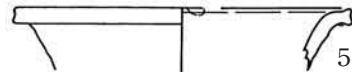
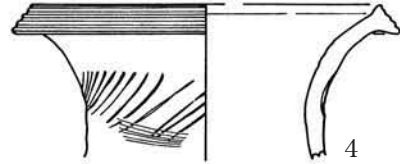
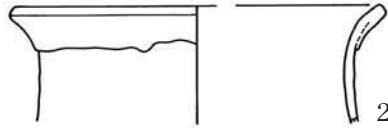
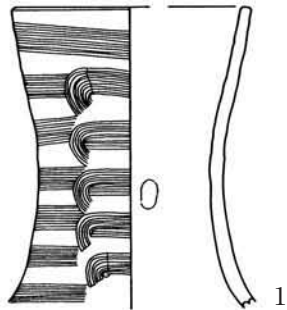


L2SK226



L2SK228

- 1 黒褐色シルト (5YR2/1) 黄褐色シルト、焼土、炭化物含む。
- 2 黒褐色シルト (7.5YR3/2) 黄褐色シルトブロックが入る。炭化物含む。



L2-51 図 L2SK226・228(SK226:1~3・8, SK228:4~7・9~12)

出土遺物は壺の口縁部と土器の底部片である。1・2は長頸壺で櫛描の末端扇形文・流水文を施す。3は貼付口縁を有する壺で口縁下に2対の孔を穿つものである。石器ではサヌカイト製の打製石鏃(7)が出土している。

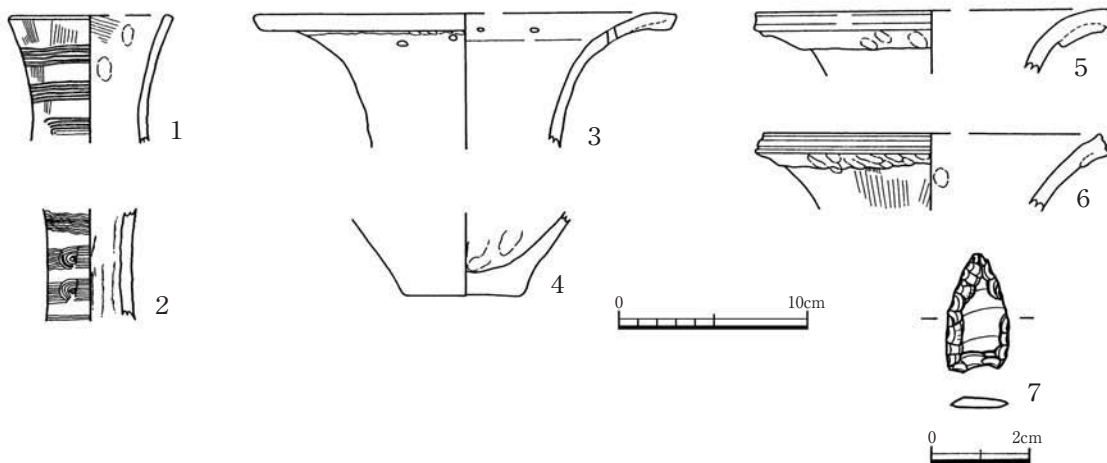
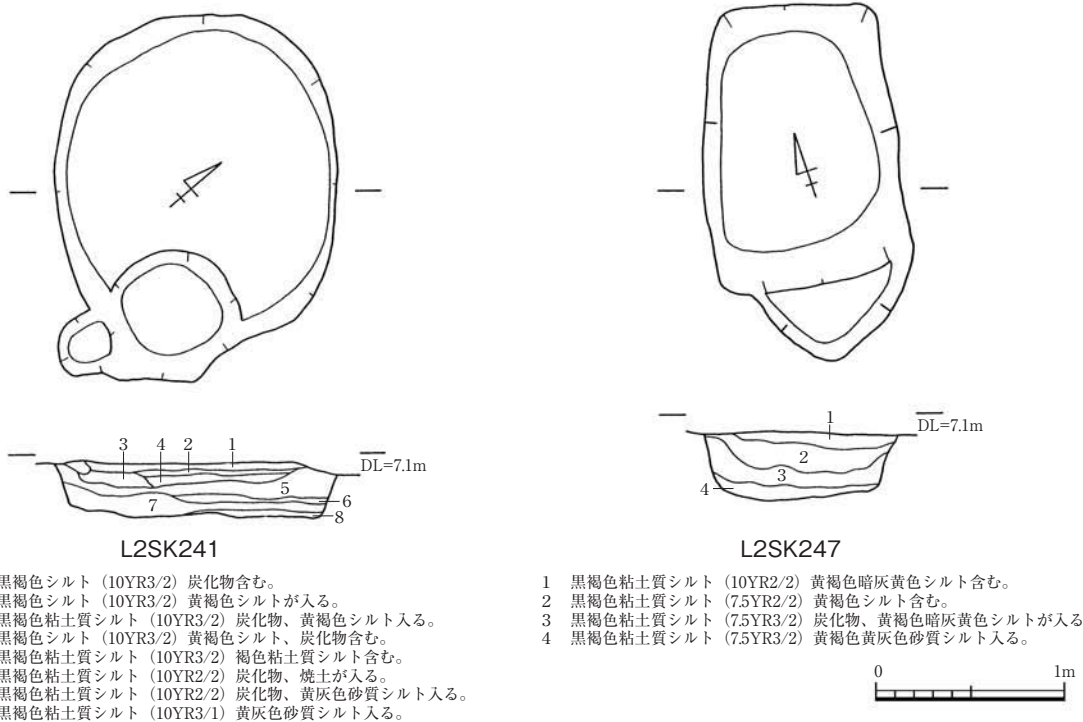
L2SK247(L2-52 図)

時期；弥生IV 形状；隅丸方形 主軸方向；N-8°-E

規模；1.8×1.05m 深さ；39cm 断面形態；箱形

埋土；黒褐色粘性土

付属遺構；— 機能；—



L2-52 図 L2SK241・247(SK241：1～4・7、SK247：5・6)

出土遺物；弥生土器(壺、手捏ね土器)、ドングリ

所見；調査区南部において検出した隅丸形状を呈する土坑である。住居跡ST226の南東に位置する。断面形態が箱形を呈する土坑で、埋土は黒褐色粘性土を基調とする4層からなり、3層目には炭化物が混じる。3層目の上層からはドングリが多量に出土している。

出土遺物は壺や手捏ね土器片が出土している。壺は6の貼付口縁を有し、端部に凹線文を施すものと5の貼付口縁を有し、端部に強いナデを施すものがみられる。ドングリは形態からはカシの実と思われるが詳細については不明である。

L2SK253(L2-53 図)

時期；弥生V-1 **形状**；溝状 **主軸方向**；N-88°-W

規模；7.33×1.14m **深さ**；79.3cm **断面形態**；U字状

埋土；黒褐色粘性土

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(甕、壺)、サヌカイト剥片

所見；調査区の南東隅において検出した溝状を呈した土坑である。掘立柱建物跡SB214の南側に隣接し、SB214のP3を切っている。断面はU字状を呈し、深さは約80cmを測り、非常に深い。埋土は黒褐色粘性土を基調とする4層からなり、2層目には焼土・炭化物、下層には砂質シルトが混じる。基底面からは径約20cm、深さ約15cmの小ピットを検出した。遺物は遺構の西側の基底面に集中していた。

出土遺物は壺、甕が出土している。1～3・7・8は壺である。1・7の貼付口縁を有するものや3の口縁端部にキザミ目を巡らすものである。甕は6・9・10の口縁部下が「く」の字に屈曲するものや6・7の口縁部に凹線文を有するものが出土している。

L2SK259(L2-54 図)

時期；弥生 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-19°-W

規模；1.49×0.72m **深さ**；22.85cm **断面形態**；皿形

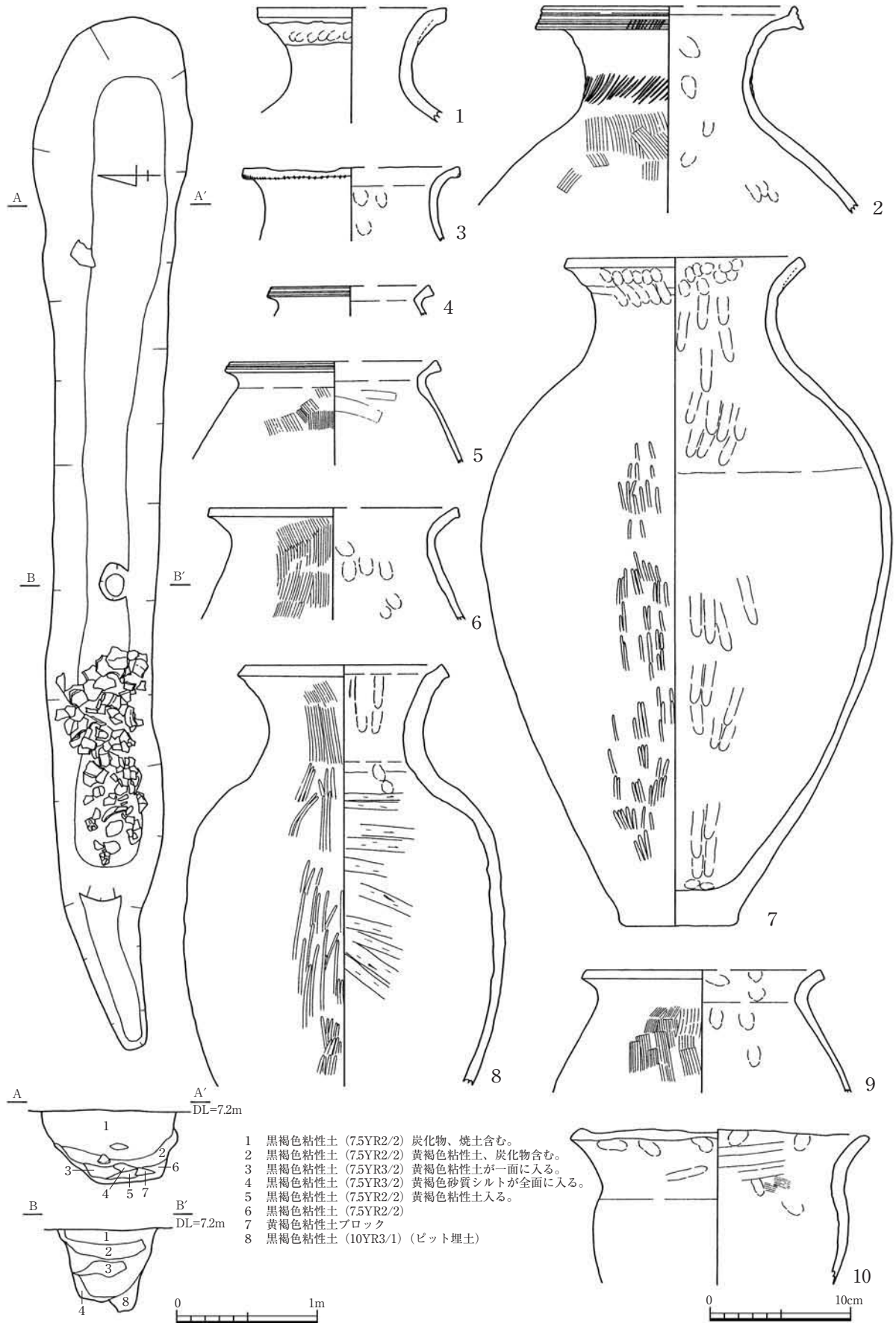
埋土；暗褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

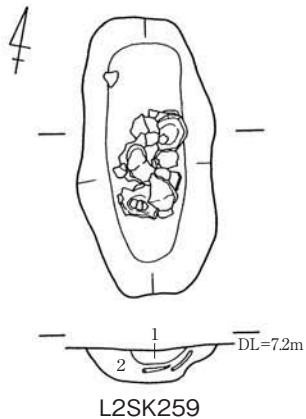
出土遺物；弥生土器(壺)

所見；調査区南方において検出した楕円形を呈する土坑である。SK247の南西部に位置する。断面は皿形を呈し、深さは約23cmと浅い。埋土は褐色シルトを基調とする2層からなり、遺物は2層目の暗褐色シルト層から出土している。

出土遺物は埋土中から壺が出土している。3は口縁部に凹線文を施し胴部には貝殻による圧痕を有するもので、1は貼付口縁を有し、胴部に2本の沈線を施したものである。その他、土器の底部片が数点出土している。

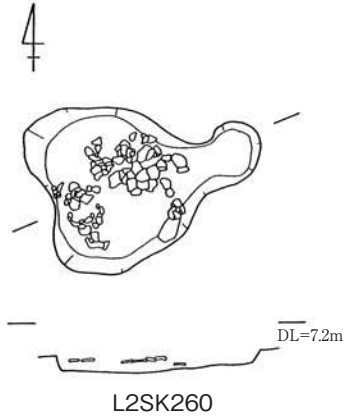


L2-53 図 L2SK253

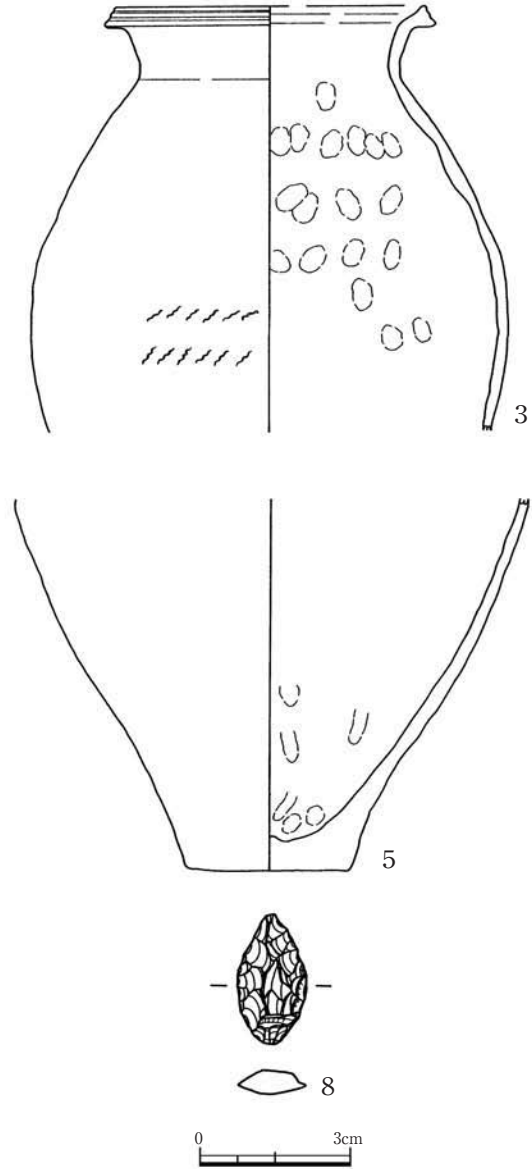
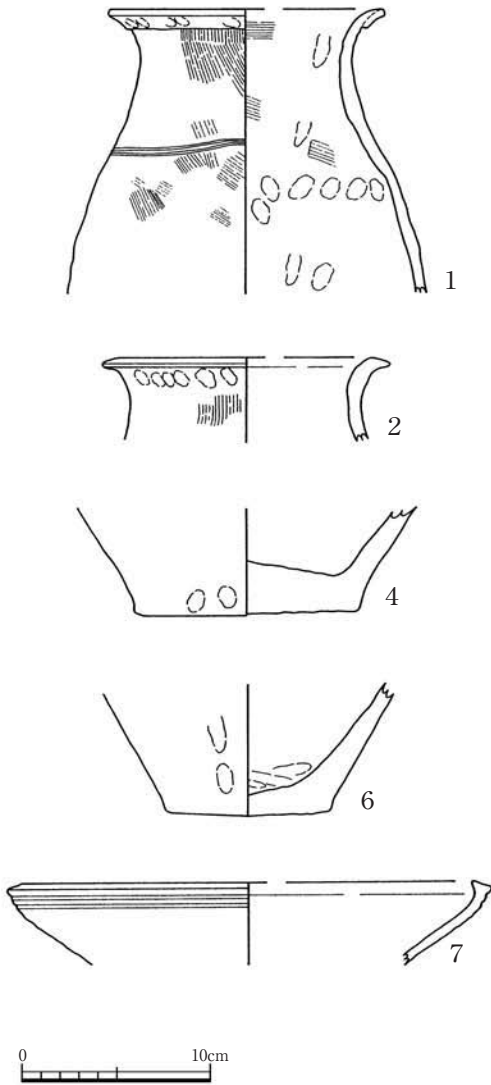
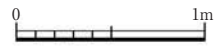


L2SK259

- 1 灰黄褐色シルト (10YR6/2)
- 2 暗褐色シルト (10YR3/3)



L2SK260



L2-54 図 L2SK259・260 (SK259 : 1・3 ~ 5, SK260 : 2・6 ~ 8)

L2SK260(L2-54 図)

時期；弥生IV-2～V-1 形状；不整形 主軸方向；N-12°-W

規模；1.05×0.95m 深さ；11.2cm 断面形態；箱形

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、高杯)、石鏃

所見；調査区の南西部において検出した不整形を呈する土坑である。竪穴住居跡ST226の南西部に位置し、西側には土坑SK255が隣接する。上面が削平されているため堆積土は約11cmと浅い。埋土は黒褐色シルトの単層一層である。

出土遺物では壺と高杯が出土している。壺は2の口縁端部を拡張し、外面にユビオサエが顕著なもので、高杯は7の口縁端部に凹線文の名残を残す杯部である。石器ではサヌカイト製の石鏃が出土している。

L2SK261(L2-55 図)

時期；弥生V-1 形状；溝状 主軸方向；N-7°-W

規模；4.45×1.03m 深さ；48.8cm 断面形態；台形

埋土；黒褐色・暗褐色・褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(甕、壺、高杯、小型鉢)

所見；調査区の中央部西側において検出した溝状を呈する土坑である。大型の住居跡ST214の東側に隣接し、南隣りに位置するST227を切っている。断面は台形状を呈し、埋土は黒褐色から暗褐色シルトの4層であるが、1層目の黒褐色シルトが主体をなす。遺物は1層目の黒褐色シルトから出土している。

出土遺物は床面からは壺(2)、甕(8)、土器の底部が出土している。2は貼付口縁を有する壺で、8は口縁部が外方に屈曲し、凹線文を有する甕である。埋土中からは壺、甕、高杯、小鉢が出土している。壺は3の頸部に凹線文を有する直口壺や1の口縁端部に斜格子文を施すものである。甕は5の凹線文を施し、「く」の字に屈曲するものである。高杯は10の脚部のみが出土している。

L2SK270(L2-56 図)

時期；弥生 形状；円形 主軸方向；N-85°-E

規模；1.0～0×0.87m 深さ；15.9cm 断面形態；皿形

埋土；黒褐色粘性土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺)

所見；調査区の南部において検出した円形を呈する土坑である。SK259の南西に位置し、SK269の西側に隣接する。上面が削平されているために堆積土は約16cmと浅い。埋土は黒褐色粘性土を

基調とする2層で、1層目には炭化物が混じる。

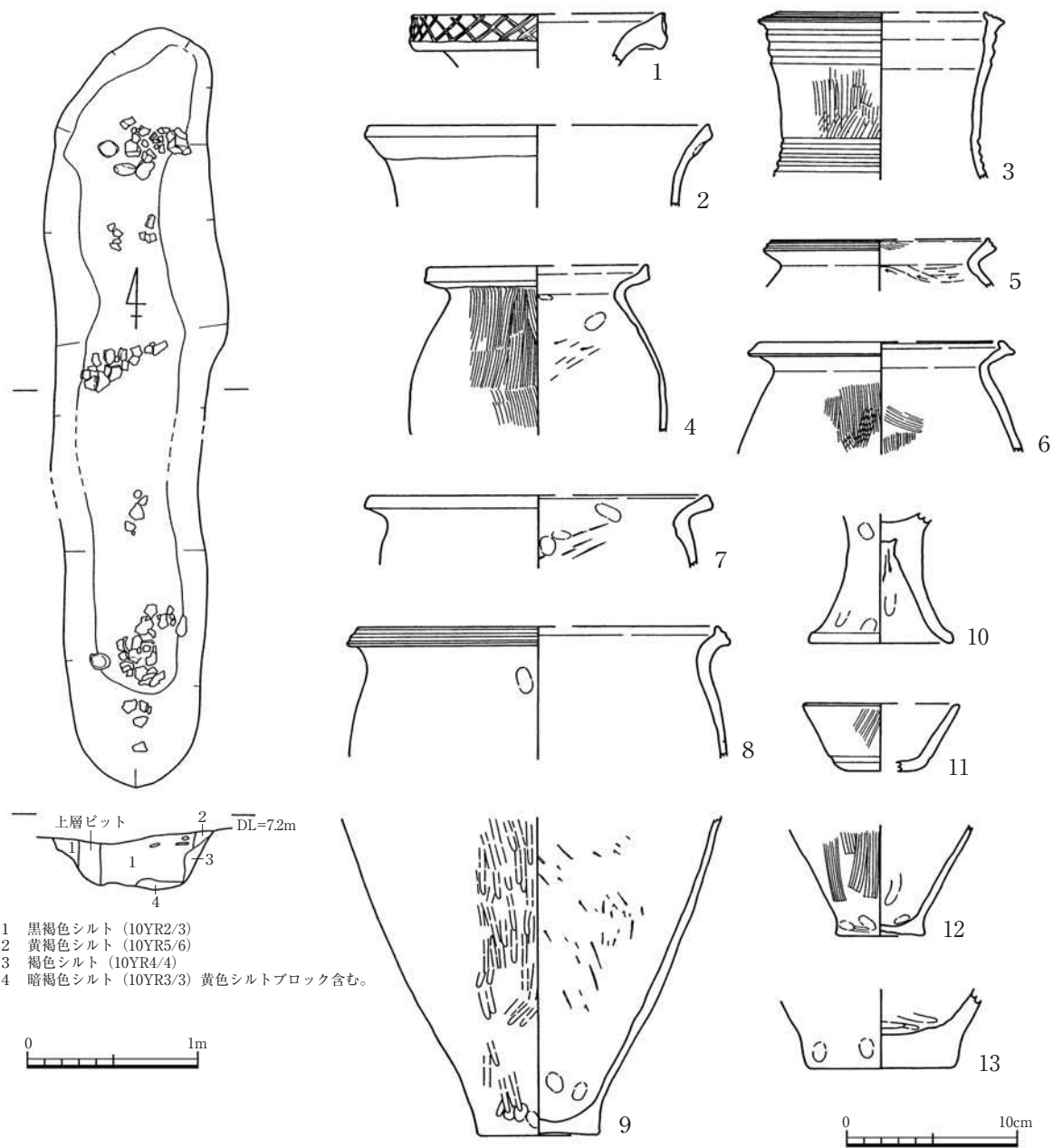
出土遺物は埋土中から壺と土器の底部片が出土している。壺は1の貼付口縁を有するものや2の口縁端部にキザミ目を施し、頸部に櫛描文を施すものである。

L2SK277 (L2-57 図)

時期：弥生IV-2 形状：隅丸方形 主軸方向：N-24°-E

規模：1.86×1.24m 深さ：30.8cm 断面形態：箱形

埋土：黒褐色粘性土



L2-55 図 L2SK261

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(甕、壺)

所見：調査区の中央北側において検出した隅丸方形を呈する土坑である。密集する住居跡群の中に位置し、住居跡ST215に切られ、ST223を切る。大型の住居跡ST201に隣接し、東側にはSK278が並ぶ。断面形態は箱形を呈し、埋土は黒褐色粘性土を基調とする3層からなり、埋土中には黄褐色粘性土がブロック状に混じる。遺構の基底面から遺物が多く出土した。

出土遺物は壺、甕、土器の底部が床面から出土している。壺は1・2である。2は貼付口縁を有し、口縁端部に圧痕による斜格子文、頸部には微隆起帯、紐状の浮文を貼付するもので、1は貼付口縁を有し、口縁端部に凹線文を有するものである。3は甕で、口縁端部は平面をなし、長胴を呈するものである。また石器ではサヌカイトのスクレイパーが出土している。

L2SK278(L2-58・59 図)

時期：弥生IV-2 形状：隅丸方形 主軸方向：N-7°-W

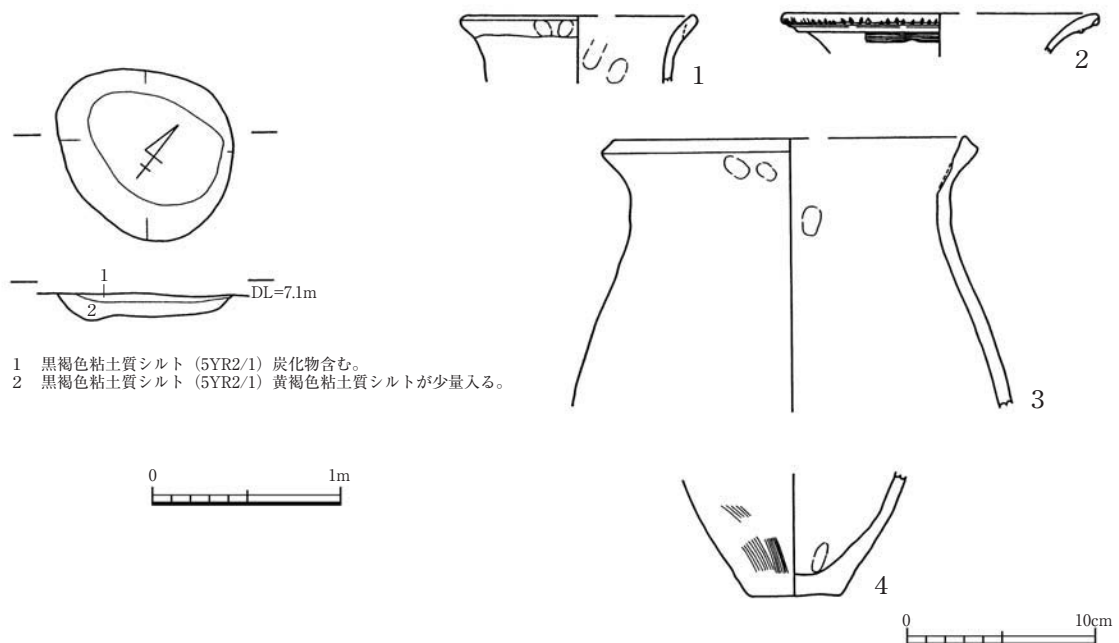
規模：1.8×0.94m 深さ：50.35cm 断面形態：箱形

埋土：黒褐色シルト

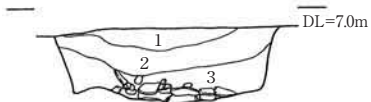
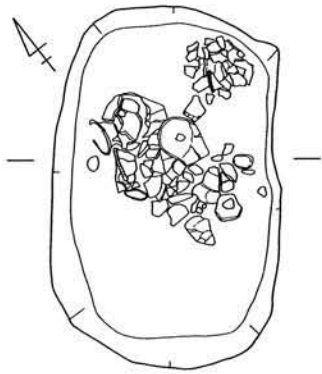
付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(甕、壺、鉢、高杯)、サヌカイト剥片

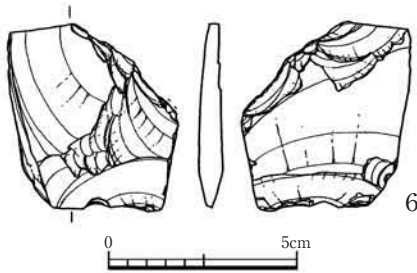
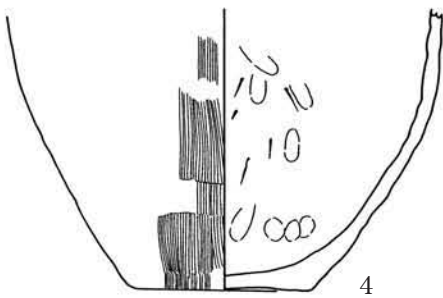
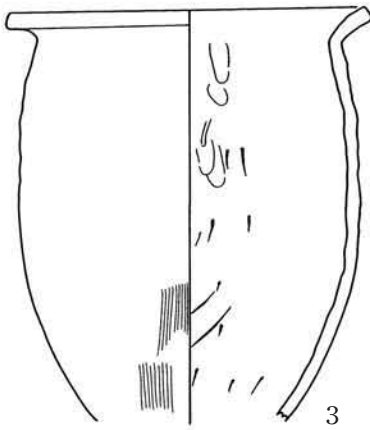
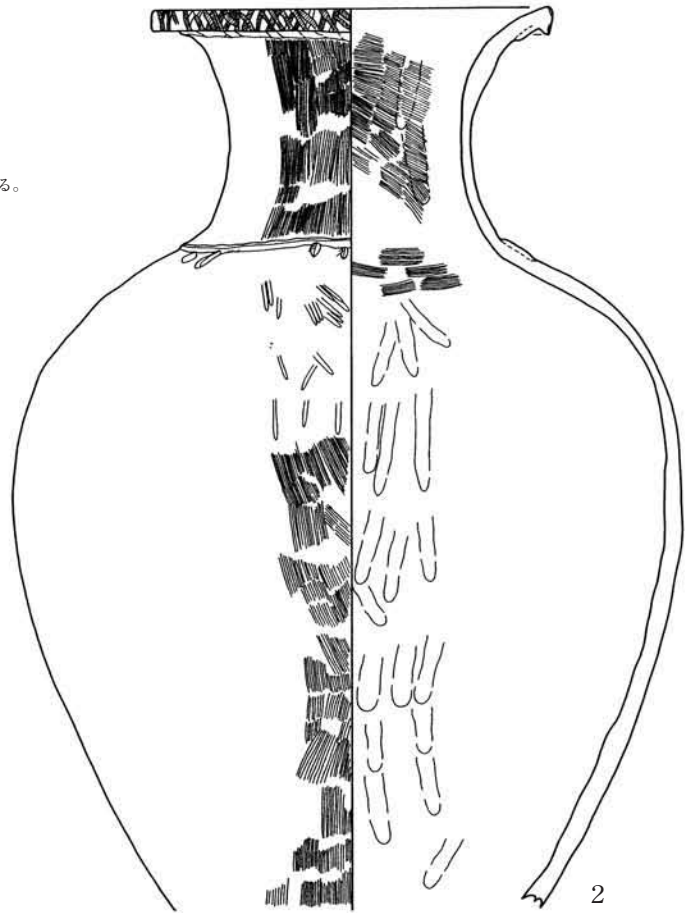
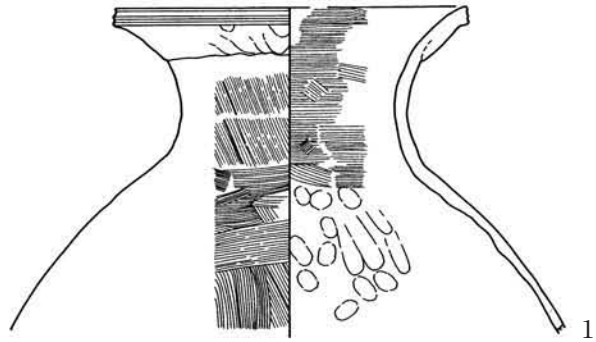
所見：調査区中央部北側において検出した隅丸方形の土坑である。住居跡等の遺構の密集地に位置し、住居跡ST201によって切られる。遺構の西側には土坑SK278が並行し、住居跡ST223を切る。断面形態は箱形で深さ約50cmを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする2層からなり、埋土中には黄褐色シルトがブロック状に混じる。遺物は2層目から床面にかけて多量に出土している。



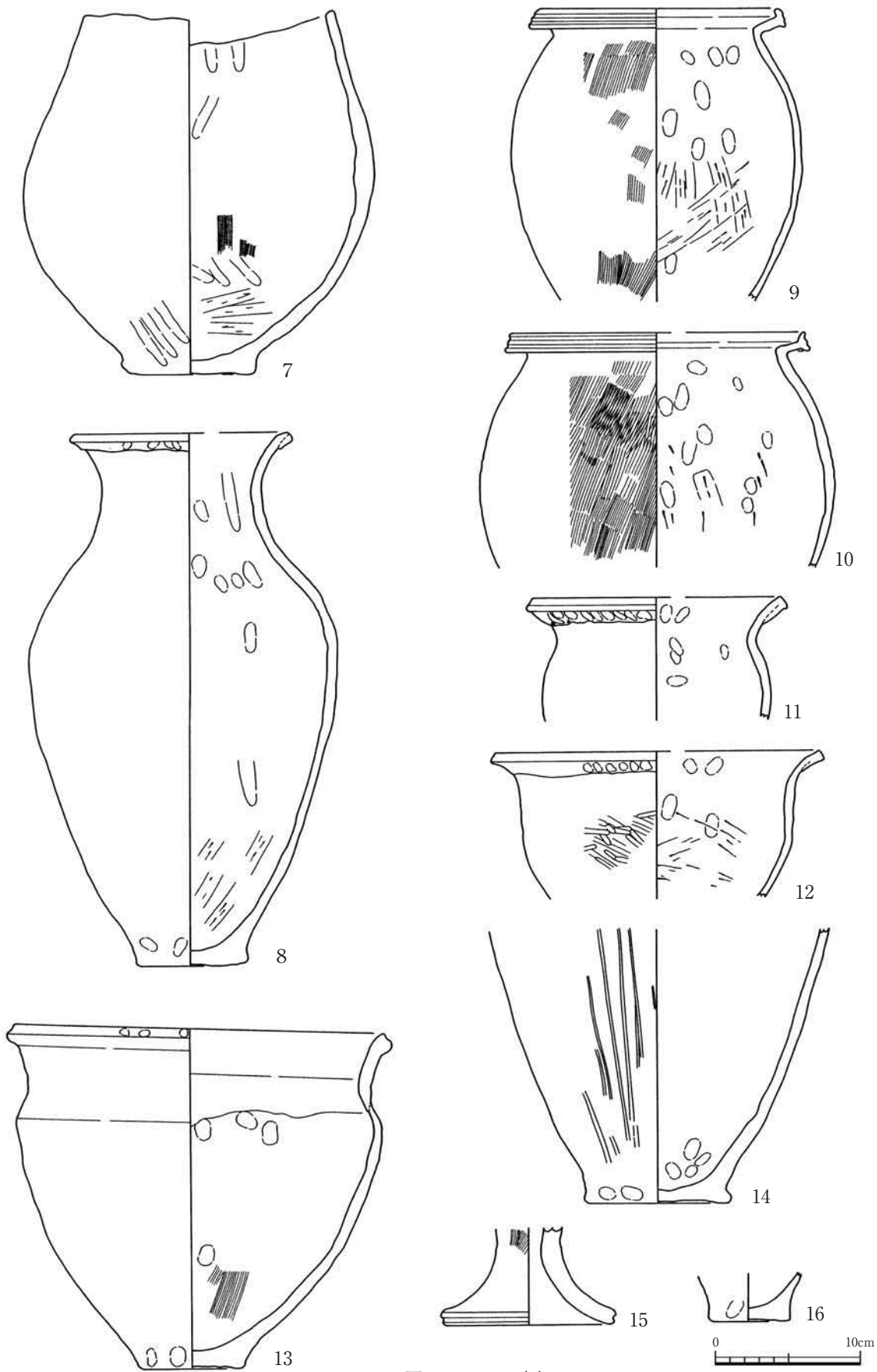
L2-56 図 L2SK270



- 1 黒褐色粘性土 (5YR2/2) 黄褐色粘性土含む。
- 2 黒褐色粘性土 (5YR2/2) 黄褐色粘性土が少し入る。
- 3 黒褐色粘性土 (5YR2/2) 黄褐色粘性土ブロックが多く入る。



L2-57 図 L2SK277



L2-59 图 L2SK278(2)

出土遺物は床面から壺、甕、高杯、鉢が出土している。1～8は壺である。1・2・5・8は貼付口縁を有するものである。3は口縁部に凹線文を施し、胴部に綾杉の列点文を有し、6は長頸壺で頸部に櫛描文・楕円浮文・胴部に列点文を施すものである。9～11・13は甕である。9・10は口縁部を上下に拡張し、凹線文を施すものである。他には15の高杯の脚部、12の貼付口縁を有する鉢、7の無頸壺が出土している。また、13の甕は鉢の形態の影響を受けていると思われる。

(4) 溝跡

本調査区では11条の溝を検出した。調査区を走るような長い溝ではなく、その殆どは溝状を呈する土坑に類する。SD208は竪穴住居跡に付随すると思われる遺構である。

L2-9表 L2区弥生溝跡一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	接続	時期	備考
L2SD202	4.2×0.4×0.35		U字状	N-13°-E			調査区外に続く
L2SD203	12.8×[1.0]×0.22		—	—			L4区に続く
L2SD204	1.5×0.5×0.49		U字状	N-0°			調査区外に続く
L2SD206	7.45×0.58×[0.14~0.44]		U字状	N-69°-E		弥生V-1	溝状土坑か
L2SD207	3.74×0.55×0.32		逆台形	N-3°-W		弥生IV-2	溝状土坑か
L2SD208	5.0×0.95×[0.08~0.22]		逆台形	N-87°-W		弥生IV-2~V-1	溝状土坑か
L2SD209	4.4×0.5×0.18		皿状	N-65°-E			溝状土坑か
L2SD210	4.2×[0.7]×0.097		皿状	N-63°-E			
L2SD211	4.0×0.5×0.25		逆台形	N-80°-E			溝状土坑か

L2SD206(L2-60 図)

時期：弥生V-1 方向：N-69°-E

規模：7.45×0.58m 深さ：14～44cm 断面形態：U字状

埋土：黒褐色シルト

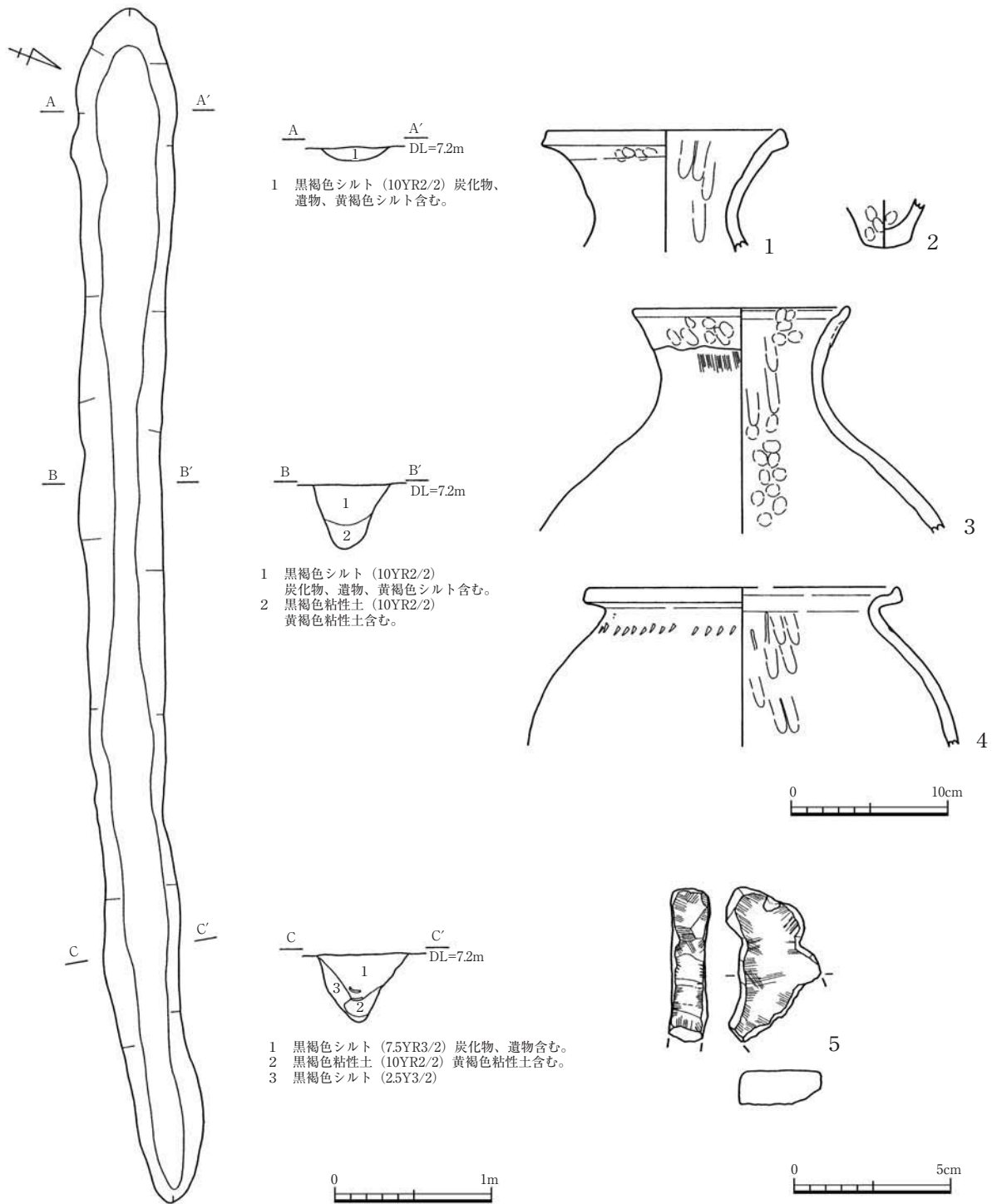
床面標高：6.806m

接続：—

出土遺物：弥生土器(甕、壺、手捏ね土器)、不明石器

所見：調査区の中央部、北方において検出した全長約7.5mを測る溝状の土坑である。同じく中央部北方に位置する大型掘立柱建物跡SB203・204に隣接する。遺構はこのSB203・204を切る。断面はU字状を呈し、深さは遺構の西端では約14cm、中央部から東端にかけては約44cmを測り、東端にかけて深くなっている。埋土は黒褐色シルトを基調とする2～3層で、第1層目から遺物が出土している。大型の掘立柱建物跡SB203に付随する遺構の可能性が考えられる。

出土遺物では壺、甕、手捏ね土器が出土している。1・3は壺で、貼付口縁を有している。その内3はユビオサエが顕著である。4は甕である。「く」の字状に大きく屈曲し、口縁部を上方に拡張するもので上胴部に列点文を施し、内面ユビナデが残る。その他、砂岩製の用途不明である石器(5)が出土している。



L2-60 図 L2SD206

L2SD207 (L2-61 図)

時期：弥生IV-2 方向：N-3°-W

規模：3.74×0.55m 深さ：32cm 断面形態：逆台形

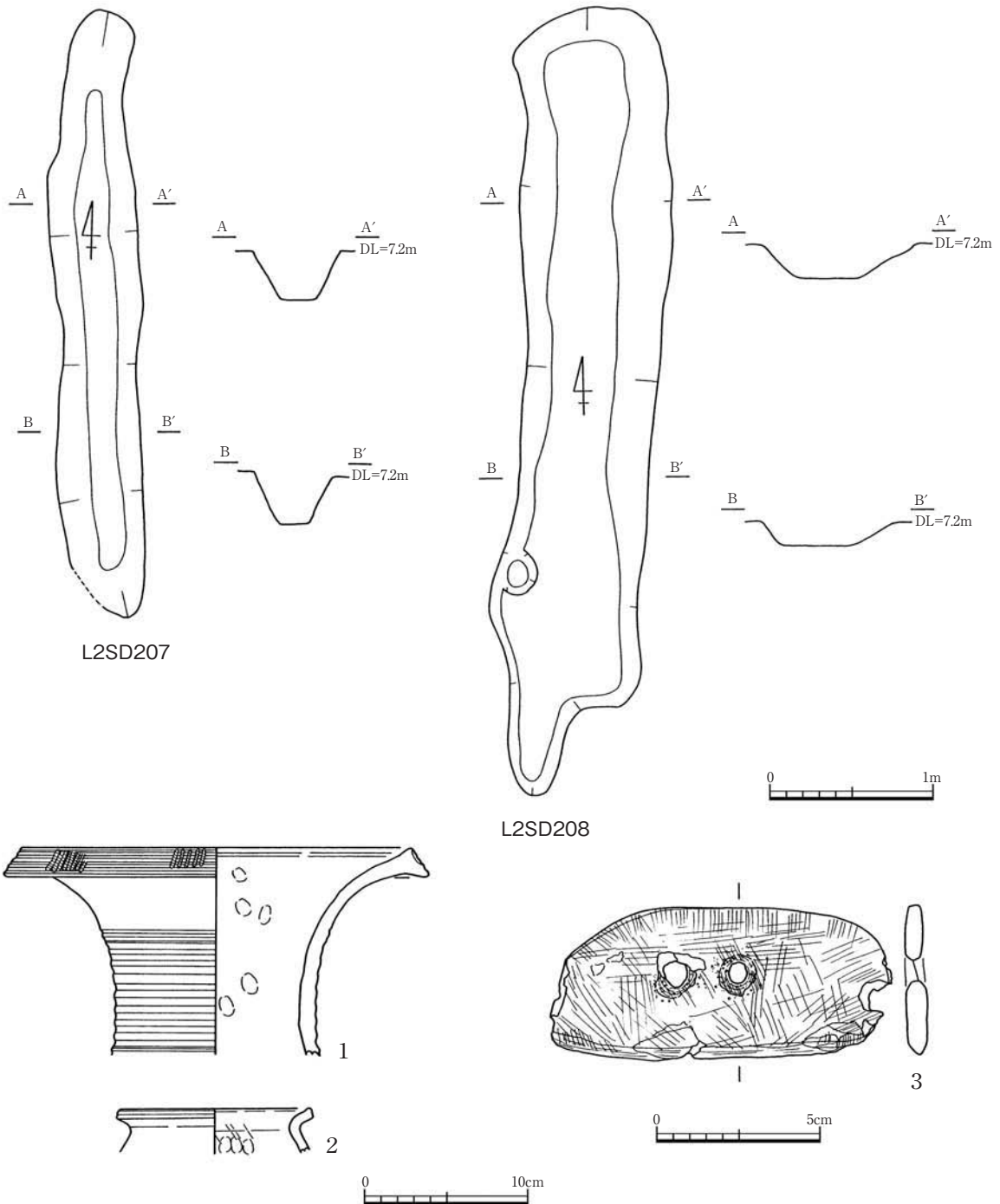
埋土：黒褐色シルト

床面標高：6.784m

接続：—

出土遺物：弥生土器(壺)

所見：調査区中央部、北側において検出した全長約3.7mの溝状の土坑である。密集する住居跡群の北西に隣接する。遺構の断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色シルトを基調とする2層である。埋土中には黄褐色シルトがブロック状に混じる。出土遺物は床面から1の頸部に凹線文、口縁部に圧痕を施す紐状の貼付を有する壺の口縁部が出土している。



L2-61 図 L2SD207・208(SD207 : 1, SD208 : 2・3)

L2SD208(L2-61 図)

時期：弥生IV-2～V-1 方向：N-87°-W

規模：5.0×0.95m 深さ：8～22cm 断面形態：逆台形

埋土：黒褐色シルト

床面標高：6.382m

接続：—

出土遺物：弥生土器(甕)、石包丁

所見：調査区中央部、やや南東側より検出した全長5mを測る溝状の土坑である。住居跡ST220の東隣りに位置しており、住居跡に付随する遺構の可能性が考えられる。遺構の東側では掘立柱建物跡SB214とSK253が検出された。断面は逆台形状を呈し、深さ8～22cmと浅い。埋土は黒褐色シルトを基調とする2層からなる。

出土遺物は細片が殆どであったが、床面からは2の口縁部に凹線文を施す小型の甕が出土している。

(5) ピット

L2区では800個のピットを確認した。ここではP2043について詳細を述べる。

L2P2043(L2-1 図)

時期：弥生 主軸方向：—

規模：0.54×0.40m以上 深さ：20cm 断面形態：皿状

埋土：黒褐色粘性土

出土遺物：イノシシの下顎骨

所見：調査区中央部北端において検出した。住居跡ST202に切られ、遺構の北側は調査区外のため不明である。埋土は黒褐色粘質土の単層で、イノシシの下顎骨が出土している。

3. L2 区中世の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

L2 区では調査区の中央部で 2 棟、西部において 1 棟の掘立柱建物跡を検出した。東側に隣接する L1 区、北側の K2 区、東側に隣接する Q2 区でも中世の掘立柱建物跡等の遺構が検出されており、中でも K2 区では屋敷の区画溝と考えられる溝跡と井戸跡を検出している。これらの遺構の検出状況から考えて、周辺において屋敷群が形成されていた可能性が考えられる。

L2-10 表 L2 区中世掘立柱建物跡一覧

遺構名	梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	柱間寸法 梁間×桁行(m)	主軸方向	付属遺構	時期	備考
L2SB205	2(3)×4	5.2×7.92	[1.28~2.48]×[1.36~2.88]	N-80°-W	SA1・2	中世前期	庇付き
L2SB206	2×4	3.35×3.75~4.0	[1.55~1.75]×[1.25~1.4]	N-78°-E		中世	
L2SB217	2×3	3.92×7.60	[1.28~2.64]×[2.0~2.96]	N-26°-E		15世紀前半	

L2SB205(L2-62 図)

時期；中世前期 棟方向；N-80°-W

規模；梁間 2(3)間×桁行 4 間(庇付き) 梁間 5.2m×桁行 7.92m 面積；41.18㎡

柱間寸法；梁間 1.28 ~ 2.48m 桁行 1.36 ~ 2.88m

柱穴数；17 柱穴形；円形、楕円形

性格；— 付属施設；SA1・SA2

出土遺物；須恵器

所見；調査区中央部、東隅において検出した。梁間 3 間、桁行 4 間を呈する東西棟の総柱建物である。建物の東西両端には半間の庇が付き、西側は SB217 と重なる。北側の梁間の中間にはピットが確認できている。また南側と北東部において建物に付随する柵列を検出した。北東部の柵列(SA2)は建物の北東隅を囲うような逆L状を呈している。ピットの掘方は径 30 ~ 60cm を測る円形から楕円形を呈する。ピットの深さは 10 ~ 55cm を測り、ばらつきがみられる。また埋土は灰黄褐色の単一層である。

出土遺物は細片が多く図示できるものはなかったが、ピットから須恵器の甕の胴部が多く出土している。出土遺物からは SB217 に先行する時期が考えられる。

L2SB206(L2-63 図)

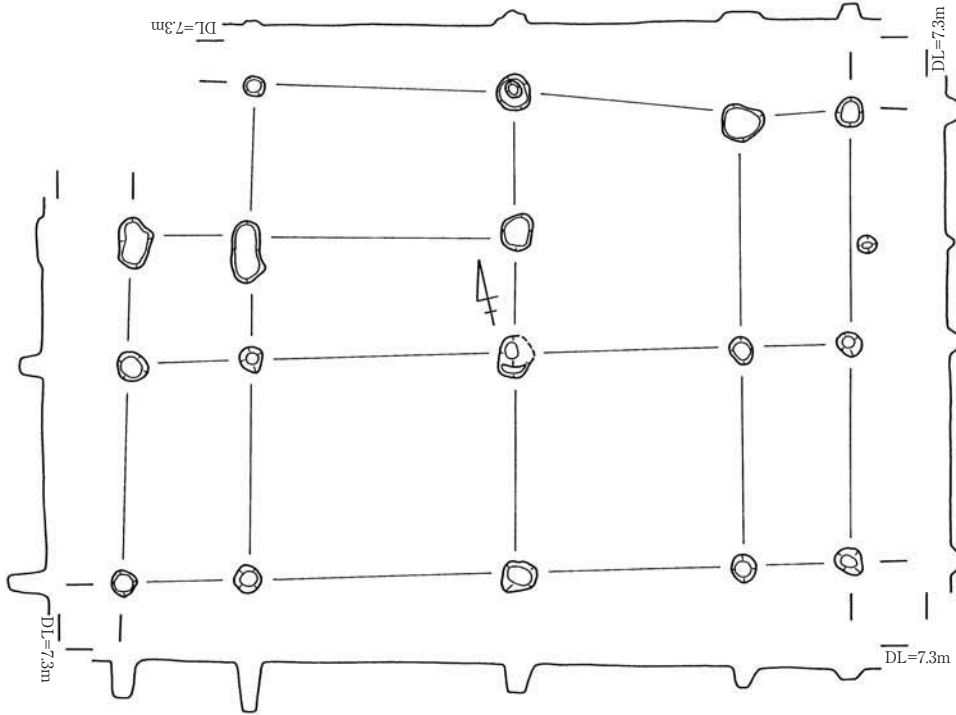
時期；中世 棟方向；N-78°-E

規模；梁間 2 間×桁行 4 間 梁間 3.35m×桁行 3.75 ~ 4.0m 面積；13.4㎡

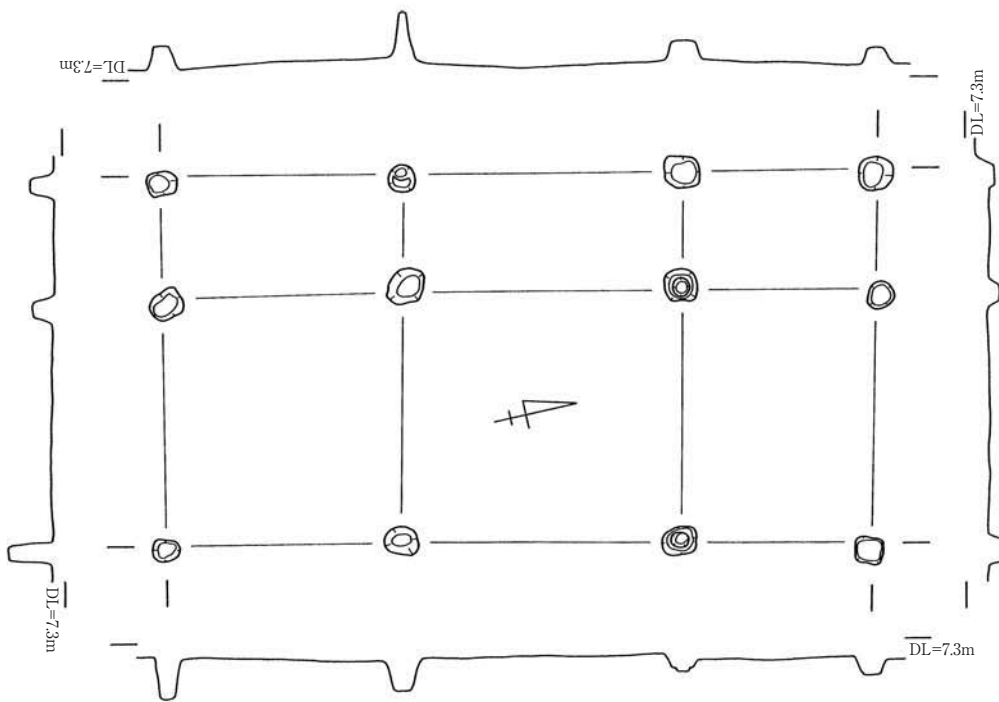
柱間寸法；梁間 1.55 ~ 1.75m 桁行 1.25 ~ 1.4m

柱穴数；15 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—



L2SB205



L2SB217



L2-62 ☒ L2SB205 · 217

出土遺物；土師質土器

所見；調査区の西部により検出した梁間 2 間、桁行 4 間を呈する東西棟の総柱建物である。東隣に位置するST213 を切る。柱穴の掘方は直径 20～40cmを測る円形から楕円形を呈する。柱穴の深さは 20～60cmを測り、ややばらつきがみられる。埋土は黒褐色シルトの単純一層である。南側には 4 個の柱穴からなる庇が確認できた。

出土遺物は細片のみであり、図示できるものはなかった。

L2SB217(L2-62 図)

時期；中世 棟方向；N-26°-E

規模；梁間 2 間×桁行 3 間(庇付き) 梁間 3.92m×桁行 7.60m 面積；29.79m²

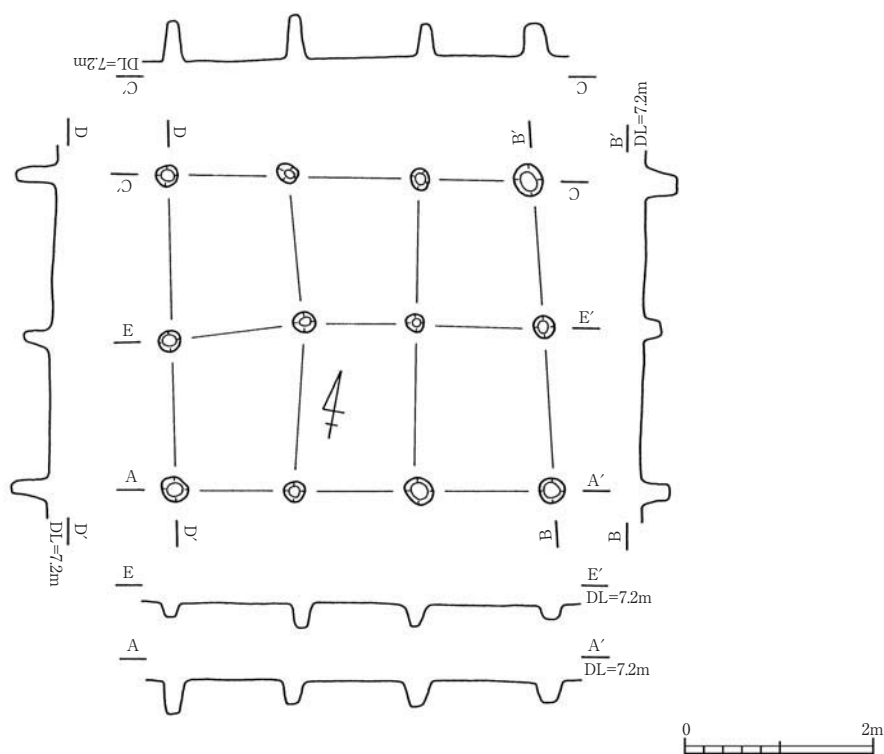
柱間寸法；梁間 1.28～2.64m 桁行 2.0～2.96m

柱穴数；12 柱穴形；円形、不定形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；土師質土器、須恵器、瓦質土器

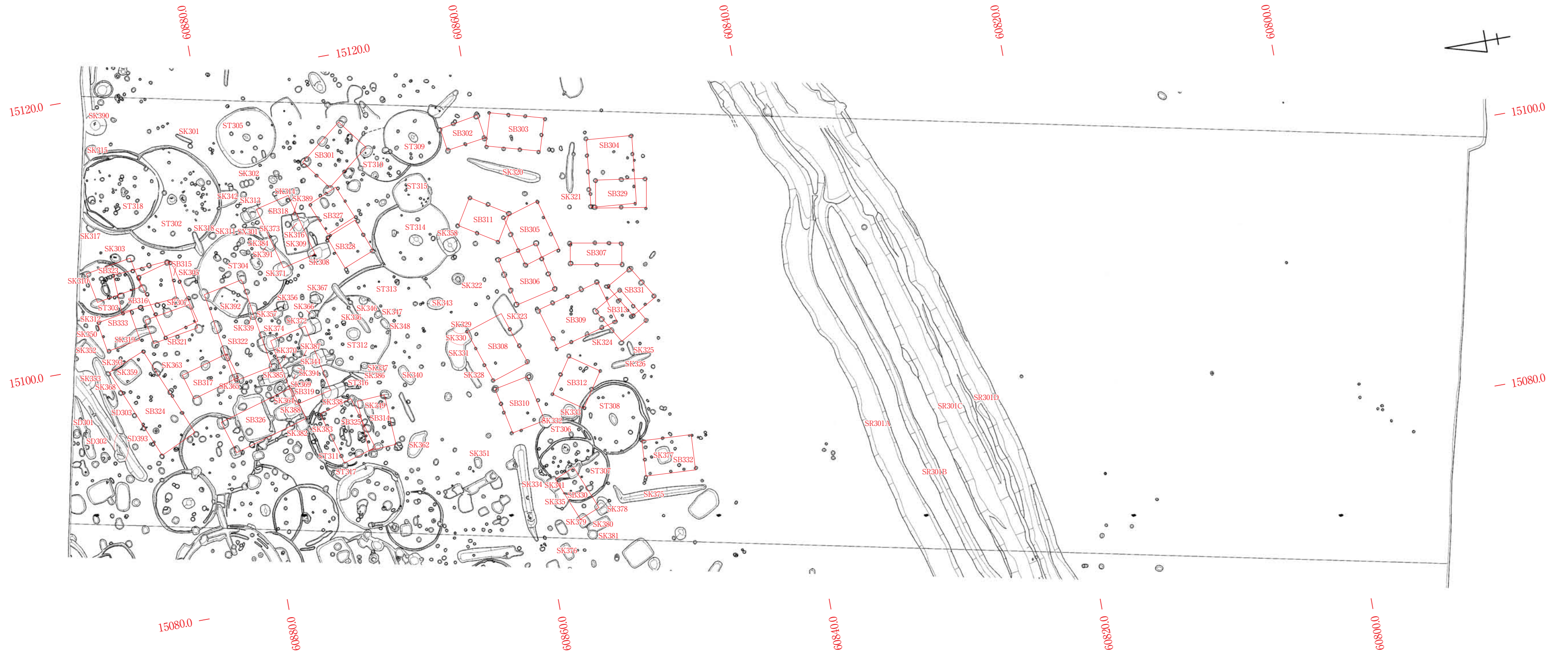
所見；調査区の中央部東隅の上面において検出した。梁間 1 間、桁行 3 間を呈する南北棟の掘立柱建物である。建物の南側には半間分の庇が付く。掘方は径が 25～35cmを測る円形から不定形を呈し、ピットの深さは 16～44cmとややばらつきがある。P7とP11には径が約 20cmを測る柱痕が残る。埋土は単層の灰黄褐色土である。出土遺物では土師器、須恵器、瓦質土器の鍋がみられるが、細片であるため図示できるものはなかった。瓦質土器の鍋は在地のもので、15 世紀前半の時期が考えられるものである。



L2-63 図 L2SB206

L3 区の調査





L3-1図 L3区遺構全体配置図(S=1/250)

1. L3 区の概要

概要

L3 区は今回の調査範囲の中では南側に位置する調査区である。東側をL1 区、西側をL2 区に接している。

L3 区は調査区を北東方向から南西方向へ横切るSR301を境に北側と南側では大きく様相が異なっている。北側では弥生時代の遺構が集中しており、南側では弥生時代の遺構はほとんど存在しない。

北側で検出した遺構は住居跡 17 軒、掘立柱建物跡 33 棟、土坑 91 基を数え遺構の密度は高く、最も切り合いの多い住居跡では 3 軒の住居跡が切り合っている。

注目される遺構として大型掘立柱建物跡をあげることができる。柱穴の規模が 1m×2m程で柱痕は直径約 40cmが確認できており、並んだ状態で 2 棟確認している。

遺構の時期は弥生III期～V期半ばまでと考えられ、連綿と遺構が営まれたと考えられる。

弥生時代以降の遺構としてSB320 があげられ中世の可能性が考えられる。

調査担当者 坂本憲昭、三橋麻里

執筆担当者 坂本憲昭

調査期間 平成 10 年 8 月～平成 11 年 3 月

調査面積 3730㎡

時代 弥生時代、古代～中世

検出遺構 弥生時代 竪穴住居跡 17 軒 掘立柱建物跡 33 棟 土坑 91 基 溝跡 3 条
流路跡 1 条
古代～中世 掘立柱建物跡 1 棟

2. L3 区の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

L3 区で検出した竪穴住居跡は 17 軒であった。単独の住居跡として検出したものは ST303 ～ 305 で他の住居跡は 2 軒以上が切り合っており 3 軒が切り合ったものもあった。また拡張の可能性が考えられる住居跡も ST301・307 の 2 軒を確認している。L3 区は遺構が密集しており住居跡以外の遺構とは ST305 を除いて全ての住居跡に切り合いがみられる。

住居跡の平面形は ST315 を除いて全て円形で直径は 4.2 ～ 8.8m を測る。遺構の残存状況は最も良好な ST302 で約 35cm が残存しており、ST313・316・317 のようにわずかに壁溝と中央ピットのみが検出できた残存の不良な住居跡もある。

遺構の構造は、ST315 を除いて中央部にピットを有し、その多くに炭化物が入っている。壁溝は ST315・305 を除いて全ての住居跡から検出している。柱構造は規模の大きなものは円周を巡るようにピットが検出できたものが多く、規模の小さなものは 5 ～ 6 角形に配されると考えられる。

住居跡の時期は埋土の残存が不良であるため時期確定が困難であるものが多いが III 期後半～IV 期、IV 期末～V 期初頭、V 期前半～V 期半ばまでの 3 時期に分けることができ、III 期の住居跡は散漫な状況で営まれ、IV 期～V 期前半までは連綿と続くがその中心は V 期前半にあると考えられる。

L3-1 表 L3 区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(m ²)	平面形	主軸方向	時期	備考
L3ST301	[5.7]×5.7 [6.4]×6.4	0.2	[26] [32]	円形	N-82°-W	V2～3	—
L3ST302	[7.5]×7.5	0.35	[44]	円形	N-79°-W	V1	—
L3ST303	[4.3]×4.3	0.2	[15]	円形	N-79°-E	V前半	—
L3ST304	6.7×6.3	0.2	[33]	円形	N-77°-E	V1	—
L3ST305	4.4×4.4	0.2	15	円形	N-52°-E	V前半	—
L3ST306	4.5×4.4	0.2	15	円形	N-78°-W	III～IV1	—
L3ST307	4.9×4.7	0.16	17	円形	N-49°-W	III～IV1	—
L3ST308	5.4×5.1	0.08	22	円形	N-78°-E	III～IV1	—
L3ST309	4.3×4.3	0.2	15	円形	N-64°-E	V3～5	—
L3ST310	4.2×[2.4]	0.05	[14]	円形	N-21°-W	V3～5	—
L3ST311	4.9×5.4	0.03	[21]	円形	N-86°-W	III～IV2	—
L3ST312	5.8×5.8	0.3	26	円形	N-15°-E	V1～3	—
L3ST313	[8.8]×[8.8]	—	[61]	円形	N-60°-W	III～IV2	—
L3ST314	5.9×5.9	0.1	25	円形	N-29°-E	V3～4	—
L3ST315	2.7×2.7	0.3	7.3	隅丸方形	N-14°-W	IV2～V1	—
L3ST316	[6.0]×[6.0]	—	[28]	円形	N-75°-E	—	—
L3ST317	[4.8]×[4.8]	—	[18]	円形	N-35°-W	V以前	—

ST301 (L3-2・3 図)

時期：弥生V-2～3 形状：円形 主軸方向：N-82°-W

規模：(5.7)m×5.7m 深さ：0.2m 面積：(26)m²

：(6.4)m×6.4m 深さ：0.2m 面積：(32)m²

埋土；暗灰褐色シルト

；暗灰褐色シルト(黄褐色シルト多く混じる)

ピット；数 19 主柱穴数；4 主柱穴；P2・4～6

床面；2面 貼床；1 焼失；有

中央ピット；形状 楕円形 規模 89cm×40cm 深さ 20cm 埋土 暗灰褐色シルト

壁溝；数 2 壁溝 1 幅 6cm 深さ 4cm

壁溝 2 幅 5cm 深さ 1cm

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯) 石器(磨製石鏃、石錘) 鉄器(鉄鏃、板状鉄斧)

ガラス小玉

所見；調査区北部、ST302を切った状態で検出。床面は、ST301の方がやや深く、完掘状況ではST302の内側に壁溝がわずかに残る。

床面は2段になっており、深い方が前に作られた住居で、後に床を貼り拡張されたと考えられる。2次住居の床面からは柱穴は検出できず、1次住居の地山掘込み面で柱穴が19個検出されているが、ST302に属するものも含まれている。P3はST302の柱穴と考えられる。ST301で柱穴となると推定されるピットは9個確認しているが、柱構造は4本柱を基本とするものと考えられる。壁溝は、一部2重になっており、拡張された状況をあらわしている。

埋土中からは遺物は比較的多く出土するが、完形のは小型の甕17のみで、細片が多い。また、ほとんどが、2次住居に伴うものであり、埋没時期をあらわしているものと考えられる。出土した甕には凹線文がほとんど見られず、素口縁ものが大半を占める。高杯は杯口縁部が外反しており、脚部は裾端部を拡張せず、裾部に直径1cmほどの円孔が施されたものが出土している。石器では、有溝石錘1点、石鏃1点が出土しており、ガラス小玉も2点出土している。その他、鉄器2点が出土している。また、埋土中からは炭化材が出土している。

これらのことから、この住居跡は、V2期～V3期に埋没したと考えられ、炭化材は、住居跡の廃棄に関係している可能性が考えられる。

ST302(L3-4 図)

時期；弥生V-1 形状；円形 主軸方向；N-79°-W

規模；(7.5)m×7.5m 深さ；0.35m 面積；(44)m²

埋土；暗褐色シルト

ピット；数 28 主柱穴数；9 主柱穴；P4・5・9～14、ST301-P3

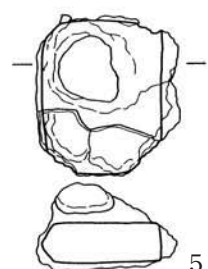
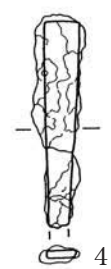
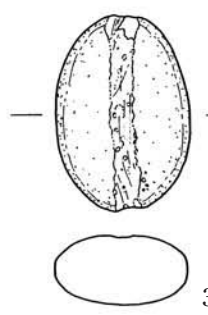
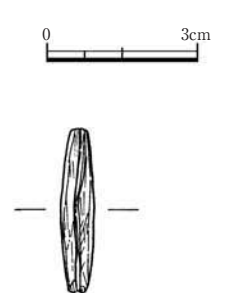
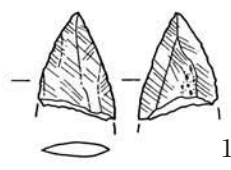
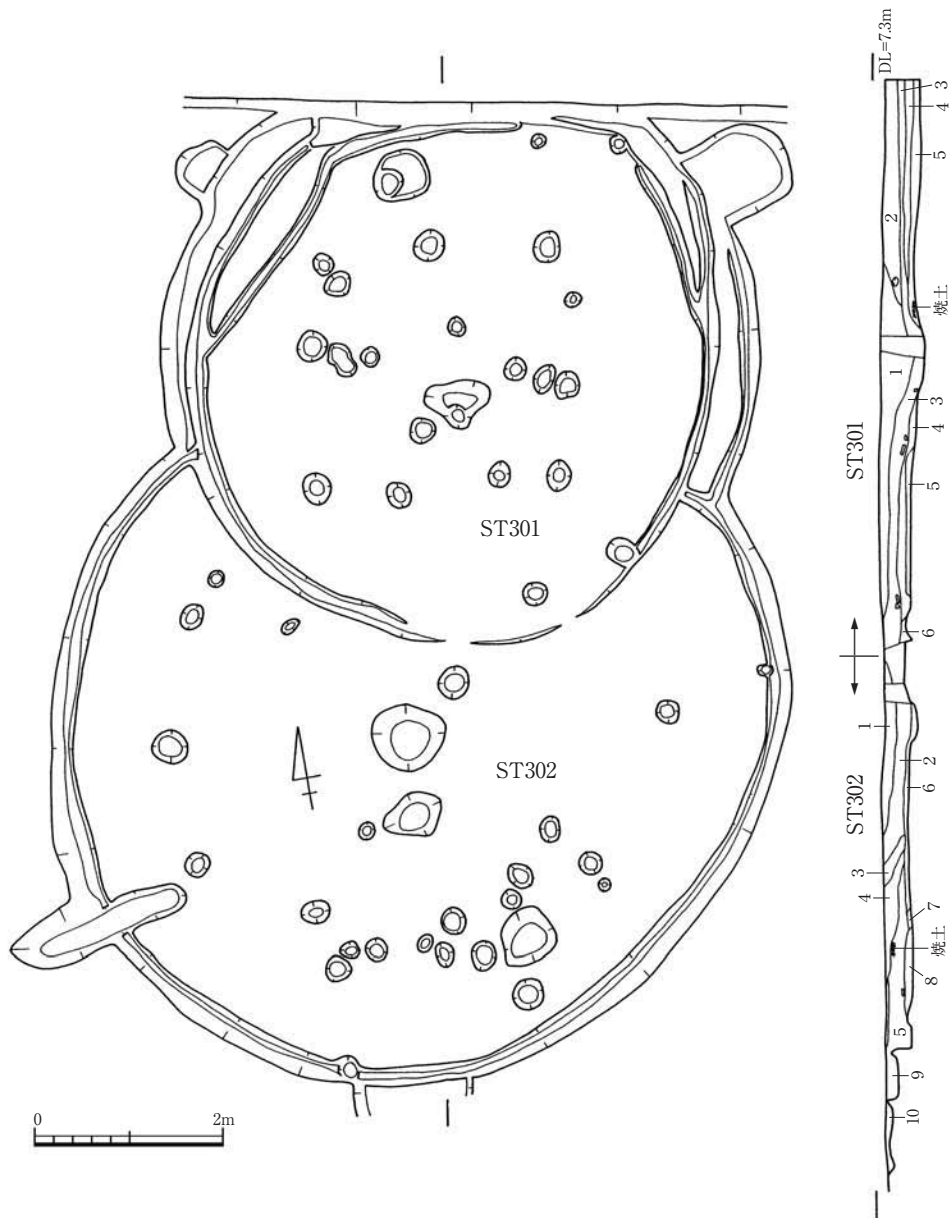
床面；1面 貼床；1 焼失；—

中央ピット；形状 楕円形 規模 75cm×70cm 深さ 10cm 埋土 暗灰褐色シルト

壁溝；数 1 幅 10cm 深さ 5cm

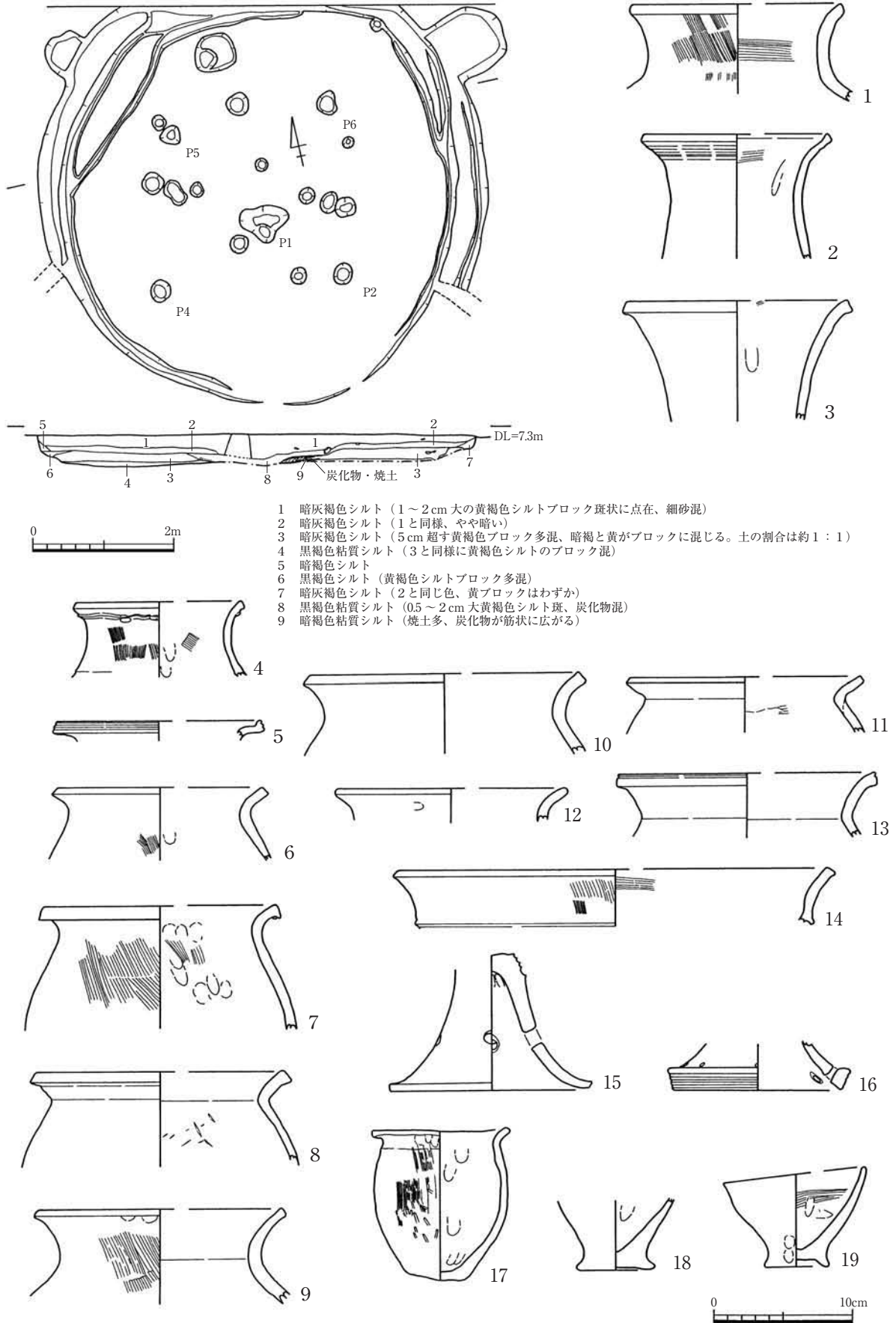
出土遺物；弥生土器(壺、甕) 鉄器(鉄鏃)

所見；ST301に切られた状態で検出した。直径約7.5mとやや大型の竪穴住居跡である。拡張した痕跡はなく単一時期の住居跡と考えられる。



- ST302
- 1 暗褐色シルト (黒褐色粘質シルト・黄褐色シルトが混に混)
 - 2 暗褐色シルト (0.5~5cm 大の黄褐色シルトブロック多混、炭化物点在)
 - 3 暗灰褐色シルト (黄褐色シルト少混、炭化物点在、細砂混)
 - 4 暗灰褐色シルト (3とはほぼ同じ、灰色少し弱い、黄褐色シルト少し多い、土器片少あり)
 - 5 暗褐色シルト (黄褐色シルトブロック少混、炭化物少あり、土器片少あり)
 - 6 暗褐色シルト (炭化物の広がりに)
 - 7 暗灰褐色粘質シルト (1~2cm 大の黄褐色シルトの互層)
 - 8 暗褐色シルト
 - 9 暗褐色シルト
 - 10 黄灰シルト (暗褐色シルト少混)
- ST301
- 1 ST301 東西バンク南壁 1 と同じ (中央ピットより南は細砂多、中砂も混)
 - 2 暗褐色シルト (0.5~3cm 大の黄褐色シルト多混)
 - 3 ST301 東西バンク南壁 8 (細砂混、炭化物多筋状に広がる)
 - 4 3 と同様 (3 より暗い、炭化物筋状に広がる)
 - 5 黒褐色シルト (黄褐色シルトブロック混、互層になる、細砂混)
 - 6 暗褐色シルト (0.5cm 大の黄褐色シルト混)

L3-2 図 L3ST301・302

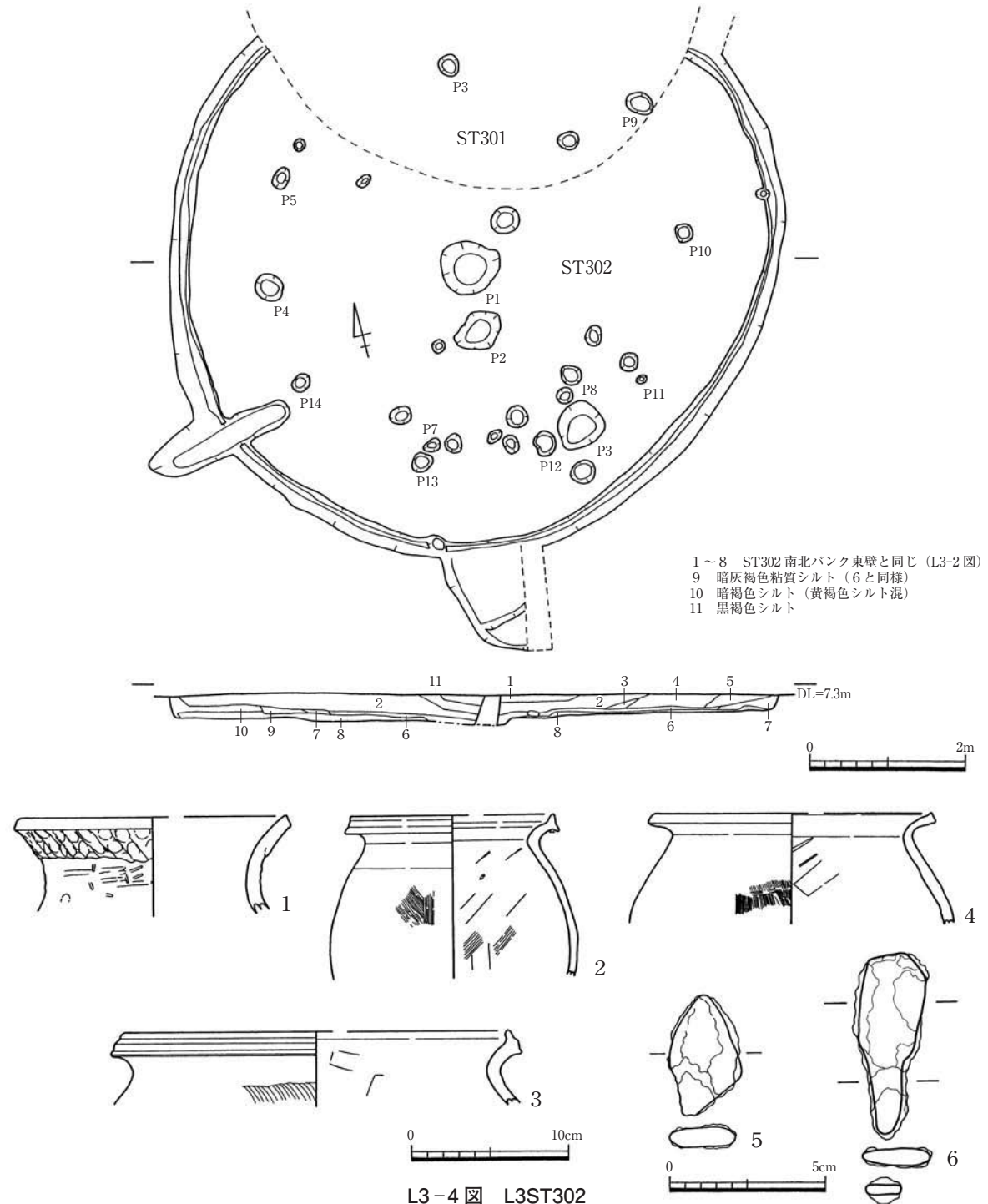


L3-3 図 L3ST301

床面からは、壁溝、中央ピットを検出した。柱穴は28個を検出している。ピットは9個が主柱穴の可能性があり、柱構造は、壁面に沿うように巡るものであったと考えられる。

埋土中からの遺物出土は少なく、図示できるものも少ない。図示できるものでは、しっかりした頸部を持つ貼付口縁の壺、頸部状の部分を持つ在地色の強い甕、凹線文系の鉢など、IV期の特徴を持つものが出土するが、口縁部直下までケズリが施された凹線文甕が出土している。鉄鏃1点と鉄片2点が出土している。

住居跡の時期は、V期初頭と考えられる。



ST303 (L3-5 図)

時期：弥生V前半 形状：円形 主軸方向：N-79°-E

規模：(4.3)m×4.3m 深さ：0.2m 面積：(15)m²

埋土：暗灰褐色シルト

ピット：数 20 主柱穴数：2 主柱穴：P2・3

床面：1面 貼床：— 焼失：—

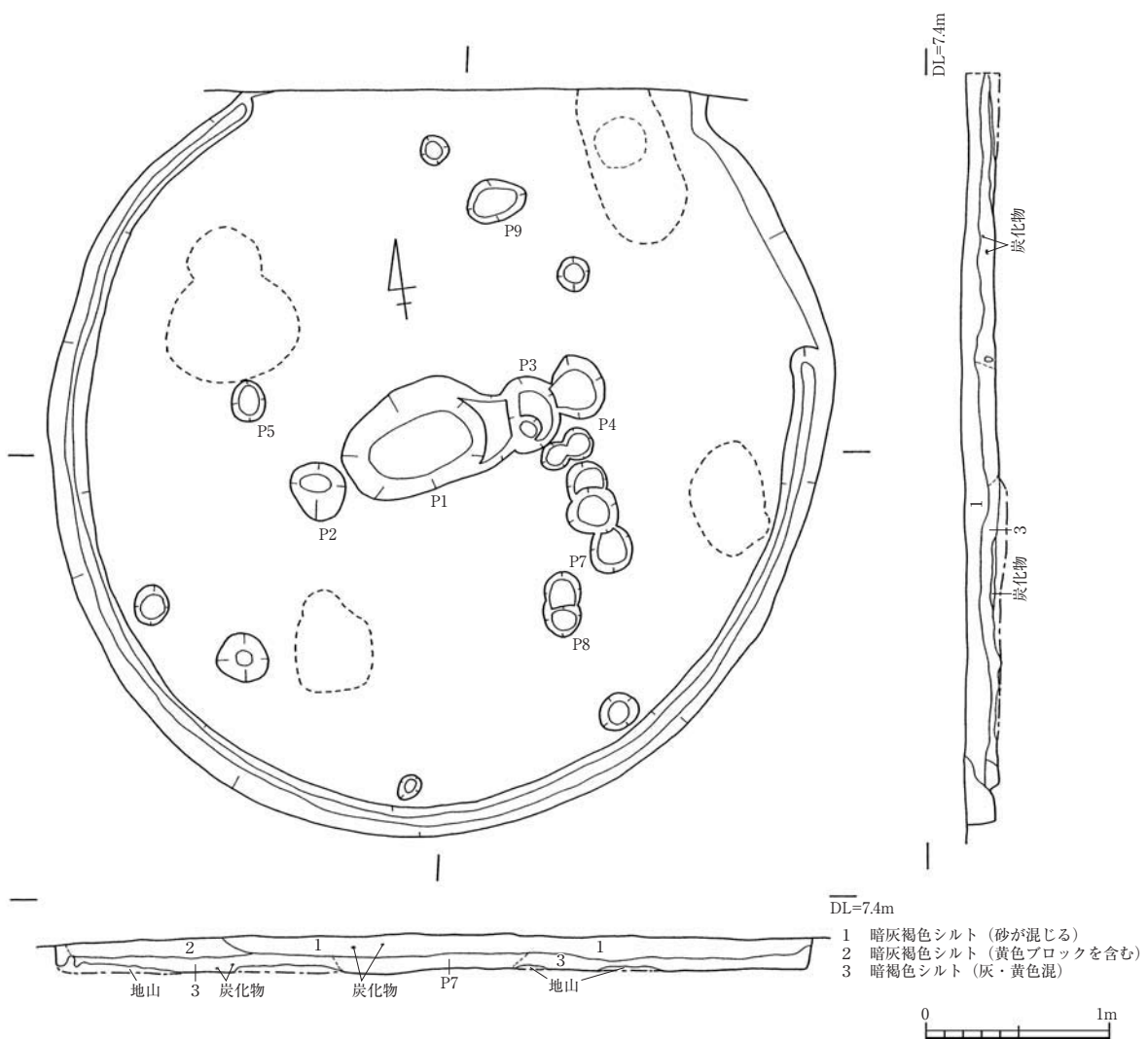
中央ピット：形状 楕円形 規模 85cm×57cm 深さ 20cm 埋土 黒灰色粘質土

壁溝：数 1 幅 9cm 深さ 4cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区北端部で検出一部調査区によって切られている。SB316・323、SK310・312と切り合い、ST301・302は東側に隣接している。

床面は、砂層で非常に軟弱であるため、貼り床が存在したと考えられるが検出することができなかった。壁溝は、ほぼ全周を巡る状態で検出できた。中央ピットは、長軸の両端にピットを伴って



L3-5 図 L3ST303

おり、松菊里型に似た形態を持つが、埋土中には炭化物や土器が入っており、弥生時代前期の松菊里型とは異なった様相がみられる。床面からピットを20個検出したが、SB323のものとSB316のピットが含まれているため、柱構造は復元できなかったが、中央ピットの両端のピットを中心にした構造を持つ可能性が高いと考えられる。

埋土中から出土した遺物は少なく、図示できる資料はなかったが、口縁部細片では、貼付口縁2点、拡張された口縁のものが2点出土しており、後期半ばまでの時期が考えられ、この時期までに住居跡は埋没したのと考えられる。

切り合っている遺構との関係では、いずれもST303が切っており、ST303が最も後出すると考えられる。

ST304(L3-6 図)

時期：弥生V-1 形状：円形 主軸方向：N-77°-E

規模：6.7m×6.3m 深さ：0.2m 面積：(33)m²

埋土：暗褐色シルト(黄褐色シルト斑状に混じる)

ピット：数21 主柱穴数：10 主柱穴：P3・4・6・7・11～16

床面：1面 貼床：— 焼失：—

中央ピット：形状 楕円形 規模 88cm×80cm 深さ 28cm 埋土 黒褐色粘質シルト

壁溝：数1 幅7cm 深さ3cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕、高杯) 石器(石包丁)

所見：ST302と隣接しており、SX301、SB318・322をいずれも切る状態で検出した。SK392は埋土下床面から検出した。

床面からは、壁溝、中央ピット、ピットを21個確認した。壁溝は、一部で切れているが、全周を巡っていたと考えられる。中央ピットは、SB323の南東端部の柱穴と切り合い、中央ピットが柱穴を切っている。ピットは、中央ピットを巡るのが10個確認されており主柱穴と考えられる。柱の配置の平面形が多角形になるものは、多くが住居跡の壁近くに柱が配される例が多いが、この住居跡では、中央ピットの近くからピットが検出されている。床面から検出されたSK392は、2.3m×1.1mの規模で、住居跡の付属遺構としては規模が大きく、別遺構と考えられる。

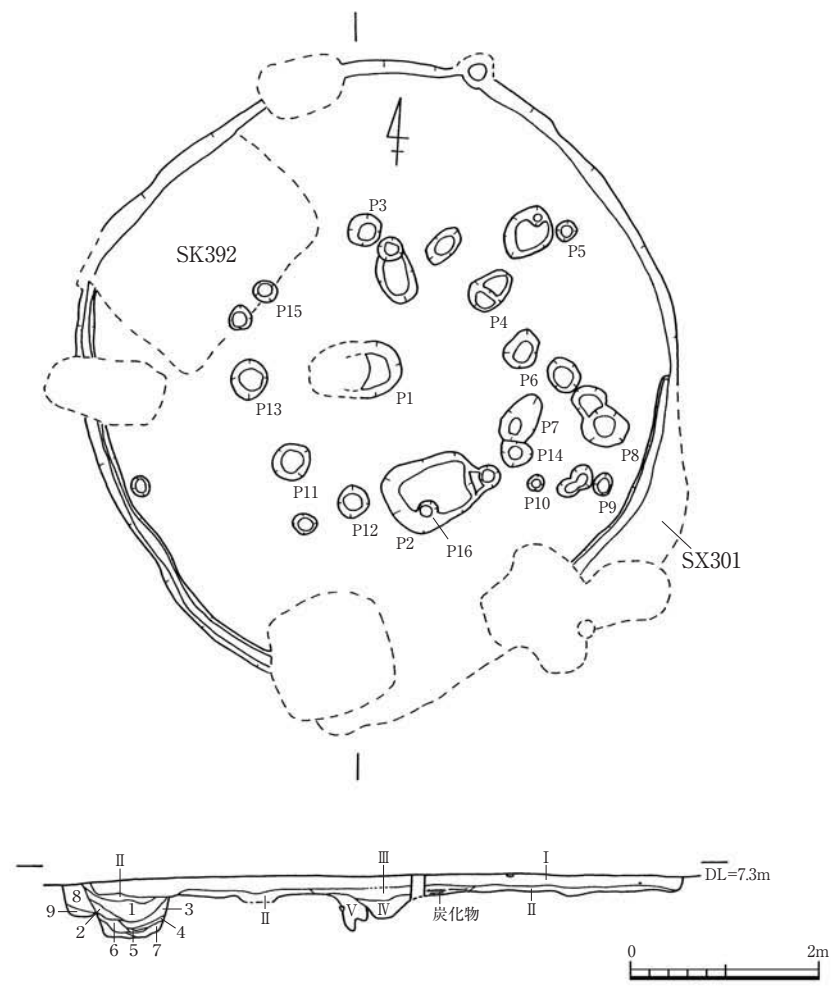
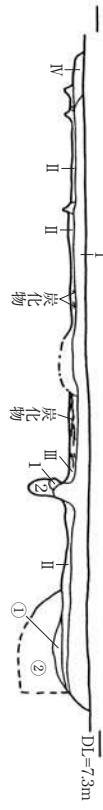
埋土の残存状況は、他の住居跡と比べると比較的良好で暗褐色シルトに黄褐色シルトが斑状に混じる土が主になっている。堆積の中には炭化物が多く混じり黄褐色土との互層となっている部分もみられる。埋土中からの遺物出土は少なく、図示できたのは石包丁1点のみである。口縁片は一定量出土しており、凹線文、凹面、貼付口縁、素口縁、薄手式土器口縁などがみられる。V期初頭の時期が考えられる。

ST305(L3-7 図)

時期：弥生V前半 形状：円形 主軸方向：N-52°-E

規模：4.4m×4.4m 深さ：0.2m 面積：15m²

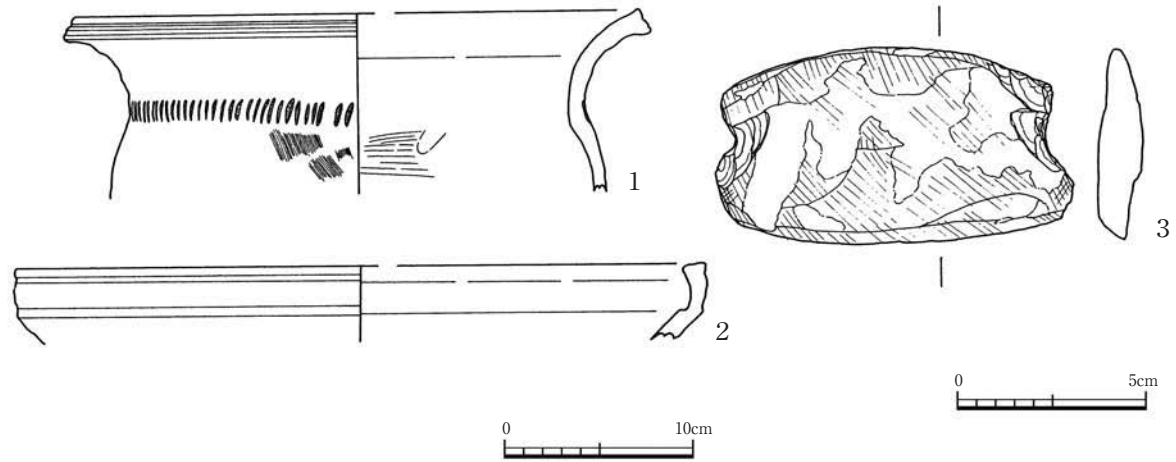
- I 暗灰褐色シルト質砂
- II 暗褐色シルト
- III IIと同じ(下半部は炭化物と黄色シルトの互層、灰色シルトも少し混)
- IV 暗褐色シルト(黄褐色シルトが細かい環状に混る。下方に細砂~中砂フロッカ混)
- V 中央ピット



- 1 暗褐色シルト(黄褐色シルトの細かい環)
- 2 黄褐色シルト(暗褐色シルト環、北壁Vに伏している)
- ① 暗褐色粘質シルトに灰色シルト、黄褐色シルトの混
- ② 暗褐色粘質シルトに灰色シルト、黄褐色シルトの混(大フロッカ)

- 1 暗灰褐色シルト質砂(黄褐色シルト、暗褐色シルトブロックの混)
- 2 暗灰褐色シルト質砂(黄褐色シルト1~5cm大ブロック)
- 3 暗灰褐色シルト質砂(黄褐色シルト2~4cm大ブロック混)
- 4 暗灰褐色シルト質砂(黄褐色シルト1cm大ブロック混)
- 5 暗灰褐色シルト質砂(3とほぼ同じ)
- 6 暗灰褐色シルト質砂(黄褐色シルト0.5~1cm斑)
- 7 暗灰褐色シルト質砂(黄褐色シルト0.5~5cm大ブロック)
- 8 暗褐色シルト(1~2cm大黄褐色シルト斑、細砂~0.3cm大砂混)
- 9 暗褐色シルト(黄褐色シルト2~5cm大ブロック)

- I 暗褐色粘質シルト(細砂混、黄褐色シルト斑が少し入る)
- II 暗褐色シルト(黄褐色シルトブロックが斑に入りこむ、細砂~中砂混)
- III 中央ピット 暗灰褐色粘質シルトP1
- IV 中央ピット 黒褐色粘質シルト、黄褐色ブロック混るP1(炭化物混)
- V 黄褐色シルトに暗褐色粘質シルトと灰色シルト(別土坑)



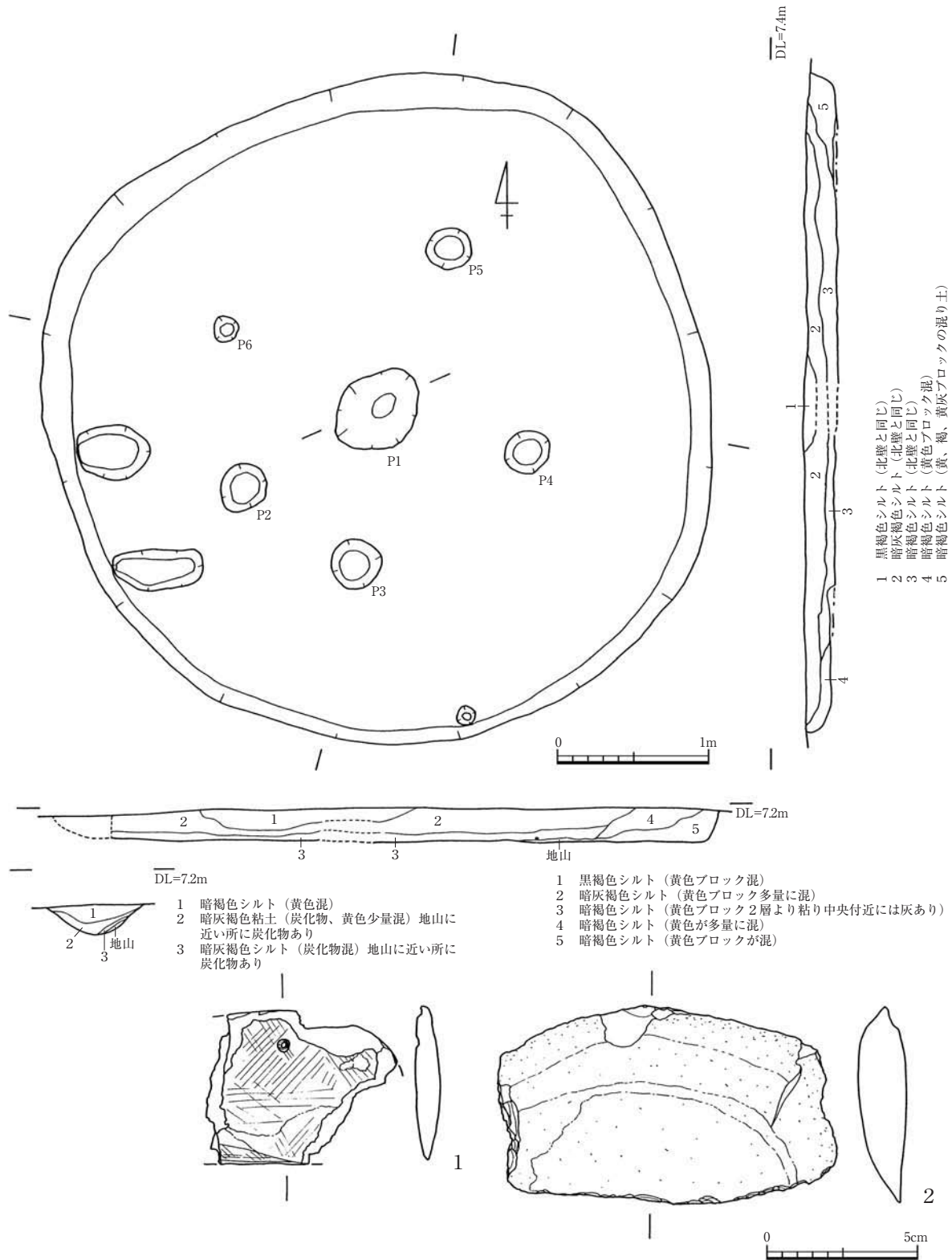
L3-6 図 L3ST304

埋土：暗灰褐色主体(黄褐色シルトが多く混じる)

ピット：数 8 主柱穴数：5 主柱穴：P2～6

床面：1面 貼床：— 焼失：—

中央ピット：形状 円形 規模 61cm×52cm 深さ 18cm 埋土 暗褐色シルト



L3-7 図 L3ST305

壁溝；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕) 石器(石包丁)

所見；調査区の東端部に位置し、住居跡の東端部は、L1 区でも検出している。平面形はやや不整形な円形である。遺構の残存状況は深さ約 20cm が残存するが、床面からは壁溝は検出できなかった。ピットは、8 個検出している。中央ピットは住居跡のほぼ中央部に位置し、埋土には炭化物が混じる。壁際の浅い楕円形のピットは、シミ状の可能性があり、柱穴とは考えられない。その他のピットはいずれも主柱穴と考えられ、5 本柱の構造が考えられる。埋土中からは、図示できる遺物は出土していないが、貼付口縁が 4 点、拡張気味の口縁が 2 点細片で出土している。時期は不明であるが、V 期の半ばまで収まるものと考えられる。

ST306(L3-8・9 図)

時期；弥生III～IV-1 形状；円形 主軸方向；N-78°-W

規模；4.5m×4.4m 深さ；0.2m 面積；15㎡

埋土；暗褐色シルト主体

ピット；数 20 主柱穴数；6 主柱穴；P4・6・8・13～15

床面；1 面 貼床；— 焼失；有り

中央ピット；形状 楕円形 規模 73cm×60cm 深さ 30cm 埋土 暗褐色土

壁溝；数 1 幅 22cm 深さ 6cm

出土遺物；弥生土器(壺、甕、蓋)

所見；調査区南部で検出した。ST307・308、SK332・333 と切り合う。

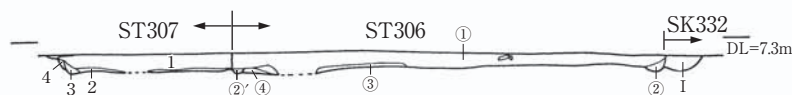
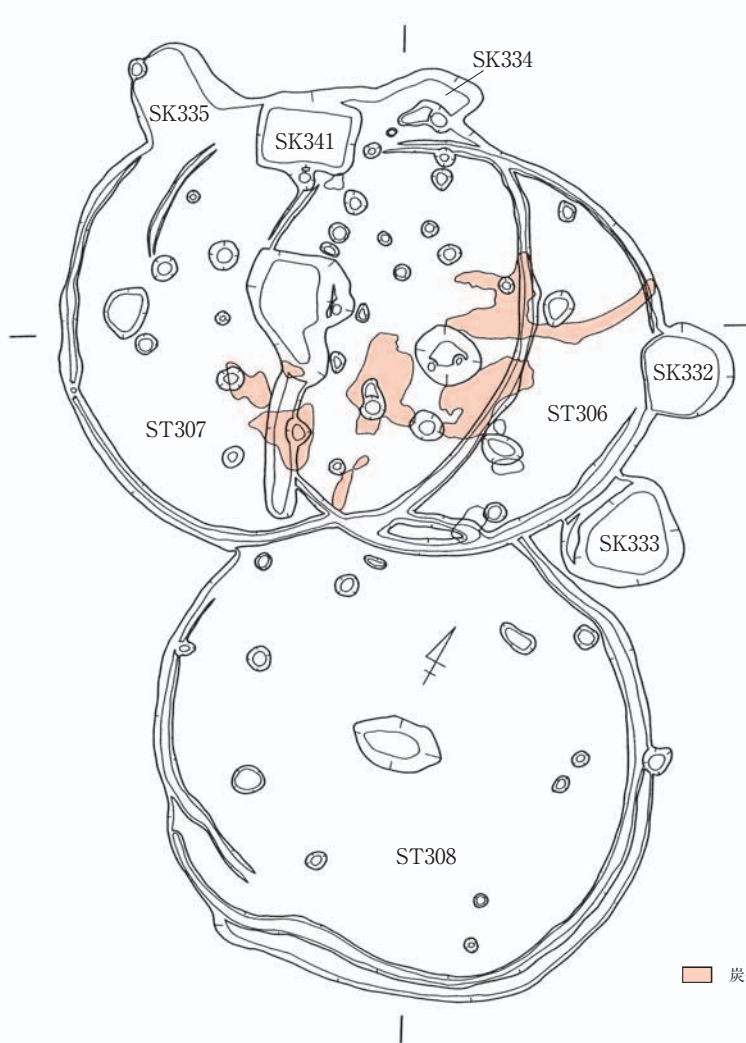
残存状況は埋土が厚い部分で約 20cm 残存する。最下層には炭化物、炭化材が多く含まれていたが焼土は検出できなかった。

床面標高は約 6.9m で、床面からは、壁溝、中央ピット、ピットを検出した。壁溝は東側を ST307 の中央ピットによって切られ検出できなかった。中央ピットの埋土中には炭化物が含まれていた。

ピットは ST307 も含めて 20 個を検出したが ST307 のものと埋土が同一のため、区別できないものがあつた。柱構造としては、中央ピットを囲む 6 本柱構造の可能性が考えられる。

埋土中から出土した遺物は、コンテナ 1 箱ほど出土しているが、土器で図示できたものは少なく、壺 2 点、小型鉢 1 点、甕 1 点で、1 のみ比較的大きく復元できた。石器では石鏃が 2 点出土しており 1 点は磨製石鏃である。また、炭化材が床面から出土している。

ST306 の時期は、時期確定できうる口縁部の出土が少なく困難であるが、凹線文が少ないこと、器壁の薄い、薄手土器片が比較的多く出土していること、ピットから末端扇形文が施された体部片が出土していることから、III 期末～IV1 期の可能性が考えられる。切り合い関係のある遺構との先後関係は、平面のプラン、堆積状況ともに ST308 が最も古い事を示しており、ST306・307 は、平面プランでは不明であったが堆積状況、床面で検出された炭化物の状態から ST307 が先行している事がわかつた。土坑では、SK332・333 はともに ST306 より古いと考えられる。



ST307

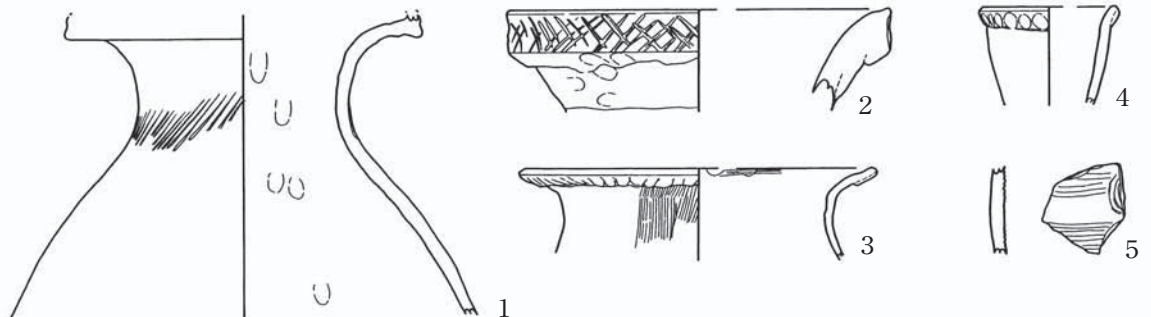
- 1 暗褐色シルト
- 2 ST306 ③と同じ
- 3 暗褐色シルト (黄褐色シルトを斑に含む)
- 4 黄褐色シルト (暗褐色シルト混)

ST306

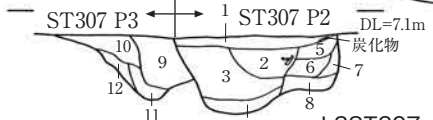
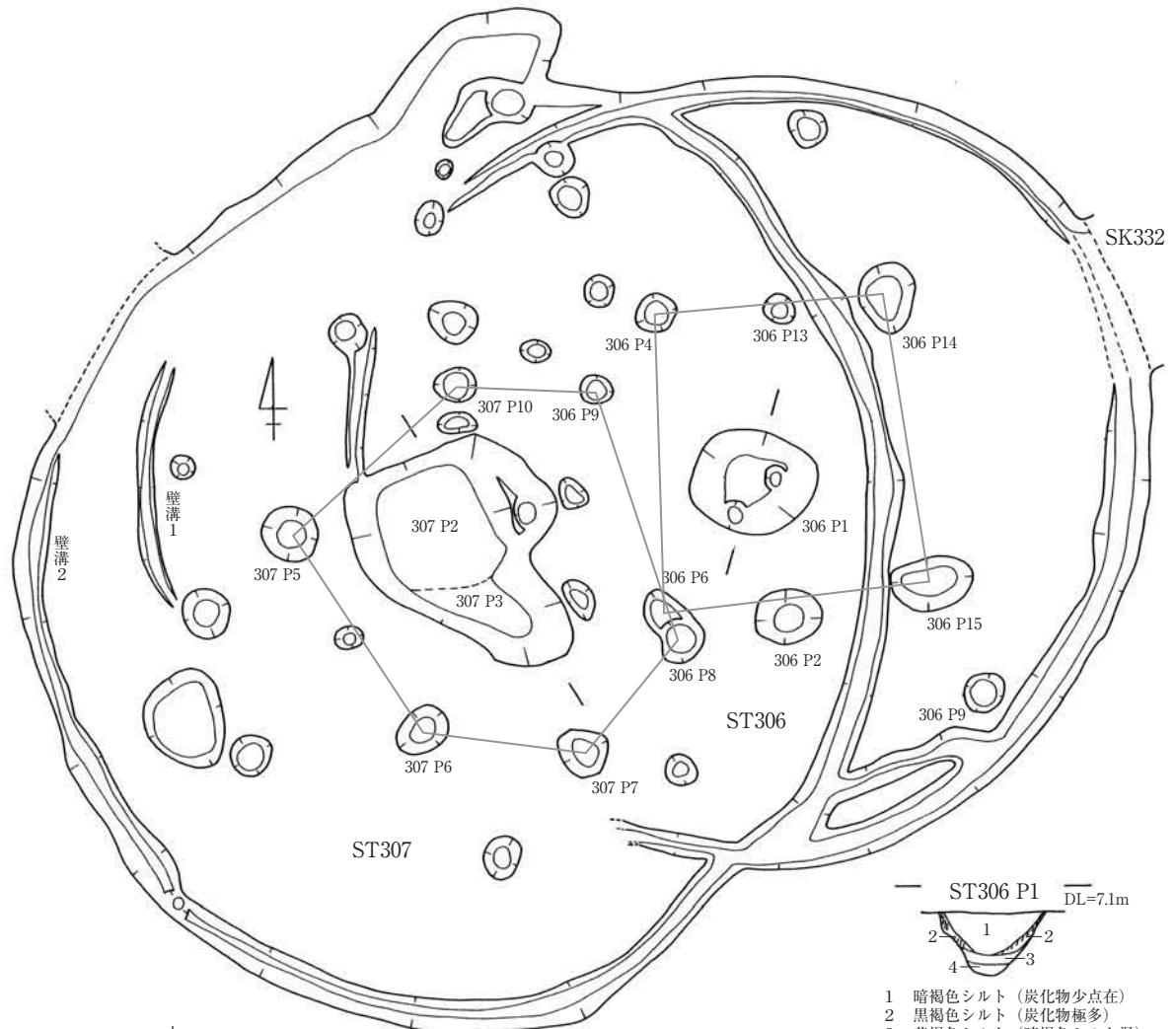
- ① 東壁と同じ
- ② 暗褐色シルト (W側②は黄褐色シルトを斑に含む)
- ③ 暗褐色シルト (黄褐色シルト (0.5cm大)の小斑と炭化物を少し含む)
- ④ 東壁③と同じ



- SK334
- I 暗褐色シルト (IIより粒子細かい)
 - II 暗褐色シルト (黄褐色シルト混)
 - III 黄褐色シルト (黄褐色シルトのプロック混)
- ST306
- ① 暗褐色シルト
 - ② 黄褐色シルト (暗褐色シルトに黄褐色シルトプロック、暗褐色シルト混)
 - ③ 暗褐色シルト (黄褐色シルトを斑に含む)
 - ③' ③と同じ (炭化物含む)
- ST308
- 1 暗灰褐色シルト
 - 2 黄褐色シルト (暗褐色シルト斑少し混)
 - 3 暗褐色シルト (暗褐色シルトを斑に含む。ST306の③よりやや暗い)

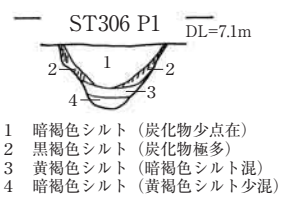


L3-8 図 L3ST306 ~ 308、ST306 出土土器

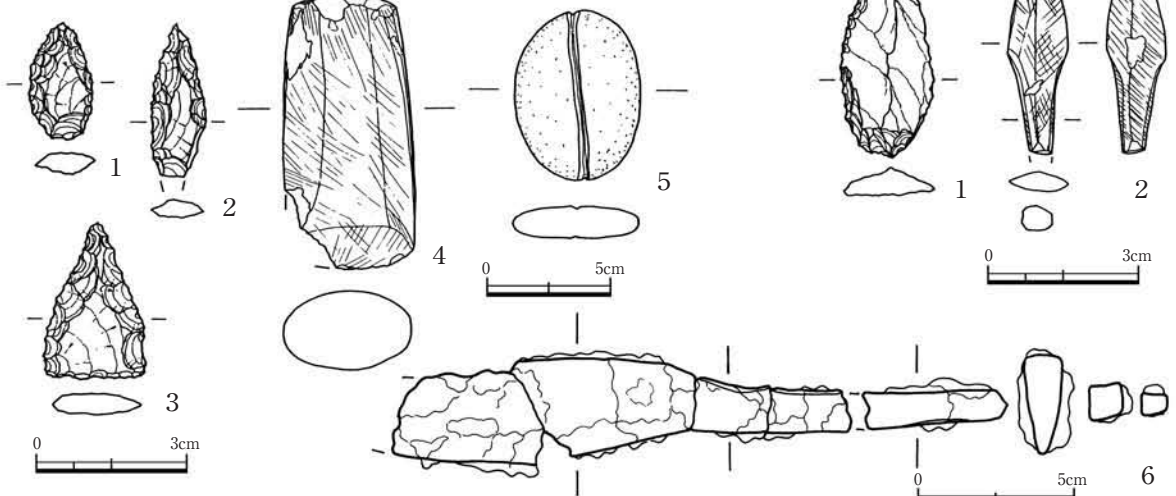


- P3**
- 9 暗褐色シルト (黄褐色シルト斑少点在、炭化物微量)
 - 10 暗褐色シルト (9とほぼ同じ、9の方がやや灰色がかかる)
 - 11 暗褐色シルト (黄褐色シルト1~2cm大斑多)
 - 12 暗褐色シルト (土器片あり)

- P2**
- 1 暗灰褐色シルト (炭化物少含)
 - 2 暗灰褐色シルト (黄褐色シルト斑、土器片あり)
 - 3 暗灰褐色シルト (黄褐色シルトブロック多混、炭化物微量)
 - 4 黒灰褐色シルト
 - 5 暗灰褐色シルト
 - 6 黄褐色シルト
 - 7 暗灰褐色シルト (5よりやや黄褐色多い)
 - 8 暗灰褐色シルト (3とほぼ同じ、炭化物少)



- 1 暗褐色シルト (炭化物少点在)
- 2 黒褐色シルト (炭化物極多)
- 3 黄褐色シルト (暗褐色シルト混)
- 4 暗褐色シルト (黄褐色シルト少混)



L3-9 図 L3ST306・307 (ST307 : 1~6、ST306 : 1・2)

ST307(L3-8・9 図)

時期：弥生III～IV-1 形状：円形 主軸方向：N-49°-W

規模：4.9m×4.7m 深さ：0.16m 面積：17㎡

埋土：暗褐色シルト主体

ピット：数 16(不明はST306に含める) 主柱穴数：6 主柱穴：P5～10

床面：1面 貼床：— 焼失：—

中央ピット1：形状 楕円形 規模(60)cm×60cm 深さ 35cm 埋土 暗褐色シルト

中央ピット2：形状 楕円形 規模(35)cm×70cm 深さ 35cm 埋土 暗灰褐色シルト

壁溝：数 2 壁溝 1 幅 10cm 深さ 4cm

壁溝 2 幅 13cm 深さ 5cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕) 石器(石鏃、石斧、石錘)

所見：調査区の南部で検出したST306・308、SK334、SB330と切り合う。床面からは、ST306に付属しないと考えられるSB330の柱穴と考えられる方形のSK341が検出されている。

埋土は約20cmが残存しており暗褐色シルトが主体である。ST306とほぼ同一であるが、炭化物を含まない。

床面の検出標高は標高約6.9mで、ST306と同一である。床面からは壁溝、中央ピット、ピットを検出している。壁溝は東側の一部が2条になっている。中央ピットは平面プランは不整形で、掘方は方形になっており、3基が切り合っている可能性が考えられる。検出状況ではP2はP3を切っている。P2・3ともに埋土中にはわずかであるが炭化物が含まれる。ピットはST306に属するものと区別が難しく、ST307のピットの数とは不明である。柱の構造としては、壁溝に沿うような状態で検出されたものが少なく、中央ピット周辺に4～6本の柱を配置する構造の可能性が考えられる。壁溝が一部2条になっていることなどからST307は建て直しが行われたと考えられ、P3が前段階の中央ピットと考えられることから、後段階は西側に拡張されたものと考えられる。

出土遺物は、土器では、胴部片がほとんどで、図示できる遺物はなかった。石器では、石鏃が3点、石斧1点、有溝石錘が1点出土している。

住居跡の時期は、確定できる遺物がほとんど出土していないため困難であるが、ST307と切り合う遺構の先後関係は、住居跡では、ST308が最も古く、次いでST307・306となる。土坑との関係では、SK341(SB330)、SK335がST307より古いと考えられる。ST306とは埋土に相違が認められないことなどから、時期差がほとんど無いと考えられ、ST307はIII期末～IV1期の可能性が高いと考えられる。

ST308(L3-8・10 図)

時期：弥生III～IV-1 形状：円形 主軸方向：N-78°-E

規模：5.4m×5.1m 深さ：0.08m 面積：22㎡

埋土：暗灰褐色シルト主体

ピット：数 13 主柱穴数：7 主柱穴：P3～9

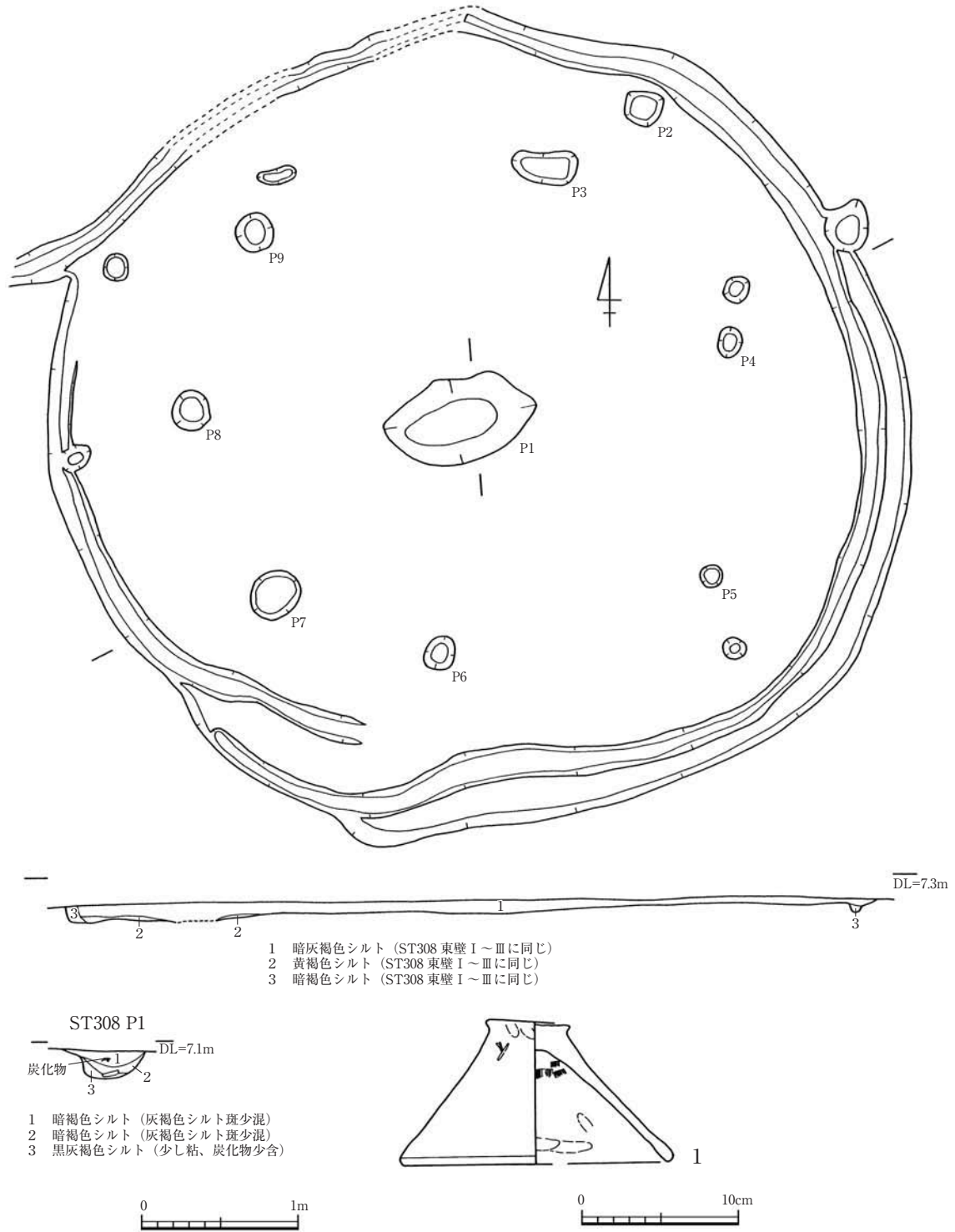
床面：1面 貼床：— 焼失：—

中央ピット：形状 楕円形 規模 98cm×54cm 深さ 18cm 埋土 暗褐色シルト

壁溝：数1 幅 15cm 深さ 3cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕、蓋)

所見：調査区南部で検出した。楕円形の平面形の住居跡である。ST306・307、SB312、SK327と



L3-10 図 L3ST308

切り合っている。埋土は約 10cmが残存しており、暗灰褐色シルトが主体で少量、黄褐色シルトが混じる。

床面の検出標高は、約 7.0mである。床面からは壁溝、中央ピット、ピットを検出している。中央ピットは楕円形で断面U字状で埋土中には炭化物を少量含む。壁溝は、全周巡るが南東部で壁際から 15～20cmほど内側で検出している。ピットは 13 個が検出されているが、P2 はSB312 の北西角のピットとみられ、残りのピットがST308 のものと考えられる。壁に沿うようにピットが並んでおり、これらが支柱穴になるものと考えられる。

遺物の出土は、少ないが、中央ピットから蓋 1 が出土している。胴部では図示できなかったが、搬入の可能性のあるものが出土している。

ST308 が営まれていた時期の確定は出土遺物からは困難であるが、この住居跡と切り合う遺構との先後関係は、ST306・307、SB312、SK327 の全てがST308 より後出するとみられることからIII期を中心とした時期の可能性が高いと考えられる。

ST309(L3-11 図)

時期；弥生V-3～5 形状；円形 主軸方向；N-64°-E

規模；4.3m×4.3m 深さ；0.2m 面積；15㎡

埋土；褐灰色シルト主体(黄褐色シルトブロック混じる)

ピット；数 9(ST310 含む) 支柱穴数；4(5) 支柱穴；(P2)、P3～6

床面；1面 貼床；1 焼失；—

中央ピット；形状 楕円形 規模 80cm×55cm 深さ 20cm 埋土 暗灰褐色シルト

壁溝；数 1 幅 8cm 深さ 1cm

出土遺物；弥生土器(壺、甕) 石器(石斧)

所見；調査区東端部L1区との境界部分で検出、L1区でSTの東側の一部が確認されている。

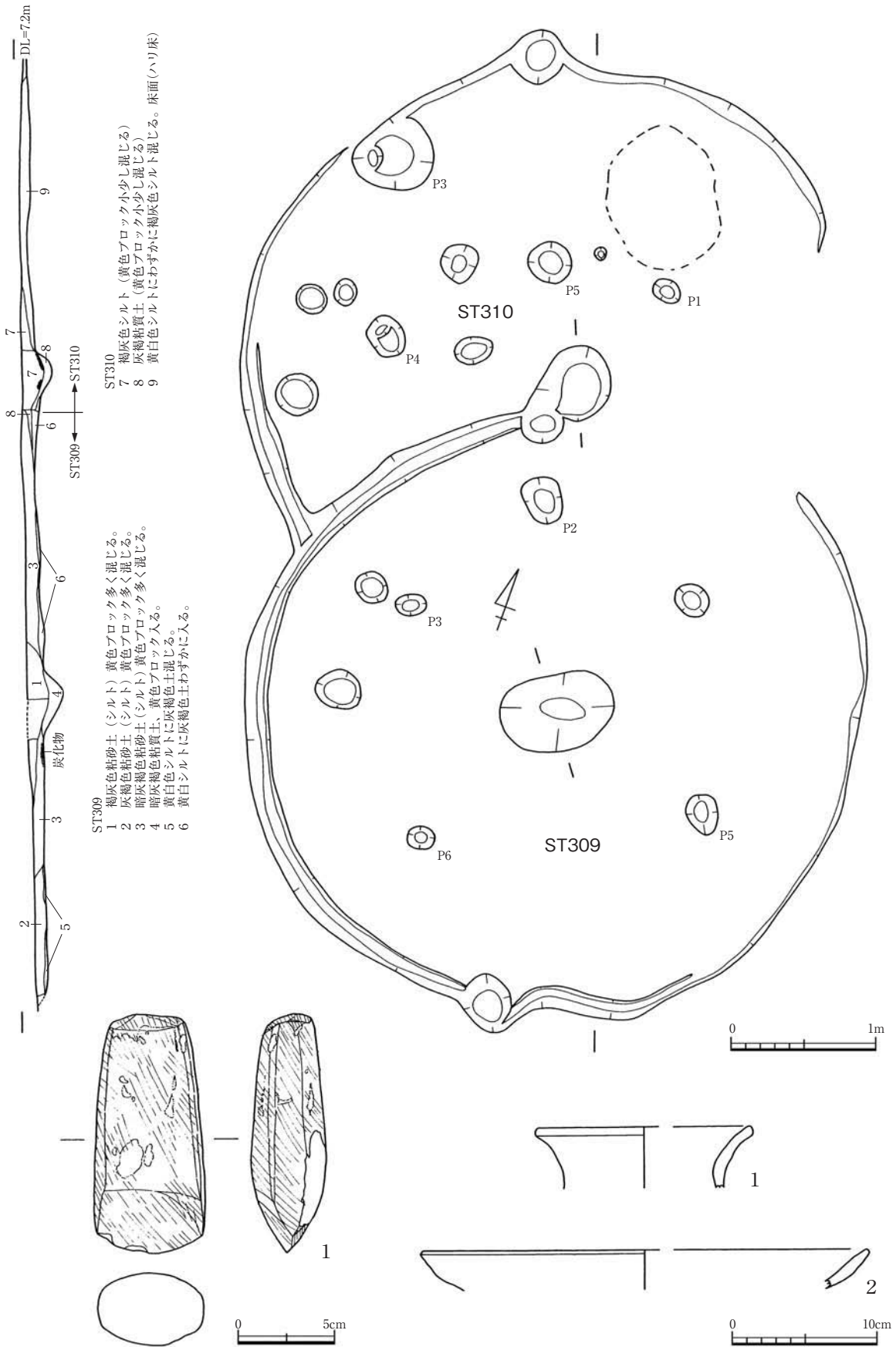
ST310、L1区で検出された土坑と切り合っている。

埋土は、約 20cmが残存しており、暗灰褐色シルトに黄褐色シルトがブロック状に混じったものである。

床面からは壁溝、中央ピット、ピット 9 個を検出したが、P2 はST310 に属する可能性も考えられる。壁溝は東側の一部で確認できなかったが、この部分はL1区で検出調査されていた部分の再調査部分であったためと考えられ、壁溝は全周を巡っていたと考えられる。中央ピットは長軸が比較的長い楕円形で周辺や埋土中から炭化物を検出している。支柱穴と考えられるピットは中央ピットを囲みP2を含み 5 個検出しており、柱構造は 4 本又はP2を含む 5 本柱の構造が考えられる。

埋土中から出土した遺物は少なく図示できたのは 1 の太型蛤刃石斧のみである。1 は完形で全長 12.4cm重量 443gの小型で緑色岩製である。

遺物による時期確定は困難であるが、切り合った遺構との先後関係では、ST309 はST310 を切っており、ST309 が後出している。ST310 はV期半ばの可能性が考えられていることからST309 はV期半ばからタタキ甕盛行以前と考えられ、ST310 と時期差はほとんど無いものと考えられる。



- ST309
- 1 褐灰色粘砂土 (シルト) 黄色ブロック多く混じる。
 - 2 灰褐色粘砂土 (シルト) 黄色ブロック多く混じる。
 - 3 暗灰褐色粘砂土 (シルト) 黄色ブロック多く混じる。
 - 4 暗灰褐色粘砂土、黄色ブロック入る。
 - 5 黄白シルトに灰褐色土混じる。
 - 6 黄白シルトに灰褐色土わずかに入る。
- ST310
- 7 褐灰色シルト (黄色ブロック小少し混じる)
 - 8 灰褐色粘土 (黄色ブロック小少し混じる)
 - 9 黄白シルトにわずかに褐灰色シルト混じる。床面(ハリ床)

L3-11 図 L3ST309・310(ST309:1, ST310:1・2)

ST310(L3-11 図)

時期：弥生V-3～5 形状：円形 主軸方向：N-21°-W

規模：4.2m×(2.4)m 深さ：0.05m 面積：(14)㎡

埋土：黄白色シルト(褐灰色シルト混じる)

ピット：数10 主柱穴数：3 主柱穴：(ST309-P2)、P4・5

床面：1面 貼床：1 焼失：—

中央ピット：形状 楕円形 規模 51cm×45cm 深さ 20cm 埋土 黄白色シルト

壁溝：数1 幅 10cm 深さ 5cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区東端部で検出。ST309、SB301と切り合い、ST315と隣接している。残存状況は不良で表土掘削が完了した時点で埋土はほとんど無く、かろうじて貼床又は生活面と考えられる黄白色シルトに褐灰色土の混じった土によって住居跡の輪郭が検出できた時点で床面遺構が検出できる状態であった。特に東側部分はほとんど削平されている状態であった。

床面で検出できた遺構は壁溝、中央ピット、ピットである。壁溝は、わずかに西側で残るのみであるが、削平の状況から全周巡っていたと推定される。中央ピットは住居跡の中央部に位置し楕円形である。埋土中は暗褐色シルトが中心で、中層に炭化物が堆積する部分がある。柱構造は不明であるが、ST309-P2とP4・5が主柱穴になる可能性が高いとみられる。

ST310から出土した遺物は少なくわずかに2点が図示できたのみで、図示できた2点も口縁部細片のみで、時期を確定できるだけの資料とは成り得ないが、後期半ばの可能性が考えられる。

他の遺構との先後関係では、ST309にST310は切られており、ST310の方が先行すると考えられる。またSB301の南西角のピットはST310の埋土下より検出されておりST310はSB301より後出する。

ST311(L3-12 図)

時期：弥生III～IV-2 形状：円形 主軸方向：N-86°-W

規模：4.9m×5.4m 深さ：0.03m 面積：(21)㎡

埋土：暗褐色シルト主体

ピット：数36 主柱穴数：6 主柱穴：P20・22～26

床面：1面 貼床：— 焼失：—

中央ピット1：形状 楕円形 規模 94cm×33cm 深さ 32cm 埋土 暗褐色シルト

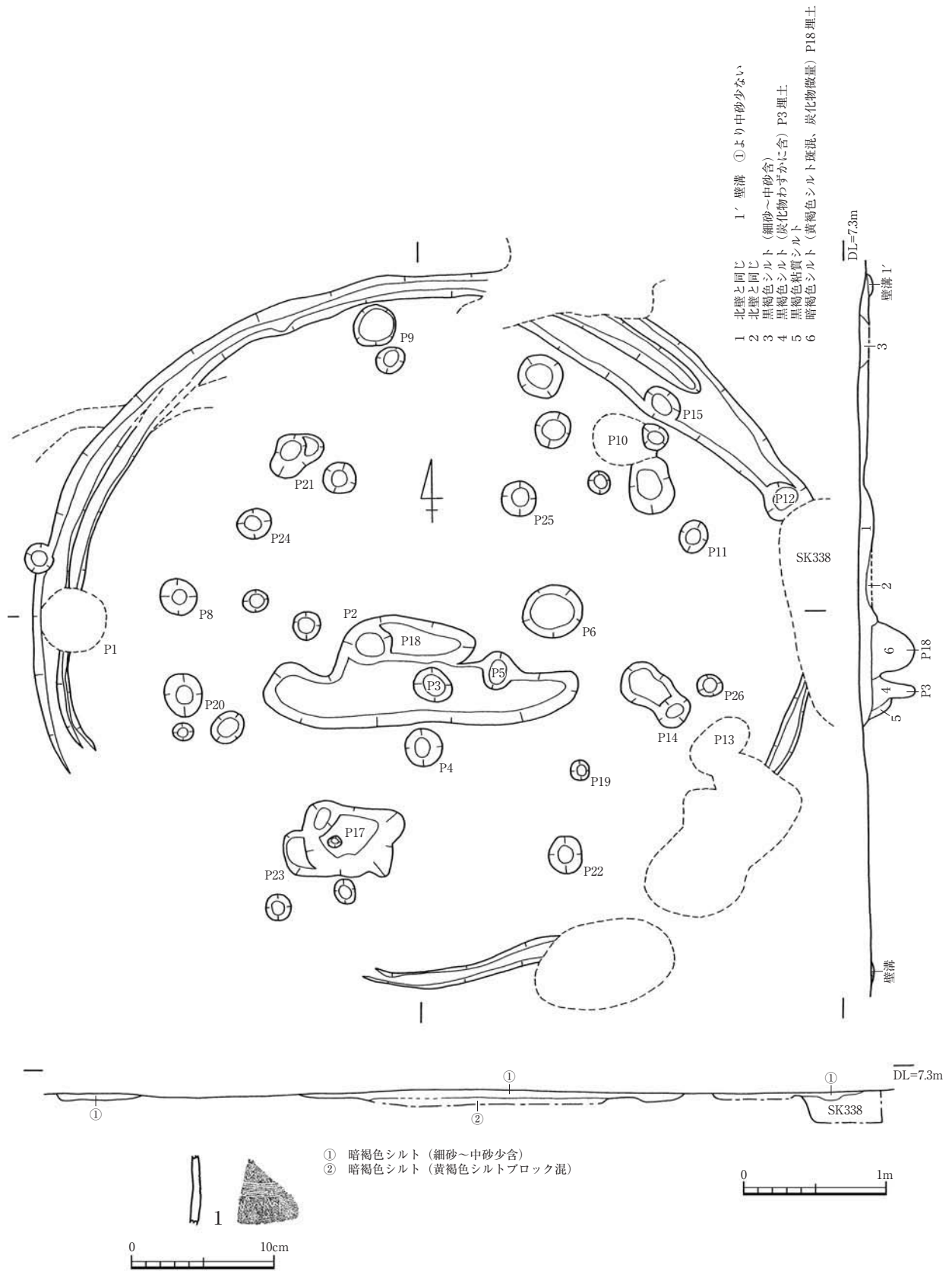
中央ピット2：形状 楕円形 規模 2.2cm×50cm 深さ 18cm 埋土 黒褐色シルト

壁溝：数2 壁溝1 幅 12cm 深さ 3cm

壁溝2 幅 26cm 深さ 5cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢) 石器(石鏃、石包丁)

所見：調査区西側、L2区との境近くの遺構が集中している部分で検出した。多くの遺構と隣接、切り合う。切り合い関係のある遺構としては、ST316・317、SB314・325、溝状土坑SK383があげ



L3-12 図 L3ST311

られ、特に大型掘立柱建物跡と考えられるSB319の西南角の柱穴のSK338との切り合いは注目される。また、隣接する遺構としてはST313・314がある。

遺構の残存は不良で、表土除去を行うと埋土はほとんど残存していなく中央ピットの周辺にのみ残存していた。

床面から検出した遺構は、壁溝2条、中央ピット2基、ピット36個であった。壁溝は東側部分で2条になっており、西側では壁際から約10cm内側で検出した。深さは約5cmであった。住居跡中央部からは、楕円形と溝状の2基の土坑が確認しており、埋土中にはわずかであるが炭化物が含まれている。溝状の土坑については、一般的な中央ピットに比べて細長いプランをしており、住居跡に伴うものであるのか疑問の余地が残る。ピットは住居跡の床面の範囲から34個を検出しているが、同じ床面の標高でST316・317と切り合いがみられ、埋土にも違いがみられず、それぞれに属する柱穴を分ける事が困難であった。柱構造も不明であるが、住居跡西側でピットが少ないことから、壁に沿って柱が巡る構造でなく、中央ピットの周りに4～6本の柱を配する構造の可能性が高い。

遺物の出土は埋土の残存が不良のため少量で図示できる遺物はなかった。遺物の中には、薄手土器片が入っており、櫛描文の文様帯がある胴部片も出土している。

切り合った遺構との先後関係では、ST316・317とは先後関係不明でSB319とはST311が南西角の柱穴であるSK339を切っておりST311が後出する。SK383は、ST311を埋土から掘り込まれておりST311が先行する。ST311の時期はIII期以降IV期までの可能性が考えられる。

ST312(L3-13 図)

時期：弥生V-1～3 形状：円形 主軸方向：N-15°-E

規模：5.8m×5.8m 深さ：0.3m 面積：26㎡

埋土：暗褐色シルト主体

ピット：数26 主柱穴数：6 主柱穴：P3・5・6・9～11

床面：1面 貼床：— 焼失：—

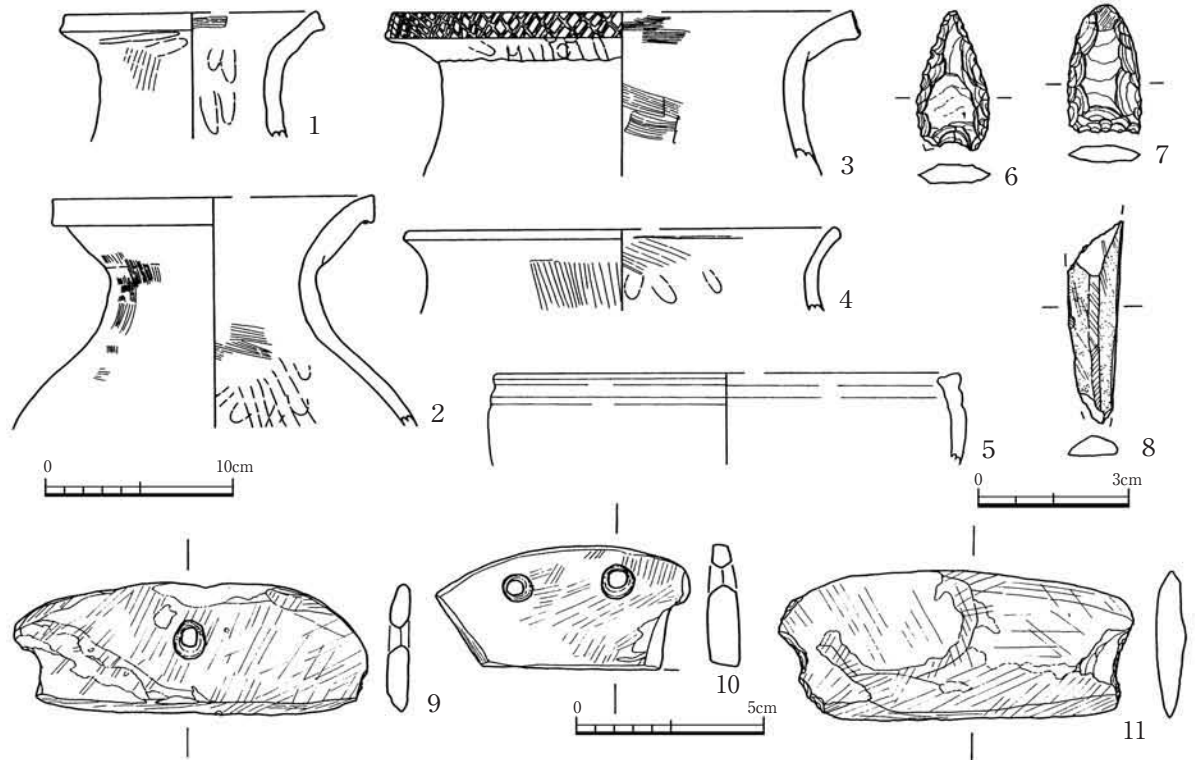
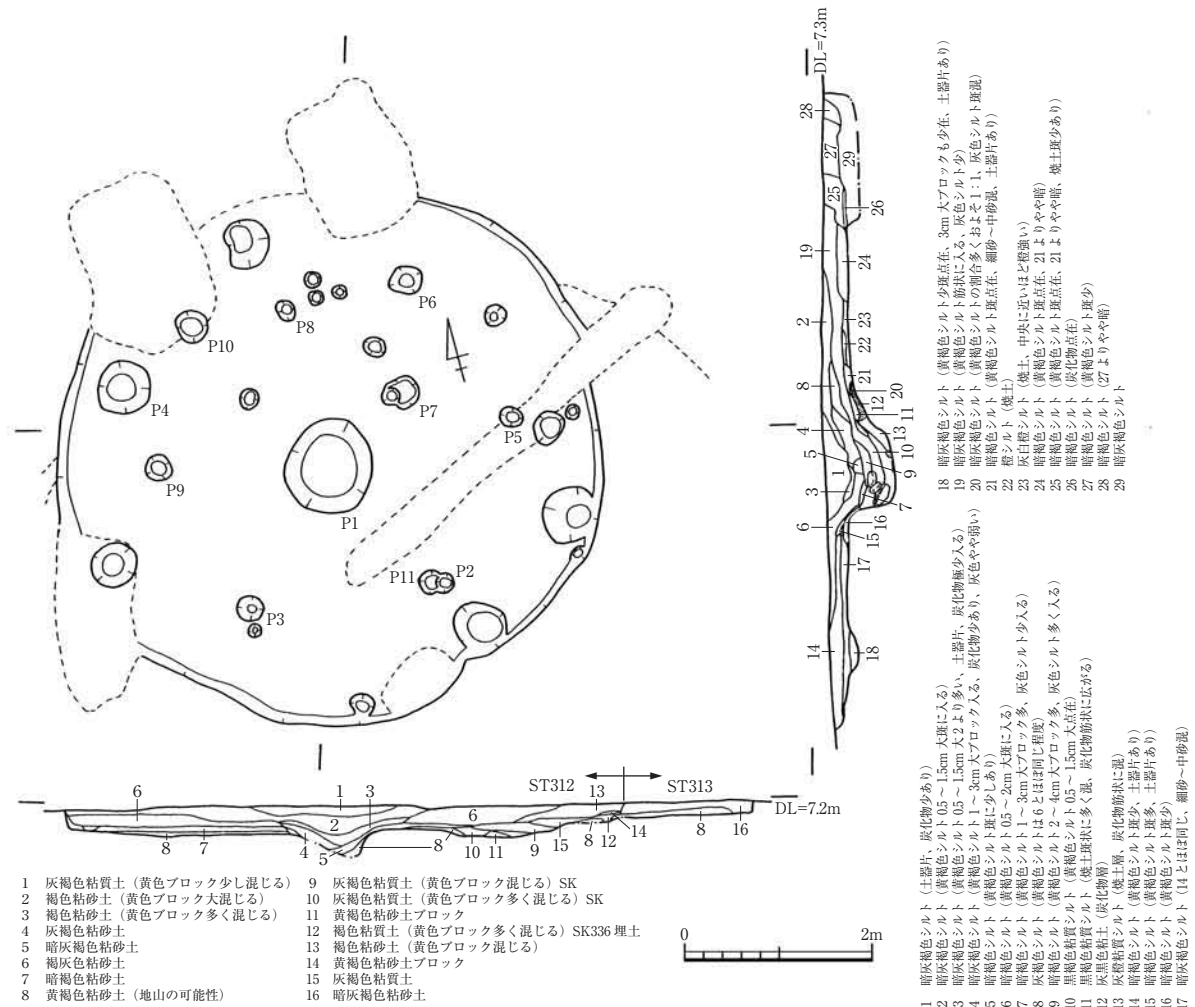
中央ピット：形状 楕円形 規模 101cm×92cm 深さ 48cm 埋土 黒褐色粘質土

壁溝：数1 幅 10cm 深さ 3cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区中央部で検出された。ST313、SB319、SK336・337・387と切り合い、ST311、SB314・318に隣接している。

遺構の残存は、他の遺構と比べて良好で埋土は約30cm残存していた。床面の検出標高は6.9mである。床面からは、中央ピット、ピットを検出しており、壁溝は平面プランでは確認できなかったが、断面確認では幅約10cm深さ約3cmの壁溝と考えられる落ち込みを確認している。中央ピットは、しっかりしたプランと堀方を持っており、埋土には炭化物、焼土が混じっていた。また炭化物が多く付着している人頭大の砂岩質の河原石が出土しており、中央ピットが炉として使われた可能性を窺わせている。ピットは26個を確認しているが、中には切り合い関係にあるST313のピット



L3-13 図 L3ST312

も含まれている。中央ピットと壁の中間で等間隔に円形に巡る状態のピットが支柱穴になると考えられ、6本柱構造と推定される。その他では壁際にいずれも直径が60cmほどの比較的規模の大きなピットを検出している。住居跡に伴う可能性が高いと考えられるが性格は不明である。

埋土中から出土した遺物は、貼付口縁が31点、凹線文が4点、凹面が3点、拡張ぎみの口縁が20点と多く出土している。また、ピット中からも凹面、素口縁が出土している。石器も石包丁3点、石鏃3点が出土しており、特にP6の床に貼りついた状態で石包丁が出土し注目される。

切り合い関係のある遺構との先後関係はST313の中央ピットと考えられる土坑をST312埋土下から検出しておりST312の方が後出する。SB319も同様に埋土下から検出されている。SK336は平面プランではST312を切っているような状態で楕円形の土坑状で検出したが、埋土除去後延長部分を検出できた溝状土坑であったことを確認できたことから、SK336の方が先行する可能性が高い。SK336埋土中からは中期末から後期の遺物が出土している。SK337はST312の埋土が検出面になっておりST312より後出している。ST312の時期は、後期前半の可能性が高いと考えられる。

ST313(L3-14 図)

時期：弥生III～IV-2 形状：円形 主軸方向：N-60°-W

規模：(8.8)m×(8.8)m 深さ：— 面積：(61)m²

埋土：暗褐色シルト

ピット：数— 支柱穴数：13 支柱穴：P3～12・14・15・17

床面：1面 貼床：— 焼失：—

中央ピット：形状 楕円形 規模 85cm×55cm 深さ 31cm 埋土 暗褐色シルト

壁溝：数1 幅 15cm 深さ 5cm

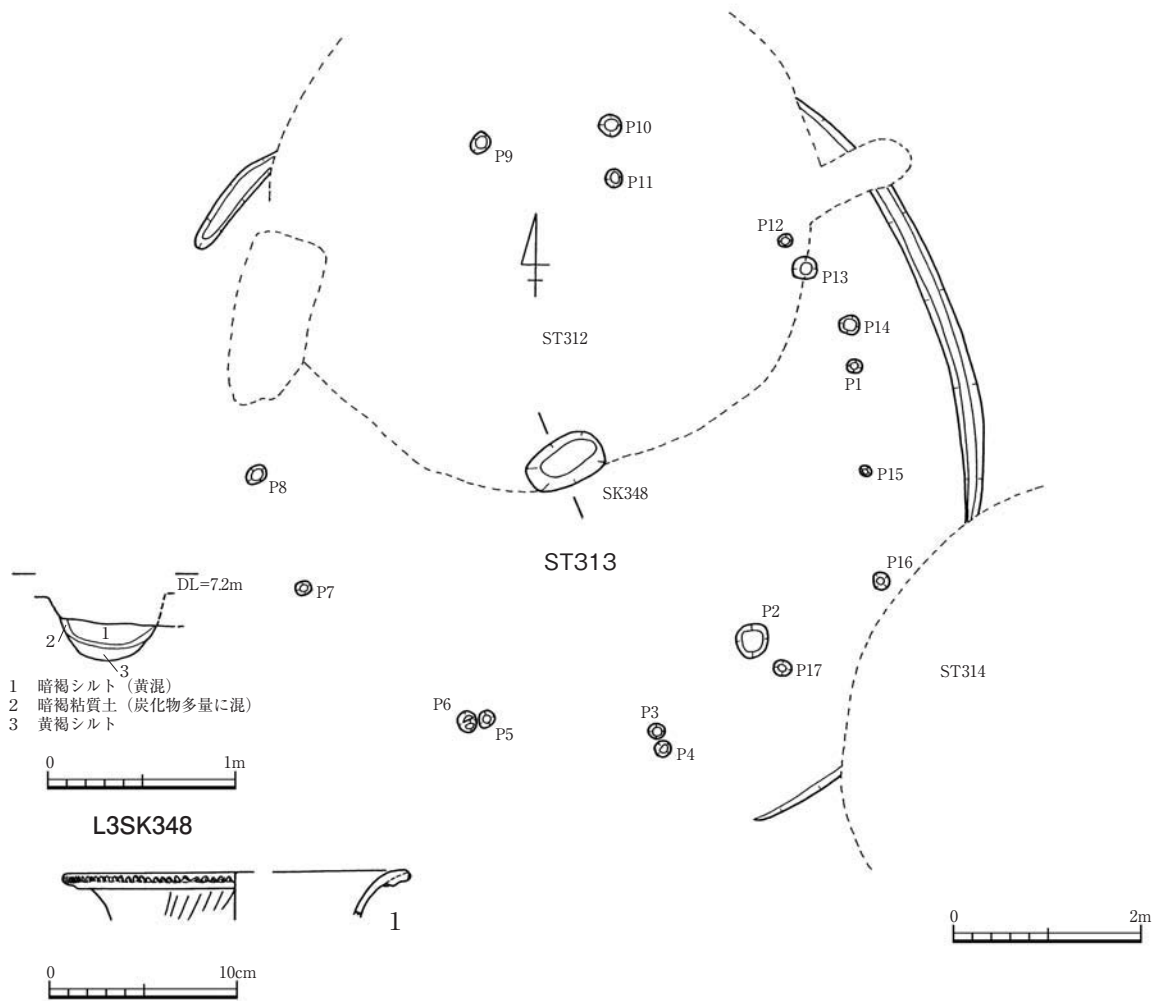
出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区中央部に位置する。大型住居跡である。ST312・314、SK336・337・340・343と切り合う。特にST312とは重なるような状態で検出した。またST311、SB328・319とは隣接している。

遺構の残存状態は不良で、表土除去された段階で壁溝が検出できたのみの状態で、竪穴住居跡の埋土はほとんど残存していなかった。検出できた壁溝も、全周が残存していなく、東側と北西の一部が検出されたのみであった。他の遺構は、ST313との切り合い部分から検出されたり、埋土が全く残存していない部分で検出されており他の遺構との弁別が困難な状況となっている。ST312埋土下から検出した楕円形の土坑SK348は、埋土に多くの炭化物が含まれていることや残存する壁溝の中央部に位置する事から、ST313の中央ピットと考えられる。壁溝に沿うように比較的規模の小さなピットが巡った状態で検出しており、それらが支柱穴になるものと考えられ、柱構造は円形に近い多角形と考えられる。

遺物は埋土がほとんど残存していないため出土量は少なく、わずかに中央ピットSK348で薄手土器の口縁部細片が出土している。

ST313と切り合い関係のある遺構との先後関係はすべてST313が切られた状態で検出されており、ST313が先行するものと考えられる。その他隣接している遺構とは同時併存は不可能と考え



L3-14 図 L3ST313

るが、先後関係は不明である。時期はV期初頭までに収まると考えられ、III期末～IV2期までの可能性が高い。

ST314 (L3-15 図)

時期：弥生V-3～4 形状：円形 主軸方向：N-29°-E

規模：5.9m×5.9m 深さ：0.1m 面積：25㎡

埋土：褐灰色粘質土

ピット：数9 主柱穴数：5 主柱穴：P2～6

床面：1面 貼床：1 焼失：—

中央ピット：形状 楕円形 規模 100cm×86cm 深さ 25cm 埋土 暗灰褐粘質土

壁溝：数1 幅 12cm 深さ 3cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕、高杯、ミニチュア) 石器(石鏃)

所見：調査区東側で検出される。ST313・315、SK358・345と切り合い、ST310・309・312と隣

接している。

残存状況は他の遺構に比べて比較的良好で、埋土が約 20cm 残存していた。埋土は褐灰色粘質土が中心でわずかに炭化物が混じる。床面からは、中央ピット、壁溝、ピット 9 個を確認している。壁溝は浅く、一部しか検出できなかったが、全周巡っていたと考えられる。支柱穴になると考えられるピットは 5 個で壁と中央ピットの間位置しており、5 本柱の構造が考えられる。

埋土中から出土した遺物は、他の遺構と比べると多く出土しており、図示できる遺物も多い。壺では、口縁端部が薄く外面にハケ目がのこり長頸ぎみの頸部をもつものが出土している。甕では口縁部の拡張がなくなり、外面にタタキが残るものが出土している。高杯は杯部が浅い椀状を呈したものが出土している。その他ミニチュアの甕型土器で高松平野からの搬入と考えられる 8 が出土している。

他の遺構との切り合い関係では、ST313・315、SK358・345 は全て ST314 に切られており、ST314 が最も後出する。

時期は、V3 期～V4 期と考えられ、この調査区で確認されている住居跡の中でも最も新しい時期の一群と考えられる。

ST315(L3-15 図)

時期：弥生IV-2～V-1 形状：隅丸方形 主軸方向：N-14°-W

規模：2.7m×2.7m 深さ：0.3m 面積：7.3㎡

埋土：褐色粘質土

ピット：数 4 支柱穴数：2 支柱穴：2

床面：1 面 貼床：— 焼失：—

中央ピット：—

壁溝：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、高杯)

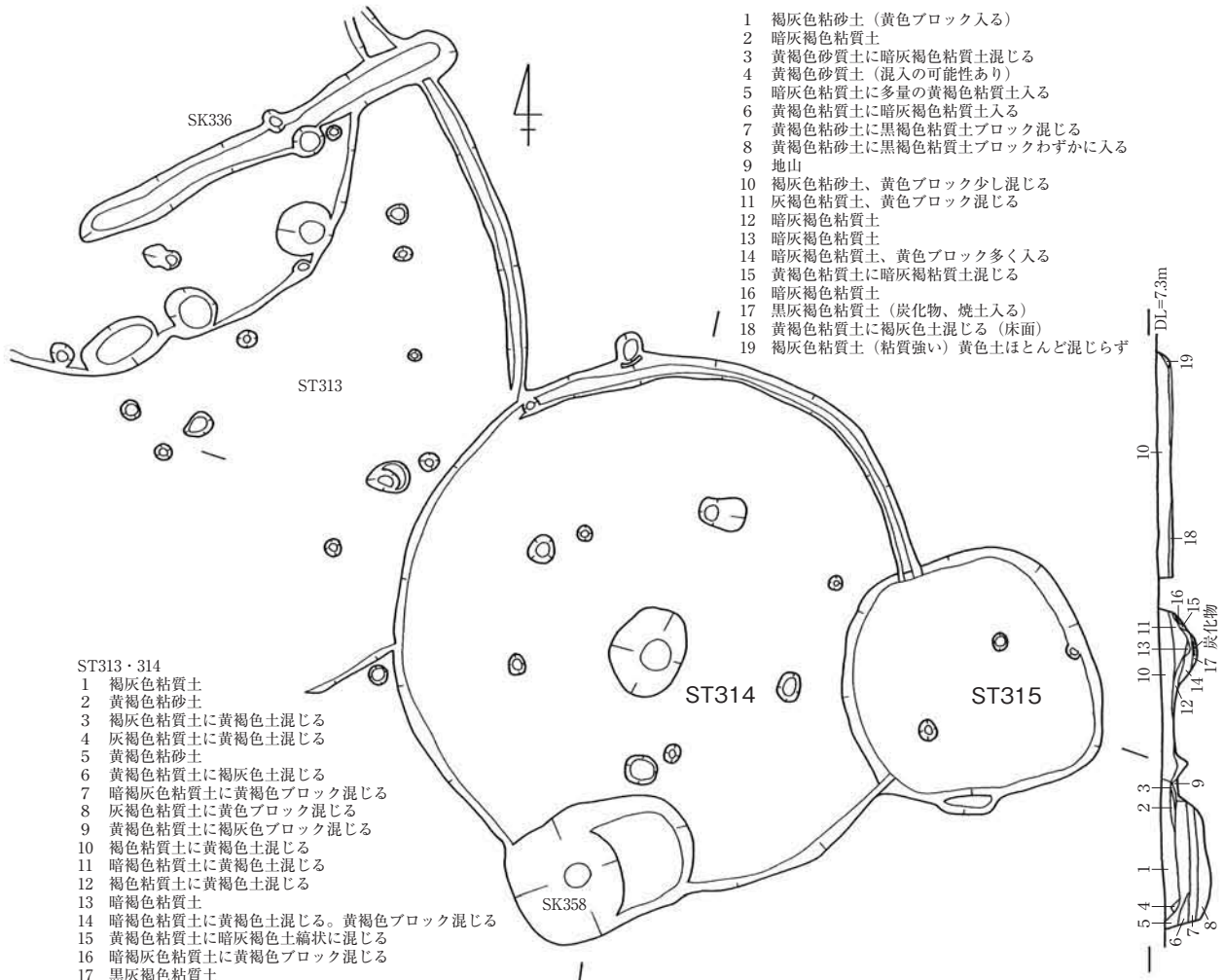
所見：調査区東側から検出した小規模な方形住居跡である。ST314 と切り合い、ST309・310 と隣接している。

残存状況は比較的良好で埋土は約 30cm が残存しており、炭化物が多く含まれる層もみられた。床面から検出した遺構はピットのみで規模も直径が 20cm と小さいものであった。

出土遺物は埋土の残存が良好であったが少なく、図示できるものはなかった。口縁部片では薄手式土器 3 個、拡張気味のもの 2 個、凹線文 2 個が出土している。その他では、内面ヘラケズリの高杯の脚部が出土している。

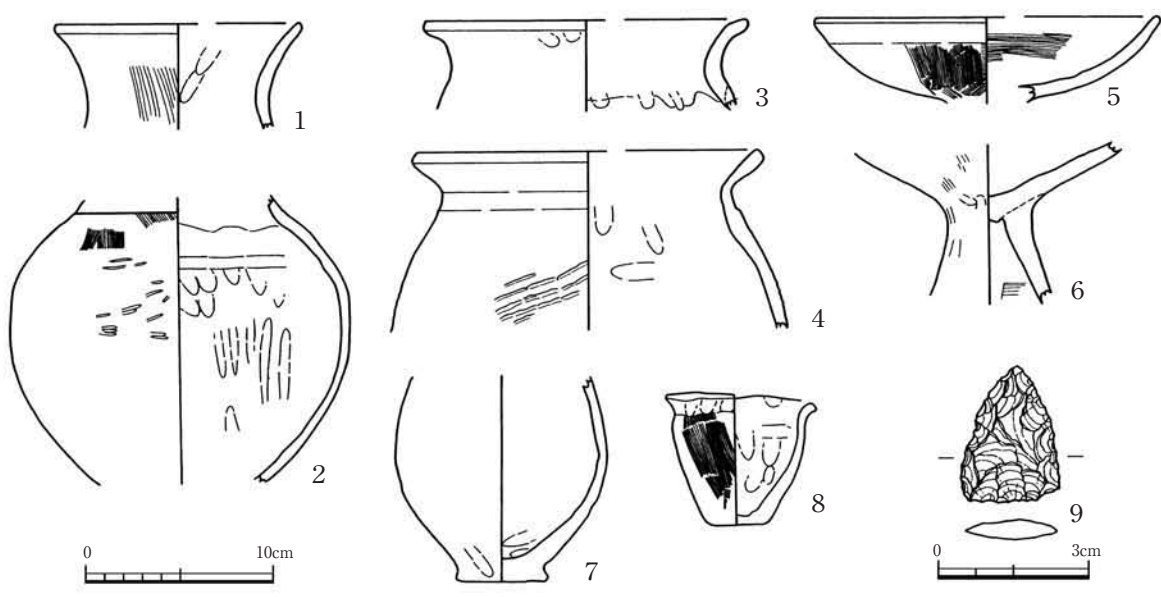
他の遺構との切り合いでは、ST314 に切られており、ST315 が先行している。時期はIV期末～V期初頭の可能性が考えられる。

この住居跡は、他の竪穴住居跡に比べて規模も小さく、炉跡と考えられる中央ピットや壁溝も確認されていないことから通常の住居跡とは考えにくい。IV期末には、比較的小型の方形住居跡と考えられている遺構が出現する事などから、住居跡として考えたい。



- ST313・314
- 1 褐灰色粘質土
 - 2 黄褐色粘砂土
 - 3 褐灰色粘質土に黄褐色土混じる
 - 4 灰褐色粘質土に黄褐色土混じる
 - 5 黄褐色粘砂土
 - 6 黄褐色粘質土に褐灰色土混じる
 - 7 暗褐灰色粘質土に黄褐色ブロック混じる
 - 8 灰褐色粘質土に黄色ブロック混じる
 - 9 黄褐色粘質土に褐灰色ブロック混じる
 - 10 褐色粘質土に黄褐色土混じる
 - 11 暗褐色粘質土に黄褐色土混じる
 - 12 褐色粘質土に黄褐色土混じる
 - 13 暗褐色粘質土
 - 14 暗褐色粘質土に黄褐色土混じる。黄褐色ブロック混じる
 - 15 黄褐色粘質土に暗褐色土織状に混じる
 - 16 暗褐灰色粘質土に黄褐色ブロック混じる
 - 17 黒灰褐色粘質土

- 1 褐灰色粘砂土 (黄色ブロック入る)
- 2 暗灰褐色粘質土
- 3 黄褐色粘砂土に暗灰褐色粘質土混じる
- 4 黄褐色粘砂土 (混入の可能性あり)
- 5 暗灰褐色粘質土に多量の黄褐色粘質土入る
- 6 黄褐色粘質土に暗灰褐色粘質土入る
- 7 黄褐色粘砂土に黒褐色粘質土ブロック混じる
- 8 黄褐色粘砂土に黒褐色粘質土ブロックわずかに入る
- 9 地山
- 10 褐灰色粘砂土、黄色ブロック少し混じる
- 11 灰褐色粘質土、黄色ブロック混じる
- 12 暗灰褐色粘質土
- 13 暗灰褐色粘質土
- 14 暗灰褐色粘質土、黄色ブロック多く入る
- 15 黄褐色粘質土に暗灰褐色粘質土混じる
- 16 暗灰褐色粘質土
- 17 黒灰褐色粘質土 (炭化物、焼土入る)
- 18 黄褐色粘質土に褐灰色土混じる (床面)
- 19 褐灰色粘質土 (粘質強い) 黄色土ほとんど混じらず



L3-15 図 L3ST314・315

ST316(L3-16 図)

時期：弥生 形状：円形 主軸方向：N-75°-E

規模：(6.0)m×(6.0)m 深さ：— 面積：(28)m²

埋土：—

ピット：数— 主柱穴数：5 主柱穴：P1～5

床面：1面 貼床：— 焼失：—

中央ピット：形状 楕円形 規模 100cm×60cm 深さ 25cm 埋土 暗灰褐色粘質土

壁溝：数1 幅9cm 深さ8cm

出土遺物：弥生土器

所見：L2区と接する部分から検出した。検出した場所は遺構が密集しており、多くの遺構と切り合っていた。切り合いのある住居跡は、ST311～313・317で、SB314・319の柱穴とも切り合いがある。

検出の状況は、表土直下で暗褐色シルトが大きな島状に堆積しており、各遺構毎の平面プランは確認できず当初、包含層が残存しているものと考えた。このため、残存する暗褐色土を掘削したところ約5cmほどの堆積しか認められず、すぐに地山と考えられる黄褐色土があらわれた。この面で遺構検出作業を行った所、やや残存状況の良い遺構の平面プランや、住居跡の床面遺構と考えられる遺構を検出した。

ST316の残存状況は、きわめて不良で埋土は包含層掘削によってなくなっており、約90cmの弧状の溝跡が確認されたのみで、当初、住居跡とは認められなかった。その後、溝跡の弧の中心と考えられる位置に楕円形のSK349を検出したため直径約6mの住居跡を復元できた。その他住居跡床面遺構については、他遺構との切り合いが著しいため、確定が困難であるが中央ピットSK349の同心円上に主柱穴となりうるピット5個を確認する事ができた。

住居跡出土の遺物は包含層掘削によって住居跡の埋土が残存していないため、包含層中にも細片が少量含まれるのみであった。また、中央ピットと考えられるSK349からも遺物はほとんど出土しなかった。このため、遺物による時期確定はできなかった。切り合い関係にある遺構との関係も不明であり、時期の確定は困難である。

L3ST317(L3-16 図)

時期：弥生V以前 形状：円形 主軸方向：N-35°-W

規模：(4.8)m×(4.8)m 深さ：— 面積：(18)m²

埋土：—

ピット：—

床面：1面 貼床：— 焼失：—

中央ピット：形状 楕円 規模 71cm×60cm 深さ 20cm 埋土 暗褐色シルト

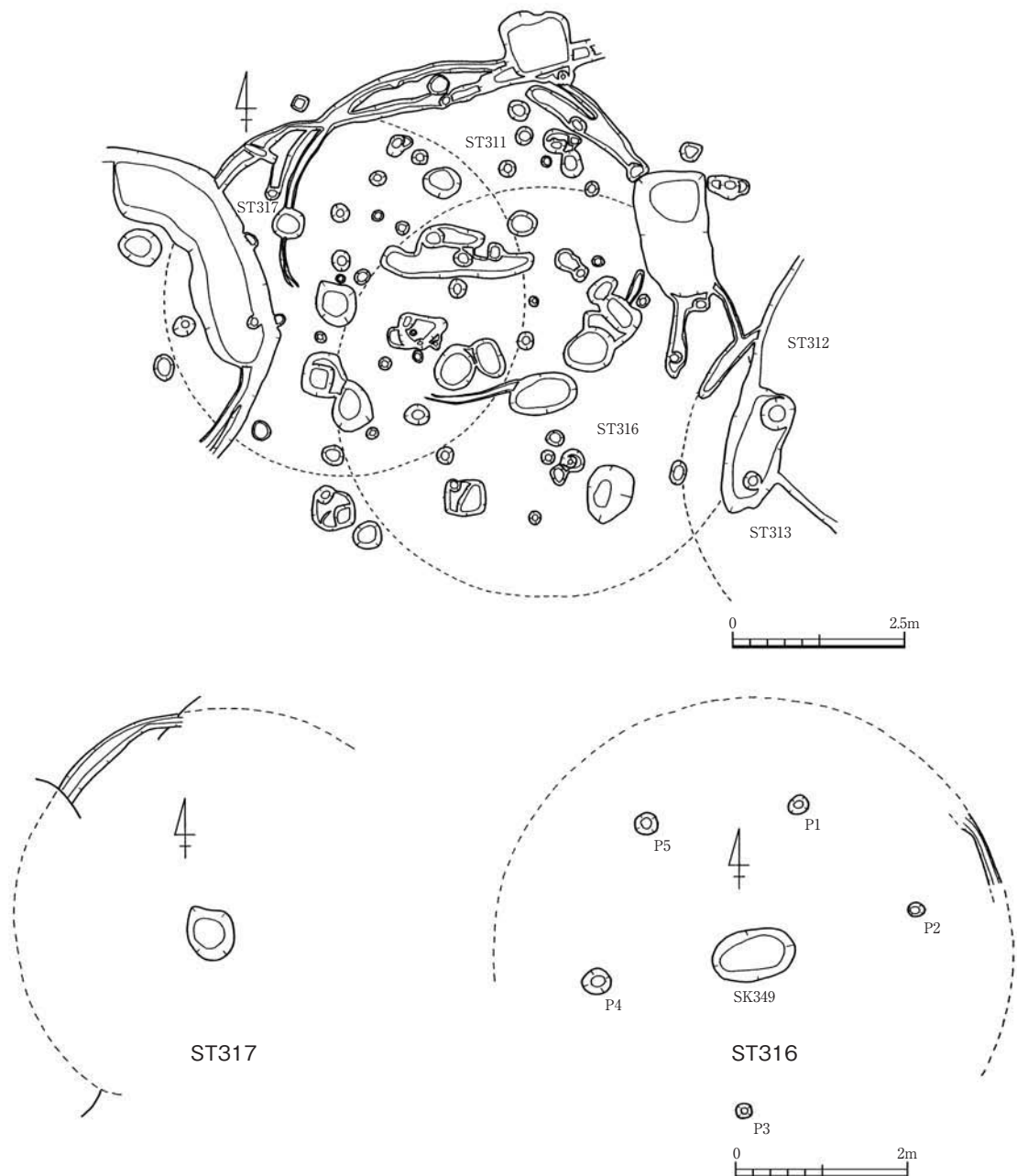
壁溝：数1 幅23cm 深さ5cm

出土遺物：弥生土器

所見；L2区と接する部分で検出遺構が密集しており、ST311(L2区ST228)、SB314・325、SK383など多くの遺構と切り合う。

ST316と同様に残存状況は著しく不良である。弧状になる溝を検出したため住居跡の可能性が高いと考えられ中央ピットの可能性があるピットを検出したため住居跡と確認した。ST317の柱穴となるピットはST311・316と、ほぼ重複しており弁別できず不明である。

出土遺物はなく時期確定は困難であるが、切り合い関係にある溝状の土坑SK383は、V期と考えられ、これより先行する時期にST317は営まれていたと考えられる。



L3-16 図 L3ST316・317

(2) 掘立柱建物跡

L3区では掘立柱建物跡を33棟確認できた。他の調査区に比べて掘立柱建物跡が多い。検出した掘立柱建物跡は柱穴の規模によって大型、中型、小型の3種類に分けることができる。

大型掘立柱建物跡は柱穴の堀方が1mを越えるもので4棟を確認している。特にSB318・319は堀方が1m×2mと大規模で床面にわずかに残る柱痕は直径約40cmを測り田村遺跡群でも最も大きな柱を有する建物跡である。しかし、床面積は他の掘立柱建物跡と大きな差は認められない。

中型の掘立柱建物跡は柱穴の堀方が70cm～100cmのもので柱穴の平面形は楕円形または方形のものが多い。規模は1間×2間の規模のもので多く平面規模は小型のものと同ほとんど変わらないため、高床倉庫の可能性が考えられる。SB322は1間×3間で棟持ち柱を有する建物で他の掘立柱建物跡とは違った性格を持つものと考えられる。

小型のものは柱穴の堀方の直径が20cm～60cmで柱穴の平面形は円形である。規模は1間×3間、1間×2間、1間×1間のものがある。中型掘立柱建物跡と平面積においては大きな差は見られない。小型掘立柱建物跡には棟方向に並行して少し離れて溝状土坑を検出するものがあり、SB303・304・322に溝状土坑が付属している。SB309にもSK324が並行するが棟の規模に比べて規模が小さいため付属遺構になるか不明である。小型掘立柱建物跡は調査区南側に集中して検出しており、約15mの空間をあけ集落の南限を区切ると考えられるSR301がある。掘立柱建物跡は集落の端部に営まれていたと考えられる。

掘立柱建物跡の時期は、その規模によってまとまりがあると考えられ、大型掘立柱建物跡はIII期～IV期、中型掘立柱建物跡はIV2期を中心とする時期、小型掘立柱建物跡はV期前半～V期半ばまでの時期が考えられる。

L3-2表 L3区掘立柱建物跡一覧

遺構名	梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	柱間寸法 梁間×桁行(m)	棟方向	付属施設	時期	備考
L3SB301	1間×2間	2.9m×4.0m	2.9m×2.0m	N-34°-W	—	V2以前	—
L3SB302	1間×2間	1.7m×2.9m	1.7m×1.4m	N-6°-E	—	V5以前	—
L3SB303	1間×3間	2.5m×4.3m	2.5m×1.4m	N-15°-E	SK320	V1～V3	—
L3SB304	1間×4間	3.4m×5.1m	3.4m×1.3m	N-84°-W	SK321	V1～V3	—
L3SB305	1間×3間	2.7m×3.9m	2.7m×1.3m	N-77°-E	—	IV2～	—
L3SB306	1間×3間	3.0m×3.5m	3.0m×1.2m	N-77°-E	—	IV2～	—
L3SB307	1間×2間	1.5m×3.8m	1.5m×1.9m	N-13°-E	—	V1～	—
L3SB308	1間×3間	2.9m×4.2m	2.9m×1.4m	N-70°-E	SK328	—	—
L3SB309	1間×4間	3.2m×4.7m	3.2m×1.2m	N-14°-W	SK324	IV2～V1	—
L3SB310	1間×2間	2.7m×3.5m	2.7m×1.7m	N-80°-E	—	IV1～	—
L3SB311	1間×2間	2.3m×3.3m	2.3m×1.6m	N-80°-E	—	—	—
L3SB312	1間×2間	2.5m×2.9m	2.5m×1.45m	N-56°-W	—	IV1～	—
L3SB313	1間×2間	2.3m×2.9m	2.3m×1.5m	N-58°-E	—	V1	—
L3SB314	1間×2間	2.0m×4.0m	2.0m×2.0m	N-81°-E	—	—	—
L3SB315	1間×3間	2.4m×5.0m	2.0m×1.6m	N-75°-E	—	V1～	—
L3SB316	1間×3間	2.9m×4.2m	2.9m×1.35m	N-4°-E	—	V1	—
L3SB317	1間×2間	2.2m×3.5m	2.2m×1.8m	N-16°-E	—	IV2～V1	—
L3SB318	1間×2間	2.6m×5.0m	2.6m×1.5m	N-78°-E	—	III～IV1	—
L3SB319	1間×2間	2.8m×5.0m	2.8m×1.5m	N-78°-E	—	III～IV1	—
L3SB320	1間×5間	4.4m×10.8m	4.4m×2.1m	N-76°-E	—	古代～中世	—
L3SB321	1間×2間	2.0m×3.4m	2.0m×1.7m	N-15°-W	—	V1～2	—
L3SB322	1間×3間	3.2m×10.0m	3.2m×2.7m	N-80°-W	—	III～	—

遺構名	梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	柱間寸法 梁間×桁行(m)	棟方向	付属施設	時期	備考
L3SB323	1間×2間	3.6m×2.4m	1.8m×2.4m	N-6°-E	—	IV2	—
L3SB324	1間×4(5)間	7.4m×3.0m	3.0m×1.2~1.6m	N-67°-E	—	IV2	—
L3SB325	1間×2間	2.6m×4.1m	2.6m×2.1m	N-70°-W	—	III~	—
L3SB326	1間×1間	2.5m×5.2m	2.5m×5.2m	N-15°-W	—	III~IV1	—
L3SB327	1間×2間	2.4m×2.6m	2.4m×1.3m	N-67°-E	—	—	—
L3SB328	1間×2間	2.5m×2.6m	2.5m×1.3m	N-72°-E	—	V3以前	—
L3SB329	1間×2間	2.2m×3.8m	2.2m×1.9m	N-8°-E	—	—	—
L3SB330	1間×1間	1.8m×3.6m	1.8m×3.6m	N-8°-E	—	III~IV1	—
L3SB331	1間×2間	2.2m×2.7m	2.2m×1.35m	N-57°-E	—	V2~3	—
L3SB332	1間×2間	2.5m×3.6m	2.5m×1.8m	N-0°-E	—	IV2~V1	—
L3SB333	1間×1間	2.2m×2.6m	2.2m×2.6m	N-0°-E	—	—	—

SB301(L3-17 図)

時期；弥生V-2 以前 棟方向；N-34°-W

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.9m×桁行4.0m 面積11.6㎡

柱間寸法；梁間2.9m 桁行2.0m

柱穴数；6 柱穴形；楕円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区東側で検出した棟方向が南北の掘立柱建物跡である。ST310 と切り合い、南西角の柱穴はST310 の埋土下から検出された。

柱穴の平面プランは全て楕円形で、長径80cm~95cmで短径は50cm~70cmである。柱穴の堀方は箱形で、深さは最も残存の良いもので約50cmである。また、P3 には柱痕が残っていると考えられ、規模は、根本に近い部分で直径約25cmであった。柱穴の埋土は暗褐色シルトを主体に黄色ブロックが多く混じる状況で、柱を埋めた土の可能性が考えられる。

埋土中から出土した遺物は細片が多く、図示できるものはないが、薄手土器の口縁が出土する柱穴がありV期前半までの可能性が高いと考えられる。切り合い関係のあるST310 に先行する時期に営まれたものと考えられる。

SB301 の性格は柱穴の規模が大きく、直径約25cm程度の柱が使われていることから高床の可能性が考えられるが、床面積が11.6㎡と広いことから倉庫とは異なった性格を持つ可能性も考えられる。

SB302(L3-17 図)

時期；弥生V-5 以前 棟方向；N-6°-E

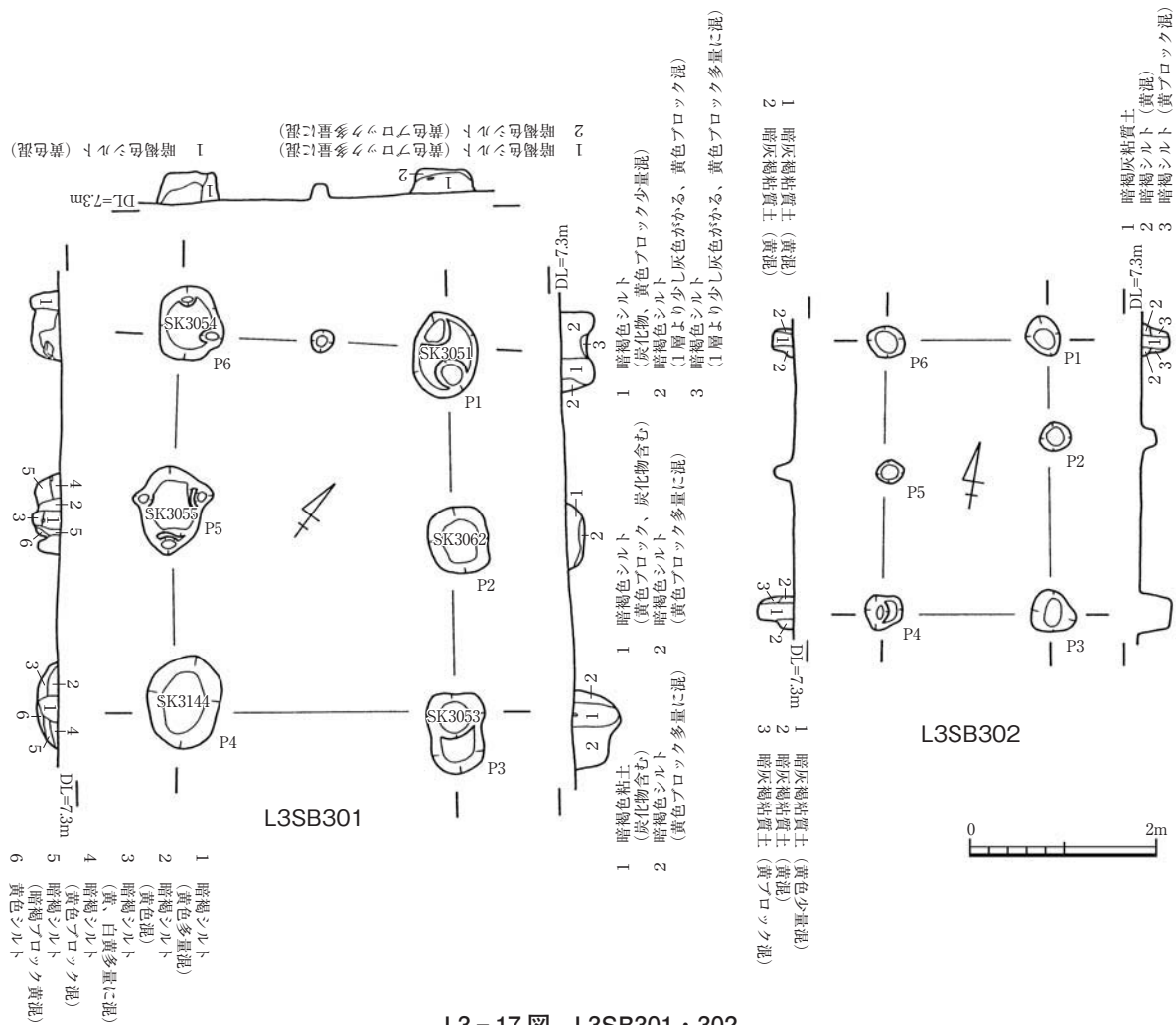
規模；梁間1間×桁行2間 梁間1.7m×桁行2.9m 面積；4.9㎡

柱間寸法；梁間1.7m 桁行1.4m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器



L3-17 図 L3SB301・302

所見：調査区東側で検出した棟方向が南北の掘立柱建物跡で、ST309、SB303 と切り合っている。北東角の柱穴はST309 の埋土上で検出しST309 を切っている。

柱穴の平面形は不整形な円形で、直径 40cm～60cm、深さ 5cm～20cm を測る。桁行の間の柱穴は、直径、深さともに両端のものとは比べて一回り小さくなっている。また、断面確認によると柱痕と考えられる部分が残存しており、直径は 18cm であった。

柱穴の埋土は暗褐色シルトに黄褐色ブロックが混じっていた。遺物の出土はほとんど無く、遺物から時期の推定は不可能であるが、V3 期～V5 期と考えられる。ST309 を切っていることから、V5 期以前の時期と考えられる。

SB303 (L3-18 図)

時期：弥生V1～V3 **棟方向：**N-15°-E

規模：梁間 1 間×桁行 3 間 梁間 2.5m×桁行 4.3m **面積：**10.8m²

柱間寸法：梁間 2.5m 桁行 1.4m

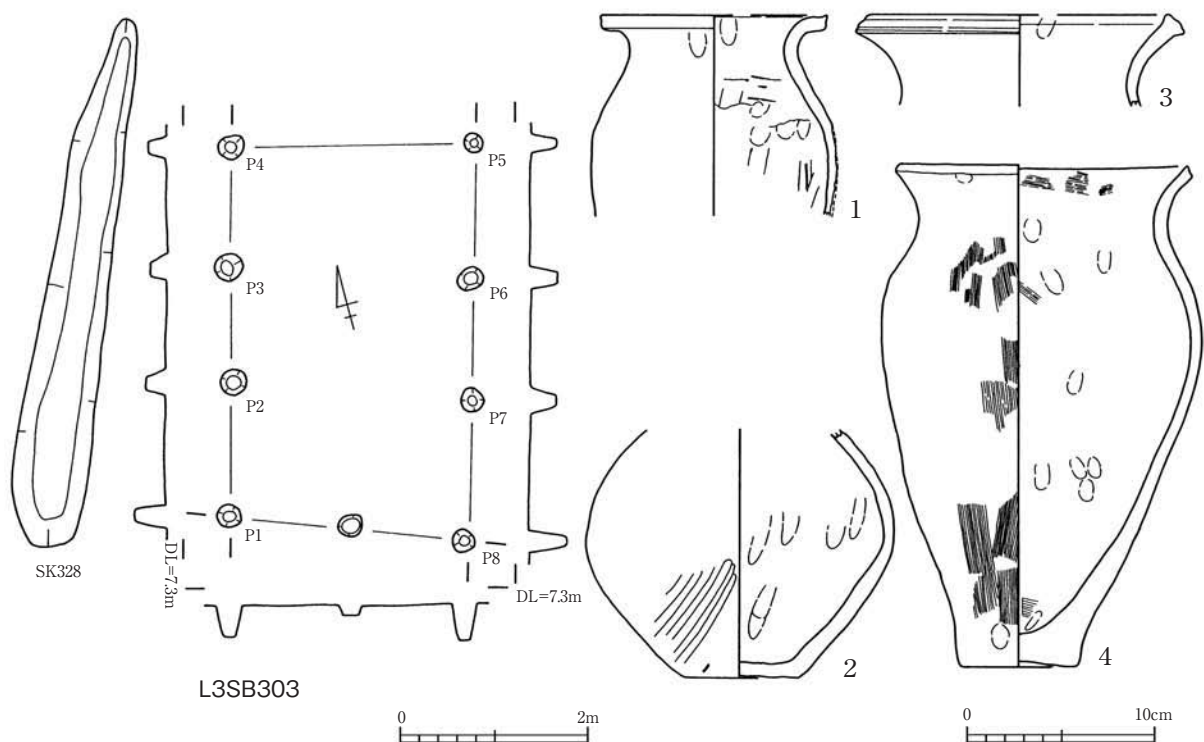
柱穴数：9 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：SK320

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区東部で検出した棟方向が南北の掘立柱建物跡である。SB302 と北側で重複する。梁間は1間と考えられ、間の柱穴は棟持ち柱の柱穴と考えられるが北側では検出できなかった。検出した柱穴は、いずれも直径 30cm弱で、深さは、15cm～40cmであった。また、西側の桁に沿うように溝状の土坑SK320を検出しており規模は 5.7m×0.7mを測る。深さは約 30cm、断面形はかまぼこ型のしっかりしたもので北側が浅くなっていた。わずかに軸方向は異なるが、掘立柱建物跡に付属したものと考えられる。

掘立柱建物跡に伴う遺物は、柱穴中より出土のものは、弥生土器の小片が2点のみであったが付属すると考えられる溝状土坑からは土器が多く出土しており、完形復元できる甕をはじめ、口縁部では凹線文 10 点、口縁部拡張気味のもの 4 点、貼付口縁 3 点が出土している。4 は完形の甕で、器形的には緩やかな頸部状の部分を持つもので在地系のものと考えられるが、口縁部に粘土帯貼付はみられない。1 も在地系の甕と考えられるが、口縁部に粘土帯貼付痕跡はみられない。しかし、口縁端部に面を作る時に粘土を上から貼付ける事によって面を作り出していた痕跡がみられ手法的には貼付口縁と同じと考えられる。また、この甕は内面に上胴部までケズリ痕跡が残っており、在地系の甕が一般に内面にケズリ痕跡がない事と異なった様相をしめしている。これらの特徴から、出土した土器の時期は、V期初頭～V期前半と考えられる。



L3-18 図 L3SB303

SB304(L3-19 図)

時期：弥生V-1～V-3 棟方向：N-84°-W

規模：梁間1間×桁行4間 梁間3.4m×桁行5.1m 面積：17.3㎡

柱間寸法：梁間3.4m 桁行1.3m

柱穴数：10 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：SK321

出土遺物：弥生土器

所見：調査区南東部で検出した棟方向が東西の掘立柱建物跡で、周辺からは掘立柱建物跡を多く検出しており、SB329と重複した状態で検出した。検出した柱穴は円形で直径約20cm～35cmで、深さは約10cm～20cmであった。柱穴のなかには柱痕が残るものがあり、柱痕は直径が10cm～15cmであった。北側の桁から約1.4m離れて沿うように溝状の土坑SK321を検出している。SK321は3.8m×0.5mで、深さは約20cm、U字状の断面形をしており、埋土は暗褐色シルトに黄褐色ブロックの混じるものが主体であった。

掘立柱建物跡に伴う遺物は、柱穴、SK321ともにほとんど出土していない。このためSB304の時期は不明であるが、SB304はSB303と近接し、棟方向がほぼ直交していることや桁側に溝状土坑を持つことから同じ性格とみられ、同一時期の可能性が高いと考えられる。

SB305(L3-19 図)

時期：弥生IV-2～ 棟方向：N-77°-E

規模：梁間1間×桁行3間 梁間2.7m×桁行3.9m 面積：4.9㎡

柱間寸法：梁間2.7m 桁行1.3m

柱穴数：8 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器

所見：調査区南側の掘立柱建物跡が集中する場所で検出しSB306・311とは重複している。SB306とは、同一の規模軸方向を持ち、わずかに平行移動したような位置関係で建て直しの可能性が考えられるが、先後関係は不明である。

検出した柱穴はいずれも円形で約20cm～35cmで深さは約17cm～約30cmであった。埋土は暗褐色シルトが主体である。掘立柱建物跡に伴う遺物は土器の細片がわずかに柱穴中より出土したのみで時期は不明であるが、建て替えの関係にあると考えるSB306とは時期差がないものと考えられIV2期以降と考えられる。

SB306(L3-19 図)

時期：弥生IV2～ 棟方向：N-77°-E

規模：梁間1間×桁行3間 梁間3.0m×桁行3.5m 面積：10.5㎡

柱間寸法：梁間3.0m 桁行1.2m

柱穴数：8 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器

所見：調査区南部掘立柱建物跡が集中する部分から検出した棟方向が南北の掘立柱建物跡で、SB305・311 と重複しており、SB305 とは、棟方向も同一である。

柱穴の規模は直径約 20cm～35cm で深さは約 20cm～30cm であった。柱穴の埋土は暗褐色シルトが主体である。埋土中からの遺物の出土は、細片のみで時期の確定は困難であるが、口縁細片や胎土からIV期末以降の可能性が考えられる。SB305 とは建て替えの関係と考えられるが先後関係は不明である。

SB307(L3-19 図)

時期：弥生V-1 ～ 棟方向：N-13°-E

規模：梁間1間×桁行2間 梁間1.5m×桁行3.8m 面積：5.7㎡

柱間寸法：梁間1.5m 桁行1.9m

柱穴数：6 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器

所見：調査区南部でSB331・305 に隣接している棟方向が南北の掘立柱建物跡である。梁間1間×桁行2間と考えられるが、西側の桁行軸線上にピットを検出しており、1間×3間の可能性も考えられるが、1.5m×5.6m と非常に細長くなり、現在まで、弥生時代の掘立柱建物跡でこのような平面プランを持つものは検出されていないため、梁間1間×桁行2間の掘立柱建物跡として考えたい。

柱穴は6個検出しており、全て円形で直径は25cm～35cm、深さは10cm～35cmである。埋土は、灰褐色土で柱痕と考えられる部分が残存しているピットがあり柱痕の直径は約10cmであった。

掘立柱建物跡に伴う遺物はほとんど無く時期確定は困難であるが、その胎土からV1期～の可能性が考えられる。

SB308(L3-19 図)

時期：弥生 棟方向：N-70°-E

規模：梁間1間×桁行3間 梁間2.9m×桁行4.2m 面積12.2㎡

柱間寸法：梁間2.9m 桁行1.4m

柱穴数：8 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：SK328

出土遺物：弥生土器

所見：調査区南側で検出した棟方向が東西の掘立柱建物跡で、SK323・329、と切り合いSB310 と隣接している。SK331 と切り合っているSK328 はSB308 の棟方向と同一方向に延びており付属する可能性が高いと考えられる。

検出した柱穴は 8 個であるが、南東角の柱穴はSK323 埋土から掘り込まれていた。柱穴の直径は約 30cm で深さは 20cm～30cm であり、直径約 10cm の柱痕が残存するものがあつた。柱穴の埋土は暗褐色土で土器はほとんど入らず、弥生土器の胴部細片のみ出土している。

SB308 に付属すると考えられるSK328 は全長約 4.5m、幅約 0.6cm で深さは 6cm の浅いものである。埋土は暗褐色土で埋土中からは細片のみが出土している。

SB308 の時期はSK329 より後出するが時期確定はできなかつた。

SB309(L3-19 図)

時期；弥生IV-2～V-1 棟方向；N-14°-W

規模；梁間 1 間×桁行 4 間 梁間 3.2m×桁行 4.7m 面積；15.04㎡

柱間寸法；梁間 3.2m 桁行 1.2m

柱穴数；10 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；溝状土坑SK324

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区南側で検出した棟方向が南北の掘立柱建物跡である。周辺では掘立柱建物跡を集中して検出しておりSB313 と重複している。検出した柱穴は 10 個で不整形なものもみられるがほぼ円形で、北東角P1 は 2 個のピットが切り合った状態であつた。柱穴の直径は 25cm～35cm で深さは 10cm～35cm で埋土は暗褐色土が主体である。柱痕と考えられる部分が残存しているものがあり直径は約 10cm であつた。

東側の桁に添うように長さ 2.4m、幅約 0.4m の溝状土坑SK324 を検出しており、SB309 に付属する可能性が高いと考えられるが、桁行の長さに対して長さが短く、雨落ち溝としては機能しないと考えられ、独立した遺構の可能性も考えられる。埋土は暗褐色土であつた。

掘立柱建物跡に伴う遺構からの遺物出土は柱穴からのものはほとんど無く、時期は不明であるが、溝状土坑SK324 からは、IV期末～V期の可能性が考えられる凹線文口縁部や、拡張気味の口縁部が出土している。重複しているSB313 との先後関係は不明である

SB310(L3-20(1)図)

時期；弥生IV-1～ 棟方向；N-80°-E

規模；梁間 1 間×桁行 2 間 梁間 2.7m×桁行 3.5m 面積；9.45㎡

柱間寸法；梁間 2.7m 桁行 1.7m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区南西部で検出した棟方向が東西の掘立柱建物跡でSK332 と切り合っている。検出した柱穴は 6 個で南西角柱穴は、SK332 を切った状態で検出した。柱穴の平面形はいずれも円形で、直径は 25cm～60cm で東側の柱穴が他の柱穴より大きな堀方を持っていた。柱穴の深さは 30cm～

40cmであった。柱痕の残るものがあり柱の直径は10cm～15cmと考えられる。

柱穴の埋土は、暗褐色土で、出土した遺物は細片のみでSB310の時期の確定は困難であるが、切り合い関係にあるSK332はIII期～IV期の可能性が高いと考えられるST306に切られているが近似した時期の可能性が高くIII期～IV1期と考えられる。またSB310はST306と同時併存は不可能と考えられる。このためSB310が最も後出しIV1期以降の可能性が考えられる。

SB311(L3-20(1)図)

時期；弥生 棟方向；N-80°-E

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.3m×桁行3.3m 面積；7.59㎡

柱間寸法；梁間2.3m 桁行1.6m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区南東部ST314の南側に位置する棟方向南北の掘立柱建物跡でSB305と重複している。検出した柱穴は6個で全て円形である。直径は約30cmで深さは10cm～55cmであった。

柱穴の埋土は暗褐色土で埋土中からは遺物は細片が少量出土するのみで時期の確定はできなかった。

SB312(L3-20(1)図)

時期；弥生IV-1～ 棟方向；56N°-W

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.5m×桁行2.9m 面積；7.25㎡

柱間寸法；梁間2.5m 桁行1.45m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区南西部で検出した棟方向が南北の掘立柱建物跡でST308を切っている。検出した柱穴は6個でいずれも円形で、直径は20cm～30cm、深さは約50cmであった。柱痕が残存しているものでは柱の直径は約15cmであった。

柱穴の埋土は暗褐色土で、埋土中からは弥生土器の細片のみが出土している。SB312の時期は確定できないがP5・6がST308の埋土を掘り込んでおり、III期～IV1期と考えられるST308より後出する事からIV1期～の可能性が考えられる。

SB313(L3-20(1)図)

時期；弥生V-1 棟方向；N-58°-E

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.3m×桁行2.9m 面積；9.45㎡

柱間寸法；梁間2.3m 桁行1.5m

柱穴数：6 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器

所見：調査区南部で検出した棟方向が東西の掘立柱建物跡で、SB309 に付属していると考えられるSK324 と切り合っていた。また、SB309 とSB331 と重複している。柱穴は6個を検出しており、平面形は円形で直径は30cm～40cm、深さは25cm～45cmであった。柱痕と考えられる部分が残存しており、その直径は10cmであった。

柱穴の埋土中は黄色ブロックの混じる暗褐色土で、遺物は弥生土器の胴部片のみが出土し、胎土からV期以降の可能性が考えられる。

他の遺構との切り合いでは、IV2期～V1期と考えられるSK324 がSB313 のP2 を切っているが、時期差はないものと考えられる。また、SB331 とは先後関係は不明であるが重複しており、規模、棟方向がほぼ同一であることから建て替えの可能性が考えられ、SB331 とともに時期差はないと考えられる。

SB314(L3-20(2)図)

時期：弥生 棟方向：N-81°-E

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.0m×桁行4.0m 面積：8.0㎡

柱間寸法：梁間2.0m 桁行2.0m

柱穴数：6 柱穴形：楕円形、方形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器

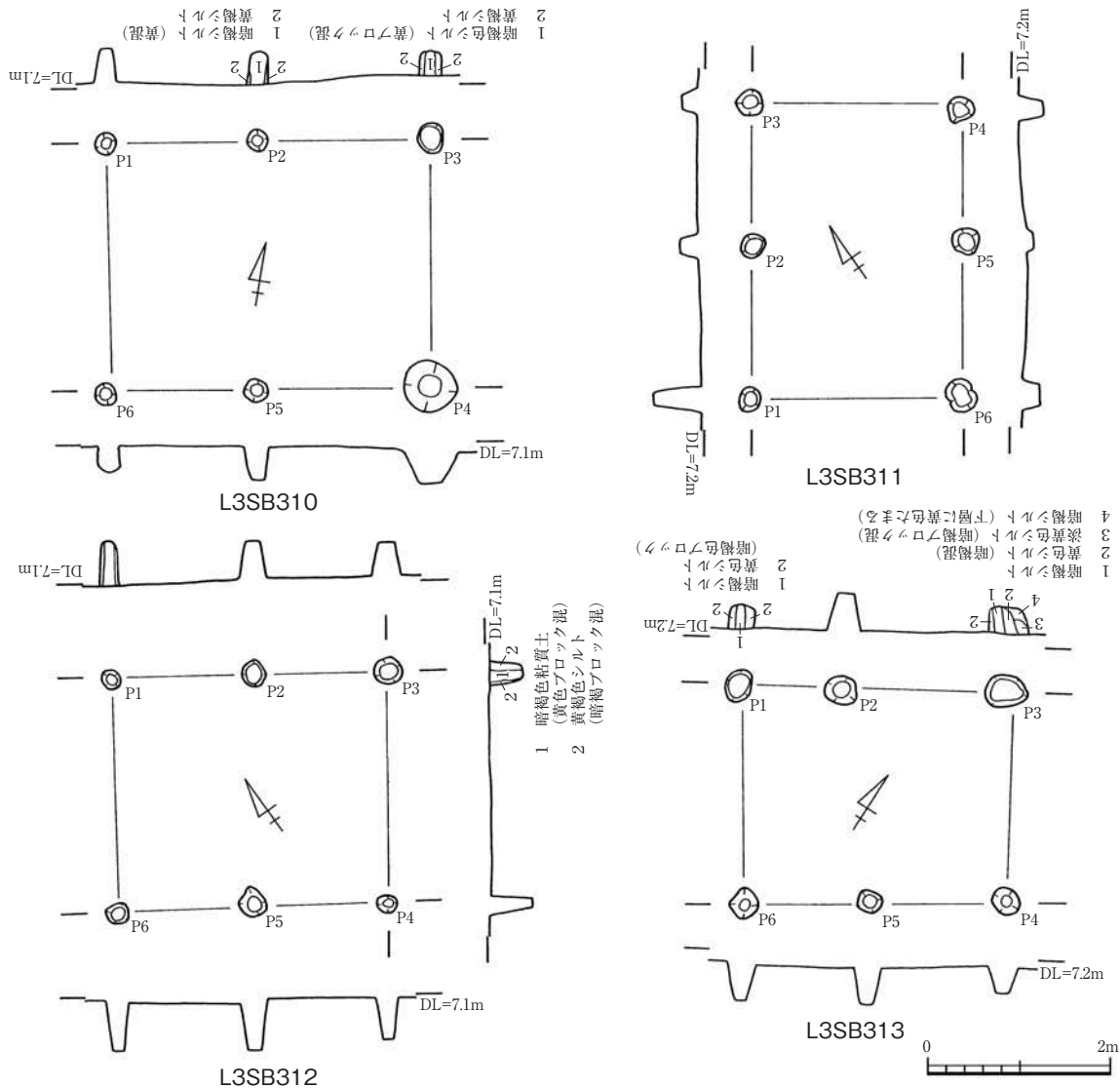
所見：調査区中央部の遺構が集中している部分から検出した棟方向が東西の掘立柱建物跡で、ST311・316・317 と切り合い、SB325 と重複している。

検出した柱穴は、平面形が楕円形～方形で、方形の柱穴は一辺が約60cmの正方形の堀方を持ち、楕円形のもの長軸65cm～85cm、短軸60cm～80cmの規模を持つ。深さは、約50cmが残存している。P4 は柱痕が残存している可能性があり柱の直径は約25cmと考えられる。

柱穴の埋土は、暗褐色土に黄ブロックが多く混じるもので埋土中からの遺物出土は少なく時期を確定できるものはなかった。

他の遺構との関係は、切り合っている竪穴住居跡の埋土が残存していなく、遺構検出時には床面の遺構が検出されていたため、先後関係は不明である。

SB314 は、調査区南側で検出した柱穴が円形で直径20cm～30cmの掘立柱建物跡とは異なり、柱の直径が約25cmと大きく、柱穴の大きさに比して柱間距離が短く梁間と桁行の柱間距離がほぼ同じで力学的に強い構造を持っていると考えられ、高層又は重量物に対応した建物と考えられる。



L3-20(1) 図 L3SB310 ~ 313

SB315(L3-20(2) 図)

時期：弥生V-1 ~ 棟方向：N-75°-E

規模：梁間1間×桁行3間 梁間2.4m×桁行5.0m 面積：12.0㎡

柱間寸法：梁間2.0m 桁行1.6m

柱穴数：7 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器

所見：調査区北側の遺構が多く検出されている部分から検出した棟方向が東西の掘立柱建物跡で、SB316・321とは切り合い関係にある。

検出した柱穴は直径30cmの円形で、深さは20cm～40cmであった。柱穴の埋土は、暗褐色土で、柱痕と考えられる部分が残存しているものもみられ、柱痕の直径は約15cmであった。

SB317(L3-21 図)

時期：弥生IV-2～V-1 棟方向：N-16°-E

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.2m×桁行3.5m 面積：7.7㎡

柱間寸法：梁間2.2m 桁行1.8m

柱穴数：6 柱穴形：円形

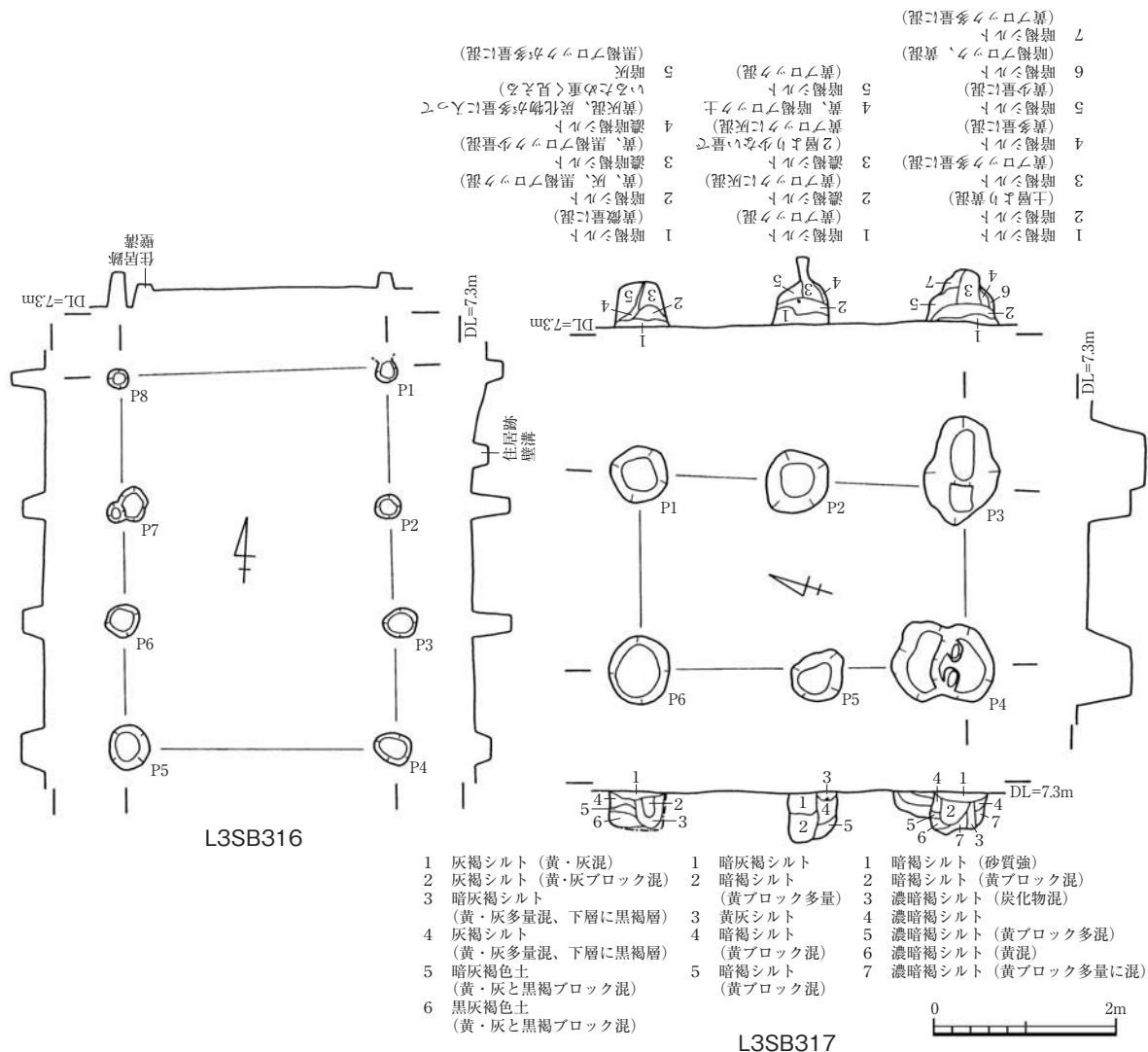
性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器

所見：調査区北側の遺構が多く検出されている部分で検出した棟方向が南北の掘立柱建物跡である。SB317のP3・4はSB322の柱穴と切り合っていた。

検出した柱穴は不整形な円形で直径55cm～70cm、深さは約50cmであった。直径約30cmの柱痕と考えられる部分が残存していた。

柱穴の埋土は暗褐色土が中心で黄褐色土にブロック状が多量に入る部分が見られる。埋土中から



L3-21 図 L3SB316・317

出土した遺物は少ないが、凹線文が施されている口縁部片が出土しており、IV期末～V期前半が考えられる。P5からは中世の瓦質鍋片が出土しているが、混入と考えられる。

他の遺構との先後関係では、SB322のP1を切っておりSB317が後出すると考えられる。

SB317は、柱の直径が約30cmと大きいが、柱間が狭い特徴を持ち、力学的に強い構造を持っていると考えられ、高床式の倉庫の可能性が考えられる。約2.8m東側に棟方向、規模ともほぼ同一のSB321があり並んで建っていた可能性が考えられる。

SB318(L3-22 図)

時期；弥生III～IV-1 棟方向；N-78°-E

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.6m×桁行5.0m 面積；10.3㎡

柱間寸法；梁間2.6m 桁行1.5m

柱穴数；6 柱穴形；長方形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区東側で検出した棟方向が東西の大型の柱穴を持つ掘立柱建物跡である。ST304、SK309・373・391、SX301と切り合っている。

検出した柱穴は6個で柱穴の平面形は、長方形を基本とするが、長軸側に溝状部分や突出部分を持つものがある。柱穴の規模は、長さ1.3m～1.6mで幅約1.2mである。深さは、0.7m～1.0mが残存しており柱穴は、基底層と考えられる礫層まで掘り込まれていた。断面形は横断面は箱形であるが、縦断面は、建物外側方向が緩やかな傾斜になっており、P4・5は段状で溝状部分が付属している。

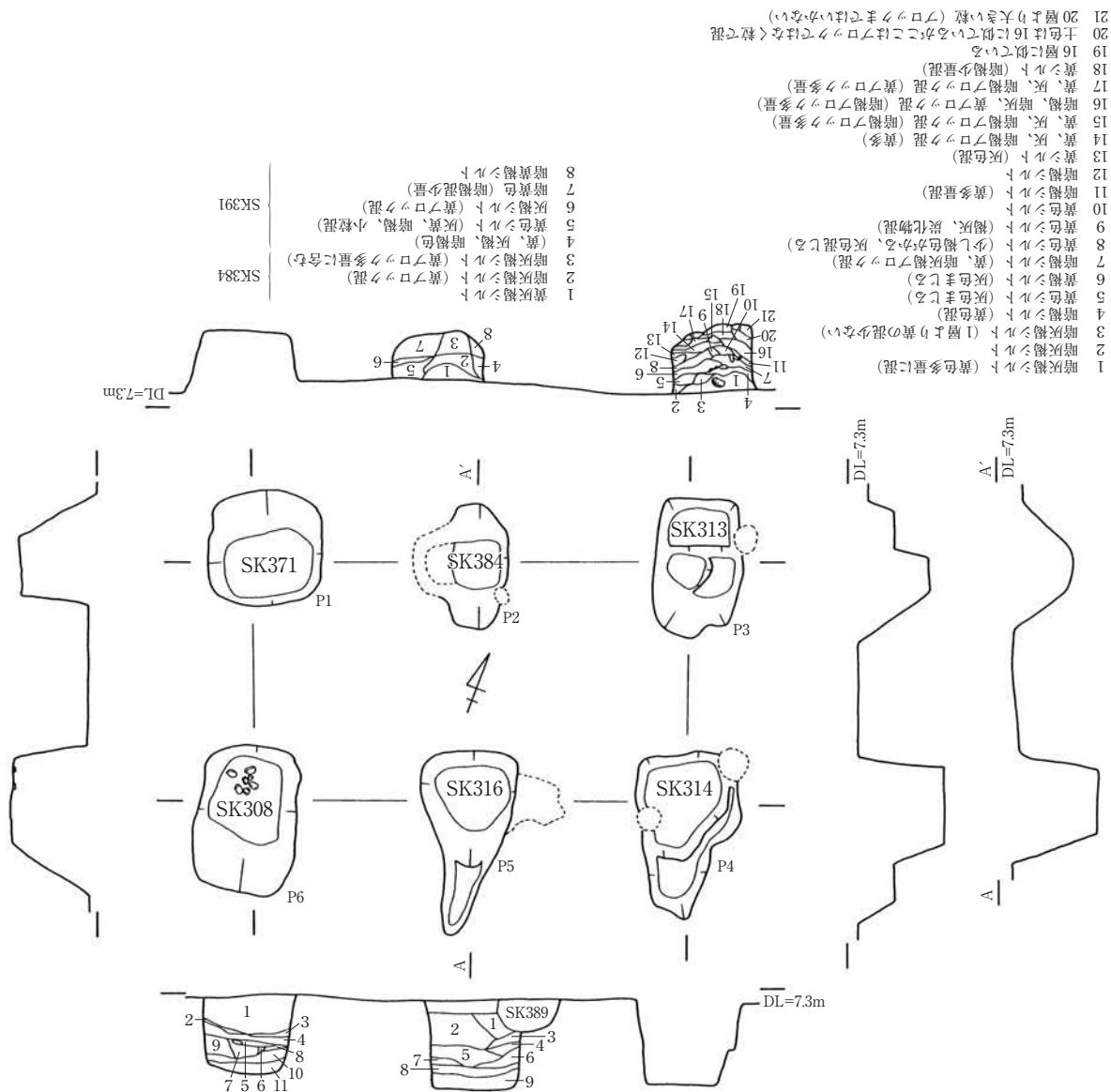
埋土は、黄褐色ブロックが多く混じる暗褐色土が中心でほぼ同一の埋土であった。埋土中からの遺物出土は柱穴の規模に比べて少ない。

SB318の時期は、埋土中から時期確定できる遺物の出土が少なく困難であるが、凹線文土器がほとんど出土しないことや、胎土に砂粒を多く含む薄手土器片がどの柱穴からも出土している事から遺物は弥生時代III期～IV期前半の時期の可能性が考えられる。

他の遺構との関係では、V期初頭と考えられるST304の床面からP2が検出されていることからSB318はV期以前に埋め戻されていたと考えられる。SK309はSB318を切っているが時期は不明である。SK391はP2を切っているが同じく遺物がほとんど出土していないため時期が不明である。

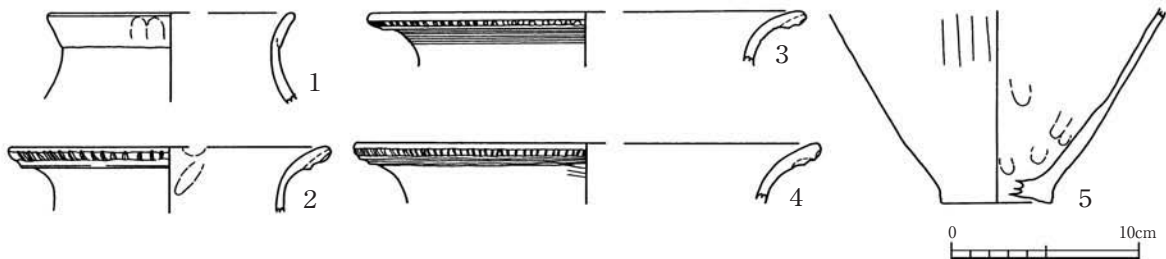
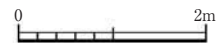
この掘立柱建物跡は建物の面積に比べて柱穴が大きく、柱穴の床面の沈み込みによってわずかに残存していた柱痕とみられる部分の直径は約40cmを測り、他の掘立柱建物跡と比べて格段に大きい。これらから、重量物に耐えうる構造をしていたと考えられるが、当調査区で検出した高床倉庫の可能性が考えられる掘立柱建物跡と比較しても格段に大きいため、特殊な性格を持つ建物と考えられる。

SB319は規模、棟方向が同一で、約3.3m西側に所在しており、性格もほぼ同じものと考えられ同時併存していた可能性が高い。SB318・319は集落の象徴的な建物の可能性が考えられる。



- 1 暗灰褐粘質土に黄褐色ブロック多く入る。
- 2 暗灰色砂（わずかに褐色粒子入る）
- 3 灰色シルト
- 4 黄褐色粘質土に暗褐色ブロック入る。
- 5 黄褐色粘質土わずかに褐色粒子入る。
- 6 黄褐色粘質土に砂混じる。
- 7 灰褐色粘質土に細い黄褐色ブロック混じる。
- 8 黄褐色粘質土褐色ブロック少し入る。
- 9 黄褐色粘質土に灰色砂質土、暗褐ブロック入る。
- 10 黄褐色粘質土わずかに灰色粘質土入る。
- 11 黒灰褐色粘質土に黄褐色ブロック入る（版築状）

- 1 暗褐シルト（灰色がかかる、黄ブロック多混）
- 2 暗褐シルト（黄ブロック混）
- 3 暗灰シルト（黄ブロック多混）
- 4 3層と似ているが、暗灰、黄が均等にさまざまである。
- 5 暗灰褐粘土（黄ブロック多量、炭化物混）
- 6 黄色シルト（10cmまでの石混）
- 7 黄色粘土
- 8 暗灰褐粘土（5層と似ているが、粘性が強い）
- 9 黄色粘土（砂粒が混、10cmまでの石も多く混）



L3-22 図 L3SB318

SB319(L3-23 図)

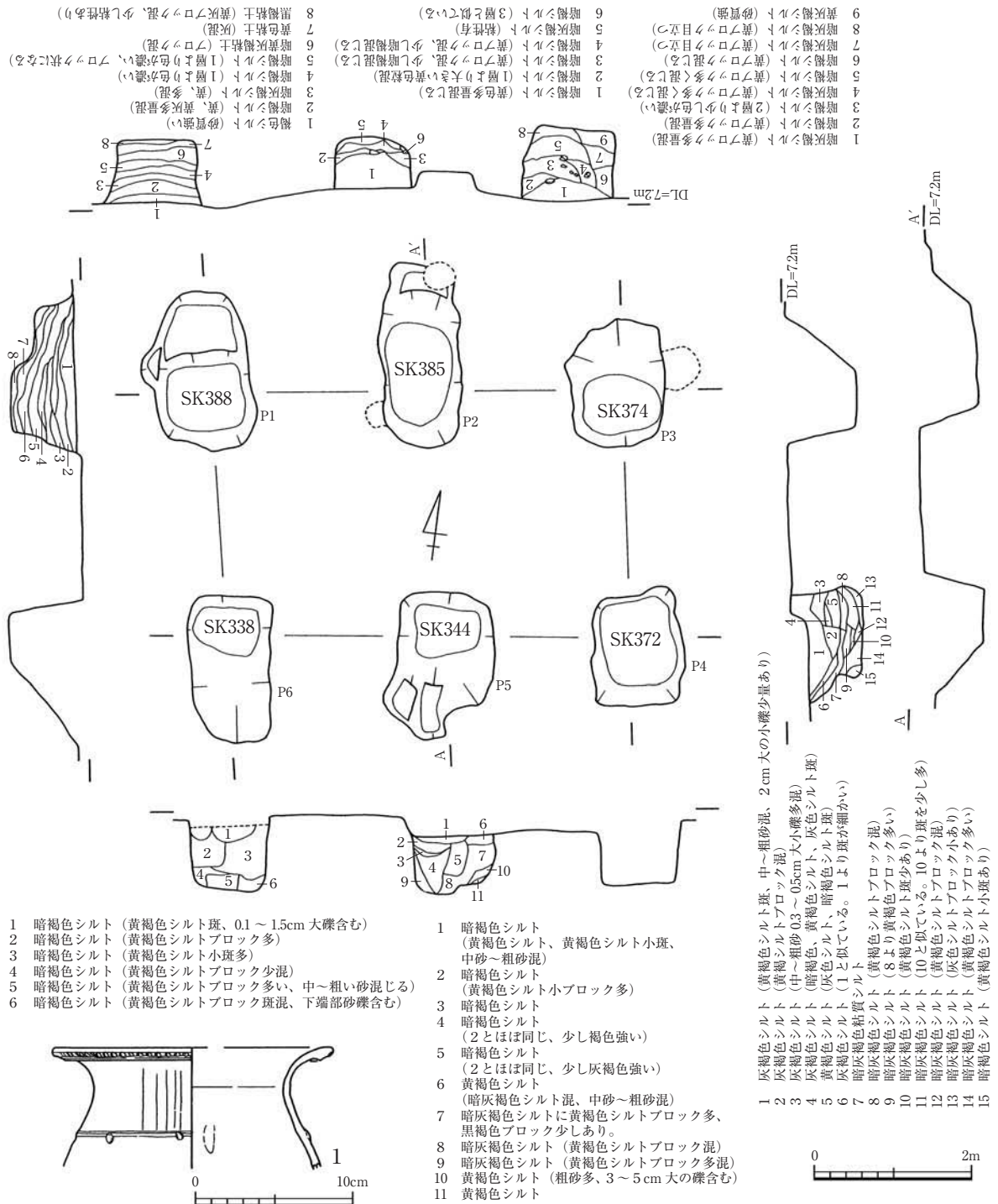
時期：弥生III~IV-1 棟方向：N-78°-E

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.8m×桁行5.0m 面積：14㎡

柱間寸法：梁間2.8m 桁行1.5m

柱穴数：6 柱穴形：長方形

性格：— 付属施設：—



L3-23 図 L3SB319

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区中央部の遺構が密集した部分で検出した棟方向が東西の大型掘立柱建物である。ST311・312・316、SB322・326と切り合っている。

検出した柱穴は6個で柱穴の平面形は、長方形を基本とするが、不整形なものがみられる。

柱穴の規模は、長さが1.6m～2.4mで、幅1.0m～1.3mである。深さは約0.7m～0.9mが残存しており、基底層と考えられる礫層まで掘削している。断面形は横断面は箱形をであるが、縦断面は、建物外側方向に緩やかな傾斜になっており、P1は段状になっていた。

埋土は、黄褐色ブロックが多く混じる暗褐色土が中心でほぼ同一の埋土であった。埋土中からの遺物出土は柱穴の規模に比べて少ない。P2からわずかに凹線文土器が出土している以外は、ほとんど凹線文土器が出土しないことや、胎土に砂粒を多く含む薄手土器片が、どの柱穴からも出土している事から、遺物からはSB319は弥生時代III期～IV期前半の時期の可能性が考えられる。

SB319と切り合いのある遺構との関係では、ST311・316、SB322をSB319が切っておりSB319が最も後出している。ST311は弥生時代III期～IV期、SB322はV期以前と考えられるが時期は不明である。ST312は弥生時代V期前半と考えられ、埋土下からP5を検出しておりSB319が先行している。

これらのことからSB319はIV期前半の可能性が高いものと考えられる。

この掘立柱建物跡は東側に並んだ状態のSB318と規模や柱穴の形態がほぼ同じで、棟方向も同じでありその性格も同様と考えられ、特殊な性格を有するものと考えられる。

SB320(L3-24 図)

時期；古代～中世 **棟方向**；N-76°-E

規模；梁間1間×桁行5間 梁間4.4m×桁行10.8m **面積**；47.5㎡

柱間寸法；梁間4.4m 桁行2.1m

柱穴数；9 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区南端部に近いSR301の南側で検出した棟方向が東西の掘立柱建物跡である。SR301から南側の部分は遺構密度が低く住居跡、土坑などの明確な遺構が検出されなく、ピットを散漫な状態で検出し明確に遺構と考えられる遺構はこのSB320のみである。

柱穴は9個を検出し1個は棟持ち柱の可能性が高く、残り8個の柱穴を検出しているが、建物の規模は、1間×5間の規模と考えられ、2個の柱穴を検出することができなかった。

柱穴の規模は直径35cm～55cmで深さは約20cmであった。柱穴の埋土は、灰色～灰褐色土であった。埋土からの遺物の出土はほとんど無く遺物から時期を確定することは困難であった。

この掘立柱建物跡の時期は埋土が灰色を中心としたものであることや、周辺に弥生時代の遺構が存在せず弥生時代の集落はSR301を南限にしていると考えられることから、古代～中世の可能性が考えられ、中世の可能性が高いと考えられる。

SB321 (L3-24 図)

時期：弥生V-1～2 棟方向：N-15°-W

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.0m×桁行3.4m 面積：6.8㎡

柱間寸法：梁間2.0m 桁行1.7m

柱穴数：6 柱穴形：円形

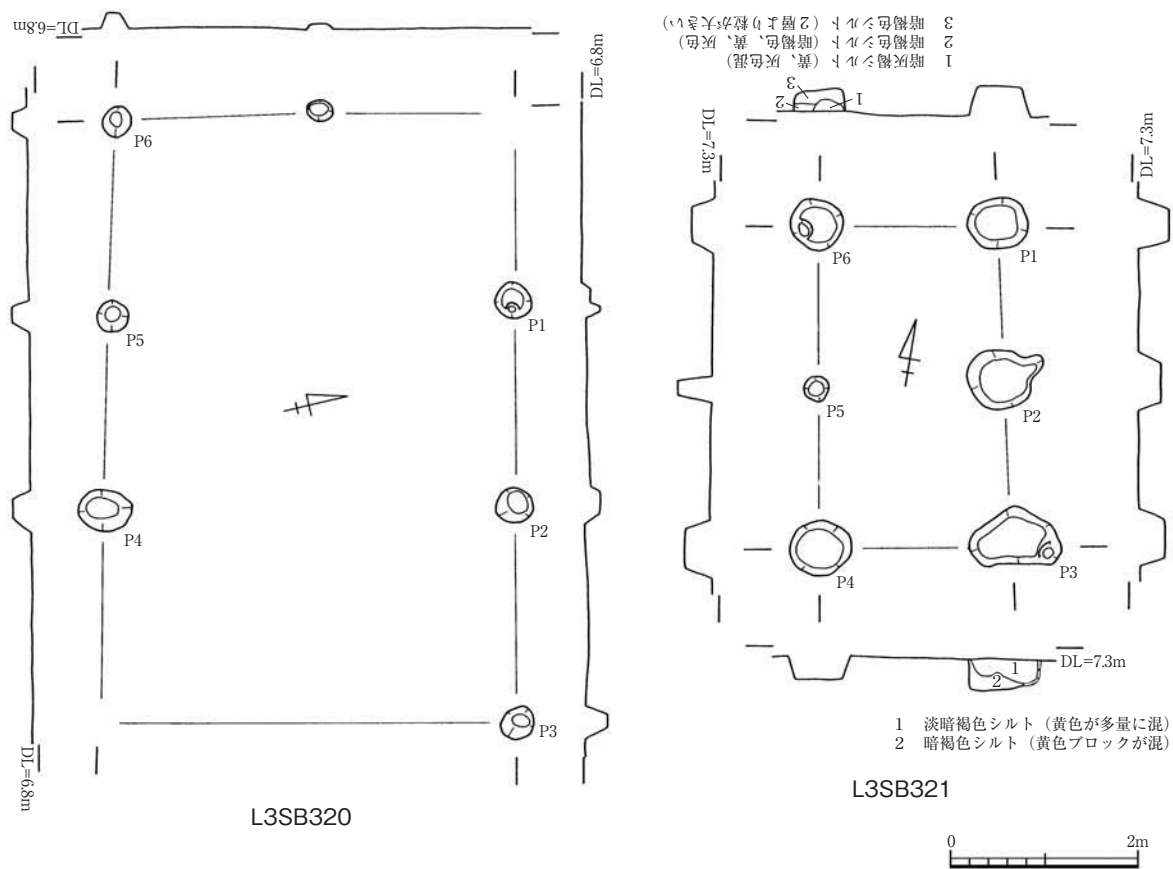
性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器

所見：調査区北部で検出した棟方向が南北の掘立柱建物跡である。周辺は遺構の密度が高くSB315と切り合い、SK319とは重複している。

検出した柱穴は6個でP5をのぞいて直径65cmで深さは、20cm～30cmであった。

埋土中からの出土した遺物は、弥生土器の細片のみで時期を確定できるものは出土しなかったが、胎土から中期末以降の可能性が考えられる。切り合い関係にあるSB315との先後関係は不明であり、重複しているSK319は弥生時代中期末と考えられる。規模や棟方向に共通性が考えられるSB317はIV期末～V期前半と考えられ同時併存し2棟並んでいた可能性が考えられることから、SB321の時期は後期初頭～前半の可能性が高いと考えられる。



L3-24 図 L3SB320・321

SB322(L3-25 図)

時期：弥生III～ 棟方向：N-80°-W

規模：梁間1間×桁行3間 梁間3.2m×桁行10.0m 面積：32.0㎡

柱間寸法：梁間3.2m 桁行2.7m

柱穴数：10 柱穴形：楕円形

性格：— 付属施設：—

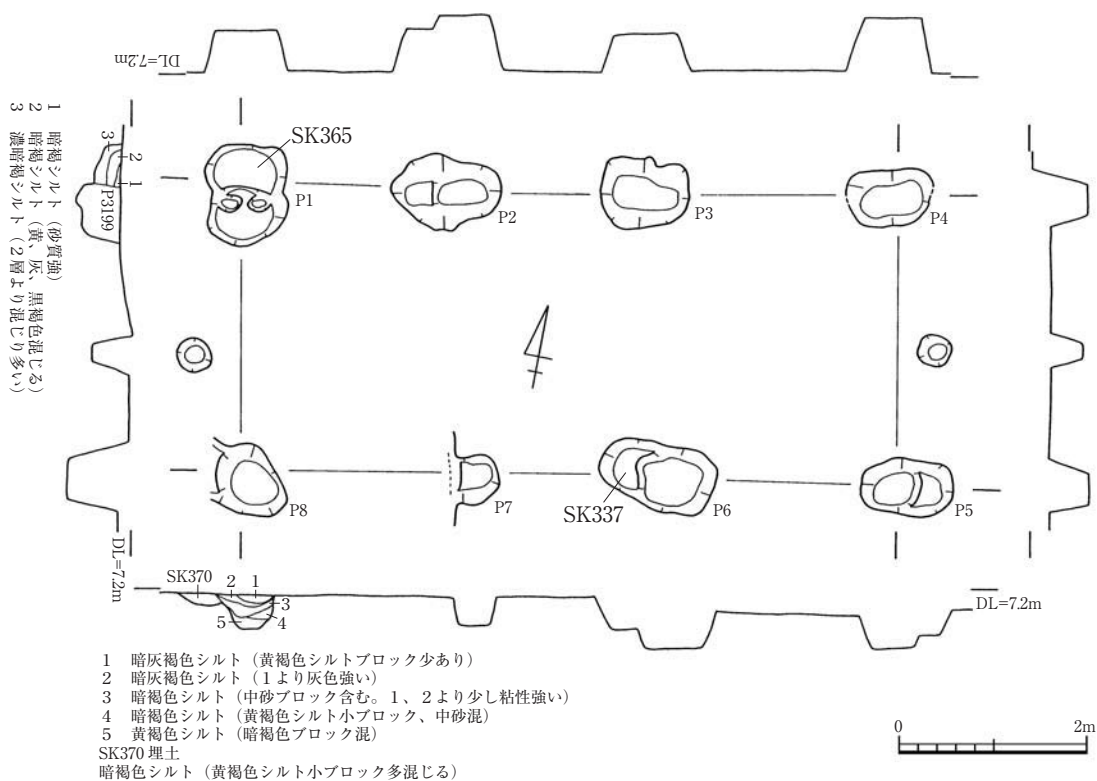
出土遺物：弥生土器

所見：調査区北部で検出した棟方向が東西の当調査区で最も床面積の広い掘立柱建物跡である。周辺は遺構の密度が高く多くの遺構と切り合いがみられ、ST304、SB317・319、SK339と切り合い関係にある。

柱穴は10個を検出し、その内2個は棟持ち柱と考えられる。柱穴の堀方は棟持ち柱が円形であるが、その他はすべて楕円形である。規模は棟持ち柱の柱穴は、直径約40cmで深さは40～45cmであった。他の柱穴は長径0.9m～1.0mで短径は約0.6mで深さは30cm～60cmであった。

柱穴の埋土は暗灰褐色土で埋土中からの遺物出土は少なく、時期の確定は困難であった。

他遺構との関係では柱穴のうち、P1・2はSB317に切られており、P5はST304の中央ピットに切れ、P6はST304、SK393と切り合い、P7は大型掘立柱建物跡であるSB319のP3に切られていた。SB322の時期は、P5を切っているST304は後期初頭の可能性が考えられ、P2を切るSB317は後期前葉までに埋没した可能性が高く、P7を切るSB319がIII期以降の可能性が高いことなどが



L3-25 図 L3SB322

らSB322 はIII期の可能性が高いと考えられる。

SB322 は、SB301 と柱穴の規模や堀方、柱間寸法に共通点はあるが、棟持ち柱を持ち床面積が広い
ため別の性格を持つ可能性が考えられる。

SB323 (L3-26 図)

時期；弥生IV-2 棟方向；N-6°-E

規模；梁間 1 間×桁行 2 間 梁間 3.6m×桁行 2.4m 面積；8.64㎡

柱間寸法；梁間 1.8m 桁行 2.4m

柱穴数；6 柱穴形；楕円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区北部で検出した棟方向が南北の掘立柱建物跡である。周辺は遺構の密度が高く、
ST303 やSB315・316 など多くの遺構と切り合いや重複がみられる。

柱穴は 6 個検出しており、堀方は円形と弥生や不整形な円形のものが見られる。楕円形のP6 は、
切り合いがあるため完掘では長径が 1.05m、短径が 0.7mになっている。柱穴の深さは、P3・4 が約
30cmであるが、他はST303 の床面から検出されているため約 10cm程度と浅いが、柱穴底面の標高
は約 6.50mでほぼ同じであった。

埋土中からの遺物出土は少なく、時期を確定できうる資料はなかったため出土遺物による時期確
定は行えなかった。

遺構の切り合いでは、SB323 はV期半ばに埋没したと考えられているST303 に切られ、重複関係
にあり同時併存は不可能なSB315・316 はV期初頭の可能性が高いと考えられている。棟方向や規
模に共通性が考えられるSB317・321 は弥生中期末～後期前半の可能性が考えられていることから
SB323 は、中期末の可能性を考えたい。

SB324 (L3-26 図)

時期；弥生IV-2 棟方向；N-67°-E

規模；梁間 1 間×桁行 4(5)間 梁間 7.4m×桁行 3.0m 面積 22.2 ㎡

柱間寸法；梁間 3.0m 桁行 1.2～1.6m

柱穴数；13 柱穴形；楕円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区北西部の遺構が密集する部分から検出した棟方向が東西の掘立柱建物跡である。L2
区ST206 と切り合い、SK359 と重複しておりSD303、SK368 とは隣接している。

柱穴は 15 個検出しており 1 間×4 間の掘立柱建物跡を復元することができるが、北側の桁行が 5
間に棟持ち柱のある掘立柱建物跡が復元できる。

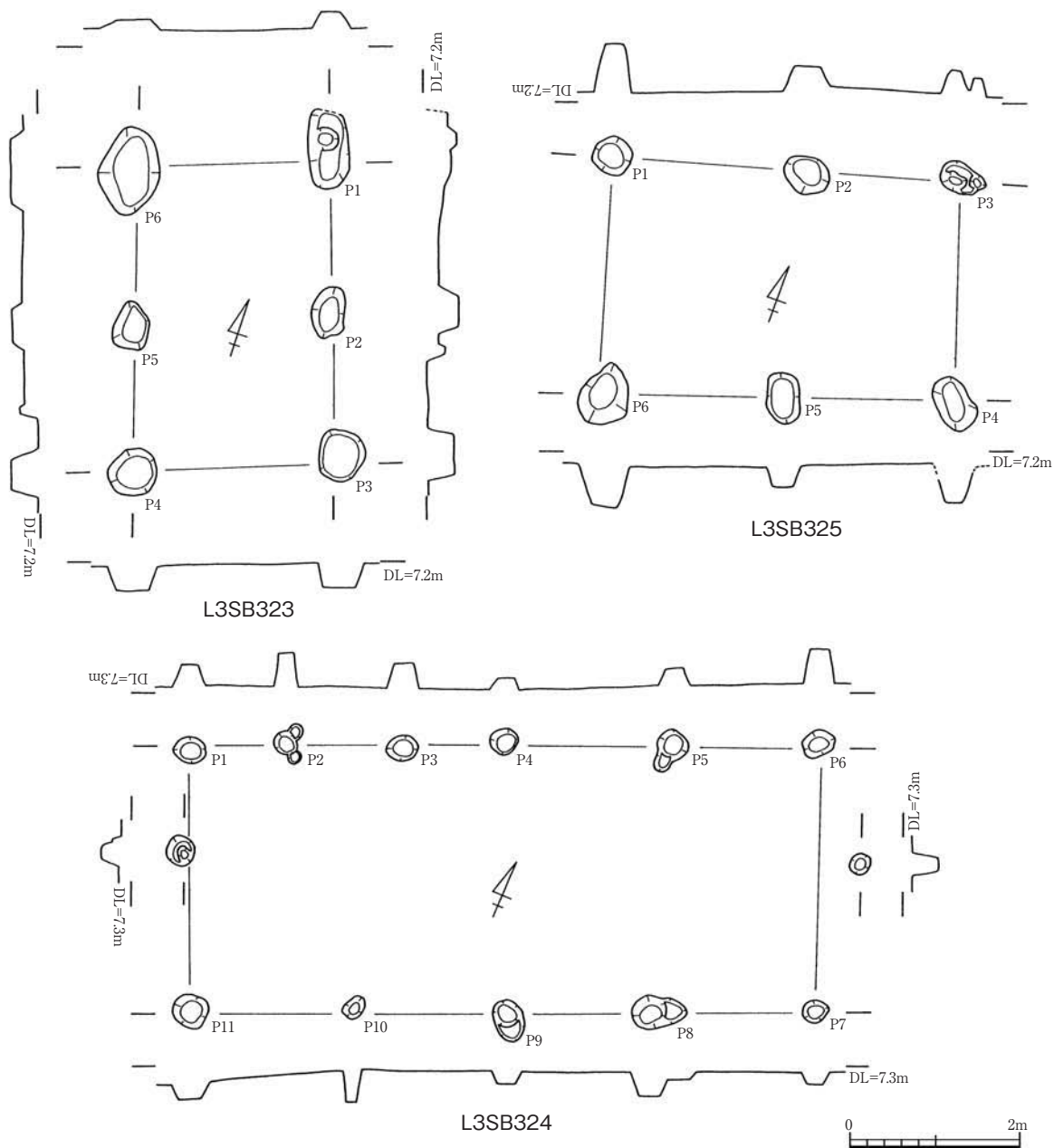
柱穴の規模は直径 20cm～40cmで深さは、15cm～45cmであった。P2・5・8・10 は柱穴が重な

り合った状態で検出しているが、建て替え時の同一の柱穴と考えられる。

柱穴からの遺物出土は、細片のみが出土しており、出土遺物から時期を確定することが出来なかった。

遺構の切り合い関係では、重複しているSK359は、時期はIV期末～V期であり、掘立柱建物跡に沿うように延びるSD302はIV期末の可能性が高い。ST206との切り合いは不明であるが、ST206は後期前半と考えられる。SB324の時期はIV期末を中心とする時期の可能性が高いと考えられる。

掘立柱建物跡の性格は、平面プランに比べて検出された柱穴の規模が小さく、円形であることなどから、高床式倉庫の可能性は低いと考えられ、SB316など同様の性格をもつものと考えられる。



L3-26 図 L3SB323 ~ 325

SB325(L3-26 図)

時期；弥生III～ 棟方向；N-70°-W

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.6m×桁行4.1m 面積；11.6㎡

柱間寸法；梁間2.6m 桁行2.1m

柱穴数；6 柱穴形；楕円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区中央部の遺構が集中する場所で検出した棟方向が東西の掘立柱建物跡である。ST311・314・316・317の床面と考えられる部分から検出しており、SB314の北側柱穴とSB325の南側柱穴は重なる様な状態で検出している。

規模は、梁間1間×桁行2間で2.6m×4.1mの規模を測る。検出した柱穴は円形～楕円形の平面形を持ち規模は50cm～70cmで深さは30cm～60cmである。

遺構埋土中から遺物はほとんど出土していない。このため遺構の時期は不明であるが、ST311の埋土下から柱穴を検出していることからIII期～IV1期のST311に先行すると考えられるが時期差はなくIII期～と考えられる。

SB314とはわずかに棟方向が異なるが同一地点で同様の規模を持つことから建て替えの関係が考えられるが先後関係は不明であるが遺構の性格は同様に高床倉庫の可能性が考えられる。

SB326(L3-27 図)

時期；弥生III～IV-1 棟方向；N-15°-W

規模；梁間1間×桁行1間 梁間2.5m×桁行5.2m 面積；13㎡

柱間寸法；梁間2.5m 桁行5.2m

柱穴数；4 柱穴形；方形

性格；— 付属施設；—

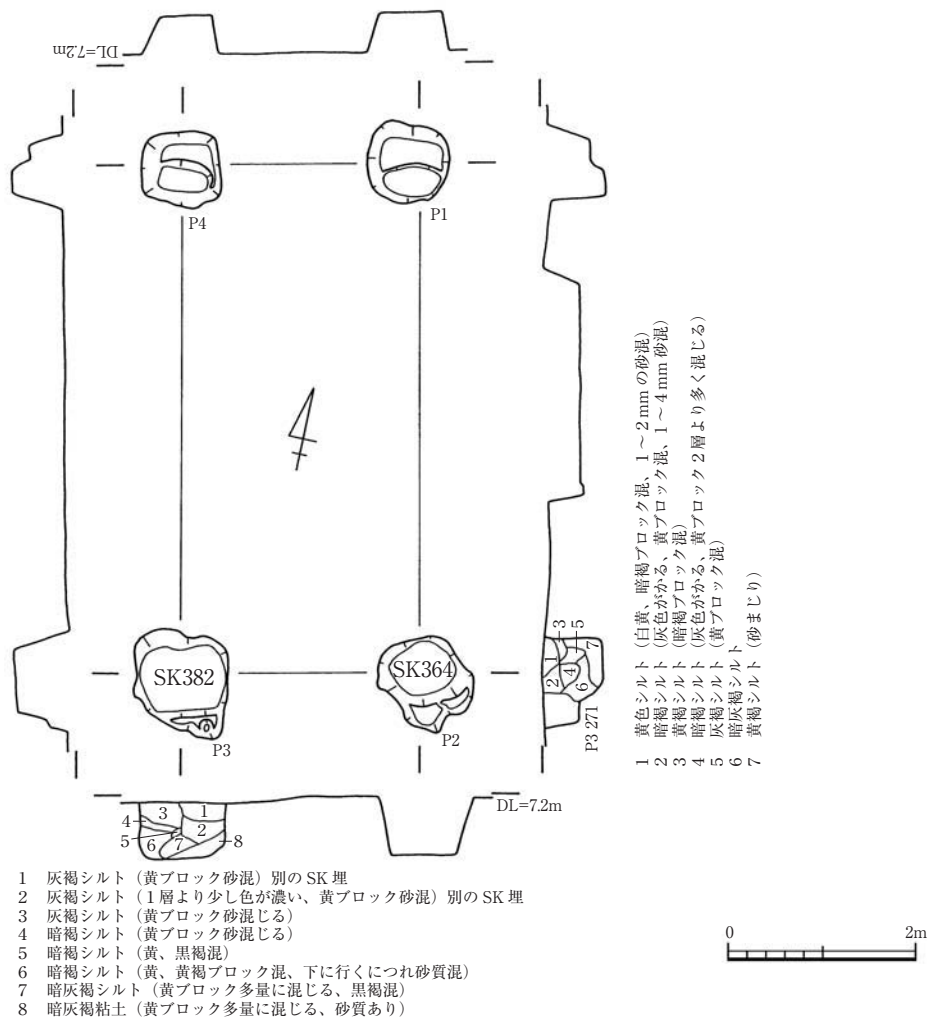
出土遺物；弥生土器

所見；調査区中央部の遺構が集中する場所で検出した棟方向が南北の掘立柱建物跡である。柱穴はST206・311、SK382に切られた状態で検出し多くの遺構と重複しているが、特に大型掘立柱建物跡であるSB319と重複しており注目される。

SB326の規模は梁間1間×桁行1間で2.5m×5.2mを測る。この規模は大型掘立柱建物跡であるSB318・319と比較しても遜色ない規模である。桁行が1間で5.2mと間隔が広いが、間にST207が所在し中間の柱穴が切られた可能性が高いと考えられる。

柱穴は方形の平面形を持ち1.0m×1.0mの規模で深さは65cm～75cmを測り、埋土は灰褐色土に黄褐色土が混じるものであった。

埋土中からの遺物出土は少なく細片ばかりで図示できる遺物は無かった。このため遺構の時期は確定でないが、柱穴を切っているST206はV期前半、ST207はIV2期の可能性が考えられている。また大型掘立柱建物跡SB318・319もIV2期以前の可能性が考えられているためSB326はIV2期以



L3-27 図 L3SB326

前の可能性が高いと考えられる。大型掘立柱建物跡と同じ性格を持つものと考えられるが先後関係は不明である。

SB327 (L3-28 図)

時期：弥生 棟方向：N-67°-E

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.4m×桁行2.6m 面積：6.24m²

柱間寸法：梁間2.4m 桁行1.3m

柱穴数：6 柱穴形：円形

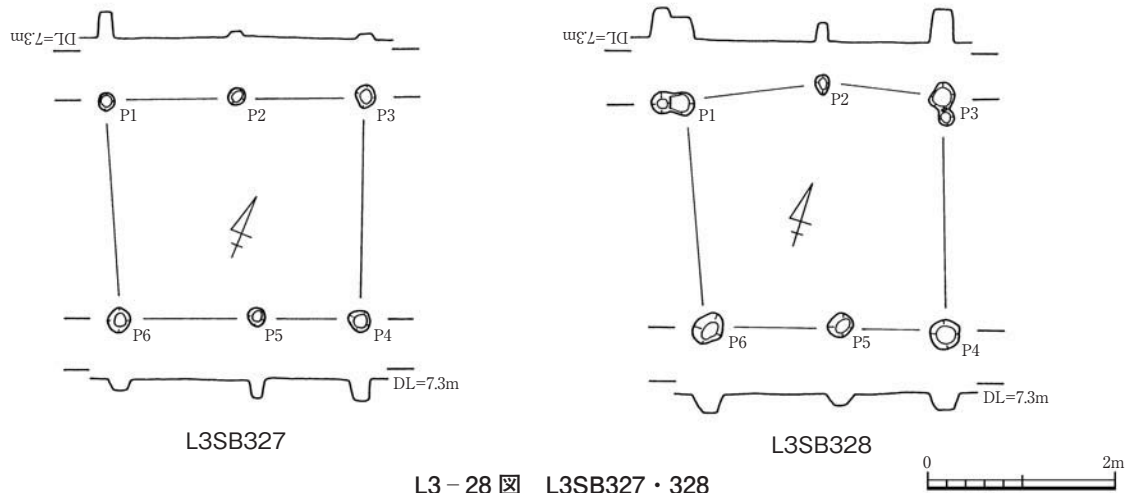
性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器

所見：調査区東側でSK304、SB301とは重複しSB328と並んだ状態で検出した。

遺構の規模は梁間1間×桁行2間で2.4m×2.6mと小規模なもので棟方向は東西方向である。柱穴は6個検出し、いずれも円形で直径15cm～25cm、深さ15cm～25cmの小さなものであった。

柱穴の埋土は暗褐色土で埋土中からは弥生土器細片がわずかに出土するのみで時期は不明であ



L3-28 図 L3SB327・328

る。隣接するSB328とは規模、方向など共通点が多く同様の性格を持つものと考えられるが、柱穴が重なっており同時併存は不可能なため建て替えの関係と考えられるが先後関係は不明である。

SB328(L3-28 図)

時期；弥生V-3 以前 棟方向；N-72°-E

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.5m×桁行2.6m 面積；6.5㎡

柱間寸法；梁間2.5m 桁行1.3m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区東側で、SB314に西南隅柱穴が切られた状態でSB327と並んで検出した。

遺構の規模は梁間1間×桁行2間で2.5m×2.6mと小規模なもので棟方向は東西方向である。柱穴は6個検出し、いずれも円形で直径15cm～25cm、深さ15cm～25cmの小さなものであった。

柱穴の埋土は暗褐色土で埋土中からは弥生土器細片がわずかに出土するのみで出土遺物からの時期は不明である。SB328の時期は、SB318を切るST314が後期前半と考えられており、それ以前と考えられる。隣接するSB327とは規模、方向など共通点が多く同様の性格を持つものと考えられるが、柱穴が重なっており同時併存は不可能なため、建て替えの関係と考えられるが先後関係は不明である。

SB329(L3-29 図)

時期；弥生 棟方向；N-8°-E

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.2m×桁行3.8m 面積；8.4㎡

柱間寸法；梁間2.2m 桁行1.9m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区南側で、SB304 と重複した状態で検出した。

遺構の規模は梁間1間×桁行2間で2.2m×3.8mで棟方向は南北方向である。柱穴は6個検出し、いずれも円形で直径25cm、深さ20cm～25cmであった。

柱穴の埋土は暗褐色土で埋土中からは弥生土器細片がわずかに出土するのみで時期は不明である。重複するSB304はV期の可能性が考えられているがSB329との先後関係は不明である。

SB330(L3-29 図)

時期；弥生III～IV-1 **棟方向**；N-8°-E

規模；梁間1間×桁行1間 梁間1.8m×桁行3.6m **面積**；6.48㎡

柱間寸法；梁間1.8m 桁行3.6m

柱穴数；4 **柱穴形**；方形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区東側で検出した。東側の柱穴SK332はST307の埋土下床面から検出しておりSB330はST307に切られた状態であった。

遺構の規模は梁間1間×桁行1間で1.8m×3.8mで棟方向は東西方向である。柱穴は4個検出し、いずれも長方形で、1.0m×0.85m、深さ約70cmで規模の大きなものであった。桁行の柱間が3.6mと広いが中間部分ではピットは確認できず、他の柱穴の残存状況から当初より1間×1間の規模であったと考えられる。

柱穴の埋土は暗褐色土で埋土中からは弥生土器細片がわずかに出土するのみで時期は不明である。SB330を切っているST307は弥生III期～IV1期の可能性が考えられておりSB330はそれ以前の時期と考えられる。他の大型掘立柱建物跡の時期もIII期～IV1期の可能性が高いことから同様の性格の一連の掘立柱建物跡群の可能性が考えられる。

SB331(L3-29 図)

時期；弥生V-2～3 **棟方向**；N-57°-E

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.2m×桁行2.7m **面積**；5.9㎡

柱間寸法；梁間2.2m 桁行1.35m

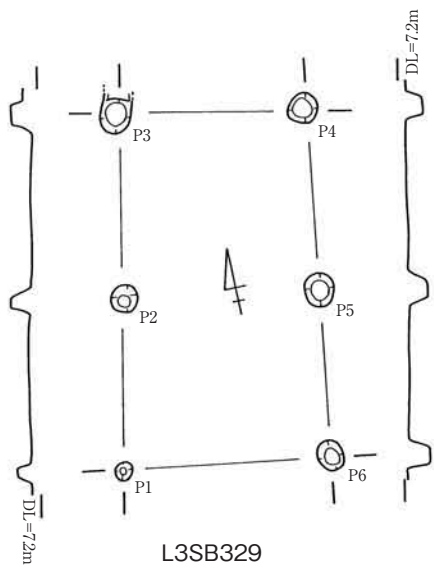
柱穴数；6 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

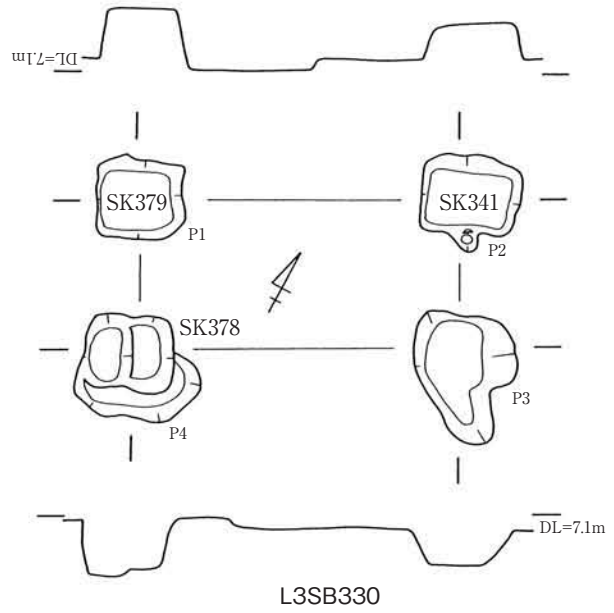
出土遺物；弥生土器

所見；調査区の遺構が集中する部分の南側端部でSB313と重複しSB307・309と隣接して検出した。遺構の規模は梁間1間×桁行2間で2.2m×2.7mを測る。棟方向は南北方向である。

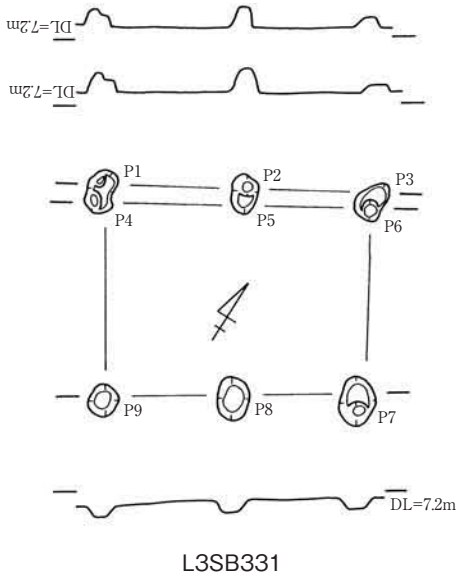
柱穴の規模は直径20cm～30cmで深さは15cm～20cmである。北側の柱穴は3個全て2個1組になっており、柱の建て直しが行われたと考えられる。



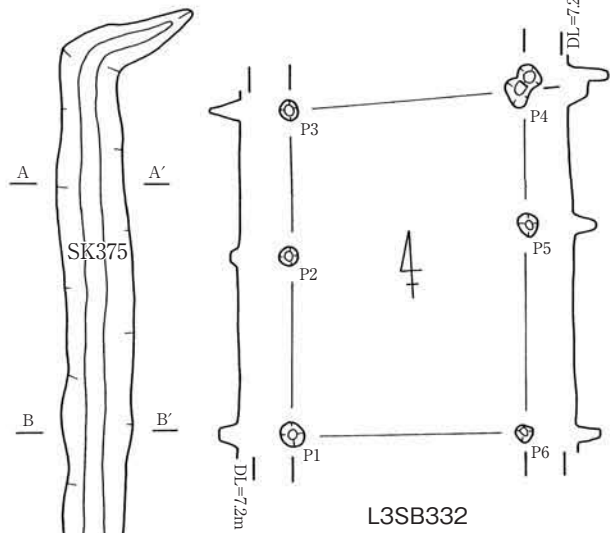
L3SB329



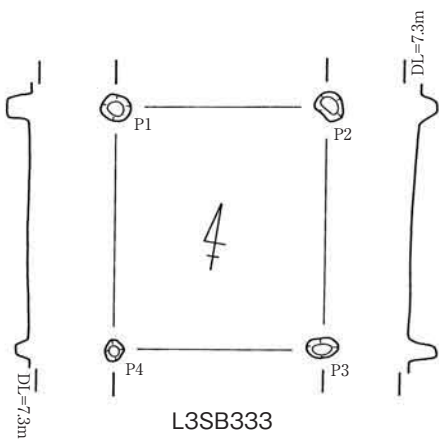
L3SB330



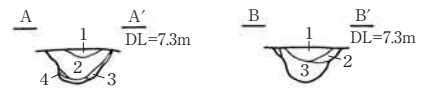
L3SB331



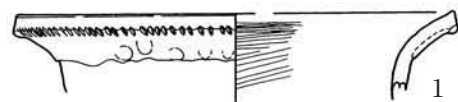
L3SB332



L3SB333



- | | |
|---|--|
| <p>1 暗灰褐シルト
(黄ブロック混)</p> <p>2 暗褐シルト</p> <p>3 暗褐シルト
(2層より灰色がかる、黄混)</p> <p>4 暗褐シルト
(2層より灰色がかる、黄混)</p> | <p>1 灰褐シルト
(灰黄ブロック少量混)</p> <p>2 暗灰褐シルト</p> <p>3 暗褐シルト
(土器含む、下層には
黄ブロック混)</p> |
|---|--|



L3-29 図 L3SB329 ~ 333

柱穴の埋土は暗褐色土で、埋土中からは弥生土器細片のみが出土しており時期は確定できない。重複するSB313は後期前半が考えられている。SB313とは棟方向が同一で規模も等しいことから同じ性格を持つものと考えられ、時期も近接すると考えられる。

SB332(L3-29 図)

時期；弥生IV-2～V-1 棟方向；N-0°

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.5m×桁行3.6m 面積；9.0㎡

柱間寸法；梁間2.5m 桁行1.8m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区の遺構が集中する部分の南西端部でST308と近接しSK377とは重複した状態で検出した。SK375は約2.5m離れ軸方向が同じで棟に沿った状態であり、SK375の全長がSB332に比べ2.3m長いがSB332の付属遺構の可能性が高いと考えられる。

遺構の規模は梁間1間×桁行2間で2.5m×3.6mの規模を測る。棟方向は北方向である。

柱穴の規模は直径約25cmで深さは10cm～35cmであった。埋土は暗褐色土で、埋土中からは細片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。

付属すると考えられるSK375は南北方向6.5mで北端部に東西方向1.3mの部分が付くL字状で幅は6.5m、深さ約30cmで埋土は暗褐色土を中心とするものであった。埋土中からは凹面状の素口縁の甕口縁部が出土するがいずれも細片である。また貼付口縁も3点出土しており1を図示する事ができた。SK375はIV期末～V期の可能性が考えられる。

SB332は付属するSK375からIV期末～V期の可能性が考えられる。

SB333(L3-29 図)

時期；弥生 棟方向；N-0°-E

規模；梁間1間×桁行1間 梁間2.2m×桁行2.6m 面積；5.7㎡

柱間寸法；梁間2.2m 桁行2.6m

柱穴数；4 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区北側でSK319と重複した状態で検出した。周辺は遺構が集中し多くの遺構に隣接している。

遺構の規模は梁間1間×桁行1間で2.2m×2.6mと小型である。柱穴は4個確認しており、直径20cm～30cm、深さは20cm～30cmが残存する。埋土は暗褐色土で、遺物の出土は弥生土器細片が少量出土するのみで時期の確定はできなかった。

SB333と重複しているSK319はIV期末の可能性が高いと考えられる。

(3) 土坑

L3 区で検出した土坑は 91 基を数えるが、検出当初土坑としSK番号を付けたもので掘立柱建物跡の柱穴として確認できたものが 27 基含まれる。

検出した土坑は、溝状、長方形、楕円形、不整形のものに平面形で分けられる。

溝状のものは掘立柱建物跡に付属しているものがあり、埋土中には土器を含むものが多く、出土する土器はIV期を中心としたものが多い。

長方形のものは大型のSK329・358・359等と中型のSK340・377等である。大型のSK392はST304の床面で検出したもので、2.3m×1.6mの規模を測り住居跡の可能性を考えたが床面検出遺構がないことなどから土坑の可能性が高いと考えられる。中型のSK377はしっかりした堀方を持ち完形復元できる高杯が出土しており上屋が伴う可能性が考えられ、同様の遺構は他の調査区でも確認できており、その性格が注目される。

楕円形、不整形なものはSK343・362等があるがその性格は不明である。

土坑埋土中からは弥生土器が出土しているが、細片が多く図示できるものが少なく時期を確定できたものも少なかったため、個別に取り上げた遺構は9基のみであった。

個別に取り上げなかったがST301に切られた状態で検出したSK317には埋土中に混じった状態で炭化した豆が出土している。SK358はST314に切られた状態で検出した長方形の土坑で深さ75cmが残存する土坑で、床面にはピット状部分を検出しているが、時期、性格ともに不明である。

L3 区で検出した土坑の時期はIII期～V期半ばまでの時期が考えられる。遺構の性格は、不明であるが弥生時代前期の土坑のように定形的なものになっており、貯蔵穴などの用途は掘立柱建物跡などに置き換わった可能性が考えられる。

L3-3 表 L3 区土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	付属遺構	埋土	切合関係	時期	備考
			長径(m)	短径(m)	深さ(cm)						
L3SK301	楕円形	U字状	1.38	0.30	16	N-9°-E	無	暗褐色土	無	—	—
L3SK302	楕円形	箱形	1.00	0.55	4	N-18°-W	無	暗褐色土に黄褐色混じる	無	—	ピットの切り合いの可能性
L3SK303	楕円形	—	0.81	0.67	20	N-38°-E	無	暗褐色土	無	—	ST303に隣接
L3SK304	楕円形	箱形	0.82	0.61	32	N-75°-W	無	暗褐色土	無	—	—
L3SK305	不整楕円形	凹状	0.94	0.60	17	N-15°-W	無	灰褐色土	無	—	ST304、SB315に隣接
L3SK306	楕円	箱形	1.03	0.96	16	N-29°-W	無	暗褐色土	無	V期～	SB301に隣接
L3SK307	不整形	箱形	[0.92]	[0.60]	28	N-75°-E	無	灰褐色土 黄褐色斑状	東P3072、西P3046に切	—	SB321南東角柱穴
L3SK308	長方形	箱形	1.67	1.20	87	N-16°-W	無	暗褐色土に黄褐色混じる	—	—	大型SB318西南角柱穴
L3SK309	方形	箱形	3.00	1.90	9	N-90°-E	無	暗褐色土	SB318を切る(SK316)	—	近世の可能性も

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	付属遺構	埋土	切合関係	時期	備考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)						
L3SK310	楕円形	箱形	[0.96]	[0.47]	28	N-11°-E	無	灰褐色土	ST303を切る	—	SB323の柱穴と切り合う?近現代の可能性も
L3SK311	不整形 円形	箱形	0.62	0.50	30	N-0°-W	無	暗褐色土	—	—	ST302に隣接
L3SK312	[円形]	皿状	1.12	[0.53]	35	—	無	暗褐色土	調査区に北側を切られる	IV2期~V3期	ST303に隣接
L3SK313	不整形 長方形	箱形	1.55	0.95	77	N-17°-W	無	暗褐色土に黄褐色混じる	P3012に切られる	III期~IV期	大型SB318 北東角柱穴
L3SK314	不整形 長方形	箱形	1.84	1.16	90	N-20°-W	無	暗褐色土に黄褐色混じる	—	IV期~V期	大型SB318 南東角柱穴
L3SK315	楕円形	レンズ状	[1.0]	1.00	20	N-19°-W	無	暗褐色土	ST301に切られる	V2期~3期	—
L3SK316	不整形	箱形	2.18	105.00	1	N-17°-W	溝状部分	暗褐色土に黄褐色混じる	SK309に切られる	—	複数の土坑と切り合う 大型SB318
L3SK317	楕円形	箱形	0.60	[0.4]	14	N-34°-W	無	暗褐色土	ST301に切られる	—	ST301V3~4期以前豆類出土
L3SK318	溝状	椀状	1.90	0.61	30	N-80°-E	無	暗褐色土	ST302に切られる	V1期~3期	—
L3SK319	溝状	逆凸状	3.30	0.65	18	N-14°-W	無	暗褐色土	SB315、SB333と重複	IV2期~V1期	北端部切り合いがある可能性
L3SK320	溝状	U字状	5.65	0.80	30	N-24°-E	SB303に付属	黒褐色土	—	IV期末~V2期	SB303に付属
L3SK321	溝状	U字状	3.79	0.85	20	N-77°-W	SB304に付属	黒褐色土	—	—	SB304に付属
L3SK322	楕円形	凹状	0.94	0.94	16	N-6°-W	無	暗褐色土	無	—	—
L3SK323	長方形	箱型	2.80	1.50	16	N-71°-E	無	暗褐色土に黄褐色混じる	SB308を切る	—	埋土下よりSB308の柱穴
L3SK324	溝状	U字状	2.47	0.33	20	N-11°-W	南端部ピット	暗褐色土	—	IV期末~V2期	SB309に付属する可能性
L3SK325	溝状	U字状	1.30	0.35	10	N-78°-E	—	暗褐色土	柵列状遺構と重複	—	SK326、SB313と隣接
L3SK326	溝状	U字状	3.10	0.60	5	N-9°-W	—	暗褐色土	—	—	SK325、柵列状遺構と隣接
L3SK327	長方形	皿状	1.23	0.82	9	N-70°-E	無	暗褐色土	—	—	完掘状況では図面上消滅
L3SK328	溝状	皿状	[1.9]	0.41	9	N-70°-E	無	暗褐色土	SK330、331を切る	—	—
L3SK329	楕円形	U字状	[1.0]	0.94	20	N-15°-W	—	暗褐色土	SK330を切る	—	—
L3SK330	方形	箱形	1.77	1.50	20	N-17°-W	—	灰褐色土 黄褐色斑状	SK328、329に切られ、SK331を切る	—	—
L3SK331	不整形 長方形	箱形	2.15	1.43	27	N-80°-W	—	灰褐色土 黄褐色斑状	SK328、330に切られる	—	—
L3SK332	楕円	箱形	[0.9]	1.05	30	N-62°-E	—	暗褐色土	ST306に切られる	—	ピットに切られる
L3SK333	方形	箱形	1.29	1.12	24	N-50°-E	—	暗褐色土	ST306に切られる	III期~	—

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	付属遺構	埋土	切合関係	時期	備考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)						
L3SK334	不整形	U字状	[0.9]	[0.4]	13	N-87°-E	—	暗褐色土	ST307を切る	—	ST307はIII期末～IV期
L3SK335	長方形	皿状	[0.9]	0.95	19	N-54°-E	—	暗褐色土	ST307に切られる	—	ST307はIII期末～IV期
L3SK336	溝状	U字状	4.56	0.36	40	N-63°-E	—	褐色土	ST312に切られる、ST313とは	IV期末～V期	ST312は後期初頭か ST313III期末からIV期
L3SK337	方形	箱形	1.80	0.84	26	N-19°-E	—	暗褐色土	ST312に切られる、下からピット	IV期末～V期	P3237、 P3247床面に有り
L3SK338	方形	箱形	2.00	1.08	94	N-11°-W	—	暗褐色土	ST311に切られる	III期の可能性	大型SB319 南西角柱穴
L3SK339	方形	—	0.38	0.60	34	N-83°-W	無	暗褐色土	ST304に切られSK393	—	SB322のP、 ST304はV期初頭か
L3SK340	長方形	箱型	1.55	0.77	20	N-63°-E	無	暗褐色土	ST313を切る可能性	—	ST313III～ IV期の可能性
L3SK341	長方形	箱形	1.03	0.85	60	N-68°-E	無	暗褐色土	ST307に切られる	—	ST307床面 からSB330 北東角柱穴
L3SK342	不整形	皿状	[1.27]	1.30	2	N-10°-W	無	黄灰色土	ST302に切られる	—	—
L3SK343	楕円形	皿状	1.33	1.00	30	N-22°-E	無	暗褐色土	—	—	—
L3SK344	不整形	箱形	1.86	1.20	102	N-11°-E	溝状部分 可能性有り	灰褐色土 黄褐色斑状	ST312に切られる	IV2期～V期	大型SB318 西南角柱 穴、ST312 後期前半
L3SK345	長楕円形	皿状	1.27	0.38	10	N-21°-E	無	暗褐色土	ST314の床面より検出	—	ST314V3～ 4期 消滅
L3SK346	円形	U字状	0.60	0.57	50	—	無	暗褐色土	ST312、313の床面より検出	—	—
L3SK347	楕円形	箱形	0.60	0.50	35	N-46°-W	無	暗褐色土	ST312、313の床面より検出	III期～	—
L3SK348	楕円形	U字状	0.85	0.55	28	N-63°-E	無	暗褐色土	ST312、313の床面より検出	—	ST313の中 央ピット
L3SK349	楕円形	U字状	1.03	0.60	19	N-78°-E	無	暗褐色土	ST311の壁溝に切り合う	—	ST316の中 央ピット
L3SK350	溝状	皿状	[2.95]	0.50	21	N-60°-E	無	暗褐色土	SK352に切られる	IV2期～V1期	—
L3SK351	楕円形	皿状	0.85	0.55	0.16	N-83°-W	無	暗褐色土	—	IV2期～V1期	—
L3SK352	長楕円形	箱形	[1.06]	0.48	30	N-35°-W	無	暗褐色土	SK350を切る	IV2期～V1期	SK350と時 期差ほとん ど無し
L3SK353	円形	碗状	1.50	—	30	—	無	灰色シルト	SD302を切る	—	—
L3SK354	欠番	—	—	—	—	—	無	—	—	—	L2編入
L3SK355	欠番	—	—	—	—	—	無	—	—	—	L2編入
L3SK356	方形	段状	0.85	0.70	16 59	N-5°-W	ピット	暗褐色土	SK357を切る	—	一部深く 柱穴の可能 性。SK339、 367と並ぶ
L3SK357	不整形	段状	1.16	0.70	24	N-33°-W	無	暗褐色土	SK356に切られる	—	—
L3SK358	長方形	段状	2.04	1.40	73	N-63°-E	ピット	—	ST314に切られる	—	ST314V3～ 4期

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	付属遺構	埋土	切合関係	時期	備考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)						
L3SK359	長方形	箱形	2.00	1.36	35	N-29°-W	溝状土坑	暗灰褐色土	SB324と重複	IV2期～V1期	SK393が沿う可能性
L3SK360	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
L3SK361	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
L3SK362	不整楕円形	箱形	2.35	1.15	35	N-47°-W	無	暗褐色土	—	IV2期～V1期	2基の土坑の切り合いの可能性
L3SK363	楕円形	箱形	0.88	0.82	7	N-65°-E	無	灰褐色	SB324のPが切る	—	SB326の柱穴
L3SK364	方形	2段	0.93	0.80	21 60	N-28°-E	無	暗褐色土に黄褐色混じる	SB324のPが切る	—	—
L3SK365	楕円形	箱形	0.87	[0.43]	32	N-80°-E	無	暗褐色土に黄褐色混じる	SB317のPが切る	—	SB322の柱穴と考える
L3SK366	円形	箱形	0.60	0.51	49	—	無	暗褐色土に黄褐色混じる	—	III期～	検出状況ではST312を切る
L3SK367	方形	箱形	0.94	0.81	45	N-19°-W	無	暗褐色土に黄褐色混じる	ST312に切られる	—	SK339、356と並ぶ
L3SK368	溝状	U字状	4.06	1.00	27	N-78°-E	無	暗褐色土	SD303を切る	—	SD303
L3SK369	楕円	箱形	[0.5]	0.52	30	N-46°-W	無	暗褐色土に黄褐色混じる	SK394を切る	—	2基の土坑の切り合いの可能性
L3SK370	長方形	皿状	[1.0]	0.60	9	N-30°-W	無	暗褐色土	SK385を切りP3212に切られる	—	—
L3SK371	方形	箱型	1.20	1.36	75	N-17°-W	無	暗褐色土に黄褐色混じる	ST304に切られる	III期?	大型SB318北西角柱穴
L3SK372	長方形	箱型	1.43	1.07	84	N-13°-E	無	暗褐色土に黄褐色混じる	ST312に切られる	III期	大型SB319南東角柱穴
L3SK373	長方形	箱型	[0.84]	0.65	30	N-25°-E	無	暗褐色土に黄褐色混じる	SK384の切られSX301を切る	—	—
L3SK374	長方形	箱型	1.57	1.17	89	N-9°-W	無	暗褐色土に黄褐色混じる	SB322の柱穴を切る	III期	SB319北東角柱穴
L3SK375	逆L形溝状	U字状	南北6.6 東西1.4	0.80	35	N-2°-E	無	暗褐色土	—	V期～	SB332に付属する可能性
L3SK376	方形	箱形	1.26	0.70	10	N-71°-E	無	暗褐色土	—	—	—
L3SK377	長方形	箱形	1.35	1.03	25	N-72°-E	無	暗褐色土	—	V1期	SB322に付属する可能性
L3SK378	方形	段状	1.30	1.00	52 61	N-67°-E	無	暗褐色土	—	V1期	SB330の南西角柱穴
L3SK379	方形	箱形	0.92	0.82	68	N-63°-E	無	暗褐色土	—	—	SB330の北西角P
L3SK380	長方形	箱形	1.80	0.77	30	N-72°-E	無	暗褐色土	SK381に切られる	IV2期～	ST307はIII期末～IV期
L3SK381	円形	箱形	0.75	—	0.42	—	無	暗褐色土	SK380を切る	—	SK380はIV期
L3SK382	方形	箱形	[1.00]	0.98	62	N-16°-W	無	—	ST311とSK383に切られる	—	SB326南西角柱穴

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	付属遺構	埋土	切合関係	時期	備考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)						
L3SK383	溝状	U字状	[2.08]	0.30	35	N-75°-E	—	暗褐色土	ST311に切られ、SK382、SK388を切る	V2期～3期	ST311が先行
L3SK384	楕円	箱形	1.45	[0.70]	74	N-16°-E	—	—	ST304、SK373に切られSK391を切る	—	SB318北西角柱穴 ST304V期初頭
L3SK385	長方形	箱形	2.3	1.00	74	N-9°-W	—	暗褐色土に黄褐色混じる	SK370に切られる	III～IV期	SB319柱穴
L3SK386	溝状	U字状	1.25	0.25	10	—	—	暗褐色土	ST312、ST316と切り合う	—	ST313の壁溝
L3SK387	溝状	—	[1.88]	0.40	17	N-15°-W	—	暗褐色土	ST312、SK370に切られる	—	ST312は後期前半
L3SK388	長方形	2段	2.00	1.20	58 87	N-11°-W	—	暗褐色土に黄褐色混じる	—	III～IV期	SB319柱穴
L3SK389	長方形	U字状	[0.47]	0.48	30	N-86°-E	無	暗褐色土	SK316を切る	—	SK309より先行しSK316より後出
L3SK390	円形	椀状	1.6	—	46	—	—	灰色シルト	—	近現代	—
L3SK391	方形	箱形	0.72	[0.46]	68	N-66°-E	無	黄灰褐色土	ST304に切られ、SK384を切る	—	SK384はIII期～
L3SK392	長方形	箱形	2.38	1.60	地表から 29	N-45°-E	Pが1個付く可能性	褐色土	ST304床面より検出、SB322重複	—	ST304はV期初頭
L3SK393	方形	箱形	[0.86]	0.73	58	N-89°-E	暗灰褐色土	—	SB322柱穴SK339を切る、ST304床面より検出	—	ST304はV期初頭
L3SK394	方形	—	0.87	0.71	54	N-17°-E	—	—	SK369に切られる	—	—
L3SK395	溝状	—	1.22	0.30	7	N-28°-W	—	—	—	—	—

L3SK312(L3-30 図)

時期：弥生IV2～V3 形状：円形 主軸方向：—

規模：1.12m×(0.53)m 深さ 0.35m 断面形態：レンズ状

埋土：暗褐色土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区北端部でST301を切りSK350に切られた状態で検出した土坑である。遺構の規模は1.12m×(0.53)mが残存しているが北側は調査区に切られており不明である。

遺構の埋土は暗褐色土で35cmが残存していた。埋土からは弥生土器が出土しており、口縁部は14点を数えるがいずれも細片で図示できたのは1のみである。図示できなかったが口縁部では貼

付口縁が10点(薄手2点)、凹線文1点、拡張され凹面状のもの3点が出土している。土器の時期はIV期末～V期前半の可能性が考えられる。

L3SK315(L3-30 図)

時期：弥生V-2～3 形状：楕円形 主軸方向：N-19°-W

規模：(1.0)m×1.0m 深さ：0.2m 断面形態：レンズ状

埋土：暗褐色土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、高杯)

所見：調査区北端部でST301に切られた状態で検出した土坑である。遺構は(1.0)m×1.0mが残存し平面形は楕円形と推定される。

遺構埋土は暗褐色土で約20cmが残存していた。埋土中からは弥生土器が出土しており細片が多く、時期が判断できる資料は口縁部6点と高杯脚部2点のみで図示できたものは1、2のみである。

遺物の時期は口縁部に凹線文が含まれないこと、1の高杯脚端部に凹線文が無く直径約1cmの大きな円形の透かしがあることなどからV2期～V3期の可能性が考えられる。SK315を切るST301は後期半ばまでの時期が考えられており、あまり時期差がないものと考えられる。

L3SK319(L3-30 図)

時期：弥生IV-2～V-1 形状：溝状 主軸方向：N-14°-W

規模：3.3m×0.65m 深さ：0.18m 断面形態：逆凸状

埋土：暗褐色土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、鉢)、石器(石鏃)

所見：調査区北端部でSB321・333と重複して検出している。不整形な溝状の土坑で3.3m×0.65m規模を測る。埋土は暗褐色土で約20cm残存している。埋土中からはL3区の遺構としては多く遺物が出土している。細片や胴部が多いが時期を判断し得る口縁部が19点出土している。口縁部では貼付口縁11点(薄手7点)、凹線文が4点、拡張し凹面状になるものが2点出土している。2は凹線文系の水平口縁の鉢と考えられる。石鏃は2点出土しておりサヌカイト製で3は突起式で重量2.1g、4は凹基式で重量1.2gである。遺物の時期は水平口縁などが出土することからIV期を中心とする時期と考えられる。

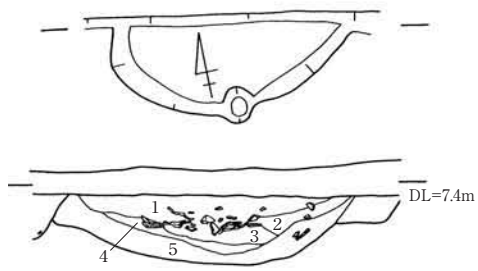
溝状の遺構は掘立柱建物跡に伴う例が多いがSK319は単独の土坑と考えられる。

L3SK351(L3-30 図)

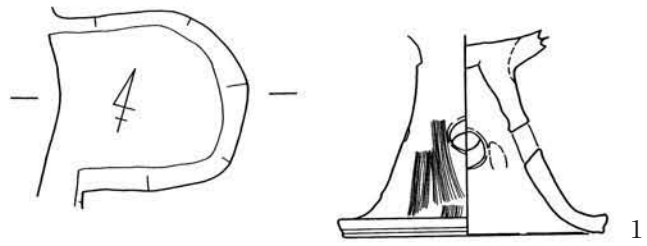
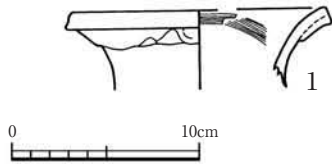
時期：弥生IV-2～V-1 形状：楕円形 主軸方向：N-83°-W

規模：0.86m×0.55m 深さ0.16m 断面形態：皿状

埋土：暗褐色土

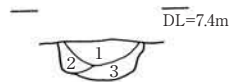
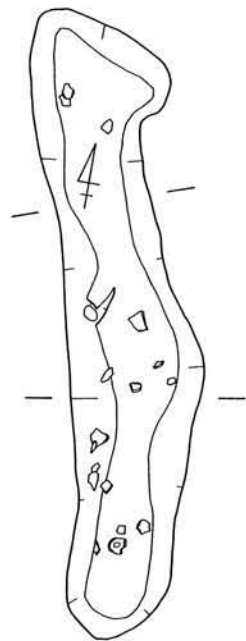


- SK312
L3SK312
- 1 (淡) 暗褐色シルト (土器を多量に含む)
 - 2 暗褐色シルト
 - 3 暗褐色シルト (焼土を多量に含む)
 - 4 暗褐色シルト (焼土の影響を受け、赤みがかかる)
 - 5 暗褐色シルト (赤少量含む)



- ST301 SK315 DL=7.3m
- L3SK315
- 1 (淡) 暗褐色シルト (黄色が多量に混)
 - 2 暗褐色シルト
 - 3 暗褐色シルト (1よりも少ない黄色混、少し灰色がかかる)

- SK315
- 1 暗褐色シルト
 - 2 暗褐色シルト (少し灰色がかかる)

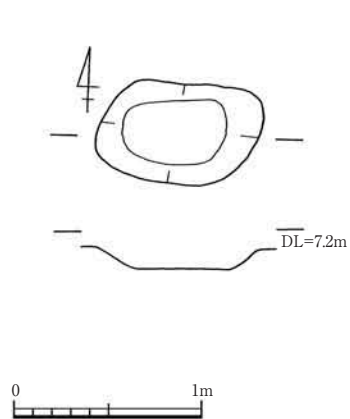
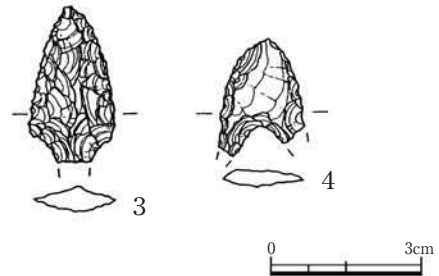
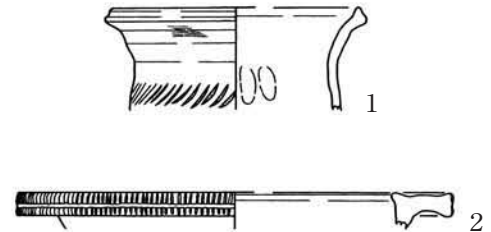


- 1 暗褐色シルト
- 2 暗褐色シルト (黄色混)
- 3 暗褐色シルト (黄、灰色混)

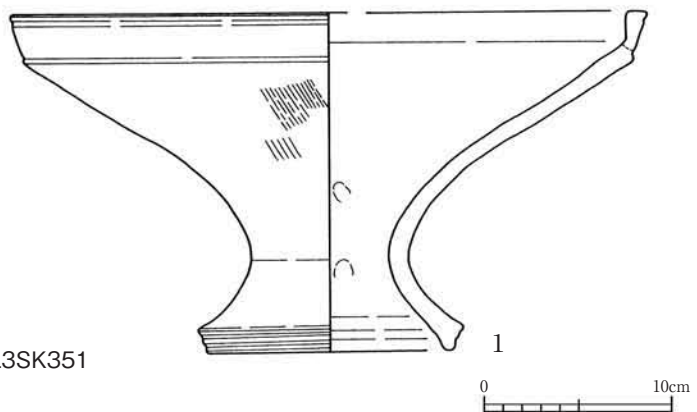


- 1 暗褐色シルト
- 2 暗褐色シルト (黄、灰色混)

L3SK319



L3SK351



L3-30 図 L3SK312・315・319・351

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(高杯)

所見；調査区西側で遺構密度が低い部分で検出した。長方形に近い楕円形の土坑で規模は0.86m×0.55mを測る。

埋土は暗褐色土で約15cmが残存していた。埋土中からは弥生土器が出土しているが1を除いて細片が少量出土するのみである。1は大型の高杯で約1/2が残存している。杯口縁部は直線的に立ちわずかに外傾する。脚端部は面をなし凹線が入るが拡張は大きくなく内面にケズリ痕は見られない。遺物の時期はIV期末～V期初頭と考えられる。

遺構の性格は不明であるが、田村遺跡群では長方形の土坑に壺、甕、高杯が完形に近い状態に入るものがあり同様の性格を持つものと考えられる。

L3SK359(L3-31 図)

時期；弥生IV-2～V-1 形状；長方形 主軸方向；N-29°-W

規模；1.8m×1.36m 深さ；0.35m 断面形態；箱形

埋土；暗灰褐色土

付属遺構；SK395 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、高杯)

所見；調査区北側遺構が集中する部分で検出しSB324と重複している。長方形の平面形を持ち規模は1.8m×1.36mを測る。

遺構埋土は暗灰褐色土で約35cmが残存し床面直上は焼土が粒子状に混じった状態であった。堀方は箱形のしっかりしたものである。埋土中からは比較的多く弥生土器が出土しており4点を図示できた。3は大きく開く口縁部を持ち内面には波状文が施されており器台の可能性が高いと考えられる。遺物の時期はIV期末～V期初頭と考えられる。

長方形の平面形を持ちしっかりした堀方を持つ遺構であるが床面からは遺構を検出できなかった。またSB324との関係も不明であり、遺構の性格は不明である。

L3SK362(L3-31 図)

時期；弥生IV-2～ 形状；不整楕円形 主軸方向；N-50°-W

規模；2.35m×1.15m 深さ0.35m 断面形態；箱形

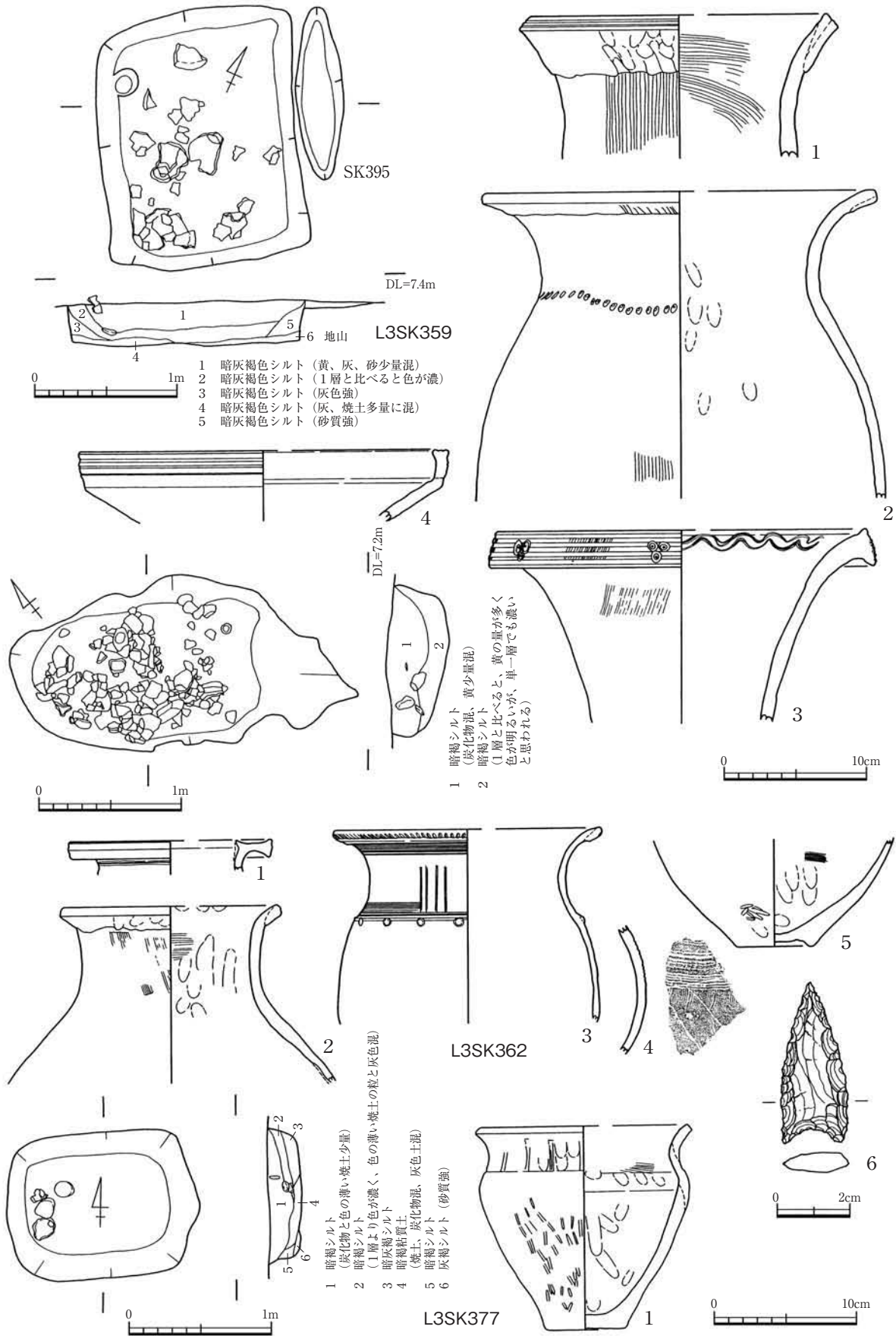
埋土；暗褐色土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)、石器(石鏃)

所見；調査区西側の遺構密度が低くなる部分で検出した不整形な土坑で2.35m×1.15m規模を測る。

遺構埋土は暗褐色土で箱形のしっかりした堀方を持つが、東側は不整形で浅くなっている。別遺構が存在する可能性が考えられるが、埋土が同一であるため肩が崩れたものと考えられる。埋土からは弥生土器が多く出土するが、その出土状況は床面出土のものは少なく埋土1層から出土するも



L3-31 図 L3SK359・362・377(SK359: 1~4・362: 1~6・377: 1)

のが多い状況であった。出土した土器では1は水平口縁の壺口縁の可能性が考えられる。3は薄手土器である。石器では全長4.2cm、重量4gの大型のサヌカイト製凹基式石鏃が出土している。

遺物の時期は、IV期末～V期の可能性が考えられる。

L3SK377(L3-31 図)

時期；弥生V-1 形状；長方形 主軸方向；N-72°-E

規模；1.35m×1.03m 深さ0.23m 断面形態；箱形

埋土；暗褐色土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(鉢)

所見；調査区南側でSB322と重複する。平面形1.35m×1.03mの長方形で深さは約20cmが残存し断面形は箱形のしっかりした堀方を持つ。

埋土は暗褐色土で、埋土中からは鉢が1個体ほぼ完形で出土している他はほとんど出土していない。1の鉢は短い頸部状の部分を持つもので、形態的には土佐型の範疇に入り薄手のものが多いが、この個体は厚手でV期初頭～前半の鉢と考えられる。

長方形の平面形で箱形の断面形を持つ土坑では、高杯、甕、鉢が完形で入るものがあり、外側に4個のピットが確認され上屋が伴う可能性が考えられる例が見られる。SK377はこの様な土坑と同様の性格をもつものと考えられ、周辺からはピットを検出している。またSB332とはほぼ同時期でありSB322に付属する可能性も考えられる。

L3SK380(L3-32 図)

時期；弥生IV-2～ 形状；長方形 主軸方向；N-72°-E

規模；1.8m×0.77m 深さ；0.3m 断面形態；箱形

埋土；暗褐色土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺)

所見；調査区南側でSK381に切られた状態で検出した。SB330の柱穴と考えられるSK379と隣接する。1.8m×0.77mの細長い長方形の土坑で深さは約30cmが残存しており箱形の断面形を持つ。

埋土は暗褐色土で埋土中からは弥生土器が出土するが、1層、2層から細片が少量出土するのみで図示できたのは、1だけである。1は貼付口縁の壺と考えられるが器壁は薄い。時期はIV期末の可能性が高いと考えられる。

L3SK383(L3-32 図)

時期；弥生V-2～3 形状；溝状 主軸方向；N-74°-E

規模；(2.8)m×0.3m 深さ；0.35m 断面形態；U字状

埋土；暗褐色土

付属遺構：— 機能：—

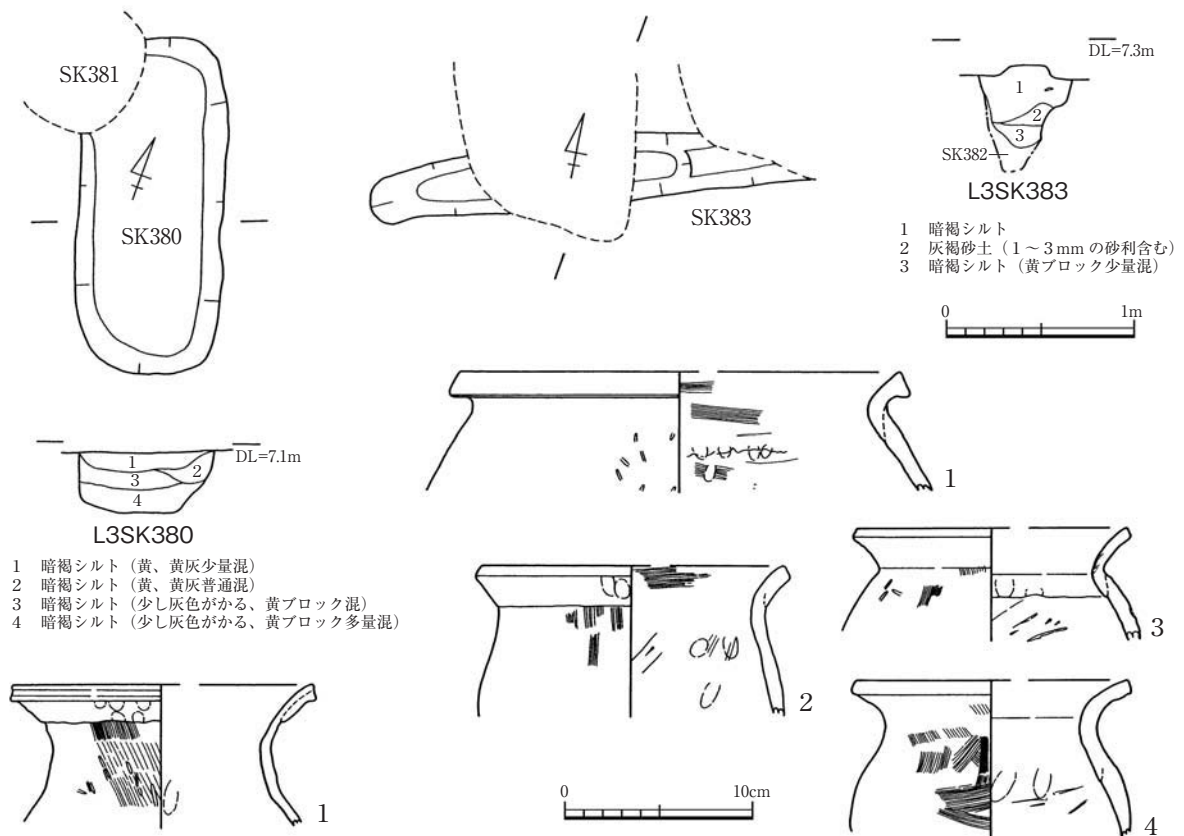
出土遺物：弥生土器(壺)

所見：調査区中央部の遺構の集中する部分で検出した溝状の土坑である。多くの遺構と切り合っており、ST311 に切られ、SB319 の柱穴であるSK388、SB326 の柱穴SK382 を切っている。

遺構の規模は幅約 0.3m で残存する長さが約 2.8m の細長い溝状の土坑で深さは約 35cm が残存していた。西側に同様の溝状の遺構が続くが、埋土や深さが異なることから別遺構と考えられる。

埋土は暗褐色土で埋土中からは弥生土器が出土しており、4 点図示する事ができた。図示できた甕はいずれも「く」の字状の口縁部を持ち口縁端部が面をなしておりV期前半の時期と考えられる。

溝状土坑は掘立柱建物跡に付属する例が多く、周辺から多くのピットを検出しているが掘立柱建物跡は復元できず単独の土坑と考えられる。



L3-32 図 L3SK380・383(SK380:1・SK383:1~4)

(4) 溝跡の概要

L3区でSDの名称を付けた遺構は3つあるが、いずれも調査区内で終わっており溝状遺構の可能性が高いと考えられる。調査区北側でお互いに切り合った状態で検出した。

調査区南側では4条の溝跡を検出しているが、同一の溝跡の可能性が高いと考えSR301として各個に枝番号を付け調査を行った。SR301はD区、E区、B区の各調査区でも検出しており、遺跡を画する環濠状の大規模な溝跡と考えられる。

L3-4表 L3区溝跡一覧

遺構名	長さ×幅×深さ	断面形	主軸方向	接続	時期	備考
L3SD301	[4.5]m×0.8m×0.25m	U字状	N-80°-E	—	V1～V3	—
L3SD302	[9.7]m×1.2m×0.7m	U字状	N-80°-E	—	I～V	SD303を切る
L3SD303	[3.5]m×0.4m×0.2m	U字状	N-77°-E	—	IV～	SD302に切られる
L3SR301A	66.6m×2.0m×0.7m	U字状	N-75°-E	F、Q2	V～	—
L3SR301B	66.6m×0.6m×0.7m	U字状	N-75°-E	F、Q2	V～	—
L3SR301C	66.6m×2.0m×0.7m	U字状	N-75°-E	F、Q2	V～	—
L3SR301D	66.6m×1.9m×0.7m	U字状	N-75°-E	F、Q2	V～	—

L3-SD301(L3-33 図)

時期：弥生V-1～V-3 主軸方向：N-80°-E

規模：(4.5)m×0.8m 深さ：0.25m 断面形態：U字状

埋土：暗褐色土

床面標高：7.0m

接続：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区北端部で検出した遺構で北側を調査区に切られている。周辺ではSD302・303、SK368と溝状の遺構を集中して検出しており軸方向もほぼ同じ方向である。

遺構の検出規模は(4.5)m×0.8mで深さは25cmが残存し断面形はU字状である。

埋土は暗褐色シルトでやや砂質の強いものであった。埋土中からは弥生土器が出土しているが細片が多く図示できるものはなかった。時期の判断できる口縁部は5個出土しており3個が凹線文系と考えられる口縁部を拡張したものであったが凹線文は出土していない。遺物の時期は後期と考えられV1期～V2期が考えられる。

遺構の性格は不明であるが、通常の溝でなく土坑の可能性が高いが、掘立柱建物跡に付属する溝跡に比べ規模が大きいことから単独の遺構と考えられる。

L3-SD302(L3-33 図)

時期：弥生I～V 主軸方向：N-80°-E

規模：約9.7m×1.2m 深さ：約2.1m 断面形態：U字状

埋土：褐色シルト

床面標高：6.5m

接続：—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区北端部で検出した遺構で北側を調査区に切られており、SD303、SK395 を切り、SK353 に切られており、更に西側肩部は2段になっていることから別の溝状遺構が並行している可能性がある。

遺構の検出規模は(9.7)m×1.2mで深さは70cmが残存し断面形はU字状でL3 区の溝状遺構で最も規模の大きなものである。

埋土は褐色シルトでやや粘性の強いものであった。埋土中からは弥生土器が多く出土している。図示できたものでは3・4は高杯である。3は口縁端部を拡張している。4は小型で直立する口縁を持つが端部は薄く丸く収めている。3・4ともに杯口縁部と体部の屈曲部には稜がある。5は大型器台脚部と考えられ、外面には羽状文、凹線文が施され透かしがある。大型器台の出土は高知県では類例が少なく、透かしが脚部に入る例はほとんどない。遺物の時期はIV2期と考えられる。

遺構の性格は不明であるが、通常の溝でなく土坑の可能性が高いが、掘立柱建物跡に付属する溝跡に比べ規模が大きいことから単独の遺構と考えられる。

L3-SD303(L3-33 図)

時期；弥生IV～ 主軸方向；N-77°-E

規模；(3.5)m×0.4m 深さ；0.2m 断面形態；U字状

埋土；褐色土

床面標高；7.0m

接続：—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区北端部で検出した遺構でSK368、SD302 に切られた状態で検出した。遺構の規模は(3.5)m×0.4mで深さは約20cmが残存する。溝状の遺構が集中する部分では最も規模の小さなものである。

埋土はやや灰色の入る褐色シルトであった。埋土中からの遺物は少ないが口縁部が8点出土しており、凹線文や口縁部を拡張し斜格子文が入るものがみられる。時期確定は困難であるがIV期以降の時期の可能性が高いと考えられる。他の遺構と比べて規模が小さく、隣接するSB324 に付属した可能性も考えられる。

L3-SR301(L3-1 図)

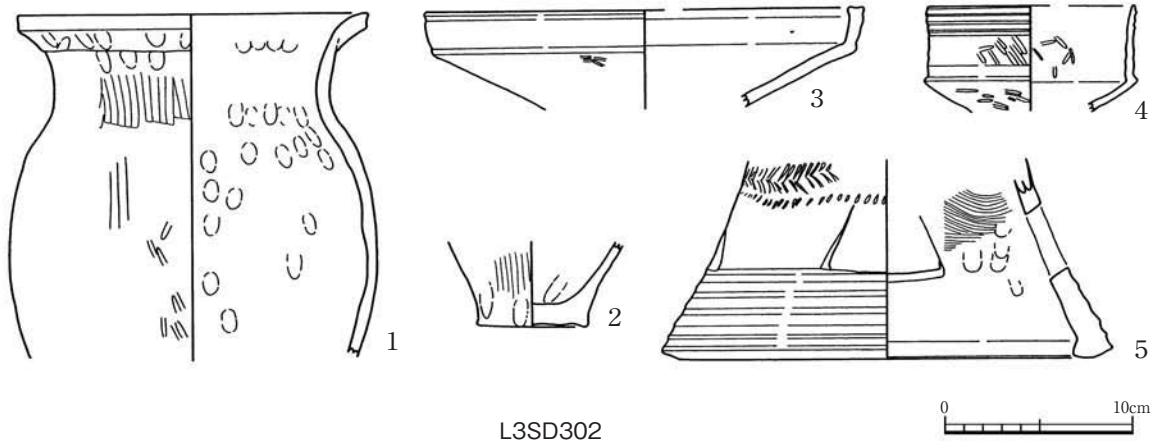
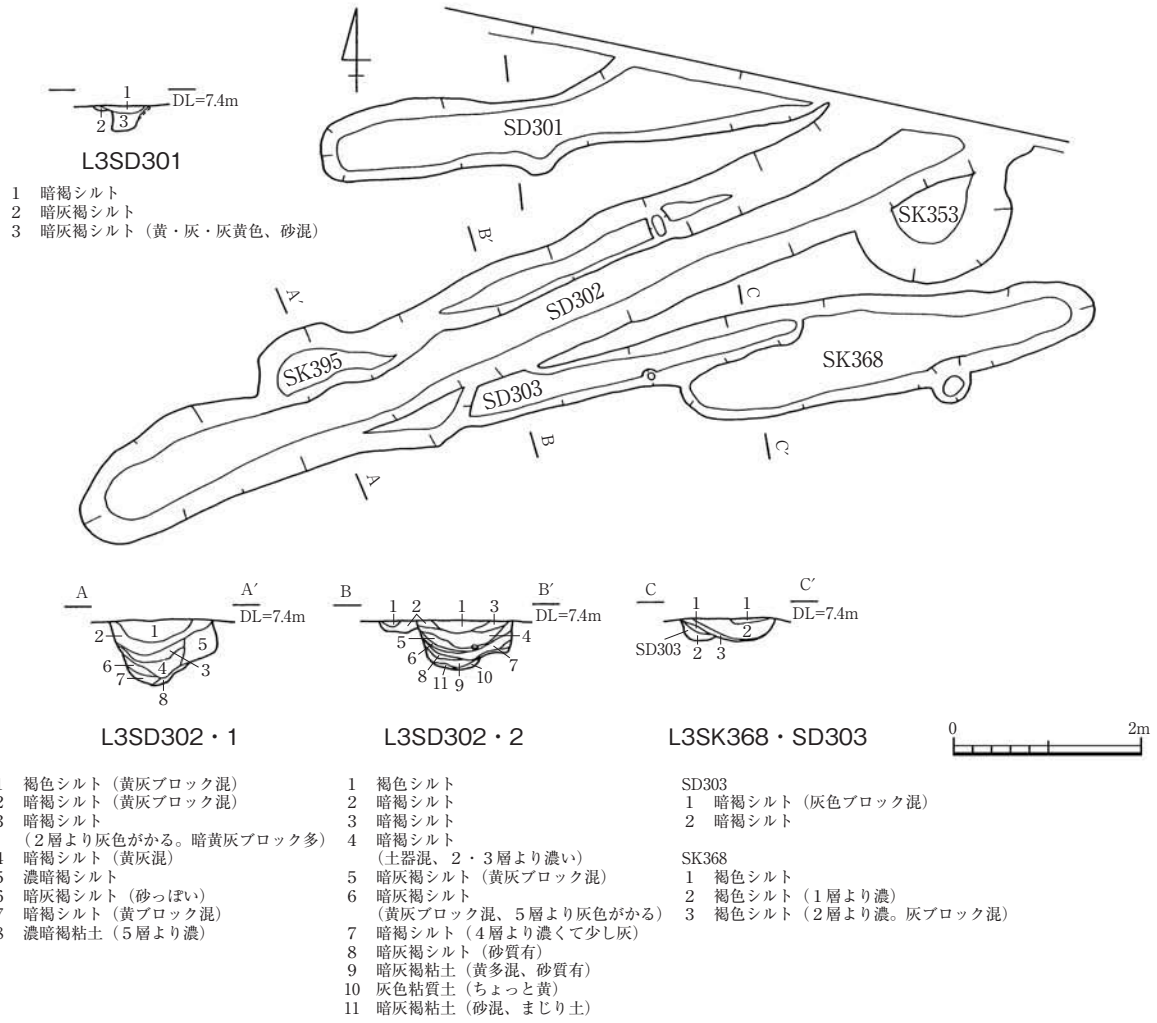
時期；弥生V～ 方向；N-75°-E

規模；A 66.6m×2.0m 深さ；0.7m 断面形態；U字状

B 66.6m×0.6m 深さ；0.7m 断面形態；U字状

C 66.6m×2.0m 深さ；0.7m 断面形態；U字状

D 66.6m×1.9m 深さ；0.7m 断面形態；U字状



L3-33 図 L3SD301 ~ 303

埋土；褐色土

床面標高；約 6.5m

接続；西側Q区、東側F区

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区南側で検出した溝跡で、調査区を東西に横切っている 4 条の溝跡が確認できた。流路は異なるが同一の溝跡の可能性が高くSR301 とし北側からA、B、C、Dとした。

SR301 と北側で検出した遺構群の間は約 15m 離れ、空間となっており遺構は見られない。また、SR301 より南側でも遺構は中世の可能性が考えられるSB320 を除いて確認できていない。溝跡の機能時期はIII期後半～V期前半までで、集落の時期と重なっており、溝跡群は集落を区切る溝の可能性が考えられる。

SR301 は、他の調査区でも延長が確認できており、出土遺物、時期等の詳細は大溝 2 として後述する。

報告書抄録

ふりがな	たむらいせきぐん							
書名	田村遺跡群Ⅱ							
副書名	高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第6分冊							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第85集							
編著者名	前田光雄							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原1437-1 TEL 088-864-0671							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たむらいせきぐん 田村遺跡群	こうちけん 高知県 なんこくし 南国市 たむら 田村 田中・ 未通シ	39204	040234	33° 33' 8"	133° 39' 48"	平成8年8月 ～ 平成13年12月 K・L区調査期間 平成8年11月 ～ 平成12年10月	154,167㎡ K区総面積 11,133㎡ L区総面積 13,567㎡	高知空港 再拡張整 備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
田村遺跡群 K・L区	集落跡	弥生時代 中期～ 後期	竪穴住居跡123棟 掘立柱建物跡101棟 土坑396基 溝58条 ピット約3000個 性格不明遺構4基	弥生土器 絵画土器 ミニチュア土器 石器 管玉 勾玉 鉄器 ガラス小玉		弥生時代中～後期に かけての集落・大溝 を検出した		
	集落跡	古代 中世 近世	掘立柱建物跡4棟 土坑15基 井戸1基 溝6条 ピット10個	土師質土器 須恵器 青磁 白磁 瓦器 瓦質土器 備前焼 五輪塔		古代～近世にかけ ての遺構の拡がり を確認した。		

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 85 集

田村遺跡群Ⅱ

第 6 分冊

編 集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

発 行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原 1437-1

電話 088-864-0671

発行日 2004 年 3 月 31 日

印 刷 有限会社 片岡印刷所